茨城県教育財団文化財調査報告第41集

主要地方道取手筑波線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書

境松遺跡

昭和62年3月

財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第41集

主要地方道取手筑波線道路改良工事地内埋蔵文化財発掘調査報告書

境松（さかいまつ）遺跡

昭和62年3月

財団法人 茨城県教育財団

国際科学技術博覧会が，昭和60年に茨城県谷田部町を会場にして開催され，会場周辺の道路網も大変整備されてきましたが，更に，サイエンス通りの延長として，主要地方道「取手筑波線」の道路改良工事が計画されました。その予定地内には，埋蔵文化財包蔵地の境松遺跡の存在することが周知されていました。

財団法人茨城県教育財団は，茨城県と埋蔵文化財発掘調査事業について委託契約を結び，昭和60年４月から昭和61年３月まで，境松遺跡の発掘調査を実施し，谷田部町の原始・古代の解明に貴重な成果を上げることができました。昭和61年度には，これらを整理し，調査結果の報告書を刊行するはこびとなりました。本書が，研究の資料としてはもとより，教育・文化の向上の一環として，広く活用されますことを希望いたします。

なお，調査・整理を進めるにあたり，委託者である茨城県からいただいた御協力に対し，深く感謝申し上げます。また，茨城県教育委員会・谷田部町教育委員会をはじめ，関係各機関及び関係各位から寄せられた御指導・御協力に対し，衷心より謝意を表します。

昭和62年３月

財団法人　茨城県教育財団

理事長　川　又　友　三　郎

例　　言

1　本書は，茨城県の委託により，財団法人茨城県教育財団が，昭和60年度に調査を実施した筑波郡谷田部町に所在する境松（さかいまつ）遺跡の発掘調査報告書である。

2　境松遺跡の調査・整理に関する当教育財団の組織は，次のとおりである。

理事長		竹内藤男	～昭和61年３月
		川又友三郎	昭和61年４月～
副理事長		川又友三郎	～昭和61年３月
		礒田勇	昭和61年４月～
常務理事		萩原藤之助	～昭和61年３月
		滑川貞雄	昭和61年４月～
事務局長		堀井昭生	昭和60年４月～
調査課長		青木義夫	
企画管理班	班長	北畠健	昭和60年４月～
	主任調査員	加藤雅美	～昭和61年３月
	〃	山本静男	昭和61年４月～
	係長	田所多佳男	昭和60年４月～
	主事	大曽根徹	～昭和61年３月
	〃	山崎初雄	昭和60年４月～
	〃	大部章	昭和61年４月～
調査第三班	班長	堀川計三	昭和60年度
	主任調査員	久野俊度	昭和60年度調査，昭和61年度整理・執筆
	〃	中村幸雄	昭和60年度調査
整理班長		加藤雅美	昭和61年度

3　本書は，発掘担当者の協力を得て，久野俊度が執筆・編集を担当した。

4　本書の作成にあたり，縄文土器の胎土分析を東京都埋蔵文化財センター調査第三係長上條朝宏氏に依頼し，原稿をいただいた。また，花粉分析・貝の年代測定をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。獣骨・貝の同定を早稲田大学教育学部講師金子浩昌氏，石器の石質鑑定を茨城県立上郷高等学校教頭蜂須紀夫氏に御指導をいただいた。

5　本書に使用した記号等については，第４章第１節の記載方法の項を参照されたい。

6　発掘調査及び出土遺物の整理に際して，御指導・御協力を賜った関係各機関及び各位に対し，感謝の意を表します。

目　　次

序

例　言

第１章　調査経緯…… 1
　第１節　調査に至る経過…… 1
　第２節　調査経過…… 1
第２章　位置と環境…… 3
　第１節　地理的環境…… 3
　第２節　歴史的環境…… 4
第３章　調査方法…… 7
　第１節　地区設定…… 7
　第２節　遺跡の基本層序…… 7
　第３節　遺構確認…… 8
　第４節　遺構調査…… 8
第４章　遺構と遺物…… 10
　第１節　遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法…… 10
　　１　遺跡の概要…… 10
　　２　遺構・遺物の記載方法…… 11
　第２節　縄文時代の遺構と遺物…… 17
　　１　竪穴住居跡…… 17
　　(1)　前期…… 17
　　(2)　中期…… 40
　　２　土坑…… 149
　　３　炉穴…… 217
　　４　埋甕…… 220
　　５　土製品…… 221
　　６　石器・石製品…… 231
　　７　遺構外出土土器…… 243
　　８　住居跡覆土内混入出土遺物…… 244

第3節　弥生時代の遺構と遺物…… 255
1　竪穴住居跡…… 255
2　土製品…… 268
第4節　古墳時代の遺構と遺物…… 269
1　竪穴住居跡…… 269
2　周溝…… 314
3　土製品…… 315
第5節　その他の遺構と遺物…… 318
1　墓壙…… 318
2　溝…… 319
第5章　自然遺物…… 322
第1節　貝類…… 322
第2節　獣骨…… 326
第6章　まとめ…… 330
第1節　遺構…… 330
1　竪穴住居跡について…… 330
2　土坑について…… 342
3　炉穴について…… 344
第2節　人工遺物…… 346
1　土器について…… 346
(1)　縄文時代早期～後期の土器について…… 346
(2)　弥生時代中期～後期の土器について…… 351
(3)　古墳時代前期の土器について…… 353
2　土製品について…… 355
3　石器・石製品について…… 356
終章　むすび…… 358
附章　自然科学的分析…… 359
1　縄文式土器の胎土分析…… 359
2　花粉分析報告…… 369
3　^{14}C年代測定報告…… 374

挿　図　目　次

第 1 図　谷田部町遺跡分布図…… 6
第 2 図　調査区名称図…… 7
第 3 図　テストピット土層図…… 7
第 4 図　推定土層断面図…… 8
第 5 図　調査遺跡全体図…… 14
第 6 図　遺構配置図…… 15・16
第 7 図　第 3 号住居跡実測図…… 17
第 8 図　第 3 号住居跡出土土器実測図・拓影図…… 19
第 9 図　第 7 号住居跡実測図…… 20
第 10 図　第 7 号住居跡出土土器実測図・拓影図…… 21
第 11 図　第 1・2・12・16号住居跡実測図 23・24
第 12 図　第12号住居跡出土土器実測図(1)…… 26
第 13 図　第12号住居跡出土土器拓影図(2)…… 27
第 14 図　第16号住居跡出土土器拓影図…… 28
第 15 図　第41号住居跡実測図…… 29
第 16 図　第41号住居跡出土土器実測図・拓影図(1)…… 31
第 17 図　第41号住居跡出土土器拓影図(2)…… 32
第 18 図　第49号住居跡実測図…… 33
第 19 図　第49号住居跡出土土器拓影図…… 34
第 20 図　第54号住居跡実測図…… 35
第 21 図　第54号住居跡出土土器実測図・拓影図…… 36
第 22 図　第76号住居跡実測図…… 38
第 23 図　第76号住居跡出土土器実測図・拓影図(1)…… 39
第 24 図　第76号住居跡出土土器拓影図(2)…… 40
第 25 図　第26号住居跡実測図…… 41
第 26 図　第26号住居跡出土土器拓影図…… 41
第 27 図　第44号住居跡実測図…… 42
第 28 図　第44号住居跡出土土器実測図・拓影図…… 43
第 29 図　第50号住居跡実測図…… 44
第 30 図　第50号住居跡出土土器拓影図…… 45
第 31 図　第51号住居跡実測図…… 46
第 32 図　第51号住居跡出土土器実測図(1)…… 49
第 33 図　第51号住居跡出土土器実測図・拓影図(2)…… 50
第 34 図　第51号住居跡出土土器拓影図(3)…… 51
第 35 図　第52号住居跡実測図…… 52
第 36 図　第52号住居跡出土土器実測図・拓影図(1)…… 55
第 37 図　第52号住居跡出土土器拓影図(2)…… 56
第 38 図　第53号住居跡実測図…… 57
第 39 図　第53号住居跡出土土器実測図・拓影図(1)…… 59
第 40 図　第53号住居跡出土土器拓影図(2)…… 60
第 41 図　第59号住居跡実測図…… 61
第 42 図　第59号住居跡出土土器実測図・拓影図…… 63
第 43 図　第60号住居跡実測図…… 64
第 44 図　第60号住居跡出土土器実測図・拓影図…… 64
第 45 図　第61号住居跡実測図…… 65
第 46 図　第61号住居跡出土土器実測図・拓影図…… 66
第 47 図　第63号住居跡実測図…… 66
第 48 図　第63号住居跡出土土器拓影図…… 67
第 49 図　第64号住居跡実測図…… 68
第 50 図　第64号住居跡出土土器実測図・拓影図…… 69
第 51 図　第66号住居跡実測図…… 70
第 52 図　第66号住居跡出土土器実測図・拓影図(1)…… 71
第 53 図　第66号住居跡出土土器拓影図(2)…… 72
第 54 図　第 1 号住居跡出土土器実測図・拓影図(1)…… 74
第 55 図　第 1 号住居跡出土土器拓影図(2)…… 75
第 56 図　第 2 号住居跡出土土器拓影図…… 77
第 57 図　第13号住居跡実測図…… 78
第 58 図　第13号住居跡出土土器実測図・拓影図…… 79
第 59 図　第14号住居跡実測図…… 80
第 60 図　第14号住居跡出土土器実測図(1)…… 82
第 61 図　第14号住居跡出土土器拓影図(2)…… 83
第 62 図　第15号住居跡実測図…… 84
第 63 図　第15号住居跡出土土器拓影図…… 85
第 64 図　第28号住居跡実測図…… 86

第 65 図　第28号住居跡出土土器実測図・
拓影図…… 87
第 66 図　第30号住居跡実測図…… 88
第 67 図　第30号住居跡出土土器拓影図…… 89
第 68 図　第35・48号住居跡実測図…… 89
第 69 図　第35号住居跡出土土器実測図・
拓影図(1)…… 91
第 70 図　第35号住居跡出土土器拓影図(2)…… 92
第 71 図　第38号住居跡実測図…… 93
第 72 図　第38号住居跡出土土器実測図・
拓影図…… 94
第 73 図　第42号住居跡実測図…… 95
第 74 図　第42号住居跡出土土器拓影図…… 96
第 75 図　第43号住居跡実測図…… 97
第 76 図　第43号住居跡出土土器実測図・
拓影図(1)…… 99
第 77 図　第43号住居跡出土土器拓影図(2)……100
第 78 図　第45号住居跡実測図……101
第 79 図　第45号住居跡出土土器実測図・
拓影図(1)……103
第 80 図　第45号住居跡出土土器拓影図(2)……104
第 81 図　第45号住居跡出土土器拓影図(3)……105
第 82 図　第46号住居跡実測図……106
第 83 図　第46号住居跡出土土器実測図・
拓影図……107
第 84 図　第47号住居跡実測図……109
第 85 図　第47号住居跡出土土器実測図・
拓影図……110
第 86 図　第48号住居跡出土土器拓影図……112
第 87 図　第55号住居跡実測図……113
第 88 図　第55号住居跡出土土器実測図・
拓影図……114
第 89 図　第56号住居跡実測図……115
第 90 図　第56号住居跡出土土器拓影図……116
第 91 図　第57号住居跡実測図……117
第 92 図　第57号住居跡出土土器実測図・
拓影図……118
第 93 図　第58号住居跡実測図……119
第 94 図　第58号住居跡出土土器拓影図……120
第 95 図　第62号住居跡実測図……121
第 96 図　第62号住居跡出土土器実測図・
拓影図(1)……122
第 97 図　第62号住居跡出土土器拓影図(2)……123
第 98 図　第65号住居跡実測図……124
第 99 図　第65号住居跡出土土器拓影図……124
第100図　第67号住居跡実測図……125
第101図　第67号住居跡出土土器拓影図……126
第102図　第68号住居跡実測図……127
第103図　第68号住居跡出土土器実測図(1)……129
第104図　第68号住居跡出土土器拓影図(2)……130
第105図　第69号住居跡実測図……132
第106図　第69号住居跡出土土器実測図(1)……134
第107図　第69号住居跡出土土器実測図(2)……135
第108図　第69号住居跡出土土器実測図・
拓影図(3)……136
第109図　第69号住居跡出土土器拓影図(4)……137
第110図　第70号住居跡実測図……138
第111図　第70号住居跡出土土器拓影図……139
第112図　第71号住居跡実測図……140
第113図　第71号住居跡出土土器実測図・
拓影図……141
第114図　第72号住居跡実測図……142
第115図　第72号住居跡出土土器拓影図……142
第116図　第73号住居跡実測図……143
第117図　第73号住居跡出土土器拓影図……144
第118図　第74号住居跡実測図……144
第119図　第74号住居跡出土土器拓影図……145
第120図　第75号住居跡実測図……146
第121図　第75号住居跡出土土器拓影図……147
第122図　第１号土坑出土土器実測図……149
第123図　第11号土坑出土土器拓影図……150
第124図　第14号土坑出土土器実測図・
拓影図……152
第125図　第17号土坑出土土器実測図・
拓影図……153
第126図　第19号土坑出土土器拓影図……154
第127図　第30号土坑出土土器拓影図……154
第128図　第32号土坑出土土器実測図(1)……156
第129図　第32号土坑出土土器実測図・
拓影図(2)……157
第130図　第64号土坑出土土器拓影図……159
第131図　第71号土坑出土土器拓影図……160
第132図　第111号土坑出土土器拓影図 ……160

第133図　第138号土坑出土土器実測図・拓影図……161
第134図　第200号土坑出土土器拓影図 ……163
第135図　第218号土坑出土土器実測図 ……164
第136図　第241号土坑出土土器実測図・拓影図……165
第137図　第246号土坑出土土器実測図・拓影図……166
第138図　第284号土坑出土土器実測図・拓影図……167
第139図　第285号土坑出土土器実測図・拓影図……169
第140図　第291号土坑出土土器拓影図 ……169
第141図　土坑実測図(1)……180
第142図　土坑実測図(2)……181
第143図　土坑実測図(3)……182
第144図　土坑実測図(4)……183
第145図　土坑実測図(5)……184
第146図　土坑実測図(6)……185
第147図　土坑実測図(7)……186
第148図　土坑実測図(8)……187
第149図　土坑実測図(9)……188
第150図　土坑実測図(10)……189
第151図　土坑実測図(11)……190
第152図　土坑実測図(12)……191
第153図　土坑実測図(13)……192
第154図　土坑実測図(14)……193
第155図　土坑実測図(15)……194
第156図　土坑実測図(16)……195
第157図　土坑実測図(17)……196
第158図　土坑実測図(18)……197
第159図　土坑実測図(19)……198
第160図　土坑実測図(20)……199
第161図　土坑実測図(21)……200
第162図　土坑実測図(22)……201
第163図　土坑実測図(23)……202
第164図　土坑実測図(24)……203
第165図　土坑実測図(25)……204
第166図　土坑実測図(26)……205
第167図　土坑実測図(27)……206
第168図　土坑実測図(28)……207
第169図　土坑実測図(29)……208
第170図　土坑実測図(30)……209
第171図　土坑実測図(31)……210
第172図　土坑実測図(32)……211
第173図　その他の土坑出土土器実測図(1)……214
第174図　その他の土坑出土土器実測図(2)……215
第175図　その他の土坑出土土器実測図(3)……216
第176図　第237・235号土坑出土土器実測図・拓影図……218
第177図　第220号土坑出土土器拓影図 ……219
第178図　第1号埋甕遺構出土土器実測図……220
第179図　土器片錘重量分布図……222
第180図　土製品実測図(1)……226
第181図　土製品実測図(2)……227
第182図　土製品実測図(3)……228
第183図　土製品実測図(4)……229
第184図　土製品実測図(5)……230
第185図　石器実測図(1)……235
第186図　石器実測図(2)……236
第187図　石器実測図(3)……237
第188図　石器・石製品実測図(4)……238
第189図　石器実測図(5)……239
第190図　石器実測図(6)……240
第191図　石器実測図(7)……241
第192図　石器実測図(8)……242
第193図　グリッド出土土器実測図……243
第194図　Ⅰ群土器拓影図……244
第195図　Ⅱ群土器拓影図……245
第196図　Ⅲ群a類土器拓影図(1)……246
第197図　Ⅲ群a類土器拓影図(2)……247
第198図　Ⅲ群b類土器拓影図……247
第199図　Ⅳ群a類土器拓影図……248
第200図　Ⅳ群b類土器拓影図……248
第201図　Ⅳ群c類土器拓影図……249
第202図　Ⅴ群a類土器拓影図(1)……250
第203図　Ⅴ群a類土器拓影図(2)……251
第204図　Ⅴ群b類土器拓影図……251
第205図　Ⅴ群e類土器拓影図……252
第206図　Ⅵ群b_1・b_2類土器拓影図……253
第207図　Ⅵ群d類土器拓影図……254
第208図　Ⅷ群a類土器拓影図……254
第209図　Ⅷ群b_2類土器拓影図……254
第210図　第17号住居跡実測図……255

第211図　第17号住居跡出土土器拓影図……256
第212図　第22号住居跡実測図……257
第213図　第22号住居跡出土土器実測図・
拓影図……258
第214図　第23号住居跡実測図……260
第215図　第23号住居跡出土土器実測図……261
第216図　第25号住居跡実測図……263
第217図　第25号住居跡出土土器実測図・
拓影図……263
第218図　第36号住居跡実測図……264
第219図　第36号住居跡出土土器実測図……265
第220図　第40号住居跡実測図……266
第221図　第40号住居跡出土土器実測図……267
第222図　土製品実測図(6)……268
第223図　第４号住居跡実測図……270
第224図　第４号住居跡出土土器実測図……271
第225図　第５号住居跡実測図(1)……272
第226図　第５号住居跡実測図(2)……273
第227図　第５号住居跡出土土器実測図・
拓影図……274
第228図　第６号住居跡実測図……276
第229図　第８号住居跡実測図……277
第230図　第８号住居跡出土土器実測図……279
第231図　第９号住居跡実測図……280
第232図　第10号住居跡実測図……281
第233図　第10号住居跡出土土器実測図……282
第234図　第11号住居跡実測図……283
第235図　第18号住居跡実測図……285
第236図　第19号住居跡実測図……286
第237図　第20号住居跡実測図……287
第238図　第20号住居跡出土土器実測図・
拓影図……288
第239図　第21号住居跡実測図……289
第240図　第21号住居跡出土土器実測図……290
第241図　第24号住居跡実測図……291
第242図　第27号住居跡実測図……292
第243図　第27号住居跡出土土器実測図……293
第244図　第29号住居跡実測図……294
第245図　第29号住居跡出土土器実測図(1)……296
第246図　第29号住居跡出土土器実測図(2)……297
第247図　第29号住居跡出土土器実測図・
拓影図(3)……298
第248図　第31号住居跡実測図……300
第249図　第31号住居跡出土土器実測図……301
第250図　第32号住居跡実測図……302
第251図　第32号住居跡出土土器実測図……303
第252図　第33号住居跡実測図……304
第253図　第34号住居跡実測図……305
第254図　第34号住居跡出土土器実測図(1)……307
第255図　第34号住居跡出土土器実測図・
拓影図(2)……308
第256図　第37号住居跡実測図……309
第257図　第37号住居跡出土土器実測図……310
第258図　第39号住居跡実測図……311
第259図　第39号住居跡出土土器実測図……312
第260図　第77号住居跡実測図……313
第261図　第77号住居跡出土土器実測図……314
第262図　周溝実測図……315
第263図　周溝出土土器実測図……315
第264図　土製品実測図(7)……316
第265図　鉄製品実測図・古銭拓影図……318
第266図　陶磁器実測図……319
第267図　第１号溝実測図……319
第268図　第２号溝実測図……320
第269図　第３号溝実測図……321
第270図　第４号溝実測図……321
第271図　第11号土坑出土貝実測図……325
第272図　縄文時代前期・中期住居跡配置図
…… 333～334
第273図　弥生・古墳時代住居跡配置図
…… 339～340
第274図　住居跡長軸方向・規模……341
第275図　県内出土の土器片錘平均重量図……355
第276図　石器の種類別割合……357
第277図　分析土器拓影図……360
第278図　土器胎土中に含まれる一次鉱物
組成……364
第279図　HyP:シソ輝石，Au:普通輝石，
Ho:角閃石の三角ダイヤグラム ……365

表　目　次

第 1 表　谷田部町遺跡一覧表…… 5
第 2 表　住居跡一覧表…… 147・148
第 3 表　土坑一覧表…… 170～179
第 4 表　土製品一覧表…… 222～225
第 5 表　石器・石製品一覧表…… 232～234
第 6 表　土製品一覧表……268
第 7 表　住居跡一覧表……268
第 8 表　土製品一覧表……316
第 9 表　住居跡一覧表……317
第 10 表　第13号住居跡覆土内貝層貝組成表…327
第 11 表　第15号住居跡覆土内貝層貝組成表…327
第 12 表　第55号住居跡覆土内貝層貝組成表…328
第 13 表　第11号土坑覆土内貝層組成表……329
第 14 表　第30号土坑覆土内貝層組成表……329
第 15 表　近辺遺跡における黒浜期居跡の形状・規模等一覧表……331
第 16 表　阿玉台期住居跡規模等一覧表……332
第 17 表　加曽利Ｅ期住居跡時期別，形状・規模等一覧表……336
第 18 表　フラスコ状土坑分類別検出数一覧表 344
第 19 表　供試土器の表面観察表……360
第 20 表　胎土中の細礫・粗砂の分類……362
第 21 表　境松遺跡試料花粉分析結果……371
第 22 表　境松遺跡試料花粉分析結果……373

写真図版目次

ＰＬ１　遺構全景（航空写真）
ＰＬ２　調査前全景，試掘，作業風景，完掘全景，第３，７，41，54号住居跡
ＰＬ３　第76，44，51，52，53，29，59号住居跡，第52，53号住居跡遺物出土状況
ＰＬ４　第66，１・２・12・16，13，14，15，30，35・47・48号住居跡，第66号住居跡遺物出土状況
ＰＬ５　第38・50・60，42，43，45，46，47，55号住居跡，第45号住居跡遺物出土状況
ＰＬ６　第57，58，62，65，68，69号住居跡，第62，69号住居跡遺物出土状況，第147号土坑
ＰＬ７　第70，71，72，74，75，17，22号住居跡，第22号住居跡遺物出土状況
ＰＬ８　第23，25，36，40，４，５，６号住居跡，第40号住居跡遺物出土状況
ＰＬ９　第８，９，10，11，18，19，20，21号住居跡
ＰＬ10　第24，27，29，31・32・33，34，37，39号住居跡，第29号住居跡遺物出土状況
ＰＬ11　第３，５，７，８，10，11・31・57・92・93・94，13，15号土坑
ＰＬ12　第17，19，30，40，52，58，64号土坑第32号土坑遺物出土状況
ＰＬ13　第66，67，70，71，74・75，85，86，88号土坑
ＰＬ14　第97，98，100，101，102，103，104，105号土坑
ＰＬ15　第106，69・107・150・184，111，115，122，123，129，138号土坑
ＰＬ16　第144，145，146，147，149，150，154，155号土坑
ＰＬ17　第165，169，194，196，197，199，200号土坑，第191号土坑遺物出土状況
ＰＬ18　第206，207，210，212，220，221，225，226号土坑
ＰＬ19　第229，232，236，238，239号土坑，第227，235，237号土坑遺物出土状況
ＰＬ20　第240，241，242，243，245，246，247，249号土坑
ＰＬ21　第250，251，253，255，257，258，260，261号土坑

ＰＬ22　第262, 264, 265, 266, 271, 277, 283, 284号土坑
ＰＬ23　第286, 293, 297, 298, 300号土坑, 第285, 291号土坑遺物出土状況, 第１・２号溝
ＰＬ24　縄文時代前期（黒浜）住居跡出土土器, 縄文時代中期（阿玉台）住居跡出土土器
ＰＬ25　縄文時代中期（加曽利Ｅ）住居跡出土土器
ＰＬ26　縄文時代中期（加曽利Ｅ）住居跡・土坑出土土器
ＰＬ27　縄文時代土坑・炉穴・埋甕・グリッド出土土器
ＰＬ28　弥生時代住居跡出土土器
ＰＬ29　古墳時代住居跡出土土器(1)
ＰＬ30　古墳時代住居跡出土土器(2), 土製品(1)
ＰＬ31　土製品(2)
ＰＬ32　土製品(3)
ＰＬ33　石器(1)
ＰＬ34　石器(2)
ＰＬ35　石器(3), 鉄製品・古銭
ＰＬ36　貝(1)
ＰＬ37　貝(2)
ＰＬ38　獣骨・歯牙
ＰＬ39　花粉分析(1)
ＰＬ40　花粉分析(2)

第１章　調査経緯

第１節　調査に至る経過

国際科学技術博覧会が，昭和60年に谷田部町において開催されることになり，茨城県では，昭和57年９月から会場建設に着手した。これと並行して，科学万博関連道路整備計画を策定した。主要地方道「取手筑波線」も，当初，計画されていたが，整備が遅れた。しかし，博覧会会場跡地利用計画の進展に伴い，新たにサイエンス通りの延長として「取手筑波線」改良工事が実施されることになった。

茨城県道路建設課では，工事着工に先立ち，昭和55年に道路整備路線内における埋蔵文化財の有無についての調査を茨城県教育委員会に依頼した。県教育委員会では，地元教育委員会の協力を得て，道路敷地内に所在する遺跡の分布調査を実施した。その結果，道路予定内には周知の境松遺跡だけであることが確認された。県教育委員会は，文化財保護の立場から境松遺跡の取り扱いについて茨城県や科学博協会と協議を重ね，その結果，当遺跡については現状保存が困難なため，記録保存の措置を講ずることになった。県道路建設課は，県教育委員会の紹介により，茨城県教育財団に発掘調査を依頼した。当教育財団は，昭和60年４月20日付で茨城県と委託契約を結び，昭和60年４月から境松遺跡の発掘調査を実施することになった。

第２節　調査経過

境松遺跡の調査面積は約7,000㎡で，調査の経過については，下記のとおりである。

4　月　上旬に現地を踏査し，調査区の概要を知る。下旬に発掘調査作業員募集，現場事務所等の設置を行い，県南コンサルタントに遺跡測量を依頼した。

5　月　発掘準備を整え，７日に鍬入れ式を挙行した。上旬からＡ４・５区を中心にグリッドで試掘を行い，住居跡や溝等を確認し，グリッド拡張に入った。

6　月　前月に引き続き拡張作業を続け，住居跡や地点貝塚等を確認した。中旬に住居跡の調査を開始し，並行して，Ｃ２・３区，Ｄ３区に３本のトレンチを入れ，試掘を実施した。

7　月　住居跡１～12号，土坑１～３号，溝１～２号の調査を行うと共にＣ２・３区の表土を重機で除去し，遺構確認を行った。その結果，遺構が濃密に分布していることが判明し，調査計画について当教育財団・県道路建設課・県教育委員会で話し合いをもった。

8　月　縄文時代の住居跡13～15・30号，弥生時代と古墳時代の住居跡17～29・31～33号の調査を実施した。調査期間は，三者の話し合いにより今年度末まで延長することになった。

調査が進み，残土置場とするため北東側の完掘全景の航空写真撮影を下旬に実施した。

9　月　Ｃ２・３区・Ｄ３区の遺構確認に入った。並行して，弥生時代と古墳時代の住居跡19～29・31～33号の調査を行った。調査促進のため，現場の実測に写真測量をとり入れることになり，古墳時代の住居跡から写真測量を開始した。

10　月　縄文時代の住居跡38・41～54号，弥生時代と古墳時代の住居跡34・36・37・39・40号及び土坑８～40号の調査を実施した。住居跡43号は，当遺跡で最大の住居跡であることが判明した。

11　月　縄文時代の住居跡35・45・52～60号，土坑18・29・41～106号の調査を行い，住居跡45号の貝層中から少量の獣骨が出土した。

12　月　縄文時代の住居跡56・58・65・66・68・69・73・75号を調査し，調査の中心は，住居跡から土坑へと移行した。中旬に早稲田大学講師の金子浩昌氏を招いて，獣骨や貝類の同定等について，班内研修会を実施した。

1　月　農道を取り除き，縄文時代の住居跡53・54・62・66号と，土坑129～259号の調査を実施した。土壙227号から人骨が出土し，現場において供養を行った。

2　月　縄文時代の住居跡53・62・64・66・69・76号，古墳時代の住居跡77号，土坑240～302号の調査を実施した。

3　月　遺構調査も終了し，上旬に完掘全景の航空写真撮影を行った。１日には，現地説明会を実施し，さらに図面等の補足と遺物等の搬出諸準備作業等を行い，下旬には，事務所等を解体し，３月26日を以て，調査はすべて終了した。

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

境松遺跡は，茨城県筑波郡谷田部町大字境松345番地ほかに所在する。

谷田部町は，信仰と行楽地で名高い筑波山から南西部につらなる筑波台地の南部に属し，筑波郡のほぼ中央に位置している。西側には，小貝川が北西から南東に流下し，川を境にして水海道市と接している。また，東谷田川と西谷田川が，町の中心部をはさむような形で，北西から南東へ貫流し，牛久沼に注いでいる。東側は小野川が南東方向へと流れている。これらの小河川の流域は，肥沃な水田地帯を形成しており，細長く延びる台地は，園芸作物・野菜・小麦等の畑作地帯となっているが，近年，農業をとりまく社会環境の変化に伴い，農地・農業人口は減少している。

谷田部町を含む周辺町村を対象に，昭和30年代後半における日本経済の高度成長に伴って生じた首都東京の人口の過度集中を分散するため，官公庁・研究施設・大学等の集団移転の構想が検討され，昭和38年日本の科学技術の頭脳を集積した研究学園都市の建設が筑波地区に決定された。これにより，谷田部町は，町の北部・北東部・東部が筑波研究学園都市の一部として建設が進められ，現在，学園西大通り，牛久学園線沿いに研究施設・大学・文化施設・住宅等が形成されている。また，国際科学技術博覧会を谷田部町において開催することが昭和55年決定され，町の北部で研究学園都市の西側を会場として行われることになった。昭和57年に起工式が実施され，日本で開催される三番目の国際博覧会として昭和60年３月に開幕した。筑波における科学技術博覧会は，日本の科学技術を世界に示す祭典として，世界中から注目され，９月に成功裡に閉幕した。

境松遺跡の所在する境松地区は，科学博会場から南方７kmで谷田部町の南部に位置し，東は茎崎町，南は伊奈町と境を接し，東谷田川と西谷田川とにはさまれた台地の西谷田川に面した縁辺部に立地している。この台地は，標高22～23m，幅１～２kmで南東に細長く延びており，境松地区付近では，東側がゆるやかに傾斜し，西側は比較的急な傾斜を成して，それぞれ東・西谷田川の沖積地へと続いている。この一帯は農村地帯で，水田・畑が多く，稲作・小麦・野菜・園芸作物等が作付されている。台地の西側をほぼ南北に県道谷田部藤代線が通っている。境松地区の集落は，西側の台地縁辺部に旧道に沿って形成されている。県道の東側は，近年団地が造成されつつある。境松地区の北方約２kmには常磐自動車道の谷田部インターチェンジがある。

当遺跡は，境松の集落の南西側に位置し，平坦な台地の西側の台地縁辺部に立地している。現況は畑であり，水田との比高は約13mである。

第２節　歴史的環境

谷田部町の台地上には，縄文時代早期以降，人々の生活の舞台となった所で，数多くの遺跡が存在する。

縄文時代の遺跡は，早期から後期の遺物の出土した境松遺跡をはじめ，町役場から北西へ0.7kmの台地上に存在する福田遺跡，町の西部で小貝川に臨む台地上に所在する山田遺跡，福田遺跡から北西へ２km離れた所にある前野遺跡等13の遺跡が確認されている。

弥生時代の遺跡としては，中期から後期の遺物を出土した境松遺跡をはじめ，西谷田川の東側の台地上に存在する高山遺跡，町の北西部の山林に所在する熊の山遺跡が周知されて，両遺跡とも，発掘調査が実施されないため不明であるが，弥生の土器片等が出土している。縄文時代の遺跡と比べると遺跡数は少ない。

古墳時代に入ると，古墳は１町村としては，数において県下でも第１位[(1)]と言われており，集落跡も確認されている。集落跡としては，前期の遺物の出土した境松遺跡，中・後期の遺物の出土したツバタ遺跡[(2)]がある。その他に薬師・八木・宮前・櫓下等の遺跡があるが，未調査なので詳細は不明である。古墳群としては，10か所が知られ，その内の７か所までが国際科学技術博覧会会場近くの島名・真瀬地区に集中している。すなわち，高山・関の台・面の井・下河原崎・榎内・島名熊の山・真瀬熊の山の各古墳群であり，高山[(3)]・関の台[(4)]・面の井[(5)]の古墳群の一部は，発掘調査が実施され，石棺や遺物等が出土している。それらの古墳群は，直径10ｍ内外の小円墳が主体をなしており，昭和34年の分布調査[(6)]では，全体で約300基が確認されている。ことに，下河原崎古墳群や小野川の西側の高台に存在する下横場古墳群は，群集墳として知られ，下横場古墳群第34号墳[(7)]出土とされている人物埴輪は，東京国立博物館に保存されている。また，同第51号墳[(8)]からは，朝顔形や円筒形埴輪等が出土している。古墳の存在や遺跡の分布状況を考え合わせると，境松付近は，大小な豪族の支配のもとに組織的な生産活動がはかられ，繁栄していたものと考えられる。

南北朝時代には，小野崎城・苅間城・面野井城などが知られ，いずれも戦国時代にかけて小田氏に属し，北部の佐竹氏と対抗した。

小田氏が佐竹氏に敗れ，その佐竹氏が秋田に移封された後の江戸時代には，外様大名の細川氏が一万六千石を領し，町の中心である内町に陣屋を構えて，現在の谷田部町の中央から南部にかけて約半分位を支配していた。境松地区(村)も谷田部藩に属し，村高212石であった[(9)]。その周辺は，天領や旗本領によって占められ，細く分割されて幕末に至っている。

県指定天然記念物になっている谷田部高校脇の不動並木が，当時の江戸・筑波街道のようすを今に伝え，また，県指定史跡五角堂と和時計は，「からくり伊賀」と呼ばれた飯塚伊賀七の製作である。

第1表　谷田部町遺跡一覧表

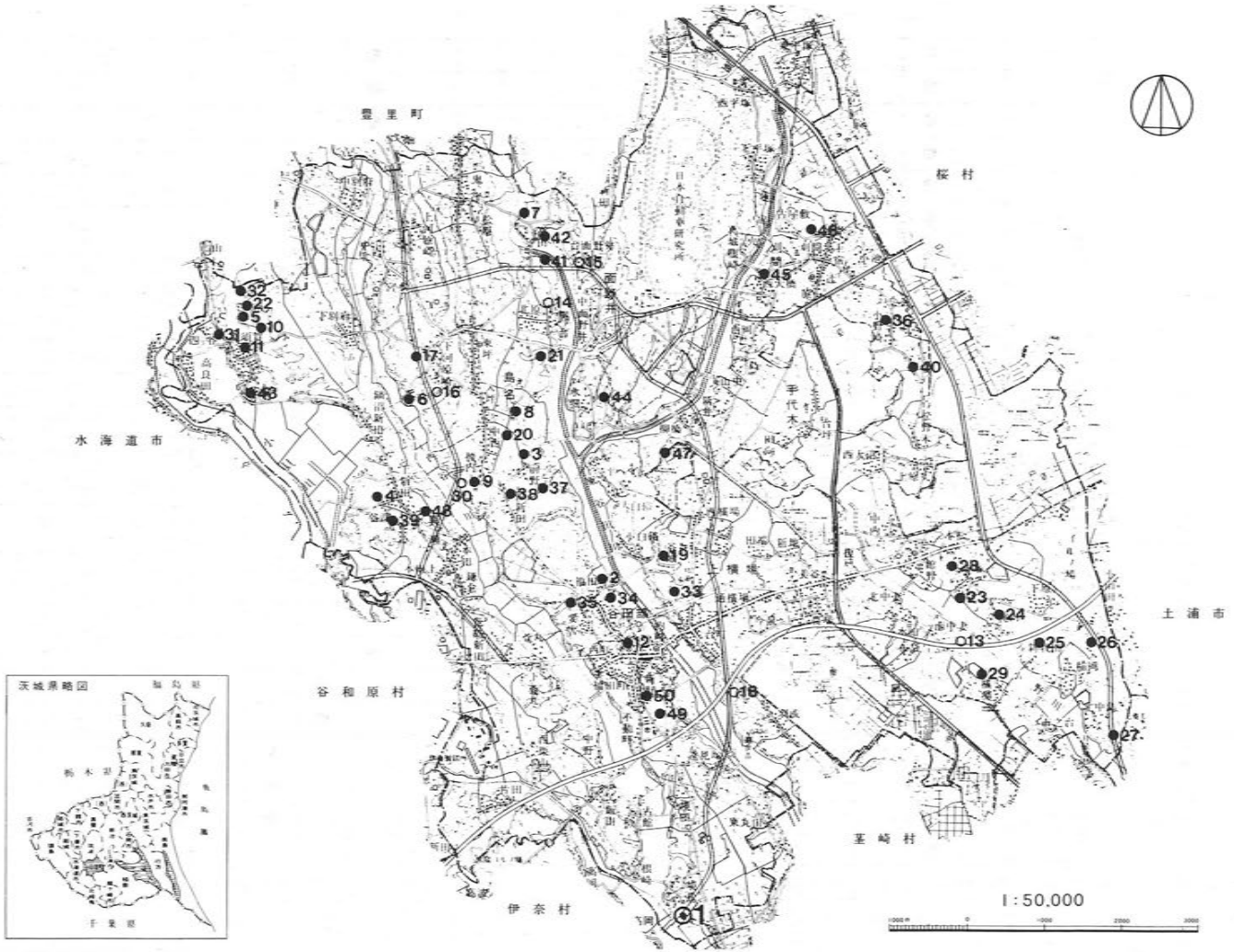
番号	遺跡名	種類	遺跡の時代				
			先土器	縄文	弥生	古墳	その他
1	境松遺跡	貝塚集落跡		○	○	○	
2	福田遺跡	乞蔵地		●			
3	前野遺跡	包蔵地		●			
4	山田遺跡	包蔵地		●			
5	熊の山遺跡	包蔵地			●		
6	高山遺跡	包蔵地			●		
7	和田台遺跡	包蔵地				●	
8	薬師遺跡	包蔵地				●	
9	榎の内遺跡	包蔵地				●	
10	熊の山城跡	城館跡					●
11	高須賀城跡	城館跡					●
12	谷田部城跡	城館跡					●
13	下横場古墳群	古墳群				○	
14	関の台古墳群	古墳群				○	
15	面の井古墳群	古墳群				○	
16	高山古墳群	古墳群				○	
17	下河原崎古墳群	古墳群				●	
18	羽成古墳群	古墳群				○	
19	台町古墳群	古墳群				●	
20	榎内古墳群	古墳群				●	
21	島名熊の山古墳群	古墳群				●	
22	真瀬熊の山古墳群	古墳群				●	
23	駒形遺跡	包蔵地				●	
24	梶内遺跡	包蔵地				●	
25	新牧田遺跡	包蔵地				●	

番号	遺跡名	種類	遺跡の時代				
			先土器	縄文	弥生	古墳	その他
26	稲岡遺跡	包蔵地				●	
27	北中島遺跡	包蔵地				●	
28	八木遺跡	包蔵地				●	
29	下横場遺跡	包蔵地				●	
30	ツバタ遺跡	集落跡				○	
31	中台遺跡	包蔵地				●	
32	中台東遺跡	包蔵地				●	
33	台成井遺跡	包蔵地		●			
34	福田前遺跡	包蔵地		●			
35	福田坪池の台遺跡	包蔵地		●			
36	小野崎館跡	城館跡					●
37	タカドロ遺跡	包蔵地		●			
38	一町田遺跡	包蔵地		●			
39	真瀬新田谷津遺跡	包蔵地		●			
40	小野崎遺跡	包蔵地				●	
41	関の台遺跡	包蔵地				●	
42	高田遺跡	包蔵地				●	
43	ハナ遺跡	包蔵地		●			
44	水堀遺跡	包蔵地		●		●	
45	神田遺跡	包蔵地				●	
46	六十目遺跡	包蔵地				●	
47	柳橋遺跡	包蔵地		●		●	
48	新田古墳遺跡	包蔵地				●	
49	宮前遺跡	包蔵地				●	
50	櫓下遺跡	包蔵地				●	

○印は発掘調査を実施した遺跡である。

註

(1) 谷田部町文化財報告Ⅰ『古墳総覧』　谷田部町教育委員会　同文化財保存会　昭和35年
(2) 科学博関連道路谷田部明野線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書『ツバタ遺跡・高山古墳群』　茨城県教育財団　昭和58年
(3) (2)に同じ
(4) (1)に附として、関の台第9号墳、面の井第5号石棺調査報告がある。
(5) (4)に同じ
(6) (1)に同じ
(7) (1)に同じ・『谷田部の歴史』　谷田部の歴史編さん委員会　昭和50年
(8) 『下横場古墳群　実測調査及び第51号墳保存調査報告書』　谷田部町教育委員会　昭和57年
(9) 『谷田部の歴史』　谷田部の歴史編さん委員会　昭和50年



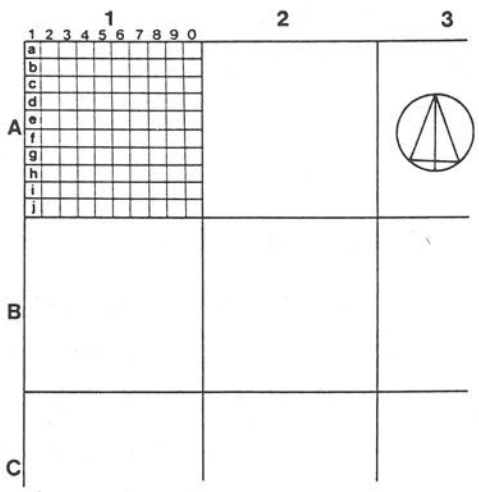
第1図　谷田部町遺跡分布図

第3章　調査方法

第1節　地区設定

境松遺跡の調査面積は約7,000㎡で，道路予定地であるため，幅約35m，長さ約200mの細長いエリアである。

遺跡の位置を明確にし，正確な調査を期するため，日本平面直角座標第IX系X座標（南北）＋22,600m，Y座標（東西）＋100mを基準点とし，その基準点を中心に座標北で40m方眼を設定し，この40m四方を大調査区とした。更に，大調査区を東西・南北に各十等分して4m四方の小調査区を設定した。すなわち，40m四方の大調査区内に4m四方の小調査区を100個設定したわけである。

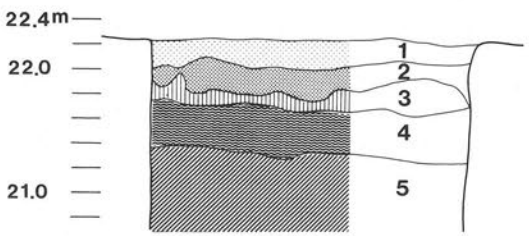


第2図　調査区名称図

大調査区は，基準点から北方へ40m，西方へ160mの点を起点とし，北から南へ大文字のアルファベットで「A」～「E」とし，西から東へ「1」～「5」とし，A1区・B2区等と表記した。小調査区は，南へ小文字のアルファベットで「a」・「b」～「i」・「j」とし，東へ「1」・「2」～「9」・「0」と表した。各調査区の名称は，大調査区と小調査区を合わせて「$A5j_5$」・「$E1a_0$」のように表記し，この小調査区をグリッドと呼称した。

第2節　遺跡の基本層序

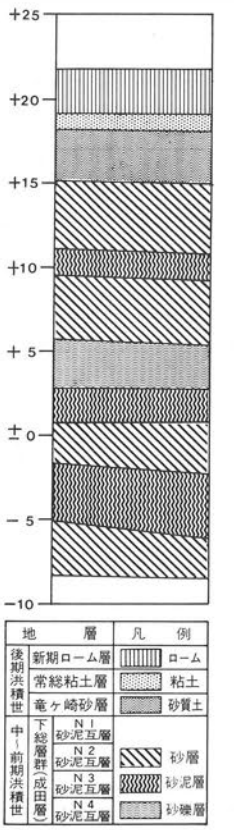
当遺跡の北東側$A5i_3$区をテストピットとして4m四方，深さ1.5mほど掘り下げ，基本的な土層の調査を実施した。その土層堆積状況図が第3図である。1は表土層で，耕作土であり，厚さは約20cmである。2は漸移層で，黒褐色・褐色を呈しており，遺物が若干出土する。厚さは5～30cmである。3はソフトローム層である。遺構は，この層から確認されている。厚さは約15～30cmである。4はハードローム層で，3より黄味の強い褐色でかなり硬く締まって



第3図　テストピット土層図

いる。厚さは35～40cmである。5はハードローム層で4より非常に硬く締まっている。

県道路建設課が遺跡のほぼ中央のC2c1区地点においてボーリング調査を実施している。その結果が，第4図の推定土層断面図である。ローム層の下は常総粘土層，更に竜ヶ崎砂層，成田層と続き，成田層は，砂層・砂泥層・砂層・砂礫層・砂泥層・砂層・砂泥層・砂層と互層に堆積している。



第4図　推定土層断面図

第3節　遺構確認

調査に先立ち，担当者間で遺構確認の方法について協議を行い，道路より北東側はグリッドによる試掘，南西側はトレンチによる試掘を実施した。その結果，北東側から住居跡・溝等と思われる落ち込みが確認された。表土が削平されていて遺構確認面までの深さが約20cmと浅いことと，比較的遺構の薄いことを考慮して，人力で必要部分のグリッドを拡張し，遺構調査を行った。一方，南西側は試掘の結果，住居跡・土坑等と思われる落ち込みが多数検出され，ほぼ全域に検出されていることと，遺構確認面までの深さが約40cmと比較的深いことを考慮して，南西側調査区全域の表土を重機により除去し，その後遺構の確認調査を進めた。その結果，多数の住居跡・土坑等が検出された。

第4節　遺構調査

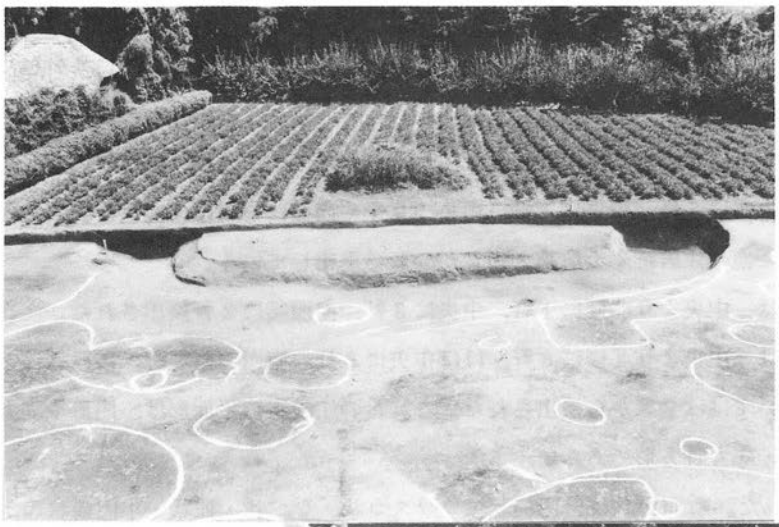
住居跡の調査は，長（主）軸方向とそれに直交する方向に土層観察用ベルトを設けて掘り込む四分割法で実施し，地区名を北から時計回りで1～4区とした。土坑の調査は二分割法を用い，分割の方法は長軸により二分した。しかし，長軸と短軸の長さの差が非常に大きい場合は，短軸で二分割した。地区名は，住居跡に準じた。溝は，長さに応じて数か所に土層観察用ベルトを設定した。

土層については，色調・含有物・粘性・しまり等を総合的に観察して分類した。遺物の取り上げについては，住居跡・土坑の場合は出土位置・遺物番号・レベル等を遺物出土状況図に記載し，後半は写真測量を取り入れて実施した。溝の場合は，区名に代わってグリッド名を用い，その他は住居跡・土坑と同じとした。遺構の観察では，床・壁・柱穴・炉底面等の状態に特に注意をし

た。

平面実測は，座標北を基準にした水糸方眼地張測量で行った。土層断面・遺構断面実測は，標高を測って水糸を水平にセットし，その水糸を基準にして実測した。後半には，平面・断面実測を写真測量で行った。

調査の記録は，土層断面図写真撮影→同図作成→遺物出土状況写真撮影→同図作成→平面写真撮影→断面図作成→平面図作成を基本とした。後半は，遺物出土状況写真撮影以後を写真実測とした。



第４章　遺構と遺物

第１節　遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法

１　遺跡の概要

発掘調査の結果，当遺跡から縄文時代前期黒浜期の住居跡８軒，中期阿玉台期の住居跡12軒，加曽利Ｅ期の住居跡30軒，弥生時代後期の住居跡６軒，古墳時代前期五領期の住居跡21軒の合計77軒の住居跡が検出された。

縄文時代前期の住居跡は，北東側に３軒，ほぼ中央に１軒，両側に東西に並ぶように４軒検出された。中期の阿玉台期の住居跡は，中央よりやや西側に11軒まとまって検出され，南西端に１軒離れて検出された。単独に存在するのは１軒であり，他は住居跡や土坑と切り合っている。加曽利Ｅ期の住居跡は，北東側に５軒，中央に１軒，中央よりやや西側に13軒，南西側に11軒検出された。殆どの住居跡が，他の住居跡や土坑等と何らかの形で重複している。

弥生時代後期の住居跡は，中央より北側に１軒，中央に３軒，南西端に２軒検出された。

古墳時代前期の住居跡は，中央より北側に８軒，ほぼ中央に８軒，南西側に３軒，南西端に２軒検出され，北東側を除いてほぼ全域から検出された。これらの住居跡の平面形は，円形や隅丸方形が多く，他は楕円形・隅丸長方形である。

土坑は，302基検出された。断面形状は，円筒状・フラスコ状・なべ状・皿状・小円筒状等がある。なお，302基の土坑の中には，炉穴６基，埋甕１基，墓壙３基が含まれている。

溝は５条検出されたが，１条についてはエリア外の台部を取り巻くように検出され，方形周溝墓の周溝と考えられる。他の４条については，性格・時期等不明である。

遺物は，遺物収納箱に517箱（土器類254箱・貝類263箱）である。縄文土器は，縄文時代中期の阿玉台式や加曽利Ｅ式の深鉢形土器や土器片が多く出土しているが，他に早期茅山式，前期黒浜式・諸磯式・浮島式・興津式の深鉢形土器や土器片，後期称名寺式並行の綱取式の壺形土器や土器片が出土している。弥生時代後期の壺形土器・甕形土器や台付甕形土器等も少量出土している。土師器は，古墳時代前期五領期の壺形土器・甕形土器・台付甕形土器・甑形土器・高坏形土器等が住居跡等から出土している。

土製品としては，土器片錘・耳栓・円板等が住居跡や土坑から出土している。

石器は，打製石斧・磨製石斧・石鏃・石皿・浮子・磨石・敲石等が住居跡等から出土している。

地点貝塚は，住居跡７軒，土坑９基から検出された。貝は，ヤマトシジミが主体で，ごく少量のハマグリ・カワアイ等を含んでいる。その他，獣骨等も貝層中から数点出土している。

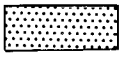
2　遺構・遺物の記載方法

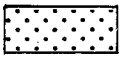
本書で使用した遺構・遺物の記載方法は，次のとおりである。

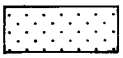
(1) 使用記号

	名称	住居跡	土坑	溝	方形周溝墓
遺構	記号	ＳＩ	ＳＫ	ＳＤ	ＳＸ

(2) 遺構・遺物実測図中の表示


＝炉


＝繊維土器（断面）


＝焼土

＝貝層

(3) 土層の分類

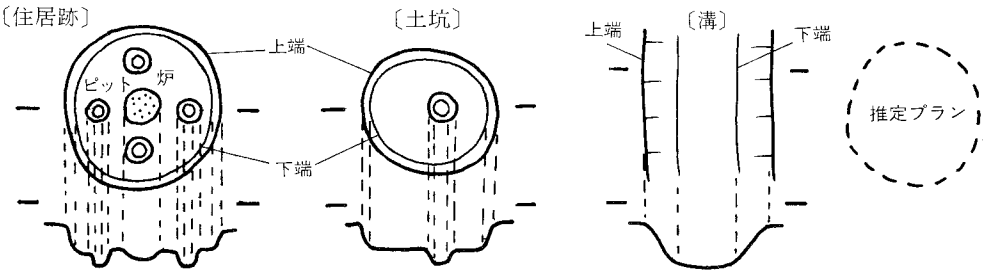
当遺跡で検出された遺構の土層の色調については，「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄編著・日本色研事業株式会社）を使用して，下記のように分類・番号化し，また，土層の含有物についても分類・記号化し，番号と記号を組み合わせて図中に表示した。

番号	土色名	色相　明度／彩度	番号	土色名	色相　明度／彩度
1	褐色土	Hue 7.5 YR 4/3　4/4　4/6	7	暗赤褐色土	Hue 2.5 YR 3/2　3/3
2	暗褐色土	Hue 7.5 YR 3/3　3/4			Hue 5　YR 3/4　3/6
3	黒褐色土	Hue 7.5 YR 2/2　3/2　3/1	8	極暗赤褐色土	Hue 5　YR 2/3　2/4
4	黒色土	Hue 7.5 YR 2/1	9	にぶい橙色土	Hue 7.5 YR 6/4
5	極暗褐色土	Hue 7.5 YR 2/3	10	灰白色土	Hue 2.5 Y　8/2
6	赤褐色土	Hue 2.5 YR 4/6	11	灰褐色土	Hue 7.5 YR 6/2
		Hue 5　YR 4/6			

記号	含有物	記号	含有物
a	ローム粒子を含む	g′	ローム粒子少量，炭化粒子を微量含む
b	ローム小ブロックを含む	h	焼土粒子を含む
c	ローム中ブロックを含む	i	焼土粒子・焼土小ブロックを含む
d	ローム大ブロックを含む	j	焼土粒子･焼土ブロック･ローム粒子を含む
e	ローム・焼土・炭化粒子を微量含む	k	かく乱
e′	ローム粒子少量，焼土･炭化粒子を微量含む	l	炭化物
e″	ローム・焼土・炭化粒子を少量含む	m	灰
e‴	ローム･炭化粒子微量，焼土粒子を少量含む	n	ローム土
f	ローム・焼土粒子を微量含む	o	粘土
f′	ローム粒子少量，焼土粒子を微量含む	p	貝
f″	ローム・焼土粒子を少量含む	q	砂
f‴	ローム粒子微量，焼土粒子を少量含む	r	炭化粒子を含む
g	ローム・炭化粒子を微量含む		

含有物ａ　ｂ　ｃ　ｄ　ｈ　ｉ　ｒの量については，微量（５％未満），「′」少量（５％～10％未満，「″」中量（10％～30％未満），「‴」多量（30％以上）として，アルファベットの右上に付加して表示した。

(4) 遺構実測図の作成方法と掲載方法



○　各遺構は，原則として縮尺1/20の原図をトレースして版組し，それを更に1/4に縮小して掲載した。

○　長大な溝や周溝は，縮尺1/50の原図をトレースして版組し，それを更に1/4に縮小して掲載した。

○　レベルは，m単位で掲載した。

○　住居跡の実測図は，時期別に掲載した。

(5) 遺物実測図の作成方法と掲載方法

○　土器の実測は，原則として中心線の左側に外面，右側に内面と断面を図示した。

○　土器片拓影図は，右側に断面を図示した。表裏二面を掲載したものについては，断面を中央に配し，左側を外面，右側を内面とした。

○　石器の敲(たた)きの範囲は(……)↦□□↤で表し，磨(す)りの範囲は，○⟷○で表し，凹みの範囲は，◎で表した。

○　遺物の実測図は，原則として原寸トレースしたものを1/3に縮小して掲載した。しかし，種類や大きさにより，それ以外の縮尺も使用した。

○　遺物につけた番号は，土器，土製品，石器毎に通し番号をつけ，表の備考欄に表示した。なお，土器についてはP，土製品についてはDP，石器についてはQを遺物番号の頭に冠した。

(6) 表の見方について

住居跡一覧表

住居跡番号	位置	平面形状	規模(m) 長径×短径	規模(m) 壁高	長径方向	炉	柱穴	覆土	出土遺物	備考

○　位置は，小調査区名で表示した。他の調査区にまたがる場合は，遺構の占める面積の割合が最も大きい小調査区名をもって表示した。

○　平面形は，掘り込み上端面の形状を記した。

○　方向は，長径や長軸が座標北からみてどの方向にどれだけ傾いているかを角度で表示した。

○　規模の長径×短径は，円形や楕円形の平面形の上端面の計測値で，隅丸方形や隅丸長方形の時は，長軸×短軸になる。壁高は，残存壁高の計測値を記した。

○　柱穴数は，その住居跡に伴うと考えられる柱穴数を記した。

○　覆土は，自然堆積をＮ，人為堆積をＡとし，両者が認められる場合をＮＡとした。

○　出土遺物は，主な遺物名を記した。

○　時期は，出土遺物などから時期判定の可能な範囲で，土器形式によって記した。

○　備考は，火災にあっている住居跡や重複関係にある住居跡について記した。

土坑一覧表

図版番号 土坑番号	位置	平面形	長径方向	規模(m)		底面	覆土	出土遺物	形態分類	備考
				長径×短径	深さ					

○　規模の欄において，（　）をつけた数値は，重複等によって一部を欠くもので，推定値の長さである。

○　覆土は，住居跡一覧表の項を参照されたい。

○　形態分類は次のようにした。

平面形　Ⅰ－円形　　Ⅱ－楕円形　　Ⅲ－隅丸方形・長方形　　Ⅳ－不定形

断面形　Ａ－円筒状　　Ｂ－なべ状　　Ｃ－皿状　　Ｄ－フラスコ状(袋状)　　Ｅ－その他

規模（長径・長軸長）　ａ－１ｍ未満　　ｂ－１ｍ以上２ｍ未満　　ｃ－２ｍ以上３ｍ未満　　ｄ－３ｍ以上

深さ　１－0.5ｍ未満　　２－0.5ｍ以上１ｍ未満　　３－１ｍ以上

以上の番号と記号を組み合せて「IAc_3」のように表示した。

○　備考は，土器の図版番号を表わした。

出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考

○　法量は，Ａ－口径，Ｂ－器高（現高），Ｃ－底径，Ｄ－台部径，Ｅ－脚部径を示し，単位はcmである。（　）は，復元推定値である。

○　備考は，完存率や接合片数等を記した。

土製品一覧表

図版番号	名称	出土地点	法量				備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	

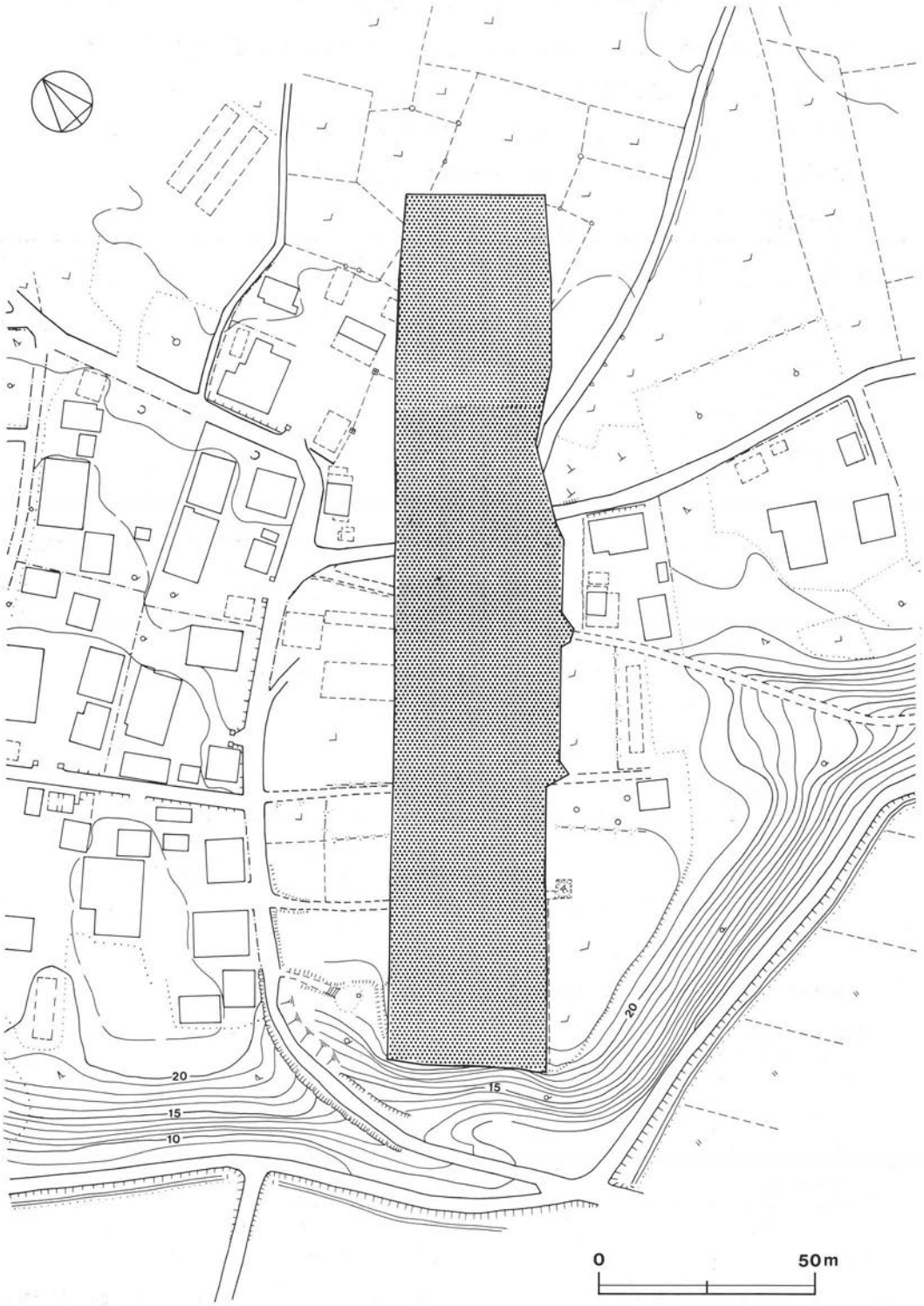
○　備考は，特徴等を記した。

石器一覧表

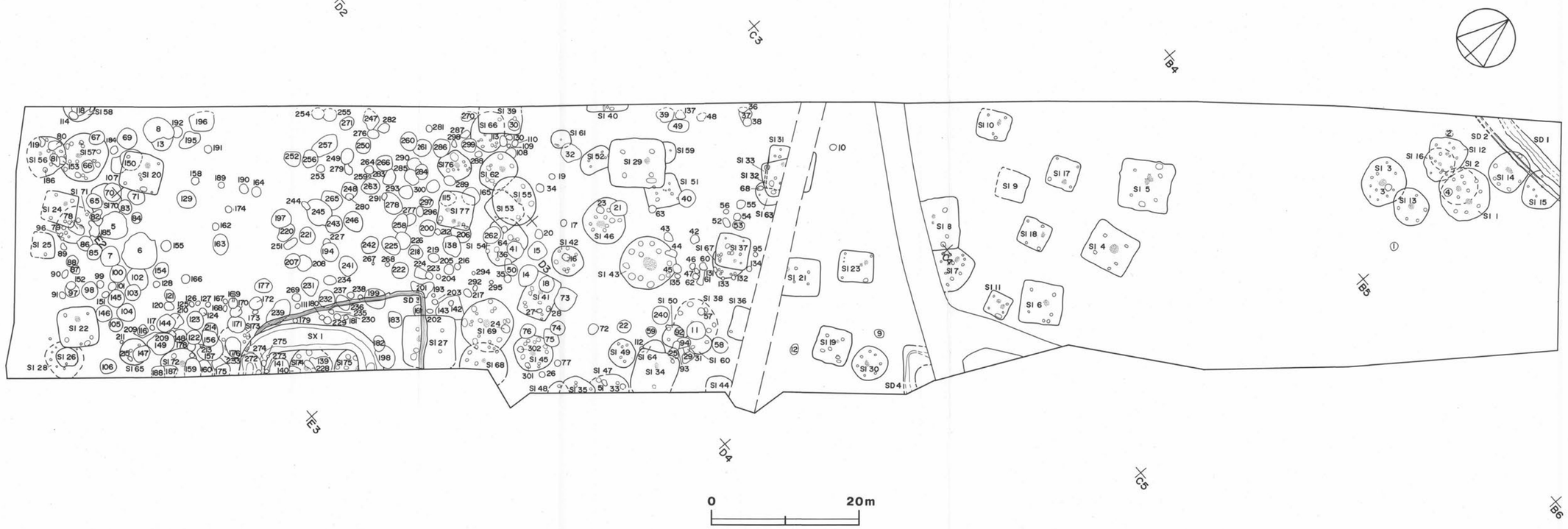
図版番号	名称	出土地点	法量				石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		

○　法量は，それぞれの最大値を記し，（　）をつけた数値は，一部を欠損しているものの現存値である。

○　備考は，特徴等を記した。



第5図　調査遺跡全体図


E1
D2
C3
B4
A5
F2
E3
D4
C5
B6
SI 1
SI 2
SI 3
SI 4
SI 5
SI 6
SI 7
SI 8
SI 9
SI 10
SI 11
SI 12
SI 13
SI 14
SI 15
SI 16
SI 17
SI 18
SI 19
SI 20
SI 21
SI 22
SI 23
SI 24
SI 25
SI 26
SI 27
SI 28
SI 29
SI 30
SI 31
SI 32
SI 33
SI 34
SI 35
SI 36
SI 37
SI 38
SI 39
SI 40
SI 41
SI 42
SI 43
SI 44
SI 45
SI 46
SI 47
SI 48
SI 49
SI 50
SI 51
SI 52
SI 53
SI 54
SI 55
SI 56
SI 57
SI 58
SI 59
SI 60
SI 61
SI 62
SI 63
SI 64
SI 65
SI 66
SI 67
SI 68
SI 69
SI 70
SI 71
SI 72
SI 73
SI 74
SI 75
SI 76
SI 77
SX 1
SD 1
SD 2
SD 3
SD 4
0
20m

第 6 図　遺構配置図

第２節　縄文時代の遺構と遺物

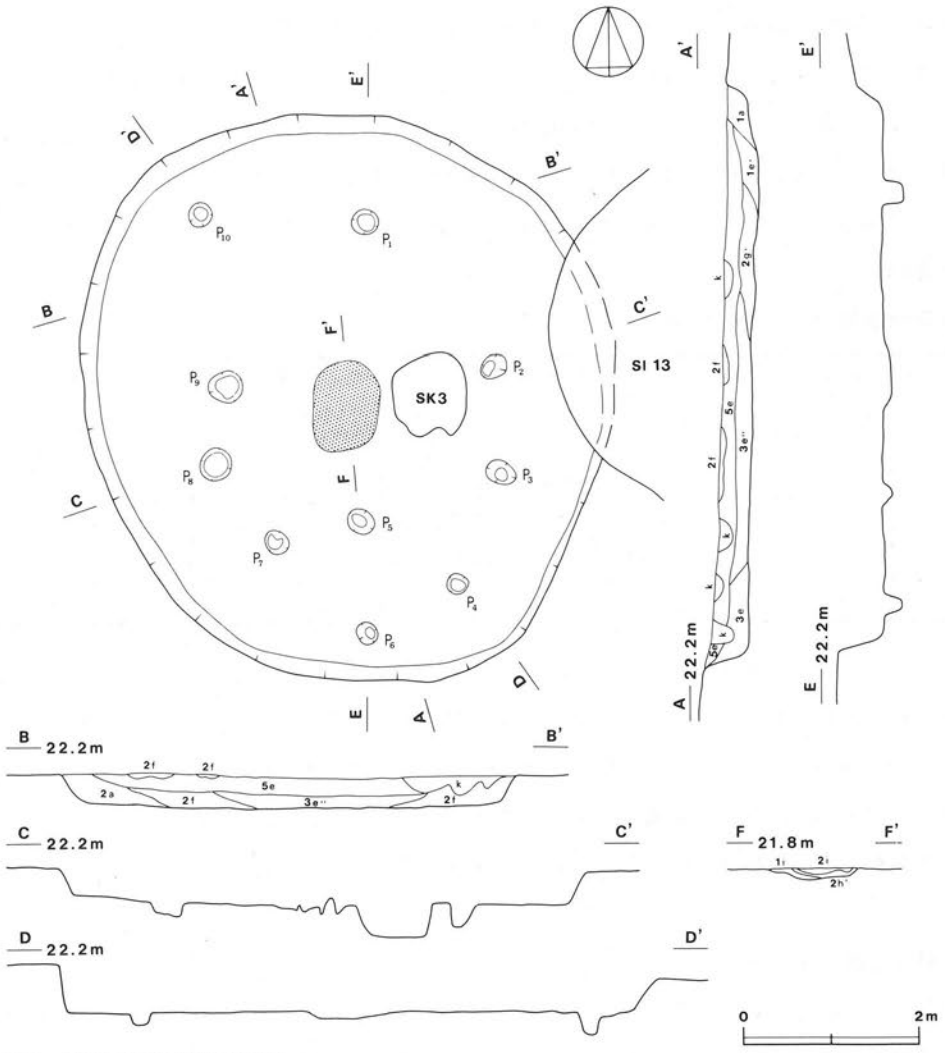
1　竪穴住居跡

(1) 前　期

第３号住居跡（第７図）

本跡は，当遺跡の北東側A4g$_8$区を中心に確認され，東側に位置する縄文時代中期の第13号住居跡に東壁と第３号土坑に床面を掘り込まれている。

平面形はほぼ円形を呈し，長径方向はN－33°－Wを指し，規模は長径6.8m・短径６mである。壁はロームで硬く，南壁はほぼ垂直に，北壁は急な角度で立ち上がっている。南壁の一部は撹乱



第７図　第３号住居跡実測図

を受けている。壁高は30～50cmで，南壁が高い。床面はほぼ平坦で，硬いロームである。

炉跡はほぼ中央に位置し，長径100cm・短径80cmの楕円形を呈し，床面を皿状に20cmほど掘り込んでいる地床炉である。炉内には焼土粒子・焼土小ブロック微量・焼土粒子少量を含む暗褐色土と褐色土が充満し，炉床はレンガ状に非常に硬く焼けて焼土化し，ゴツゴツしている。ピットは10か所検出され，P_1～P_4・P_6～P_9がやや不規則な配列を示すものの規模等から主柱穴と考えられる。P_5・P_{10}は支柱穴と考えられる。なお，これらの柱穴の規模は，長径25～40cm・短径23～35cm，深さ約18～25cmである。

覆土は，一部攪乱を受けているが５～６層から成り，上層はローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む極暗褐色土，下層はローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を少量含む黒褐色土とローム粒子・焼土粒子を微量含む暗褐色土等がほぼ自然堆積の様相を呈している。

遺物は，南側の床面直上から縄文時代前期黒浜式の深鉢形土器の底部片（第８図１）が出土している。覆土上・中層からは黒浜式の土器片101片が出土しているが，床面からの出土は少量である。また，覆土上・中層から中期の阿玉台式土器片43片，加曽利Ｅ式土器片144片，土師器片６片，土製品（第180図18・28）２点，石器（第188図68他）３点も出土している。中期縄文土器片と土師器は，周囲から流入したものと考えられる。

出土土器

第３号住居跡出土土器観察表

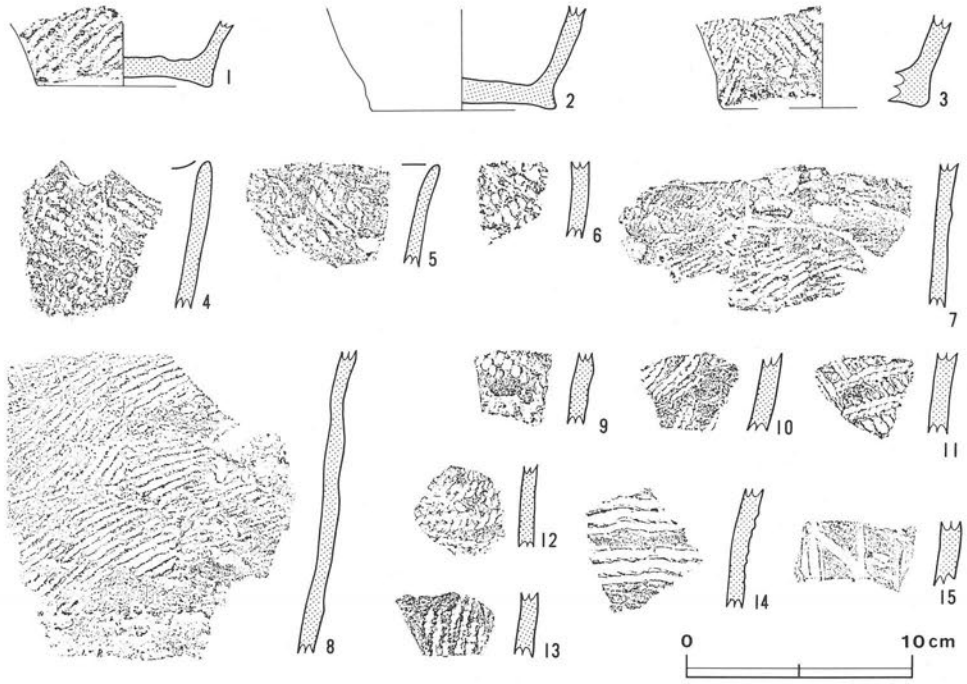
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第８図 1	深鉢形土器 黒浜	B (2.8) C (7.7)	底部はやや上げ底を呈し，胴部はやや開きながら立ち上がっている。無節Ｌと一部Ｒの縄文が施され，底部外面はナデている。内面はやや雑な調整である。	砂粒・長石・繊維にぶい赤褐色 普通	10% 1片 P65
2	深鉢形土器 黒浜	B (4.5) C (8.1)	底部は厚手で，上げ底気味である。胴部は幾分開きながら立ち上がり，細目の無節Ｌの縄文が施されている。底部外面は，雑なナデが加えられ，内面はナデ調整されている。	砂粒・繊維にぶい褐色 普通	10% 1片 P64
3	深鉢形土器 黒浜	B (3.3) C (9.2)	上げ底気味の底部片で，わずかに残る胴部下位は外傾しながら立ち上がる。単節のＬＲとＲＬの縄文が施されている。	砂粒・繊維にぶい褐色 普通	10% 1片 P153

第８図４～15は，第３号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。４・５は口縁部片で，４は波状口縁を呈し，単節ＲＬの縄文が，５は無節Ｒの縄文がそれぞれ斜位に施されている。

６～15は胴部片である。６～８は２本組の撚糸文が斜位に施され，９～11は単節ＲＬの縄文が斜位に，12・13は無節Ｌの縄文が斜位に施されている。14・15は沈線文が施され，14は３本の太い沈線文が２段に，15は沈線が縦位と斜位に施されている。

第７号住居跡（第９図）

本跡は，C4a_1区を中心に確認され，当遺跡のほぼ中央を横切る道路沿いに位置し，北西側を古墳時代の第８号住居跡に掘り込まれ，南側は町道が斜めに通っているため，平面形ははっきりし



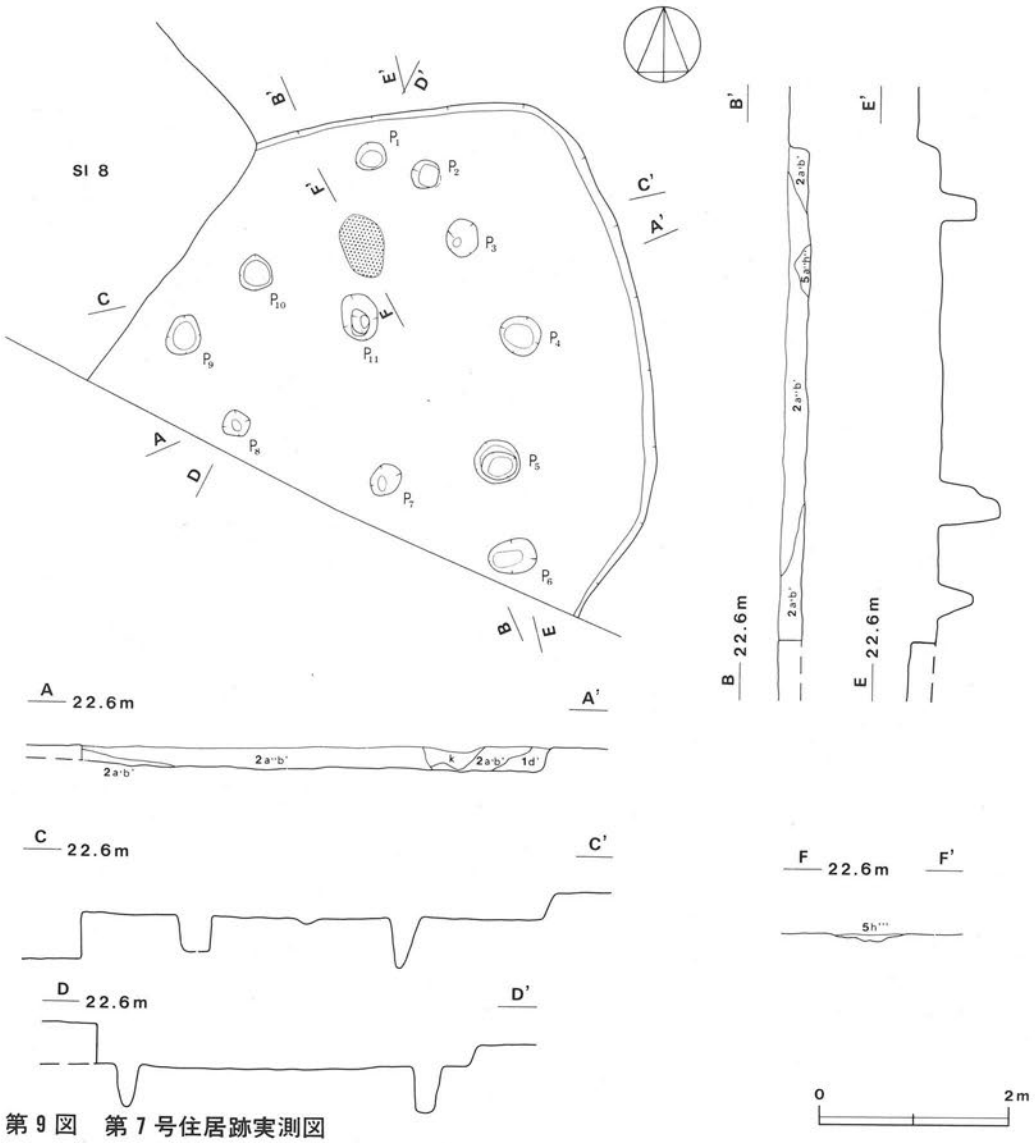
第8図　第3号住居跡出土土器実測図・拓影図

ないが，北や東側の調査部分から推測して，隅丸長方形になるものと思われる。長軸方向は不明で，規模は推定で長軸約6m・短軸約5mと思われる。壁はロームで硬く，ほぼ垂直に立ち上がり，壁高は20～30cmである。床面は平坦な硬いロームであり，特に炉の周辺は踏み固められて硬く締まっている。

炉跡は北側に位置し，長径70cm・短径42cmの楕円形を呈し，床面を皿状に6cmほど掘り込んだ地床炉である。炉内には焼土粒子を多量に含む極暗褐色土が堆積しているが，炉床は余り硬く焼けていない。ピットは11か所検出され，P_1・P_3～P_5・P_8・P_{10}が配列や規模から主柱穴と考えられる。主柱穴の配列は不規則で，規模は長径30～50cm，短径28～48cm，深さ38～60cmである。P_5は北側が段状を呈し，深さ60cmで，柱穴の中では一番深い。P_2・P_6・P_7・P_9は支柱穴と考えられる。P_{11}は直径50cm，深さ94cmであり，本跡に伴わない不明のピットと考えられる。

覆土は一部攪乱を受けているが，3層から成り，ローム粒子・中量・ローム小ブロックを少量含む暗褐色土，ローム粒子・ローム小ブロックを少量含む暗褐色土，ローム大ブロックを少量含む褐色土が堆積している。

遺物は，炉跡周辺の床面直上と南側の覆土上層や覆土下層から縄文時代前期の黒浜式の土器片230片が出土している。



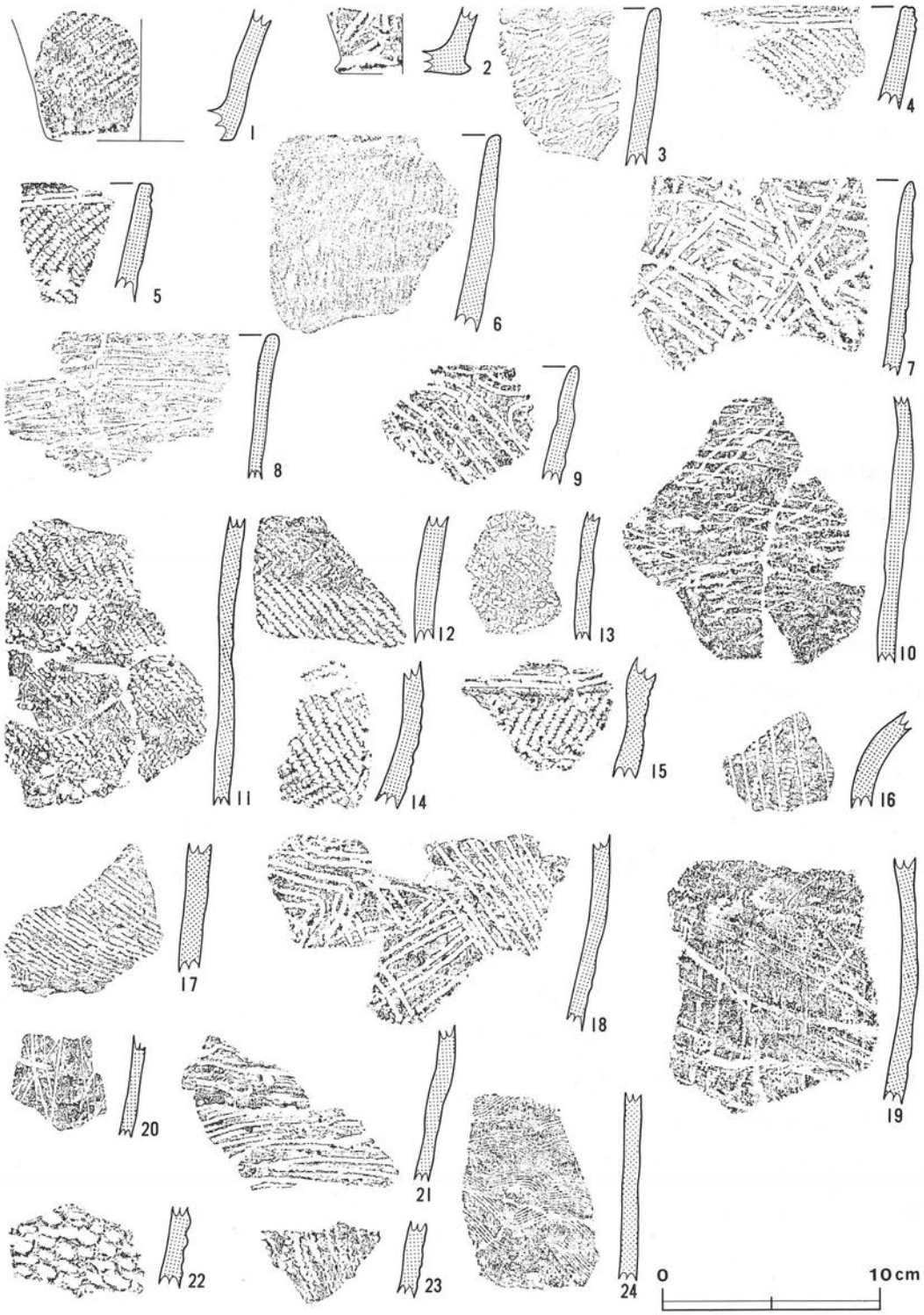
第9図　第7号住居跡実測図

出土土器

第7号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第10図 1	深鉢形土器 黒浜	B (5.6) C (8.8)	底部から胴部にかけての破片で，胴部は底部端から外傾しながら立ち上がっている。胴部下位には，単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。	砂粒・繊維 にぶい赤褐色 普通	10%　1片 P155
2	深鉢形土器 黒浜	B (2.8) C (6.4)	底部から胴部にかけての破片で，底部は平底を呈している。胴部は沈線が斜位に施されている。	砂粒・繊維 にぶい橙色 普通	10%　1片 P154

第10図３～24は，第７号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。３～９は口縁部片で，３～６は縄文が施されている。３は無節の付加条縄文，４は単節ＲＬの縄文，５は単節ＬＲの縄



第10図　第７号住居跡出土土器実測図・拓影図

文がいずれも斜位に施されている。なお，４・５は口唇部直下に押引文が施されている。６は非常に浅い無節の縄文が縦位に施されている。７～９は半截竹管による沈線文が施され，７は菱形に構成され，８は浅い横位の沈線が器面全体に施されている。９は直線と曲線が描かれている。

10～24は胴部片である。10は網目状撚糸文が施され，11～17は縄文が施されている。11～14は単節ＲＬの縄文が斜位に，15は押引文と単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。また，16は単節ＬＲの縄文の地文に縦位の沈線が施されている。17は無節Ｒの縄文が斜位に施されている。18～21は半截竹管によって沈線文が施されている。18は斜位に施した沈線と曲線が描かれている。19は格子状に施され，20は雑な沈線，21は太い沈線が横位に器面全体に施されている。22は横からの刺突文が施され，23はアナダラ属の貝殻腹縁文が縦位に施され，24は櫛歯状条線文を波状に施している。

第12号住居跡（第11図）

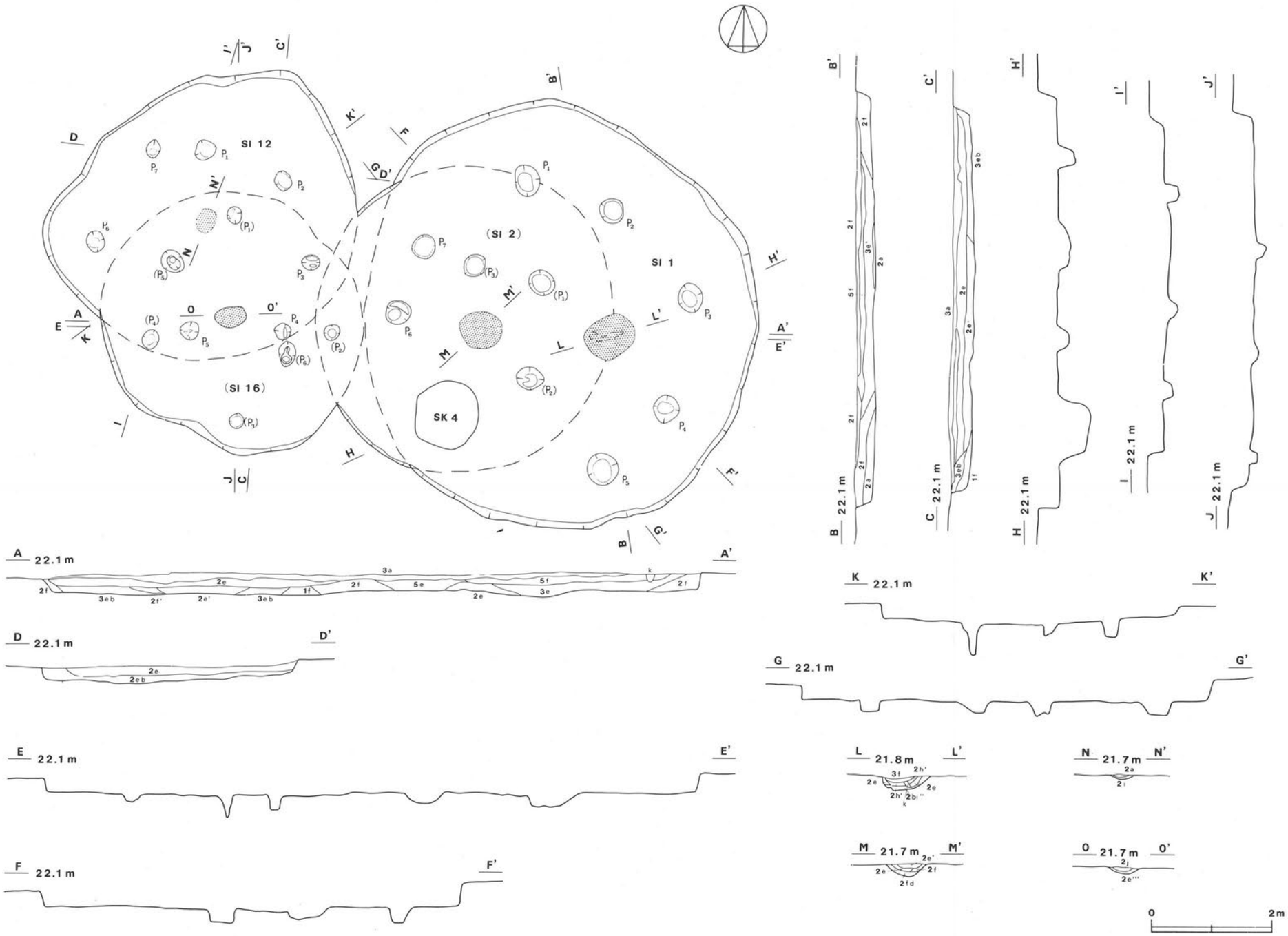
本跡は，当遺跡の北東側A4f_9区を中心に確認され，第３号住居跡の４ｍ北側に存在する。南側に位置する縄文時代前期の第16号住居跡に約半分が切られ，東側に位置する縄文時代中期の第２号住居跡に東側のごく一部を掘り込まれている。

平面形は，やや不整な円形を呈するものと考えられ，長径方向はＮ－25°－Ｗを指し，規模は長径が5.2ｍ・短径が推定で4.5ｍである。壁はロームで硬く，ほぼ垂直に立ち上がり，壁高は20～30cmである。床面は平坦で，硬く締まっているロームである。

炉跡は中央に位置し，長径40cm・短径30cmの楕円形を呈し，床面を皿状に８cmほど掘り込んだ地床炉である。炉内には焼土粒子・焼土小ブロック・ローム粒子を微量含む暗褐色土が堆積し，炉床はレンガ状に赤く，硬く焼けている。ピットは７か所検出され，P_1～P_3・P_5～P_7が配列や規模から主柱穴と考えられる。主柱穴はほぼ規則的に配列され，規模は長径30～35cm・短径25～33cm，深さ20cmである。P_4は支柱穴と考えられる。

覆土は３層から成り，上層はローム粒子を微量含む黒褐色土，下層はローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロックを微量含む暗褐色土等が自然堆積の様相を呈している。なお，一部覆土上層を遺構確認のため削平している。

遺物は，炉跡周辺のほぼ床面から縄文時代前期の黒浜式の深鉢形土器（第12図２）が細かくつぶれた状態で出土し，また，黒浜式の土器片が覆土から約250片と多数出土している。そのほか，磨石１点・軽石（第192図177）１点のほか小さな河原石も覆土全体から多数出土している。



第11図　第１・２・12・16号住居跡実測図

出土土器

第12号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第12図 1	深鉢形土器 黒浜	B(26.5)	平縁の口縁部をもつ胴部片で，胴部はほぼ垂直に立ち上がり，口縁部はわずかに開く。器全体に無節の1Lの2本組の撚糸で4～5単位の回転圧痕文を施している。口縁部の内面には横位のナデ，胴部には縦位のナデが施されている。	砂粒・繊維 褐色 普通	20% 16片 P1
2	深鉢形土器 黒浜	B(25.7) C(10.1)	ほぼ器形の窺える底部端部から胴部を中心とした破片である。胴部は底部からほぼ直線的に外傾しながら立ち上がり，胴部上位で内彎気味を呈した後，口縁部付近で大きく開く。器面に撚りの異った無節のLやRの縄文が施され，胴部上位に右方向からの刺突文が3列施されている。胴部内面上位は横ナデ，下位は縦ナデが施されている。	砂粒・繊維 橙色・褐灰色 普通	30% 11片 P37
3	深鉢形土器 黒浜	B(14.6)	胴部片で，胴中位から内彎気味に立ち上がり，上位付近で更に外反している。器面の右側は無節の1Lの2本組の撚糸で4単位の回転圧痕文が施され，左側は無節Rの縄文が展開されているが，やや不明瞭な所もある。内面はナデが施されている。	砂粒・長石・繊維 暗褐色 不良	20% 10片 P72
4	深鉢形土器 黒浜	B(18.4) C((7.1)	底部から胴部にかけての破片で，底部は上げ底を呈し，胴部は底部から直線的にやや外傾しながら立ち上がっている。胴下半分は無節Rの縄文が，胴中央部は無節の1Lの2本組の撚糸で2～3単位の回転圧痕文が展開されている。底部外面はナデ，底部と胴部の内面はナデ調整である。	砂粒・繊維 橙色 普通	30% 8片 P70
5	深鉢形土器 黒浜	B (7.5) C(10.2)	胴部から底部にかけての破片で，底部は端部のみが残っている。胴部は底部から外傾気味に立ち上がっている。器面は摩滅している。原体の異なる付加条のRLとLRの縄文が施されている。	砂粒・石英・繊維 明褐色 普通	15% 5片 P272
6	深鉢形土器 黒浜	B (4.2) C (9.5)	底部はやや上げ底を呈し，胴部は外傾しながら立ち上がっている。太目の無節Lの縄文が菱形を構成するように施文されている。胴部内面はナデが加えられている。	砂粒・繊維 明赤褐色 普通	10% 2片 P71
7	深鉢形土器 黒浜	B (3.9) C (6.6)	厚手の底部片で，わずかに残る胴部はほぼ直線的にやや外傾しながら立ち上がっている。無節の縄文が雑に施されている。	砂粒・繊維 にぶい褐色 普通	10% 2片 P157

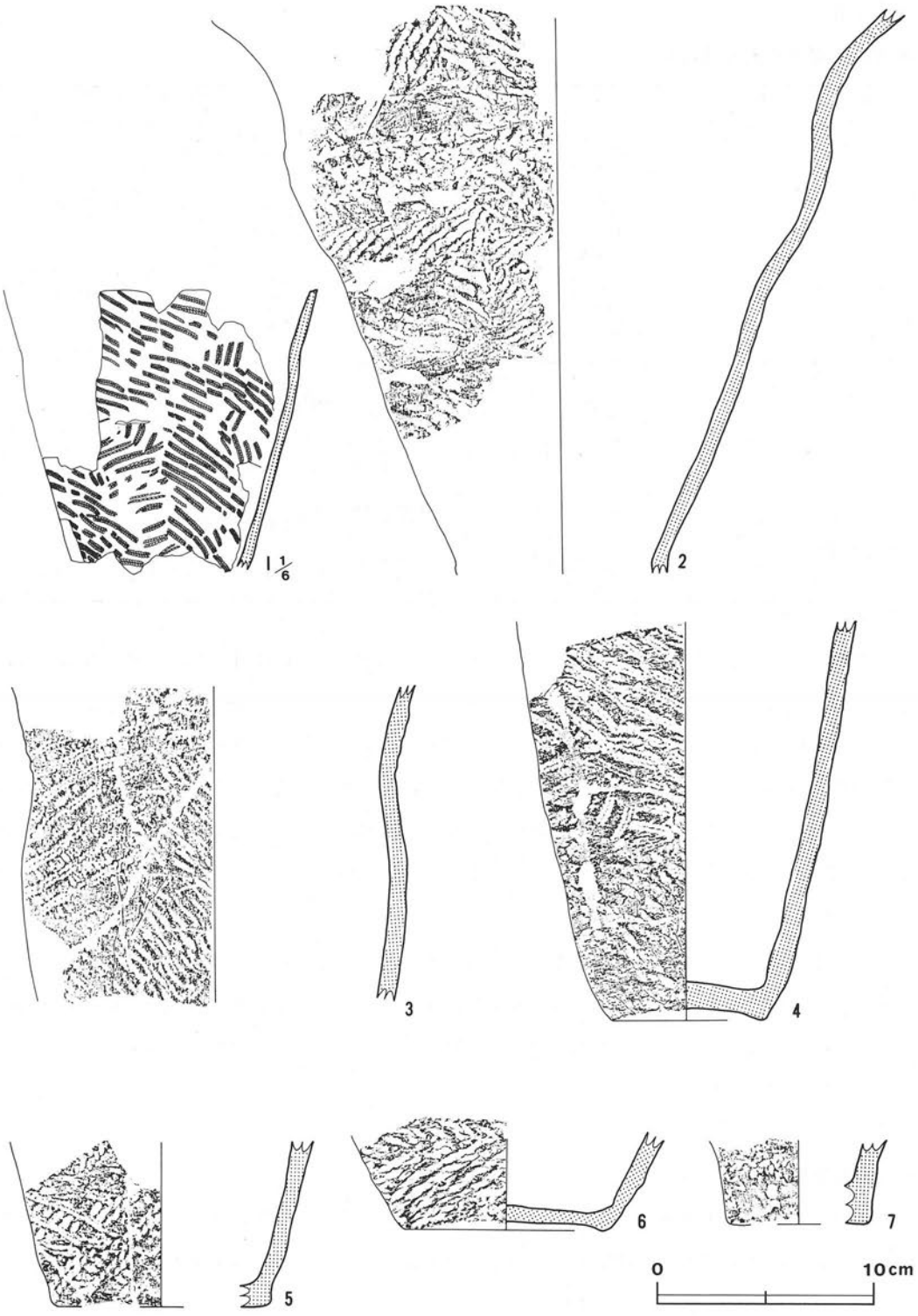
第13図8～33は，第12号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。8～20は口縁部片で，8～13は2本組の撚糸文が施されている。8は太い撚糸文，10は細い密な撚糸文が施され，更に8～10は菱形文が施されている。11は斜位に，12・13は密な撚糸文が斜位に施されている。14・15は無節Rの縄文が斜位に施され，14は更に，2本組の撚糸文が交差するようにまばらに施されている。16・17は2本組の撚糸文が斜位に施され，16は器面の下位に縄文が加えられている。18は短い横位の沈線が間を置いて施され，19は太い沈線が縦位に，20は横からの刺突文を横位に2列施している。

21～33は胴部片である。21は2本組の撚糸文が施されている。21～24は斜位に，25は孔を有し，文様を菱形に施している。24は9と同一個体である。26～29は付加条縄文が斜位に施されている。30は単節LRの縄文が斜位に施され，31・32は無節LとRによって羽状縄文が作られている。33は沈線が縦位に雑に施されている。

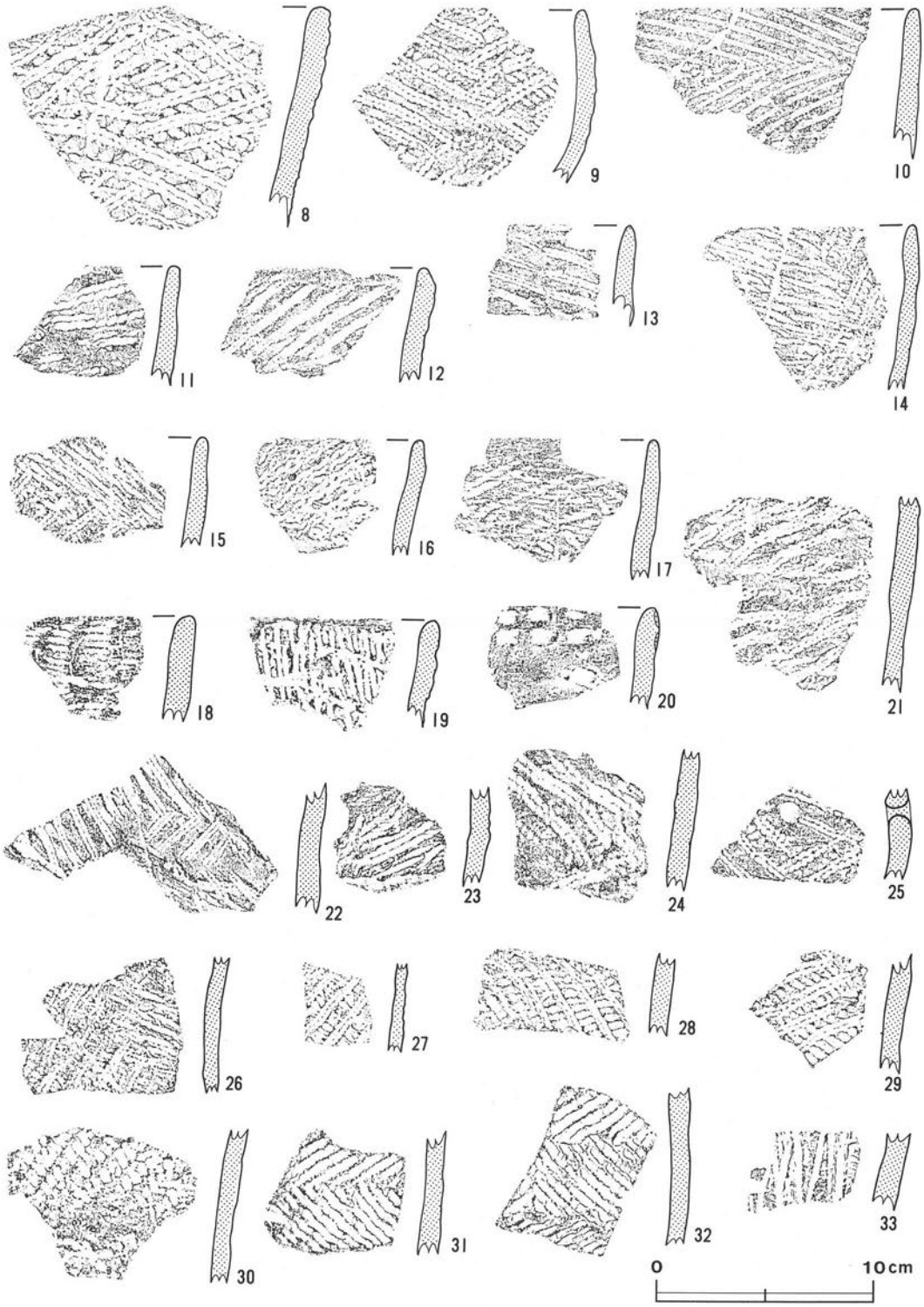
第16号住居跡（第11図）

本跡は，当遺跡の北東側A4f_9に確認され，第3号住居跡の3m北側に存在する。本跡の北側に位置する縄文時代前期の第12号住居跡を約半分ほど掘り込み，東側に位置する縄文時代中期の第2号住居跡に東側の一部を掘り込まれている。

平面形はほぼ円形を呈し，長径方向は推定でN－36°－Eを指し，規模は推定で長径が4.5m・



第12図　第12号住居跡出土土器実測図(1)



第13図　第12号住居跡出土土器拓影図(2)

短径が3.9mと思われる。壁はロームで硬く，南壁はほぼ垂直に立ち上がり，壁高は遺構確認面から30cm内外である。本跡の北壁・東壁は遺構調査中に掘り過ぎてしまった。床面はほぼ平坦で，硬く締まっているロームである。

炉跡の位置は重複のため明確に判断できないが，中央に位置するものと考えられる。長径56cm・短径32cmの楕円形を呈し，床面を皿状に12cmほど掘り込んでいる地床炉である。炉内には焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子を多量に含む暗褐色土等が堆積し，炉床は余り硬く焼けていない。ピットは6か所検出され，配列や規模からP_1～P_5が主柱穴と考えられる。主柱穴はほぼ規則的に配列されており，規模は長径30～40cm・短径25～33cm，深さ15～20cmである。

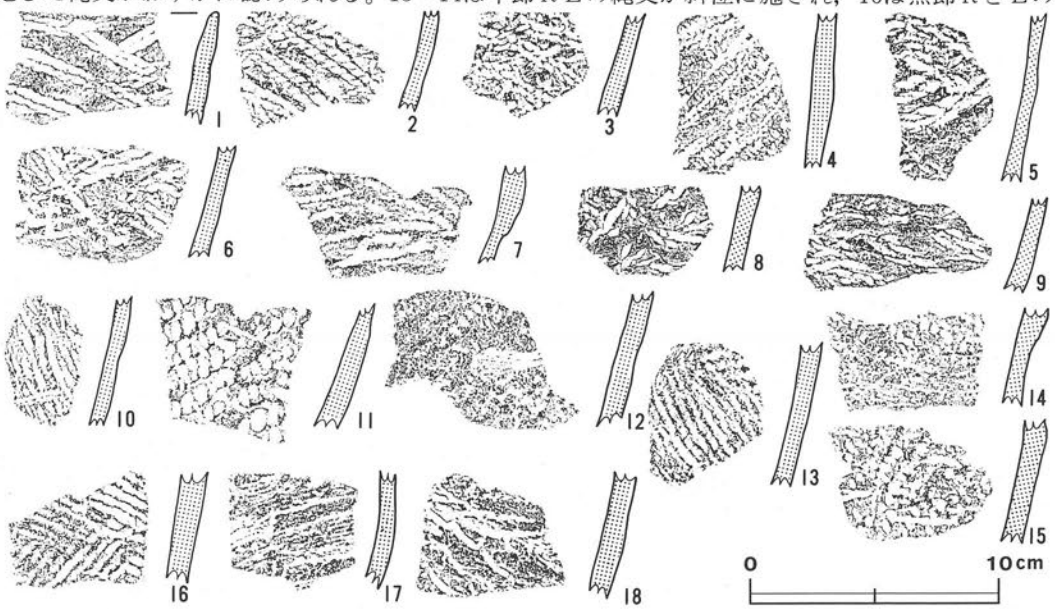
覆土はほぼ4層から成り，上層はローム粒子を微量，ローム粒子を少量含む黒褐色土。下層はローム粒子少量・焼土粒子・炭化粒子を微量含む暗褐色土等が自然堆積の様相を呈している。

遺物は，覆土中層・下層から縄文時代前期の黒浜式の土器片が87片出土している。いずれも小破片のみで，復元はできなかった。そのほか，石鏃（第185図3）1点が出土している。

出土土器

第14図1～18は，第16号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部片で，2本組の撚糸文が横位に施されている。

2～18は胴部片である。2～10は2本組の撚糸文が施され，2～4は斜位に，5～7は菱形に，8は雑に，9は横位に施されている。10は撚糸文を施した後，更に，交差するように撚糸文を施している。11～15は単節の縄文が施されている。11は太い単節ＬＲの縄文が斜位に，12は斜位に施した縄文がわずかに認められる。13・14は単節ＲＬの縄文が斜位に施され，16は無節ＲとＬの



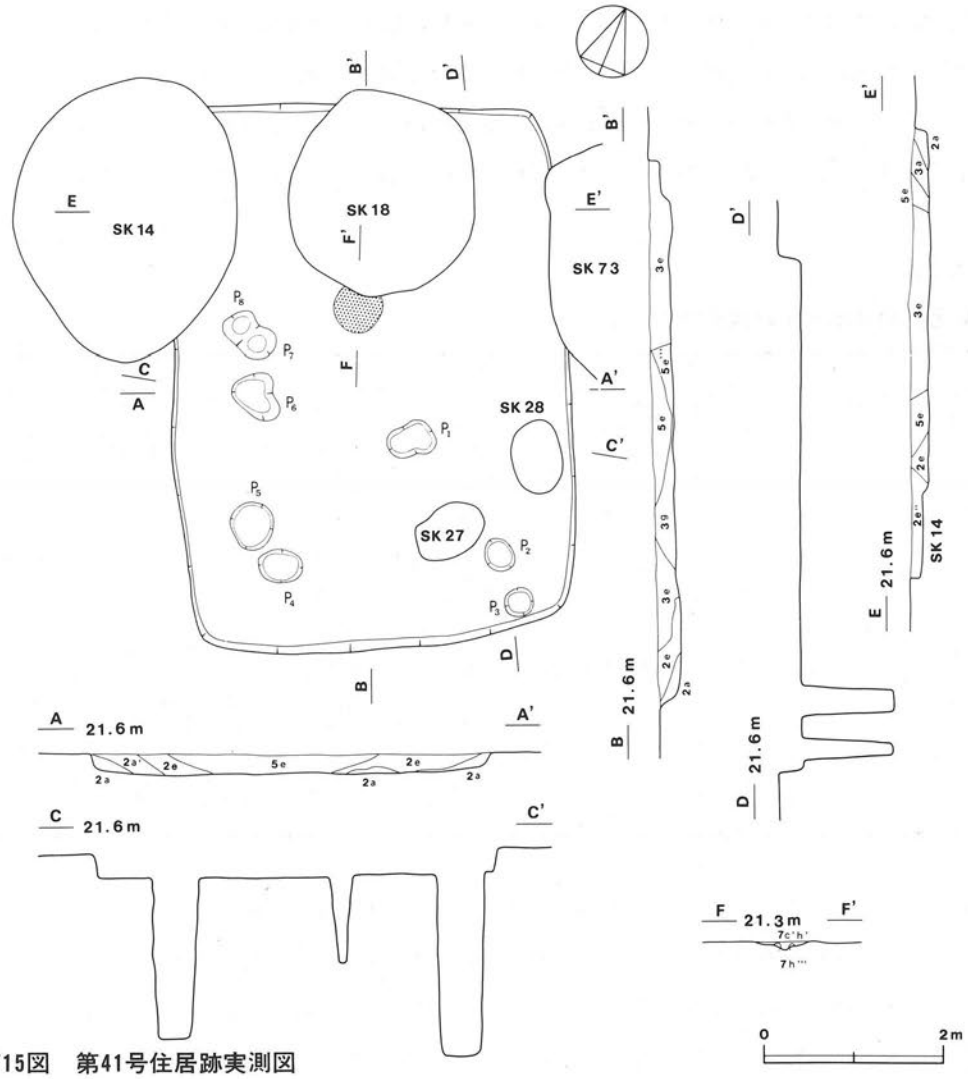
第14図　第16号住居跡出土土器拓影図

縄文によって羽状を構成している。17は細い押引文が１本と５単位の細い押引文が横位に施されている。18は不明瞭な刺突文と沈線がやや波状気味に斜位に施されている。

第41号住居跡（第15図）

本跡は，当遺跡の中央部よりやや南西側D3b₂区を中心に確認され，第54号住居跡の２ｍ東側に位置している。北西コーナー部を第14号土坑，北壁を第18号土坑，南東コーナー部付近を第27・28号土坑に床面や壁の一部を掘り込まれている。

平面形は隅丸長方形を呈し，長軸方向はN－24°－Wを指し，規模は長軸７ｍ・短軸５ｍである。壁はロームで硬く，東壁・西壁・北壁はほぼ垂直に，南壁はごくゆるやかな弓状を呈して立ち上がり，壁高は約25cmである。壁は２か所土坑に掘り込まれている。床面は平坦で，硬く締まって



第15図　第41号住居跡実測図

いるロームである。

炉跡は中央から北側に位置し，北端を第18号土坑に掘り込まれたため直径60cmの不整な円形を呈し，床面を皿状に５～10cm掘り込み，更に，炉の中央部を10cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉内には焼土粒子を少量から多量とローム中ブロック少量を含んだ暗赤褐色土が堆積し，炉床はレンガ状に赤く硬く焼けている。ピットは８か所検出され，P_1・P_2～P_5・P_7・P_8が配列や規模から主柱穴と考えられる。主柱穴はほぼ規則的に配列され，柱穴の規模は長径40～60cm・短径33～50cm・深さ100cm前後と深く，P_6・P_7は双円状である。

覆土はＡ－Ａ′のセクションから見るとほぼ６層から成り，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む極暗褐色土と暗褐色土，ローム粒子を微量から少量含む暗褐色土等がおおむね自然堆積の様相を呈しており，Ｂ－Ｂ′のセクションの北側は第18号土坑に掘り込まれているものである。

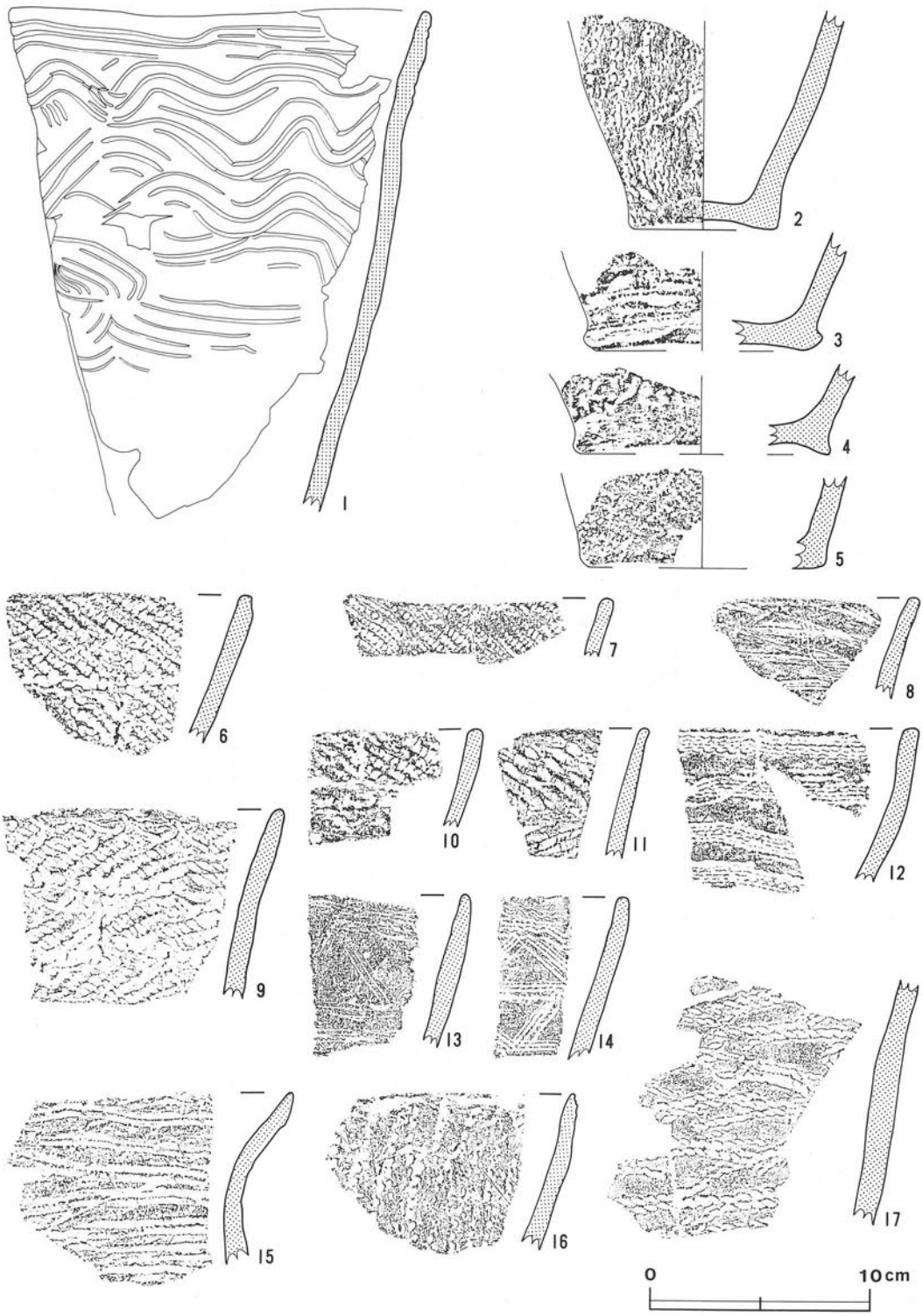
遺物は，住居跡の南東側の床面直上や覆土下層から縄文時代前期の黒浜式の深鉢形土器（第16図１）がつぶれた状態で出土し，また南東側の覆土中層・下層から土器片が281片出土している。そのほか覆土上層から中期の阿玉台式や加曽利Ｅ式の土器片が少量と，覆土下層から磨石と敲石を兼ねた石器（第189図86）１点・敲石１点，土器片錘（第180図39・40・41）３点が出土している。

出土土器

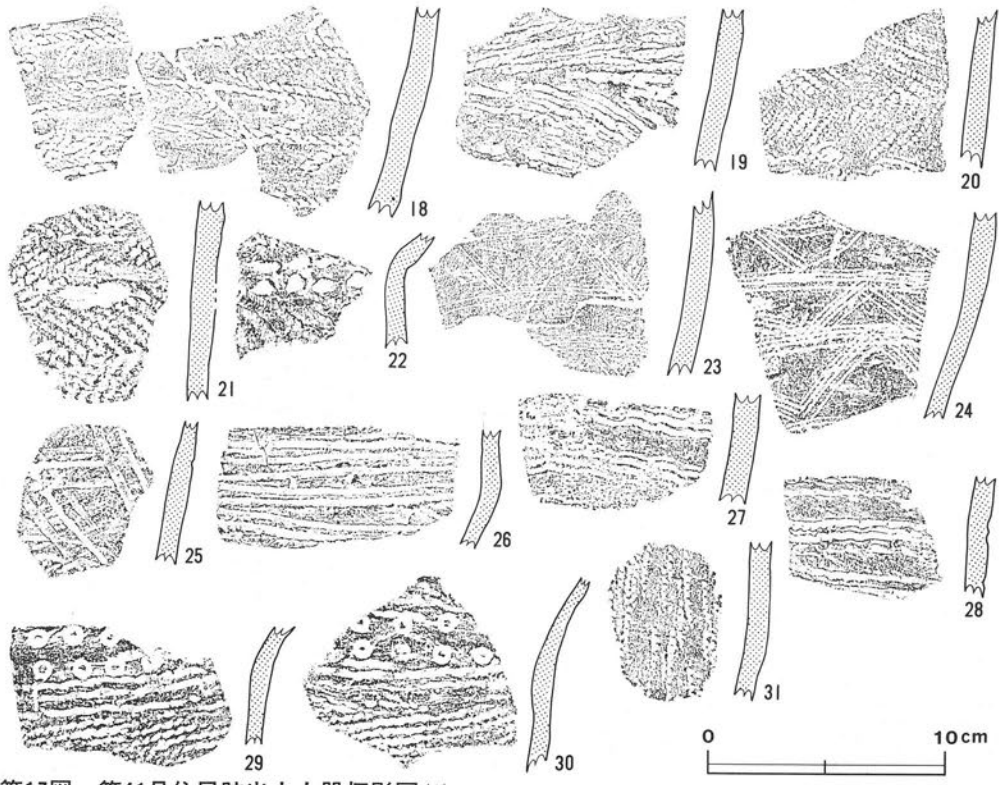
第41号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第16図 1	深鉢形土器 黒浜	A 19.4 B(23.3)	口縁部は，ほぼ直線的にやや開きながら立ち上がっている。胴部は胴部下位からやや開きながら立ち上がり，底部は欠損している。口縁部は３本の沈線が周回し，その下から胴部中央まで３本の波状沈線が左側から右側に雑に４段描かれ，胴下半部は２本の沈線が２段に描かれている。胴部下位は不明瞭である。内面上部は横位のナデ，下部は縦位のナデを施している。	砂粒・繊維 胴上部－暗褐色 胴下部－明赤褐色 不良	70% 33片 P６
2	深鉢形土器 黒浜	B (9.6) C (6.6)	底部は上げ底を呈し，胴部は直線的にやや外傾気味に立ち上がっている。胴部は底部に比べると厚い。器面はアナダラ属の貝殻腹縁文を縦位に施している。	砂粒・雲母・繊維 橙色 良好	20% ３片 P177
3	深鉢形土器 黒浜	B (4.6) C(11.0)	底部はやや上げ底を呈し，胴部は直線的に外傾しながら立ち上がる。器面は半截竹管による横位の沈線が施されている。	砂粒・繊維 明赤褐色 普通	10% ２片 P180
4	深鉢形土器 黒浜	B (3.6) C(11.8)	底部は上げ底を呈し，胴部は外傾しながら立ち上がる。器面は無節Ｌの縄文を施している。	砂粒・繊維 橙色 普通	10% １片 P178
5	深鉢形土器 黒浜	B (4.3) C(11.0)	底部はわずかにのこり，胴部は外傾気味に立ち上がっている。細い無節の $\frac{L}{L}$ の２本組の撚糸の回転圧痕文を雑に浅く施している。	砂粒・雲母・繊維 にぶい橙色 普通	10% １片 P179

第16・17図６～31は，第41号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。６～16は口縁部片で，６・７は付加条縄文が斜位に，８は付加条縄文が横位に細く密に施されている。６は太い縄文で，更に横位に縄文原体を押圧している。９と10は単節の縄文を施し，９は単節ＬＲの縄文を斜位に施し，口唇部直下に半截竹管によって沈線が施され，更に２段の縄文原体の押圧が認め



第16図　第41号住居跡出土土器実測図・拓影図(1)



第17図　第41号住居跡出土土器拓影図(2)

られる。11は無節Rの縄文が斜位に施され，12～15は沈線文で，12は5単位の櫛歯状条線文がやや波状気味に押し引かれている。13は4本の細い沈線が横位に2段施され，その間に細い沈線による山形文が描かれている。14は口唇部直下に細い4本単位の波状沈線文が2段に施され，更に，その下側に13と同じように山形文が施されている。15は半截竹管によるやや太めの沈線が横位に施され，16はアナダラ属の貝殻腹縁文が斜位に施されている。

17～37は胴部片である。17～19は2本組の無節の撚糸文で，17は横位に，18は縄文原体が乱れた状態で雑に施され，19は菱形を構成している。20は付加条縄文を羽状に，21は単節の縄文を羽状に施している。22は無節Rの縄文地上に縄文原体の押圧文を施している。23～28は沈線文で，23は13と，24は14と同一個体である。25は沈線が異方向に施され，26は横位に，27は波状に，28は押し引き気味に施されている。29・30は2列の竹管文が横位に施され，その下側に2～3本の沈線が横位に施され，更に，沈線の下側に縄文がわずかに認められる。31はアナダラ属の貝殻腹縁文が縦位に施されている。

第49号住居跡（第18図）

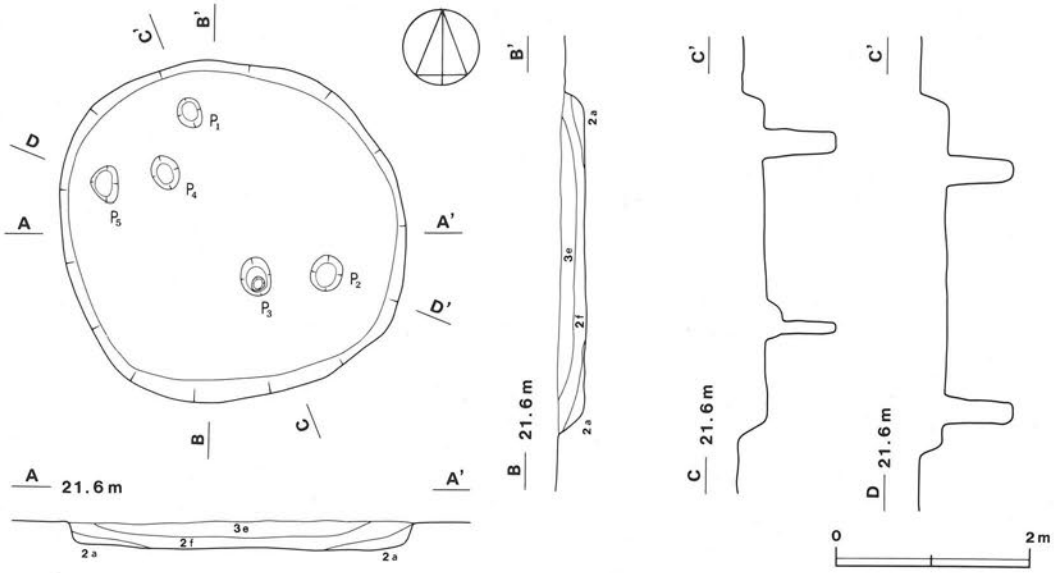
本跡は，当遺跡のほぼ中央D3a_6区を中心に確認され，第41号住居跡10m東側に存在している。

平面形は円形を呈し，長径方向はN－56°－Wを指し，規模は長径3.8m・短径3.6mである。壁はロームで硬く，南壁はややゆるやかに，その他の壁はほぼ垂直に立ち上がり，壁高は約30cmである。床面はほぼ平坦で，全体的に硬いロームである。

炉跡は検出されなかった。ただ，中央からやや東側の床面に焼土が若干確認され，床面が焼けていたが，掘り込みも殆どなく，炉とは認めがたい。ピットは5か所検出され，配列や規模からP_1・P_2・P_3・P_5が主柱穴と考えられる。柱穴の規模は，長径36～40cm・短径25～33cm・深さ70～80cmである。P_4はP_1かP_5の支柱穴と考えられ，P_3は北側が段状に掘られている。

覆土は3層から成り，上層はローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む黒褐色土，下層はローム粒子・焼土粒子を微量含む暗褐色土，ローム粒子を微量含む暗褐色土がレンズ状に自然堆積している。

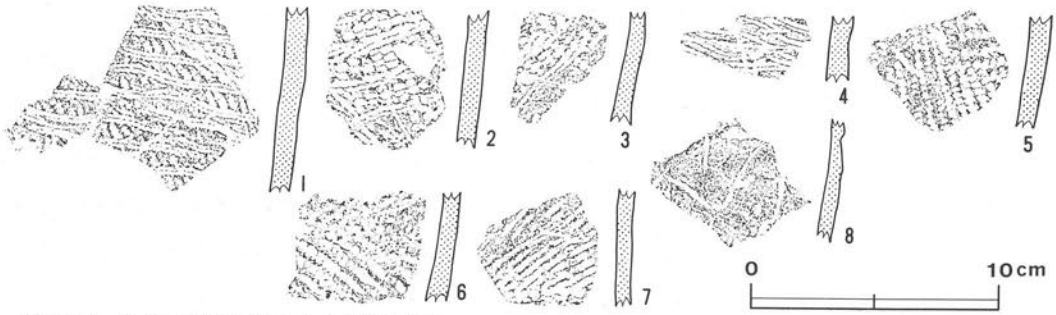
遺物は，中央部の覆土下層から縄文時代前期の黒浜式の土器片が39片出土し，そのほか石鏃（第185図9）1点及び覆土上層・中層から阿玉台式土器片9片と加曽利E式の土器片48片が出土している。



第18図　第49号住居跡実測図

出土土器

第19図1～8は，第49号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1～8は胴部片で，1～3は単節ＲＬの縄文の地文上に2本組の無節の撚糸文を，1は横位に，2・3は異方向に施している。4は無節の2本組の撚糸文を斜位に施し，5は単節ＬＲとＲＬの縄文を羽状に施している。6・7は無節の縄文が施され，6は羽状に，7は斜位に施されている。8は半截竹管による沈線が波状に施されている。



第19図　第49号住居跡出土土器拓影図

第54号住居跡（第20図）

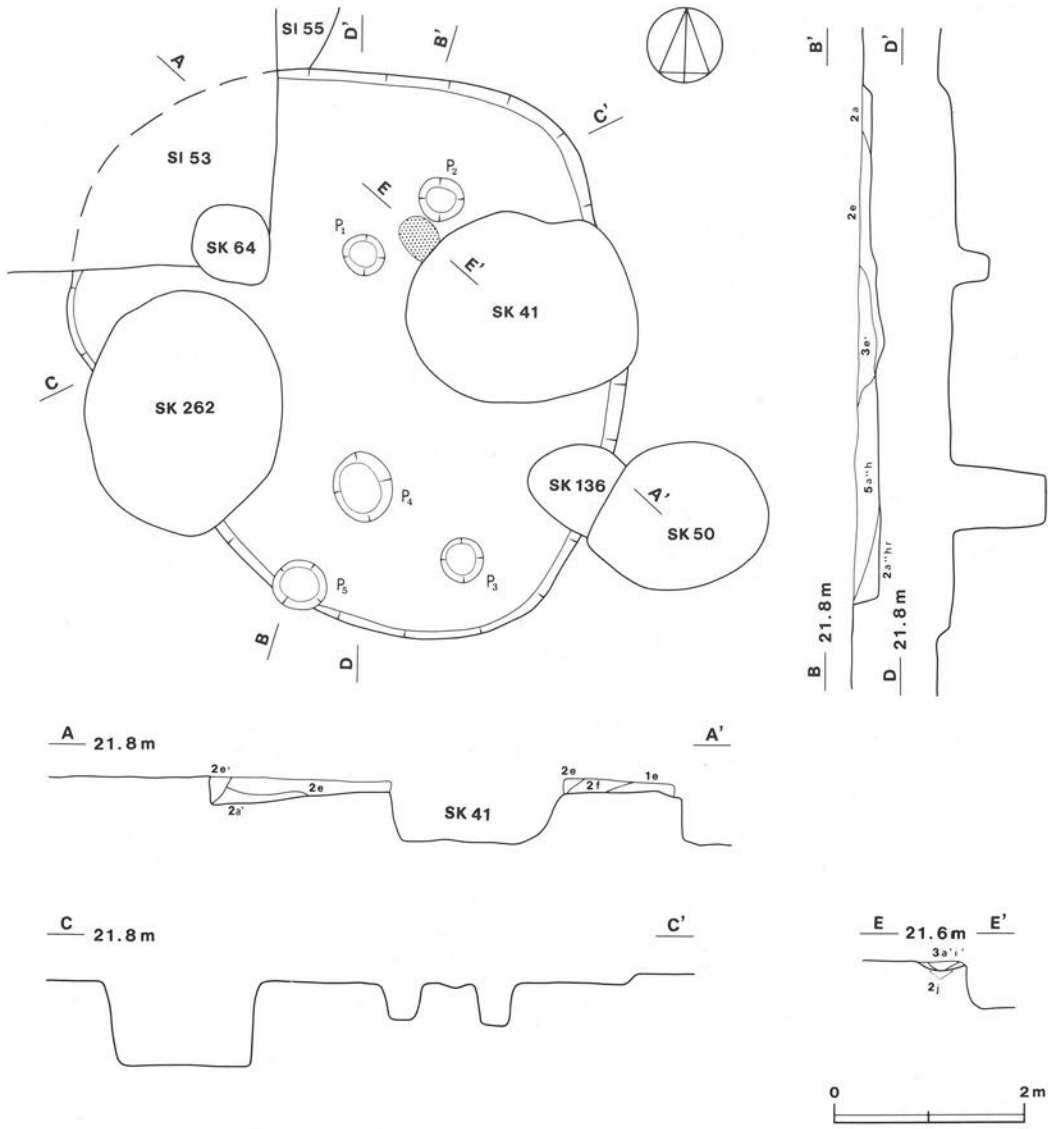
本跡の存在するD2・D3区には，住居跡や土坑が密集し，重複関係にあるものが多く，また，農道が本跡を南東方向に横切るように存在している。当初，調査を約半分実施し，その後農道を取り払い，残りを調査した。本跡は，当遺跡の中央部よりやや南西側D2a$_0$区を中心に確認され，北西壁は縄文時代中期の第53・55号住居跡に掘り込まれ，東壁は第41号土坑，北西側は第64号土坑，南東側は第136号土坑，西壁は第262号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

平面形は北西壁部を掘り過ぎたため，ややいびつであるが，本来は楕円形を呈し，長径方向はN－33°－Wを指し，規模は長径が6ｍ，短径が推定で5ｍと思われる。北西・東・西・南東壁は住居跡や土坑に掘り込まれて存在しないが，残存壁はロームで硬く，ほぼ垂直に立ち上がり，壁高は約20cmである。床面も壁同様に住居跡や土坑にそれぞれ掘り込まれているが，残存する床面はほぼ平坦で，全体的に硬いロームで，炉周辺は踏まれて特に硬い。

炉跡は中央よりも北側に位置し，長径40cm・短径32cmの楕円形を呈するものと考えられ，床面を皿状に8cm掘り込んでいる地床炉である。炉内は，焼土粒子・焼土小ブロック・ローム粒子を微量から少量含む暗褐色土等が充満し，炉床は硬く焼けている。南東端は，第41号土坑に掘られている。ピットは，5か所検出され，北側に炉跡をはさんで2か所，南側に3か所存在する。そのほかにもピットがあるものと考えられるが，住居跡や土坑に掘られて検出できなかった。ピットは，不規則でいずれが主柱穴か不明である。

覆土は5層から成り，ローム粒子少量・焼土粒子・炭化粒子を微量含む黒褐色土，ローム粒子多量・炭火粒子を微量含む暗褐色土，ローム粒子中量・焼土粒子を微量含む極暗褐色土，壁際にはローム粒子少量とローム粒子中量・焼土粒子・炭化粒子を微量含む暗褐色土が堆積している。

遺物は，南側の覆土中層・下層を中心にして縄文時代前期の黒浜式の小形深鉢形土器（第21図1）と土器片476片が出土している。そのほか浮島式の土器片2片，石皿と凹石を兼用した石器（第188図57）1点，打製石斧1点，阿玉台式の土器片14片，加曽利E式の土器片256片が出土している。



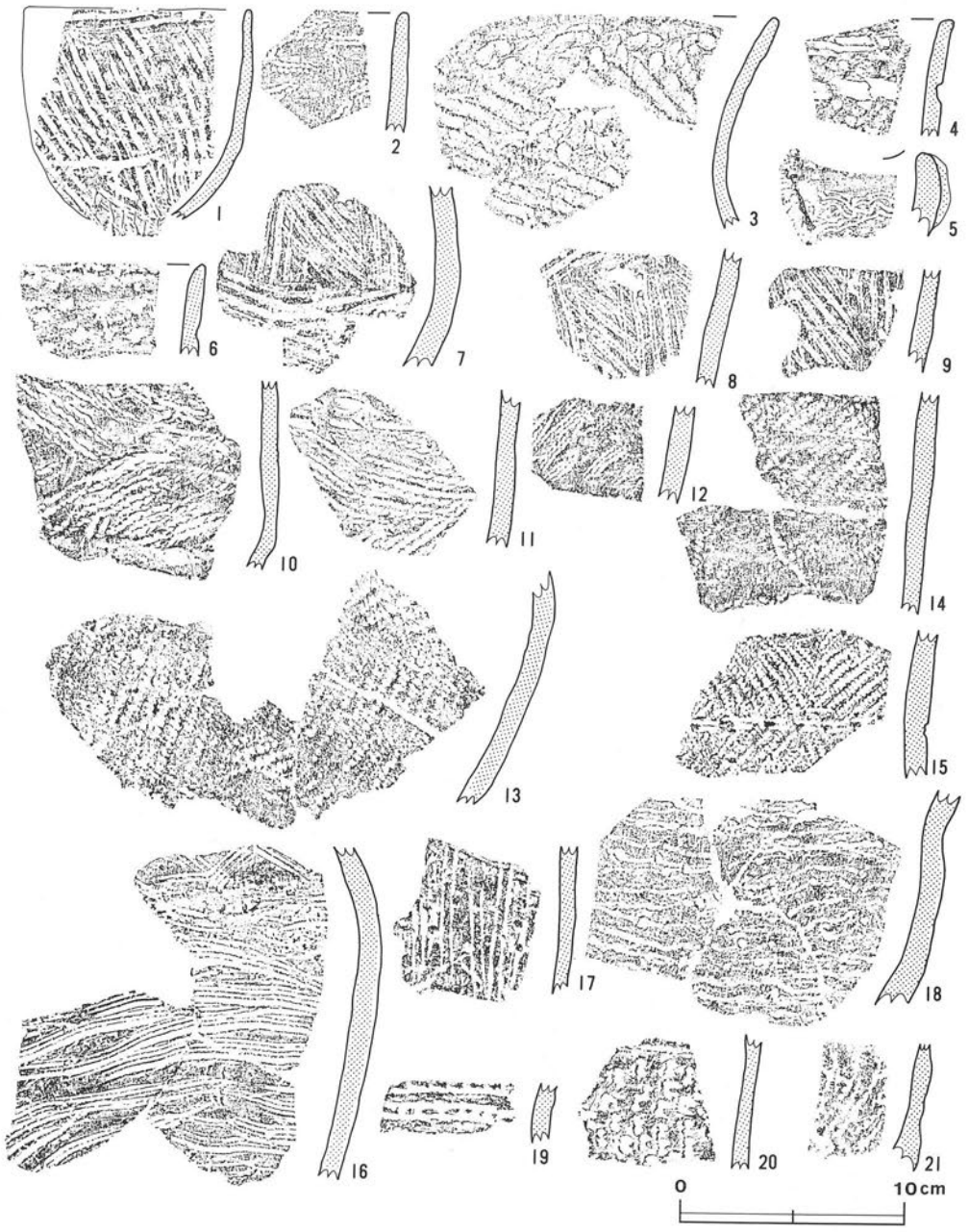
第20図　第54号住居跡実測図

出土土器

第54号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備　考
第21図 1	小形深鉢形 土器 黒　浜	A(10.2) B (9.5)	口縁部は，胴部上位から垂直に，胴部は下位から内彎気味に立ち上がっている。底部は欠損している。器面全体に無節の $\frac{1}{L}$ の２本組の撚糸で２～４単位の回転圧痕文が浅く施文されている。内面は横位のナデが加えられている。	砂粒・雲母・繊維 褐灰色 普通	40%　４片 P144

第21図２～21は，第54号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。２～６は口縁部片で，２は無節の２本組の撚糸文が異方向に雑に施され，３は撚りの太い無節Ｒの縄文が斜位に施され



第21図　第54号住居跡出土土器実測図・拓影図

ている。4は縄文を斜位に施し，更に横位の沈線と横位からの刺突文が施されている。5は波状口縁を呈し，口縁部に小突起を備え，更に2～3本単位の沈線による波状文が施されている。6は刺突文が横位に施されている。

7～21は胴部片で，7～11は2本組の撚糸文である。7～9は撚りが細く，密である。7・8

10は異方向に，９は斜位に施されている。11は菱形を構成し，その上方に短く太い刺突文を横位に施している。12は３本組の撚糸文を斜位に施されている。13～15は単節の縄文が施され，13・14はＬＲの縄文を斜位に施しているのが不明瞭ながら窺える。15は単節ＲＬとＬＲの縄文が施され，更に，半截竹管による右方向から刺突された１本の刺突文が施されている。16～18は沈線文が施され，16は上側に山形文を作り，４本単位の沈線文が器面全体に横位に施されている。17は縦位に施されている。18は横位に押引き，一部強く押圧して節目状にしている。19・20は刺突文が施され，19は半截竹管によって施文されている。21はアナダラ属の貝殻腹縁文が斜位に施されている。

第76号住居跡（第22図）

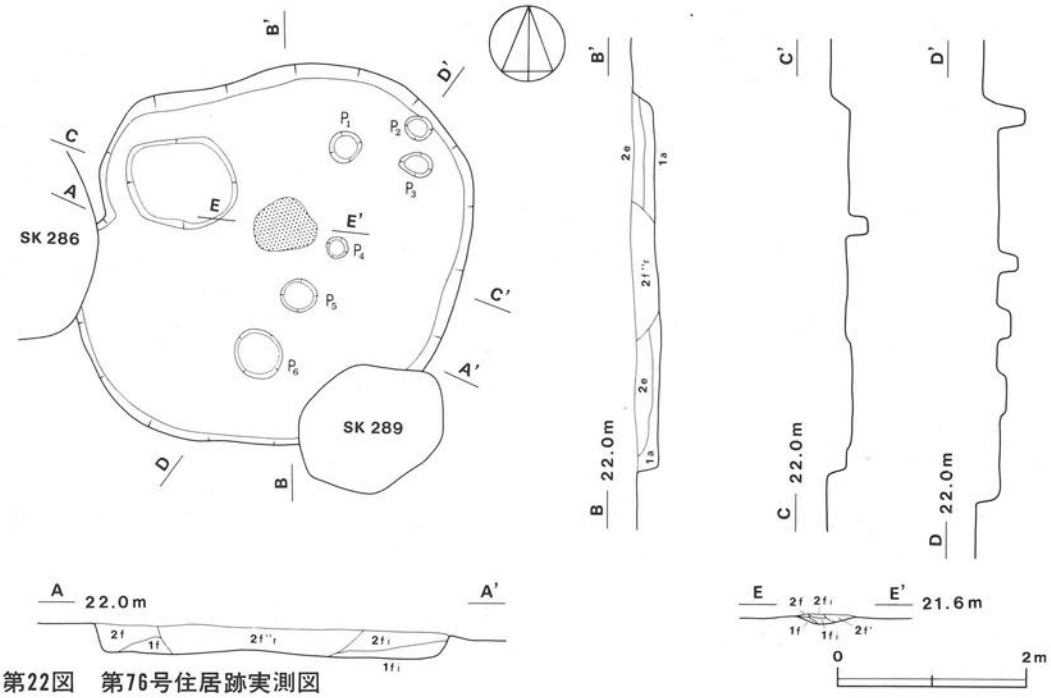
本跡はD2a$_7$区を中心に確認され第54号住居跡の７ｍ西側に存在している。西壁は第286号土坑，南壁は第289号土坑に掘られている。

平面形はやや不整な円形を呈し，長径方向はＮ－50°－Ｗを指し，規模は長径4.6ｍ・短径4.2ｍである。壁はロームで硬く，ほぼ垂直に立ち上がり，壁高は20～30cmである。床面はほぼ平坦で硬いロームである。北西側に長径120cm・短径100cm・深さ５cmほどの攪乱がある。床面も壁同様土坑に掘り込まれている。

炉跡は，中央からわずかに北側に位置し，長径70cm・短径50cmの楕円形を呈し，皿状に12cmほど掘り込んでいる地床炉である。炉内には，焼土粒子・ローム粒子を微量から少量・焼土小ブロックを微量含む暗褐色土や，焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子を微量含む褐色土が堆積しているが，炉床はそれほど焼けていない。ピットは６か所検出され，北壁寄りの３か所と炉跡の東側から南西方向へほぼ等間隔で直線的に３か所並んでいる。ピットの規模は，長径28～56cm・短径20～50cm，深さ12～30cmであり，全体的に浅い。ピットの深さでは，P_2・P_3・P_4が20～30cmと揃っており，主柱穴はP_2・P_3・P_4が考えられる。P_1・P_5・P_6は不明のピットである。

覆土はほぼ２層から成り，上層はローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む暗褐色土，下層はローム粒子・焼土粒子・焼土小ブロックを微量含む暗褐色土と，ローム粒子微量を含む褐色土等が堆積し，中央部はローム粒子・焼土粒子少量・炭化粒子を微量含む暗褐色土の堆積する土坑状の落ち込みに攪乱を受けている。

遺物は，西側の覆土中層から縄文時代前期黒浜式の深鉢形土器の口縁部から胴上半部（第23図２）と炉跡の北西側から底部から胴下半部（第23図４）が出土している。また，炉跡の周辺の覆土上層・中層から黒浜式の土器片151片，磨石２点・石核１点が出土している。更に，覆土上層から縄文中期の阿玉台式の土器片３片，加曽利Ｅ式の土器片113片，曽利式の土器片１片が出土している。



第22図　第76号住居跡実測図

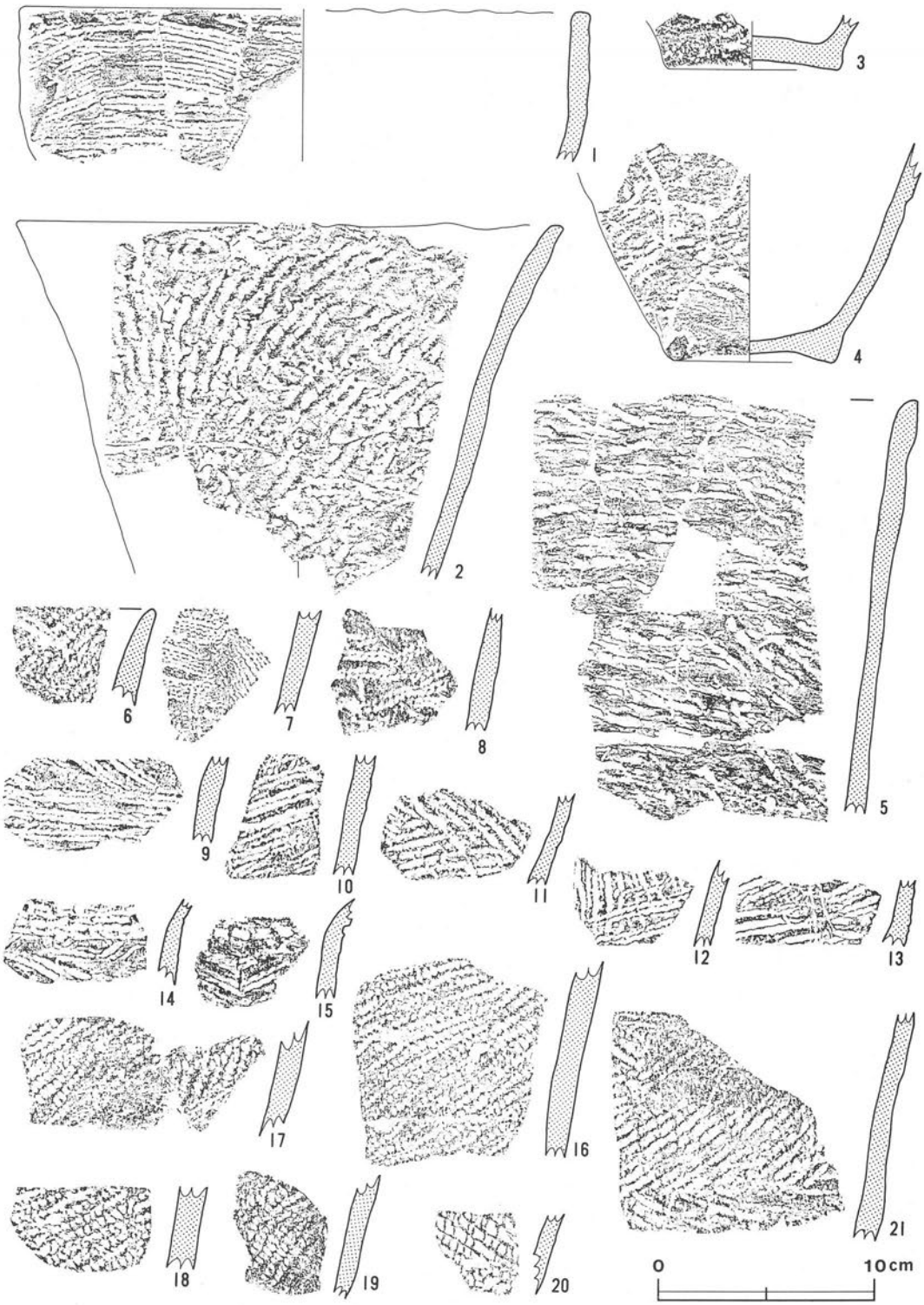
出土土器

第76号住居跡出土土器観察表

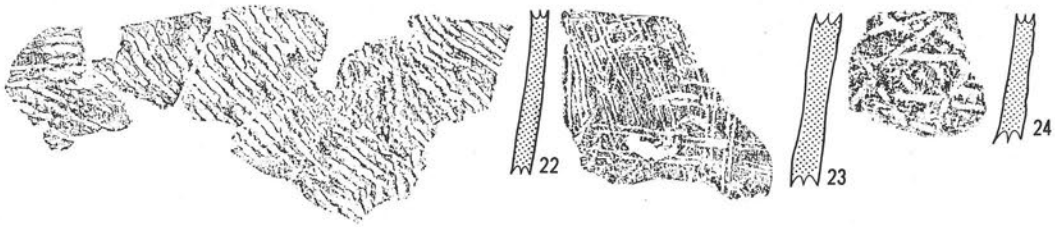
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第23図 1	深鉢形土器 黒浜	A(26.5) B (7.0)	口縁部片で，口縁部は胴部からほぼ垂直に立ち上がっている。器面に無節のLRの2本組の撚糸で2～3単位の回転圧痕文が施されている。内面は横位のナデが施されている。	砂粒・雲母・繊維 にぶい黄橙色 普通	10%　11片 P108
2	深鉢形土器 黒浜	A(25.5) B(16.4)	口縁部は，胴部上位から緩やかに外反している。胴部は下位から直線的に外傾している。胴部下位以下は欠損している。器面全体に太い無節Lの縄文を横位と斜位に回転している。	砂粒・雲母・繊維 黒褐色 普通	20%　4片 P107
3	深鉢形土器 黒浜	B (2.2) C 8.2	底部から胴部にかけての破片である。底部はやや上げ底を呈し，胴部は底部から外傾しながら立ち上がっている。胴部には単節LRの縄文が斜位に施されている。	砂粒・石英・繊維 橙色 普通	10%　11片 P248
4	深鉢形土器 黒浜	B(10.0) C 7.9	底部は上げ底をしており，やや薄い。胴部は底部からやや外傾気味に立ち上がっている。器面が摩滅し，やや不明瞭であるが，太目の無節Lの縄文を横位に回転しているものとみられる。底部直上は横位のナデが加えられている。内面はナデが施されている。	砂粒・繊維 極暗赤褐色 やや不良	20%　11片 P109

第23・24図5～24は，第76号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。5は口縁部から胴部にかけての破片で，軽く外傾している。撚りの太い無節の1本の撚糸文が横位や斜位に施されている。6も口縁部片で，単節LRの縄文が斜位に施されている。

7～24は胴部片である。7～15は撚糸文で，7は5本組の撚糸文を横位や斜位に施している。8～15は2本組の撚糸文で，8は斜位や縦位に明瞭に施され，9～13はやや不鮮明であるが斜位に施されている。14は胴部上位に半截竹管文が横位に施されている。15は上方に刺突文が認めら



第23図　第76号住居跡出土土器実測図・拓影図(1)



第24図　第76号住居跡出土土器拓影図(2)　　0　10cm

れる。16～20は単節の縄文を施している。16～19はＬＲの縄文を斜位に施し，20はＲＬの縄文を斜位に施している。21・22は無節の縄文で，21はＬとＲの縄文で羽状を構成し，22はＲの縄文を斜位に施している。23・24は沈線文で，23は細い沈線，24は太い沈線が異方向に施されている。

(2)　中　期

阿玉台期

第26号住居跡（第25図）

本跡は，E2f$_4$区を中心にして確認され，調査エリヤの南西端の台地縁辺部に位置している。加曽利Ｅ期の第28号住居跡と重複し，本跡が古い。

平面形は楕円形を呈し，長径方向はＮ－42°－Ｅを指し，規模は長径３ｍ・短径2.5ｍと推定される。なお，本跡は当遺跡においては小形の住居跡である。壁はロームで硬く，東壁から南東壁は垂直に，その他の壁はほぼ垂直に立ち上がり，壁高は44～50cmである。床面は平坦で，硬いロームであるが，P$_1$の周辺は壁近辺より踏み固められて特に硬く締まっている。

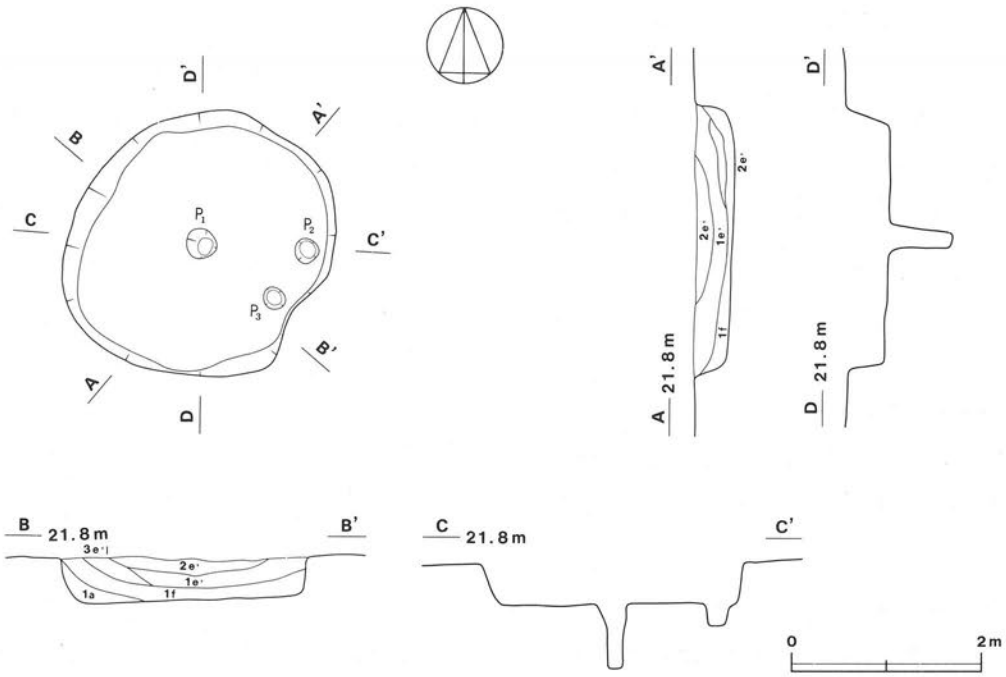
炉跡は検出できなかった。ピットは３か所検出され，主柱穴はP$_1$・P$_3$と考えられる。P$_1$は中央，P$_2$は東壁ぎわ，P$_3$は南東壁ぎわに位置し，規模は直径25～32cm，深さ24～68cmである。P$_1$は68cmの深さを有する。P$_2$は本跡に伴わないピットで，第28号住居跡のピットと思われる。

覆土は４～５層から成り，上層はローム粒子少量・焼土粒子・炭化粒子を微量含む暗褐色土，下層はローム粒子・焼土粒子を微量含む褐色土がレンズ状に自然堆積している。なお，本跡の西側の覆土上層には，土器埋設炉が検出されたが，第28号住居跡に伴うものと考えられる。

遺物は，東壁下の床面と覆土下層を中心に阿玉台式土器片51片出土したが，復元できなかった。覆土上・中層から土器片錘（第180図32）１点と，打製石斧（第187図34）・敲石（第190図141）各１点，及び黒浜式の土器片10片が出土している。

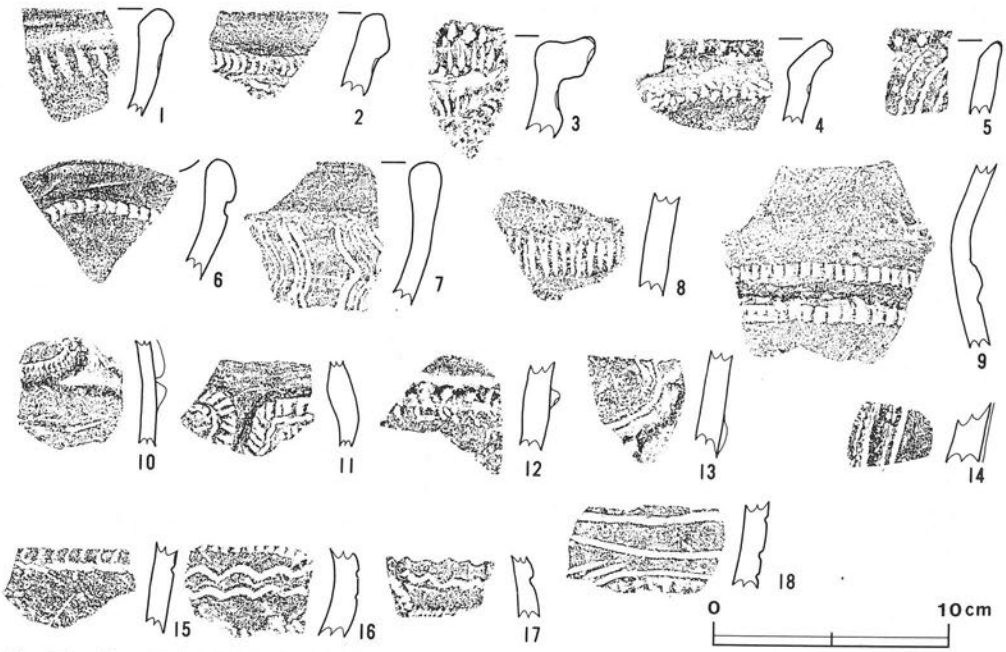
出土土器

第26図１～18は，第26号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。１～７は口縁部片である。１～３は爪形文が施され，３は口縁部が強く外傾し，口縁部の２か所に圧痕文と爪形文が



第25図　第26号住居跡実測図

横位に施されている。4は口唇部直下に雑な爪形文が2～3段施され，口唇部に間隔の粗い圧痕文が施されている。5・6は結節沈線文が施され，5は口唇部に圧痕文が認められる。7は3～



第26図　第26号住居跡出土土器拓影図

4本の蛇行沈線文が施されている。

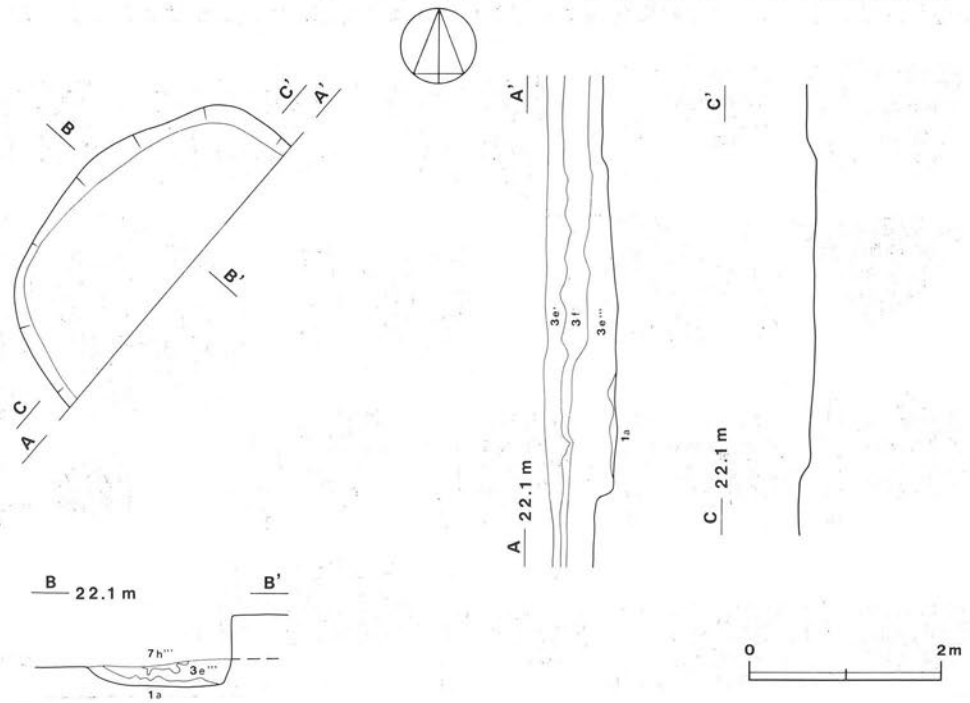
8～18は胴部片である。8は密な爪形文が施されている。9は隆帯が施され，その両側に結節沈線文が施されている。10～14は隆帯が施され，10・11は隆帯に沿って1列の結節沈線文が，12は隆帯と隆帯直下に雑な刺突文が施されている。13は隆帯に沿って押引文が，14は隆帯の両側に刺突文が施されている。15～18は沈線文が施され，15は爪形文も窺え，16は結節沈線文の区画内に2列の波状文が，17は1列の波状文が施されている。18は3本の沈線が横位に施され，下側に結節沈線文がわずかに認められる。

第44号住居跡（第27図）

本跡は，当遺跡のほぼ中央C3i$_9$区を中心に確認され，南東側の調査エリヤ境界に位置するため，本跡の南東側約半分は調査エリヤ外となり調査ができなかった。第50号住居跡の6m東側に存在している。

平面形は調査した形状から不整円形ないしは楕円形を呈するものと考えられる。長径方向は不明で，調査した範囲の最大径は3.6mである。壁はロームで硬く，ゆるやかに立ち上がり，壁高は約20cmである。北東壁の一部は攪乱を受けている。床面は平坦で，硬いロームであるが，特に壁周辺を除いて踏み固められて硬く締まっている。

炉跡と柱穴は検出できなかった。ピットは調査エリヤ外に存在しているものと思われる。



第27図　第44号住居跡実測図

覆土はほぼ2層から成り，上層から下層にかけてローム粒子・炭化粒子を微量・焼土粒子を少量含む黒褐色土とローム粒子を微量含む褐色土が自然堆積している。なお，北西側の覆土上層は，焼土粒子を多量含む暗赤褐色土の攪乱が認められる。

遺物は，西側の覆土中層から阿玉台式土器片の把手（第28図1・2）2個が，北西側の覆土上・中層から阿玉台式の土器片35片と土器片錘（第180図47）1点が，覆土上層から加曽利E式の土器片99片が出土している。

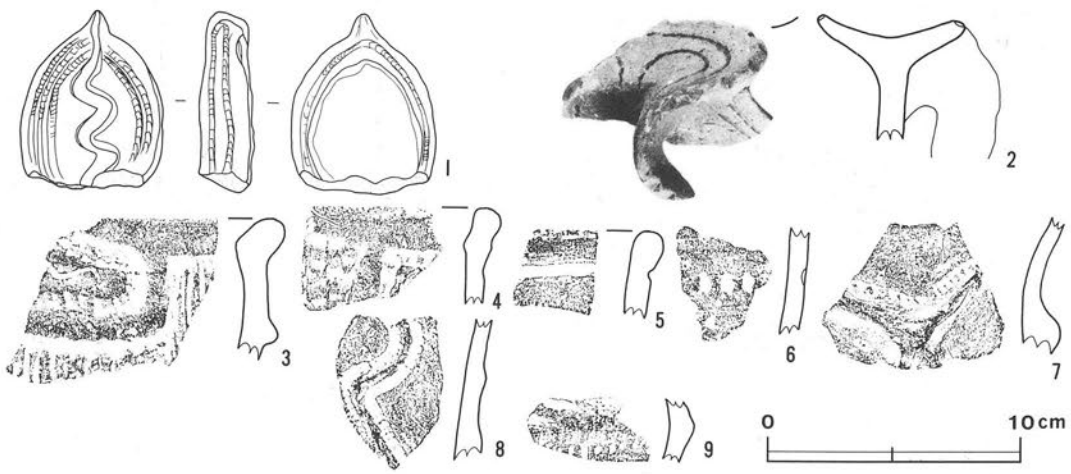
出土土器

第44号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第28図 1	深鉢形土器 勝坂系	B (7.3)	把手の一部分である。木葉形を呈し，外面の中央に粘土紐が蛇行するように貼付され，蛇を表現しているものと思われる。把手に沿って，非常に細い結節沈線文が2～3列施されている。内面は，把手に沿って1列の非常に細い結節沈線文を有する隆帯が施され，更に，把手の口唇部にも同じ結節沈線文が2列施されている。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	5% 1片 P293
2	深鉢形土器 阿玉台	B (6.5)	把手の部分である。外周に沿って2列の結節沈線文が施され，口唇部には幅の広いキザミ目が施されている。	砂粒・長石・雲母 橙色 良好	5% 1片

第28図3～9は，第44号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。3～5は口縁部片である。3は隆帯による楕円文が区画され，区画内には隆帯に沿って2列と1列の結節沈線文が施され，更に，波状沈線文が横位に施されている。4は隆帯に沿って1列の結節沈線文が施されている。5は口縁部直下に沈線が横位に施されている。

6～9は胴部片で，6は爪形文が1段横位に施され，7は隆帯に沿って，8は隆帯の両側に結節沈線文が施されている。9は隆帯に沿って刺突文が施されている。



第28図　第44号住居跡出土土器実測図・拓影図

第50号住居跡（第29図）

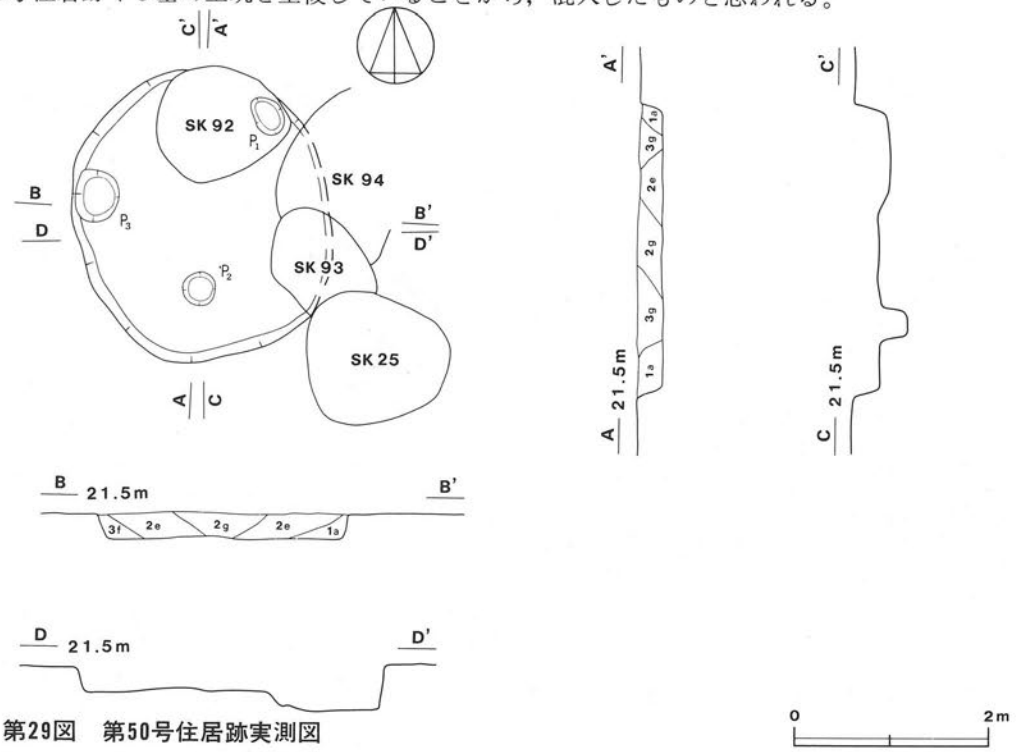
本跡は，当遺跡の中央C3i$_6$区を中心に確認され，第60号住居跡と隣接している。加曽利E期の第38号住居跡と北側が重複し，第92・93・94号土坑に本跡の北側・南東側・東側が掘り込まれている。

平面形は残存部から推定して円形を呈するものと思われ，長径方向はN－27°－Wを指し，規模は長径3m・短径2.8mである。壁はロームで硬く，外傾しながら立ち上がり，壁高は約30cmである。床面はほぼ平坦で，硬いロームである。

炉跡は検出できなかった。ピットは3か所検出され，位置や規模からP$_2$が主柱穴と考えられる。P$_2$は南側に位置し，規模は直径35cm，深さ30cmである。P$_1$は楕円形を呈し，長径50cm・短径30cm・深さ47cmで，第92号土坑に伴うピットと考えられる。P$_3$は長径55cm・短径45cm・深さ52cmの規模をもつが，本跡に伴うものではなく，第38号住居跡のピットと考えられる。

覆土は，一部攪乱を受けているものの，ほぼ4～5層から成り，中央部はローム粒子・炭化粒子を微量含む暗褐色土，壁ぎわはローム粒子・焼土粒子を微量含む黒褐色土とローム粒子を微量含む褐色土が堆積している。

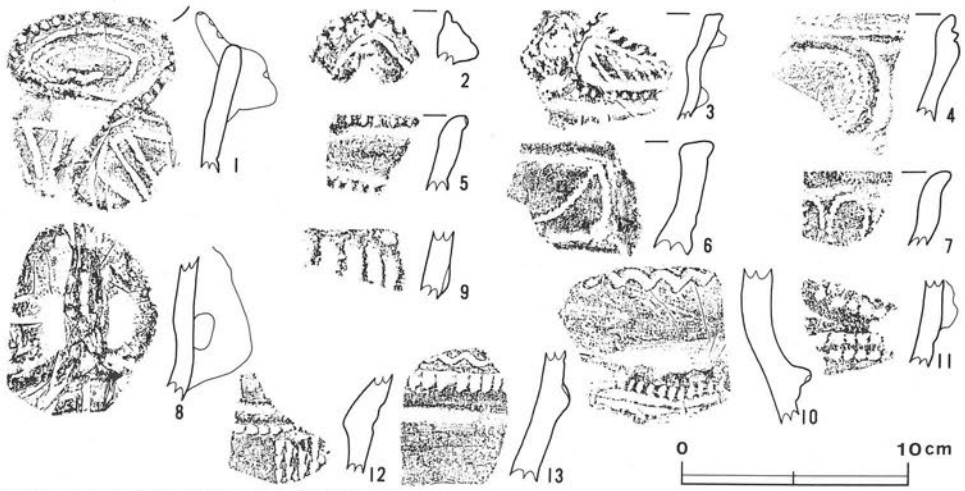
遺物は，中央の覆土上・中層から阿玉台式土器片34片が出土したが，接合・復元はできなかった。覆土全域から，黒浜式土器片5片と加曽利E式土器片50片が検出されたが，加曽利E期の第38号住居跡や3基の土坑と重複していることから，混入したものと思われる。



第29図　第50号住居跡実測図

出土土器

第30図１～13は，第50号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。１は楕円形状を呈する把手で，２列の結節沈線文が楕円形に施され，１列は口縁部に至り，周縁には押圧が認められる。楕円形の内側は無文である。２は把手の小破片であるが，結節沈線文が山形状に１列施され，周縁に押圧が施されている。３～８は口縁部片である。３は押圧のみられる隆帯による楕円文で区画され，区画内に隆帯に沿って結節沈線文が施され，更に，結節沈線文が５本斜位に施されている。内面に稜が認められる。４～６は隆帯による楕円文で区画され，４は隆帯に沿って内側に１列の結節沈線文が施され，また，口唇直下に１列の結節沈線文が施されている。５は圧痕を有する隆帯による楕円文で区画され，隆帯に沿って内側に結節沈線文が１列施されている。６は小突起を備え，小突起と隆帯により楕円文を構成している。隆帯の内側に１列の結節沈線文を沿わせ，更に，口の広い「U」字文が施されている。７は口唇部直下に結節沈線文が逆「U」字形に施されている。８は１列の刺突を施した橋状把手で，把手から隆帯に続き，隆帯に沿って両側にわずかに結節沈線文が窺える。９は幅の広い爪形文が横位に１段施され，10は隆帯上に下からの刺突文を１列横位に施している。更に，その直下に２本の沈線文が認められる。隆帯の上方には波状沈線文が１本横位に施されている。11は隆帯に沿って１列の刺突文が認められ，隆帯下に２列の刺突文が横位に施されている。12は横位に２列，縦位に４列の結節沈線文が施されている。13は横位の隆帯を有し，隆帯に沿って上方に１列の結節沈線文と１本の波状沈線文が施されている。



第30図　第50号住居跡出土土器拓影図

第51号住居跡（第31図）

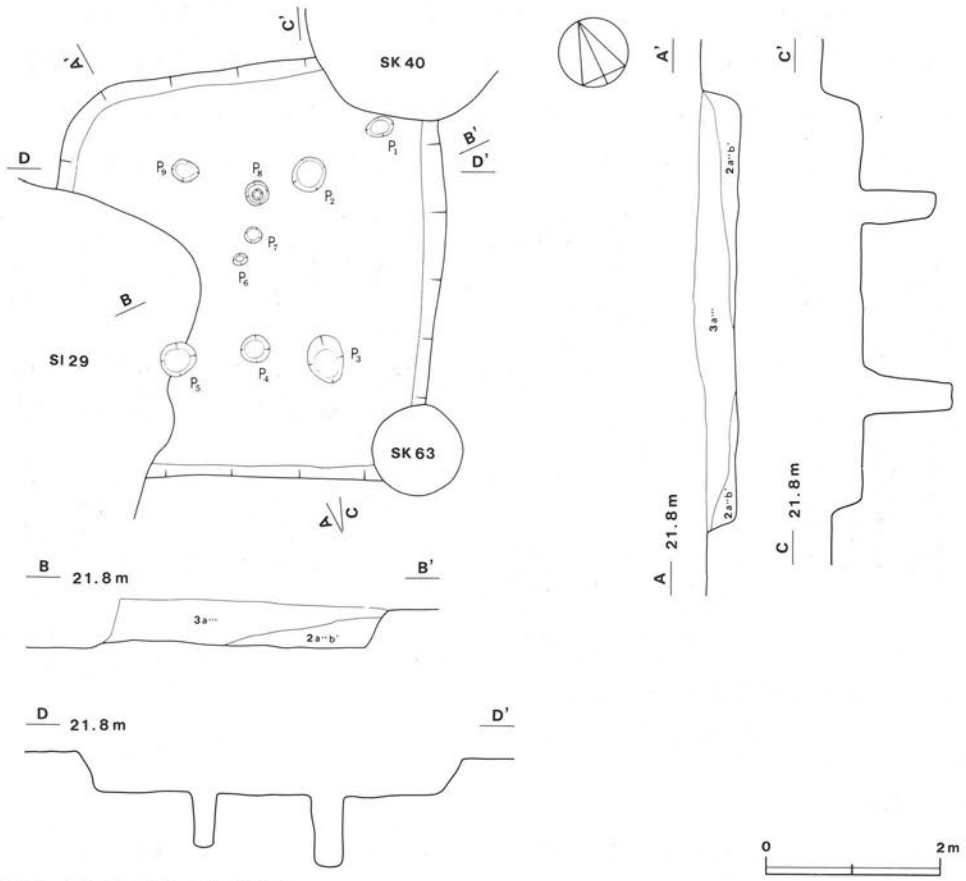
本跡は，当遺跡のほぼ中央部C3f$_3$区中心に確認され，第52号住居跡の６ｍ東側に存在している。古墳時代の第29号住居跡に西側を掘り込まれ，縄文時代中期加曽利Ｅ期の第40・63号土坑に北東

コーナーと南コーナーを掘り込まれている。

平面形は残存壁から推定してやや不整隅丸方形を呈するものと考えられる。長軸方向はN－26°－Eを指し，規模は長軸4.8m・短軸が推定で4.5mである。残存壁はロームで硬く，東壁・南壁・西壁は外傾しながら，北壁はほぼ垂直にそれぞれ立ち上がり，壁高は35～45cmである。床面はほぼ平坦で，硬いロームであり，主柱穴のP_2・P_3・P_5・P_9を結ぶ内側は踏み固められて特に硬く締まっている。西側の床面の一部は，第29号住居跡に掘り込まれている。

炉跡は検出できなかった。ピットは9か所検出され，配列や規模からP_2・P_3・P_5・P_9が主柱穴と考えられる。P_3は長径55cm・短径40cmの楕円形を呈し，深さ100cmで本跡の中では最大規模を有する。P_9は長径30cm・短径25cmの楕円形を呈し，深さ60cmの最小のピットである。P_4は，主柱穴P_3とP_5の間のやや内側に，P_8はP_2とP_9の間のやや内側に位置し，P_4とP_8は対になる。P_1・P_4・P_8は，支柱穴になるものと考えられる。P_6・P_7は小ピットで，性格は不明である。

遺物は，縄文時代中期阿玉台式の土器片を中心に多量出土している。大形深鉢形土器（第32図1），中央部の覆土中・上層から破片で出土し，半完形に復元したものである。深鉢形土器（第



第31図　第51号住居跡実測図

32図３・４・５）の３個体は破片で出土し，半完形に復元できた。小形の深鉢形土器（第32図２）は，覆土中層とP_3の覆土中から出土したものが接合してほぼ完形に復元できたものである。また，中央部覆土上層を中心として阿玉台式土器片659片が出土しているが，全体的にみると投棄されたものと考えられる。そのほかに，覆土上・中層から土器片錘（第181図63～71）９点・敲石（第190図150）１点・磨石１点・加曽利Ｅ式土器片97片・茅山式土器片１片・黒浜式土器片71片・諸磯式土器片10片が出土している。これらの土器片は混入と考えられる。

出土土器

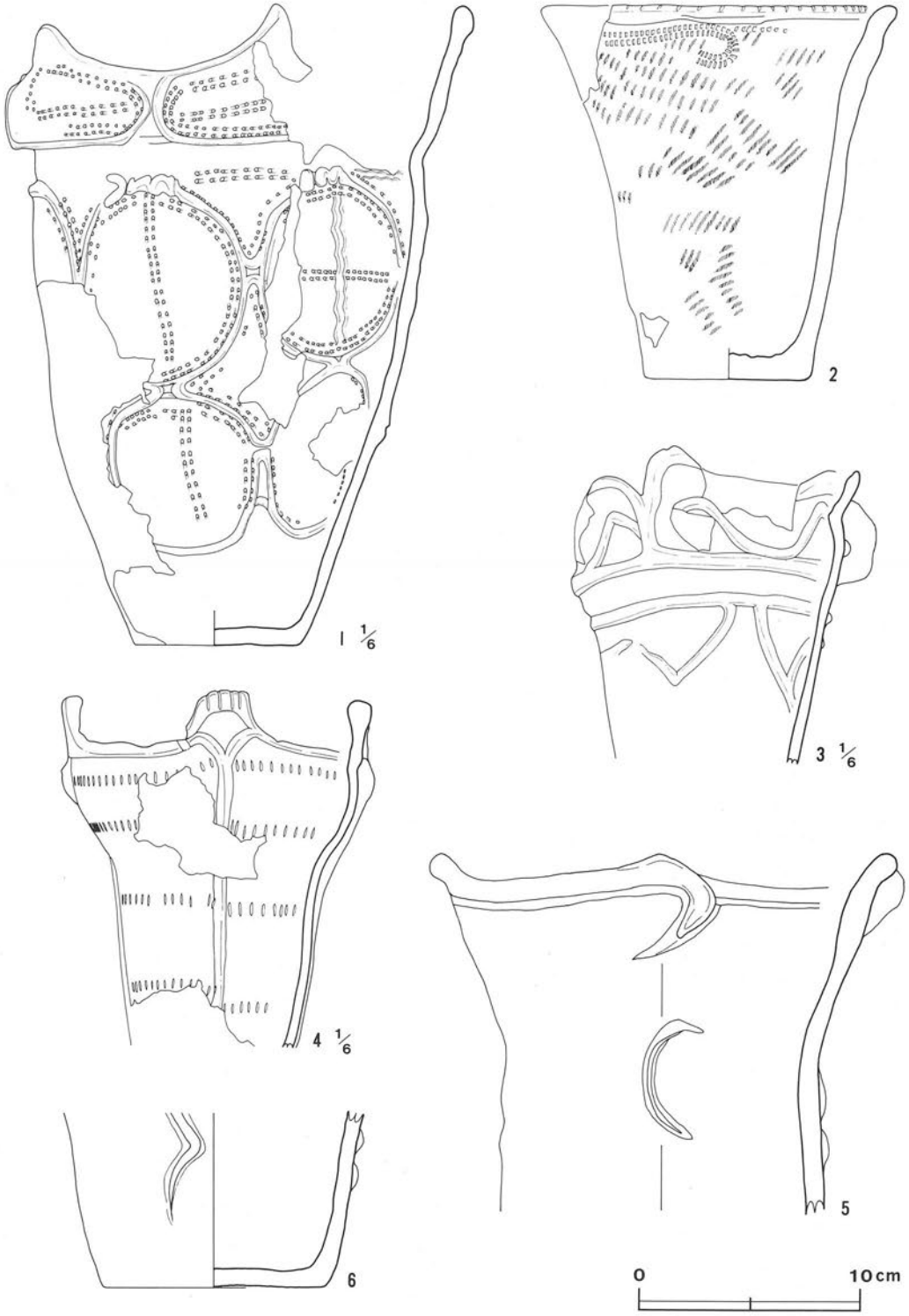
第51号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼土・色調	備考
第32図 1	深鉢形土器 阿玉台	A(46.0) B 58.7 C 15.0	底部は平底を呈し，胴部は底部から外傾しながら立ち上がり，中位から内彎気味に立ち上がっている。波状を呈する口縁部は内彎気味にやや外側に開いている。口縁部内面には２本の稜を有している。口縁部と胴部は縦半分が欠損している。口縁部文様帯は４単位の小突起を有するものと思われる。突起との間には隆帯によって２個の楕円文を構成し，隆帯に沿って２列の刺突文が施され，更に楕円区画内にも２列の刺突文が斜位に施されている。胴部文様帯は，口縁直下に２列の波状沈線と２列の刺突文が間を置いて横に施されている。その下側に隆帯による円文が８個付されているものと考えられ，隆帯によって結合している。隆帯の上部には蛇行している粘土紐が貼り付けられている。更に下段は隆帯によって２段に１単位１対の円文が４単位構成され，隆帯で連結されている。上段の円文の隆帯に沿って両側に２列の刺突文が施され，円文の区画内には縦位の２列の刺突文，２列の蛇行沈線文，及び２列の刺突文が施されている。下段の円文の区画内には２列の刺突文と蛇行沈線文が縦位に施されている。	砂粒・石英・長石・雲母 にぶい褐色 普通	50%　58片 P10
2	小形深鉢形土器 大木7b	A 16.0 B 17.0 C 7.5	底部は平底を呈し，胴部は底部から直線的にやや外傾し，口縁部は胴部上位から外反しながら立ち上がっている。口唇部にキザミ目を有し，器面の文様はやや摩滅して不明瞭な部分もあるが，無節Ｌの縄文が斜位に器面全体に展開されている。口唇部直下には縄文の地文の上に２列の結節沈線文が横位に巡り，一部横位から渦巻状に施文されている。内面は横位のナデが施されている。	砂粒・雲母・長石・石英 にぶい橙色 普通	80%　19片 P12
3	深鉢形土器 阿玉台	A 26.0 B(26.5)	胴部は中位からほぼ垂直に立ち上がり，口縁部はやや内彎し，内面に稜を有している。口縁部は大小１組とした４単位の山形状を呈する波状口縁と考えられ，波頂下に雑な穴を有する突起を設けて区画している。突起間の下側には横位の隆帯を施し，楕円形状の区画内に隆帯による「〜」状の文様が付けられている。胴部には横位の隆帯が施され，変形の「Ｙ」字状を呈する断面三角形の隆帯と接続している。	砂粒・雲母・長石 にぶい褐色 普通	30%　17片 P９
4	深鉢形土器 阿玉台	A 28.3 B(32.5)	胴部は円筒形を呈し，４単位の把手をもつ口縁部は内彎気味に立ち上がり，口唇直下で直立している。口縁部内面には明瞭な稜を有している。胴部下位と底部は欠損している。把手の波頂部は平坦で，３～４本の外部まで及ぶキザミ目が施されている。把手の下には４単位の断面三角形を呈する「Ｙ」字状の隆帯が施され，隆帯の合わせ目は突起状を呈し，隆帯は胴部下位まで垂下している。器面には４段の爪形文が横位に施され，器外面の把手を除いた口唇直下になぞりが認められる。器外面は縦位，内面は横位のナデが加えられている。	砂粒・雲母・長石・石英 にぶい赤褐色 普通	80%　42片 P11
5	深鉢形土器 阿玉台	A(21.3) B(21.1)	口縁部は胴部から緩やかに外反しながら立ち上がり，波状を呈している。口唇直下に隆帯を有し，口縁部は波頂から渦巻状の隆帯が小突起状に施されている。胴部は緩やかな曲線を呈する断面三角形の隆帯を向い合せて対にしている。	砂粒・雲母・長石・石英 褐色 良好	30%　６片 P87

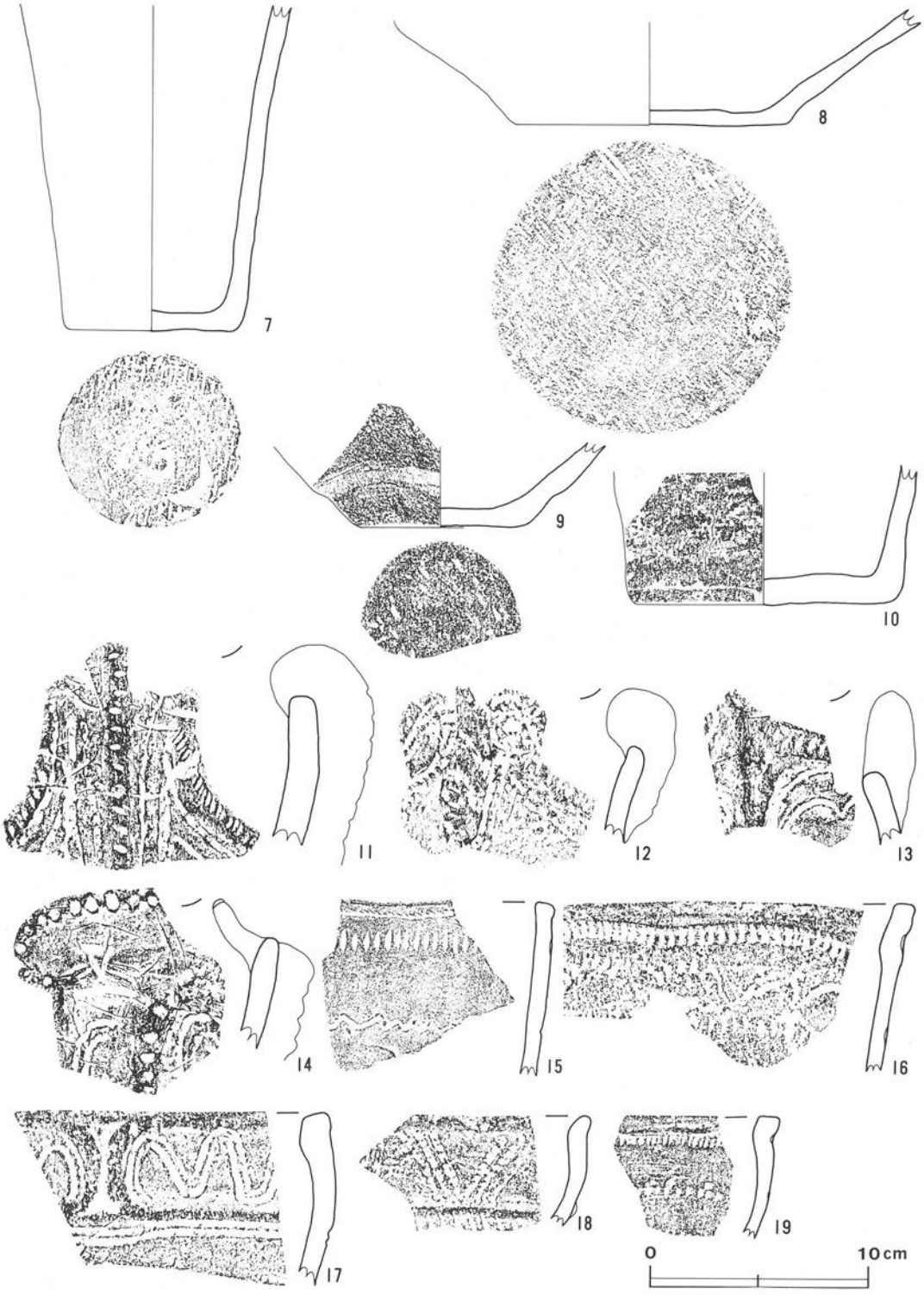
図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備　考
第32図 6	深鉢形土器 阿玉台	B (8.0) C 10.0	平底を呈し，胴部は底部から直線的に外傾気味に立ち上がっている。胴部下位に断面三角形の隆帯が垂下しているのが窺える。	砂粒・雲母・石英 にぶい橙色 普通	20%　3片 P135
第33図 7	深鉢形土器 阿玉台	B(15.2) C 8.3	胴部は平底の底部から直線的に緩く外反気味に立ち上がっている。胴部は無文で，底部は網代痕がわずかに認められる。胴部外面縦位のナデ，底部直上横位のナデ，内面は横位のナデが認められる。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 良好	50%　10片 P86
8	浅鉢形土器 阿玉台	B (5.5) C 13.0	平底の底部から直線的に大きく開いている。底部に網代痕が認められる。内面はていねいな横位のナデが施されている。	砂粒・雲母・石英 長石　にぶい橙色 普通	10%　1片 P133
9	浅鉢形土器 阿玉台	B (3.9) C 7.2	底部は平底を呈し，胴部は底部から強く外傾しながら立ち上がっている。胴部は無文で，底部には網代痕がわずかに残っているのが窺える。	砂粒・雲母・石英 長石　にぶい橙色 普通	10%　1片 P202
10	深鉢形土器 阿玉台	B (6.2) C 12.0	底部は平底を呈し，胴部は底部からほぼ直立して立ち上がっている。胴部は無文である。	砂粒・雲母・長石 明赤褐色 普通	20%　3片 P200

第33・34図11～28は，第51号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。11～22は口縁部片である。11～14は波状を呈し，11は波頂部から背の高い隆帯を垂下させ，隆帯の上端面に押圧を施している。また，側面には2列の刺突文を施し，波状部の口唇部にはキザミ目を施している。更に，垂下した隆帯の右側の付け根に2列の押引き気味の沈線と，左側の付け根に2列の結節沈線文を施している。12はひねりを加えた隆帯を波頂部から垂下させ，隆帯の上端面に斜位の大きめなキザミ目を施している。隆帯の左側下方には2列の結節沈線文を，右側は隆帯に沿って2列の結節沈線文を施している。右側波状の口唇部には2列の結節沈線文を，右側の波状口唇部にはキザミ目を施している。13は口唇部直下に斜位の爪形文が，その下側に円形の刺突文が施され，更に，沈線によって「〜」状に施されている。14は帯状突起の頂部に幅の広い圧痕を有し，突起には2列の結節沈線文が施されている。15は口唇部直下に斜方向からの連続刺突文と爪形文が施され，下方に1本の波状文が施されている。16～19は結節沈線文が施されている。16は口唇部直下に幅の広い結節沈線文が1列密に施され，また，その下方に横位の結節沈線文が施されている。更に，沈線によって変形の波状文が施され，内面には稜を有している。17は隆帯による楕円文で区画され，区画内には2列の結節沈線文が波状に，隆帯下にも2列の結節沈線文が横位に施されている。18は口縁部の下方に横位の隆帯を施し，口唇部と隆帯の間に3列の結節沈線文が「V」字状に施されている。19は2段の結節沈線文で文様を構成している。20は口縁部の下方に隆帯を施し，口唇部と隆帯の間に2列1組の刺突文を2～3組波状に施している。隆帯直下には2列の沈線による波状文が施され，内面に稜を有している。21は口唇部に隆帯を施し，口唇部直下にキザミ目を施している。隆帯下には2列の刺突文と1列の山形沈線文を施し，口唇部内側の圧痕と，口縁部内面の稜が認められる。22は口唇部と口縁部に圧痕の残った隆帯を施し，隆帯間には竹管文が5段施されている。内面には2本の稜を有している。

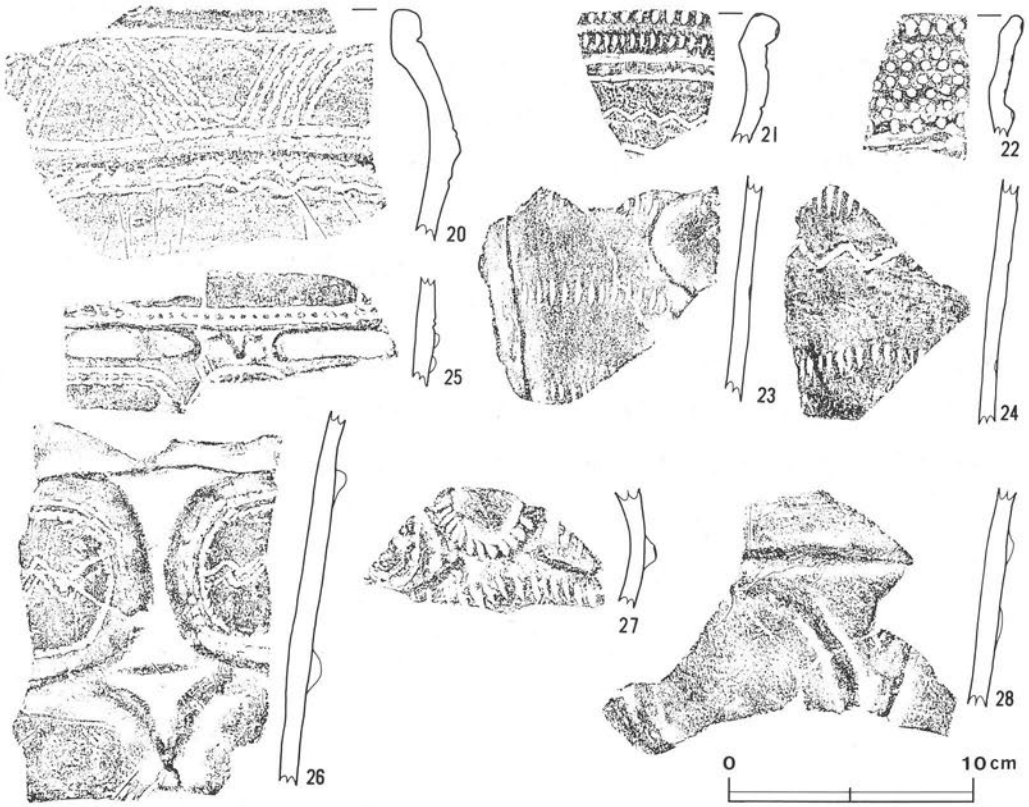
23～28は胴部片である。23・24は爪形文が施され，23は垂下する直線や曲線の隆帯によって区画され，区画内には3段の爪形文が横位に施されている。24は2段の爪形文が施され，その間に



第32図　第51号住居跡出土土器実測図(1)



第33図　第51号住居跡出土土器実測図・拓影図(2)



第34図　第51号住居跡出土土器拓影図(3)

波状沈線文が横位に施されている。25は逆「W」字状を挟む小隆帯が施され，隆帯に沿って上側に結節沈線文が，下側に２列の刺突文が施されている。26は隆帯による楕円文が施され，隆帯に沿って２列の結節沈線文と２列の刺突文が横位に施されている。その下側に隆帯が「Ｖ」字状に施されている。27は押圧の施された隆帯による楕円形で区画され，隆帯に沿って爪形文が施されている。28は２本の横位の隆帯が施され，その下側に変形「Ｙ」字状の隆帯が施されている。

第52号住居跡（第35図）

本跡は，当遺跡のほぼ中央部C2g₀区を中心に確認され，第61号住居跡の３ｍ東側に存在している。

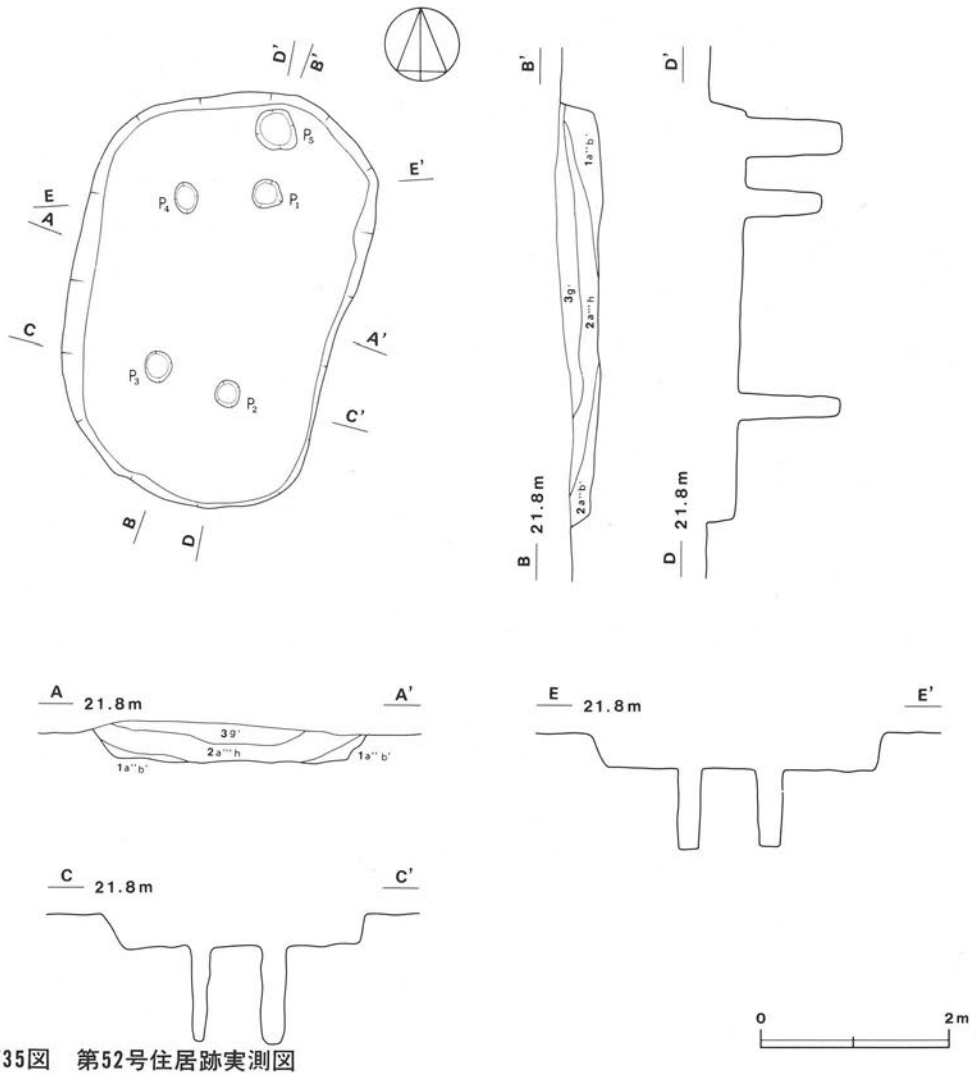
当初，楕円形に確認されたが，調査した結果，平面形は隅丸長方形になった。長軸方向はＮ－15°－Ｅを指し，規模は長軸4.6ｍ・短軸3.7ｍである。壁はロームで硬く，北壁・東壁・南東壁は垂直に，西壁はゆるやかにそれぞれ立ち上がり，壁高は40㎝内外である。各コーナーはゆるやかな曲線を呈するが，中でも北西コーナーと南西コーナーはごくゆるやかな曲線を呈している。床面はロームで，南壁から北壁に向ってごくゆるやかな傾斜を示し，全体的に踏まれて硬く締まっ

ている。

炉跡は検出できなかった。ピットは５か所検出され，位置や規模からP_1～P_5が主柱穴と考えられる。P_1・P_2間は2.3m，P_3・P_4間は1.9mで，主柱穴P_1～P_4を結ぶと台形を呈する。主柱穴P_5は，北壁ぎわに位置し，これらの主柱穴の規模は長径30～50cm，短径25～42cm，深さ85～110cmである。

覆土は４層から成り，上層はローム粒子を少量・炭化粒子を微量含む黒褐色土，下層はローム粒子中量・ローム小ブロック少量を含む暗褐色土と褐色土がレンズ状に自然堆積している。

遺物は，P_1・P_4の南側の覆土上・中層から３個体分の土器片が出土し，復元したものが阿玉台式の深鉢形土器（第36図１・４・５）であり，特に（第36図１）の土器は人面を模倣して作られたものである。また覆土上層の中央部から，阿玉台式の土器片710片，土器片錘（第181図72・73）



第35図　第52号住居跡実測図

2点，石器（第185図10・18，第187図39，第191図169）他5点，更に，加曽利E式土器片40片，黒浜式・興津式・浮島式の土器片数片が出土している。これらの土器片は周囲から混入したものと考えられる。

出土土器

第52号住居跡出土土器観察表

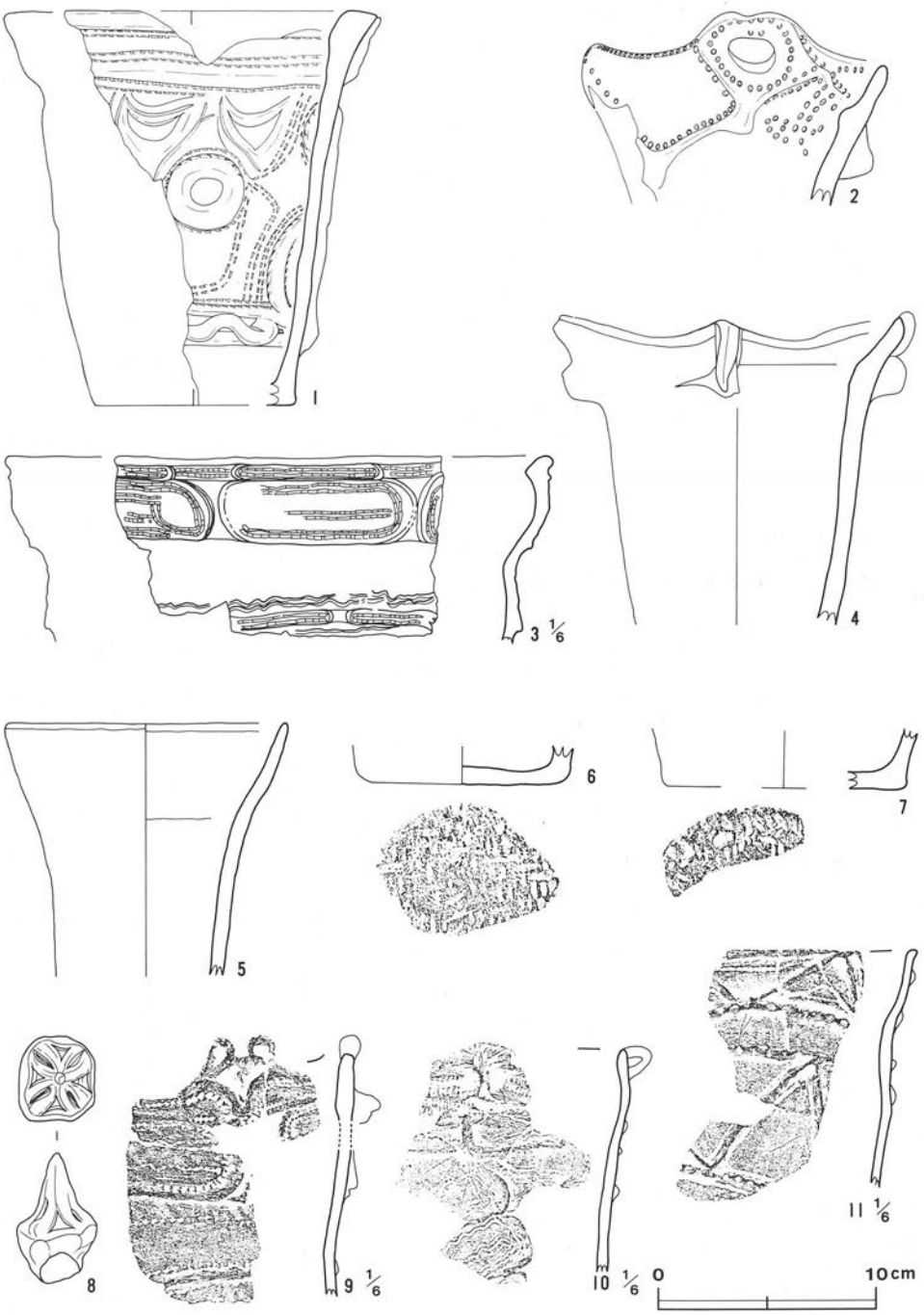
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第36図 1	深鉢形土器 阿玉台	A(17.0) B 18.1 C (9.0)	底部はごく一部が残り，平底を呈している。胴部は底部から軽く外傾し，口縁部は外反しながら立ち上がる。口縁部の内側には明瞭な稜を有している。文様区画は3単位から成り，単位ごとに人面を抽象化しているものと思われる。口縁部は2列の結節沈線文を施した縦位の隆帯と口縁下に横位の断面三角形の隆帯を設けて区画し，区画内には隆帯に沿って結節沈線文を施している。胴部は先端が渦巻状を呈する断面カマボコ状の隆帯で区画され，隆帯に沿って2列の結節沈線文が施されている。更に胴部上位の器面は三か月状に2か所が浅くえぐられ，目を抽象化している。右目の上は雑な1列の，右目と鼻の間は簡略化された2列の，右目と渦巻の隆帯間は簡略化された2列の結節沈線文どうしが対になった形で施され，左目の上側と目と鼻の間に2列の結節沈線文が認められる。右目と左目の間の下方に断面カマボコ状の隆帯によって丸が施され，鼻が抽象され，隆帯に沿って2列の結節沈線文が施されている。また，鼻を抽象化した隆帯の脇から4列の結節沈線文が施され，2列は垂下しながら横へ，他の2列は右下方に施文され，更に緩い曲線を描きながら下がる。胴下位は2本の横位の隆帯が区画された隆帯と連結し，その間を一部欠損している粘土紐を「」状に貼り付け，口を抽象化しているものと考えられ，口を表現している隆帯と2本の隆帯間には2列の結節沈線文が施されている。	砂粒・雲母・長石 にぶい褐色 良好	40%　3片 P13
2	深鉢形土器 阿玉台	A 14.0 B(11.1)	2単位の把手を有する口縁部は内彎しながら立ち上がっている。口縁部内面には明瞭な稜を有している。把手は孔と突起を有し，把手間には2か所の突起と小波状の口縁を有し，それらが断面三角形の隆帯で区画され，区画内には逆三角形，楕円形，及び不整四角形が構成されている。更に隆帯に沿って，一部内側，大部分は両側に連続刺突文が施され，把手の右下方には刺突文が施されている。	砂粒・雲母・石英 にぶい赤褐色 普通	70%　14片 P15
3	深鉢形土器 阿玉台	A(49.6) B(17.0)	キャリパー形を呈する大形口縁部片で，口頸部を内削ぎ，内面に稜を有する。口縁部文様帯は隆帯による長楕円形の区画が施され，隆帯に沿って2列の結節沈線文が，区画内のほぼ中央にも横位の2列の沈線文が施されている。楕円区画間の上下は1本の隆帯で結ばれている。左側の隆帯による楕円区画内には，隆帯に沿って2列の結節沈線文が施され，一部は渦巻き状となり，更に2列の結節沈線文が2本横位に施されている。胴部文様帯は2本の波状沈線文が施され，その下側のキザミ目を施した突起と突起の間には，突起を利用した細長い楕円区画を2つ構成し，区画内には2本の結節沈線文を施している。更に楕円区画の真下には2本の沈線がわずかに窺える。内・外面は横位のナデが施されている。	砂粒・雲母・石英 にぶい橙色 普通	20%　9片 P90
4	深鉢形土器 阿玉台	A(15.7) B(14.5)	口縁部はわずかに波状を呈していることが窺える。胴部は直線的にやや外傾しながら立ち上がり，口縁部は更に開きながら立ち上がっている。口縁部内面に稜を有する。口縁部文様帯は波頂部下に突起を備え，横位にキザミ目を施している。	砂粒・雲母・長石 にぶい褐色 普通	20%　3片 P88
5	深鉢形土器 阿玉台	A 13.0 B(11.7)	胴部は下位からほぼ垂直気味に立ち上がり，口縁部は軽く内彎気味に開きながら立ち上がる。底部は欠損している。無文の土器で，口縁部付近の外面は横位のナデ，胴部外面は縦位のナデ，器内面は横位のナデが施されている。	砂粒・雲母・石英 にぶい赤褐色 良好	80%　13片 P89
6	深鉢形土器 阿玉台	B (1.7) C 9.6	底部は平底を呈し，底部には網代痕が認められる。	砂粒・雲母・長石・ 雲母 橙色 普通	10%　1片 P207
7	深鉢形土器 阿玉台	B (2.6) C(11.2)	底部は平底を呈し，底部には網代痕が認められる。内・外面は横位のナデが施されている。	砂粒・雲母 明褐色　普通	10%　1片 P208

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴　及　び　文　様	胎土・焼成・色調	備　考
第36図 8	深鉢形土器 阿　玉　台	B（6.0）	突起の部分である。小さい四角状の容器を作り，口縁部に２本１組の粘土紐を４組貼り付け，先端を合わせて塔状を形づくっている。	砂粒・雲母・長石・石英　橙色 普通	5％　1片 P438

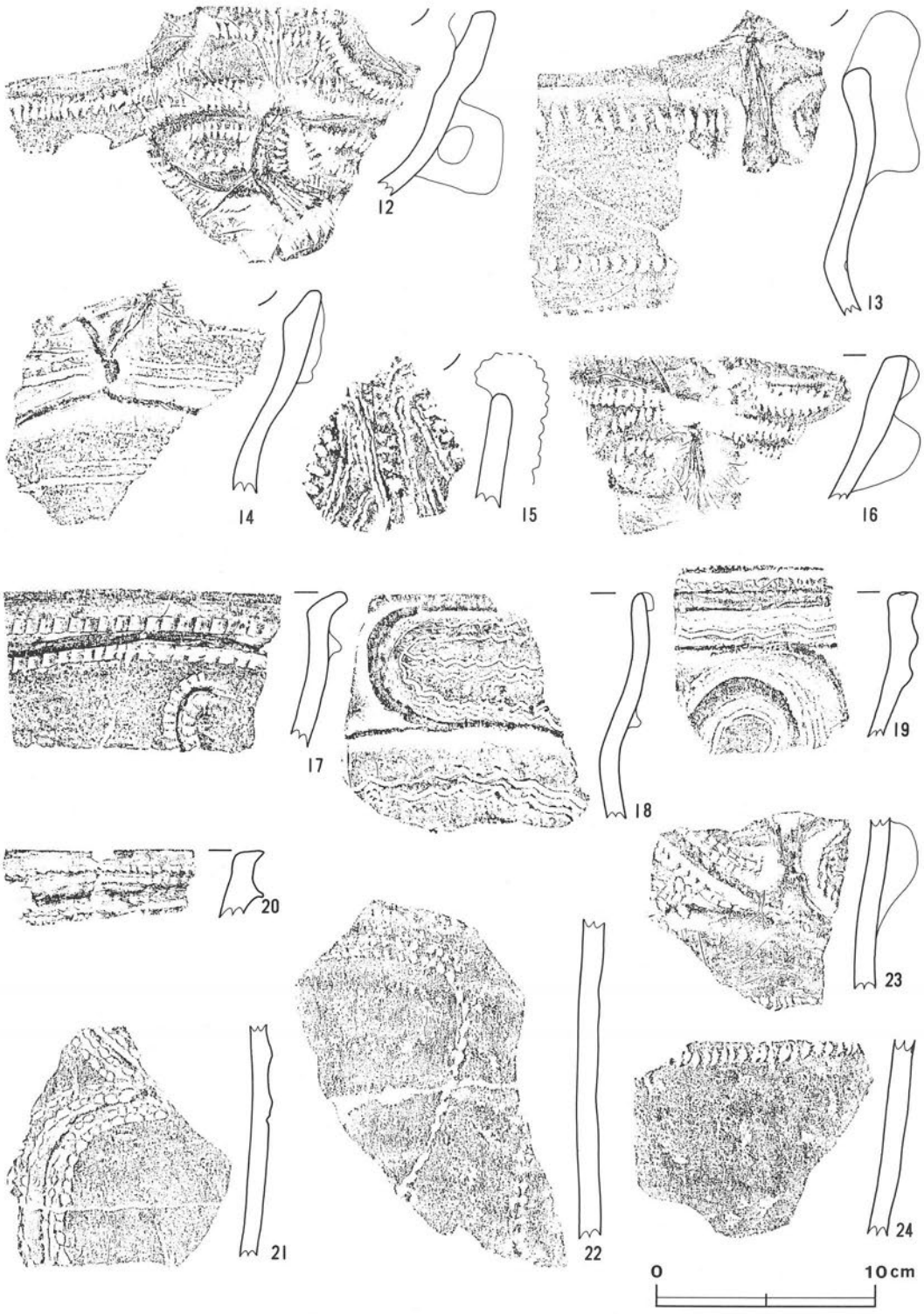
第36・37図９～24は，第52号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。９～11は口縁部から胴部にかけての土器片である。９は双頭状の波頂部を有する波状口縁を呈し，波頂部の下側に「Ｖ」字状の隆帯を施し，その下端に突起が付けられている。口縁部は隆帯による楕円形で区画され，隆帯に沿って内側に１列の三角形状の刺突文と，横位の刺突文が施されている。胴部は１列の刺突文と，その下側の隆帯の両側に刺突による三角形状の文様が施されている。10は口唇部直下に把手を有し，口縁部は隆帯による楕円文で区画され，隆帯に沿って２～３段の爪形文が施されている。また，隆帯下にも雑な２段の爪形文が施されている。口縁部下端には突起が備えられ，隆帯による楕円文が施されている。右側に４列の波状沈線文，左側に２段の爪形文がそれぞれ隆帯に沿って施され，胴部には隆帯が２段見え，隆帯に沿って３本の波状沈線文が施されている。11は口縁部に断面三角形の隆帯による三角形文が施され，隆帯に沿って結節沈線文が施されている。胴部にも同様な隆帯によって三角形文が施され，やはり隆帯に沿って両側に結節沈線文が施されている。12～15は波状口縁を呈し，12は波頂部が欠損し，扇状部と把手が備えられ，扇状部周辺，口唇部直下，口縁部直下，把手の両側面，及び隆帯に爪形文が施されている。内面には稜を有している。13は無文の突起を有し，隆帯によって区画された区画内に２段の爪形文が施されている。14は片方が欠失した双頭状を呈すると考えられる口縁で，波頂部から「Ｖ」字状の隆帯が施され，横位の断面三角形の隆帯と接合している。横位隆帯の上・下側には簡略化した２列の結節沈線文が施され，内面には稜を有している。15は波頂部にキザミ目を有する突起が備えられ，突起の両側には２列の細い刺突文が施されている。口唇部にもキザミ目が施され，口縁部には２列１組の細い刺突文が２組施されている。16～20は口縁部片で，16は口唇部の小突起が一部欠損し，口縁部に爪形文を有する突起が備えられている。口唇部直下と突起の周辺には爪形文が雑に施されている。17は口唇部直下に断面三角形の隆帯が施され，その両側に結節沈線文が施されている。胴部は断面三角形の隆帯を弧状に施し，隆帯の両側に結節沈線文が施されている。内面に稜を有している。18は隆帯による楕円文で区画され，隆帯に沿って４本の波状沈線文が施され，更に，隆帯の下方にも２本の波状沈線文が施されている。19は口唇部直下に３本の波状沈線文が施され，その下側に隆帯による円文が施されている。円文の外側には２列の結節沈線文，内側には２列の沈線文が沿わせて施されている。また，口唇部にも結節沈線文が施されている。20は口唇部直下に断面三角形の隆帯が横位に施され，両側に２列の結節沈線文が施されている。

21～24は胴部片である。21は断面三角形の隆帯に沿って両側に２列の結節沈線文が施されている。22はやや雑な結節沈線文が楕円形に施されている。23は突起が備えられ，突起と３本の隆帯

は接合している。突起と隆帯に沿って２列の結節沈線文が施されている。24はアナダラ属の貝殻腹縁文が密に１段施されている。



第36図　第52号住居跡出土土器実測図・拓影図(1)



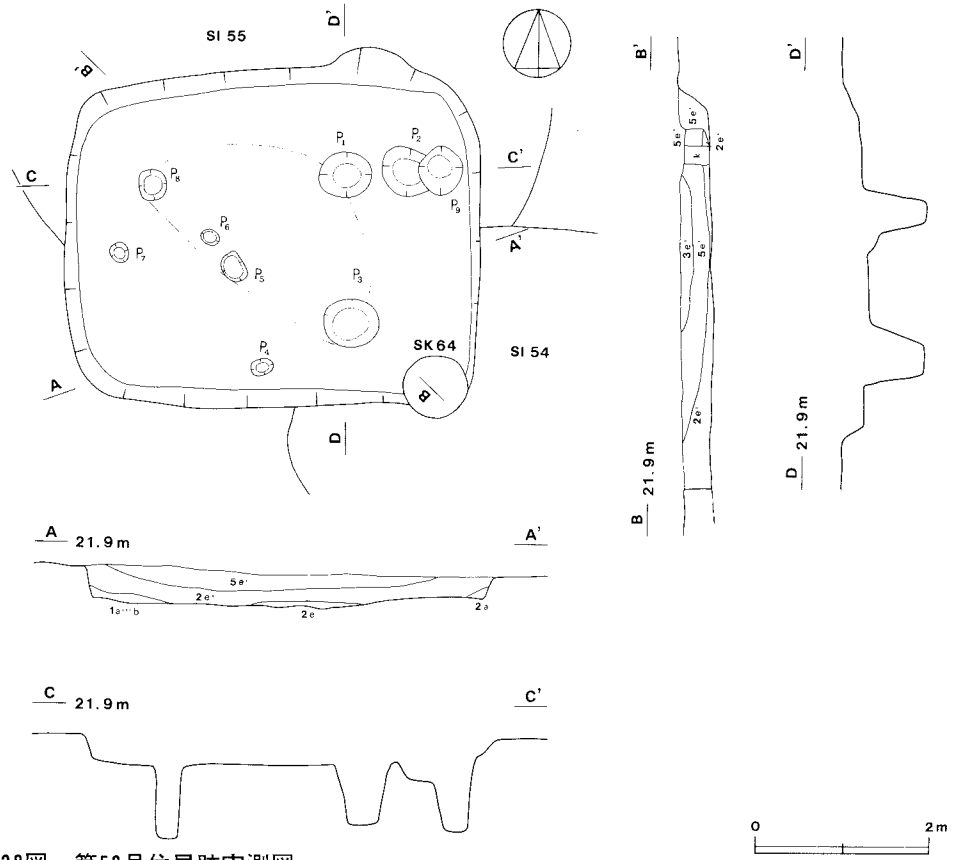
第37図　第52号住居跡出土土器拓影図(2)

第53号住居跡（第38図）

本跡は，北西から南東方向に当遺跡を横切る農道が存在していたため，北東側約半分を調査し，その後農道を取り除き，南西側の調査を実施した。本跡周辺は，住居跡や土坑が密集している。本跡は，D2a$_0$区を中心に確認され，第52号住居跡の10m南側に位置する。本跡は，南東側に位置する縄文時代前期の第54号住居跡の北西側を掘り込み，北側に位置する縄文時代中期加曽利E期の第55号住居跡と重複している。また，南東コーナー部をフラスコ状の第64号土坑に切られている。

平面形は隅丸長方形を呈し，長軸方向はN－90°－Eを指し，規模は長軸4.9m・短軸4mである。東壁の長さは，西壁の長さに比べて20cm位長い。壁はロームで硬く，各壁とも外傾しながら立ち上がり，北壁の一部は攪乱を受けている。壁高は30～40cmである。床面は平坦で，ローム面は全体的に硬く，主柱穴のP$_1$・P$_3$・P$_5$・P$_8$を結んだ破線の内側は踏み固められて特に硬く締まっている。

炉跡は検出できなかった。ピットは9か所検出され，P$_1$・P$_3$・P$_5$・P$_8$が位置や規模から主柱穴と考えられる。主柱穴はコーナー部からやや内側に位置し，規模は長径40～60cm・短径30～50cm・深さ70～85cmである。P$_1$とP$_3$は太くしっかりとした柱穴である。P$_4$～P$_7$は支柱穴と考えら



第38図　第53号住居跡実測図

れる。P_2はP_9の西側を切っている浅いピットであり，P_9は第55号住居跡の柱穴と考えられる。

覆土は一部攪乱を受けているもののほぼ3層から成り，上層から下層にかけてローム粒子を少量，焼土粒子・炭化粒子を微量含む黒褐色土と極暗褐色土，及び暗褐色土が自然堆積している。

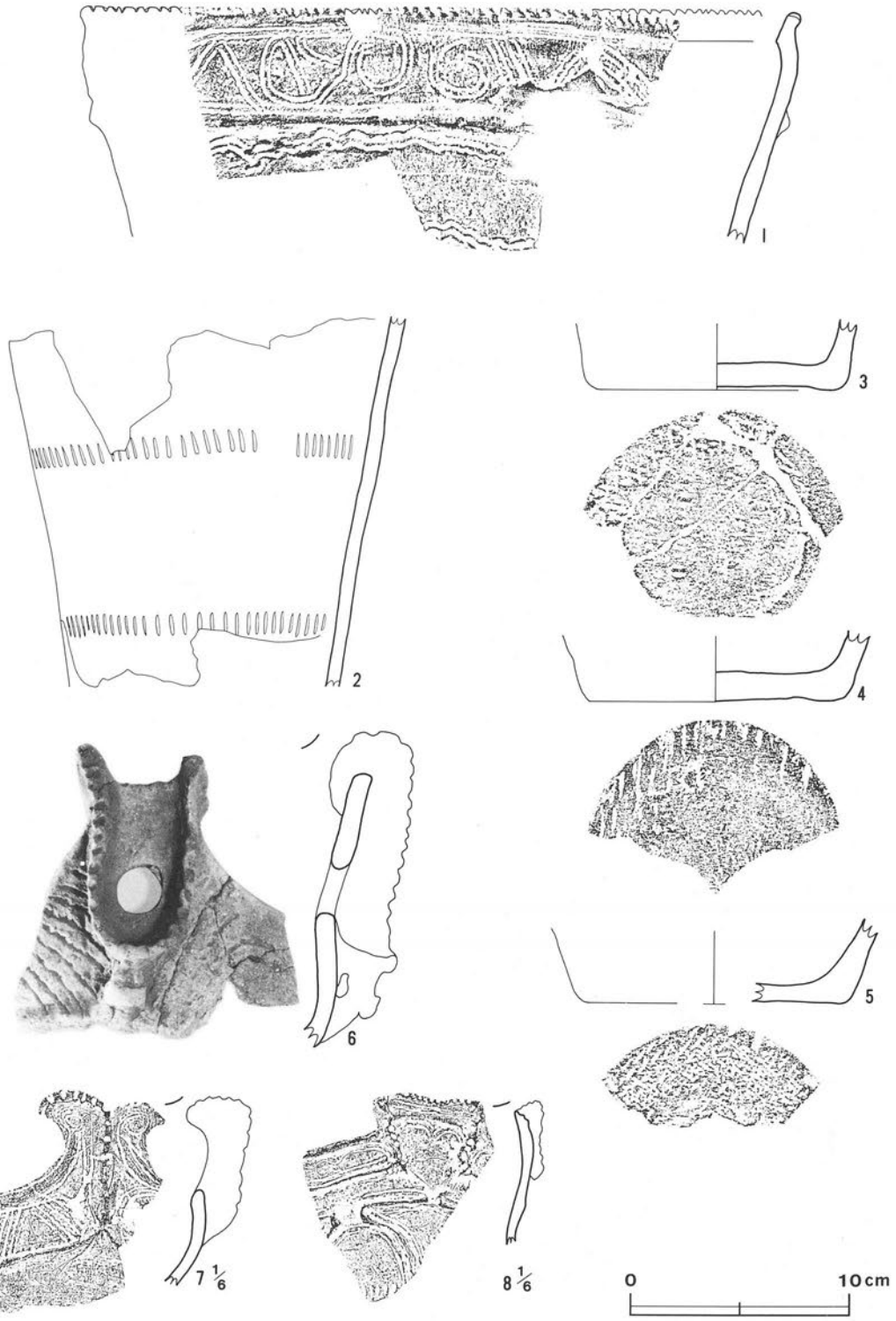
遺物は，ほぼ中央部の覆土上層から阿玉台式の半完形の深鉢形土器（第39図2）が出土した。また，阿玉台式土器片457片，土製円板（第180図25）1点，土器片錘（第181図74～84）11点，石器（第187図41，第189図96，第190図151他）5点が出土している。石器の中に，メノウの石匙（第188図51）が1点あり，その他に覆土上層から加曽利E式47片，黒浜式58片，興津式5片，浮島式3片の土器片が出土している。

出土土器

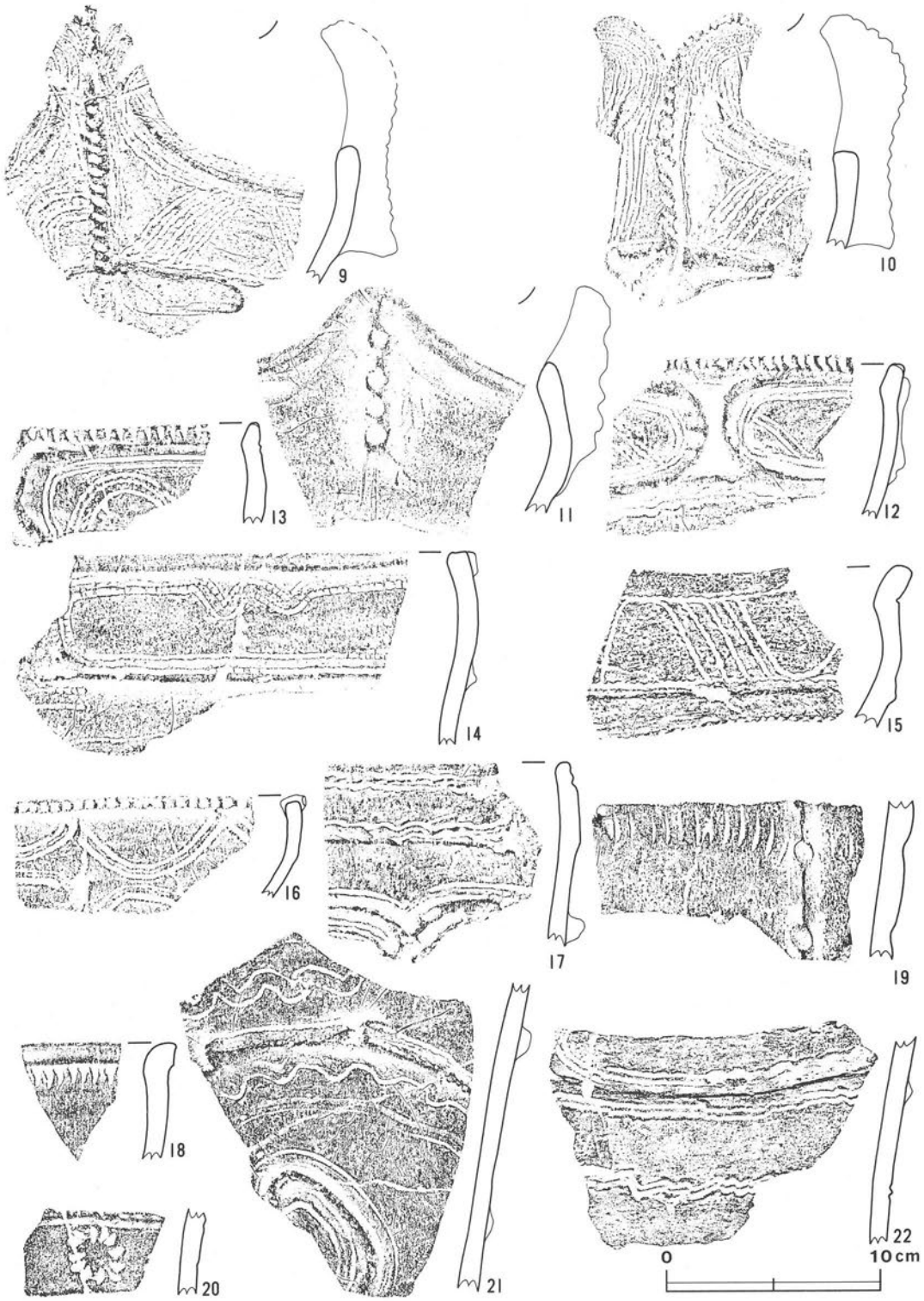
第53号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第39図 1	深鉢形土器 阿玉台	A(32.4) B(10.6)	胴部上位で外傾し，口縁部で内彎しながら立ち上がり，口唇直下で再び外傾する。口縁部内面の上位に明瞭な稜を有する。口唇部にはキザミ目を有している。口縁部文様帯は隆線によって長楕円形に区画され，隆線に沿って2列の結節沈線文が施され，更にその中に2列の結節沈線文で三角形，渦巻文，逆三角形が構成されている。胴部文様帯は2列の簡略化した結節沈線文で波状文を2段描いている。	砂粒・雲母・石英 明赤褐色 普通	10%　5片 P138
2	深鉢形土器 阿玉台	B(19.9)	口縁部と底部を欠損している。胴部は下位から直線的にやや外傾気味に立ち上がっている。胴部文様帯は爪形文が2段施されている。外面は不明瞭であるが横位のナデを，内面は横位のナデが施されている。	砂粒・雲母・石英 にぶい赤褐色 普通	70%　14片 P15
3	深鉢形土器 阿玉台	B (3.0) C 11.8	底部は平底を呈し，底部には網代痕が認められる。	砂粒・雲母・長石 明赤褐色　普通	10%　4片 P214
4	深鉢形土器 阿玉台	B (3.0) C 11.7	底部は平底を呈し，胴部は底部から外傾しながら立ち上がっている。胴部は無文で，底部にはわずかながら網代痕が認められる	砂粒・石英 にぶい橙色 普通	10%　1片 P211
5	深鉢形土器 阿玉台	B (3.3) C(12.0)	底部は平底を呈し，胴部は底部から外傾しながら立ち上がっている。胴部は無文で，底部には網代痕が明瞭に認められる。	砂粒・雲母・長石・石英　浅黄橙色 普通	10%　1片 P212

第39・40図6～22は，第53号住居跡から出土した縄文土器の拓影図である。6～18は口縁部片である。6～11は波状口縁を呈し，6は波頂部にキザミ目を有する「U」字状の突起が備えられている。波頂部には直径2cmの孔を有し，「U」字形の下側にはすき間を有するやや太目の粘土紐が貼り付けられている。口縁部には4～9本の粗雑な結節沈線文が斜位に施され，口唇部にも1列の結節沈線文が施されている。7は波頂部から鶏冠状の突起が付され，突起の口唇部に幅の広い押圧が施されている。把手の両側面には結節沈線文で渦巻文が描かれ，更に，1本の結節沈線文が加えられている。口縁部は突起と隆帯によって区画され，隆帯に沿って結節沈線文が施されている。更に，4～6列の結節沈線文が斜位に施されている。胴部は無文で内面に稜を有している。8は扇状の突起を有し，周縁部に押圧が施され，更に，2列の結節沈線文と波状の結節沈線文が施されている。口縁部は突起と，隆帯による楕円形の区画が施され，隆帯に沿って2列の雑な結節沈線文が施されている。胴部には2列の結節沈線文を沿わせた隆帯による円文が施され，円内に一列の爪形文が施されている。9は波頂部に突起が備えられ，突起の周縁部には圧痕が認



第39図　第53号住居跡出土土器実測図・拓影図(1)



第40図　第53号住居跡出土土器拓影図(2)

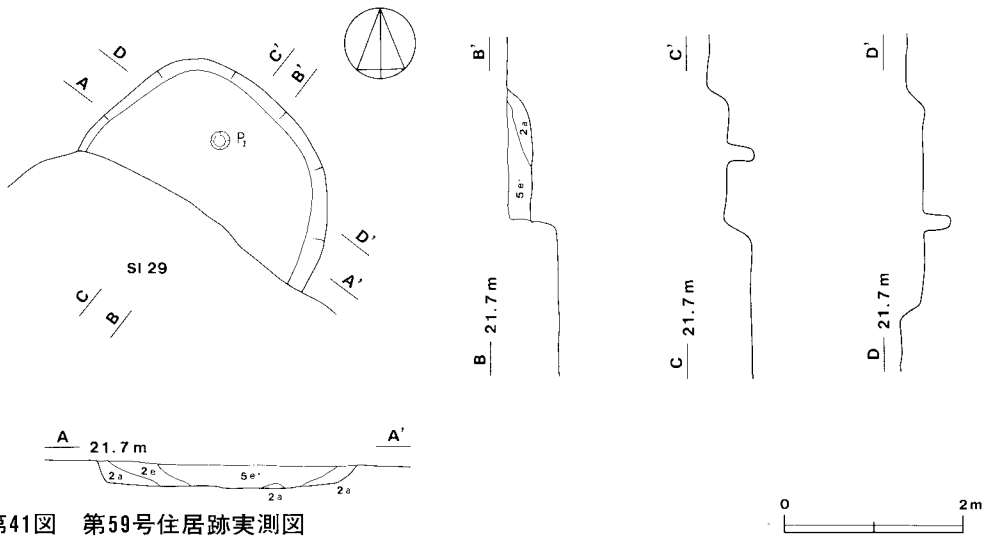
められる。突起の両側面には２～４本の雑な沈線文が施されている。口縁部は突起と隆帯によって胴部と区画し，区画内には隆帯に沿って１～２列の結節沈線文が施され，更に，４～６本の結節沈線文が斜位に施されている。10は９と同じ文様である。11は波頂部から指頭圧痕を有する小突起が備えられている。無文である。12と13は２列の結節沈線文を沿わせた隆帯で楕円区画を施し，更に，２～３列の結節沈線文を斜位に施している。口唇部にはキザミ目を施し，口縁部直下には２列の波状文が施されている。内面に稜を有している。14は隆帯に沿って２列の結節沈線文が，15は隆帯に沿って結節沈線文が施され，更に，斜位にも施されている。16は２列の沈線が弧状に施され，口唇部直下に圧痕が施されている。17は２列の波状文が２段施されている。18は口縁部下に爪形文が施されている。

19～22は胴部片である。19は幅の広い指頭圧痕を有する断面三角形の隆帯によって区画され，区画内には爪形文が１段施されている。20は爪形文によって円形の花模様が描かれている。21は横位に施された隆帯に沿って１列の結節沈線文が施され，隆帯の上側には雑な２列の結節沈線文が波状に，隆帯の下側にも波状沈線文が施されている。更に，隆帯によって楕円文が構成され，隆帯に沿って両側に２本の沈線が施されている。22は断面三角形の横位の隆帯に沿って両側に２列の粗雑な結節沈線文が施され，その下側にも２本の波状気味の結節沈線文が施されている。

第59号住居跡（第41図）

本跡は，当遺跡の中央部C3c$_2$を中心に確認され，第52号住居跡の８ｍ北東側に存在している。南西側は古墳時代の第29号住居跡に約半分掘り込まれている。

平面形は，残存部から楕円形を呈するものと考えられる。長径方向は不明で，現存部分の最大径が３ｍである。残存壁はロームで硬く，ややゆるやかに立ち上がり，壁高は30cmである。残存



第41図　第59号住居跡実測図

する床面は平坦で硬いロームである。本跡と第29号住居跡の床面の差は30cmで，本跡の床面の方が高い。

炉跡は検出できなかった。ピットは北東壁の内側に1か所検出され，直径20cm・深さ30cmを有し，主柱穴と考えられる。

覆土はほぼ2～3層から成り，上層から下層にかけてローム粒子を少量，焼土粒子・炭化粒子を微量含む極暗褐色土，壁ぎわにはローム粒子を微量含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物は少量で，中央の覆土上・中層から9片の阿玉台式土器片が出土し，また中央床面直上から石皿片（第188図58）2点と覆土中から加曽利E式と黒浜式の土器片が数片出土している。石皿2片は接合できた。

出土土器

第59号住居跡出土土器観察表

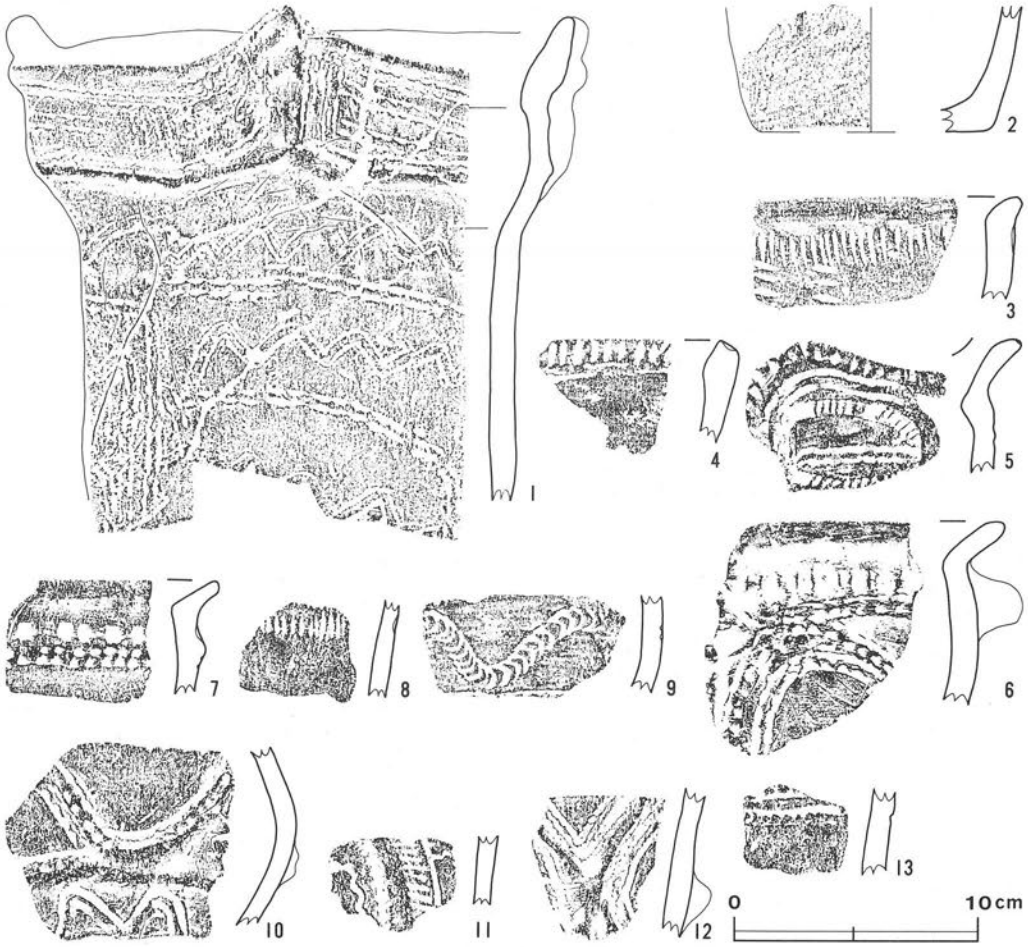
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第42図 1	深鉢形土器 阿玉台	A(23.0) B 20.2	口縁部片から胴部にかけての土器片で，口縁部は波状を呈する。波頂下にキザミ目を有する小突起を備え，下側に隆帯を施し，口縁下の横位の微隆帯と接続し，長方形状に区画している。隆帯に沿って2列の刺突文が施され，更にその内側に2列の刺突文が横位，縦位，及び斜位に施されている。胴部文様帯は胴部上位に2列の波状沈線文を巡らし，その下側に2列の刺突文を施し，冂状に区画しているものと考えられる。区画内に2列の波状沈線文と刺突文が交互に施され，2列の波状沈線文は区画を表わす2列の刺突文付近で刺突文に変っている。	砂粒・雲母 褐灰色 普通	20%　5片 P92
2	深鉢形土器 阿玉台	B (5.2)	底部は平底を呈し，胴部は軽く外傾しながら立ち上がっている。胴部は無文で，横位のナデが施されている。	砂粒・雲母・石英・長石 橙色 普通	10%　1片 P219

第42図3～13は，第59号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。3～7は口縁部片である。3は口唇部直下に1段の爪形文が密に施され，縦位に2列の爪形文が強く施されている。4は内面に稜を有し，外削ぎで，口唇部に幅の広い刺突文を有している。5～7は結節沈線文が施されている。5はやや波状を呈する口縁部に2列の結節沈線文と，口唇部にキザミ目を施している。口縁部は隆帯による楕円文で区画され，隆帯に沿って結節沈線文が施されている。更に，2列の波状沈線文が施され，内面には稜を有している。6は口唇部直下に結節沈線文が施されている。その下側には小突起と隆帯によって楕円文が施され，隆帯と隆帯に沿って結節沈線文が施されている。内面に稜を有している。7は口唇部直下に3列の結節沈線文が施されている。

8～13は胴部片である。8は密に，9は波状に爪形文が施されている。10～13は隆帯に沿って結節沈線文が施され，10はさらに2列の波状沈線文が，11は爪形文と波状沈線文がそれぞれ縦位に認められる。

第60号住居跡（第43図）

本跡は，当遺跡の中央部C3i_7区を中心に確認され，第44号住居跡の3m北西側に存在している。



第42図　第59号住居跡出土土器実測図・拓影図

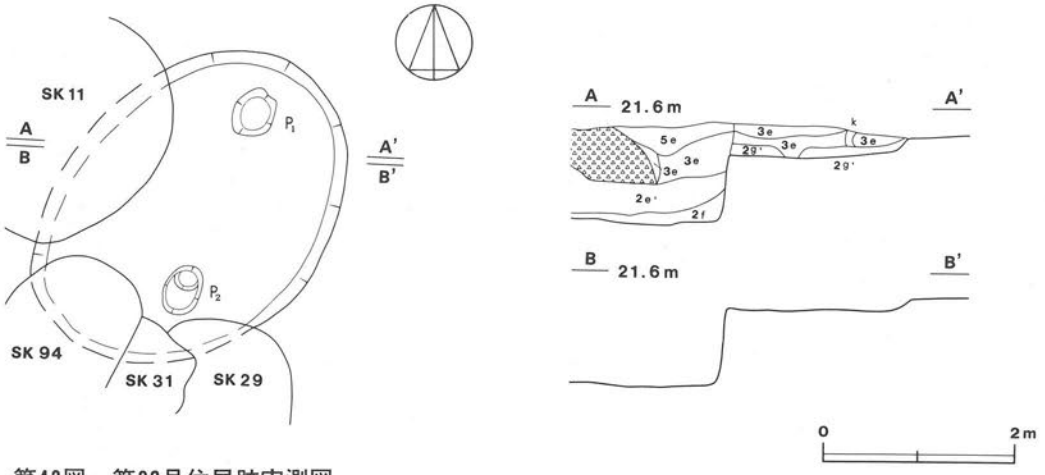
本跡は，加曽利Ｅ期の第38号住居跡と北東側が重複し，第11・29・31・94号の各土坑に北西側・南側・南西側をそれぞれ掘り込まれている。

平面形は残存部から長楕円形を呈するものと考えられる。長径方向はＮ－37°－Ｅを指し，推定規模は長径が４ｍ，短径が2.8ｍと考えられる。残存壁は硬いロームで，ゆるやかに立ち上がり，壁高は15～20cmである。床面はほぼ平坦な硬いロームで，一部土坑に掘り込まれている。

炉跡は検出できなかった。ピットは２か所検出されたが，本跡に伴わないピットで，第38号住居跡の柱穴と考えられる。本跡の柱穴は確認できなかった。

覆土は，おおむね３層から成り，上層はローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む黒褐色土，下層はローム粒子少量，炭化粒子を微量含む暗褐色土がほぼ自然堆積の様相を呈している。

遺物は，覆土上層を中心にして阿玉台式土器片34片と土器片錘（第181図91・92）２点，及び加曽利Ｅ式の土器片が12片出土している。



第43図　第60号住居跡実測図

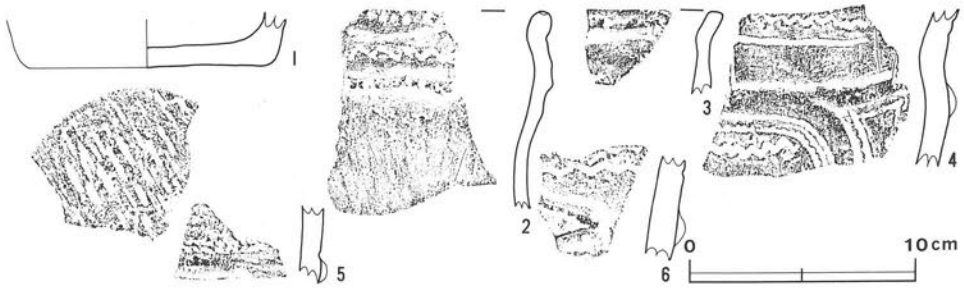
出土土器

第60号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備　考
第44図 1	深鉢形土器 阿　玉　台	B (2.1) C(11.0)	底部は平底を呈し，底部には網代痕が認められる。	砂粒・長石・石英 にぶい褐色　普通	10%　1片 P220

第44図２～６は，第60号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。２・３は口縁部片である。２は口唇部直下と口縁部下方に押圧を有する結節沈線文を沿わせた隆帯が施され，山形状の結節沈線文が横位に施されている。胴部は無文で，内面に稜を有している。３は口唇部直下に結節沈線文が施され，内面に稜を有している。

４～６は胴部片で，隆帯に沿って結節沈線文が施され，４は更に，波状沈線と沈線が施されている。６は隆帯と波状沈線文が認められる。



第44図　第60号住居跡出土土器実測図・拓影図

第61号住居跡（第45図）

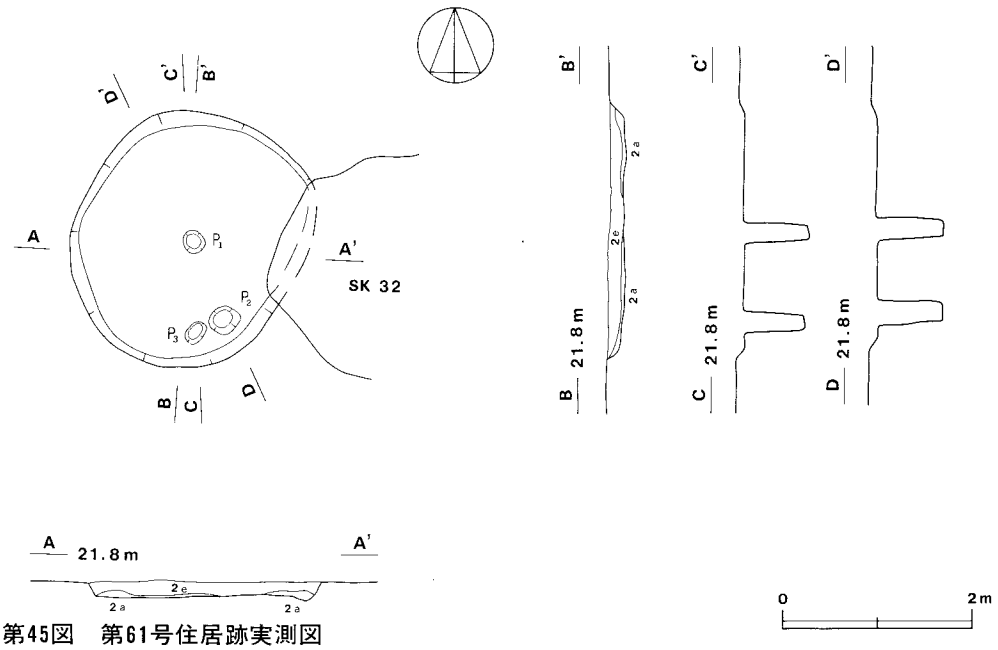
本跡は，当遺跡の中央部C2h_8区を中心に確認され，第52号住居跡の2.5m西側に存在している。東側は，第32号土坑に若干掘り込まれている。

平面形は楕円形を呈し，長径方向はN－33°－Eを指し，規模は長径2.8m・短径2.4mである。壁はロームで硬く，ややゆるやかに立ち上がり，壁高は10cm内外である。床面はほぼ平坦で，硬く締まったロームである。

炉跡は検出できなかった。ピットは3か所検出され，P_1～P_3とも主柱穴と考えられる。P_1はほぼ中央に，P_2・P_3は南壁ぎわに並んで位置している。規模は長径20～35cm・短径15～30cm・深さ70cm前後である。

覆土は2層から成り，上層はローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む暗褐色土，下層はローム粒子を微量含む暗褐色土がほぼ自然堆積している。

遺物は，中央に位置する柱穴の西側の覆土中層を中心にして阿玉台式土器片47片や土器片錘（第181図93）1点がまとまって出土している。



第45図　第61号住居跡実測図

出土土器

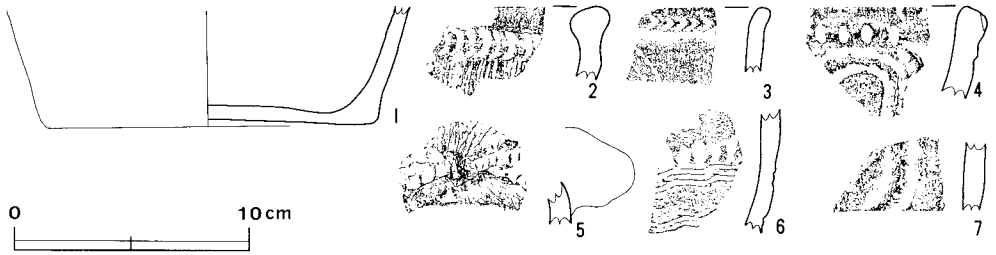
第61号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴　及　び　文　様	胎土・焼成・色調	備　考
第46図 1	深鉢形土器 阿　玉　台	B (5.0) C 14.5	胴部下位から底部にかけての土器片で，底部は平底を呈し，やや上げ底気味である。胴部は底部から外傾しながら立ち上がっている。無文の土器である。	砂粒・雲母・石英 褐灰色 普通	15%　15片 P139

第46図2～7は，第61号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。2～5は口縁部片で，2は口唇部直下に異なる施文具による2段の爪形文が施されている。3は口唇部直下に爪形文と2列の結節沈線文が施されている。4は口唇部外端面にキザミ目を施し，隆帯に沿って2列の結

節沈線文が窺える。５は両側に２列の結節沈線文を施した小突起を有する口縁部片である。

６・７は胴部片で，６は爪形文と２列の雑な結節沈線文が施されている。７は隆帯が認められる胴部片である。



第46図　第61号住居跡出土土器実測図・拓影図

第63号住居跡（第47図）

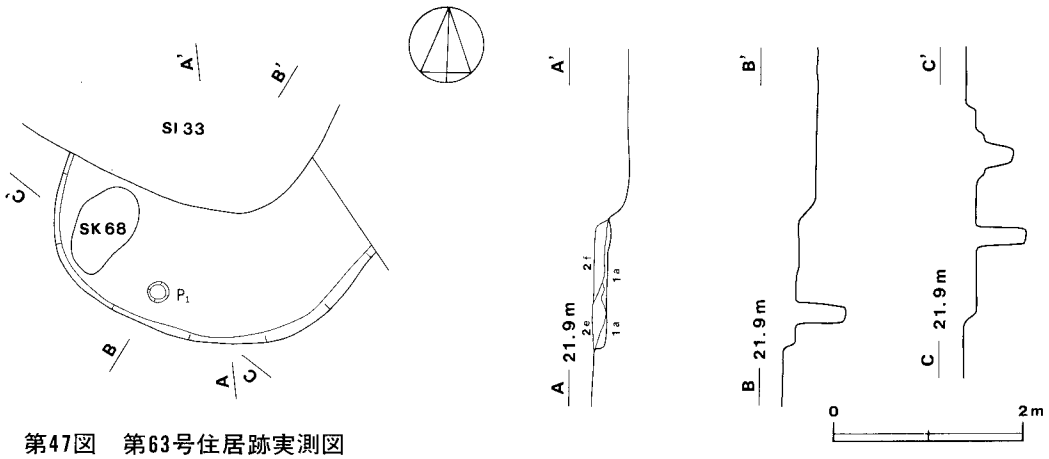
本跡は，当遺跡の中央部付近C3d$_5$区を中心に確認され，北側半分を古墳時代の第33号住居跡に掘り込まれている。また，南西側で第68号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

平面形は残存部から円形ないし楕円形を呈するものと考えられる。長径方向は不明で，確認し得る最長径は3.4ｍである。残存壁はロームで硬く，ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は約15cmである。床面は南側約半分が残り，平坦で硬いロームである。

炉跡は検出できなかった。ピットは南壁ぎわにP$_1$が１か所検出され，直径20cm・深さ50cmを有し，主柱穴と考えられる。

覆土も一部しか残っていないが，３層から成り，上層はローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色土と，ローム粒子・炭化粒子を微量含む暗褐色土，下層はローム粒子を微量含む褐色土が堆積している。

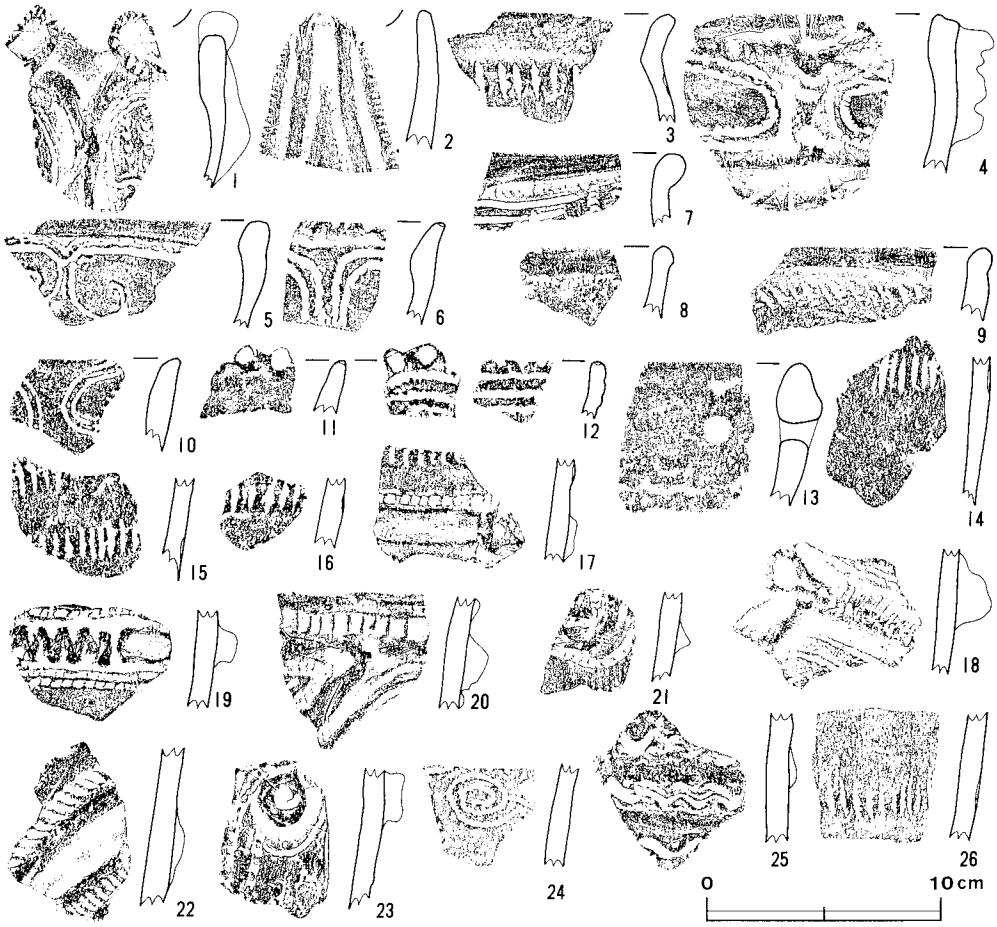
遺物は，南側の覆土上・中層を中心に阿玉台式土器片25片と土器片錘（第181図97）１点及び黒浜式，加曽利Ｅ式の土器片数片がごく少量出土しているが，床面からの遺物は認められない。



第47図　第63号住居跡実測図

出土土器

第48図１～26は，第63号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。１～13は口縁部片である。１・２は波状口縁を呈し，１は双頭状で，口唇部にキザミ目を有している。その下側に隆帯による「Y」字状が形作られ，隆帯に沿って両側に２列の細い沈線と，半円の竹管文が施されている。２は２本の隆帯に沿って結節沈線文が浅く施され，口唇部にも細いキザミ目が浅く施されている。３は口唇部直下に爪形文が施され，内面に稜を有している。４～９は結節沈線文が施されている。４は大きい圧痕を有する小突起と隆帯によって楕円区画が施され，隆帯に沿って２列の結節沈線文が施されている。５は口唇部直下の左右２か所に渦巻文が施され，６は口唇部に圧痕を施している。口唇部直下に横位に１列と２列の曲線が認められる。７は結節沈線文が施され，更に，２本の沈線が認められる。８・９は結節沈線文が雑に施されている。10は口唇部直下に２本の沈線によって楕円状の文様が施され，11は小さな連続「U」字文が内側に２段施されている。口唇部には押圧が施されている。13は無文で，補修孔と思われる孔を有している。



第48図　第63号住居跡出土土器拓影図

14～26は胴部片である。14～16は爪形文が，17～23は隆帯に沿って結節沈線文が施されている。19は隆帯上に蛇行する粘土紐が貼り付けられ，23は凹みを有する円形の隆帯が貼り付けられている。24は細い刺突文が渦巻状を呈し，小さい円形刺突文も認められる。25は隆帯に沿って両側に波状沈線文が施されている。26はアナダラ属の貝殻腹縁文が縦位に施されている。

第64号住居跡（第49図）

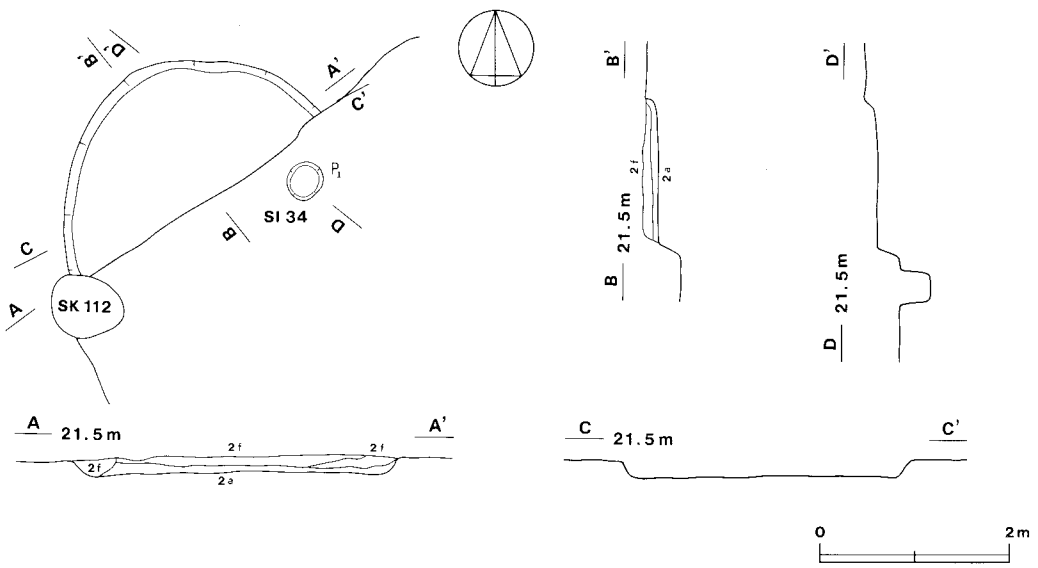
本跡は，当遺跡の中央部C3i$_6$区を中心に確認され，第60号住居跡の3m南西側に存在している。古墳時代の第34号住居跡に南東側約半分を，第112号土坑に南西壁をそれぞれ切られている。

平面形は残存部から推定し，ほぼ円形を呈するものと思われる。長径方向は不明で，最大径は3.2mである。残存する壁はロームで硬く，北東壁・北西壁はほぼ垂直に，西壁は外傾しながら立ち上がっている。壁高は20cm内外である。床面は平坦で硬いロームであるが，特に硬く締まっている部分はない。

炉跡は検出できなかった。ピットは本跡の床面から検出できなかったが，本跡と重複している第34号住居跡の北西壁際にP$_1$が検出され，直径40cm・深さ55cmを有し，本跡の主柱穴と推定される。

覆土はほぼ2層から成り，上層はローム粒子・焼土粒子を含む暗褐色土，下層はローム粒子を微量含む暗褐色土がほぼ自然堆積している。

遺物は，北西側の覆土上・中層から阿玉台式の土器片48片出土しているが，接合・復元できたものはない。



第49図　第64号住居跡実測図

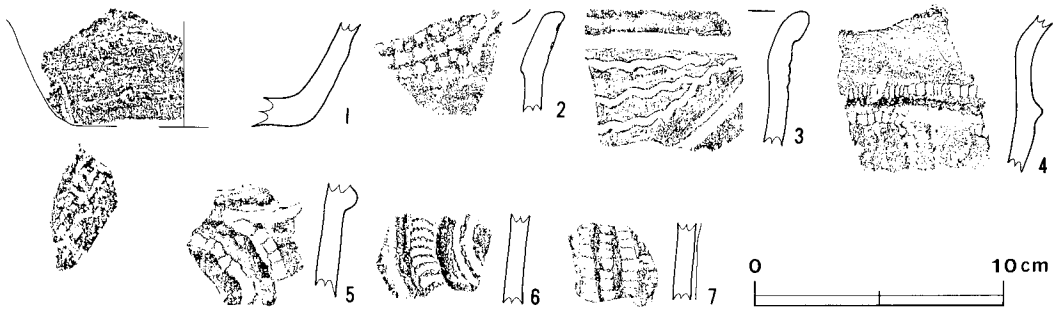
出土土器

第64号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第50図 1	深鉢形土器 阿玉台	B (4.8) C(10.6)	底部は平底を呈し，胴部は外傾しながら立ち上がっている。胴部は無文で，底部には網代痕が認められる。器内・外面は横位のナデが施されている。	砂粒・雲母・石英・長石 にぶい橙色 普通	10% 1片 P222

第50図２～７は，第64号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。２・３は口縁部片である。２は口唇部直下に２列の結節沈線文が施され，内面に稜が窺える。３は口唇部直下と隆帯の両側に結節沈線文が浅く施され，更に，波状沈線も３本施されている。

４～７は胴部片で，結節沈線文が隆帯に沿って施されている。４は密に，７は隆帯上にも施されている。



第50図　第64号住居跡出土土器実測図・拓影図

第66号住居跡（第51図）

本跡は，当遺跡の西側C2j$_7$区を中心に確認され，第61号住居跡の３m南西側に存在している。本跡は古墳時代の第39号住居跡に北側の半分が，第113・270・299号土坑に東壁・西壁・南壁が掘り込まれている。なお，北西側は境界のため調査できなかった。

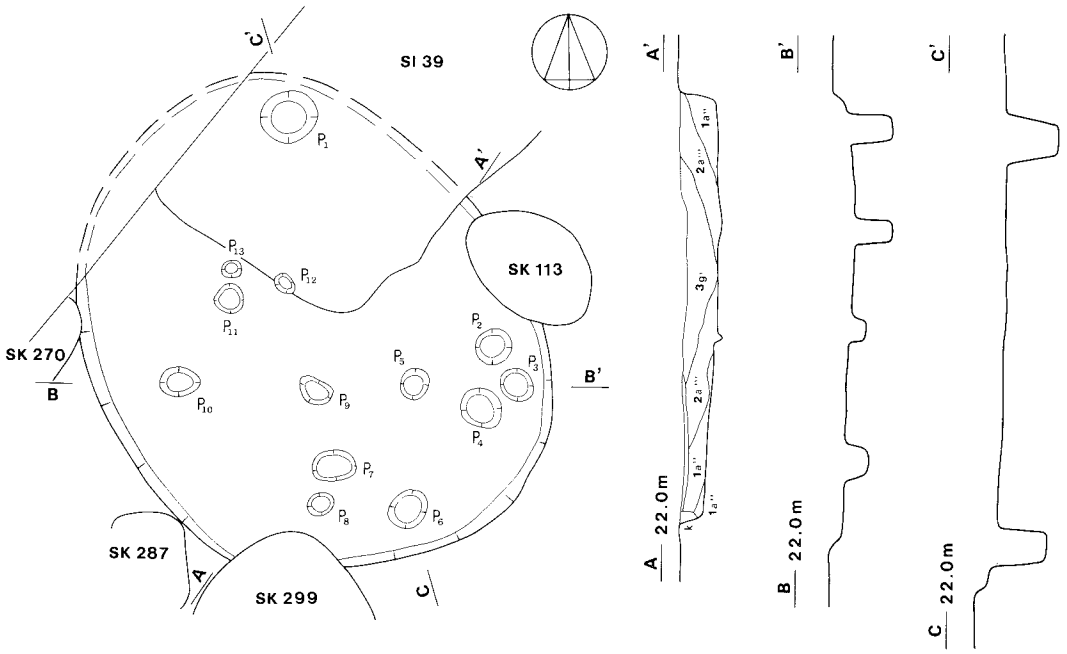
平面形は楕円形を呈し，長径方向はN－40°－Wを指し，規模は推定で長径5.5m・短径4.4mである。残存壁は外傾しながら立ち上がっている。壁高は15～45cmで，北東壁が高い。床面は中央付近が少し低い。

炉跡は検出できなかった。ピットは13か所検出され，P$_2$・P$_4$・P$_6$・P$_7$・P$_{10}$・P$_{11}$が主柱穴と考えられる。主柱穴はP$_{11}$を除きそれぞれ壁ぎわに位置している。P$_1$は第39号住居跡に伴う柱穴であり，P$_3$はP$_4$の，P$_8$はP$_7$の，P$_{13}$はP$_{11}$の支柱穴と考えられる。P$_5$・P$_9$・P$_{12}$は，性格不明のピットである。なお，本跡における主柱穴の規模は，長径33～48cm・短径30～40cm・深さ25～55cmほどである。

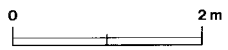
覆土は３層から成り，壁ぎわはローム粒子を中量含む褐色土，中央はローム粒子を少量と炭化粒子を微量含む黒褐色土が自然堆積している。

遺物は，中央の覆土中層から完形とほぼ完形の阿玉台式の深鉢形土器（第52図１・２）が２個

出土し，そのほか覆土上・中層を中心に阿玉台式土器片434片，土器片錘（第181図98・99）2点，黒浜式21片，諸磯式2片，浮島式2片，及び加曽利E式20片の土器片が出土している。阿玉台式土器以外の土器片は混入したものと思われ，本跡には伴わないと考えられる。



第51図　第66号住居跡実測図

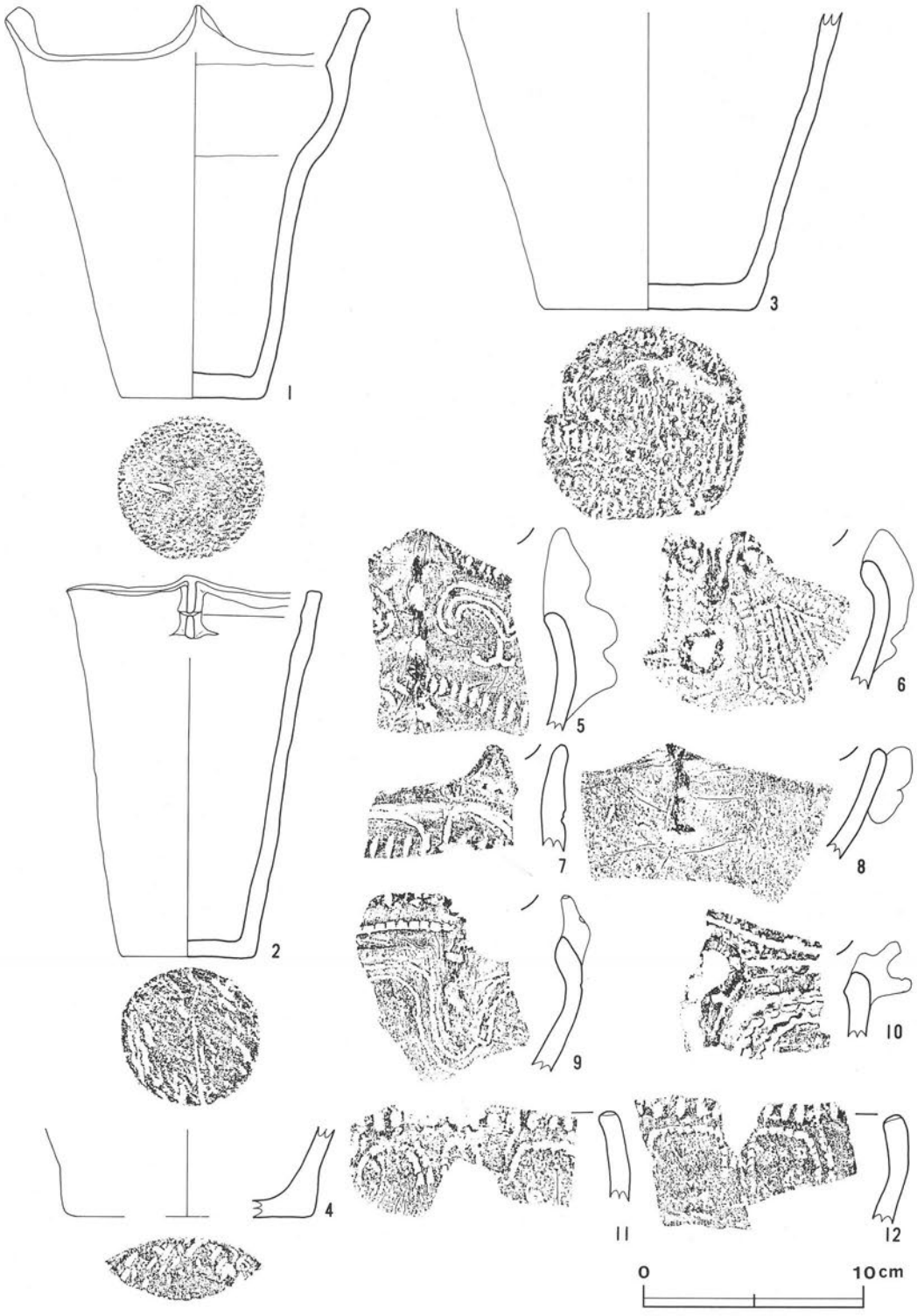


出土土器

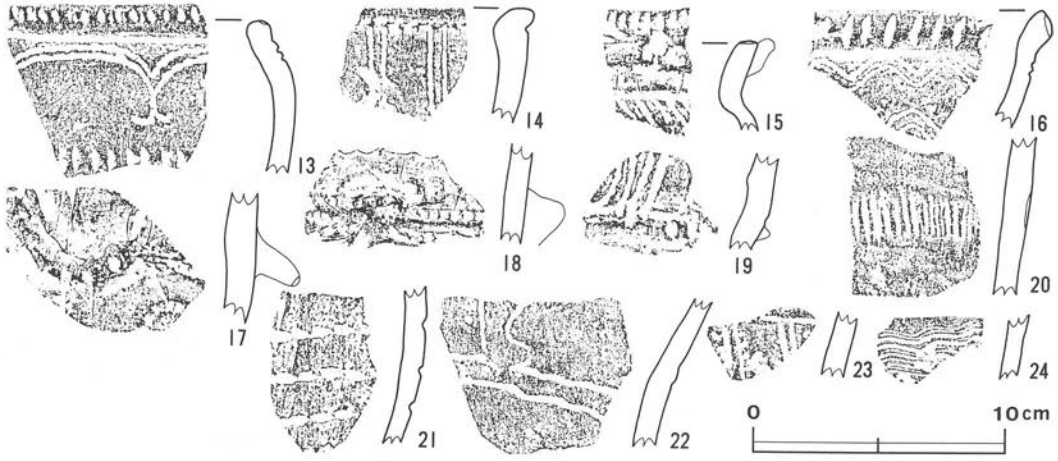
第66号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第52図 1	深鉢形土器 阿玉台	A 16.8 B 18.1 C 6.6	底部は平底を呈し，胴部は底部から外傾しながら立ち上がっている。4単位の波状を有する口縁部は内彎しながら立ち上がり，波状部がわずかに外傾する。口縁部の内面に明瞭な稜をもち，無文で底部には網代痕がわずかに認められる。波状部は斜位と縦位のナデ，内・外面は横位のナデが施されている。	砂粒・雲母・石英 にぶい橙色 良好	90%　11片 P93
2	深鉢形土器 阿玉台	A 11.7 B 17.6 C 6.1	底部は平底を呈し，胴部は底部からわずかに外傾しながら立ち上がっている。2単位の低い波状を呈する口縁部は，一方の波頂下に突起を有し，口唇部の一部にキザミ目が認められる以外は無文である。口縁直下に稜を有する。外面は縦位のナデが施されている。	砂粒・雲母・石英 にぶい赤褐色 良好	100%　11片 P94
3	深鉢形土器 阿玉台	B(13.7) C 9.6	胴部下位から底部にかけての土器片で，平底の底部からほぼ直線的に外傾して立ち上がっている。無文である。	砂粒・雲母・石英 にぶい橙色　普通	30%　9片 P136
4	深鉢形土器 阿玉台	B (4.0) C(11.6)	底部は平底を呈し，底部には網代痕が認められる。	砂粒・雲母・石英・ 長石 橙色 普通	10%　2片 P224

第52・53図5～24は，第66号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。5～6は口縁部片である。5～10は波状口縁を呈し，5は波頂部から波状を呈する小突起が備えられ，区画され



第52図　第66号住居跡出土土器実測図・拓影図(1)



第53図　第66号住居跡出土土器拓影図(2)

ている。区画内には３列の結節沈線文が施され，１本は渦巻状を呈し，先端が分かれている。口縁部下位には爪形文が１段横位に施されている。６は波状口縁の両側に粘土紐で渦巻状を作り，その下側に小突起と粘土紐を輪状に貼り付け，それぞれ目・鼻・口を表現していると思われる。突起の両側と口唇部直下に結節沈線文が施され，更に，細い刺突文が斜位に施されている。７は口唇部直下に沈線と粗雑な結節沈線文で楕円状の区画を施し，区画内にやや斜位の爪形文を施しているのが窺える。８は波頂下に１つのキザミ目を有する小突起が備えられている。９は口縁部に結節沈線文を施した小突起が備えられ，口唇部にはキザミ目を有している。小突起は縦位の隆帯に続いており，小突起と隆帯に沿って２列の結節沈線文が施されている。10は隆帯に沿って２列の刺突文が雑に施され，口唇部に２列の結節沈線文が施されている。11と12は口唇部直下に結節沈線文が逆「U」字状に施され，口唇部に押圧を有している。13は口唇部直下に１列と２列の連弧文が施され，爪形文も認められる。14は口唇部直下に１列，口唇部直下から縦位に４本の結節沈線文が施されている。15は口縁部下方と口唇部に異った結節沈線文が施され，口縁部下方は斜位に施されている。16は２列１組の波状沈線文が２段施され，肥厚する口唇部外端面にキザミ目が施されている。

17～24は胴部片である。17～19は結節沈線文が施され，17・18は小突起を有し，突起から結節沈線文が横位に施されている。19は縦位の隆帯が４列認められる。20は密な爪形文が１段施されている。21は３本の刺突文が横位に施されている。22～24は沈線が施され，22は縦位と横位に２本施されている。23は沈線に沿って小さい刺突文が施され，24は４本１組の波状沈線が２段施されている。

加曽利E期

第1号住居跡（第11図）

本跡は，当遺跡の北東側A5f$_1$区を中心に確認され，第15号住居跡の4m南西側に存在している。西側に位置する縄文時代中期の加曽利E期の第2号住居跡の西側のごく一部を除いて重複している。新旧関係はA－A′のセクション図から，本跡が新しい。

平面形は円形を呈し，長径方向はN－38°－Wを指し，規模は長径7.2m・短径6.5mである。壁はローム で硬く，ほぼ垂直に立ち上がり，壁高は30cmである。床面はほぼ平坦で，全体的に硬いロームであり，炉跡の周辺は踏み固められて硬く，特に北側が硬く締まっている。

炉跡は中央からやや東側に位置し，長径85cm・短径70cmの楕円形を呈し，床面を鉢状に30cmほど掘り込んでいる地床炉である。炉内には焼土粒子・ローム粒子を微量含む黒褐色土と，焼土粒子・焼土ブロック・ローム粒子を中量含む暗褐色土等が充満し，炉床はレンガ状に非常に硬く焼けてゴツゴツしている。ピットは10か所検出され，配列や規模からP$_1$～P$_7$が主柱穴と考えられる。主柱穴は壁のやや内側に規則的に配列され，規模は長径40～55cm・短径40～50cm・深さ20cm内外である。

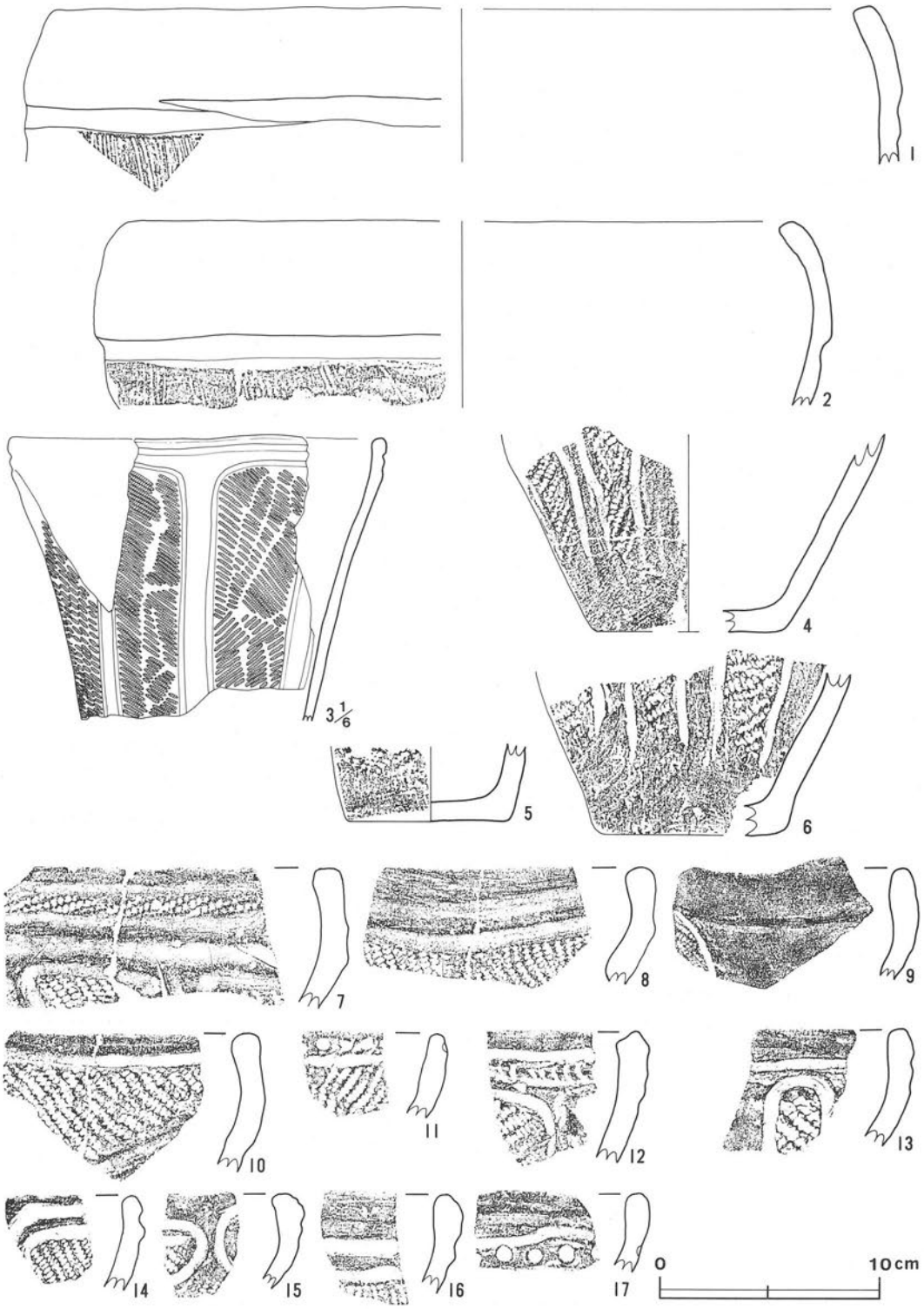
覆土はおおむね3層からなり，上層はローム粒子を微量含む黒褐色土と，ローム粒子・焼土粒子を微量含む極暗褐色土，下層はローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む黒褐色土がほぼ自然堆積の様相を呈している。

遺物は，南東側の床面から縄文時代中期の加曽利E式期に比定される深鉢形土器（第54図3）が口縁部から胴部上位にかけてつぶれた状態で出土し，土器片1,643片，土器片錘（第180図26・27）2点，有孔円板（第180図10・11）2点，土製品（第180図8）1点，及び石器（第180図64・66他）7点が覆土下層・中層を中心に出土している。また，中期阿玉台式土器片269片と，前期黒浜式土器片361片も覆土上層から出土しているが，これらは周囲からの流入と考えられる。

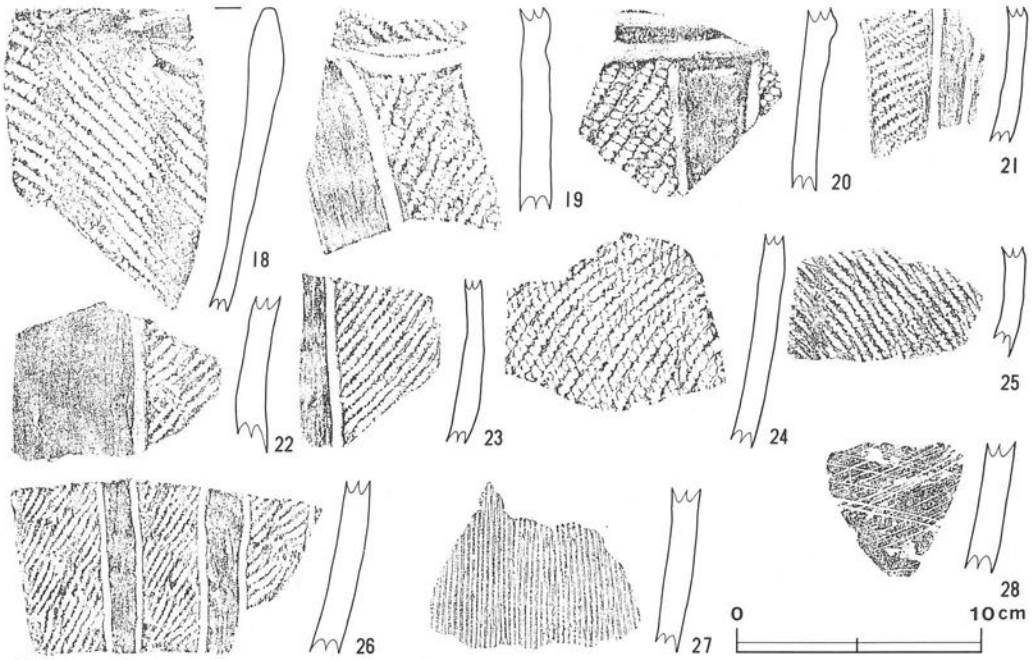
出土土器

第1号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼土・色調	備考
第54図 1	深鉢形土器 加曽利EIII	A(37.8) B (7.1)	口縁部は胴部上位から内彎しながら立ち上がる。胴部は上位のみ残り，やや内彎気味に立ち上がるものと思われる。口縁部文様帯は無文で，口縁部文様帯と胴部文様帯間に沈線が1本施され，一巡している。胴部文様帯には不明瞭ながら縦位の沈線が窺える。口縁部外面は横位のナデが施されている。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	10%　6片 P62
2	深鉢形土器 加曽利EIII	A(30.8) B (8.8)	胴部上位から口縁部にかけての破片で，口縁部は胴部上位から内彎しながら立ち上がる。口縁部文様帯は無文で，口縁部文様帯と胴部文様帯の間には横位に1本の沈線が施されている。胴部文様帯には縦位の条線がわずかに窺える。口縁部外面はていねいな横位のナデ，内面は横位のナデが施されている。	砂粒・長石 褐灰色 良好	10%　4片 P58



第54図　第１号住居跡出土土器実測図・拓影図(1)



第55図　第１号住居跡出土土器拓影図(2)

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備　考
第54図 3	深鉢形土器 加曽利ＥⅢ	A(17.3) B 13.0	胴上位からごく軽く外傾し，口縁部は内彎している。口縁部には１本の沈線が巡っているものと考えられる。胴部文様帯は逆「U」字文が施文され，区画内には単節ＬＲの縄文が施されている。また，一部の区画内中位以下には単節ＬＲの縄文が施されている。逆「U」字文との間には磨消帯が垂下している。	砂粒・雲母 褐灰色 普通	30%　７片 Ｐ３
4	深鉢形土器 加曽利ＥⅢ	B (9.1) C (8.7)	底部は平底を呈し，胴部は底部から大きく外傾しながら立ち上がる。胴部は磨消帯が垂下し，区画間には単節ＬＲの縄文が施されている。胴部下位は横位のナデが加えられている。	砂粒・石英・長石 橙色 良好	10%　３片 Ｐ56
5	深鉢形土器 加曽利ＥⅢ	B (3.5) C　7.5	底部は平底を呈し，胴部は底部からやや外傾気味に立ち上がる。胴部下位には不明瞭な縄文がわずかに認められ，横位のナデが施されている。	砂粒・石英・長石 にぶい橙色 普通	10%　１片 Ｐ57
6	深鉢形土器 加曽利ＥⅢ	B (8.5) C (9.2)	底部は平底を呈し，胴部は底部から外傾しながら立ち上がる。胴部は幅の狭い磨消帯が垂下し，その間には単節ＬＲの縄文が雑に施されている。胴部下位は雑なナデが施されている。	砂粒・石英・長石 橙色 普通	10%　１片 Ｐ60

第54・55図７～28は，第１号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。７～18は口縁部片である。７は隆帯と沈線によって区画され，区画内に単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。胴部は隆帯と沈線によって区画され，区画内に単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。８は隆帯によって口縁部と胴部が区画され，口縁部は無文，胴部は単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。９は波状を呈し，無文で胴部は磨り消され，わずかに縄文が認められる。10は単節ＲＬの縄文が斜位に施され，11は口唇部直下に刺突文と沈線が施されている。単節ＬＲの縄文が認められる。12は２本の沈線の間に爪形文を施し，沈線で楕円形状に区画し，区画内に単節ＬＲの縄文が施されている。13～15は沈線によって区画され，区画内に単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。16

は２本の太い沈線が横位に施されている。17は沈線と円形刺突文が施され，18は単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。

19～28は胴部片である。19～23は磨消帯が施され，単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。24・25は単節ＬＲとＲＬの縄文が施されている。26は幅の狭い磨消帯と，無節Ｌの縄文が斜位に施されている。27は条線文が縦位に，28は細い沈線が格子状に施されている。

第２号住居跡（第11図）

本跡は，当遺跡の北東側A4f_0区を中心に確認され，第15号住居跡の６ｍ南西側に存在している。本跡は西側に位置する縄文時代前期の第12・16号住居跡を掘り込み，縄文時代中期の加曽利Ｅ期の第１号住居跡に切られている。

平面形はごくわずかな残存部から推定して，円形を呈するものと考えられる。長径方向は不明であるが，ほぼ5.3ｍの長径を有する住居跡と思われる。壁は北西壁と南西壁のごく一部が残存し，ロームで硬く，垂直に立ち上がっている。その他の壁は，調査中の掘り込みにより残存しない。壁高は25～35cmを測る。床面はほぼ平坦で硬いロームを呈し，炉周辺は踏み固められて特に硬く締まっている。第１号住居跡との床面の高低差はなく，ほぼ平坦である。

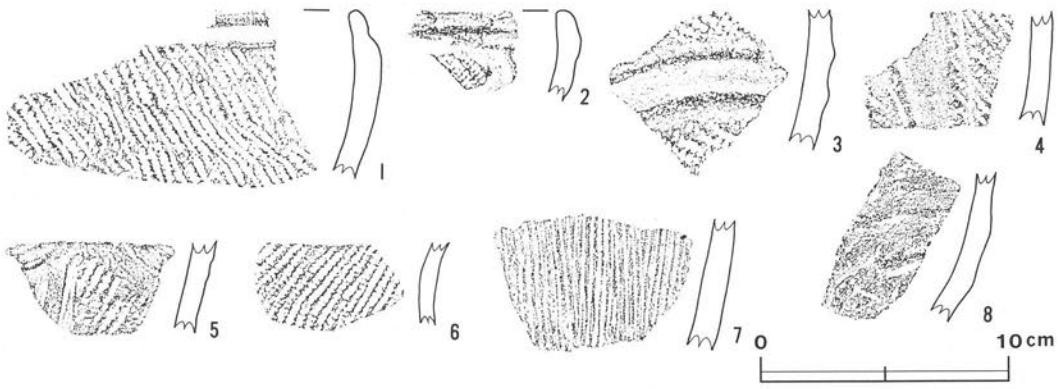
炉跡は中央からわずかに東側に位置し，長径73cm・短径63cmの楕円形を呈し，床面を鉢状に22cmほど掘り込んでいる地床炉である。炉内には，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む暗褐色土と，ローム粒子・焼土粒子・ローム大ブロックを微量含む暗褐色土等が充満し，炉床はレンガ状に非常に硬く焼けている。ピットは７か所検出され，P_1～P_3が主柱穴と考えられる。主柱穴は破線で示した推定壁から内側に配列されているものと思われ，規模は長径45～50cm・短径37～40cm・深さ20cm内外である。覆土は第１号住居跡と同じである。

遺物は，覆土下層を中心に全域から縄文時代中期の加曽利Ｅ式の土器片200片が出土しているが，復元できたものはなかった。そのほか阿玉台式の土器片20片，前期黒浜式の土器片77片，土製円板（第180図16・17）２点，石器（185図１他）３点が覆土中から出土している。

出土土器

第56図１～８は，第２号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。１・２は口縁部片である。１は口唇部直下に沈線が施され，更に，単節ＲＬの付加条縄文が斜位に施されている。２は沈線による楕円形が区画され，区画内に単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。

３～８は胴部片である。３～５は磨消帯を有し，３は単節ＬＲの縄文が斜位に施され，なぞりが見られる。４は摩耗しているが単節ＬＲの縄文が斜位に施されているのがわずかに認められる。５と６は単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。７は条線文が縦位に施され，８は２本の隆帯を有するが縄文は認められない。



第56図　第２号住居跡出土土器拓影図

第13号住居跡（第57図）

本跡は，当遺跡の北東側A4f₀区を中心に確認され，第１号住居跡の約２ｍ南西側に存在している。西側に位置する縄文時代前期の第３号住居跡をわずかに掘り込んでいる。

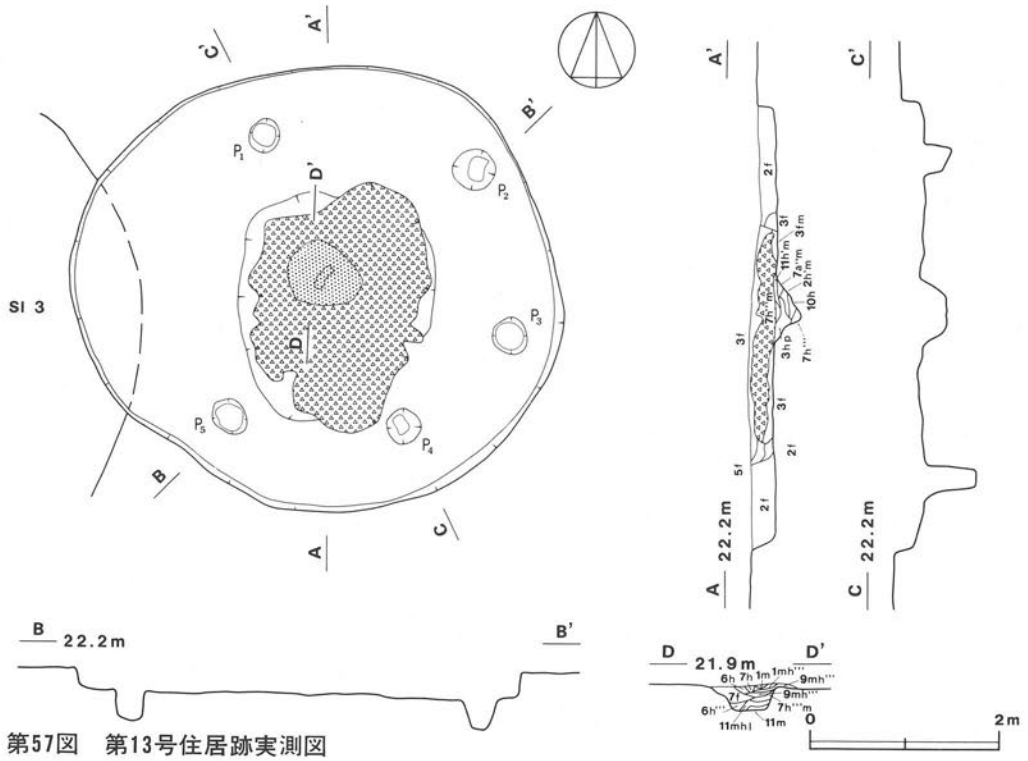
平面形はほぼ円形を呈し，長径方向はＮ－86°－Ｗを指し，規模は長径5.2ｍ・短径4.7ｍである。壁はロームで硬く，北壁は垂直に，その他の壁はほぼ垂直に立ち上がり，壁高は20～25cmを測る。床面はほぼ平坦で，硬く締まっているロームであり，炉の周辺は踏み固められて特に硬く締まっている。

炉跡は中央に位置し，長径60cm・短径40cmの卵形を呈し，床面を鉢状に30cmほど掘り込んだ地床炉である。炉内には焼土粒子を多量含む赤褐色土と，焼土粒子多量・灰を含む暗赤褐色土等が充満し，炉床はレンガ状に硬く焼けてゴツゴツしている。ピットは５か所検出され，配列や規模からP_1～P_5とも主柱穴と考えられる。主柱穴は壁ぎわにほぼ規則的に配列され，規模は直径35～40cm・深さ30～50cmである。

ほぼ中央の貝層の部分を除いた周辺の覆土は１層から成り，ローム粒子・焼土粒子を微量含む暗褐色土が堆積し，また，ほぼ中央部から南側にかけてヤマトシジミを主体とした貝層が長径2.4ｍ・短径２ｍ・厚さほぼ20cmの規模で不整円形状に堆積している。

なお，図中の炉跡の部分は貝層と炉跡のマークが重複すると見にくいので，貝層のマークをはずしているが，実際には炉跡の上部にも貝層は存在している。以下の第14・15号住居跡も同じである。

遺物は，南壁ぎわの床面や覆土下層から加曽利Ｅ式の半完形の深鉢形土器（第58図２）がつぶれた状態で出土した。また，壁ぎわの床面や覆土下層から土器片284片や土器片錘（第180図29・30）２点，及び磨石１点が出土している。



第57図　第13号住居跡実測図

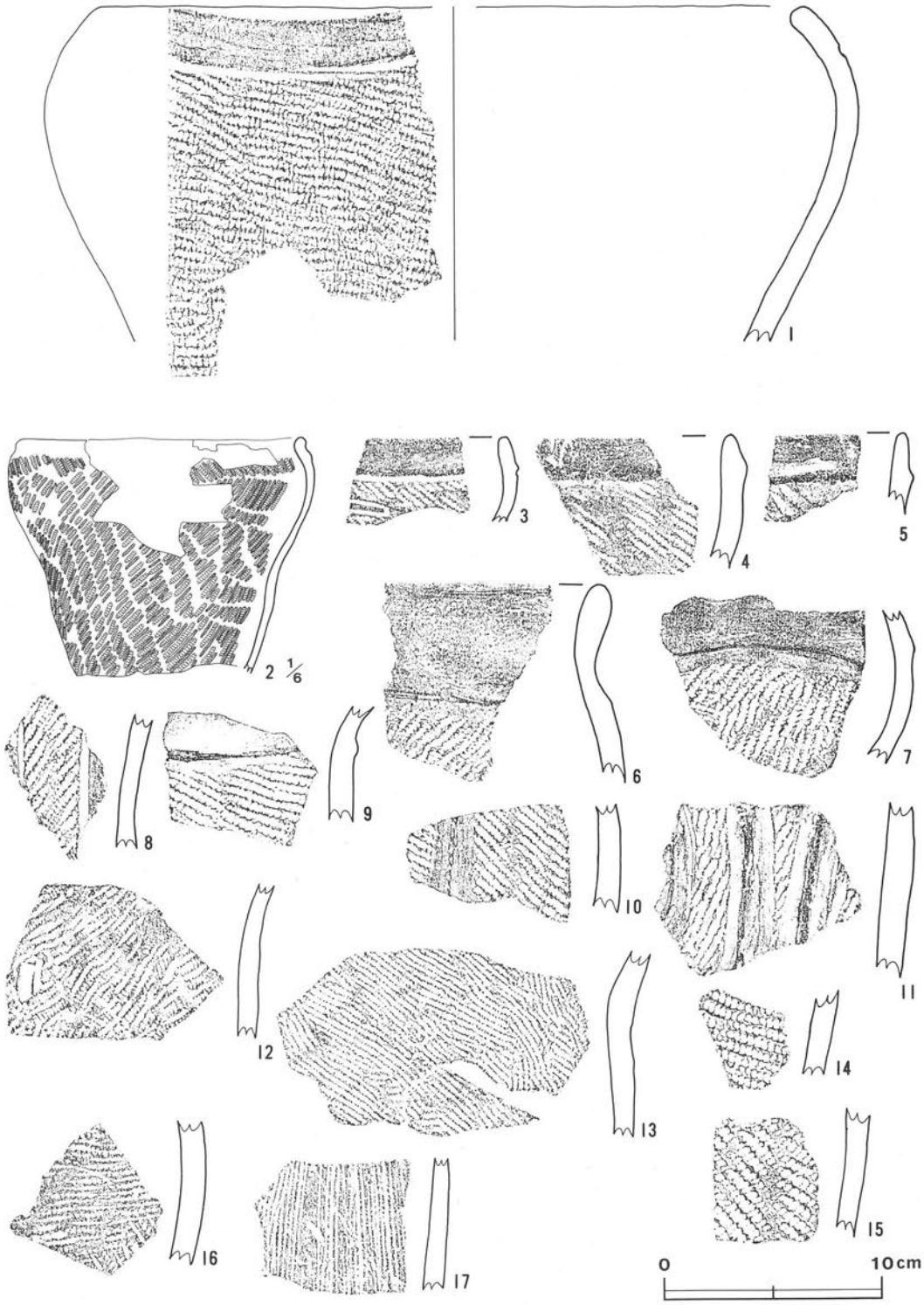
出土土器

第13号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備　考
第58図 1	深鉢形土器 加曽利ＥⅣ	A(32.2) B(15.6)	キャリパー形を呈する胴部から口縁部にかけての土器片である。口縁部文様帯は無文で，口縁部直下に１本の細い沈線を横位に施し，胴部と区画している。胴部文様帯は単節ＲＬが斜位に施されている。口縁部内・外面は横位のナデが施されている。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	10%　３片 P74
2	深鉢形土器 加曽利ＥⅣ	A(25.5) B(22.0)	胴部は中位から外反しながら立ち上がり，内彎しながら口縁部に至る。口縁部文様帯は沈線が口縁直下に巡っていると考えられる。胴部文様帯は単節ＬＲの縄文が施されている。器内面は横位のナデが施されている。	砂粒・長石 にぶい褐色 良好	30%　22片 P２

第58図３～17は，第13号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。３～６は無文帯を有する口縁部片である。３は隆線と沈線が横位に巡り，単節ＬＲの縄文が施されている。４は隆線が横位に巡り，単節ＬＲの縄文がいずれも斜位に施されている。５は無節の縄文が浅く斜位に施されている。６は隆線が横位に巡り，単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。

７～17は胴部片である。８・10・11は磨消帯を有し，７・８は単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。７はなぞりが見られる。９・10は単節ＲＬの縄文が，11は無節Ｌの縄文がそれぞれ斜位に施されている。12は全面に撚りの細い単節ＬＲの縄文が斜位に施され，13～15は単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。13は撚りの細い縄文である。16は縄文が横位に認められ，17は条線文が縦位に施されている。



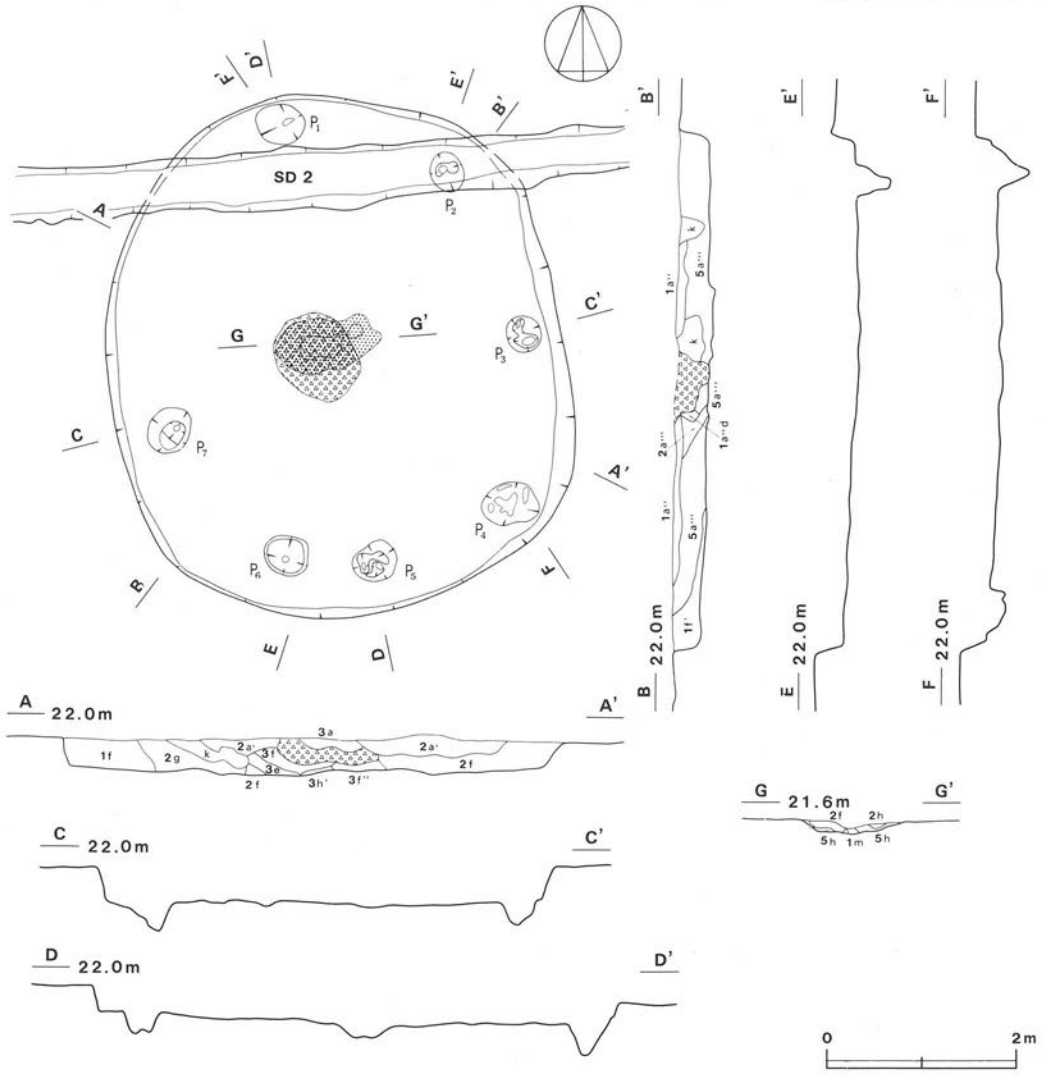
第58図　第13号住居跡出土土器実測図・拓影図

第14号住居跡（第59図）

本跡は，当遺跡の北東側A5e$_1$区を中心に確認され，南東側に位置する第１号住居跡に隣接している。また，第２号溝に北側を掘り込まれている。

平面形は楕円形を呈し，長径方向はN－10°－Wを指し，規模は推定で長径5.6m・短径4.8mである。壁はロームで硬く，垂直気味に立ち上がっている。床面は平坦で，やや軟らかいロームであり，炉跡の周辺は若干低い。

炉跡は中央に位置し，長径110cm・短径55cmの不整楕円形を呈し，床面を皿状に５～10cm掘り込んでいる地床炉である。炉内には焼土粒子を微量含む暗褐色土と極暗褐色土，灰を含む褐色土等が堆積し，炉床はレンガ状に硬く焼けてゴツゴツしている。ピットは７か所検出され，配列や規



第59図　第14号住居跡実測図

模からP_1～P_7が主柱穴と考えられる。主柱穴は壁ぎわにほぼ規則的に配列しており，規模は長径40～60cm・短径35～45cm・深さ20～30cmである。

覆土はB－B′のセクション図のように，上層はローム粒子を中量含む暗褐色土，下層はローム粒子・焼土粒子を少量含む黒褐色土等が，一部の自然堆積を除いてやや不自然な堆積の様相を呈している。中央にはヤマトシジミを主体とした貝層が長径95cm・短径80cmの楕円形状に，覆土上層から中層にかけて15～30cmの厚さで堆積している。

遺物は，炉跡の西側の床面と西側覆土下層・中層を中心に加曽利E式の土器片763片，土器片錘（第180図31）1点，土製円板（第180図21）1点，磨製石斧（第187図32）・磨石（第188図74）各1点が出土している。この中には把手2点も含まれ，また，阿玉台式土器片や黒浜式土器片が少量ではあるが覆土上・中層から出土している。

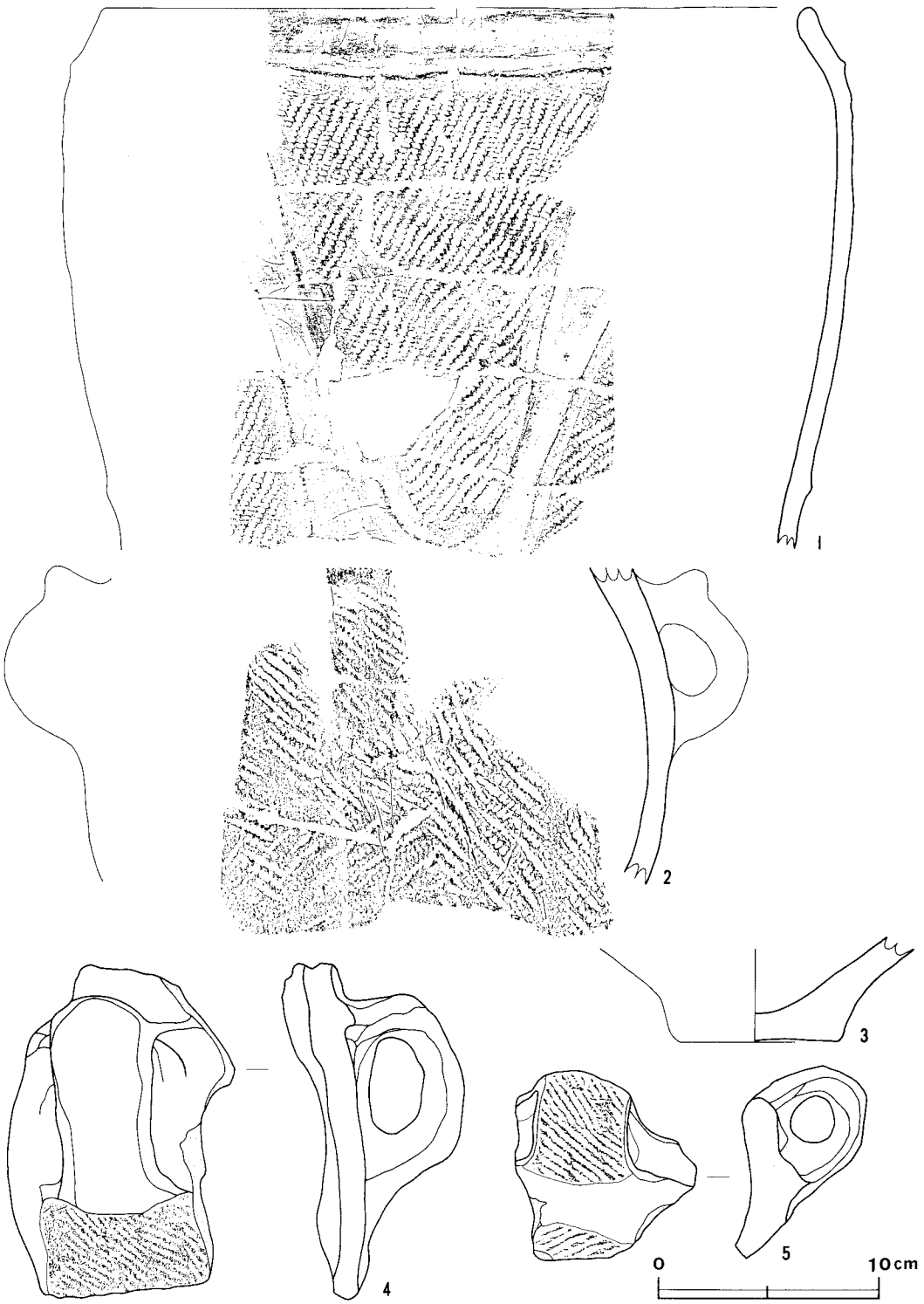
出土土器

第14号住居跡出土土器観察表（第60図）

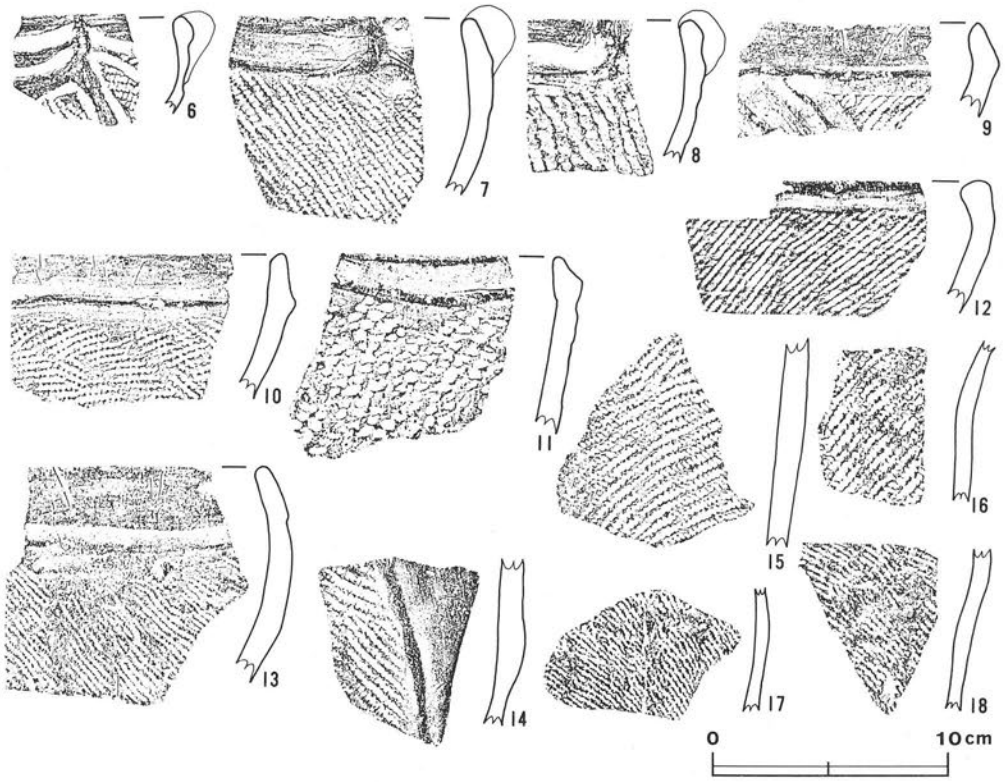
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第60図 1	深鉢形土器 加曽利EⅣ	A(35.0) B(30.1)	胴部上位から口縁部にかけて内彎している土器片である。口縁部は無文で，胴部との境をなぞりを加えた微隆線で区画している。胴部文様帯は2本の微隆線を伴う幅の狭い磨消の「U」字文と逆「U」字文が施され，微隆線の両側にはなぞりが見られる。区画内には単節LRの縄文が斜位に施されている。口縁部外面はていねいな横位のナデ，口縁部・胴部内面は横位のナデが施されている。	砂粒・石英・長石 明赤褐色 普通	20%　18片 P76
2	深鉢形土器 加曽利EⅣ	B(14.5)	把手をもつ胴部片で，内彎しながら立ち上がっている。把手上端のみ無文で，その他は単節RLの縄文が斜位に施されているが摩滅してやや不明瞭である。器面は単節RLの縄文が斜位に施されているが，一部回転方向を変えて施文している。胴部内面は横位のナデが施されている。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	10%　5片 P75
3	深鉢形土器 加曽利E	B (4.3) C　7.2	底部は平底を呈し，胴部は底部から強く外傾しながら立ち上がっている。無文の土器で，器外面は横位のナデが施されている。	砂粒・石英・長石 橙色 不良	10%　2片 P161
4	深鉢形土器 加曽利EⅣ	B(15.6)	把手の部分である。把手は無文で，口縁部から胴部にかけて無節Lの縄文が斜位に施されているが，一部不明瞭のところが見られる。	砂粒・長石 橙色 普通	5%　3片 P440
5	深鉢形土器 加曽利EⅣ	B (8.8)	把手の部分である。把手には無節Lの縄文が斜位に施され，胴部は無節Rの縄文が斜位に施され，把手の付け根は横位のナデが施されている。	砂粒 にぶい橙色 普通	5%　1片 P441

第61図6～18は，第14号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。6～13は口縁部片である。6～13は無文帯を有し，6～8は口唇部直下に小突起が施されている。6は縄文を縦位に施した小突起を備え，その左右に沈線を巡らしている。胴部は沈線で三角形状の区画文を施し，区画内に単節LRの縄文を斜位に施している。薄手の土器片である。7～9は単節RLの縄文を斜位に施し，9は無文帯下に横位の隆線を施している。10は横位の隆線を巡らし，その両側にナデを施し，単節LRの縄文を横位に施している。11は撚りの太い単節RLの縄文が施されている。12は無節Lの縄文，13は無節Rの縄文がそれぞれ斜位に施されている。

14～18は胴部片である。14は磨消帯と斜位の単節LRの縄文が施されている。15～18は全面に



第60図　第14号住居跡出土土器実測図(1)



第61図　第14号住居跡出土土器拓影図(2)

縄文が施され，15・16は単節ＲＬ，17は撚りの細かい単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。18は無節Ｒの縄文が斜位に施されている。

第15号住居跡（第62図）

本跡は，当遺跡の北東端A5d_2区を中心に確認され，本跡の北東側の一部はエリヤ外にのび調査できなかった。また，北側は第１号溝に深く切られ，更に，中央からやや北側は第２号溝に浅く掘り込まれている。

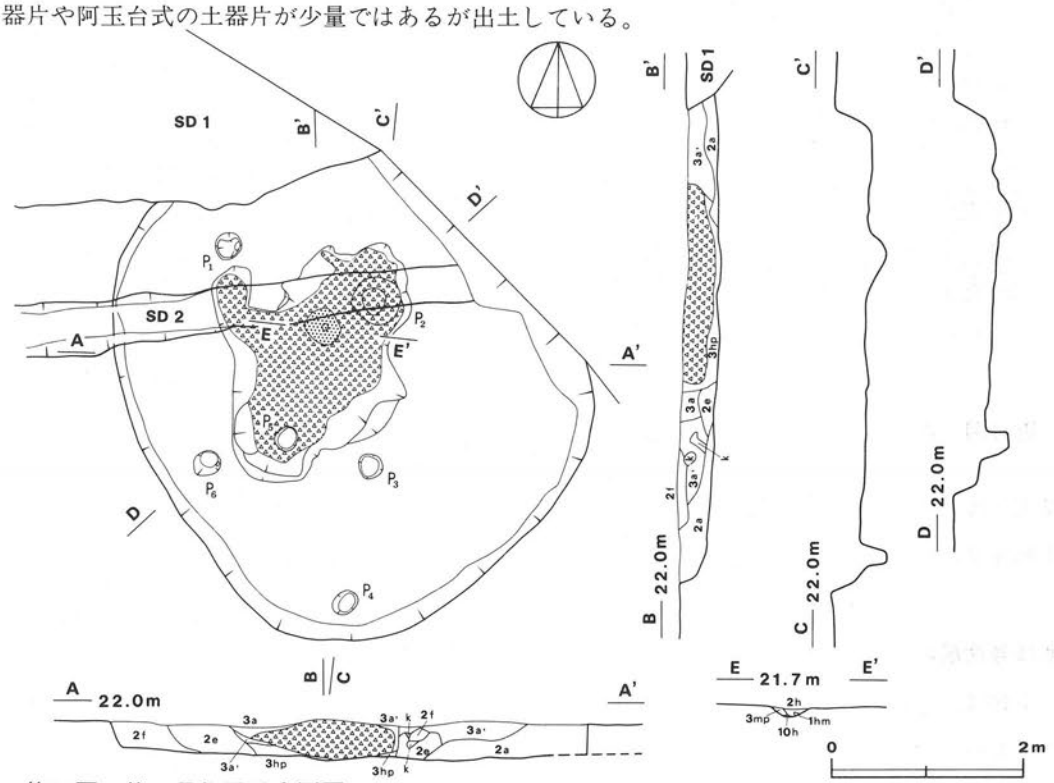
平面形は楕円形で，長径方向はＮ－34°－Ｗを指すものと推定される。規模は長径5.5ｍ・短径4.8ｍほどと思われる。壁はロームで硬く締まり，南壁はややゆるやかに，西・南西壁は外傾しながら立ち上がり，壁高は25～30cmである。床面はほぼ平坦で硬いロームである。

炉跡はやや北側に位置し，長径40cm・短径35cmの不整円形を呈し，床面を皿状に10cmほど掘り込んでいる地床炉である。炉内には焼土粒子を微量含む暗褐色土，焼土粒子微量と灰を含む褐色土等が堆積し，炉床は硬く焼けてゴツゴツしている。ピットは６か所検出され，位置や規模からP_1・P_4・P_6が主柱穴と考えられる。P_1は壁からやや内側に，P_4・P_6は壁ぎわに位置し，規模は

長径30cm・短径23～28cm・深さ30cm内外である。P_3・P_5は支柱穴と考えられる。P_2は直径50cm・深さ20cmの規模を有し，貝が堆積している。

覆土はおおむね４層から成り，上層はローム粒子を微量含む黒褐色土，下層は焼土粒子や貝を微量含む黒褐色土が自然堆積の様相を呈している。また，中央から北西側の覆土上層から下層にかけてヤマトシジミを主体とした貝層が不定形状に堆積している。

遺物は，床面や覆土下層及び中層から加曽利Ｅ式の土器片328片，有孔円板（第180図12）１点，及び石器（第185図16他）２点が出土している。これらの中で接合・復元できたものはない。なお，ほぼ中央の床面から軽石製浮子（第188図54）が出土し，その他覆土上層から黒浜式の土器片や阿玉台式の土器片が少量ではあるが出土している。

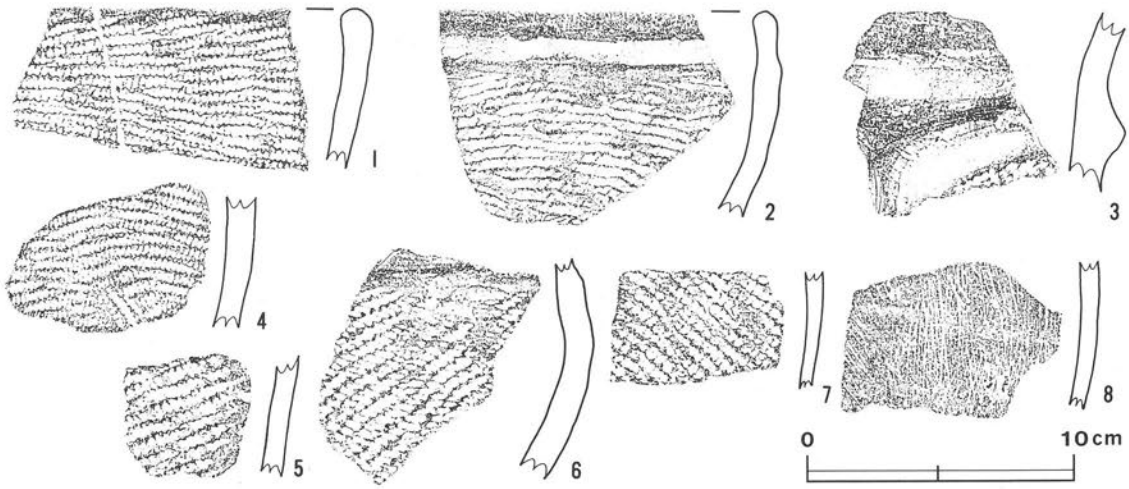


第62図　第15号住居跡実測図

出土土器

第63図１～８は，第15号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。１～３は口縁部片である。１は口唇部直下から単節ＬＲの縄文が施されている。２は口唇部直下に１本の沈線を横位に巡らし，その下に無節Ｒの縄文を横位に施している。３は隆帯による楕円文が施され，楕円内に縄文がわずかに認められる。

４～８は胴部片である。４～７は全面に単節縄文が斜位に施され，４・５はＬＲ，６・７はＲＬの縄文である。８は条線文が縦位に施されている。



第63図　第15号住居跡出土土器拓影図

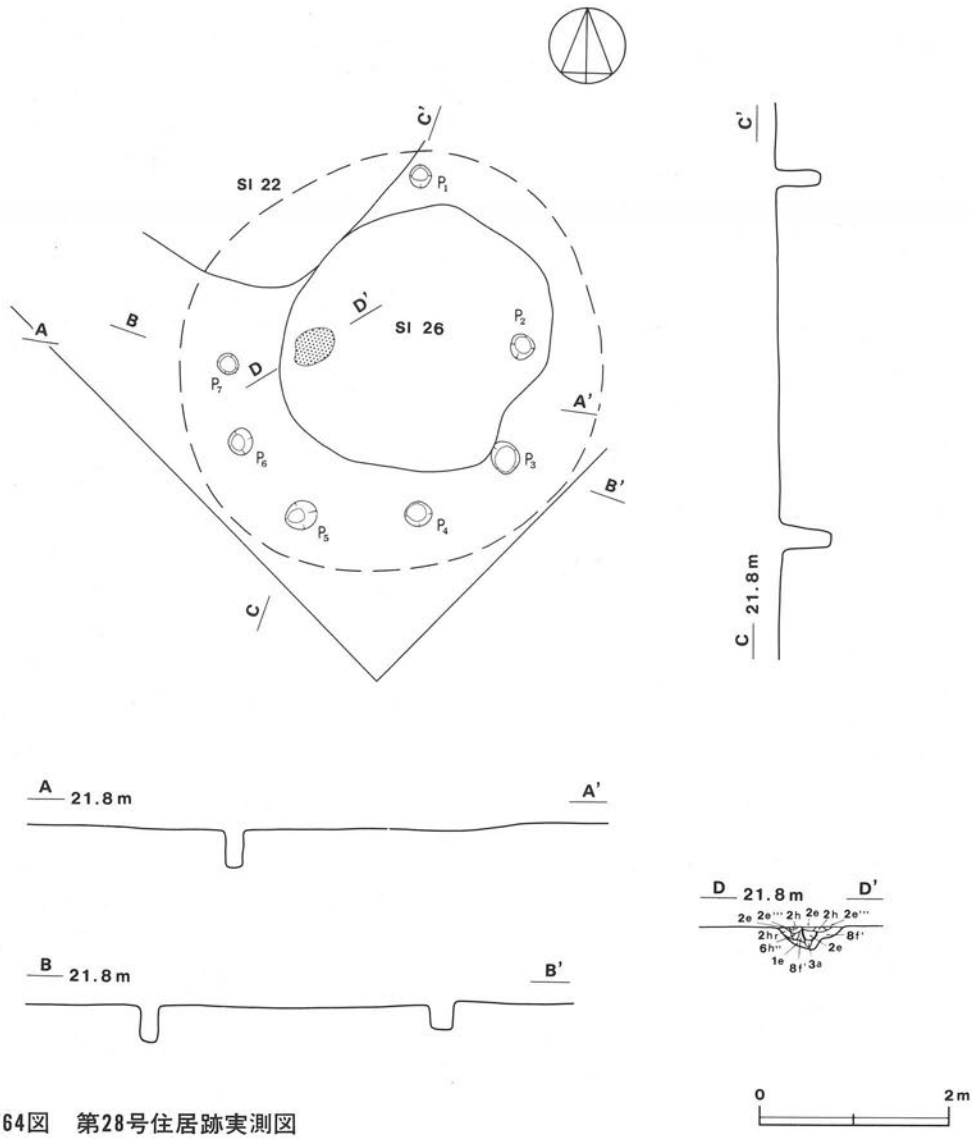
第28号住居跡（第64図）

本跡は，縄文時代中期の阿玉台式期の第26号住居跡を調査している折に，その覆土上面から土器埋設炉が検出されたことにより確認されたもので，調査エリヤ南東側の境界付近の第26号住居跡と重複する形でE2f$_4$区から検出された。また，本跡の北側は古墳時代の第22号住居跡の構築によりわずかに掘り込まれている。

平面形は柱穴の位置等から直径4.5mほどの円形を呈するものと思われる。壁は重機による表土除去の際に削平され，壁高等は不明である。床面は重複部分を除いて平坦で硬いロームである。

炉跡は位置的に西側と思われ，長径50cm・短径35cmの楕円形を呈し，床面を鉢状に25cmほど掘り込んだ中に口縁部と底部を欠損した加曽利E期の深鉢形土器の胴部片（第65図1）を埋め込み，土器埋設炉としている。埋設土器は火を受けてややもろくなっており，土器内には焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子を微量含む暗褐色土が堆積している。埋設土器の周辺は焼土粒子を中量含む赤褐色土やローム粒子・焼土粒子を少量含む極暗褐色土等が堆積している。ピットは7か所検出され，P$_1$～P$_7$が主柱穴と考えられる。P$_2$～P$_7$は規則的に配列され，規模は長径23～33cm・短径22～30cm・深さ25～53cmである。P$_1$は北側に位置し，P$_2$からやや離れているP$_4$は53cmと最も深い。

遺物は，覆土下層を中心に埋設土器として使用された深鉢形土器の胴部片（第65図1）と加曽利E式土器片162片及び土器片錘（第180図33）1点，敲石1点，剥片1点そのほかに，黒浜式・阿玉台式・弥生式及び土師器の土器片が少量ではあるが出土している。



第64図　第28号住居跡実測図

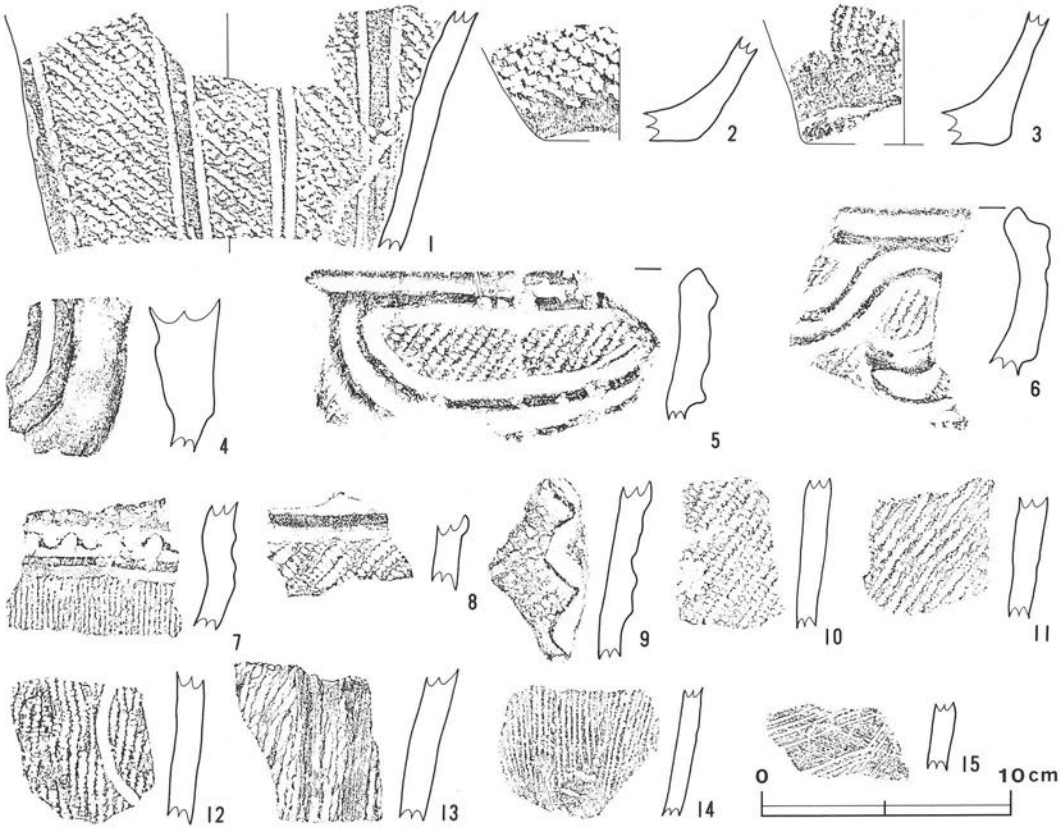
出土土器

第28号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備　考
第65図 1	深鉢形土器 加曽利ＥⅡ	B (9.7)	胴部は外傾しながら立ち上がっている。口縁部と底部は欠損している。胴部は幅の狭い磨消帯が垂下し，磨消帯の間には単節ＲＬの縄文が施されている。内面は剝離している。	砂粒 にぶい橙色 普通	30%　7片 埋設土器 P77
2	深鉢形土器 加曽利Ｅ	B (3.7) C (6.4)	底部は平底を呈し，胴部は底部から外傾しながら立ち上がっている。胴部には単節のＲＬの縄文が斜位に施されている。底部直上は横位のナデが施されている。	砂粒 橙色 普通	10%　1片 P168
3	深鉢形土器 加曽利Ｅ	B (5.0) C (8.4)	底部は平底を呈し，胴部は底部から外傾しながら立ち上がっている。胴部は単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。底部直上は横位のナデが施されている。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	10%　1片 P169

第65図４～15は，第28号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。４は橋状把手の一部分で，把手の内側に沈線が施され，外側から内側に向って凹んでいる。５～７は口縁部片である。５・６は隆帯と沈線による半楕円文や渦巻文で区画され，区画内には単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。７は口縁部に刺突文と沈線が横位に施され，口縁部下位に縦位の撚糸文が施されている。

８～15は胴部片である。８～13は単節の縄文が施されている。８は横位の隆帯と単節ＬＲの縄文が施され，９は蛇行沈線文と単節ＬＲの縄文が施されているのがわずかに認められる。10・11は単節ＲＬの縄文が斜位に施され，12は単節ＲＬの縄文と，沈線による曲線が施されている。13は沈線を２本垂下させ，太い撚糸文を斜位に施している。14は条線文を縦位に，15は沈線で格子状の文様を施している。



第65図　第28号住居跡出土土器実測図・拓影図

第30号住居跡（第66図）

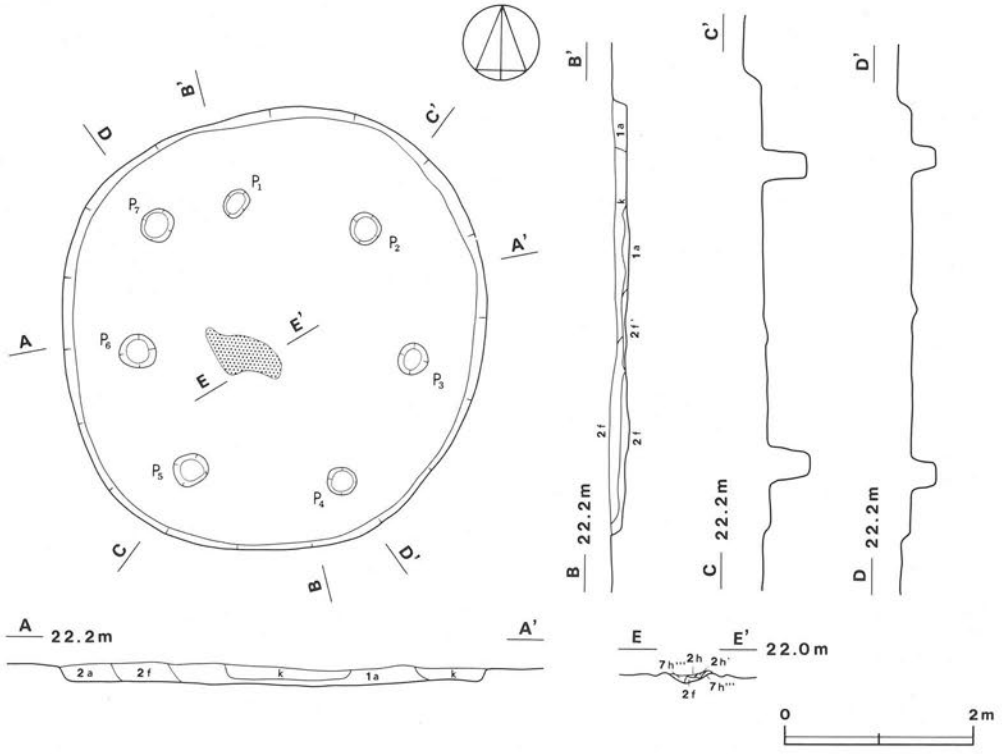
本跡は，当遺跡の中央部C4e₂区を中心に確認され，第67号住居跡の19ｍ東側に存在している。平面形は円形を呈し，長径方向はＮ－37°－Ｅを指し，規模は長径4.9ｍ・短径4.6ｍである。壁

はローム で硬く，外傾しながら立ち上がっている。壁高は10～20cmで，南壁が浅い。床面は平坦で硬いロームであり，炉の周辺は踏み固められて硬く締まっている。

炉跡はやや南西側に位置し，長径90cm・短径40cmの不定形を呈し，床面を皿状に12cmほど掘り込んでいる地床炉である。炉内には焼土粒子を多量含む暗赤褐色土と，焼土粒子を少量含む暗褐色土等が堆積し，炉床は硬く焼けている。ピットは７か所検出され，配列や規模からP_1～P_7が主柱穴と考えられる。主柱穴は壁に沿ってほぼ規則的に配列され，規模は長径30～50cm・短径20～35cm・深さ25～40cmである。

覆土はかなり攪乱を受けているが，おおむね１～２層から成り，上層から下層にかけてローム粒子を微量含む褐色土と，ローム粒子・焼土粒子を微量含んだ色調に若干の相違のある暗褐色土が堆積している。

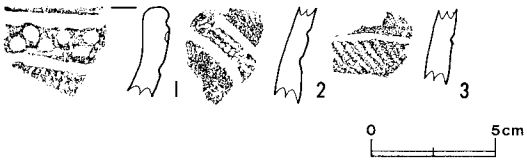
遺物は，床面や覆土下層から加曽利Ｅ式の土器片11片，磨石１点が出土し，覆土上層からは黒浜式の土器片８片が出土している。なお，これらの土器片で接合・復元できたものはなかった。



第66図　第30号住居跡実測図

出土土器

第67図１～３は，第30号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。１は口縁部片で，口唇部直下と口縁部下位に２本の沈線を横位に施し，その間に２列の刺突文を交互に施している。



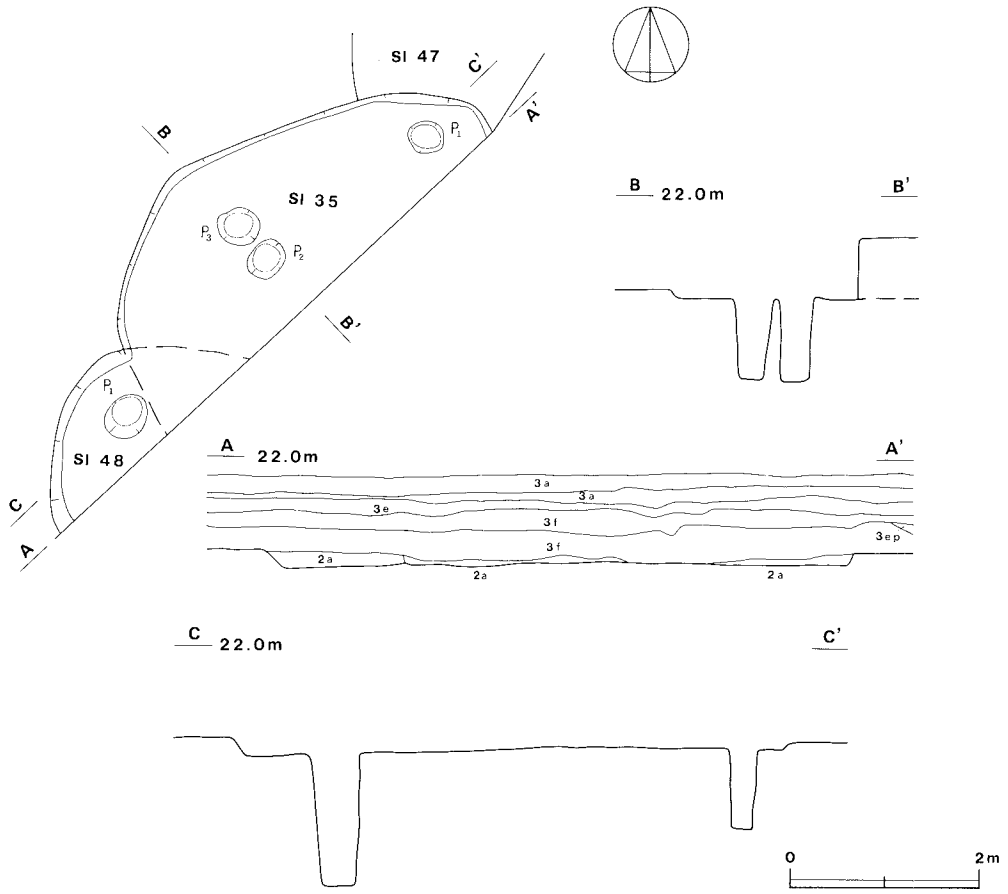
2・3は胴部片で，磨消帯を有し，単節RLの縄文がそれぞれ斜位に施されている。

第67図　第30号住居跡出土土器拓影図

第35号住居跡（第68図）

本跡は，当遺跡の中央部D3c$_5$区を中心に確認され，調査エリヤの南東側境界に存在し，本跡の南東側約半分はエリヤ外のため調査できなかった。本跡の北側に位置する縄文時代中期加曽利E期の第47号住居跡と重複し，本跡が掘り込んでいることから本跡の方が新しい時期の住居跡と判明したが，南西側に位置する縄文時代中期の第48号住居跡との新旧関係は不明である。

平面形は調査した部分から判断して円形を呈するものと思われる。長径方向は不明であるが，最大径は4.8m前後を有するものと思われる。壁はロームで硬く，ゆるやかに立ち上がっており，壁高は10～20cmである。床面は平坦で全体的に硬く，特に壁周辺を除いて踏み固められて硬く締



第68図　第35・48号住居跡実測図

まっている。

炉跡は確認できなかった。ピットは3か所検出され，位置や規模からP_1～P_3が主柱穴と考えられる。P_1は壁ぎわに，P_2とP_3は壁のやや内側に双円状の形で検出されている。各ピットの規模は長径36～44cm・短径32～40cm・深さ84～88cmである。

覆土はローム粒子を微量含む暗褐色土が堆積している。

遺物は，北西壁ぎわのほぼ床面から半完形の深鉢形土器（第69図1）が逆位の状態で出土したほか，北壁の覆土下層からぐい呑み状の小形土器（第69図2）が斜位の状態で出土している。そのほか，土器片530片，土器片錘（第180図34～38）5点，石製円板（第188図60）1点，石器（第187図35他）7点が出土している。なお，覆土上層の遺物として茅山・黒浜式の土器片少量，阿玉台式土器片78片が出土している。

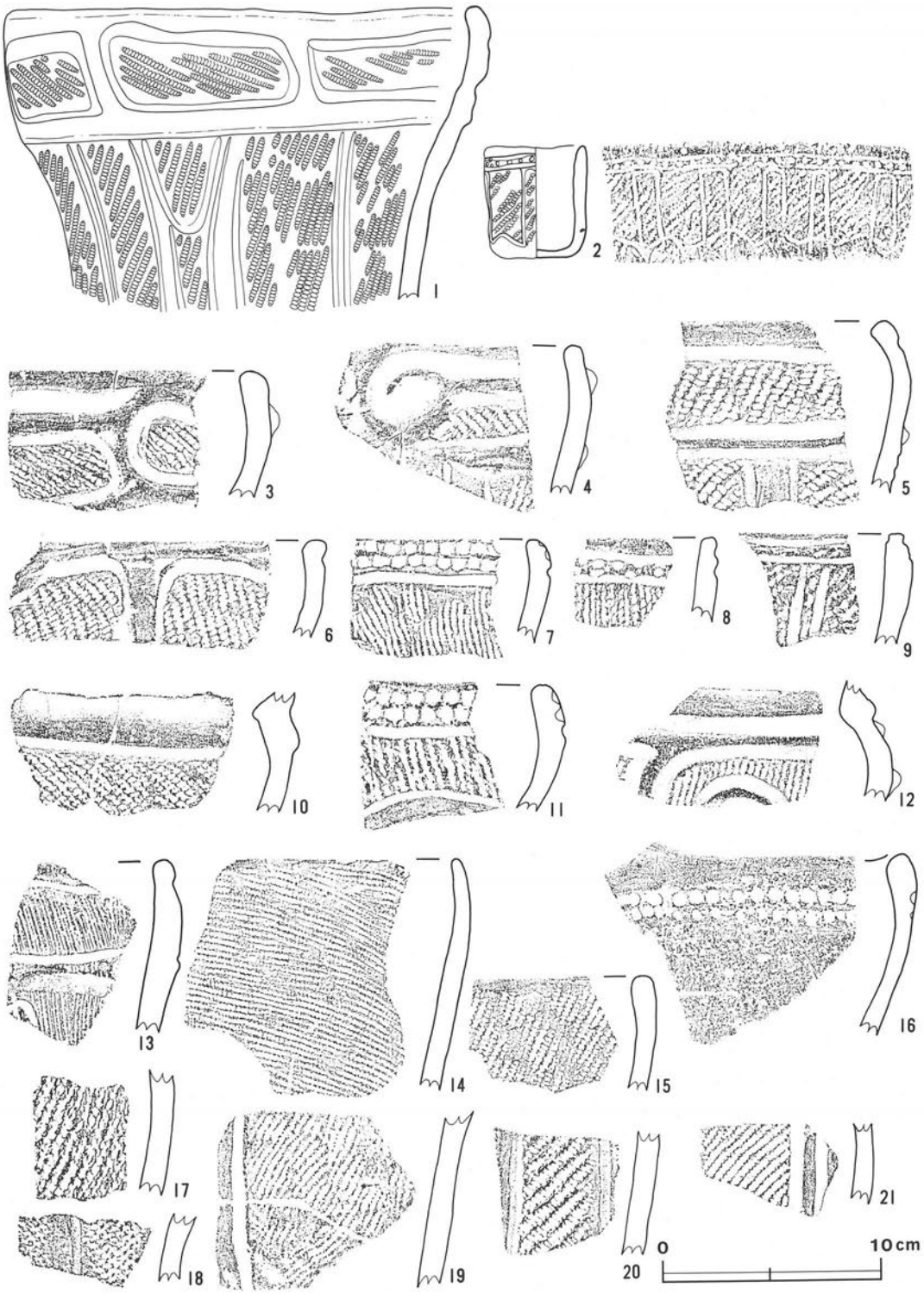
出土土器

第35号住居跡出土土器観察表

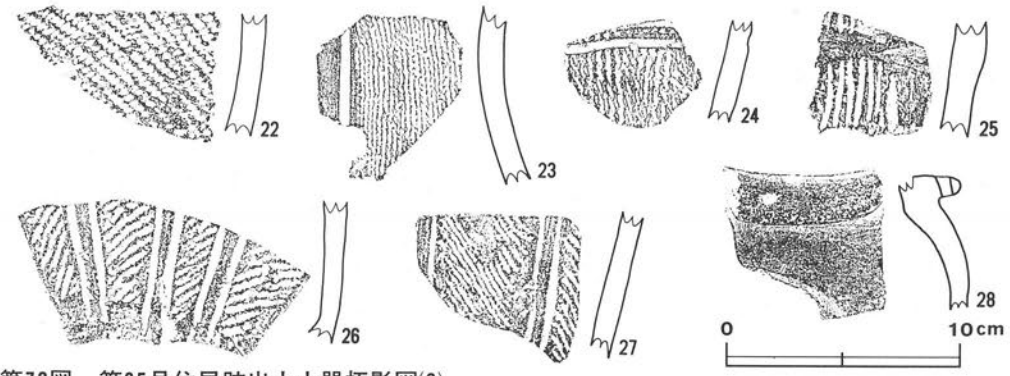
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第69図 1	深鉢形土器 加曽利EⅢ	A 21.5 B(13.5)	胴部はやや外傾しながら立ち上がり，口縁部は内彎している。口縁部文様帯は隆帯と沈線による6単位の楕円文で構成され，区画内には単節RLの縄文が雑に施されている。胴部文様帯は単節RLの縄文を地文とし，小さい「H」字，「U」字，及び幅の狭い垂下する磨消帯を施している。器内面は横位のナデが施されている。	砂粒・長石 にぶい赤褐色 良好	35%　7片 P5
2	ミニュチア土器 加曽利EⅢ	A 4.4 B 5.2 C 3.0	底部は平底を呈し，胴部は底部から垂直気味に立ち上がり，口縁部に至る。口縁部文様帯は口唇直下が無文で，その下側に2本の沈線を横位に施し，その間に1列の刺突が施文されている。胴部文様帯は単節LRの縄文を地文として施し，その上に5単位の沈線による逆「U」字文を施している。更に胴部下位には波状の沈線が周回している。内面は横位のナデが施されている。	砂粒・長石 にぶい橙色 良好	100%　完形 P79

第69・70図3～28は，第35号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。3～16は口縁部及び胴部にかけての土器片である。3～5は口縁部に隆帯と沈線による楕円文，長楕円文，及び渦巻文の区画を施し，区画内に単節の縄文が施されている。3はLR，4・5はRL，5の胴部はLRである。6は口唇部直下から沈線による逆「U」字文で区画され，区画内に単節RLの縄文が施されている。7は2列の刺突文と1本の沈線が施され，胴部に単節LRの縄文が縦位に施されている。8は2本の沈線の間に刺突文が施され，単節RLの縄文が縦位に施されている。9は口唇部直下に2本の沈線が横位と縦位に施され，縄文が斜位に認められる。10は無文帯を有し，胴部はLRの縄文が斜位に施されている。11は2列の刺突文と1本の沈線が横位に施され，胴部は撚糸文が縦位に施されている。12は隆帯と沈線による楕円文で区画され，区画内には縦位の撚糸文が施されている。13は条線文が斜位に施され，14・15は口唇部直下から単節の縄文が施されている。14は撚りの細いRLが密に，15はLRがそれぞれ斜位に施されている。16は波状口縁を呈し，2列の刺突文が横位に施されているだけである。

17～28は胴部片である。17はLRL，18はRLRの複節の縄文が斜位に施され，磨消帯を有し



第69図　第35号住居跡出土土器実測図・拓影図(1)



第70図　第35号住居跡出土土器拓影図(2)

ている。19～22は単節ＬＲの縄文が斜位に施され，19～21は磨消帯を有している。23～25は撚糸文が縦位に施され，23は磨消帯を有している。24・25は沈線を施し，25は深く施文されている。26・27は磨消帯が垂下し，26は無節Ｌの縄文，27は無節Ｒの縄文がそれぞれ斜位に施されている。28は有孔鍔付土器片で，外面は赤彩されている。

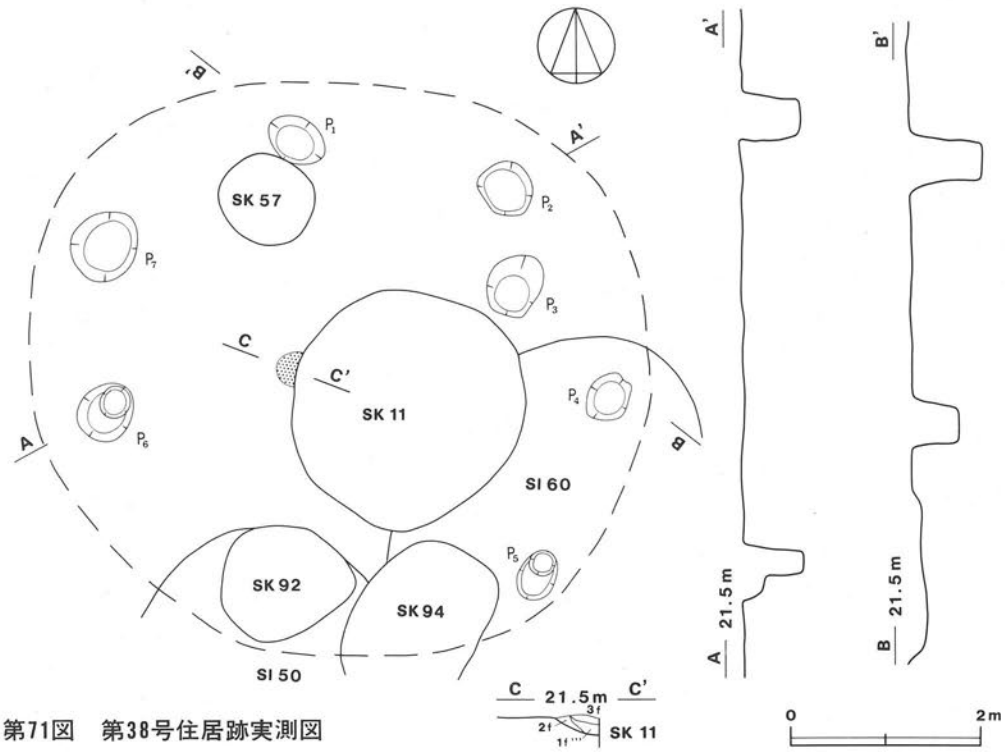
第38号住居跡（第71図）

本跡は，当遺跡の中央C3h$_8$区を中心に確認され，第43号住居跡の３ｍ東側に存在している。本跡は南側と東側に位置する縄文時代中期の阿玉台期の第50・60号住居跡と，北側に位置する第57号土坑が埋没した後構築されたものと思われる。また，南東側は第11号土坑に掘り込まれ，南側で第92・94号土坑と重複しているが，第92・94号土坑との新旧関係は不明である。

平面形・規模・長径方向については不明であるが，検出された炉跡や柱穴の位置から判断すれば，長径6.8ｍ・短径6.3ｍの円形を呈するものと推定される。壁は重機による表土除去の際削平されて残存しない。床面は他遺構と重複している部分を除いてほぼ平坦で，硬いロームである。

炉跡はピットの配列から推察すると，ほぼ中央部に位置するものと考えられる。形状は第11号土坑に掘り込まれて半月状を呈しているが，本来は直径40cm前後の円形を呈する炉と考えられる。残存する炉跡は，床面を皿状に20cmほど掘り込んだ地床炉であり，炉内には焼土粒子・ローム粒子を微量含む褐色土と暗褐色土等が堆積し，炉床はレンガ状に硬く焼けている。ピットは７か所検出され，配列や規模からP_1～P_7が主柱穴と考えられる。主柱穴はほぼ規則的に配列され，規模は長径50～80cm・短径40～70cm・深さ50～80cmである。P_5・P_6は中ほどから段状を呈している。

遺物は，炉内・覆土下層・第11号土坑から加曽利Ｅ式の深鉢形土器片が出土し，接合・復元できたのが第72図１の土器である。また，覆土下層から土器片481片，土製円板（第180図24）１点，及び磨石１点，覆土上層から阿玉台式土器片83片・黒浜式土器片22片も出土している。



第71図　第38号住居跡実測図

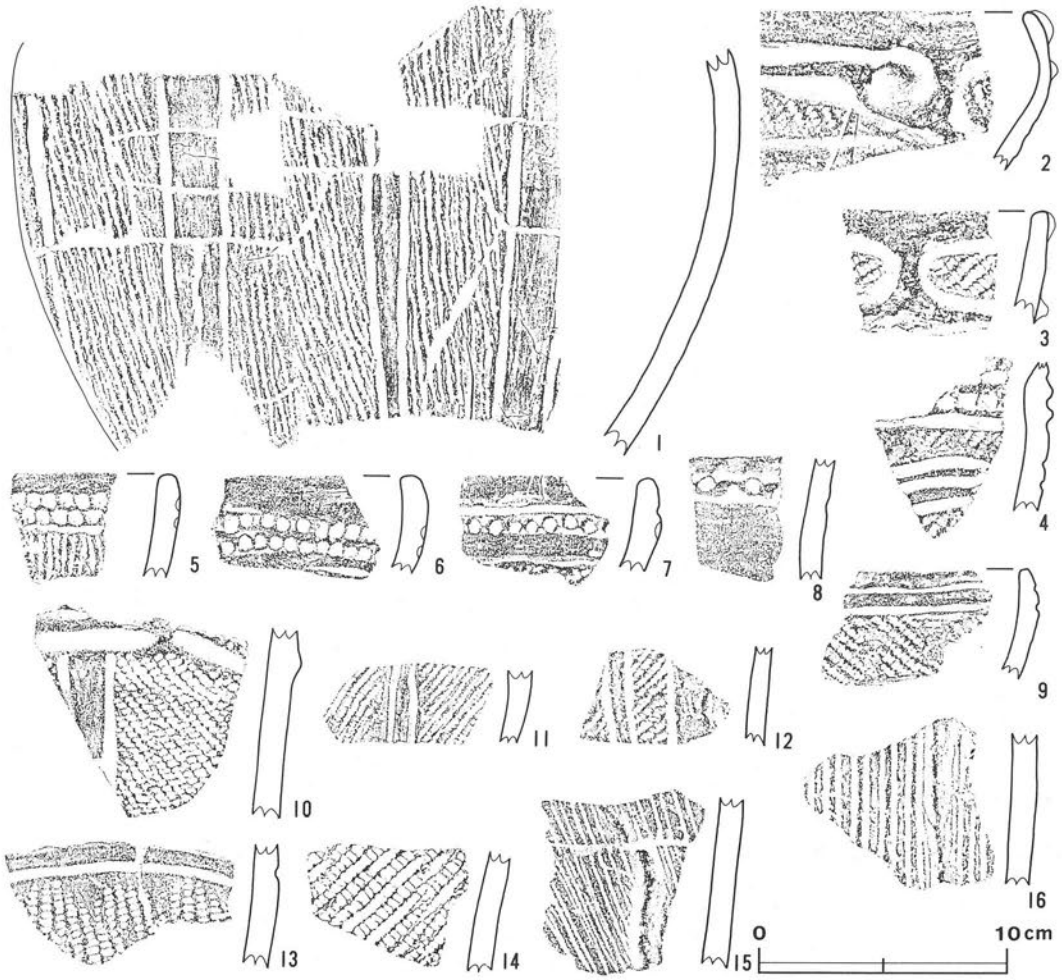
出土土器

第38号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備　考
第72図 1	深鉢形土器 加曽利ＥⅢ	B(16.5)	胴部下位から内彎しながら立ち上がっている。胴部は磨消帯が垂下し，磨消帯の間にはＲＬの撚糸文が施されている。	砂粒・長石・石英 橙色　普通	15%　13片 P80

第72図２～16は，第38号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。２～９は口縁部片である。２・３は隆帯と沈線による半楕円文と楕円文で区画され，区画内には単節の縄文がそれぞれ斜位に施されている。２はＲＬ，３はＬＲである。４～８は刺突文が施され，４～６は２列施されている。４は口縁部に沈線が横位に施され，胴部には横位の磨消帯と，単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。５は撚糸文が縦位に施されている。７は２本の沈線の間に１列の刺突文が施され，８は１列の沈線と，その下側に連続「コ」の字文が施されている。胴部は無文である。９は２本の沈線が横位に施され，沈線下に，単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。

10～16は胴部片である。10～12は磨消帯が施され，単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。13は磨消帯が横位に認められ，単節ＲＬの縄文が縦位に施されている。14は単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。15・16は曽利系の土器片で，断面三角形の隆帯が垂下し，条線文が縦位に施されている。



第72図　第38号住居跡出土土器実測図・拓影図

第42号住居跡（第73図）

本跡は，当遺跡のほぼ中央部D3a$_2$区を中心に確認され，第43号住居跡の５ｍ南西側に存在している。本跡の西側の床面は，第16号土坑に切られている。

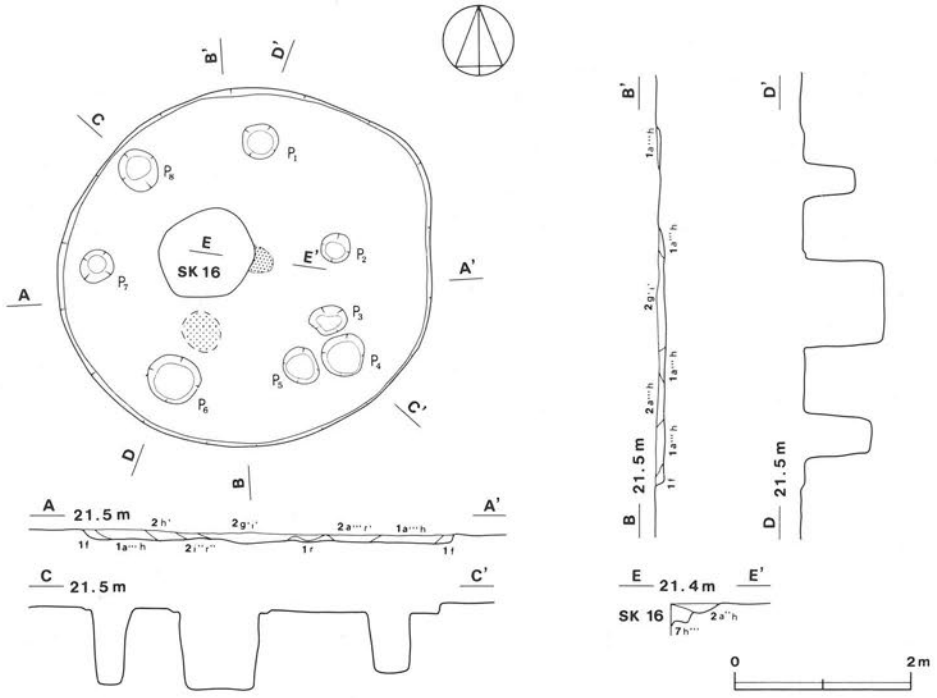
平面形は円形を呈し，長径方向はＮ－55°－Ｅを指し，規模は長径4.5ｍ・短径４ｍである。壁はロームで硬く，東壁や南東壁は垂直に，北壁・西壁はゆるやかに立ち上がっている。壁高は５～13㎝で，全体的に浅い。床面はほぼ平坦で硬いロームであり，炉跡の北側と東側の一部は硬く締まっている。

炉跡は中央に位置し，西側半分が第16号土坑に掘り込まれているが，長径30㎝ほどの楕円形を呈するものと思われる。炉は床面を皿状に10㎝ほど掘り込んだ地床炉と推定され，炉覆土は焼土粒子を多量に含む暗褐色土と，ローム粒子を中量・焼土粒子を微量含む暗褐色土が堆積し，炉床

はレンガ状に硬く焼けている。ピットは８か所検出され，配列や規模からP_1・P_2・P_4・P_6～P_8が主柱穴と考えられる。主柱穴は壁ぎわにほぼ規則的に配列され，規模は長径32～80cm・短径30～50cm・深さ60～80cmである。P_6は長径80cm・短径50cm・深さ80cmと太く深く，しっかりした柱穴である。P_3とP_5はP_4の支柱穴と考えられ，30～40cmの深さである。

覆土は遺構確認の段階でやや削平しすぎ，４～12cmの厚さで，７～９層から成っている。中央部はローム粒子少量・炭化粒子微量・焼土粒子・焼土小ブロックを中量含む暗褐色土，壁ぎわはローム粒子・焼土粒子を微量含む褐色土と，ローム粒子多量・焼土粒子微量含む褐色土等が堆積している。

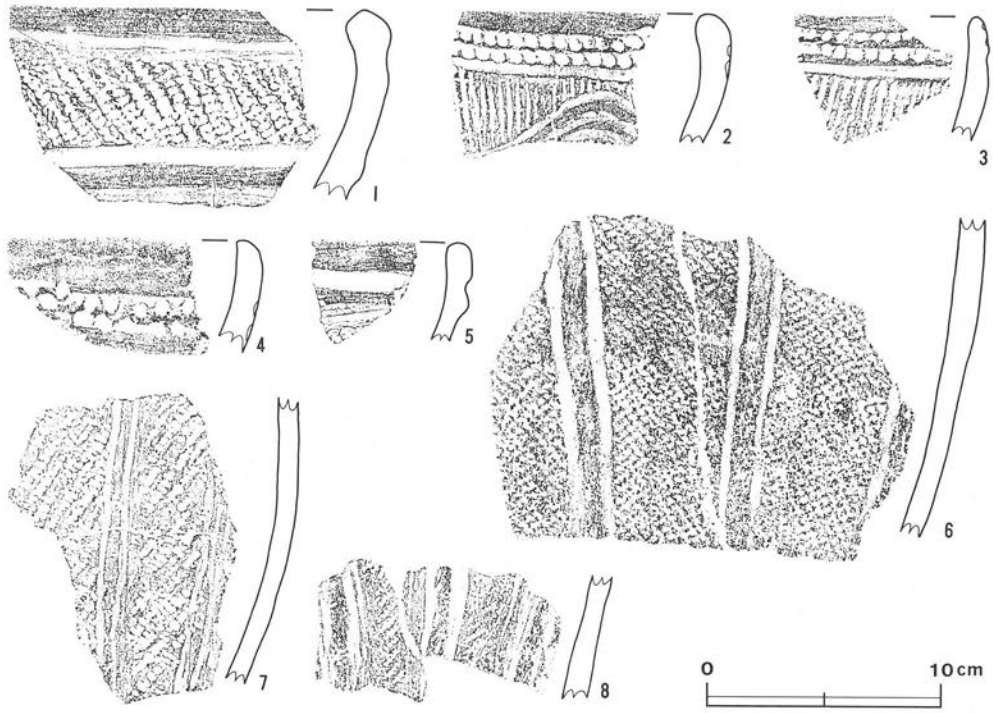
遺物は，床面全域や覆土下層から加曽利Ｅ式の土器片44片が出土したが，殆ど接合できなかった。そのほか，阿玉台式土器片２片，黒浜式土器片２片が覆土中から出土している。



第73図　第42号住居跡実測図

出土土器

第74図１～８は，第42号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。１～５は口縁部片である。１は隆帯と沈線によって長楕円形に区画されるものと思われ，区画内には単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。２～４は２列の刺突文が横位に施されている。２は無節Ｌの撚糸文が縦位に施され，刺突文の下側に１本の沈線と連弧文が認められる。３は刺突文の下側に１本の沈線と無節Ｌの撚糸文が縦位に施されている。４は口唇部から少し離れた位置に刺突文が施されてい



第74図　第42号住居跡出土土器拓影図

る。５は隆帯と沈線文が施され，縄文がわずかに窺える。

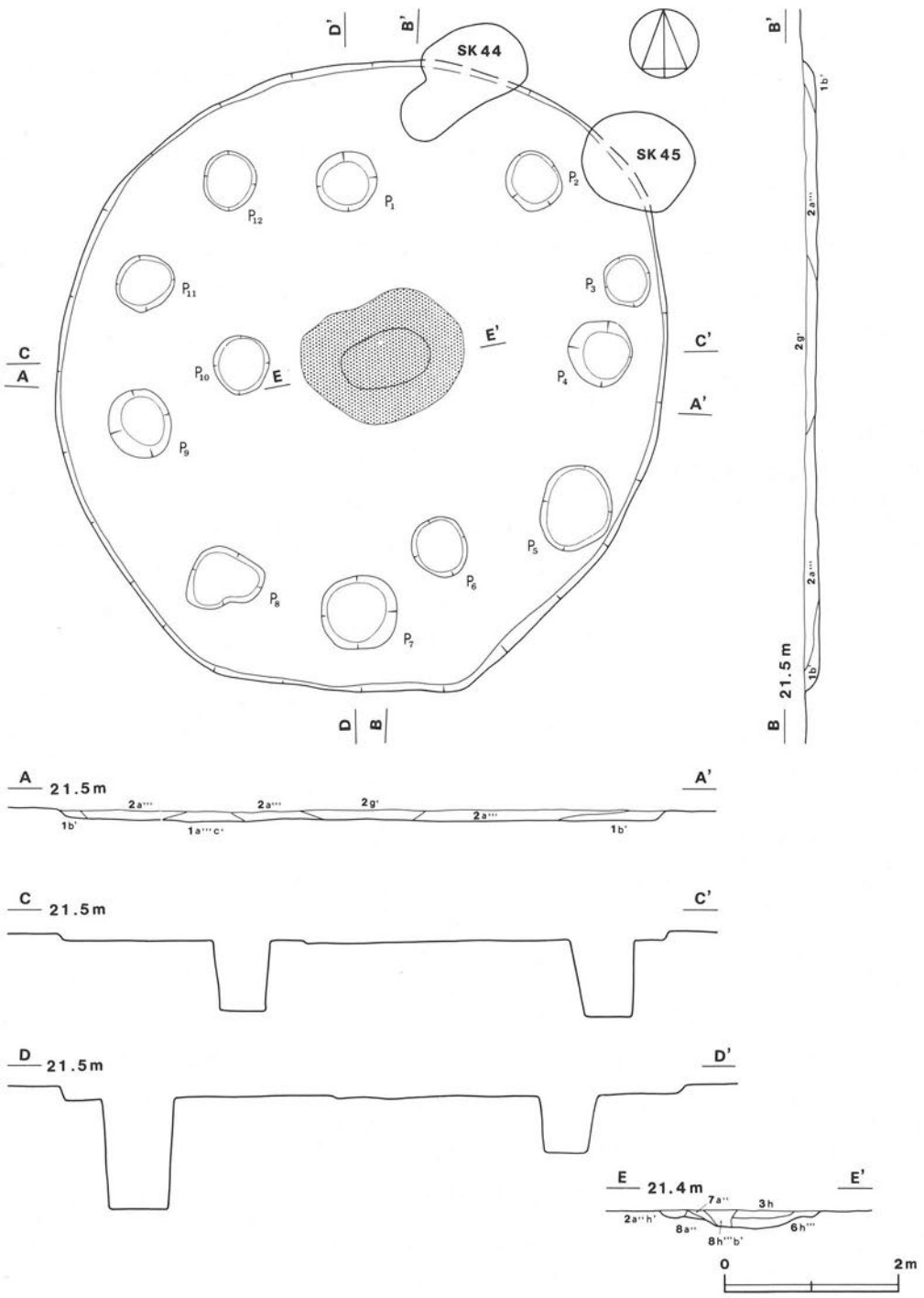
６～８は胴部片である。６・７は磨消帯で区画され，６・７とも単節ＬＲの縄文が斜位に認められ，６は摩滅している。８は両側になぞりを有する隆帯で区画され，区画内には撚りの細い単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。

第43号住居跡（第75図）

本跡は，当遺跡のほぼ中央C3h₄区を中心に確認され，第46号住居跡の２ｍ東側に存在している。北壁と北東壁は第44・45号土坑に掘り込まれている。

平面形は円形を呈し，長径方向はＮ－30°－Ｅを指し，規模は長径7.7ｍ・短径７ｍと当遺跡における縄文時代の住居跡の中では最大規模を有している。壁はロームで硬く，外傾しながら立ち上がっており，壁高は10～17cmである。床面はほぼ平坦で，全体的に硬いロームであるが，炉跡の北西側に凹凸状の硬く締まった部分が存在する。

炉跡は中央に位置し，長径190cm・短径140cmの不整楕円形を呈している。炉は床面を皿状に20cmほど掘り込んだ地床炉で，炉跡も大形である。炉内には焼土粒子を多量含む赤褐色土と，焼土粒子を多量・ローム小ブロックを少量含む極暗褐色土，及び焼土粒子を少量・ローム粒子を中量含む暗褐色土等が堆積している。炉床はレンガ状に硬く焼け，炉床の中心はやや東側となってい



第75図　第43号住居跡実測図

る。ピットは12か所検出され，非常に多いピット数である。全体的に見てP_{10}がやや内側に位置し，その他は壁ぎわに配列されている。主柱穴はP_1・P_2・P_4・P_5・P_7・P_9・P_{12}と考えられ，規模は長径70～100cm・短径60～80cm・深さ70～110cmである。P_3・P_6・P_8・P_{10}・P_{11}は本跡に伴わないものと考えられる。

覆土は中央部がローム粒子少量・炭化粒子を微量含む暗褐色土，ローム粒子を多量含む暗褐色土，壁ぎわにはローム小ブロックを少量含む褐色土が堆積している。

遺物は，炉内と炉の周辺の床面及び北壁と南壁ぎわの覆土下層から加曽利式E式の土器片が493片のほか，土器片錘（第180図42～46）5点，石器（第187図38他）3点，阿玉台式土器片76片及び黒浜式土器片25片が覆土中から出土している。なお，石器の中では，磨製石斧がP_3の覆土下層から，凹石がP_4の覆土中層から出土している。大形の住居跡にしては遺物量が少ない。

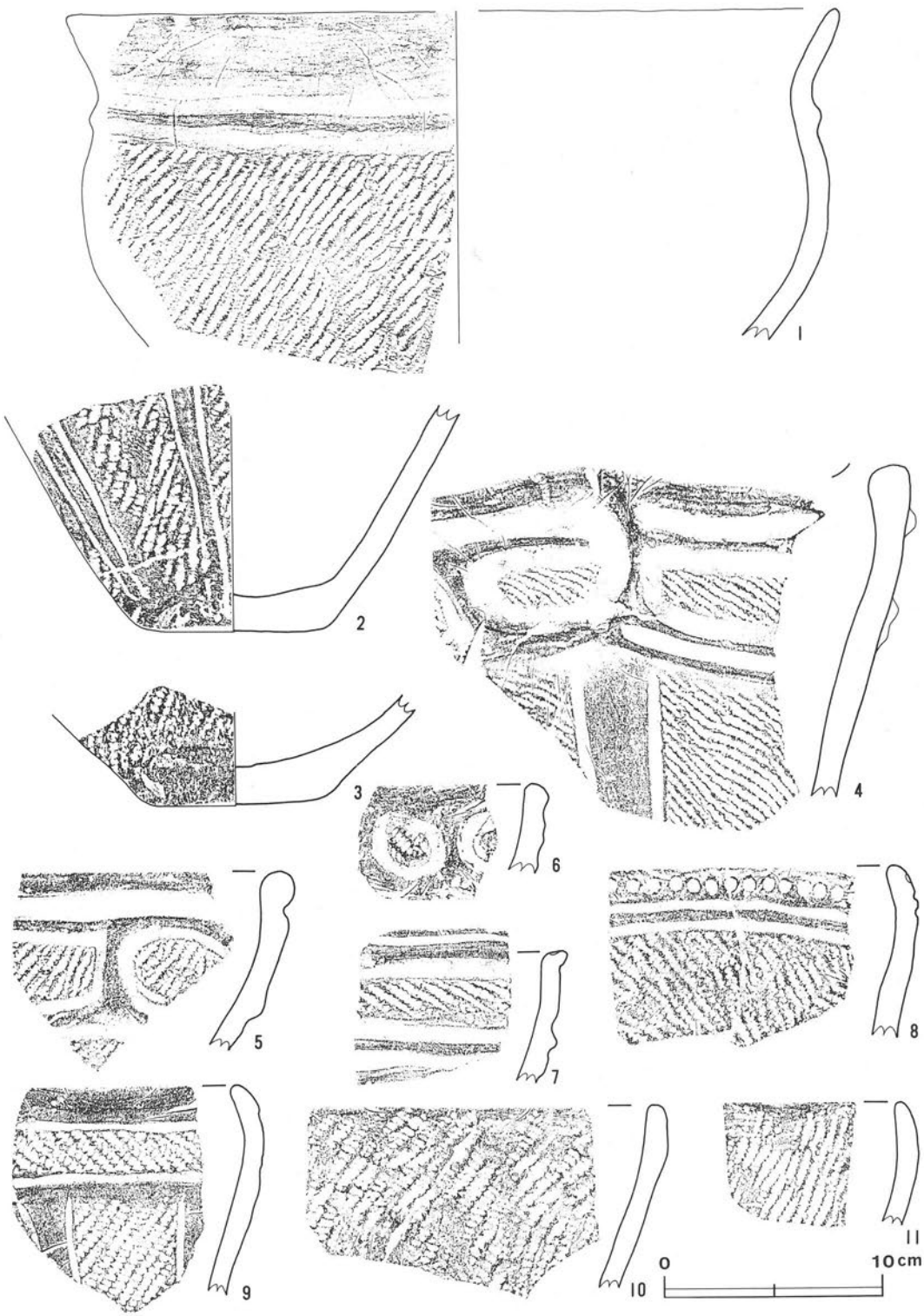
出土土器

第43号住居跡出土土器観察表

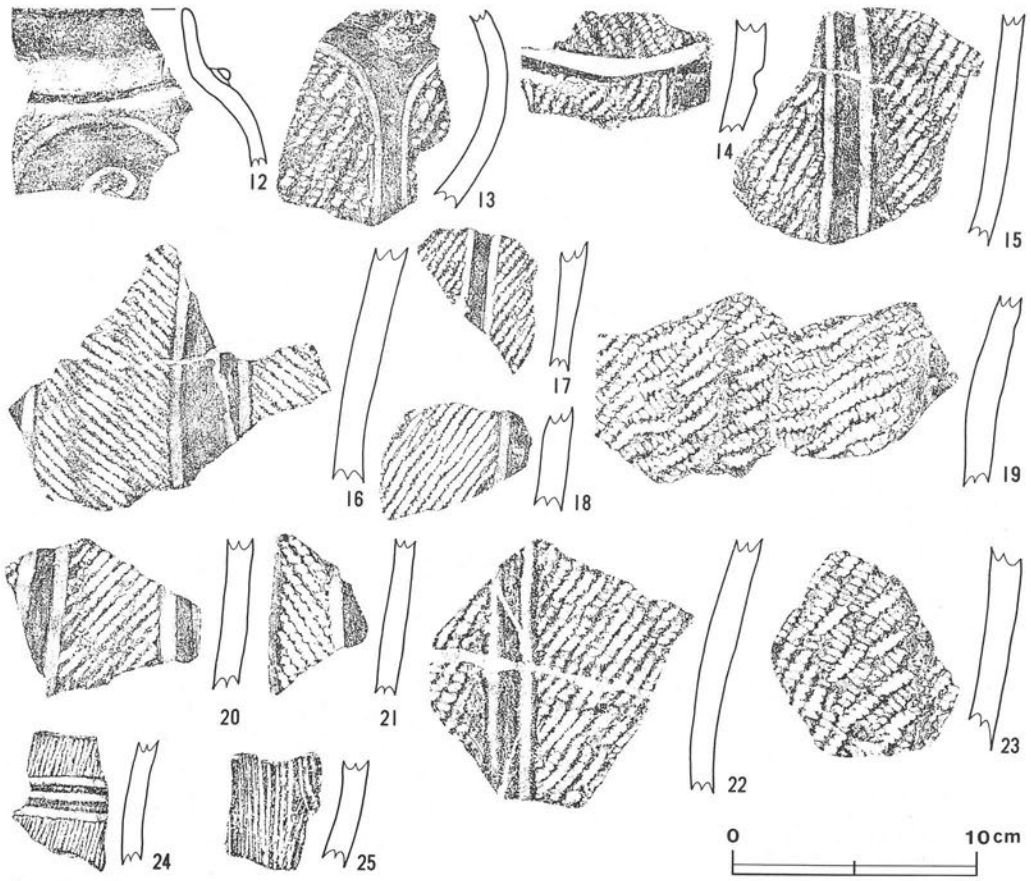
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第76図 1	深鉢形土器 加曽利EIII	A(35.8) B(15.5)	口縁部は胴部上位から緩く外傾しながら立ち上がり，口縁部と胴部は1本の隆起線によって区画されている。胴部は中位から内彎しながら立ち上がって口縁部に至る。胴部は中位以下は欠損している。口縁部は無文で，口縁下に隆起線を配し，その両側にはなぞりが加えられている。胴部は単節LRの縄文が斜位に施されている。口縁部内・外面，胴部上位に横位のナデが施されている。	砂粒 にぶい橙色 良好	20%　1片 P82
2	深鉢形土器 加曽利E	B(10.1) C　8.8	底部は平底を呈し，胴部は外傾しながら立ち上がっている。胴部は幅の狭い磨消帯が垂下し，磨消帯の間には単節LRの縄文が斜位に施されている。内・外面はやや摩耗している。	砂粒・石英 橙色 普通	20%　2片 P183
3	深鉢形土器 加曽利E	B (4.3) C (9.0)	底部は平底を呈し，胴部は大きく外傾しながら立ち上がっている。胴部には単節LRの縄文が斜位に施されている。	砂粒 にぶい橙色 普通	10%　1片 P184

第76・77図4～25は，第43号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。4～12は口縁部及び胴部にかけての土器片である。4～7は隆帯と沈線による楕円文，長楕円文，及び円文で区画され，4は区画内に単節RLの縄文が斜位に施されている。胴部は幅の広い磨消帯によって区画され，区画内には単節RLの縄文が斜位に施されている。5～7は単節RLの縄文が斜位に施されている。7は口唇部に沈線が施されている。8は口縁部直下に1列の刺突文と2列の沈線が横位に施され，単節RLの縄文が斜位に施されている。9は2本の沈線間に単節RLの縄文が施され，胴部は磨消帯によって区画され，区画内に単節LRの縄文が斜位に施されている。10は口唇部直下から撚りの太い単節LRの縄文が粗雑に斜位に，11は単節RLが斜位に施されている。12は有孔鍔付土器片で，胴部に磨消して渦巻文が施され，縄文がわずかに窺える。

13～25は胴部片である。13～21は磨消帯で区画され，区画内に13～16は単節RLの縄文がいずれも斜位に施されている。14には沈線も認められる。17～20，23は単節LRの縄文が斜位に施され，21は複節RLRの縄文が斜位に施されている。24は磨消帯を有し，縦位の撚糸文が施され，25は条線文が縦位に施されている。



第76図　第43号住居跡出土土器実測図・拓影図(1)



第77図　第43号住居跡出土土器拓影図(2)

第45号住居跡（第78図）

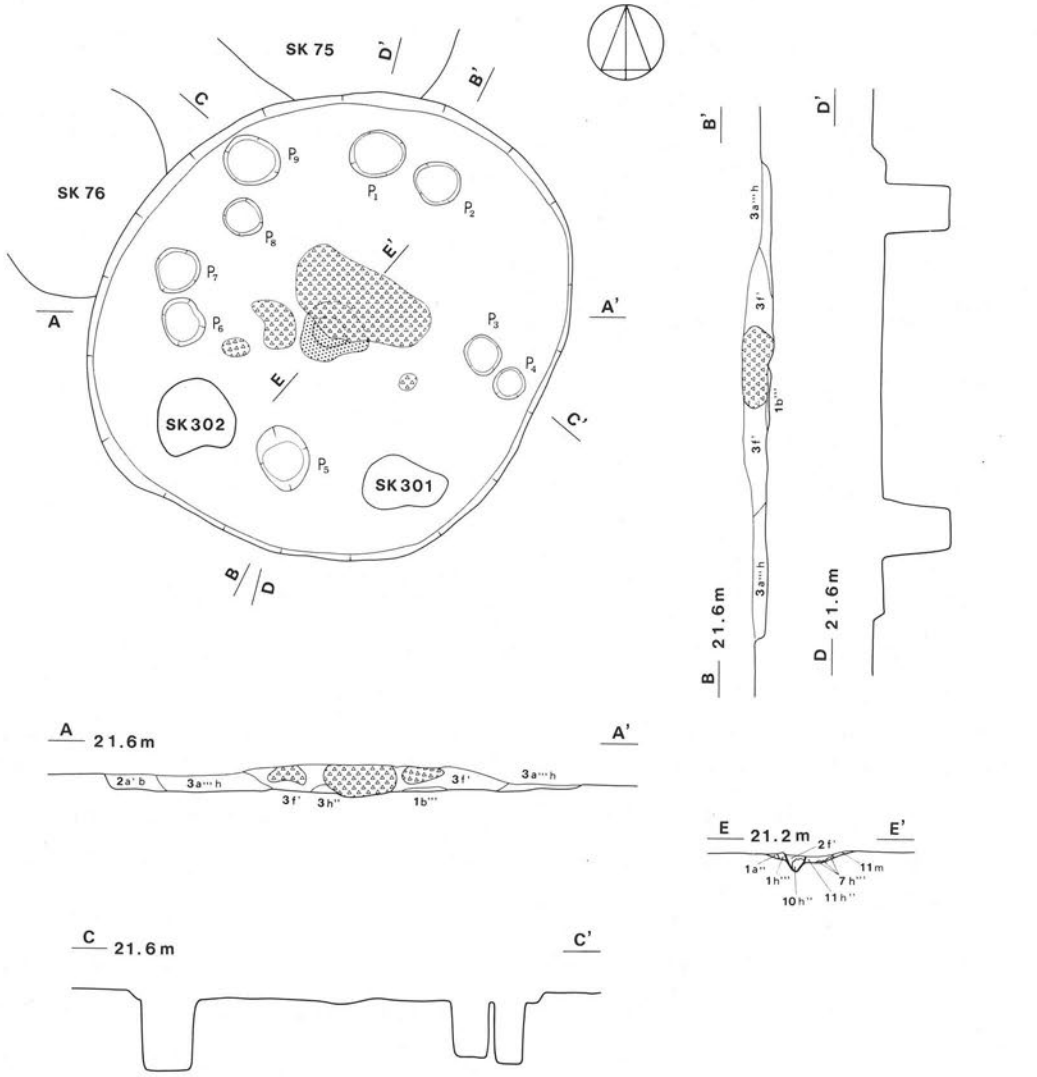
本跡は，当遺跡のほぼ中央D3c$_4$区を中心に確認され，第43号住居跡の14ｍ南側に存在している。第75・76号土坑に北側と西側を掘り込み，第301・302号土坑と南側の床面は重複しているが，本跡と後者との新旧関係は不明である。

平面形はほぼ円形を呈し，長径方向はＮ－55°－Ｅを指し，規模は長径5.4ｍ・短径4.8ｍである。南壁はほぼ垂直に，その他の壁はゆるやかに立ち上がり，壁高は５～15㎝と浅い。床面はほぼ平坦で硬いロームを呈し，炉の周辺は踏み固められて硬く締まっている。

炉跡は中央に位置し，長径72㎝・短径60㎝の不整円形を呈している。炉は床面を皿状に10㎝ほど掘り込み，更に，炉跡の南西部を20㎝掘り込んでいる中に，口縁部を欠いた加曽利Ｅ式の深鉢形土器（第79図２）を埋め込み，土器埋設炉としている。埋設土器は火を受けてもろくなっており，土器内には焼土粒子を中量含む灰白色土や，ローム粒子を少量・焼土粒子を微量含む暗褐色土が充満している。土器の外側は焼土粒子を中量含む灰褐色土や，焼土粒子を多量含む褐色土等が堆

積し，炉床はレンガ状に硬く焼けている。ピットは９か所検出され，配列や規模からP_1・P_3・P_5・P_6・P_7・P_9の６か所が主柱穴と考えられる。主柱穴は壁ぎわや壁近くに配列され，規模は長径40～70cm・短径35～50cm・深さ70～80cmである。P_4はP_3の支柱穴と考えられ，P_2・P_8は深さ10cmと浅くその性格は不明である。

覆土は遺構確認の際の削平により厚さ５～15cmである。壁ぎわはローム粒子多量・焼土粒子を微量含む黒褐色土と，ローム粒子少量・ローム小ブロックを微量含む暗褐色土等が堆積している。また，本跡の中央部からヤマトシジミを主体とした貝層が検出された。貝層は長径170cm・短径80cm・厚さ30cmにわたっており，楕円形を呈する形で堆積している。そのほか，長径60cm・短径30cmの不定形と，長径30cm・短径20cmの楕円形を呈する貝層が，中央からやや西側の覆土上層に



第78図　第45号住居跡実測図

も検出されている。

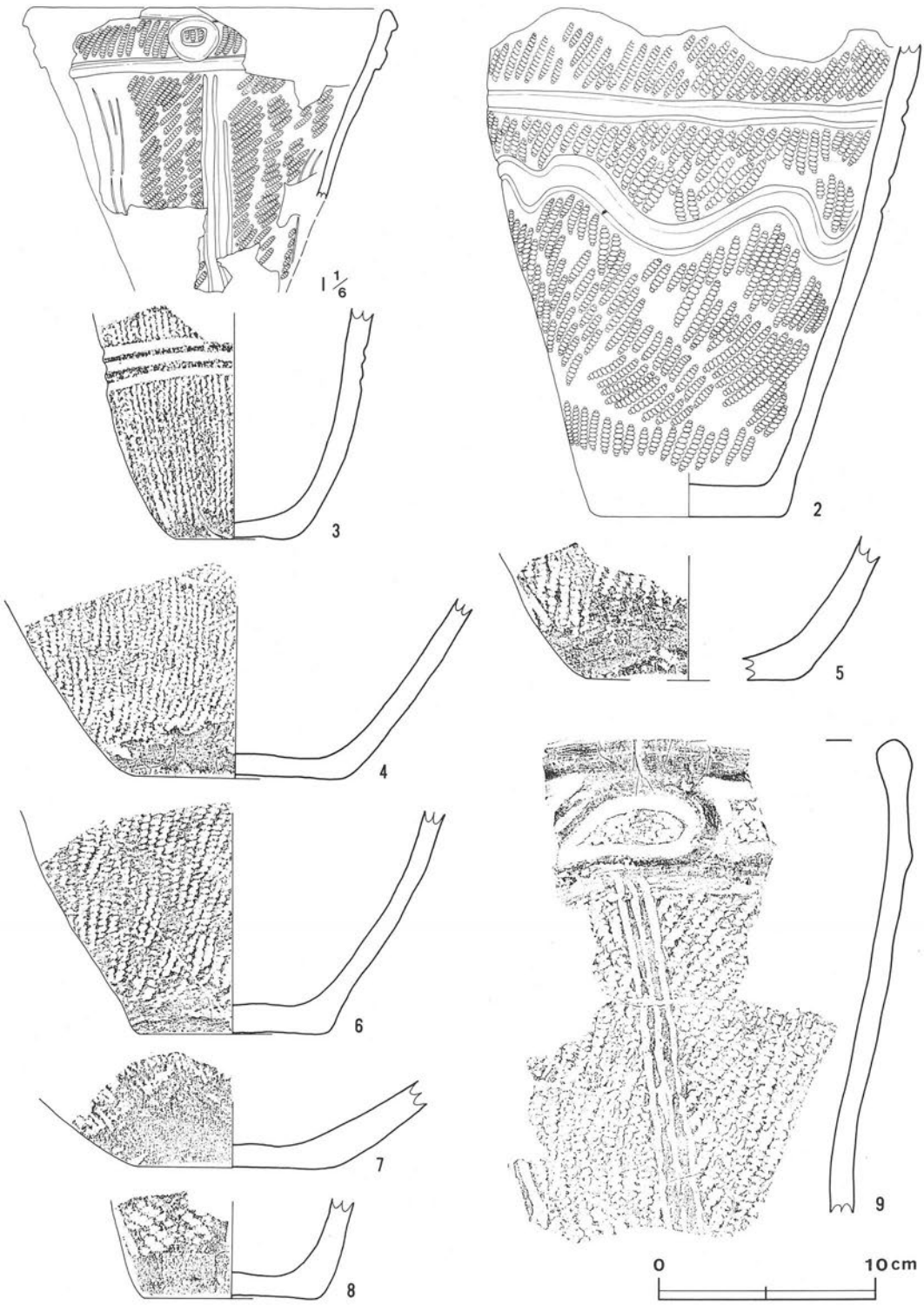
遺物は，炉内の南側から，埋設土器として使用した加曽利Ｅ式のほぼ完形の深鉢形土器（第79図２）が破片で出土した。半完形に復元できた深鉢形土器（第79図１）や，加曽利Ｅ式土器片495片のほか土器片錘（第180図48～55）８点と石器（第192図179他）５点が覆土下層から出土している。そのほか阿玉台式土器片30片，黒浜式土器片37片が覆土上層から出土している。

出土土器

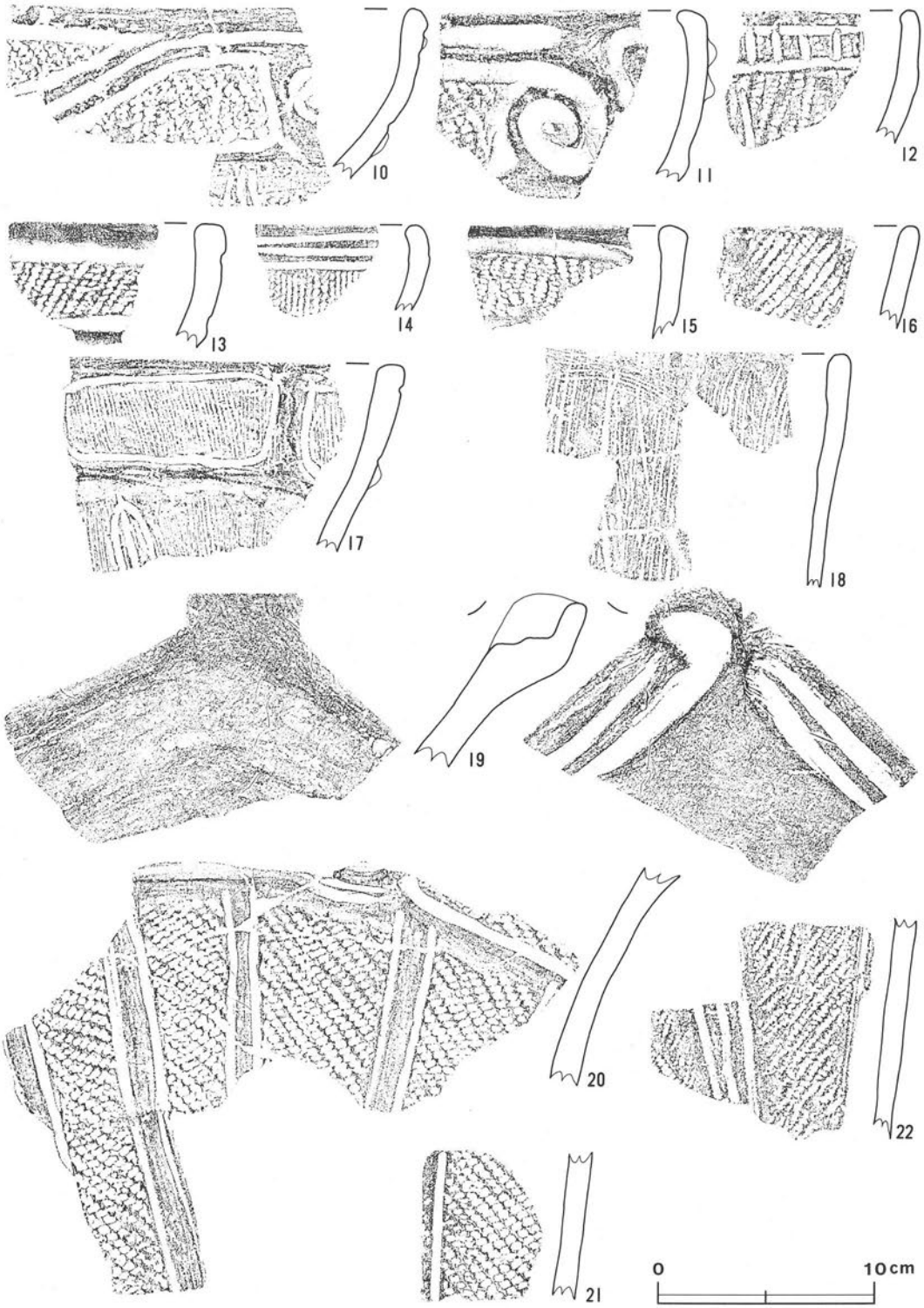
第45号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第79図 1	深鉢形土器 加曽利ＥⅡ	A(33.3) B(26.5)	胴部は中位からやや外傾しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部文様帯は隆帯による３単位の楕円文で区画されるものと考えられ，区画内には単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。胴部文様帯は両側に沈線を有する隆帯で口縁部と胴部を区画し，胴部は３本の縦位の沈線によって３単位に区画され，区画内には単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。内面は摩滅している。	砂粒・長石 暗褐色 普通	30%　16片 Ｐ７
2	深鉢形土器 加曽利ＥⅡ	B(23.5) C　8.5	胴部は平底の底部からやや外傾気味に立ち上がっている。胴部上位から口縁部は欠損している。胴部は一面に単節ＬＲの縄文が斜位と一部縦位に施され，更に中位に２本の沈線と２本の波状沈線が２段施されている。底部直上の外面と内面は横位のナデが施されている。	砂粒 橙色 良好	70%　6片 Ｐ８
3	深鉢形土器 加曽利ＥⅡ	B(10.5) C　6.4	底部は平底を呈し，胴部は底部から内彎気味に立ち上がっている。胴部には単節ＬＲの撚糸文が縦位に施され，更に中位に３本の沈線が周回している。	砂粒・石英 暗赤褐色 普通	30%　9片 Ｐ187
4	深鉢形土器 加曽利Ｅ	B　(8.0) C　10.2	底部は平底を呈し，胴部は底部から外傾しながら立ち上がっている。胴部には単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。	砂粒・雲母・石英 褐色 普通	10%　1片 Ｐ188
5	深鉢形土器 加曽利Ｅ	B　(5.8) C　9.7	底部は平底を呈し，胴部は底部から外傾しながら立ち上がっている。胴部には単節ＬＲの縄文が斜位に施され，底部直上は横位のナデが施されている。	砂粒・長石 橙色 普通	10%　1片 Ｐ193
6	深鉢形土器 加曽利Ｅ	B(10.3) C　9.0	底部は平底を呈し，胴部は底部から外傾しながら立ち上がっている。胴部は単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。器面はやや摩耗し，胴部内面はナデが施されている。	砂粒・長石 にぶい赤褐色 良好	20%　2片 Ｐ83
7	鉢形土器 加曽利Ｅ	B　(3.0) C　9.0	底部は平底を呈し，胴部は底部から強く外傾しながら立ち上がっている。胴部には撚糸文がわずかに窺える。底部直上はナデが施されている。	砂粒・長石 橙色 普通	10%　3片 Ｐ187
8	深鉢形土器 加曽利Ｅ	B　(4.5) C　8.2	底部は平底を呈し，胴部は底部からやや外傾しながら立ち上がっている。胴部には幅の狭い磨消帯が窺え，また，単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。底部直上は横位のナデが施されている。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	15%　1片 Ｐ194

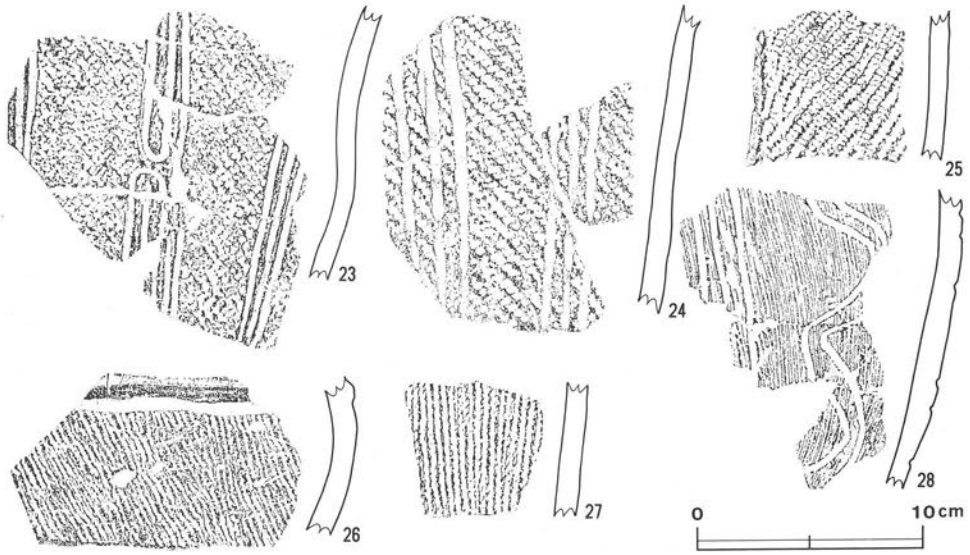
第79・80・81図９～28は，第45号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。９は口縁部から胴部にかけての土器片である。口縁部は隆帯と沈線による半楕円文で区画され，区画内に複節ＲＬＲの縄文が斜位に施されている。胴部は磨消帯によって区画され，区画内に複節ＲＬＲの縄文が斜位や縦位に施されている。10～19は口縁部片である。10は隆帯と沈線による半楕円三角文で区画され，区画内に複節ＲＬＲの縄文が斜位と縦位に施されている。11は隆帯と沈線によって作られた渦巻文によって長方形状に区画され，区画内に単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。12ははしご状の沈線が横位に，縄文が縦位に施され，胴部は単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。13は単節ＲＬの縄文を斜位に施し，上・下に沈線を有している。14は口縁部に３本の



第79図　第45号住居跡出土土器実測図・拓影図(1)



第80図　第45号住居跡出土土器拓影図(2)



第81図　第45号住居跡出土土器拓影図(3)

沈線が横位に施され，胴部は無節Ｌの撚糸文が縦位に施されている。15は沈線が窺え，沈線で区画するものと思われる。区画内には単節ＬＲの縄文が縦位に施され，16は口唇部直下から単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。17は口縁部が隆帯と沈線によって長方形状に区画され，区画内には条線文が縦位に施されている。胴部も条線文が縦位に施され，「⋀」状の沈線が認められる。18は沈線が縦位と横位に雑に施されている。19は浅鉢形土器の波状口縁部で，波頂部に凹みを有し，口唇部直下の内側に２本の沈線が施されている。無文である。

20～28は胴部片である。20～23は磨消帯によって区画され，20・21は単節ＬＲ，22は単節ＲＬ，23は複節RLRの縄文がそれぞれ斜位に施されている。24は３本の垂下する沈線によって区画され，区画内に複節RLRの縄文が斜位に施されている。25は単節ＲＬの縄文が斜位に，26は非常に細い撚糸文が斜位に，27は無節Ｌの撚糸文が縦位に施されている。28は条線文が縦位に施され，その上に，２本１組の沈線文が垂下と蛇行をしている。

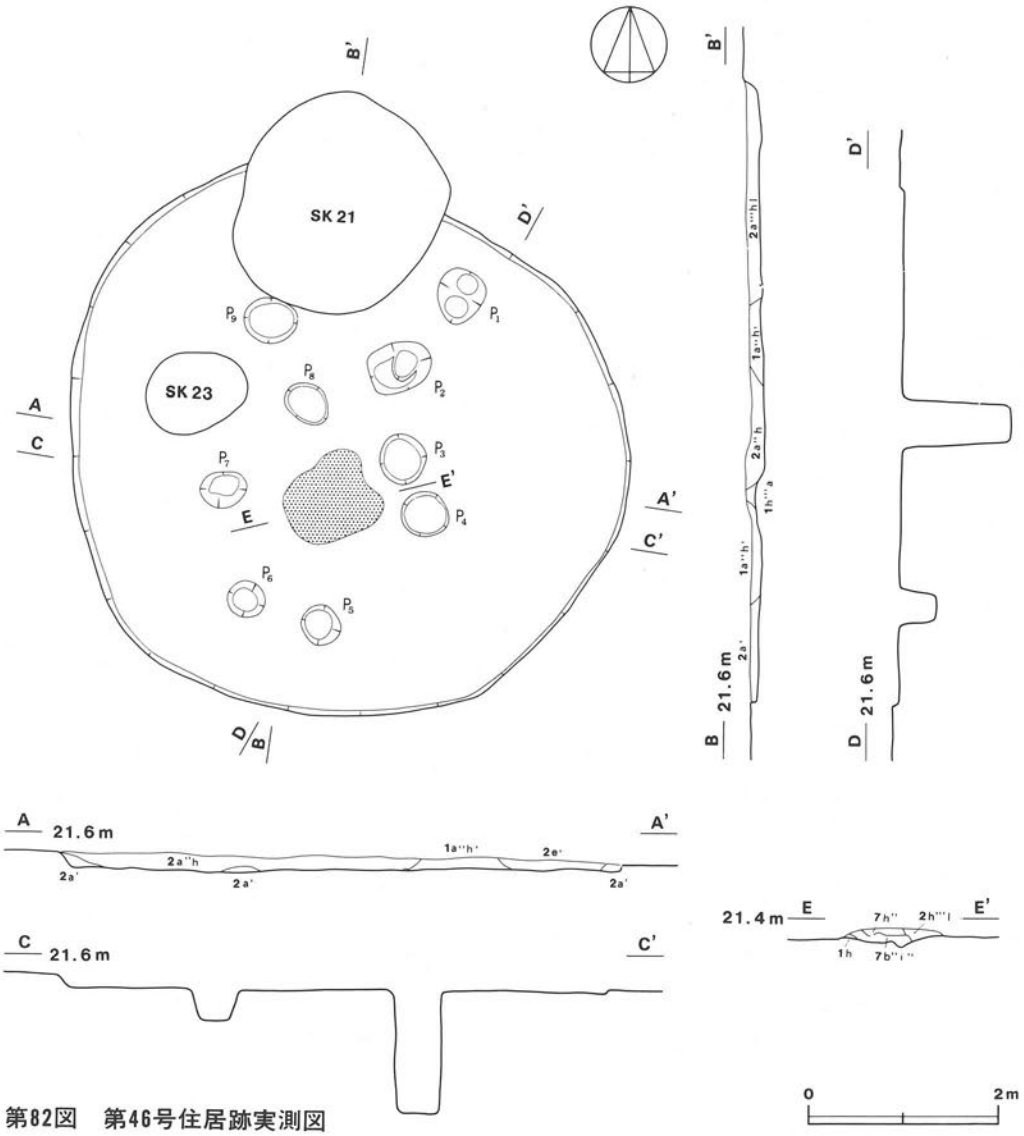
第46号住居跡（第82図）

本跡は，当遺跡のほぼ中央部C3i_2区を中心に確認され，第43号住居跡の１ｍ西側に存在している。西側で第23号フラスコ状土坑と重複しているが，本跡は土坑が埋没した後に構築されたものと思われる。また，北側は第21号土坑に掘り込まれている。

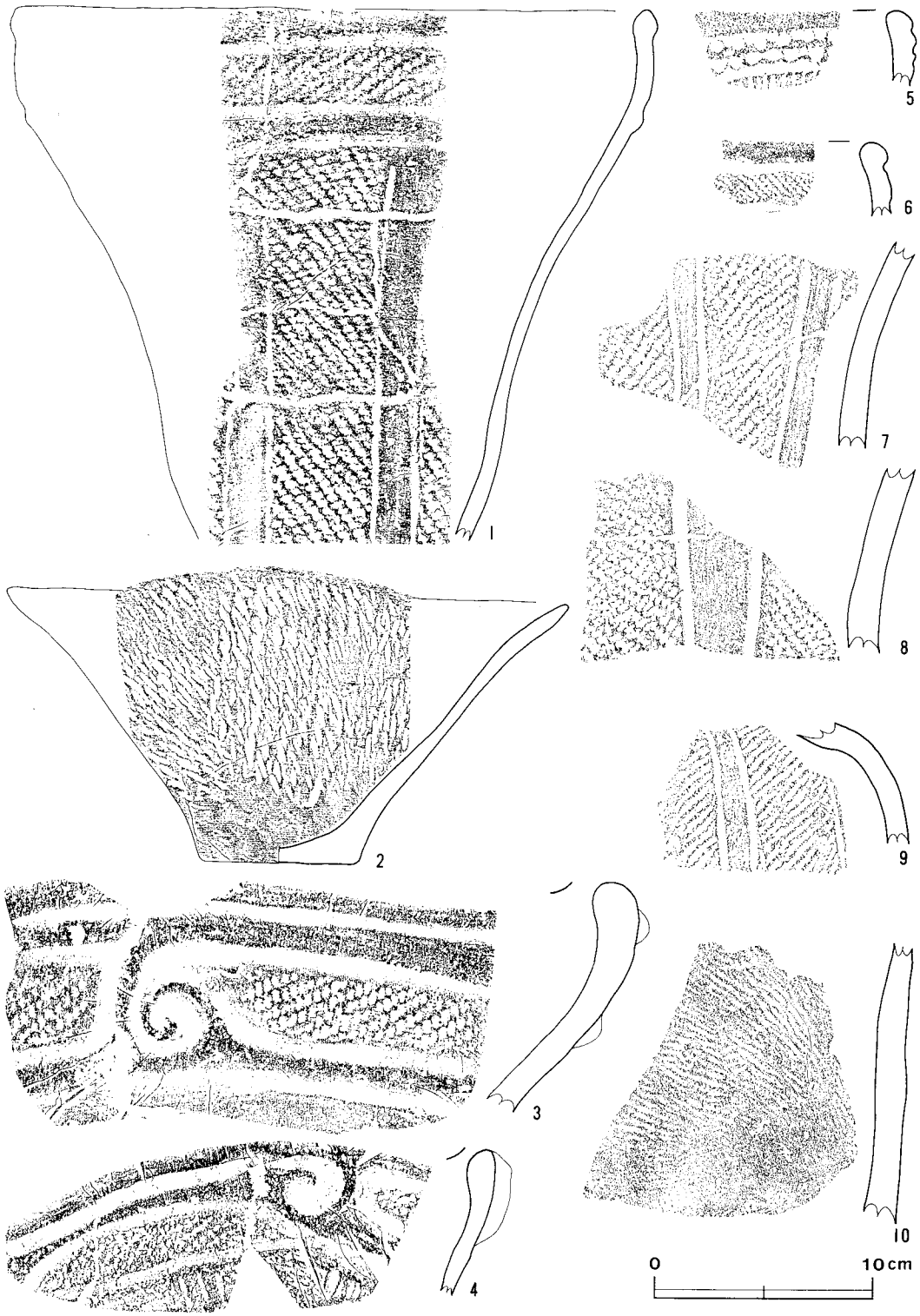
平面形は円形を呈し，長径方向はＮ－29°－Ｗを指し，規模は長径6.2ｍ・短径5.8ｍである。壁はロームで硬く，西壁はゆるやかに，その他の壁は垂直気味に立ち上がり，壁高は10～20cmである。床面は平坦で硬いロームであり，炉跡の周辺は踏み固められて硬く締まっている。

炉跡はやや南東側に位置し，長径100cm・短径90cmの不定形を呈し，床面を10cmほど掘り込んだ地床炉である。炉内には焼土粒子を中量含む暗褐色土と，焼土粒子・焼土小ブロック・ローム小ブロックを中量含む暗赤褐色土が堆積し，炉床はレンガ状に硬く焼けて若干凹凸している。ピットは9か所検出されたが不規則で，いずれが主柱穴であるか判断できなかった。なお，炉跡ぎわのP_3・P_4の規模は長径50cm・短径40～50cm・深さ120～130cmである。P_3・P_4以外のピットの規模は，長径20～55cm・短径15～40cm・深さ30～40cmである。

覆土はローム粒子中量・焼土粒子を微量含む暗褐色土と，ローム粒子少量・焼土粒子・炭化粒子を微量含む暗褐色土，及び壁ぎわのローム粒子を少量含む暗褐色土がほぼ自然堆積の様相を呈している。



第82図　第46号住居跡実測図



第83図　第46号住居跡出土土器実測図・拓影図

遺物は，炉の南側の覆土下層を中心に加曽利Ｅ式の土器片が164片，石器（第190図147他）７点が出土しており，そのほか少量の阿玉台式土器片，黒浜式土器片が覆土上層から出土している。

出土土器

第46号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴　及　び　文　様	胎土・焼成・色調	備　考
第83図 1	深鉢形土器 加曽利ＥII	A(29.5) B(24.8)	胴部は下位で一度軽く内彎気味に立ち上った後，中位で外反し，口縁部はやや内彎している。胴部下位及び底部は欠損している。内・外面は全体的に摩耗し，文様はやや不明瞭である。口縁部文様帯は隆帯と沈線による渦巻文と長楕円文で構成されている。区画内には単節ＬＲの縄文が施されている。胴部文様帯は幅の狭い磨消帯が垂下し，磨消帯と磨消帯の間には単節ＲＬの縄文が施されている。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	30%　11片 P137
2	浅鉢形土器	A(26.0) B(12.5) C　7.5	底部は平底を呈し，胴部は底部から直線的に強く外傾し，口縁部はわずかに外反しながら立ち上がっている。文様は撚りの粗い縄文が斜位と縦位に施されている。	砂粒 褐灰色 良好	30%　1片 P84

第83図３～10は，第46号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。３～６は口縁部片である。３・４は波状を呈している。隆帯による渦巻文，沈線による楕円文や半楕円文で区画され，区画内には単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。胴部は３が無文で，４は磨消帯と縄文がわずかに認められる。５は口縁部に２列の刺突文と沈線が横位に施され，胴部には撚糸文が縦位に窺える。６は２本の沈線の間に撚りの細いＲＬの縄文が施されている。

７～10は胴部片である。７～９は磨消帯によって区画され，７は単節ＬＲの縄文が斜位に，８は単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。９は無節Ｌの縄文が斜位に，10は無節Ｒの縄文が浅く斜位に施されている。

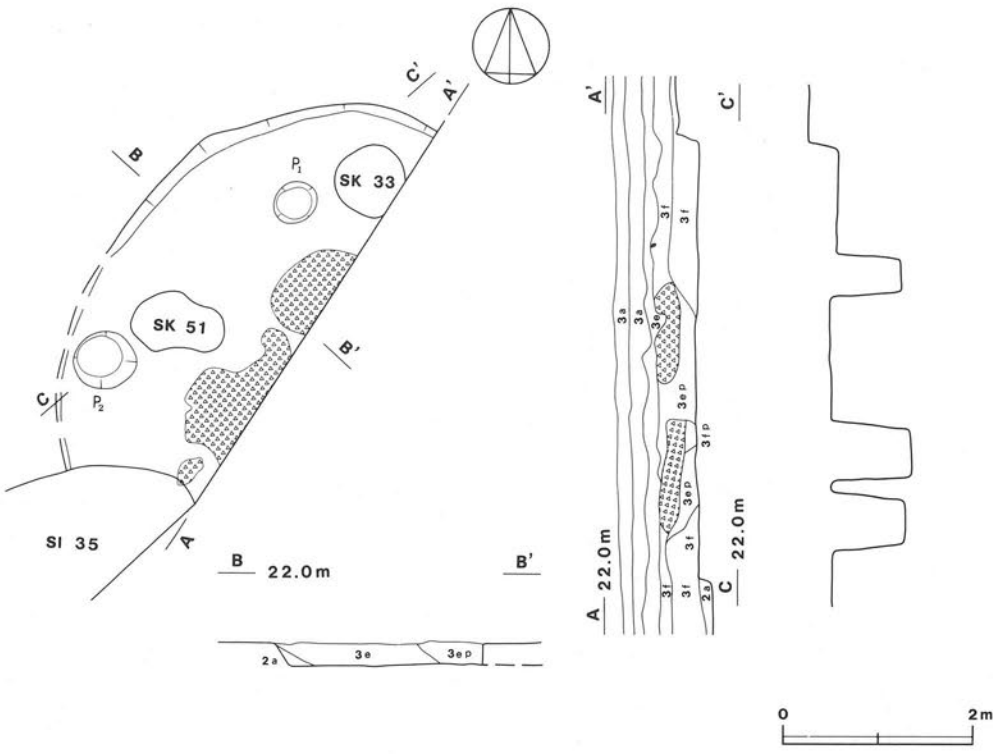
第47号住居跡（第84図）

本跡は，当遺跡の中央部D3b_6区を中心に確認され，第43号住居跡の12ｍ南東側に存在している。南東側約半分はエリヤ外のため調査できなかった。南西側は縄文時代中期の加曽利Ｅ期の第35号住居跡に切られており，また，第33・51号土坑とも重複しているが，土坑との新旧関係は不明である。

平面形は残存部から最大径5.8ｍを有する楕円形か円形を呈するものと思われる。なお，長径方向は不明である。壁はローム で硬く，北壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼ平坦で，全体的に硬いロームであり，中央に近い内側部分が踏み固められて硬く締まっている。

炉跡は検出できなかった。ピットは２か所検出され，位置や規模からいずれも主柱穴と考えられる。主柱穴は壁ぎわに位置し，規模は長径50～70cm・短径40～60cm・深さ75～80cmで，太くしっかりしたものである。

覆土はほぼ６層から成り，中央部はローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・貝を微量含む黒褐色土と，ローム粒子・焼土粒子・貝を微量含む黒褐色土，及びローム粒子・焼土粒子を微量含む壁ぎ



第84図　第47号住居跡実測図

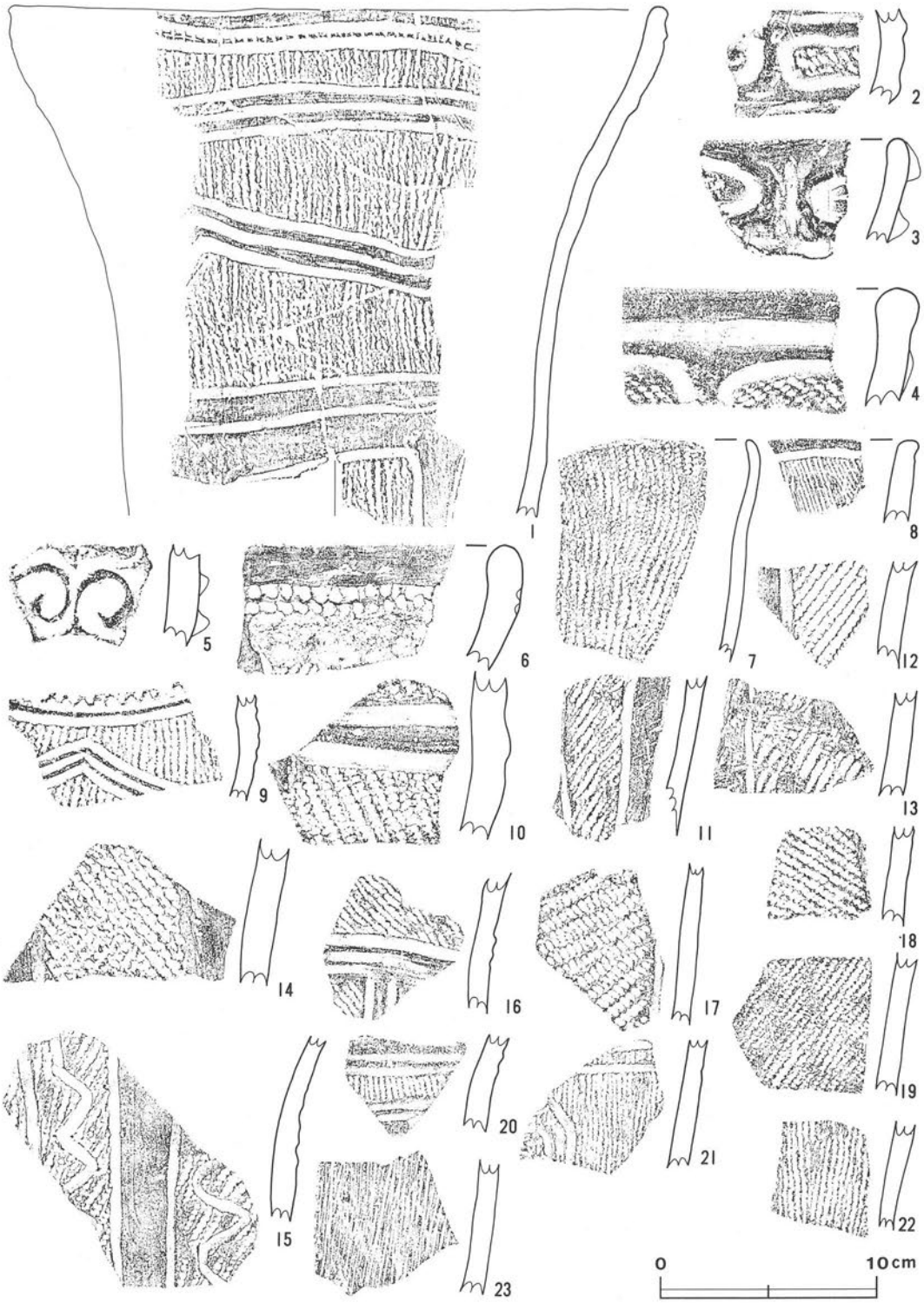
わの黒褐色土がおおむね自然堆積の様相を呈している。また，エリヤ境界付近の覆土上層にヤマトシジミを主体とした貝層が２か所堆積している。

遺物は，北西壁ぎわの覆土下層から加曽利Ｅ式の深鉢形土器の口縁部が，北壁ぎわの床面と北側の覆土下層から土器片が208片出土している。そのほか北西側の覆土中・下層から，土器片錘（第180図56～62）７点，磨石１点がそれぞれ出土している。なお，覆土上層から阿玉台式土器片９片と黒浜式土器片８片が出土している。

出土土器

第47号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備　考
第85図 1	深鉢形土器 加曽利ＥⅢ	A(30.5) B(23.5)	胴部は下位から軽く外反し，波状を有する口縁部は内彎気味に立ち上がっている。器面は単節ＲＬの撚糸文を地文として縦位に施されている。口縁部文様帯は口縁直下に２本と３本の沈線が施され，２本の沈線間にはキザミ目を付けている。胴部文様帯は３本の連弧文と逆「Ｕ」字文が器面に施されている。	砂粒・長石 にぶい橙色 良好	20%　９片 P85



第85図　第47号住居跡出土土器実測図・拓影図

第85図２～23は，第47号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。２～９は口縁部片である。２～４は隆帯と沈線による楕円文で区画され，区画内には単節の縄文が斜位に施されている。５は渦巻文が１対施されている。６は２列の刺突文が横位に施され，胴部は一部剝離している。７は口縁部直下から単節ＲＬの縄文が縦位に，８は沈線の下方に条線文が縦位に施されている。９は口唇部が欠損しているが，２列の刺突文が相互に加えられ，その下側に１本の沈線が横位に施されている。胴部は無節Ｒの撚糸文が縦位に，更に，その上に３本の沈線による連弧文が施されている。

10～23は胴部片である。10は厚手で，口縁部と胴部は隆帯とその両側の沈線によって区画され，胴部には単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。11～16は磨消帯によって区画され，11～14は単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。15は単節ＲＬの縄文が斜位に，蛇行沈線文が縦位に施されている。16は無節Ｒの縄文が斜位に施されている。17～19は単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。20～22は撚糸文が縦位に施され，20は無節Ｒの撚糸文が施され，連弧文の一部も認められる。21は２本の沈線文が横位と縦位に施され，更に，無節Ｌの撚糸文が施されている。23は条線文が縦位に施されている。

第48号住居跡（第68図）

本跡は，当遺跡の南東側エリヤ境界付近のD3d_5区に確認され，第45号住居跡の３ｍ東側に存在している。北東側では縄文時代中期の加曽利Ｅ期の第35号住居跡と重複しているが，本跡との新旧関係を明確にすることはできなかった。なお，本跡の大部分がエリヤ外に存在するため，調査した部分はほんの一部分である。したがって形状・方向・規模等不明である。

壁はロームで硬く，ややゆるやかに外傾しながら立ち上がり，壁高は20cmである。床面は平坦で硬く締まったロームである。

炉跡は調査部分から検出されなかったが，長径50cm・短径40cm・深さ120cmのピットが１か所壁ぎわから検出された。

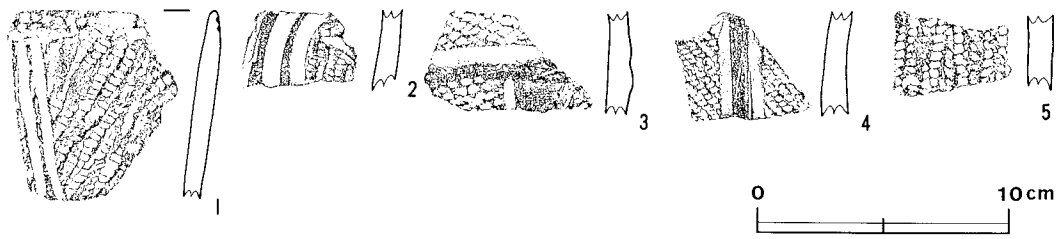
覆土は，ローム粒子を微量含む暗褐色土が堆積している。

遺物は，覆土下層を中心に加曽利Ｅ式の土器片が25片出土し，そのほか，覆土上層から阿玉台式土器片９片，黒浜式土器片３片が出土している。

出土土器

第86図１～５は，第48号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。１は口縁部片で，口唇部直下に小さな刺突文が２列横位に施され，そこから２本の沈線が垂下している。単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。

２～５は胴部片である。２は隆帯と沈線によって区画され，区画内に単節ＬＲの縄文が斜位に



第86図　第48号住居跡出土土器拓影図

施されている。3・4は磨消帯が垂下し，磨消帯と磨消帯の間には単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。5は単節ＲＬの縄文が縦位に施されている。

第55号住居跡（第87図）

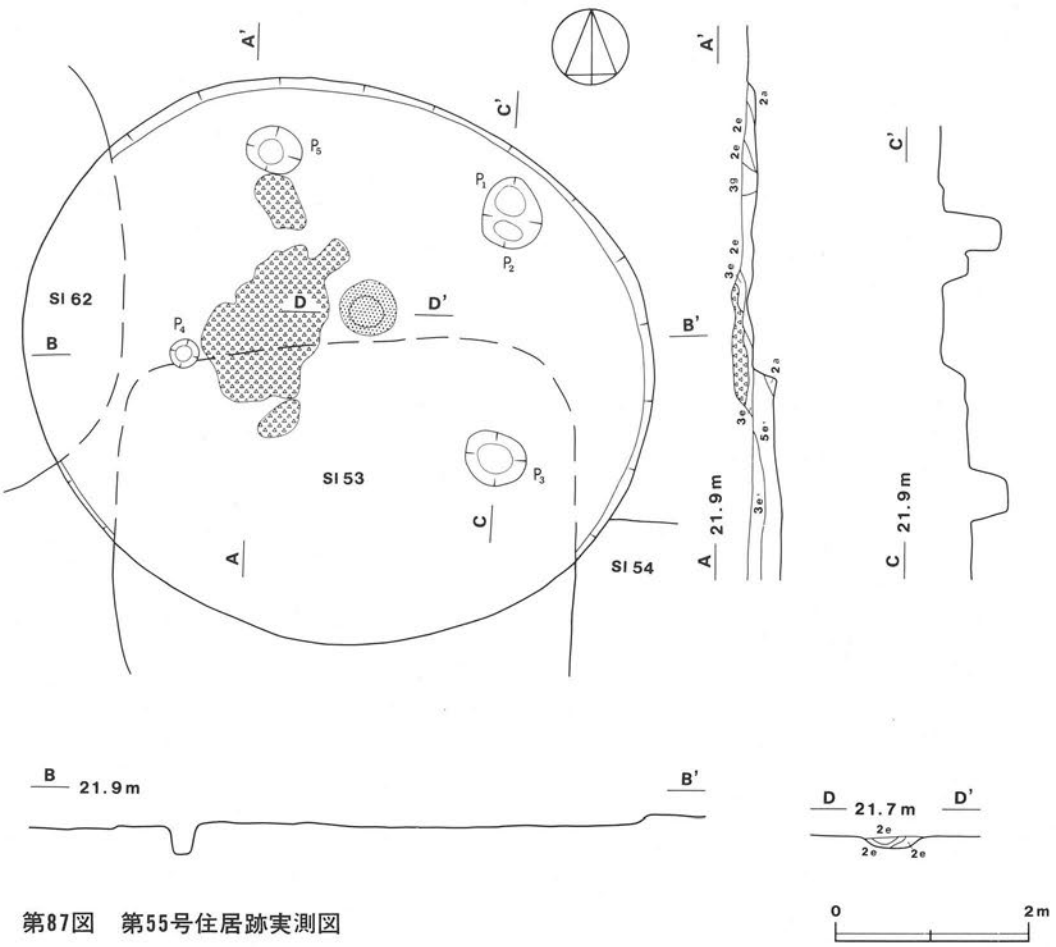
本跡は，当遺跡のやや南西側D2a_0区を中心に確認され，第46号住居跡の7ｍ南西側に存在している。本跡は南東側に位置する縄文時代前期の第54号住居跡の北西端を掘り込み，南側に位置する同中期の阿玉台期の第53号住居跡と，西側に位置する同中期の加曽利Ｅ期の第62号住居跡が埋没した後構築されたものと考えられる。

平面形は残存部から推定して楕円形と思われ，長径方向はＮ－66°－Ｅ，最大径は6.4ｍ程度と推測される。北西・北・北東・東の各壁はロームで硬く，ごくゆるやかに立ち上がり，壁高は5～10cmと浅い。床面はほぼ平坦で硬いロームであり，炉跡の西側は踏み固められて硬く締まっている。南側の約半分と西側の一部の床面はロームでなく，第53・62号住居跡の覆土である。

炉跡はやや北東側に位置し，直径60cmの円形を呈し，床面を皿状に12cm掘り込んだ地床炉である。炉内には硬さや色調に相違のある暗褐色土が堆積し，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含んでいる。ピットは5か所検出され，配列や規模からP_1・P_3・P_4・P_5が主柱穴と考えられる。主柱穴は壁から内側に位置しているP_4を除いて壁ぎわに配列され，規模は長径30～60cm・短径30～44cm・深さ35～60cmである。P_2はP_1の支柱穴と考えられる。

覆土はローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む暗褐色土と，壁ぎわにローム粒子を微量含む暗褐色土が堆積している。また，中央からやや西側にヤマトシジミを主体とした貝層が長径70cm・短径100cmの不整楕円形を呈する形で20cmの厚さで堆積し，その他にも北側と南側に長径70cm・短径40cm，長径60cm・短径30cmの楕円形状に広がる貝層が堆積している。

遺物は，炉内と東壁ぎわの床面直上や覆土下層を主として加曽利Ｅ式の土器片が151片出土し，そのほか磨石1点，軽石1点，阿玉台式土器片と黒浜式土器片が覆土上層から少量出土している。



第87図　第55号住居跡実測図

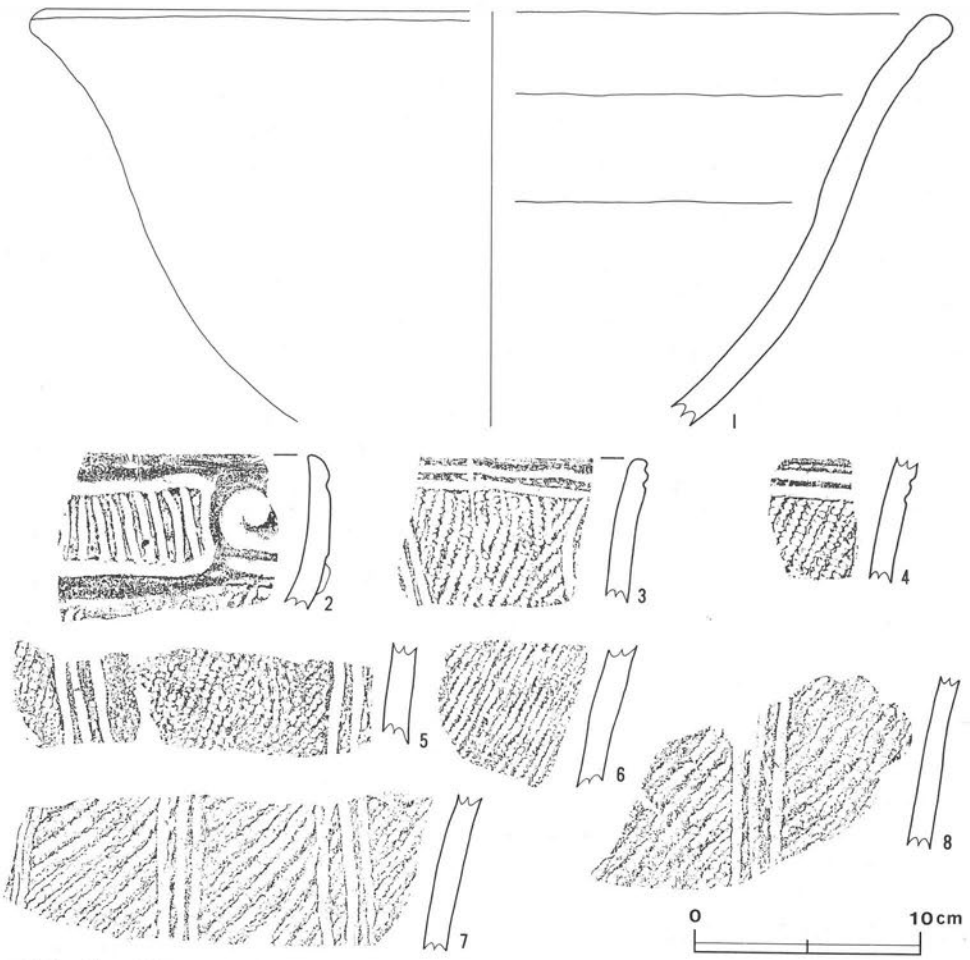
出土土器

第55号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴　及　び　文　様	胎土・焼成・色調	備　考
第88図 1	浅鉢形土器 加曽利E	A(40.8) B(18.4)	胴部は下位から内彎気味に大きく開きながら立ち上がり，口縁部は外反気味に大きく開いて立ち上がる。胴部中位の内側に稜を有する。底部は欠損している。文様は無文である。口縁部外面はていねいな横位のナデ，胴部は縦位のナデが施され，内面はていねいな横位のナデが施されている。	砂粒・長石 褐色 良好	20%　7片 P91

第88図２～８は，第55号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。２・３は口縁部である。２は隆帯と沈線による渦巻文によって長方形状に区画され，区画内には縦位の沈線が施されている。胴部はわずかに縄文が窺える。３は口唇部直下に２本の沈線が横位に施され，単節ＲＬの縄文が縦位や斜位に施されている。

４～８は胴部片である。４～６は単節の縄文が施され，４は２本の沈線が横位に巡り，単節ＲＬの縄文が施されている。５は幅の広い磨消帯が垂下し，磨消帯と磨消帯との間には単節ＲＬの



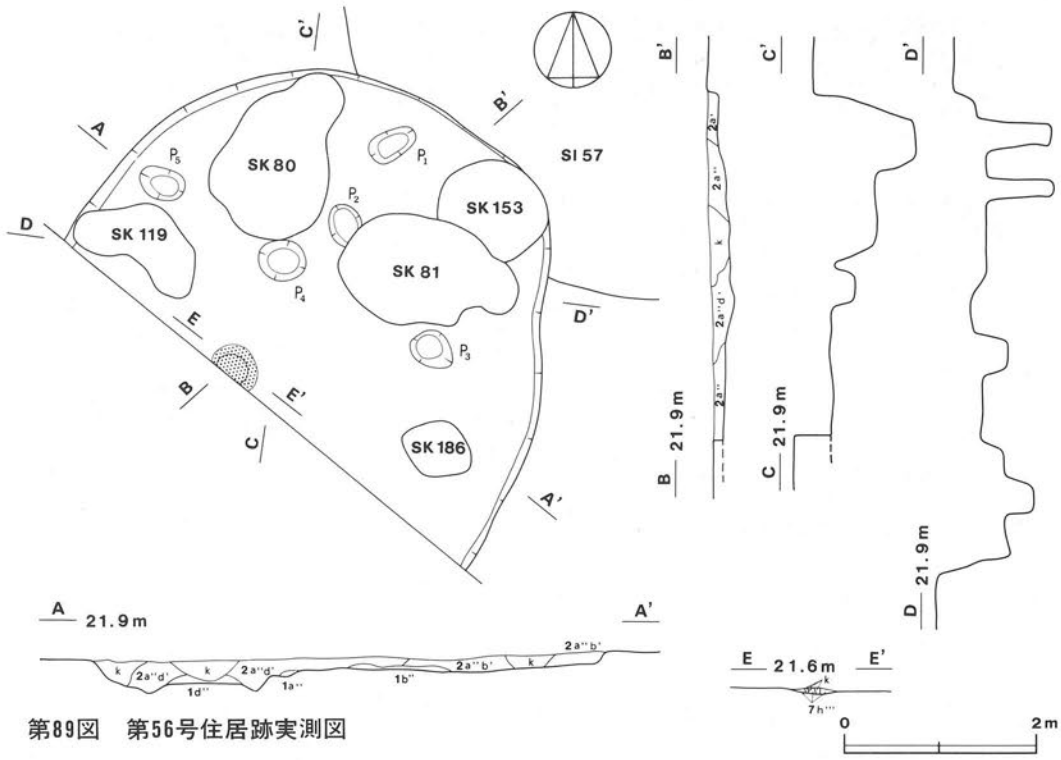
第88図　第55号住居跡出土土器実測図・拓影図

縄文が，6は単節ＲＬの縄文がそれぞれ斜位に施されている。7は3本1組の沈線が3単位垂下し，8は幅の広い磨消帯が垂下し，それぞれ撚りの太い無節Ｒの縄文が斜位に施されている。

第56号住居跡（第89図）

本跡は，調査エリヤ南西端の台地縁辺部に位置し，Ela_8区を中心に確認された住居跡である。北東側に位置する縄文時代中期の加曽利Ｅ期の第57号住居跡を掘り込み，北・北東・南東側で第80・81・153・119・186号土坑と重複している。土坑との新旧関係は明確にできなかった。なお，本跡の調査については，調査エリヤ境界の台地突端部は崖になって危険なため，南側半分は調査できなかった。

平面形は調査した範囲から円形になるものと思われ，最大径は5.5ｍと推測される。壁はローム で硬く，北東壁は垂直に，東壁・南東壁・北壁は外傾しながら立ち上がり，壁高は12～29cmで



第89図　第56号住居跡実測図

ある。床面はやや凸凹している。

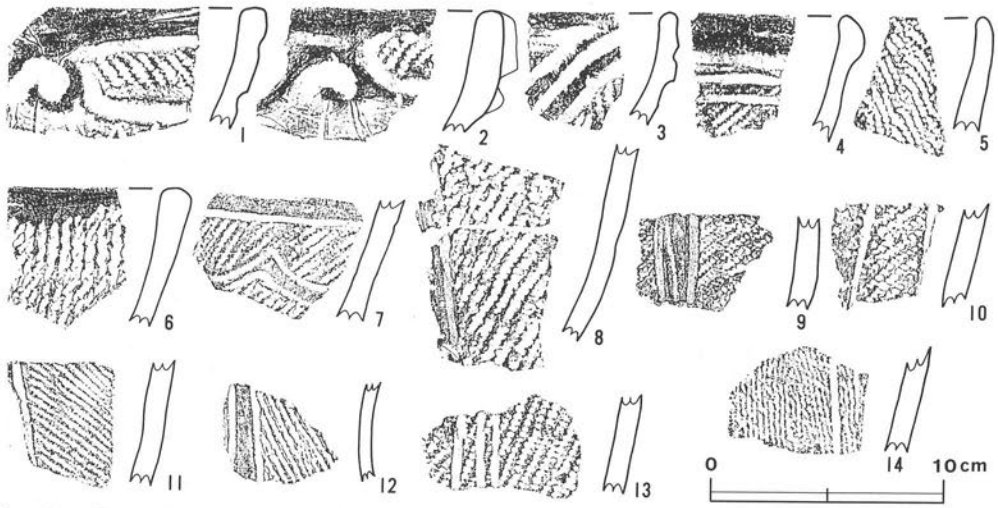
炉跡は北東壁から3.4m離れたエリヤ境界付近に位置し，直径50cmの円形を呈するものと考えられ，床面を10cmほど掘り込んだ地床炉である。炉内には焼土粒子を多量含む暗赤褐色土が堆積しているが，炉床はそれほど焼けていない。ピットは５か所検出され，配列や規模からP_1・P_3・P_4・P_5が主柱穴と考えられる。P_3～P_5は直線的に配列され，P_1は壁ぎわに位置している。規模は長径50cm・短径30～40cm・深さ25cm内外である。

覆土はローム粒子中量・ローム大ブロックを少量含む暗褐色土と，ローム粒子中量・ローム小ブロックを中量含む暗褐色土，及びローム粒子を少量含む暗褐色土が人為堆積の様相を呈している。

遺物は，覆土下層を中心に全域から，加曽利Ｅ式の土器片264片，土器片錘（第181図86～90）５点，阿玉台式土器片３片，黒浜式土器片14片，及び須恵器片１片が出土している。

出土土器

第90図１～14は，第56号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。１～６は口縁部片である。１・２は隆帯と沈線による渦巻文によって長方形状や楕円形に区画され，区画内に１は単節ＲＬの縄文が，２は単節ＬＲの縄文がそれぞれ斜位に施されている。３は隆帯と沈線による半楕円文で区画され，区画内には縄文がわずかに窺える。４は２本の沈線が横位に，単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。５は単節ＬＲの縄文が斜位に，６は太い撚糸文が縦位に，いずれも口



第90図　第56号住居跡出土土器拓影図

唇部直下から施されている。

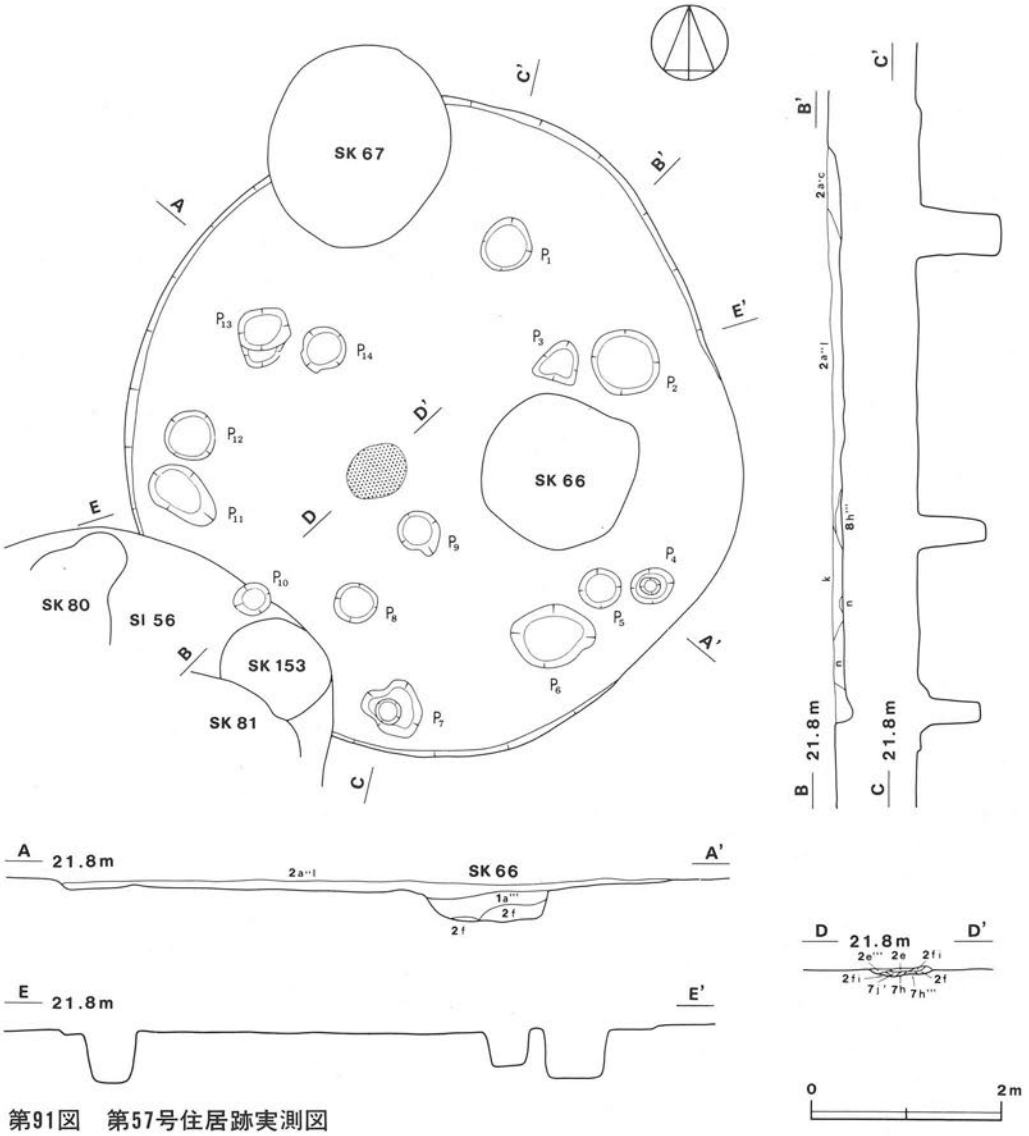
7～14は胴部片である。7は連弧文と単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。8～12は磨消帯が垂下し，8～11は単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。11は撚りの細い単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。12は無節Ｌの撚糸文が斜位に，13は単節ＲＬの縄文と3本の沈線が施されている。14は撚糸文が縦位に施され，沈線が1本垂下している。

第57号住居跡（第91図）

本跡は，当遺跡の南西端E1a_9区を中心に確認され，第70号住居跡の1ｍ西側に存在している。南西側を縄文時代中期の加曽利Ｅ期の第56号住居跡に掘り込まれている。また，東側に位置する第66号土坑が埋没した後貼り床をして本跡の床を構築している。北側では第67号土坑と重複し，本跡が掘り込まれていることから第67号土坑より本跡の方が古い。

平面形は円形を呈するものと考えられ，長径方向はＮ－4°－Ｅ，規模は長径7ｍ・短径6.5ｍである。壁はロームで硬く，南壁は垂直に，北壁・北東壁・北西壁はゆるやかに立ち上がり，壁高は約10cmと浅い。東壁は削平されてなくなっている。床面は平坦で硬いロームであり，炉跡の周辺は踏み固められて特に硬く締まっている。

炉跡はやや西側に位置し，長径70cm・短径56cmの楕円形を呈し，床面を10cmほど掘り込んでいる。更に，炉床の南東壁を10cmほど掘り込んで深鉢形土器の胴部を埋め込んでおり，土器埋設炉としている。土器内には焼土粒子を多量含む暗褐色土が充満し，土器の外側は焼土粒子を多量含む暗赤褐色土と，焼土粒子・焼土小ブロック少量を含む暗赤褐色土，及びローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を多量含む暗褐色土等が堆積している。炉床はレンガ状に硬く焼けている。ピットは14



第91図　第57号住居跡実測図

か所検出され，配列や規模からP_1・P_2・P_4・P_6・P_7・P_9・P_{11}・P_{13}が主柱穴と考えられる。主柱穴は炉跡近くのP_9を除き壁ぎわに位置し，長径50～90cm・短径40～70cm・深さ50～75cmである。P_3はP_2の，P_5はP_4の，P_{14}はP_{13}の支柱穴と考えられ，P_{10}も支柱穴と考えられる。P_8・P_{12}は浅いピットで，性格は不明である。

覆土は一部攪乱を受けているものの３層から成り，ローム粒子中量・炭化物を微量含む暗褐色土，ローム粒子中量・ローム中ブロックを微量含む暗褐色土，及び焼土粒子を多量含む極暗褐色土等が堆積している。

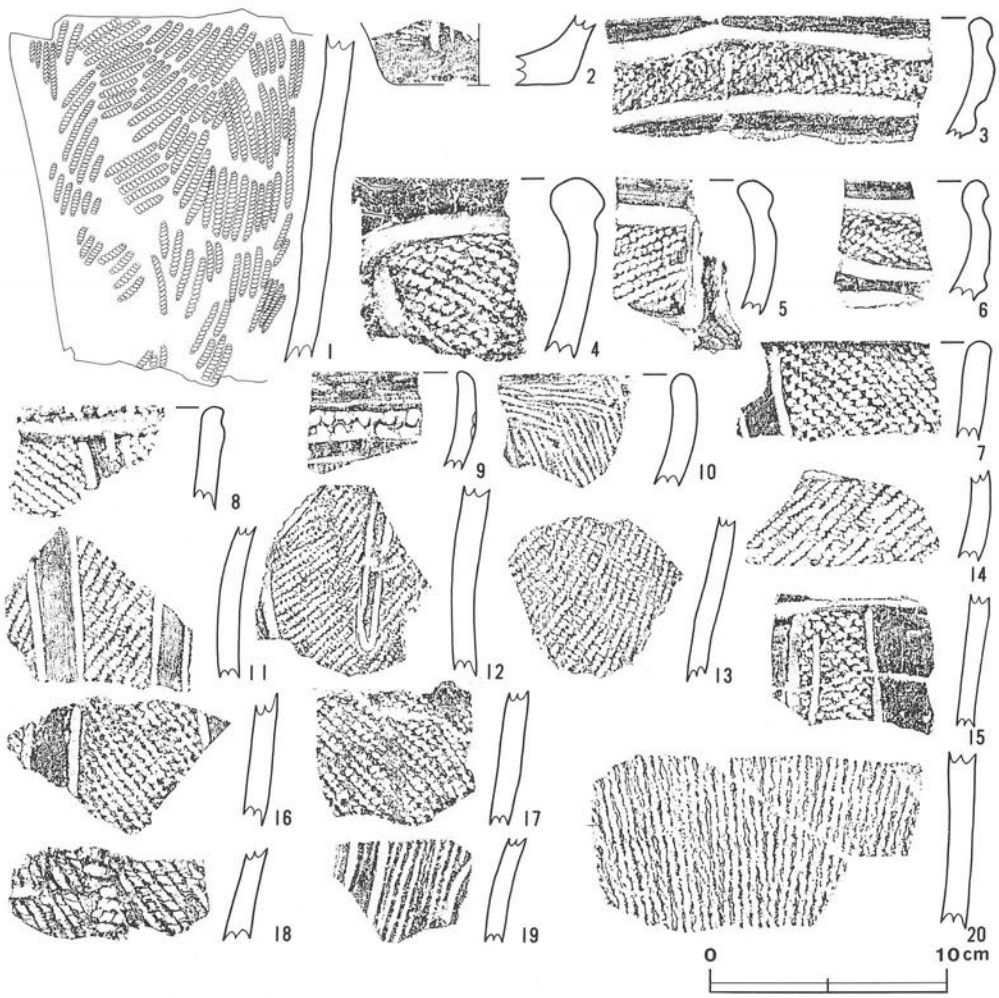
遺物は，炉跡のやや南側から埋設炉として利用された加曽利Ｅ式の深鉢形土器（第92図１）が

出土し，また，ほぼ全域の床面と覆土下層から土器片370片が出土している。そのほか，阿玉台式土器片，黒浜式土器片が数片出土している。

出土土器

第57号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備　考
第92図 1	深鉢形土器 加曽利E	B(16.0)	底部と口縁部は欠損している。胴部には単節ＬＲの縄文が器面全体に斜位や縦位に施されている。内面は縦位のナデが施されている。	砂粒 橙色 良好	50%　34片 埋設土器 P16
2	深鉢形土器 加曽利E	B (2.6) C (8.0)	底部は平底を呈し，胴部には単節ＬＲの縄文が横位に施されている。底部直上は横位のナデが施されている。	砂粒・長石 明赤褐色　普通	10%　1片 P217



第92図　第57号住居跡出土土器実測図・拓影図

第92図３～20は，第57号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。３～10は口縁部片である。３～６は隆帯と沈線による楕円文や長方形状文で区画され，区画内に，３・５は複節LRL

が，４は複節ＲＬＲ，６は単節ＬＲの縄文がそれぞれ斜位に施されている。７・８は磨消帯が垂下し，７は複節ＲＬＲ，８は単節ＬＲの縄文がいずれも斜位に施されている。９は２列の刺突文が上下交互に施され，10は無節の縄文が斜位と縦位に施されている。

11～20は胴部片である。11～14は単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。11は磨消帯が２本垂下し，12は「Ｕ」字文と沈線が施されている。15・16は磨消帯が垂下し，磨消帯と磨消帯との間には複節ＬＲＬが，17は複節ＬＲＬの縄文が，それぞれ斜位に施されている。18は撚りの太い無節Ｌの縄文が斜位と縦位に施されている。19・20は撚糸文が縦位に施され，20は２段の撚糸文である。

第58号住居跡（第93図）

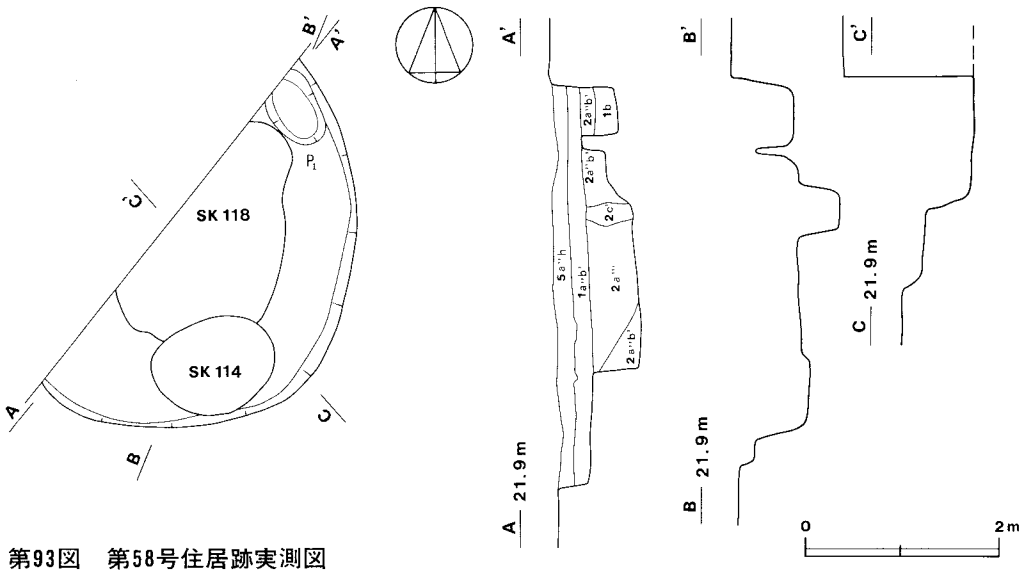
本跡は，当遺跡の南西端D1i$_8$区を中心に確認され，第57号住居跡の２ｍ北西側に存在している。北西側半分はエリヤ外のため調査できなかった。本跡は第114・118号土坑と重複しているが，セクション図でも明らかなように，土坑埋没後本跡が構築されたものである。

平面形は残存部から円形ないし楕円形を呈するものと考えられ，長径方向は不明であるが，最大径４ｍを測る。壁はロームで硬く，南東壁はゆるやかに，南壁はほぼ垂直に立ち上がり，壁高は20～30cmである。床面は重複する土坑の部分を除きほぼ平坦で硬い。

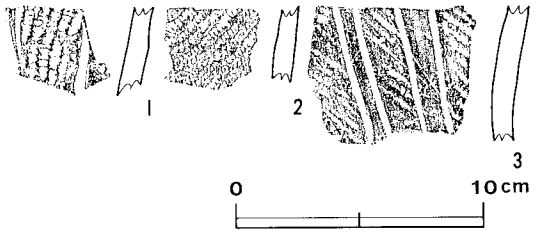
炉跡は検出されなかった。ピットは北東壁下に１か所検出され，長径は推定で80cm・短径は50cmで，深さは40cmを有する柱穴である。

覆土はほぼ２層から成り，上層はローム粒子中量・焼土粒子・砂を微量含む極暗褐色土，下層はローム粒子中量・ローム小ブロックを少量含む褐色土がおおむね自然堆積している。

遺物は，覆土下層から加曽利Ｅ式の土器片７片が出土している。



第93図　第58号住居跡実測図



第94図　第58号住居跡出土土器拓影図

出土土器

第94図１～３は，第58号住居跡から出土た縄文土器片の拓影図である。１～３は胴部片で，１は磨消帯と単節ＬＲの縦位の縄文が，２は単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。３は磨消帯が２本垂下し，磨消帯と磨消帯の間には無節Ｌの縄文が斜位に施されている。

第62号住居跡（第95図）

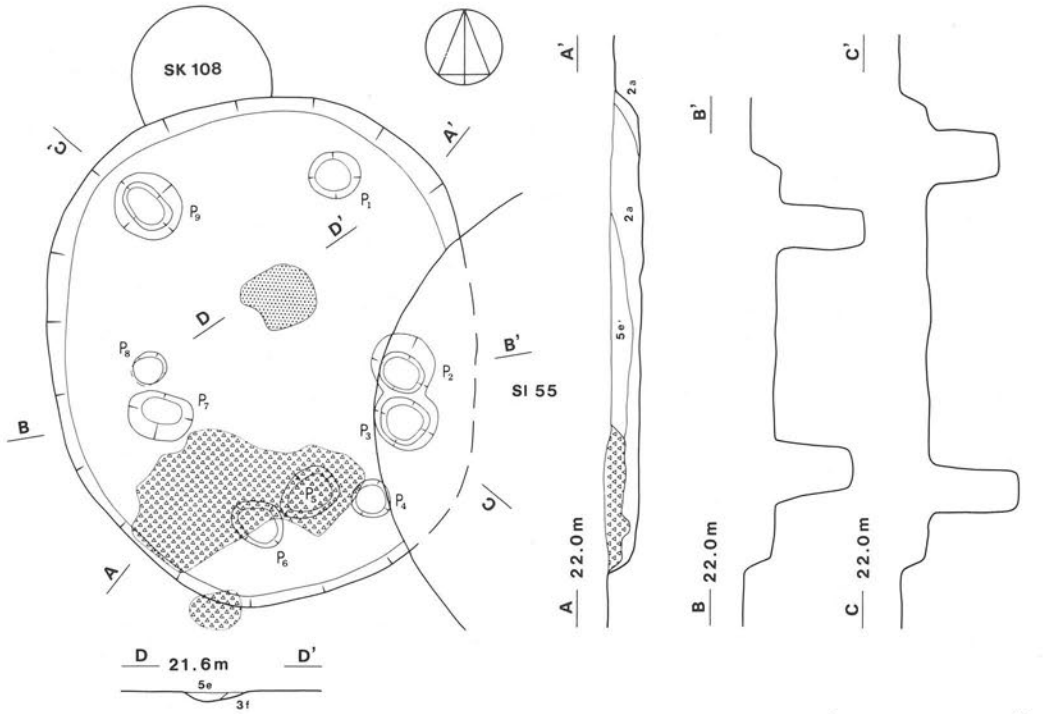
本跡は，当遺跡のほぼ南西側C2j$_8$区を中心に確認され，第46号住居跡の10ｍ西側に存在している。北側を第108号土坑に掘り込まれており，東側で縄文時代中期の第55号住居跡と重複している。なお，第55号住居跡は，本跡の埋没後に構築されたものである。

平面形は楕円形を呈し，長径方向はＮ－2°－Ｗを指し，規模は長径5.4ｍ・短径4.5ｍである。壁はロームで硬く，外傾しながら立ち上がり，壁高は25～30cmである。床面はほぼ平坦で，硬く締まっているロームであり，炉跡の周囲は踏み固められて特に硬く締まっている。

炉跡は中央からやや北側に位置し，長径80cm・短径70cmの不定形を呈し，床面を10cmほど掘り込んだ地床炉である。炉内はローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む極暗褐色土と，ローム粒子・焼土粒子を微量含む暗褐色土が堆積し，炉床の東側は特に焼土や焼土大ブロックが硬く焼けている。ピットは９か所検出され，配列や規模からP$_1$～P$_4$・P$_6$・P$_7$・P$_9$が主柱穴と考えられる。主柱穴は壁ぎわに配置され，P$_2$とP$_3$は双円形を呈している。規模は長径40～75cm・短径40～70cm・深さ70～90cmである。P$_8$はP$_7$の支柱穴と考えられる。P$_5$は貯蔵穴と考えられ，P$_4$とP$_6$の間のやや内側にあって長径65cm・短径50cm・深さ75cmの規模を有する卵形状のもので，壁は垂直に立ち上がっている。

覆土はほぼ３層から成り，上層はローム粒子少量・焼土粒子・炭化粒子を微量含む極暗褐色土，下層はローム粒子を微量含む暗褐色土が自然堆積している。また，南側のP$_5$・P$_6$から南壁にかけて，ヤマトシジミを主体とした長径250cm・短径100cm・厚さ15～25cmの貝層が不整楕円形を呈して覆土上層から中層まで堆積している。そのほかに，長径55cm・短径40cmの楕円形状を呈する貝層が南壁の覆土層に堆積している。

遺物は，P$_5$の貯蔵穴の底面直上から，加曽利Ｅ式の完形の深鉢形土器（第96図１）と，ほぼ完形の深鉢形土器（第96図２）が２個横位の状態で出土したほか，炉跡周辺の床面や覆土中層を中心として，加曽利Ｅ式の土器片が262片出土している。また，耳栓（第180図１）１点，土器片錘（第181図94～96）３点，敲石（第190図152）１点，メノウ原石１点が出土しており，そのほか，覆土上・中層を中心に茅山式，黒浜式，諸磯式，阿玉台式，及び中峠式の土器片が数片出土している。



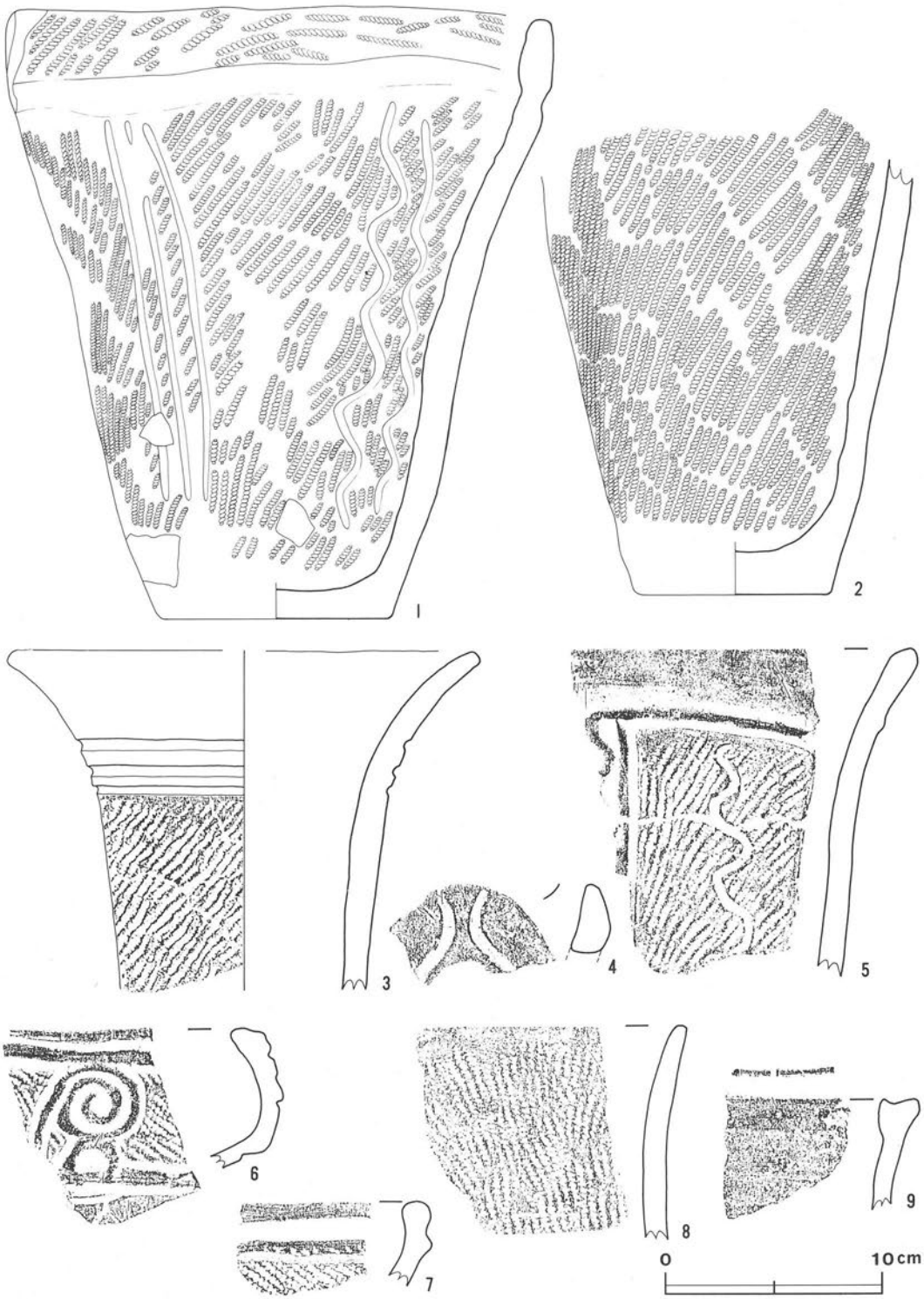
第95図　第62号住居跡実測図

出土土器

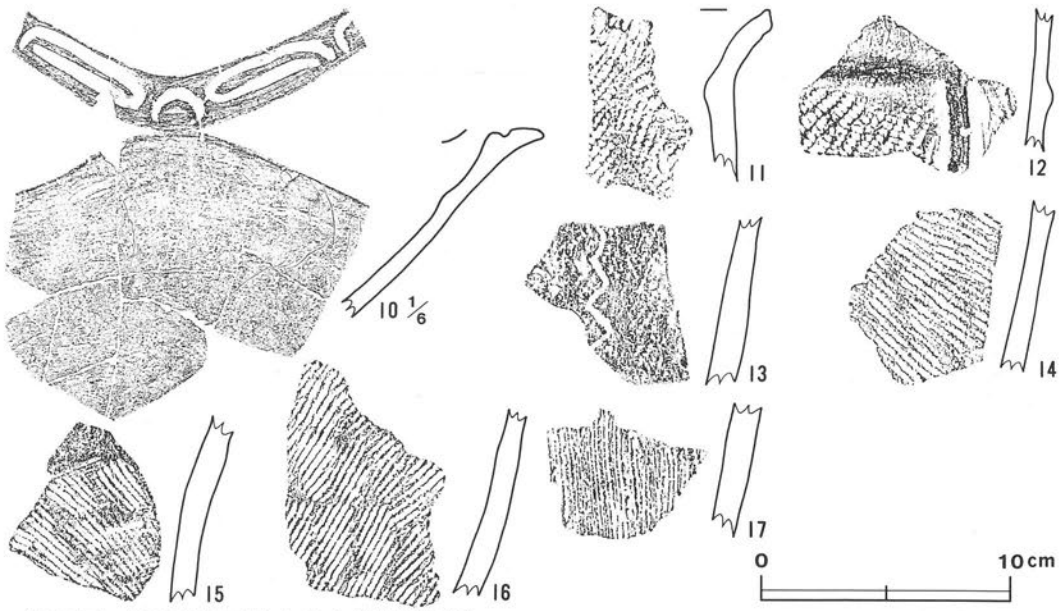
第62号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第96図 1	深鉢形土器 加曽利ＥⅠ	A 25.3 B 28.3 C 10.5	底部はやや厚手の平底で，胴部はほぼ外傾し，口縁部は直立している。胴部も厚手である。口縁部と胴部の文様帯は１本の沈線で区画されている。口縁部と胴部の文様帯は単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。胴部には垂下する３本の沈線と２本の蛇行沈線がそれぞれ３単位づつ施されている。口縁部内面は横ナデが施されている。	砂粒・長石 にぶい橙色 良好	100%　25片 P18
2	深鉢形土器 加曽利ＥⅠ	B(22.5) C 9.0	底部は厚手の平底で，胴部はやや外傾しながら立ち上がっている。口縁部は欠損している。堅緻な土器で，胴部文様は単節ＬＲの縄文が器面全体に斜位に施されている。底部直上の外面と上・中位以下の内面は横位のナデが施されている。	砂粒・雲母・長石 橙色 良好	80%　5片 P17
3	深鉢形土器 加曽利ＥⅠ	A(21.8) B(15.7)	口縁部は大きく開きながら立ち上がっている。胴部以下は欠損している。口縁部に幅４cm位の無文帯を有し，口縁部下位に３本の沈線を横位に巡らしている。胴部の文様は単節ＲＬの縄文が全面に斜位に施されている。口縁部内・外面は横位のナデ，胴部内面は縦位のナデが施されている。	砂粒・石英・長石 灰褐色 良好	20%　6片 P273

第96・97図４～17は，第62号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。４は把手の部分で，外面は「八」の字状の沈線が施され，内面は無文である。５～11は口縁部片である。５の口縁部は無文で，口縁部と胴部は隆帯と沈線によって区画されている。胴部は蛇行する粘土紐を貼り付けた隆線と蛇行沈線文が垂下し，その間に単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。６は隆帯と沈線による渦巻文で長方形状に区画され，区画内は単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。７



第96図　第62号住居跡出土土器実測図・拓影図(1)



第97図　第62号住居跡出土土器拓影図(2)

は隆帯の両側に沈線が横位に巡り，複節RLRの縄文が斜位に施されている。8は口唇部直下から単節ＬＲの縄文が縦位に施されている。9は口唇部に凹線を有し，無文である。10は浅鉢形土器片で，口縁部は波状を呈し，波頂下の内面に，沈線の「U」字文とその両側に「⊃⊂」状の沈線が施されている。11は口唇部直下から単節ＲＬの縄文が斜位に施され，口唇部直下の一部に縦位の沈線が窺える。

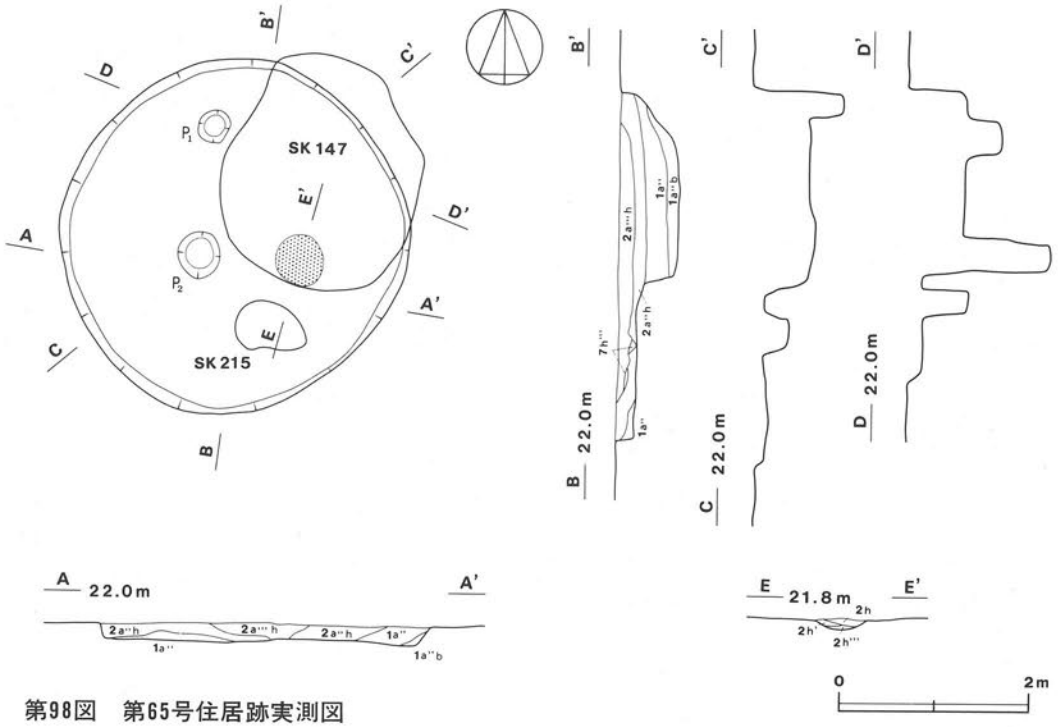
12～17は胴部片である。12は隆帯が横位と縦位に施され，単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。13は無節の縄文が斜位に施され，１本の蛇行沈線文が垂下している。14は単節ＬＲの縄文が斜位に施され，15は無節Ｌの縄文が，16は無節Ｒの縄文がそれぞれ斜位に施されている。17は条線文が縦位に施されている。

第65号住居跡（第98図）

本跡は，調査エリア南西側の境界付近のE2c_5を中心に確認され，第72号住居跡の２ｍ南西側に存在している。北東側は第147号土坑と南側は第215号土坑と重複しているが，重複部に貼り床がみられることから２基の土坑が埋没した後本跡が構築されたものと思われる。

平面形は円形を呈し，長径方向はＮ－2°－Ｅを指し，規模は長径3.8ｍ・短径3.6ｍである。壁はロームで硬く，南壁は垂直に，その他は外傾しながら立ち上がり，壁高は10～20cmである。北東壁は土坑の調査中に掘り込んで存在しない。床面は平坦な硬いロームである。

炉跡はやや東側に位置し，長径55cm・短径50cmの円形を呈し，床面を12cmほど掘り込んだ地床炉である。炉内には焼土粒子をそれぞれ微量，少量，多量に含む暗褐色土が堆積し，炉床は硬く



第98図　第65号住居跡実測図

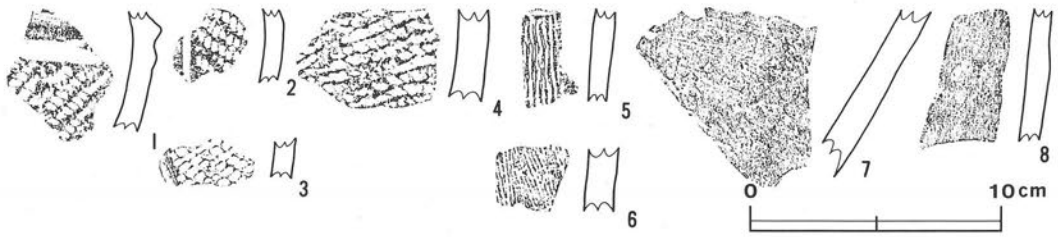
焼け，ゴツゴツしている。ピットは２か所検出され，P_1・P_2とも主柱穴と考えられる。P_1は北壁近くに，P_2はほぼ中央に位置し，規模は長径30～50cm・短径30～40cm・深さ30～50cmである。

覆土は５～６層から成り，上層はローム粒子多量・焼土粒子を微量含む暗褐色土が，下層や壁ぎわはローム粒子中量を含む褐色土等がほぼ自然堆積の様相を呈している。

遺物は，P_2の西側の覆土下層を中心に加曽利E式の土器片23片が出土している。

出土土器

第99図１～８は，第65号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。１～８は胴部片で，１は横位の沈線が巡り，単節ＲＬの縄文が施されている。２は磨消帯が認められ，単節ＲＬの縄文が施されている。３は炉内から出土したもので，単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。４は無節Ｒの縄文が斜位に施されている。５は単節Ｒの撚糸文が，６は条線文がそれぞれ縦位に施されて



第99図　第65号住居跡出土土器拓影図

いる。7・8は無文で，7は浅鉢形土器片で，炉内からの出土である。

第67号住居跡（第100図）

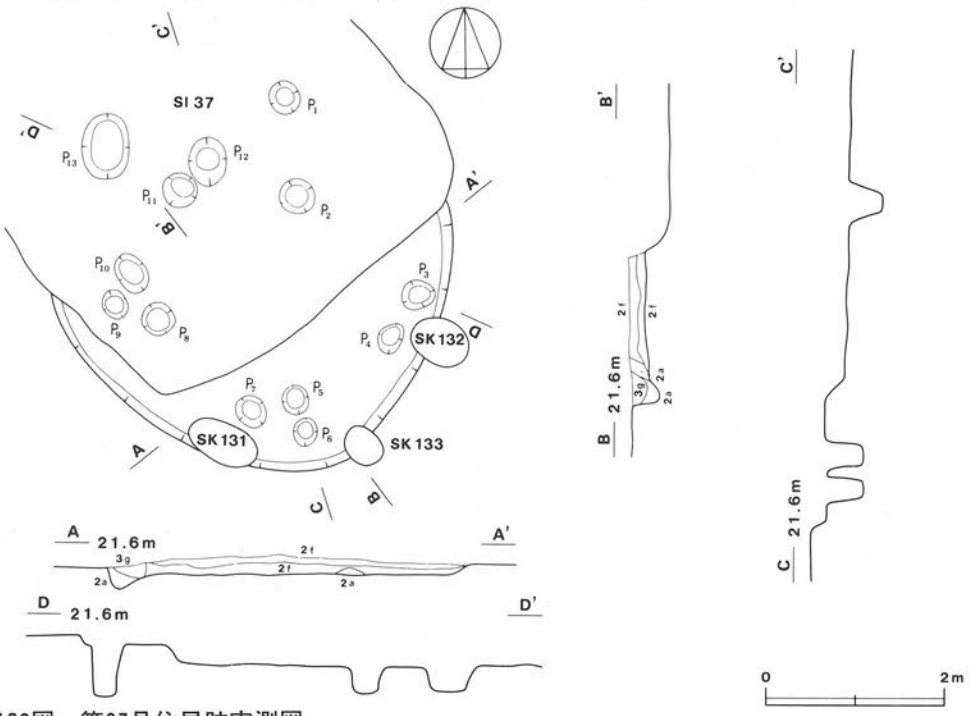
本跡は，当遺跡のほぼ中央部C3g$_6$区を中心に確認され，第43号住居跡の5m北東側に存在している。北側約3分の1を古墳時代前期の第37号住居跡に掘り込まれている。また，南東壁から南壁にかけて3か所を第132・133・131号土坑に掘り込まれている。

平面形は円形か楕円形を呈するものと考えられるが，長径方向は不明で，規模は最大径4.6mと推定される。壁はロームで硬く，東壁や南壁は外傾しながら立ち上がり，壁高は20cm内外である。残っている床面はほぼ平坦で硬いロームである。本跡の床面が25cm高い。

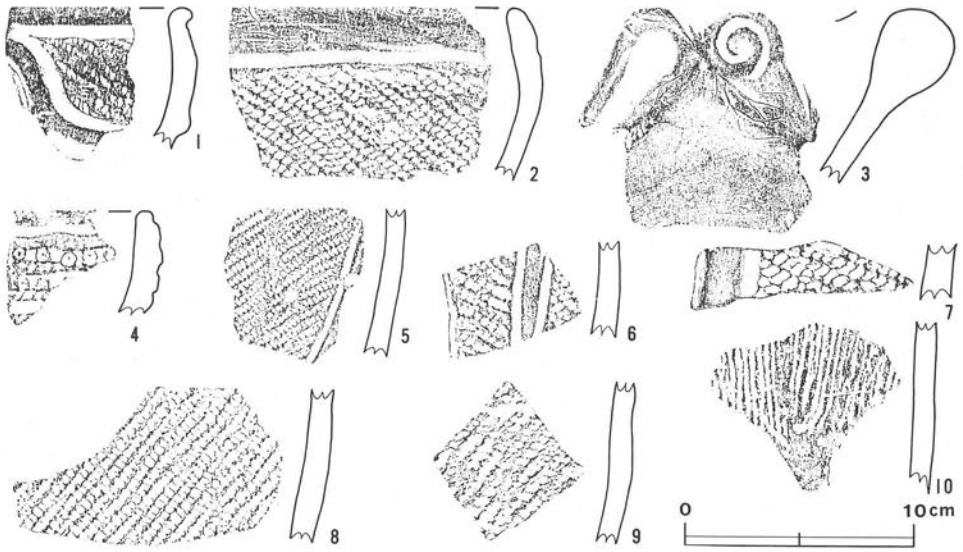
炉跡は，第37号住居跡に掘り込まれていて検出されなかった。ピットは，13か所検出され，配列や規模からP$_1$・P$_3$・P$_6$・P$_9$・P$_{11}$・P$_{12}$が主柱穴と考えられる。規模は，長径30～60cm・短径28～40cm・深さ40～60cmである。P$_4$はP$_3$，P$_5$・P$_7$はP$_6$，P$_8$・P$_{10}$はP$_9$の支柱穴と思われる。P$_2$・P$_{13}$は不明である。

覆土はほぼ2層から成り，上層から下層にかけてローム粒子・焼土粒子を微量含む暗褐色土が自然堆積しているが，色調に僅かな相違が認められる。

遺物は，南側の覆土下層を中心に，加曽利E式の土器片19片が出土し，また，覆土上層から凹石（第191図170）1点，メノウ剝片1点，黒浜式土器片・阿玉台式土器片が出土している。



第100図　第67号住居跡実測図



第101図　第67号住居跡出土土器拓影図

出土土器

第101図１～10は，第67号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。１～４は口縁部片である。１は隆帯と沈線による半楕円文で区画され，区画内に単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。２は口縁部が無文で，沈線によって口縁部と胴部が区画され，胴部は一面に複節RLRの縄文が斜位に施されている。３は浅鉢形土器片で，波状を呈している。波頂下の左側の口唇部には凹線が，右側は沈線によって渦巻文が施され，胴部は無文である。４は口唇部直下と口縁部下位に各１本ずつ２本の沈線が横位に施され，その間に円形刺突文が２列施されている。

５～10は胴部片である。５～７は磨消帯と磨消帯の間に，５はＲＬ，６はＬＲの単節の縄文，７は複節LRLの縄文がそれぞれ斜位に施されている。８・９は単節の縄文が斜位に施され，８はＲＬ，９はＬＲである。10は無節Ｌの撚糸文が縦位に施されている。

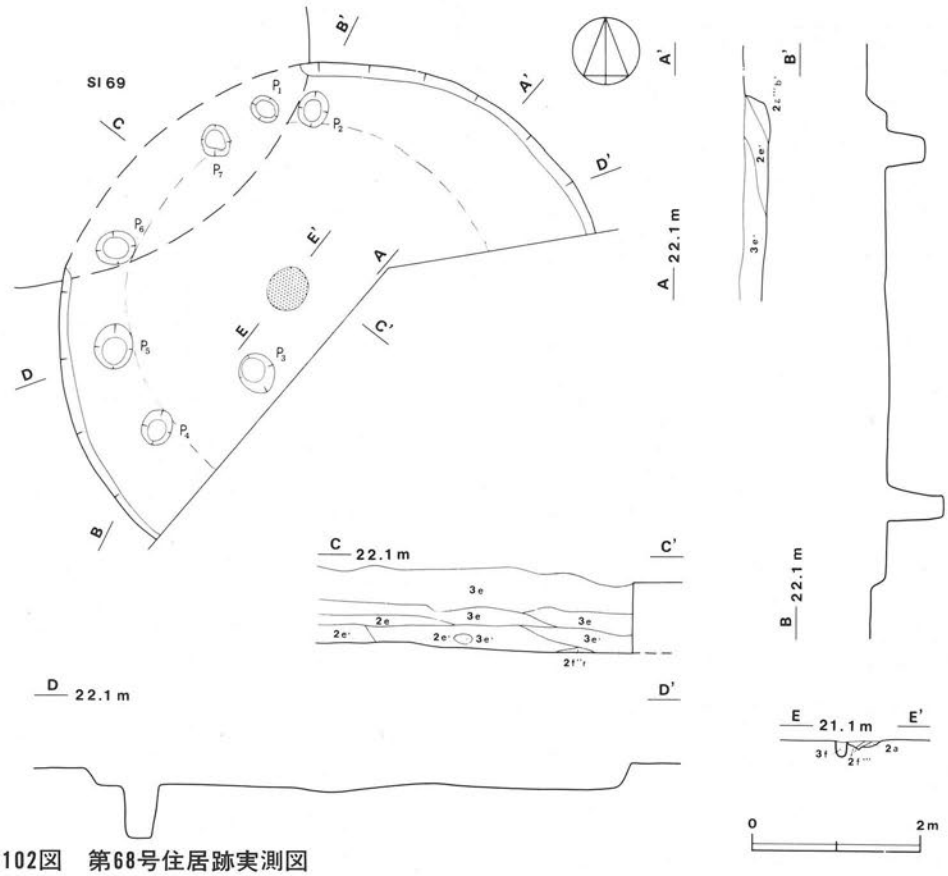
第68号住居跡（第102図）

本跡は，調査エリヤの南西側の境界D3e₃区を中心に確認され，南側の約３分の１のエリア外のため調査できなかった。また，農道が本跡を北西から南東方向に横切るように存在しているため，当初農道を除く約半分を調査し，その後農道を取り払い，残りを調査した。北西側は縄文時代中期の第69号住居跡と若干重複しているが，セクション等から見て本跡の方が新しい。また，本跡は残存部から推定して最大径6.6ｍの円形を呈するものと考えられるが，長径方向については不明である。壁は硬いロームで，外傾しながら立ち上がり，壁高は20～30cmである。床面はほぼ平坦で硬いロームであり，主柱穴を結ぶ内側は踏み固められて硬く締まっている。

炉跡は中央からやや西側に位置するものと思われ，長径53cm・短径45cmの楕円形を呈している。床面を12cm掘り込み，更に，炉跡の南西側を約20cmほど掘り込み，その中に胴部下位から底部を欠損している加曽利Ｅ式の深鉢形土器（第103図２）を埋め込み，土器埋設炉としている。土器内にはローム粒子・焼土粒子を微量含む黒褐色土が充満し，炉内にはローム粒子・焼土粒子を多量含む暗褐色土とローム粒子を微量含む暗褐色土が堆積している。炉床は硬く焼けている。ピットは７か所検出され，配置や規模からP_1～P_7とも主柱穴と考えられる。主柱穴は炉跡の60cm南側に位置するP_3以外は壁ぎわに位置し，規模は長径35～50cm・短径30～40cm・深さ50～60cmである。

覆土はほぼ３層から成り，ローム粒子少量・焼土粒子・炭化粒子を微量含み色調に僅かに相違のある黒褐色土と，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む暗褐色土等が自然堆積の様相を呈している。

遺物は，炉跡から埋設土器として使用した加曽利Ｅ式の深鉢形土器が，P_3の南側の床面から復元できた大木8b式の深鉢形土器（第103図１）が横位につぶされた状態で出土し，更に，西壁ぎわの床面から加曽利Ｅ式の深鉢形土器（第103図５）がつぶれた状態で，また，炉跡の西側の覆土下層から半完形の深鉢形土器（第103図４）がつぶれた状態で出土している。そのほか，覆土中・下



第102図　第68号住居跡実測図

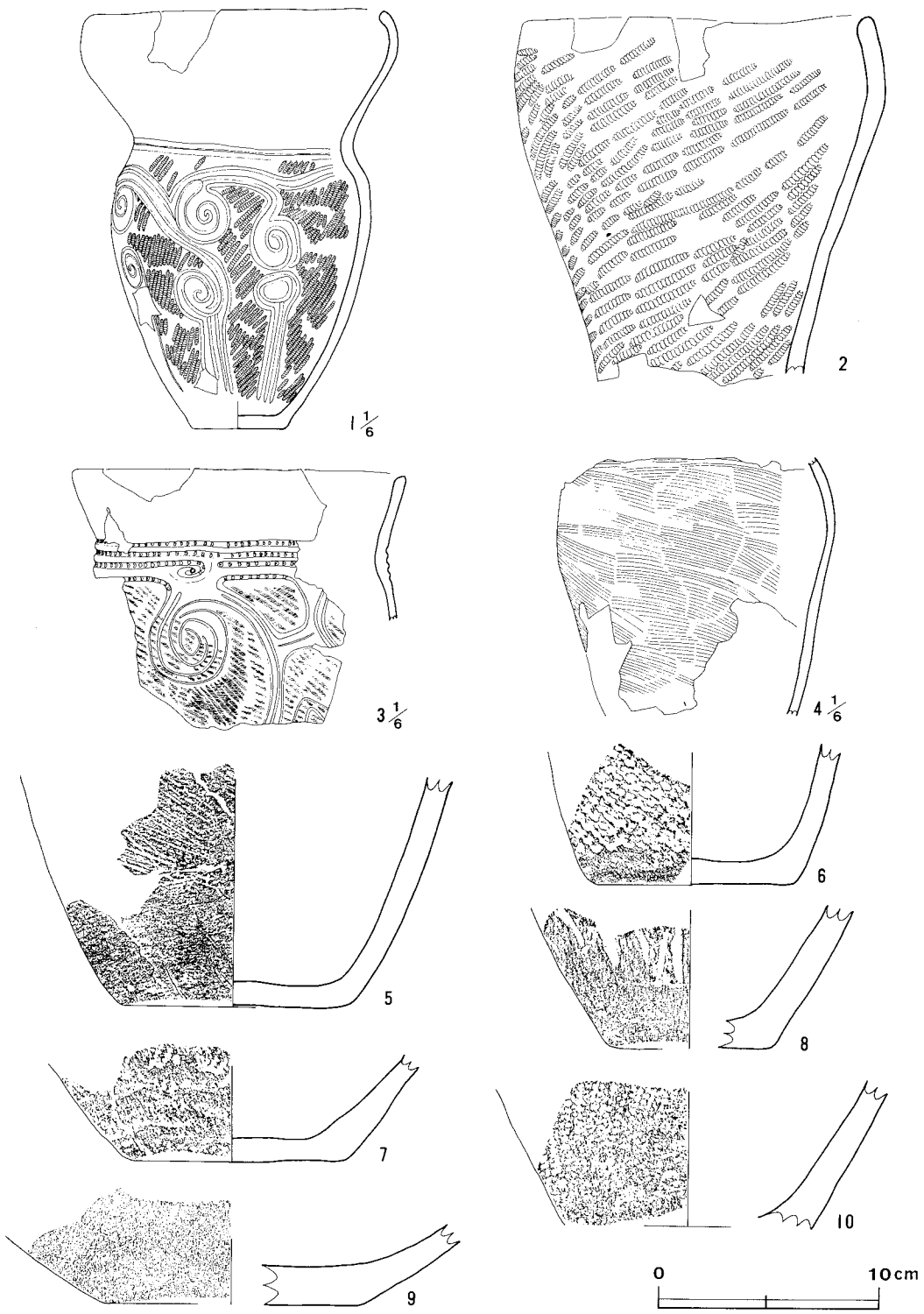
層から大木系の大形の口縁部（第103図３）や土器片712片，土器片錘（第181図100～110）11点と石器（第189図99他）６点，軽石３点のほか，覆土上・中層から少量であるが，茅山式，黒浜式，浮島式，阿玉台式の土器片が出土している。

出土土器

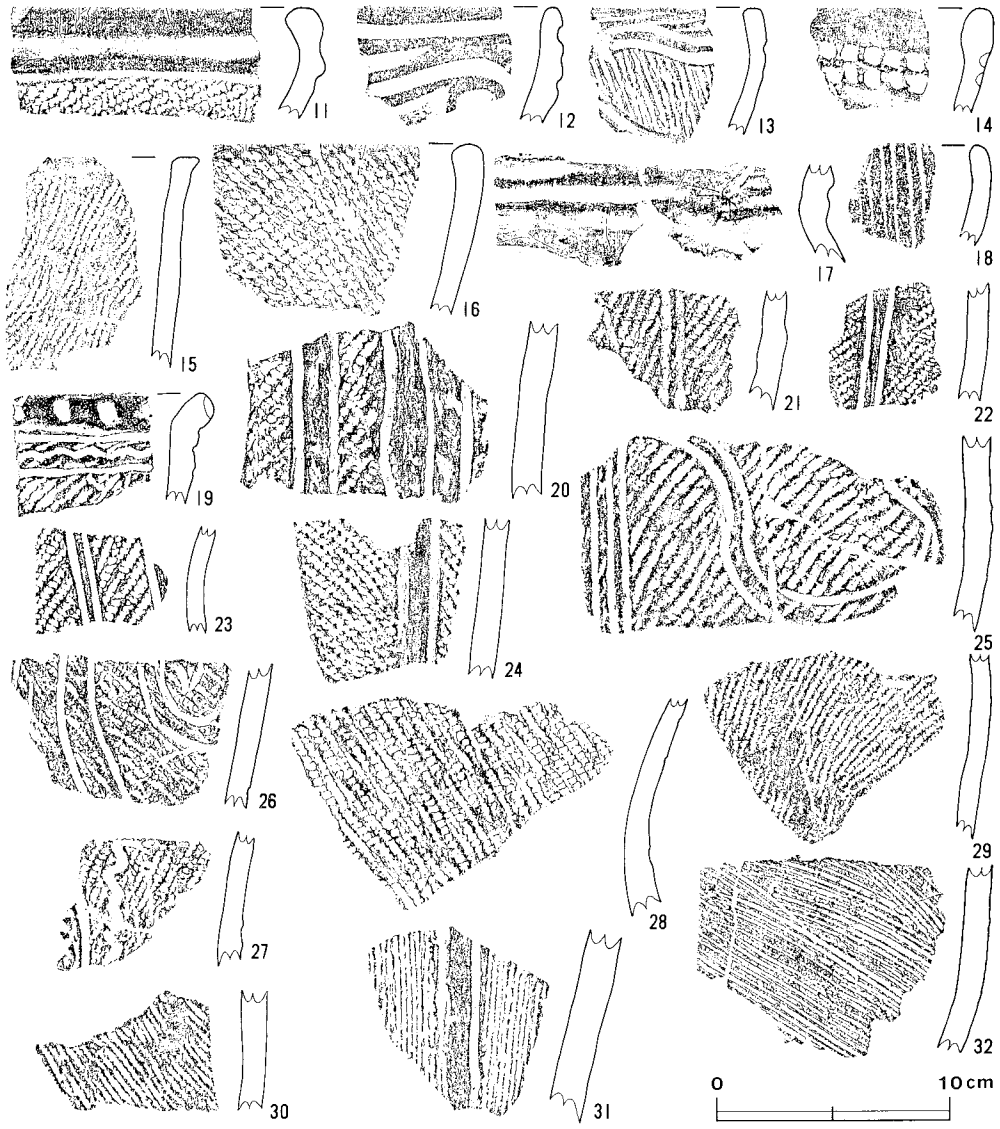
第68号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第103図 1	深鉢形土器 大木８ｂ	A 27.7 B 38.6 C 8.6	胴部のくびれているキャリパー形の完形の土器である。口縁部は無文で，頸部と胴部との間に２本の沈線が横位に巡り，頸部と胴部を区画している。胴部文様帯は単節ＲＬの縄文が斜位に施され，縄文地文の上に２～３本の連続する沈線によって３単位に渦巻文が構成され，１単位には渦巻文が３個施されている。また，沈線と連続している楕円文が単位ごとにそれぞれ１個ずつ右下に付けられている。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	100% 66片 P19
2	深鉢形土器 加曽利ＥⅡ	A 16.0 B(16.5)	胴部はやや外反し，口縁部は内彎している。胴部下位と底部は欠損している。口縁部を除いて器面に粗い単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。口縁部内・外面は横位のナデが施されている。	砂粒 橙色 普通	80% 15片 P20
3	深鉢形土器 大木系	A(30.5) B(23.5)	胴部は内彎し，口縁部は軽く外傾している。口縁部は無文で，胴部文様帯は４列の刺突文が施され，また，刺突文を有する渦巻文の小突起が３単位施されている。刺突文の下側は無節の縄文が斜位に施されている，更に，２～３本の沈線によって小突起下から渦巻文が描かれている。口縁部内・外面は横位のナデが施されている。	砂粒・石英・長石 にぶい橙色 普通	30% 17片 P21
4	深鉢形土器 加曽利ＥⅡ	B(23.5)	大形の胴部片で，胴部は下位から外傾気味に立ち上がり，上位で内彎している。文様は条線文が横位や斜位に雑に施されている。	砂粒・長石 橙色 普通	40% 28片 二次焼成 P４
5	深鉢形土器 加曽利Ｅ	B(10.5) C 10.8	底部は平底を呈し，胴部は底部から外傾しながら立ち上がっている。胴部は沈線が斜位に施されている。底部直上は横位のナデが施されている。	砂粒・石英 橙色 普通	20% 24片 P234
6	深鉢形土器 加曽利Ｅ	B (6.1) C 9.4	底部は平底を呈し，胴部は底部からやや外傾しながら立ち上がっている。胴部には単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。底部直上は横位のナデが施されている。	砂粒・雲母・石英 橙色 普通	10% ２片 P231
7	深鉢形土器 加曽利Ｅ	B (4.4) C 10.4	底部は平底を呈し，胴部は底部から外傾しながら立ち上がっている。胴部には単節ＬＲの斜位の縄文がわずかに窺える。	砂粒・石英 明赤褐色 普通	10% １片 P233
8	深鉢形土器 加曽利Ｅ	B (6.4) C (7.6)	底部は平底を呈し，胴部は外傾しながら立ち上がっている。胴部には太い沈線が施されている。底部直上は横位のナデが施されている。	砂粒・長石 暗褐色 普通	10% １片 P238
9	浅鉢形土器 加曽利Ｅ	B (3.0) C(12.0)	底部は平底を呈し，胴部は強く外傾している。無文の土器で，底部直上は横位のナデが施されている。	砂粒・長石 暗褐色 普通	10% １片 P239
10	深鉢形土器 加曽利Ｅ	B (6.2) C(11.4)	胴部は外傾しながら立ち上がっている。胴部は単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。	砂粒・石英・長石・雲母 橙色 普通	10% １片 P241

第104図11～32は，第68号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。11～19は口縁部片である。11は隆帯の両側に沈線が横位に巡り，その下側に単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。12は口唇部直下に３本の沈線が横位に施されている。13は口唇部直下の２本の沈線と口縁部下位の１本の沈線によって楕円状の区画が施され，区画内に無節Ｌの撚糸文が斜位に施されている。14は口唇部直下に刺突文が２列横位に施されている。15は口唇部直下から単節ＲＬの縄文が斜位に全面施されている。16は口唇部直下から複節ＲＬＲの縄文が斜位に全面に施されている。17は中央に沈線を有する隆帯を口縁部下位に施し，更に，小突起へと続いている。胴部は無文である。



第103図　第68号住居跡出土土器実測図(1)



第104図　第68号住居跡出土土器拓影図(2)

18は口唇部直下から細い沈線が斜位に施されている。19は大木系で，口唇部直下に棒状工具による押圧を施し，その下側に２本の沈線が横位に施している。沈線間には山形沈線文が施されている。沈線文の下側に無節Ｌの縄文が斜位に施されている。

20～32は胴部片である。20～24は磨消帯が垂下し，磨消帯と磨消帯の間に，20～23は単節ＲＬの縄文，24は複節ＲＬＲの縄文がそれぞれ斜位に施されている。25～27は沈線が施され，25は無節Ｌの縄文が全面に施されている。更に，縄文地文の上に３本の沈線が垂下し，２本の沈線によって曲線文が描かれている。26は無節Ｒの縄文地文に，２本の沈線によって渦巻文が施されている。27は単節ＲＬの縄文が施され，沈線と蛇行沈線が垂下している。28はＬＲ，29はＲＬの単節

の縄文，30は無節Rの縄文がそれぞれに施されている。31は磨消帯が窺え，条線文が縦位に施されている。32は条線文が斜位に施されている。

第69号住居跡（第105図）

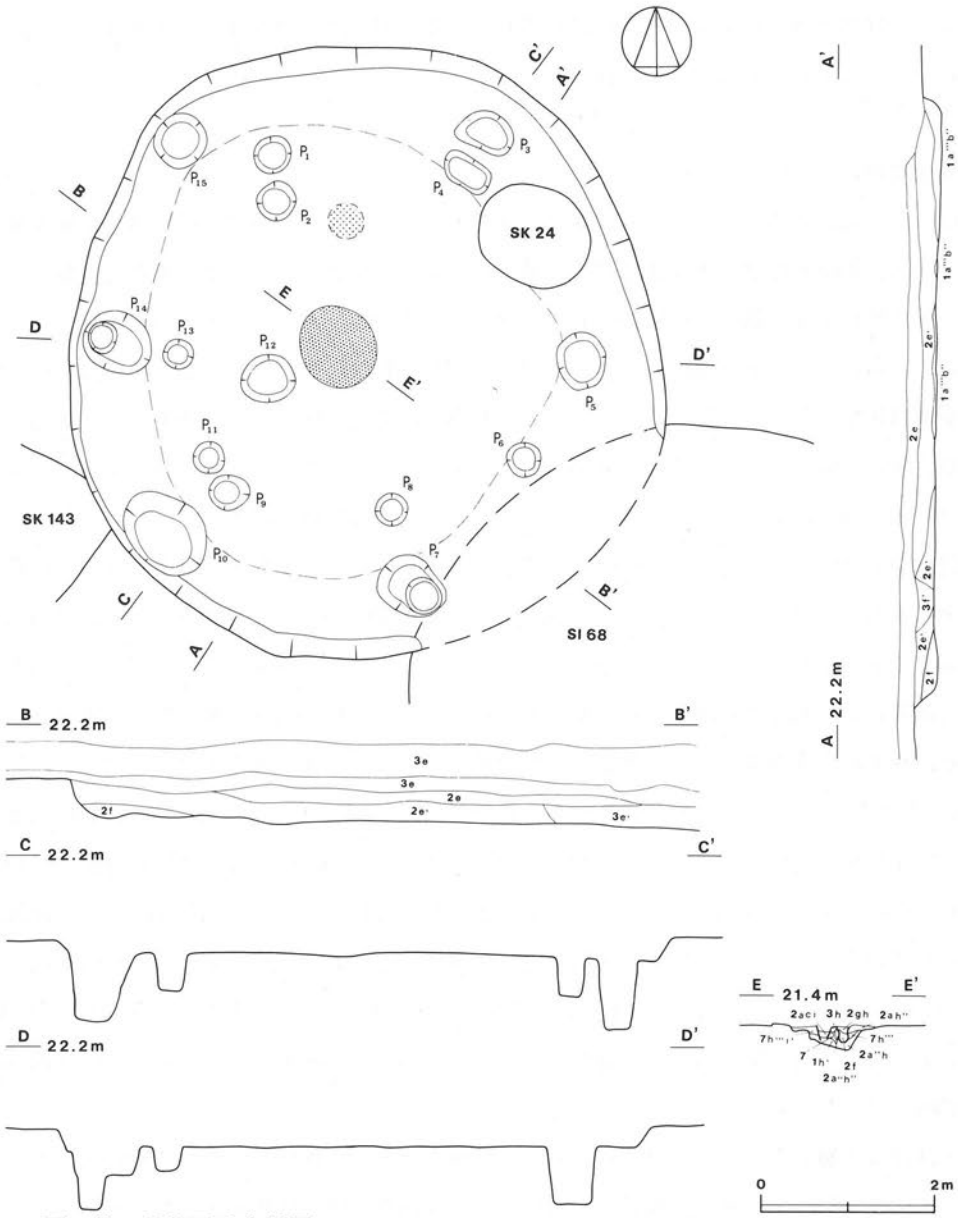
本跡は，当遺跡の中央からやや南西側の$D3d_2$を中心に確認され，第43号住居跡の16m南側に存在している。第68号住居跡と同様に農道が横切っており，同じような方法で調査を実施した。南東側で縄文時代中期の第68号住居跡と若干重複しているが，セクションからみて本跡が掘り込まれている。更に，北東側と南西側は第24・143号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

平面形は円形を呈し，長径方向はN－21°－Eを指し，規模は長径7.2m・短径7mである。壁は南東壁を除いて硬いロームであり，外傾しながら立ち上がり，壁高は20～30cmである。床面は平坦でロームで硬く，主柱穴を結ぶ内側は踏み固められて非常に硬く締まっている。

炉跡は中央に位置し，長径100cm・短径85cmの楕円形を呈し，床面を25cm掘り込み，炉跡のほぼ中央に底部を欠損した加曽利E式の2個の土器（第106図6・7）を埋め込み，土器埋設炉としている。2個の土器内には，ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子・焼土小ブロック・ローム中ブロックを微量含む暗褐色土が堆積し，土器の外側には，ローム粒子微量・焼土粒子を中量含む暗褐色土と，焼土粒子を多量含む暗赤褐色土等が堆積している。炉床は硬く焼けて，ゴツゴツしている。ピットは15か所検出され，配列や規模からP_3・P_5・P_7・P_{10}・P_{12}・P_{14}・P_{15}が主柱穴と考えられる。主柱穴は，炉跡近くのP_{12}を除き，いずれも壁ぎわに配列され，規模は長径65～110cm・短径45～85cm・深さ80cm内外である。P_7とP_{14}は床面から40cmの地点から段状になり，底面は狭く掘られている。P_{10}は，長径110cm・短径85cm・深さ85cmで最大規模である。P_1・P_2・P_4・P_6・P_8・P_9・P_{11}・P_{13}は，P_6を除いて主柱穴の内側に配列され，P_1・P_2はP_{15}の，P_4はP_3の，P_8はP_7の，P_9・P_{11}はP_{10}の，P_{13}はP_{14}の支柱穴と考えられる。P_6も同様である。支柱穴の規模は直径35～45cm・深さ40～45cmである。

覆土はほぼ3層から成り，上層はローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む暗褐色土，下層はローム粒子少量，焼土粒子を微量含む暗褐色土等が自然堆積の様相を呈している。

遺物は，炉跡から埋設土器として使用されたほぼ完形の小形深鉢形土器（第106図6・7）が2個並立して出土し，また，炉跡の南西側の床面から深鉢形土器（第108図16）が逆位につぶれた状態で，南側のP_8付近の覆土中・下層から半完形の深鉢形土器（第106図2）が破片の状態で出土している。更に，炉跡の北側の床面と西壁ぎわの覆土下層から深鉢形土器の大形の口縁部（第108図15）が出土している。そのほか覆土中・下層から加曽利E式土器片1,661片，曽利式土器片8片，土器片錘（第181図111～114）4点，石器（第186図20他）8点，及びチャート剥片2点が出土している。そのほか，少量の阿玉台式と茅山式と黒浜式の土器片が出土している。



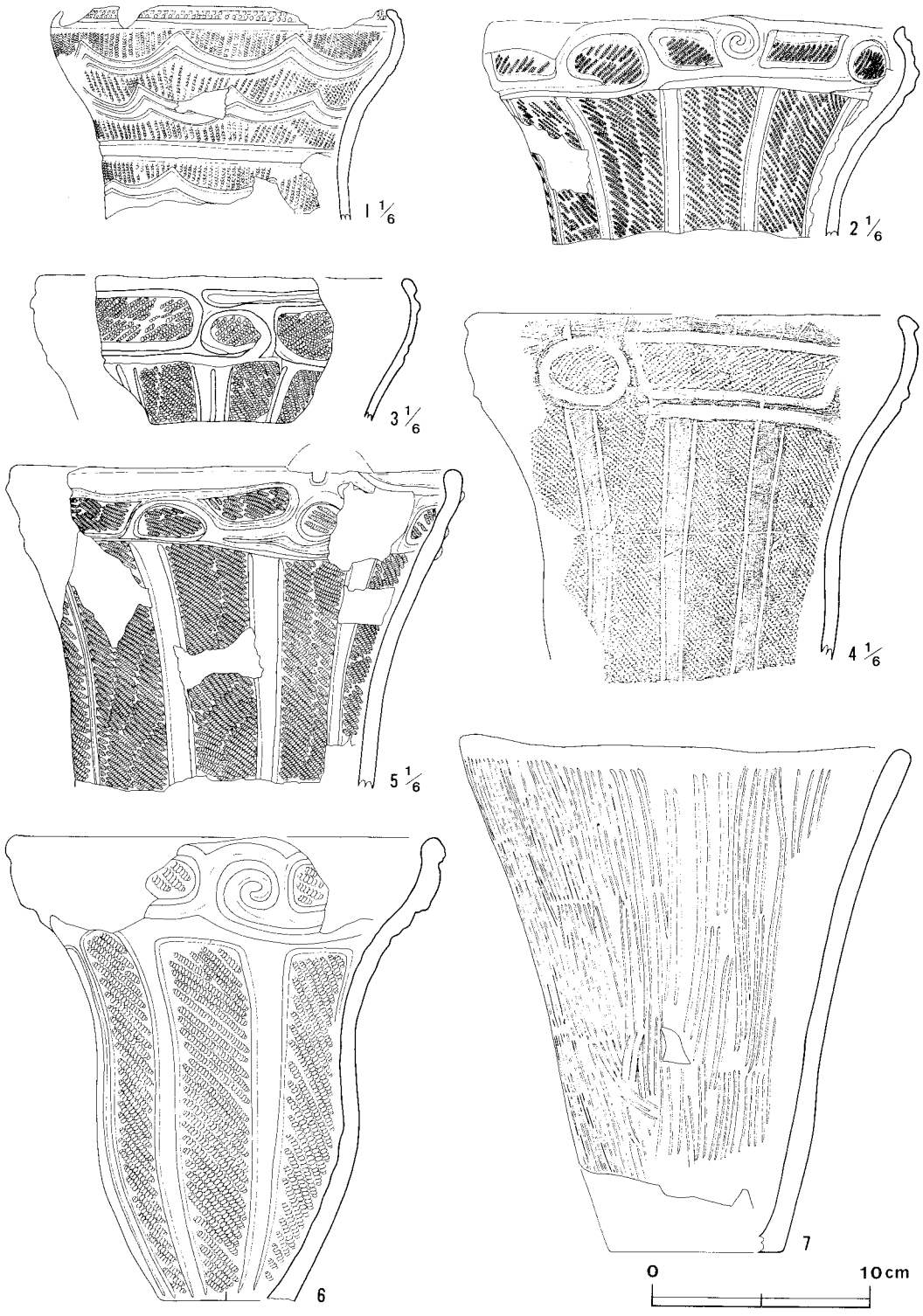
第105図　第69号住居跡実測図

出土土器

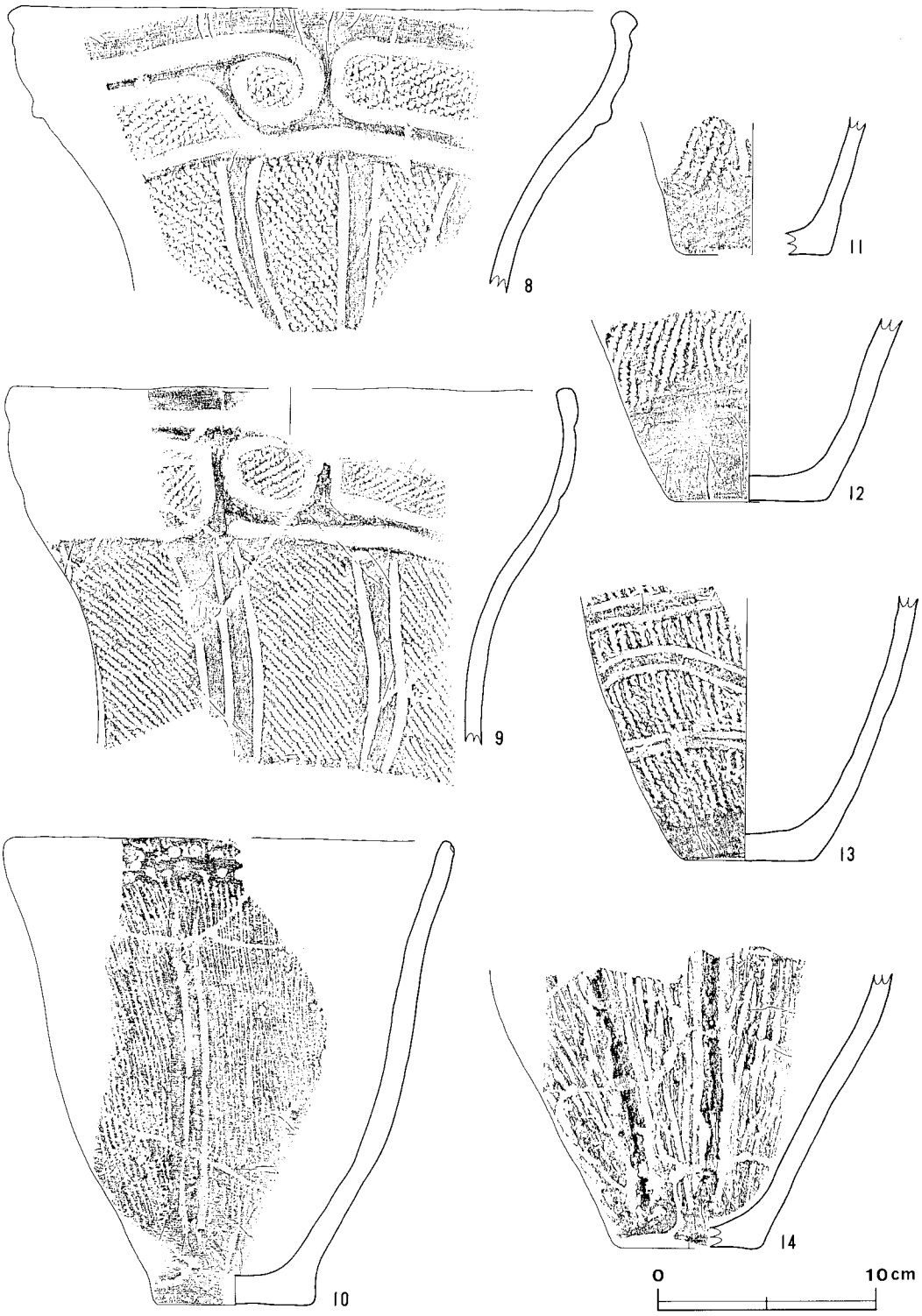
第69号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備　考
第106図 1	深鉢形土器 加曽利ＥⅡ	A 30.7 B(19.5)	キャリパー形を呈する土器で，胴部中位以下は欠損している。口縁部文様帯は２列の列点と２本の沈線が施されている。胴部文様帯は口縁直下から３本の沈線による連弧文が２段施され，更に幅の狭い磨消帯が横位に周回し，その下側に更に３本の沈線による連弧文が施されている。器面内部は摩耗している。	砂粒・長石 にぶい赤褐色 普通	40%　23片 P22

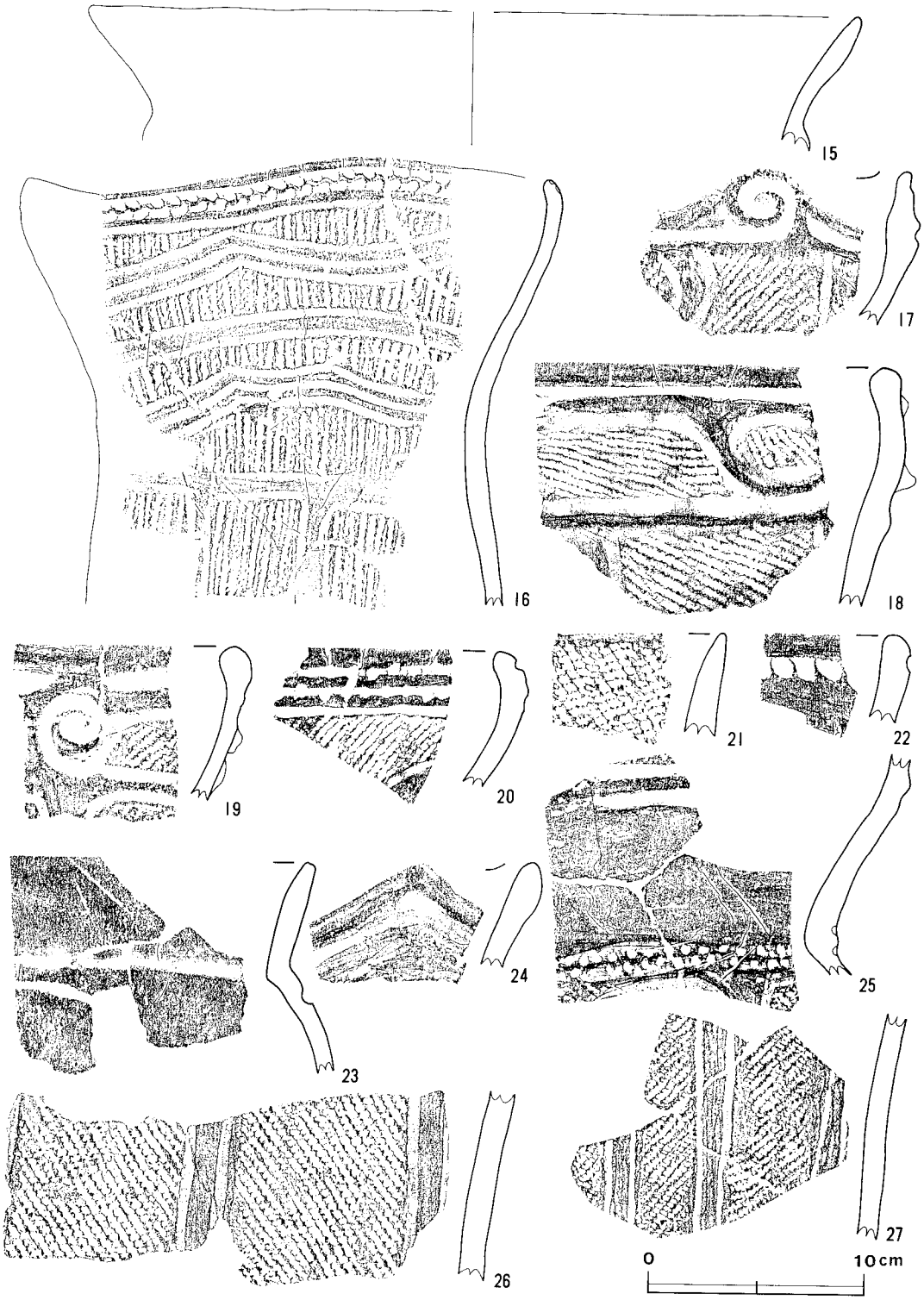
図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備　考
第106図 2	深鉢形土器 加曽利ＥⅡ	A 38.5 B(20.0)	キャリパー形を呈する土器で，胴部中位以下は欠損している。口唇部に凹線が施され，渦巻文に続いている。口縁部文様帯は隆帯と沈線によって渦巻文が3単位施され，渦巻文の間には隆帯と沈線によって楕円形や長方形状に区画されている。区画内には複節LRLの縄文が斜位に施されている。胴部文様帯は幅の狭い3本の磨消帯によって3単位に区画され，区画内には複節RLRの縄文が斜位に施されている。内面は横位のナデが施されている。	砂粒 灰白色 普通	40%　43片 P24
3	深鉢形土器 加曽利ＥⅡ	A(33.8) B(13.3)	胴部中位から口縁部にかけての土器片である。口縁部文様帯は隆帯と沈線による渦巻文や長楕円文で区画され，区画内に単節ＬＲの縄文が施されている。胴部文様帯は口縁直下から幅の広い磨消帯と，幅の狭い磨消帯が垂下し，磨消帯との間には単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。内面は横位のナデが施されている。	砂粒・石英 にぶい橙色 良好	10%　2片 P98
4	深鉢形土器 加曽利ＥⅡ	A(39.6) B(32.1)	胴部は外反し，口縁部は内彎している。口縁部文様帯は隆帯と沈線による楕円形や長方形で区画され，区画内に単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。胴部文様帯は幅の狭い磨消帯が垂下し，その間には単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。内面は横位のナデ，下位に縦位のナデが施されている。	砂粒・長石 浅黄褐色 良好	35%　7片 P97
5	深鉢形土器 加曽利ＥⅡ	A(35.7) B(29.7)	胴部中位から口縁部にかけての大形土器片である。口縁部文様帯は隆帯と沈線による楕円文で区画され，区画内には単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。口縁部の一部に孔が認められ，把手を有していたものと考えられる。胴部は幅広の磨消帯が5本施され，また，単節ＲＬの縄文が同じく斜位に施されている。口縁部内面は横位のナデが施されている。	砂粒 にぶい橙色 普通	30%　26片 P26
6	小形深鉢形土器 加曽利ＥⅡ	B(21.4)	底部と口縁部の大部分を欠損した小形のキャリパー形土器である。口縁部文様帯は隆帯と沈線による渦巻文によって区画され，渦巻文と渦巻文の間には隆帯と沈線によって楕円文が施され，楕円文の中には単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。胴部文様帯は磨消帯によって逆「U」字文が8個構成され，区画内には単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。内面は摩滅している。	砂粒・長石 にぶい橙色 良好	90%　6片 埋設土器 P25
7	小形深鉢形土器 加曽利ＥⅡ	A 20.8 B(23.8)	胴部は底部からやや外反しながら立ち上がり，口縁部に至る。一部を除き，文様は条線文が縦位に施されている。	砂粒・長石 橙色　良好	90%　17片 埋設土器 P23
第107図 8	深鉢形土器 加曽利ＥⅡ	A(27.8) B(13.1)	胴部中位から口縁部にかけての土器片である。口縁部文様帯は隆帯と沈線による楕円文，渦巻文，及び長楕円文で区画され，区画内には単節ＬＲの縄文が施されている。胴部文様帯は幅の狭い磨消帯が垂下し，磨消帯の間には単節ＲＬの縄文が施されている。内面は横位のナデが施されている。	砂粒 にぶい橙色 普通	20%　4片 P105
9	深鉢形土器 加曽利ＥⅢ	A(26.0) B(16.5)	胴部は中位からやや外反し，口縁部は内彎しながら立ち上がっている。口縁部文様帯は隆帯と沈線による渦巻文と楕円文で区画され，区画内には撚りの細い単節ＬＲの縄文が施されている。胴部文様帯は口縁直下から幅の狭い磨消帯が垂下し，その間にやはり撚りの細かい単節ＲＬの縄文が施されている。内面はやや摩滅している。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	20%　15片 P143
10	深鉢形土器 加曽利ＥⅡ	A(20.4) B 21.3 C (7.5)	胴部は底部から内彎しながら軽く開き，口縁部は外反気味に立ち上がる。文様は胴部下位を除いて条線文が器面に縦位に施されている。口縁部は2列の刺突文が施され，胴部には細い2本の沈線が垂下している。内面は剝離している。	砂粒・長石 明褐色 普通	20%　12片 P96
11	深鉢形土器 加曽利Ｅ	B (6.0) C (7.2)	底部は平底を呈し，胴部は外傾しながら立ち上がっている。胴部には単節ＬＲの縄文が斜位に施され，2本の沈線が垂下している。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	10%　1片 P245
12	深鉢形土器 加曽利Ｅ	B (8.4) C 6.9	底部は平底を呈し，胴部は外傾しながら立ち上がっている。胴部文様帯は単節ＬＲの縄文がほぼ縦位に施されている。底部と底部直上にていねいな横位のナデが施されている。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	30%　3片 P101



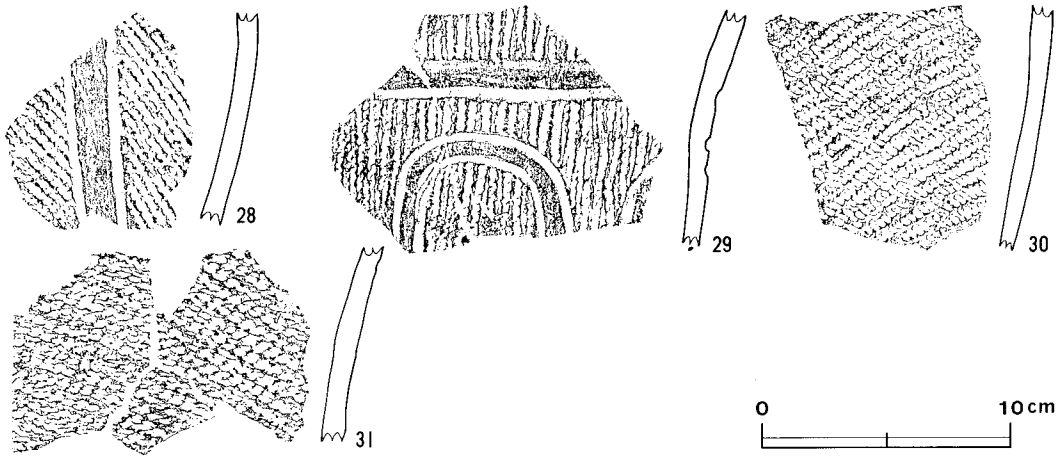
第106図　第69号住居跡出土土器実測図(1)



第107図　第69号住居跡出土土器実測図(2)



第108図　第69号住居跡出土土器実測図・拓影図(3)



第109図　第69号住居跡出土土器拓影図(4)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第107図 13	深鉢形土器 加曽利ＥⅡ	B(12.1) C 6.1	底部は平底を呈し，胴部下位は底部からやや内彎気味に開きながら立ち上がっている。胴部下位は無節Ｒの撚糸文が縦位に施されている。更に２本の沈線が３段巡り，沈線間は磨消されている。底部と底部直上はていねいな横位のナデが加えられている。	砂粒 にぶい橙色 普通	30% 7片 P103
14	深鉢形土器 曽利系	B(12.8) C (6.5)	底部は平底を呈し，胴部は底部から外傾しながら立ち上がっている。胴部文様帯は雑な条線文が縦位に施され，隆帯が10本垂下している。底部及び底部直上は横位のナデが施されている。内面は縦位のナデが施されている。	砂粒 灰白色 普通	30% 14片 P106
第108図 15	深鉢形土器 曽利系	A 35.5 B (6.2)	口縁部は胴部から外傾しながら立ち上がっている。文様は無文で，内・外面はていねいな横位のナデが施されている。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	10% 17片 P95
16	深鉢形土器 加曽利ＥⅡ	A(24.0) B 21.0	胴部は外反し，口縁部は内彎気味で緩い波状を呈している。口縁部を除き，無節Ｌの撚糸文を縦位に施し，口縁部文様帯は２列の列点と１本の沈線が施されている。胴部上位は２本の沈線を挟んで上下２段に３本の連弧文を施している。胴部中位は１本の沈線が施され，下段に逆「Ｕ」字文が窺える。	砂粒・長石 褐灰色 普通	70% 11片 P99

第108・109図17～31は，第69号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。17～25は口縁部及び胴部にかけての土器片である。17は波状を呈し，波頂下に隆線と沈線によって渦巻文が施され，口唇部直下から磨消帯が垂下している。磨消帯と磨消帯の間には単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。18は隆帯と沈線による楕円文と半楕円文で区画され，区画内に単節ＬＲの縄文が横位や斜位に施され，胴部には磨消帯がわずかに窺え，単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。19は隆帯と沈線による渦巻文と半楕円文で区画され，区画内に単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。20は２本の沈線上に竹管による明確な円形の刺突文と，その下に１本の沈線が施され，複節ＬＲＬの縄文が施されている。21は口唇部直下から複節ＲＬＲの縄文が斜位に施されている。22は口唇部直下に下側から刺突文が施され，23は無文で，口縁部は外傾している。24は浅鉢形土器片で，波状口縁を呈し，口唇部直下に隆帯が施されている。25は沈線で区画し，区画内にわず

かに縄文が認められる。沈線の下側は無文で，頸部に２列の刺突文が横位に施され，胴部は沈線によって楕円文と逆「Ｕ」字文に区画し，区画内に複節ＬＲＬの縄文が斜位に施されている。

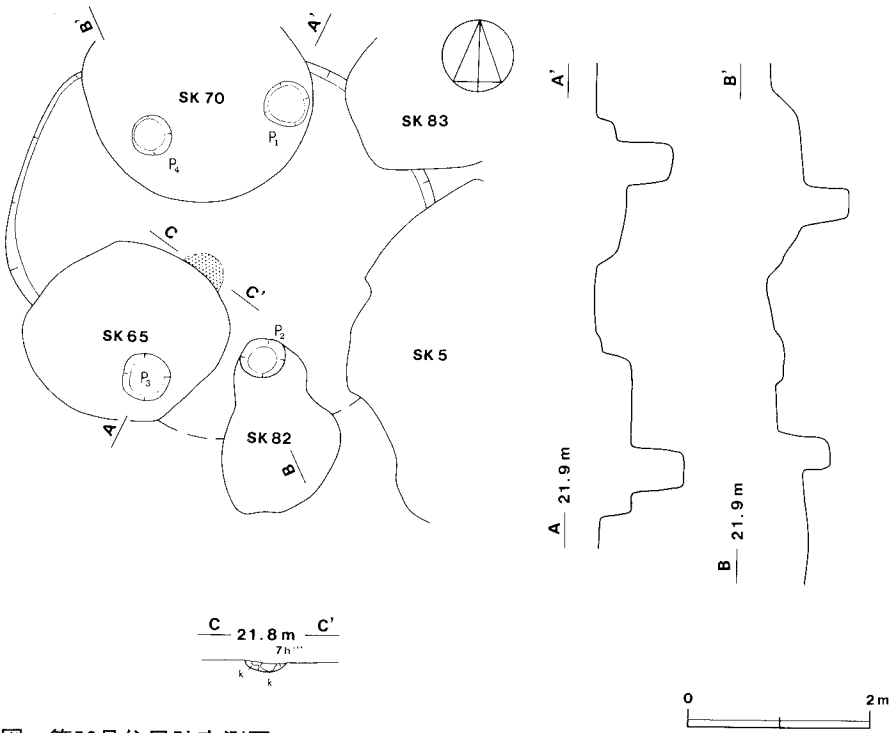
26～31は胴部片である。26～28は磨消帯が垂下し，区画間に，26は単節ＬＲの縄文が，27は単節ＲＬの縄文が，28は複節ＲＬＲが，それぞれ斜位に施されている。29は無節Ｌの撚糸文が縦位に，２本の沈線が横位に施され，沈線の下側に２本の沈線によって逆「Ｕ」字文が垂下している。30は単節ＲＬの縄文が，31は複節ＲＬＲの縄文がそれぞれ斜位に施されている。

第70号住居跡（第110図）

本跡は，当遺跡の南西側Ｅ1a$_0$区を中心に確認され，第57号住居跡の１ｍ東側に存在している。本跡は第65・70・82・83号土坑に南西壁・北壁・南壁・北東壁を掘り込まれ，更に，近世の第５号土坑（墓壙）に東壁を掘り込まれている。

平面形は円形を呈するものと考えられ，長径方向は不明で，規模は最大径4.8ｍである。壁は硬いロームで，北壁の一部はゆるやかに立ち上がり，南壁は検出できなかった。確認された壁高は５～10cmである。床面の約３分の１は各土坑に掘り込まれ，残った床面はほぼ平坦で，硬いロームである。

炉跡はやや南側に位置し，南西側は第65号土坑に掘り込まれて破壊され，残存部は半月状を呈

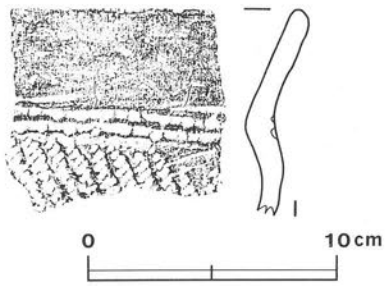


第110図　第70号住居跡実測図

し，最大径は50cmであるが，本来は円形を呈していたものと考えられる。床面を10cmほど皿状に掘り込んでいる地床炉である。炉覆土は攪乱を受けているものの，炉内には焼土粒子を多量含む暗赤褐色土が堆積し，炉床はレンガ状に硬く焼けている。ピットは4か所検出され，配列や規模からP_1～P_4が主柱穴と考えられる。P_1とP_3は壁ぎわに，P_2とP_4はやや内側に配置され，規模は長径40～60cm・短径35～55cm・深さ約60～75cmである。

覆土は，ローム粒子・焼土粒子を微量含む暗褐色土がわずかに堆積している。

本跡は，ごく少量の加曽利E式の土器片が覆土中から出土したにすぎない。



第111図　第70号住居跡出土土器拓影図

出土土器

第111図1は，第70号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部が無文で，口縁部下に浅い2本の沈線が横位に施され，沈線上に刺突文が施されている。胴部は単節RLの縄文が斜位に施されている。

第71号住居跡（第112図）

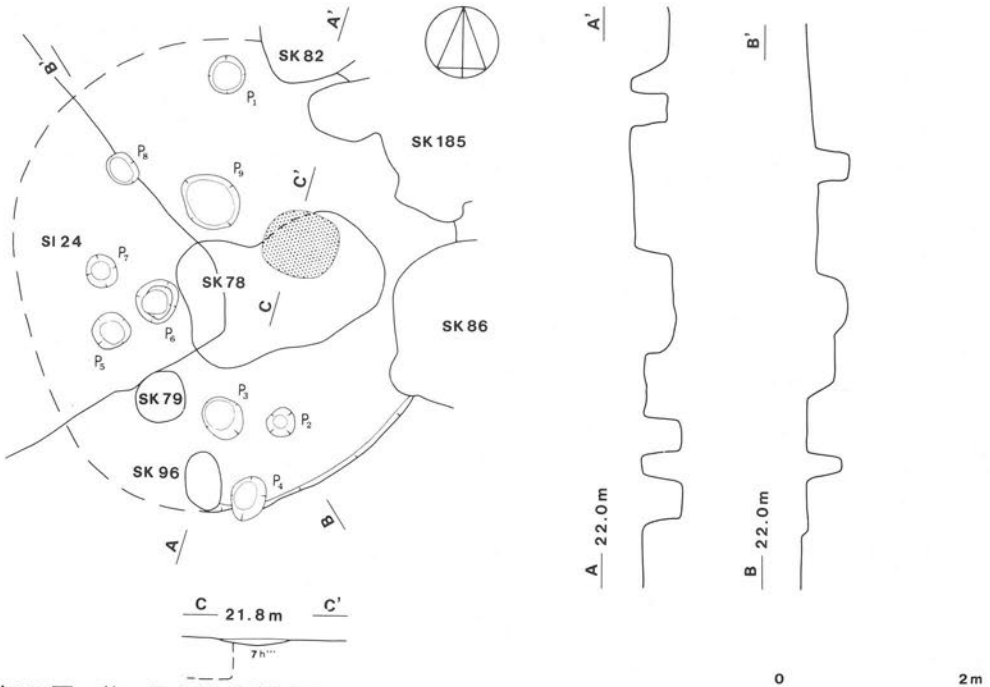
本跡は，調査エリヤの南西端のE1b_0区を中心に確認され，第57号住居跡の3m南東側に存在している。第78号土坑と重複しているが，土坑が埋没した後本跡が構築されている。古墳時代前期の第24号住居跡に西側が，また，第79・82・86・96・186号の各土坑に南側・北壁・東壁・南壁・北東壁をそれぞれ掘り込まれている。

平面形は残存壁から推定して，円形を呈するものと考えられる。長径方向は不明だが，規模は推定で直径5m前後と思われる。壁は東側の第86号土坑と南側の第96号土坑の間がわずかに残り，その他の壁は，削平されて存在しない。壁はロームで硬く，垂直気味に立ち上がっている。床面は西側の住居跡に掘り込まれている部分や，各土坑と重複している部分を除いて，ほぼ平坦で硬いロームである。

炉跡はやや東側に位置し，長径80cm・短径75cmの円形を呈し，第78号土坑の埋没した後構築され，床面を10cmほど掘り込んだ地床炉である。炉内には焼土粒子を多量含む暗赤褐色土が堆積し，炉床は硬く焼けている。ピットは9か所検出され，位置や規模からP_1～P_3・P_7～P_9が主柱穴と考えられる。主柱穴はP_9を除いて壁ぎわに位置している。主柱穴は長径30～50cm・短径30～40cm・深さ40～50cmである。P_5・P_6は第24号住居跡に伴うピットであり，P_4は不明である。

覆土は表土除去時に削平されて観察できなかった。

遺物は，炉跡の北側の床面から加曽利E式の大形の土器片がつぶれた状態で出土し，半完形に



第112図　第71号住居跡実測図

復元できた深鉢形土器（第113図１）と覆土中・下層から土器片167片が出土している。

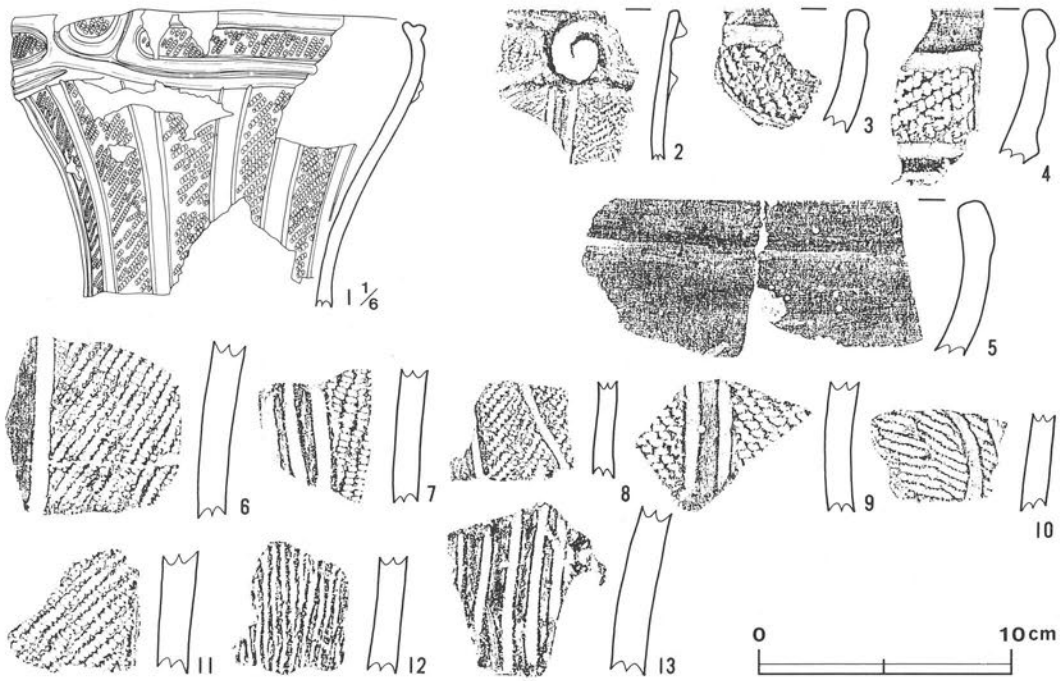
出土土器

第71号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・焼成・色調	備考
第113図 1	深鉢形土器 加曽利E	A(33.0) B(23.5)	胴部中位から口縁部にかけての土器である。口縁部文様帯は隆帯と沈線による楕円文や長楕円文で区画され，区画内には単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。胴部文様帯は幅の狭い磨消帯が８本認められる。その間には単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。口縁部内面は横位のナデが施されている。	砂粒・長石 橙色 普通	30%　18片 P27

第113図２～13は，第71号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。２～５は口縁部片である。２は薄手の土器で，隆帯と沈線による渦巻文と楕円文で区画され，区画内に細かい単節ＬＲの縄文が縦位に施されている。胴部は幅の狭い磨消帯が垂下し，細かい単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。３は沈線による楕円文で区画され，区画内に単節ＲＬの縄文を斜位に施している。４は隆帯と沈線によって長方形状に区画され，区画内に複節LRLの縄文が斜位に施されている。５は無文である。

６～13は胴部片である。６～10は磨消帯が垂下し，その間に，６～８は単節ＲＬの縄文が斜位に，８はさらに沈線が斜位に施されている。９は複節RLRの縄文が斜位に施されている。10は沈線が曲線的に施され，無節Ｒの縄文が斜位に施されている。11は単節ＲＬの縄文が斜位に，12は無節Ｌの撚糸文が縦位に施されている。13は太い沈線が縦位に施されている。



第113図　第71号住居跡出土土器実測図・拓影図

第72号住居跡（第114図）

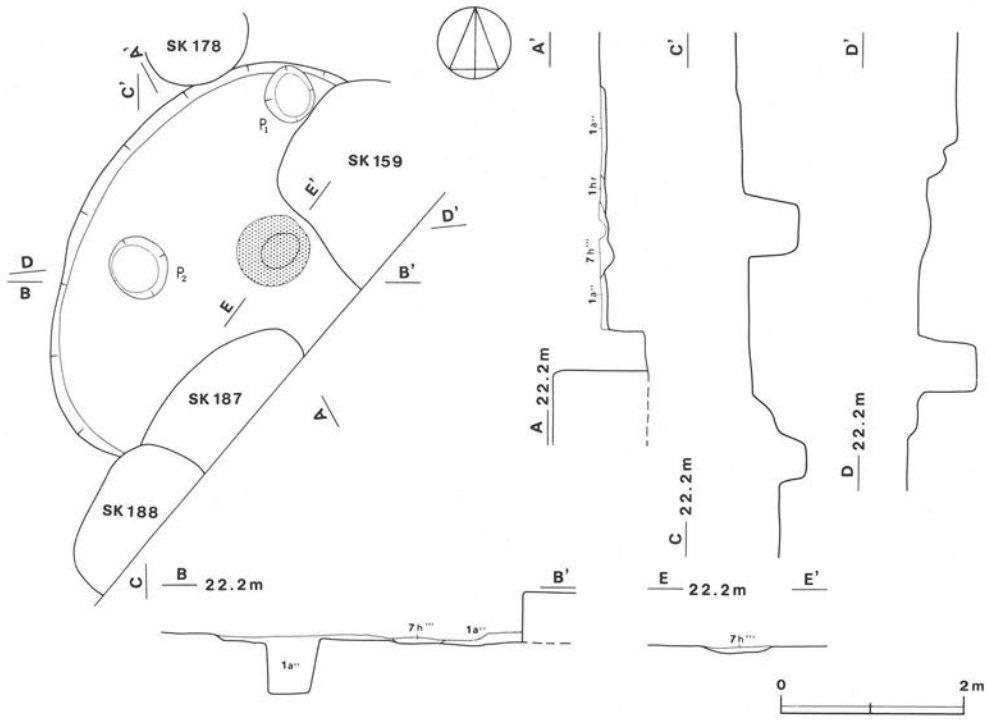
本跡は，当遺跡の南西側E2b$_6$区を中心に確認され，南東側約半分は調査エリヤ外のため調査ができなかった。第65号住居跡の２ｍ北東側に存在している。第159・187・188号土坑に北東壁・南西壁付近と南西壁を掘り込まれている。また，第178号土坑にも北壁を若干掘り込まれている。

平面形は残存部から推定して円形を呈し，長径方向は不明で，規模は最大径５ｍと考えられる。壁はロームで硬く，ごくゆるやかに立ち上がり，壁高は５～10cmである。残存床面はほぼ平坦で硬いロームである。

炉跡は残存する壁等から，ごくわずか北側に位置しているものと思われ，直径80cmの円形を呈し，床面を10cmほど掘り込んでいる地床炉である。炉内は焼土粒子を多量含む暗赤褐色土が充満し，炉床は赤く硬く焼けていて，多少ゴツゴツしている。ピットは２か所検出され，位置や規模からP_1・P_2とも主柱穴と考えられる。P_1は北壁をごくわずか掘り込み，P_2は西壁ぎわに位置し，規模は長径65～75cm・短径58～60cm・深さ60cm内外である。

覆土はローム粒子を中量含む褐色土と，焼土粒子・炭化粒子を微量含む褐色土が堆積している。

遺物は少量で，北壁ぎわの覆土中層を中心に加層利Ｅ式の土器片31片，磨石１点，黒浜式の土器片４片，阿玉台式の土器片３片が出土している。

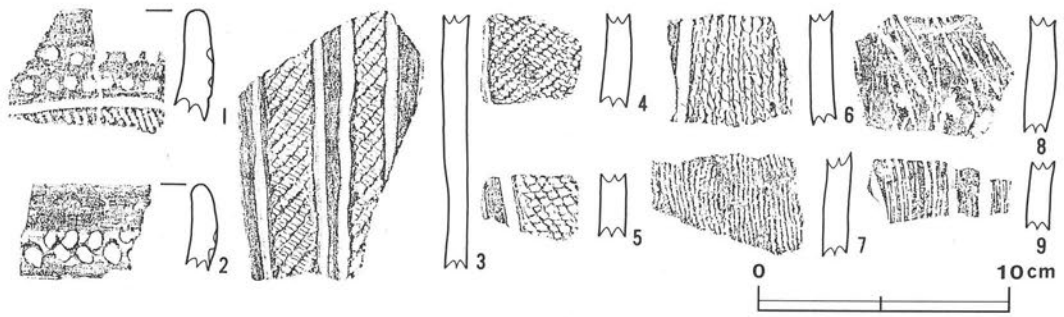


第114図　第72号住居跡実測図

出土土器

第115図１～９は，第72号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。１・２は口縁部片で，口縁部下に刺突文が２列横位に施されている。１は刺突文の下側に沈線を巡らし，更に，細い単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。

３～９は胴部片である。３～６は磨消帯が垂下し，磨消帯と磨消帯の間に，３・５は単節ＬＲの縄文が，４は単節ＲＬの縄文がそれぞれ斜位に施されている。６・７は撚糸文が縦位に施され，６の撚糸は粗いものである。８は雑な撚糸文が斜位に施され，２か所に刺突が窺える。９は幅の狭い磨消帯が垂下し，磨消帯の間には条線文が縦位に施されている。



第115図　第72号住居跡出土土器拓影図

第73号住居跡（第116図）

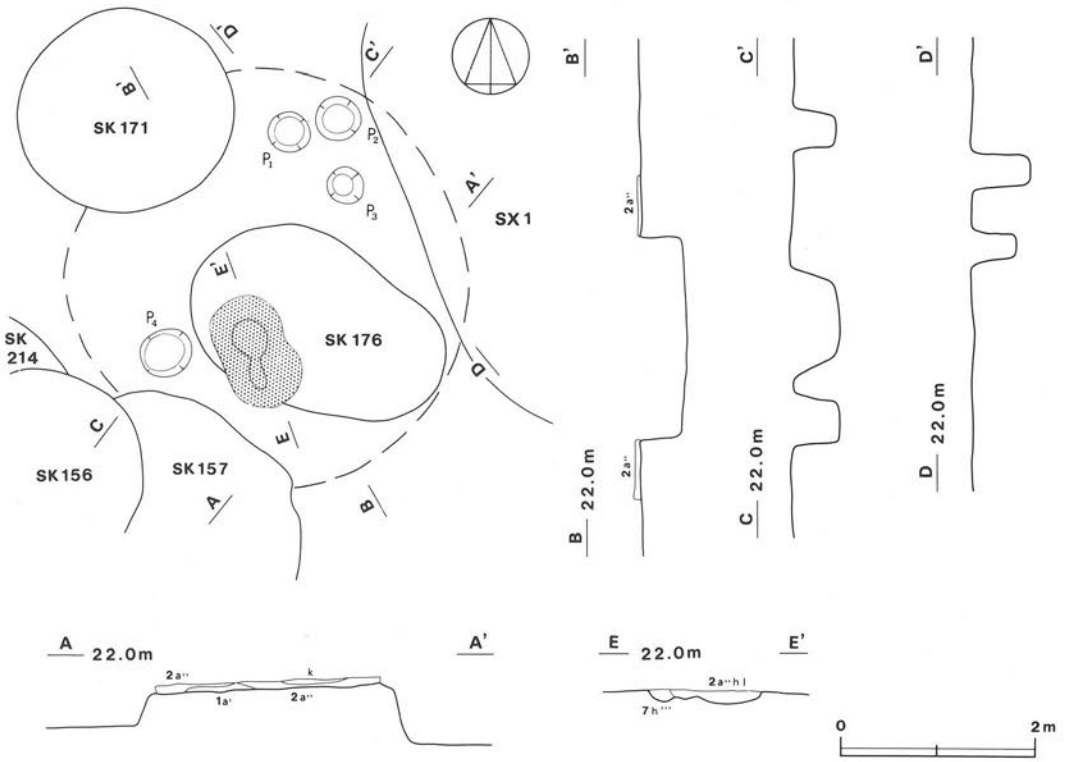
本跡は，当遺跡の南西側E2a$_6$区を中心に確認され，第65号住居跡の10m北東側に存在している。本跡は，南東側の第176号土坑が埋没した後に構築され，東側を方形周溝墓と思われる周溝に掘り込まれ，更に，第157・171号土坑に南側と北西側をそれぞれ掘り込まれている。

平面形は円形を呈するものと考えられ，長径方向は不明で，規模は推定であるが直径4.3m前後と思われる。残存する床面は平坦で，硬いロームである。

炉跡は南側に位置しているものと考えられ，長径120cm・短径70cmの楕円形を呈し，176号土坑の埋没した後構築された床面を15cmほど掘り込んだ地床炉である。炉内にはローム粒子中量・焼土粒子微量・炭化物を含む暗褐色土と，焼土粒子を多量含む暗赤褐色土が堆積し，炉床は硬く焼けている。ピットは4か所検出され，位置や規模からP$_1$～P$_4$とも主柱穴と考えられる。主柱穴は北壁ぎわに3か所と炉跡の西側に1か所存在し，規模は長径40～60cm・短径35～50cm・深さ40～60cmである。

覆土はローム粒子を中量含む暗褐色土と，ローム粒子を少量含む褐色土がわずかに堆積している。

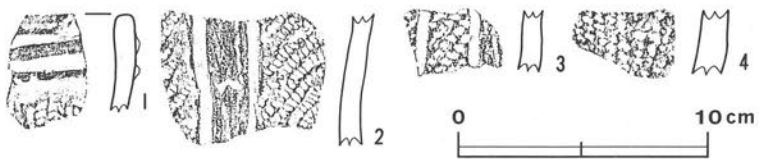
遺物は，P$_1$とP$_3$付近の覆土中から加曽利E式の土器片が少量出土したが，接合・復元できたものはない。



第116図　第73号住居跡実測図

出土土器

第117図１～４は，第73号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。１は口縁部片で，２本の隆帯が横位に巡り，その下に縄文が縦位に施されている。



第117図　第73号住居跡出土土器拓影図

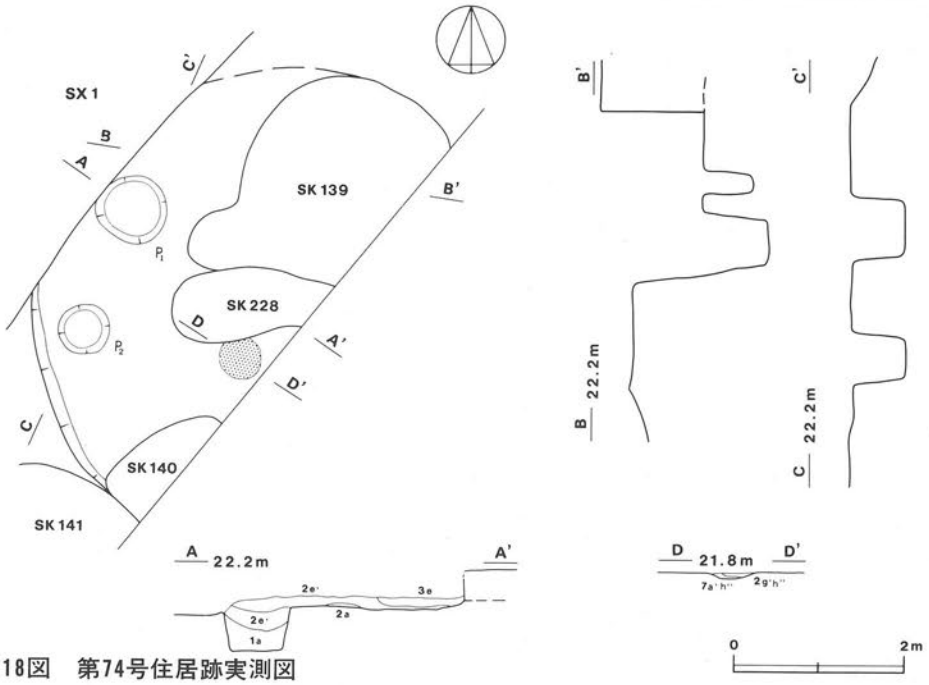
２～４は胴部片で，２・３は磨消帯が垂下し，磨消帯と磨消帯の間に，２は単節ＬＲ，３は複節ＬＲＬの縄文がそれぞれ斜位に施されている。４は単節ＬＲの縄文が縦位に施されている。

第74号住居跡（第118図）

本跡は，調査エリヤの南東側境界のD2i$_9$区を中心に確認され，方形周溝基と思われる周溝の内側に存在している。本跡の南東側は調査エリヤ外のため調査できなかった。本跡は方形周溝墓に北西側を，第139・140・228号土坑に北東側・南西側・炉跡の北側をそれぞれ切られている。

平面形は残存壁から推定して，円形になるものと考えられる。長径方向は不明で，規模は最大径約5.8ｍになるものと推定される。壁はロームで硬く，ごくゆるやかに立ち上がり，壁高は10cmと浅い。床面はほぼ平坦で硬いロームである。

炉跡は第228号土坑の南側に位置し，直径50cmの円形を呈し，床面を皿状に10cmほど掘り込んでいる地床炉である。炉内には焼土粒子を中量・ローム粒子少量・炭化粒子を微量含む暗褐色土と，



第118図　第74号住居跡実測図

ローム粒子少量・焼土粒子を中量含む暗赤褐色土が充満している。炉床は焼けて硬い。ピットは2か所検出され，位置や規模から主柱穴と考えられる。主柱穴は壁ぎわに位置し，直径60～80cm・深さ60cmである。

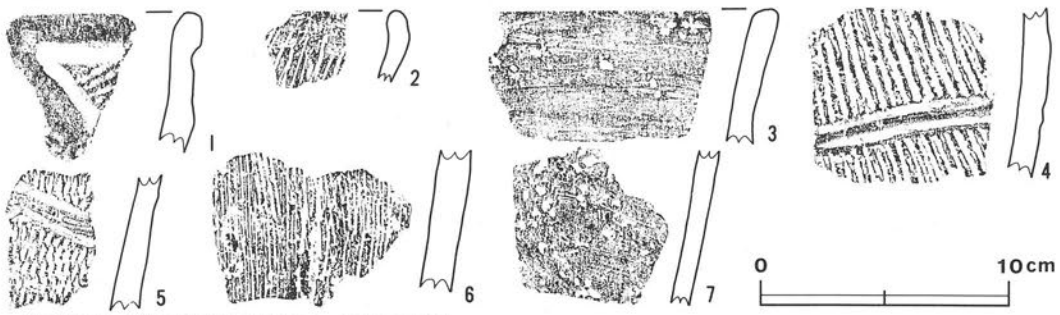
覆土はほぼ2層から成り，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む黒褐色土と，ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子を微量含む暗褐色土がほぼ自然堆積の様相を呈している。

遺物は，炉跡の周辺から加曽利E式の土器片43片が，覆土中から磨石1点と，茅山式，黒浜式，浮島式の土器片が数片出土している。

出土土器

第119図1～7は，第74号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1～3は口縁部片で，1は隆帯と沈線による半楕円文で区画され，区画内に無節Lの縄文が斜位に施されている。2は口唇部直下から沈線が斜位に施され，3は無文である。

4～7は胴部片で，4は2本の沈線が横位に巡り，撚糸文が縦位に施されている。5は連弧文が巡り，撚糸文が縦位に施されている。6は条線文が縦位に施され，7は無文である。



第119図　第74号住居跡出土土器拓影図

第75号住居跡（第120図）

本跡は，当遺跡の南西側D2h_0区を中心に確認され，方形周溝墓と思われる周溝の内側に存在している。調査エリヤ外のため，南東側は調査できなかった。本跡も第74号住居跡と同様，方形周溝墓と思われる周溝に北側から東側にかけて掘り込まれている。

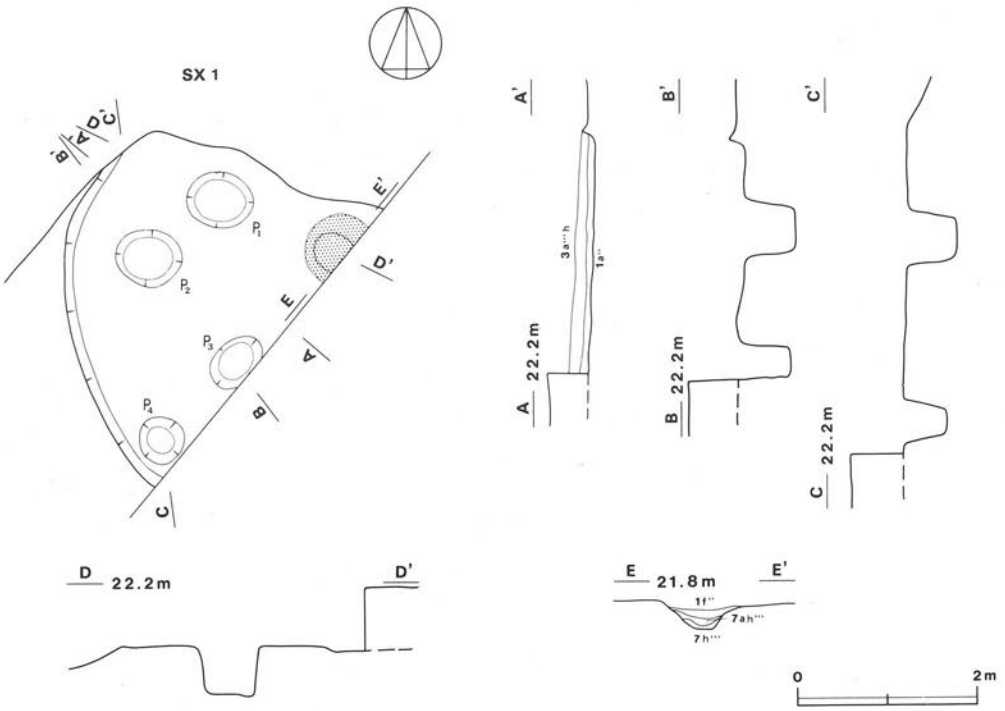
平面形は残存壁から推定して円形になるものと考えられる。長径方向や規模は不明である。残っている南西壁はロームで硬く，ほぼ垂直に立ち上がり，壁高は15cm内外である。現存する床面は約4分の1であると思われるが，ほぼ平坦で硬いロームである。

炉跡は調査エリヤ境界に位置しており，最大径80cmの円形を呈するものと考えられ，床面を25cmほど鉢状に掘り込んだ地床炉である。炉内には上層から下層にかけてローム粒子・焼土粒子を少量含む褐色土と，焼土粒子を多量・ローム粒子を微量含む暗赤褐色土が充満し，炉床は硬く焼けている。ピットは4か所検出され，配置と規模からP_1～P_4とも主柱穴と考えられる。主柱穴は

壁ぎわに配置されているP_4を除いて壁からやや内側に配置され，規模は長径50～70cm・短径40～60cm・深さ50～60cmである。

覆土は２層から成り，上層はローム粒子を多量・焼土粒子を微量含む黒褐色土，下層はローム粒子を中量含む褐色土が自然堆積の様相を呈している。

遺物は，西側のP_2付近の覆土下層から，加曽利Ｅ式の土器片94片，磨石（第189図107他）６点が出土している。

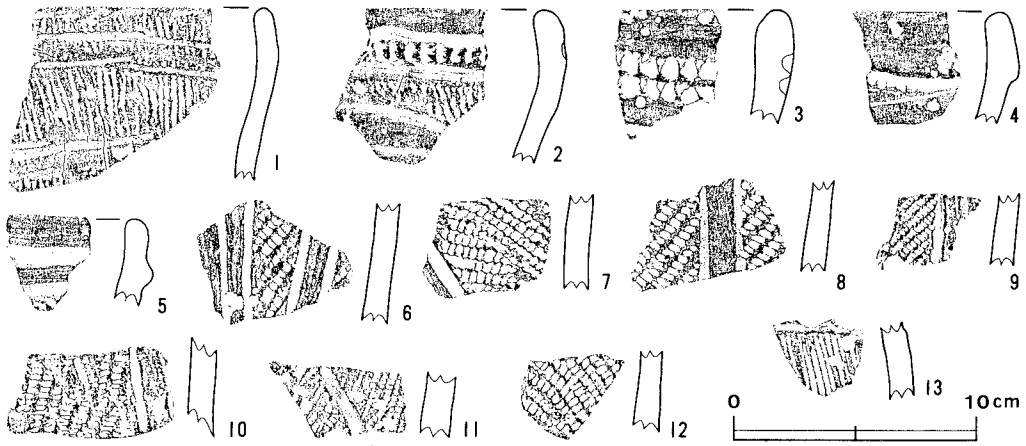


第120図　第75号住居跡実測図

出土土器

第121図１～13は，第75号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。１～５は口縁部片である。１は口唇部から撚糸文が縦位に施され，口唇部直下に２本の浅い沈線が横位に巡り，更に，その下側に２本の浅い沈線が横位に巡っている。２は口唇部直下に２本の沈線が横位に施され，その間に刺突文が１列施されている。沈線下には撚糸文を斜位に施し，さらに連弧文が認められる。３は口唇部直下に刺突文が２列横位に施されている。４は隆帯が施され，無文で，５は２本の沈線が横位に施されている。

６～13は胴部片である。６～10は磨消帯が垂下し，磨消帯の間に，６・７は単節ＬＲの縄文が，８～10は単節ＲＬの縄文がそれぞれ斜位に施されている。11は１本の沈線が斜位に施され，単節ＲＬの縄文が，12は単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。13は条線文が斜位に施されている。



第121図　第75号住居跡出土土器拓影図

第２表　住居跡一覧表

縄文時代前期（黒浜）

住居跡番号	位置	平面形状	規模（m） 長径×短径	規模（m） 壁高	長径方向	炉	柱穴	覆土	出土遺物	備考
第３号	A4g$_8$	（ほぼ円形）	（6.8×6）	0.3～0.5	N－33°－W	中央	8	N	深鉢形土器底部，黒浜101片，阿玉台43片，加曽利E144片，土師器６片，土製品２点，石器３点	第13号住居跡と重複している。
第７号	C4a$_1$	（隅丸長方形）	（６×５）	0.2～0.3	－	北側	6	N	深鉢形土器底部，黒浜230片	第８号住居跡と重複している。
第12号	A4f$_9$	（不整円形）	（5.2×4.5）	0.2～0.3	N－25°－W	中央	6	N	深鉢形土器，黒浜250片，石器２点，土製品１点	第16号住居跡と重複している。
第16号	A4f$_9$	（ほぼ円形）	（4.5×3.9）	0.3	N－36°－E	中央	5	N	黒浜87片，加曽利E10片，石器１点	第12号住居跡と重複している。
第41号	D3b$_2$	隅丸長方形	７×５	0.25	N－24°－W	北側	7	N	深鉢形土器，黒浜281片，阿玉台７片，加曽利E50片，土製品３点，石器２点	
第49号	D3a$_6$	円形	3.8×3.6	0.3	N－56°－W	－	4	N	黒浜39片，阿玉台９片，加曽利E48片，石器１点	
第54号	D2d$_0$	（楕円形）	（６×５）	0.2	N－33°－W	北側	－	NA	小形深鉢形土器，黒浜476片，浮島２片，阿玉台14片，加曽利E256片，石器２点	第53・55号住居跡と重複している。
第76号	D2a$_7$	不整円形	4.6×4.2	0.2～0.3	N－50°－W	北側	3	NA	深鉢形土器，黒浜151片，阿玉台３片，加曽利E113片，曽利１片，石器３点	

縄文時代中期（阿玉台）

住居跡番号	位置	平面形状	規模（m） 長径×短径	規模（m） 壁高	長径方向	炉	柱穴	覆土	出土遺物	備考
第26号	E2f$_4$	楕円形	3×2.5	0.44～0.5	N－42°－E	なし	2	N	阿玉台51片，黒浜10片，土製品１点，石器２点	第28号住居跡と重複している。
第44号	C3i$_9$	不整円形（ないし）楕円形	3.6	0.2	－	－	－	N	把手，阿玉台35片，加曽利E99片，土製品１点	
第50号	C3i$_6$	円形	3×2.8	0.3	N－27°－W	なし	1	NA	阿玉台34片，黒浜５片，加曽利E50片	第38号住居跡と重複している。
第51号	C3f$_3$	（不整）隅丸方形	（4.8×4.5）	0.35～0.45	N－26°－E	なし	4	N	深鉢形土器，阿玉台659片，加曽利E97片，茅山１片，黒浜71片，諸磯10片，土製品９点，石器２点	第29号住居跡と重複している。
第52号	C2g$_0$	隅丸長方形	4.6×3.7	0.4	N－15°－E	なし	5	N	深鉢形土器，阿玉台710片，黒浜57片，興津１片，浮島３片，加曽利E40片，土製品２点，石器５点	
第53号	D2a$_0$	隅丸長方形	4.9×4	0.3～0.4	N－90°－E	なし	4	N	深鉢形土器，阿玉台457片，黒浜58片，興津５片，浮島３片，加曽利E47片，土製品12点，石器５点	第53・54号住居跡と重複している。
第59号	C3c$_2$	（楕円形）	3	0.3	－	－	1	N	阿玉台９片，黒浜５片，加曽利E16片，石器１点	第29号住居跡と重複している。
第60号	C3i$_7$	（長楕円形）	（4×2.8）	0.15～0.20	N－37°－E	なし	－	N	深鉢形土器底部，阿玉台34片，加曽利E12片，土製品２点	第38号住居跡と重複している。
第61号	C2h$_8$	楕円形	2.8×2.4	0.1	N－33°－E	なし	3	N	阿玉台47片，土製品１点	
第63号	C3d$_5$	（円形）楕円形	3.4	0.15	－	－	1	－	阿玉台25片，黒浜２片，加曽利E５片，土製品１点	第31～33号住居跡と重複している。

第34号	C3i$_6$	(ほぼ円形)	3.2	0.2	—	—	1	N	阿玉台48片	第34号住居跡と重複している。
第66号	C2j$_7$	(楕円形)	(5.5×4.4)	0.15～0.45	N－40°－W	なし	6	N	深鉢形土器，阿玉台434片，黒浜21片，諸磯2片，浮島2片，加曽利E20片，土製品2点	第39号住居跡と重複している。

縄文時代中期（加曽利E）

住居跡番号	位置	平面形状	規模（m）		長径方向	炉	柱穴	覆土	出土遺物	備考
			長径×短径	壁高						
第1号	A5f$_1$	円形	7.2×6.5	0.3	N－38°－W	中央	7	N	深鉢形土器，加曽利E1643片，阿玉台269片，黒浜361片，土製品5点，石器7点	第2号住居跡と重複している。
第2号	A4f$_0$	(円形)	5.3	0.25～0.35	—	中央	3	N	加曽利E200片，阿玉台20片，黒浜77片，土製品2点，石器3点	第1・12・16号住居跡と重複している。
第13号	A4f$_0$	円形	5.2×4.7	0.20～0.25	N－86°－W	中央	5	—	深鉢形土器，加曽利E284片，阿玉台35片，黒浜68片，貝類（ヤマトシジミ），土製品2点，石器1点	第3号住居跡と重複している。
第14号	A5e$_1$	楕円形	5.6×4.8	—	N－10°－W	中央	7	A	加曽利E763片，阿玉台26片，黒浜17片，貝類（ヤマトシジミ），土製品2点，石器2点	
第15号	A5d$_2$	楕円形	5.5×4.8	0.25～0.30	N－34°－W	北側	3	N	加曽利E328片，阿玉台15片，黒浜4片，貝類（ヤマトシジミ），土製品1点，石器2点	
第28号	E2f$_4$	(円形)	(4.5)	—	—	西側	7	—	深鉢形土器，加曽利E162片，阿玉台5片，黒浜7片，弥生1片，土師27片，土製品1点，石器2点	第26号住居跡と重複している。
第30号	C4e$_2$	円形	4.9×4.6	0.10～0.20	N－37°－E	南西側	7	N	加曽利E11片，黒浜8片，石器1点	
第35号	D3c$_5$	(円形)	4.8	0.1～0.2	—	—	3	—	深鉢形土器，小形土器，加曽利E530片，阿玉台78片，黒浜24片，茅山8片，土製品5点，石器8点	第47・48号住居跡と重複している。
第38号	C3h$_8$	(円形)	(6.8×6.3)	—	—	中央	7	—	加曽利E481片，阿玉台83片，黒浜22片，土製品1点，石器1点	第50・60号住居跡と重複している。
第42号	D3a$_2$	円形	4.5×4.0	0.05～0.13	N－55°－E	中央	6	—	加曽利E44片，阿玉台2片，黒浜2片	
第43号	C3h$_4$	円形	7.7×7.0	0.10～0.17	N－30°－E	中央	7	—	加曽利E493片，阿玉台76片，黒浜25片，土製品5点，石器3点	
第45号	D3c$_4$	ほぼ円形	5.4×4.8	0.05～0.15	N－55°－E	中央	6	—	深鉢形土器，加曽利E495片，阿玉台30片，黒浜37片，貝類（ヤマトシジミ），土製品8点，石器5点	
第46号	C3i$_2$	円形	6.2×5.8	0.1～0.2	N－29°－W	南東側	9	N	加曽利E164片，阿玉台16片，黒浜7片，石器7点，土製品1点	
第47号	D3b$_6$	(楕円形)	5.8	—	—	—	2	—	加曽利E208片，阿玉台9片，黒浜8片，貝類（ヤマトシジミ），土製品7点，石器1点	第35号住居跡と重複している。
第48号	D3d$_5$	—	—	0.2	—	—	1	—	加曽利E25片，阿玉台9片，黒浜3片	第35号住居跡と重複している。
第55号	D2a$_0$	(楕円形)	6.4	0.05～0.10	N－66°－E	北東側	4	—	加曽利E151片，阿玉台15片，黒浜8片，貝類（ヤマトシジミ），石器2点	第53・54・62号住居跡と重複している。
第56号	E1a$_8$	(円形)	5.5	0.12～0.29	—	北東側	4	A	加曽利E264片，阿玉台3片，黒浜14片，須恵器1片，土製品5点	第57号住居跡と重複している。
第57号	E1a$_9$	円形	7.0×6.5	0.1	N－4°－E	西側	8	—	深鉢形土器，加曽利E370片，阿玉台2片，黒浜21片	第56号住居跡と重複している。
第58号	D1i$_8$	円形（ないし）楕円形	4.0	0.2～0.3	—	—	1	N	加曽利E7片	
第62号	C2j$_8$	(楕円形)	(5.4×4.5)	0.25～0.30	N－2°－W	中央	7	N	深鉢形土器，加曽利E262片，中峠6片，阿玉台39片，茅山1片，黒浜41片，諸磯3片，貝類（ヤマトシジミ），土製品4点，石器2点	第55号住居跡と重複している。
第65号	E2c$_5$	円形	3.8×3.6	0.1～0.2	N－2°－E	東側	2	N	加曽利E23片	
第67号	C3g$_6$	円形（ないし）楕円形	4.6	0.2	—	—	6	N	加曽利E19片，阿玉台6片，黒浜2片，石器2点	第37号住居跡と重複している。
第68号	D3e$_3$	(円形)	6.6	0.2～0.3	—	中央	7	N	深鉢形土器，加曽利E712片，阿玉台83片，黒浜15片，浮島4片，茅山3片，土製品11点，石器9点	第69号住居跡と重複している。
第69号	D3d$_2$	円形	7.2×7.0	0.2～0.3	N－21°－E	中央	7	N	深鉢形土器，加曽利E1661片，曽利8片，阿玉台7片，黒浜14片，茅山3片，土製品4点，石器10点	第68号住居跡と重複している。
第70号	E1a$_0$	(円形)	4.8	0.05～0.10	—	南側	4	—	加曽利E1片	
第71号	E1b$_0$	(円形)	—	—	—	東側	6	—	深鉢形土器，加曽利E167片	第24号住居跡と重複している。
第72号	E2b$_6$	(円形)	5.0	0.05～0.10	—	北側	2	—	加曽利E31片，阿玉台3片，黒浜4片，石器1点	
第73号	E2a$_6$	(円形)	4.3	—	—	南側	4	—	加曽利E7片	
第74号	D2i$_9$	(円形)	5.8	0.1	—	南側	2	N	加曽利E43片，茅山2片，黒浜22片，浮島3片，石器1点	
第75号	D2h$_0$	(円形)	—	0.15	—	—	4	N	加曽利E94片，石器6点	

2　土　　坑

当遺跡において検出された土坑は，302基である。これらの土坑の多くは，当遺跡の中央を東西方向に横切るように存在している町道の南西側のＣ２・Ｃ３・Ｄ２・Ｄ３・Ｅ１・Ｅ２区を中心に検出されている。土坑の平面形は，円形・楕円形・隅丸方形・不定形を呈するものが多く，断面形は円筒状・なべ状・フラスコ状・皿状と多種である。出土遺物は，縄文土器や土器片が殆どで，時期を決定し得る底面からの出土例もかなり見られる。ここでは断面形や出土遺物における特徴が顕著にみられる土坑について記述し，その他の土坑については一覧表にして掲載した。

第１号土坑（第141図）

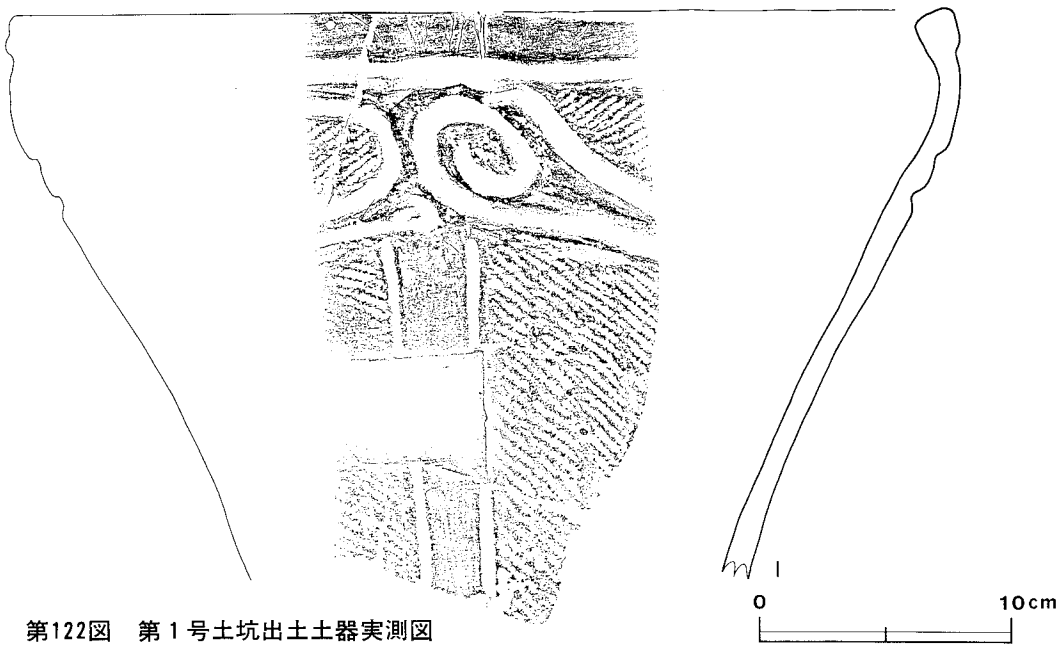
本跡は，A4i_0区に確認され，第13号住居跡の３ｍ南東側に位置している。

平面形は円形で，長径1.2m・短径１ｍ・深さ0.4ｍの規模である。断面形はなべ状を呈し，南壁は外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが，北側は15cmほど掘りくぼめられている。

覆土はほぼ２層から成り，上層はローム粒子・焼土粒子を微量含む暗褐色土，下層はローム粒子を微量含む褐色土が自然堆積の様相を呈している。

第１号土坑出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴　及　び　文　様	胎土・色調・焼成	備　考
第122図 1	深鉢形土器 加曽利Ｅ	A(38.0) B(23.0)	胴部は外傾しながら立ち上がり，口縁部は内湾している。口縁部は，隆帯と沈線によって渦巻文と楕円文，及び長楕円文が施され，区画内には単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。胴部は幅の広い磨消帯が施され，磨消帯と磨消帯の間には単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。器内面は横位のナデが施されている。	砂粒・長石 にぶい赤褐色 普通	20%　11片 Ｐ148



第122図　第１号土坑出土土器実測図

遺物は，中央の底面や覆土下層から縄文時代中期の加曽利Ｅ式の土器片13片等が出土している。

第11号土坑（第142図）

本跡は，当遺跡の中央部C3h$_7$に確認され，縄文時代中期の阿玉台期の第60号住居跡と同中期の加曽利Ｅ期の第38号住居跡を掘り込んでいる。

平面形は円形を呈し，直径2.6ｍ・深さ1.1ｍで，断面形は円筒状を呈している。壁は硬く垂直に立ち上がり，底面は平坦で硬いロームである。底面の中央と南壁下の２か所にピットが存在し，南壁下のピットは直径0.9ｍ・深さ0.9ｍである。

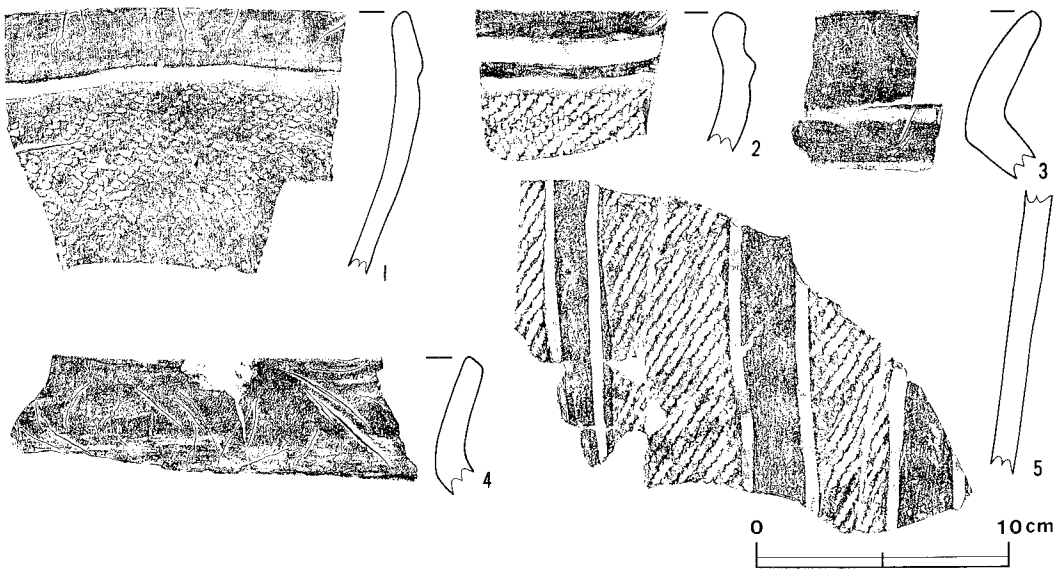
覆土は５層から成り，上層はローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む暗褐色土と極暗褐色土，下層はローム粒子・焼土粒子を微量含む暗褐色土が自然堆積し，また，ヤマトシジミを主体とした貝層が上層から中層にかけて20～80cmほど堆積している。

遺物は，覆土上層から中層にかけて縄文時代中期の加曽利Ｅ式の土器片610片を中心に，阿玉台式や黒浜式の土器片各11片，打製石斧（第186図25）１点が出土している。

出土土器

第123図１～５は，第11号土坑から出土した縄文土器片の拓影図である。１～４は口縁部及び口縁部から胴部にかけての土器片である。１は口縁部が無文で，胴部は単節ＲＬの縄文が斜位に全面に施されている。２は両側に沈線を有する隆帯が横位に巡り，隆帯直下には複節LRLの縄文が斜位に施されている。３・４は無文で，３は壺形土器と思われ，内・外面に赤彩が施されている。

５は胴部片で，幅の狭い磨消帯が垂下し，磨消帯と磨消帯の間に無節Ｌの縄文が斜位に施されている。



第123図　第11号土坑出土土器拓影図

第14号土坑（第143図）

本跡は当遺跡の南西側D3b$_2$区に確認され，縄文時代前期の黒浜期の第41号住居跡の西コーナー部を掘り込んでいる。

平面形は楕円形を呈し，長径方向はN－13°－Wを指し，長径3.2m・短径2.6m・深さ0.7mである。断面形は円筒形状を呈している。壁はロームで硬く，西壁は垂直に，南壁は外傾しながら立ち上がっている。底面は平坦で，硬いロームである。ピットが東壁下と南側の2か所に認められ，南壁下のピットは深さ1.3m，東壁下のピットは深さ1.4mである。

覆土は2層から成り，上層はローム粒子多量・焼土粒子を微量含む暗褐色土，下層はローム粒子多量・ローム小ブロックを微量含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物は，縄文時代中期の加曽利E式の土器片が覆土上層を中心に548片出土し，投棄された状態を窺わせる出土状況である。また，前期の黒浜式や諸磯式，中期の曽利式の土器片も少量出土している。そのほか，土器片錘（第181図140～143）4点や打製石斧1点，磨石1点，敲石1点が出土している。

第14号土坑出土土器観察表

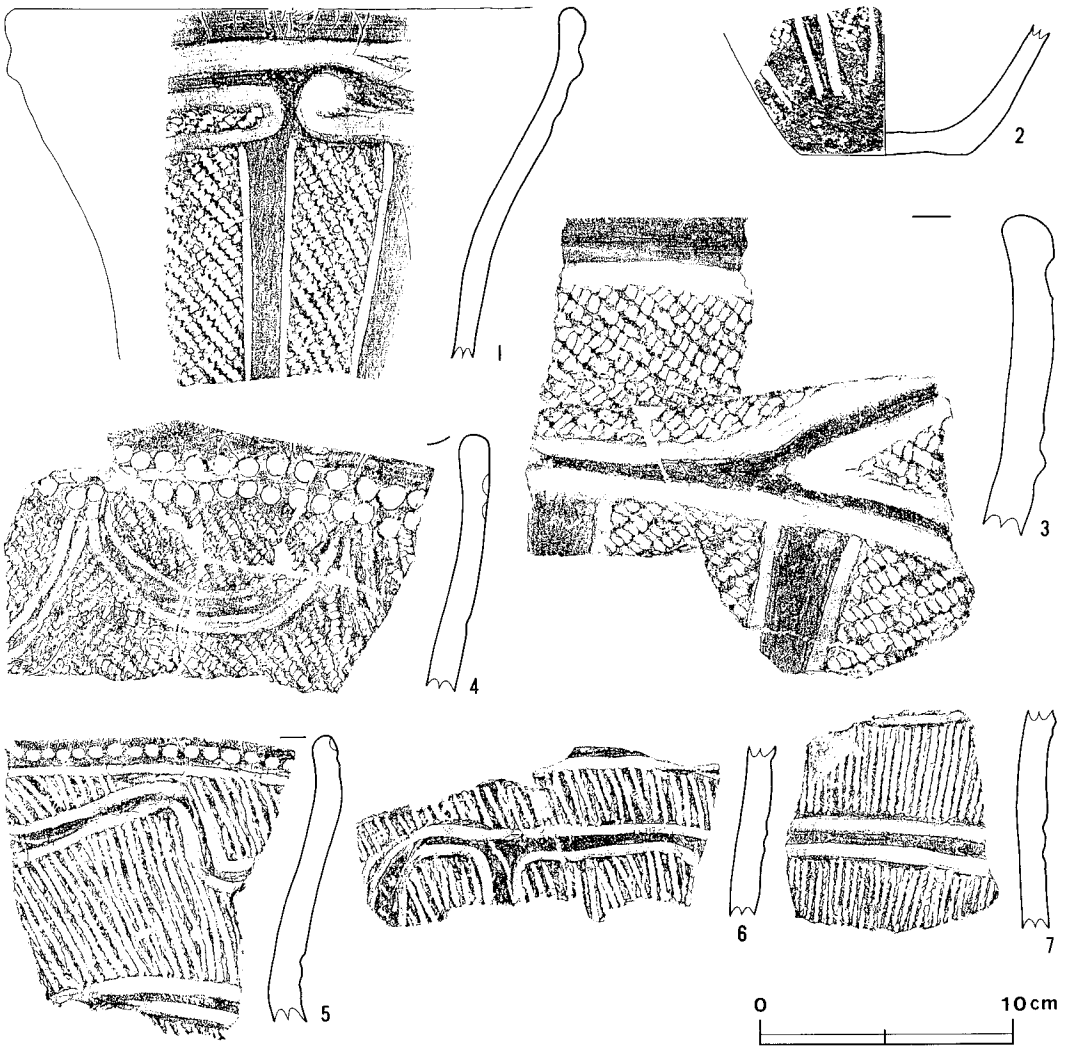
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第124図 1	深鉢形土器 加曽利EII	A(23.2) B(14.2)	口縁部から胴部にかけての土器片で，口縁部はやや内彎気味に強く開いている。口縁部は隆帯と沈線により渦巻文と長楕円文の区画が施され，長楕円文区画内には単節LRが斜位に施されている。胴部は口縁部下位から幅の狭い磨消帯が垂下し，磨消帯と磨消帯の間には単節LRの縄文が斜位に施されている。口縁部内面は横位のナデ，胴部は縦位のナデが施されている。	砂粒・長石 にぶい褐色 良好	20%　1片 P277
2	深鉢形土器 加曽利E	B（5.2） C（7.0）	底部は平底を呈し，胴部は底部から外傾しながら立ち上がっている。磨消帯と単節LRの縄文がわずかに認められる。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	10%　1片 P147

第124図3～7は，第14号土坑から出土した縄文土器片の拓影図である。3～5は口縁部及び口縁部から胴部にかけての土器片である。3は器肉が厚く，大形土器と思われる。口縁部は隆帯と沈線による半楕円三角文で区画し，区画内に撚りの太い単節RLの縄文が斜位に施されている。胴部は幅の広い磨消帯が垂下し，その間に撚りの太い単節RLの縄文が斜位に施されている。4は弱い波状を呈し，口唇部直下に2列の円形刺突文が横位に施されている。刺突文の直下に単節RLの縄文を斜位に施した後，幅の狭い連弧文を刺突文下に施している。5は口唇部直下に1本の円形刺突文と沈線を横位に施し，その下側に無節の撚糸文を斜位に施している。更に，幅の狭い雑な連弧文と沈線が巡っている。

6・7は胴部片で無節Lの撚糸文を縦位に施している。6は逆「U」字文が施され，7は沈線が横位に施されている。

第17号土坑（第143図）

本跡は，当遺跡のほぼ中央部C3i$_1$区に確認され，当初，確認の段階では楕円形を呈するので円筒状の土坑と予測したが，調査の進行に伴い，フラスコ状土坑であることが判明した。



第124図　第14号土坑出土土器実測図・拓影図

掘り込みの上面は円形を呈し，規模は長径1.3m・短径1.1m・深さ1.5mで，底面は，長径2.3m・短径2.2mの円形を呈する土坑である。壁の断面はフラスコ状を呈し，底面から0.6mの高さまではゆるやかで，ほぼ直線的に内傾し，その地点から0.4mほどほぼ垂直に立ち上がり，外傾しながら上面に至る。床面はほぼ平坦で，硬くしまったロームである。

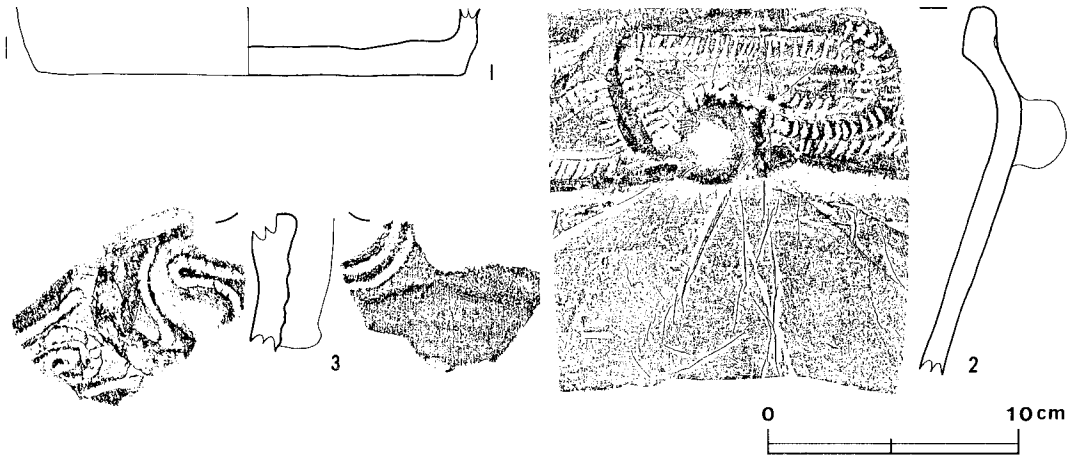
覆土はほぼ3層から成り，上面はローム粒子多量・焼土粒子と炭化粒子を微量含む暗褐色土，中・下層はローム粒子中量・ローム小ブロックを少量含む暗褐色土とローム小ブロックを多量含む褐色土が自然堆積している。

遺物は下層から阿玉台式の無文の大形破片や土器片63片，勝坂式の土器片9片が出土している。

第17号土坑出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴　及　び　文　様	胎土・色調・焼成	備　考
第125図 1	深鉢形土器 阿　玉　台	B (2.7) C(17.5)	平底の底部片で，大形の土器と思われる。	砂粒・長石・石英 雲母・にぶい橙色 普通	10%　2片 P145

第125図２・３は，第17号土坑から出土した縄文土器片の拓影図である。２は口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部の下位には左右に凹みを施した突起が設けられ，隆帯と接合して楕円形や三角形状の文様が構成されている。楕円文や三角形状文の隆帯の内側は隆帯に沿って幅の広い刺突文が施され，楕円文の右側の隆帯上にも刺突文が施されている。胴部は無文である。口唇部直下の内側に稜を有している。３は口縁部片である。波状を呈し，波頂下から隆帯を設け，隆帯に沿って右側は，２本の結節沈線文が「(ら」のような曲線に，隆帯に沿って左側は４本の結節沈線文が「ミ」状に口唇部直下に施されている。また，内側にも口唇部に沿って２本の結節沈線文が施されている。口唇部直下の内側には稜を有している。



第125図　第17号土坑出土土器実測図・拓影図

第19号土坑（第143図）

本跡は，当遺跡のほぼ中央C2i_0区に確認された。

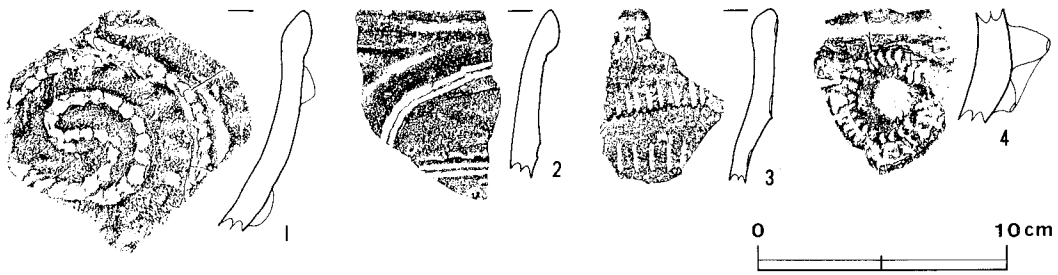
平面形は楕円形を呈し，規模は長径２ｍ・短径1.4ｍ・深さ1.5ｍである。底面の平面形は円形を呈し，直径は2.1ｍである。壁はロームで硬く，南壁は底面から0.55ｍほどの高さまで内彎し，更に，やや内傾しながら0.5ｍほど立ち上がったのち外側にほぼ平坦気味に向い，外傾しながら上面に至る。底面は平坦で硬く締まったロームである。

覆土の下層はローム中ブロック中量・ローム大ブロックを多量に含む褐色土が堆積し，上層はローム粒子中量・焼土粒子少量・炭化粒子を微量含む黒褐色土等が人為的に堆積している。

遺物は，上層から下層にかけて検出され，縄文時代中期の阿玉台式の土器片が128片出土している。そのほか，中期の加曽利Ｅ式の土器片や前期の黒浜式の土器片が若干出土している。

出土土器

第126図１～４は，第19号土坑から出土した縄文土器片の拓影図である。１～４は口縁部から胴部にかけての破片及び胴部片である。１は隆帯と沈線によって大きい渦巻文が作り出され，隆帯の両側にペン先状工具による刺突文が施されている。２は隆帯に沿って内側に２列の結節沈線文が施され，更に，２本の沈線が横位に施されている。口唇直下の内側にやや弱い稜が認められる。３は口唇直下と口縁部下位，及び胴部上位に爪形文が３段横位に施されている。口縁部と胴部との境は断面三角形の隆帯が施されている。４は渦巻状の突起を備え，突起の周縁には刺突文が施され，突起の付け根にも刺突文が施されている。



第126図　第19号土坑出土土器拓影図

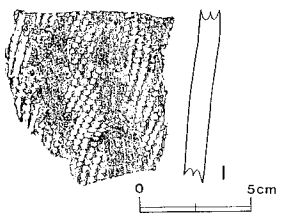
第30号土坑（第144図）

本跡は，当遺跡の南西側C2i₈区に確認され，古墳時代の第30号住居跡に切られている。

平面形は円形を呈し，規模は長径1.6ｍ・短径1.5ｍ・深さ0.4ｍである。断面形は円筒状を呈している。壁はロームで硬く，ほぼ垂直に立ち上がり，底面はほぼ平坦で硬いロームである。

覆土はほぼ４層から成り，上層はローム粒子を多量含む暗褐色土，中層はローム粒子少量・炭化物を微量含む暗褐色土，下層はローム小ブロックを少量含む褐色土がほぼ自然堆積している。また，中層にヤマトシジミを主体とした厚さ10cmの貝層が堆積している。

遺物は，縄文時代中期の加曽利Ｅ式の土器片が貝層中から４片，覆土中層から12片出土している。また，覆土上層に阿玉台式の土器片８片，前期の黒浜式の土器片２片が出土しているが，混入したものと考えられる。



第127図
第30号土坑出土土器拓影図

出土土器

第127図１は，第30号土坑から出土した縄文土器片の拓影図である。１は胴部片で，単節ＲＬの縄文が浅く斜位に施され，縦位のナデによって縄文が２か所磨消されている。

第32号土坑（第145図）

本跡は，当遺跡のほぼ中央C2h₀区に確認され，西側に位置する縄文時代中期の阿玉台期の第61号住居跡を若干掘り込んでいる。

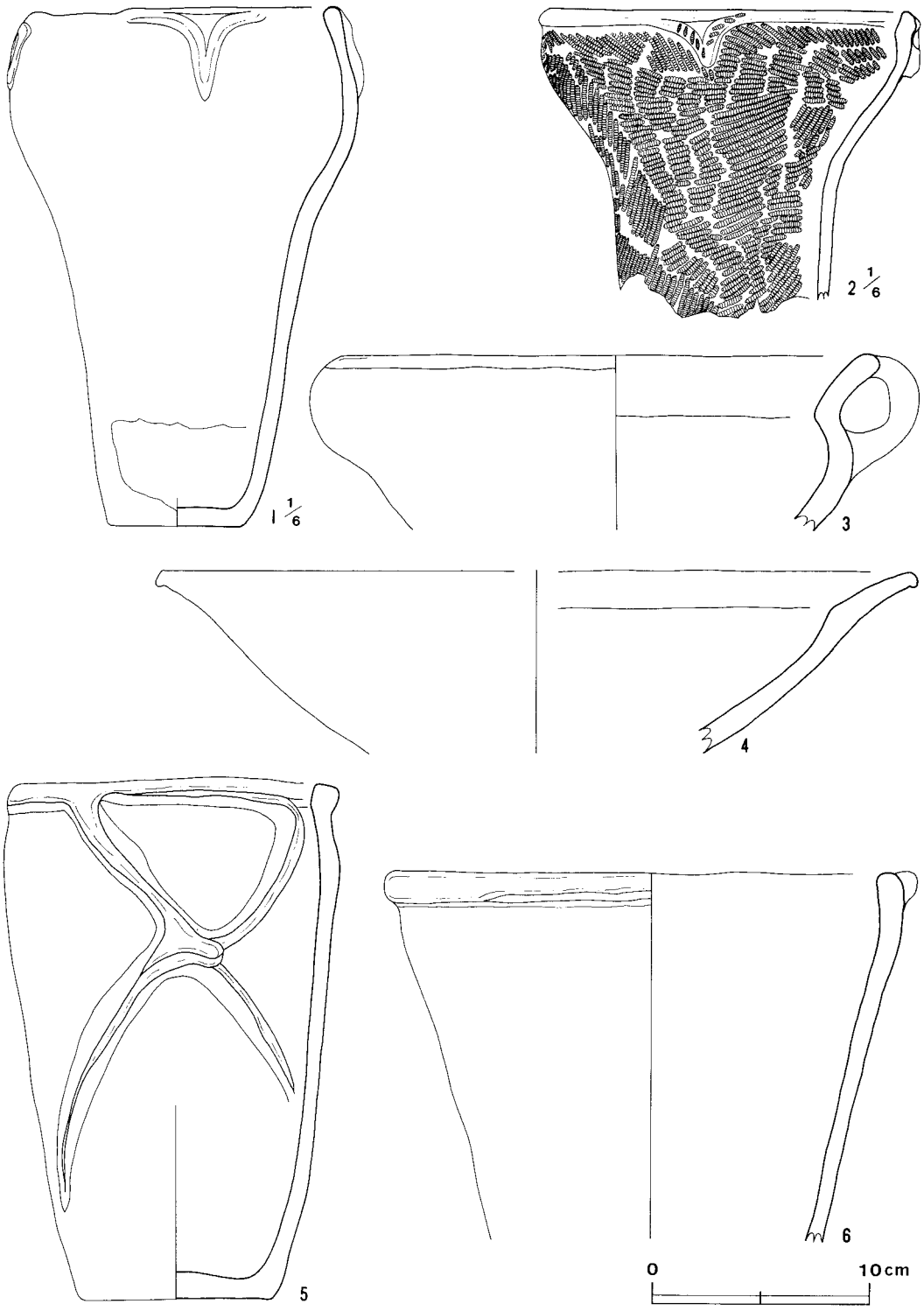
平面形は楕円形を呈し，長径方向はN－72°－Eを指し，規模は長径2.9m・短径2.2m・深さ1mである。壁はロームで硬く，北壁はややオーバーハングしている。南壁はフラスコ状を呈しており，底面から内傾しながら0.6m立ち上がったあと，ゆるやかに外傾しながら立ち上がっている。底面はほぼ平坦で，硬いロームであり，底面の規模は長径2.4m・短径2.2mである。

覆土は5層から成り，上層はローム粒子を中量含む黒褐色土，下層はローム粒子を多量含む黒褐色土がほぼ自然堆積している。また，上層にはヤマトシジミを主体とした貝層が南壁ぎわに長径0.5m・短径0.3mの楕円形を呈する形で堆積している。

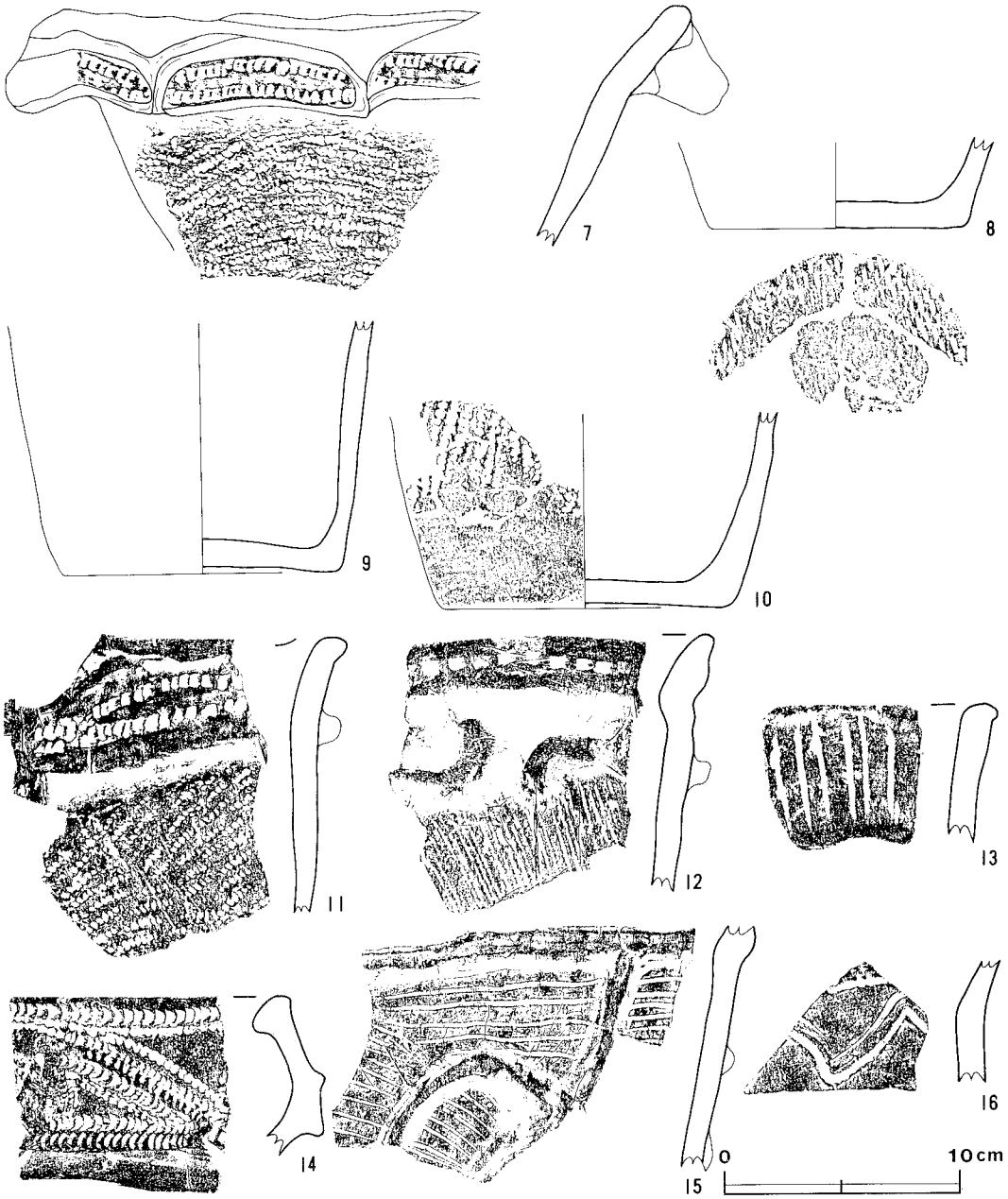
遺物は，南西側の奥壁の底面や底面直上から縄文時代中期の阿玉台式の深鉢形土器（第128図1・2・5）3個がつぶれた状態で，また，周辺の底面や覆土下層から阿玉台式の土器片70片，覆土上・中層からも70片出土している。更に，覆土中層から勝坂式の土器片1片が出土している。前期の黒浜式や中期の加曽利E式の土器片も若干出土しているが，混入したものと考えられる。

第32号土坑出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第128図 1	深鉢形土器 阿玉台Ⅲ	A 28.5 B 47.6 C 12.3	口縁部が内彎して立ち上がる。口縁直下に断面カマボコ状の隆帯による「V」字状文が施され，4単位に区画している。器面は無文である。口縁部内・外面，胴部上位外面，胴部内面は横位のナデ，胴部上位以下は縦位のナデが施されている。	砂粒・雲母 橙色 良好	80% 14片 P28
2	深鉢形土器 阿玉台Ⅲ	A 34.8 B(28.5)	胴部中位から内彎しながら外側に開き，口縁部に至る。口縁部内面に稜が認められる。口縁上端には無文の隆帯を周回させ，その直下に縄文を施した4単位の断面カマボコ状の隆帯を「V」字状に貼り付けている。器面には単節LRの縄文が斜位や縦位に施されている。口縁部内・外面・胴部内面は横位のナデが施されている。	砂粒・雲母 褐灰色 良好	70% 23片 P29
3	深鉢形土器 阿玉台Ⅲ	A(25.0) B (8.0)	把手を有する口縁部から胴部上位にかけての破片である。胴部上位でくびれ，口縁部は外傾している。無文である。内・外面は横位のていねいなナデが施されている。	砂粒・長石・石英 雲母 橙色 良好	30% 7片 P142
4	浅鉢形土器 阿玉台Ⅲ	A(34.4) B (8.4)	口縁部は胴部から強く外傾しながら立ち上がっている。口縁部内面には明瞭な稜を有する。無文である。内・外面は横位のナデが施されている。	砂粒・雲母 橙色 良好	10% 3片 P113
5	深鉢形土器 阿玉台Ⅲ	A 15.3 B 24.1 C 9.0	口縁部のやや広い円筒形の土器である。文様は胴部上位に小突起を備え，口縁部と小突起の間は断面三角形状の隆帯によって逆三角形を，小突起から底部直上にかけては断面三角形状の隆帯によって逆「V」字を構成している。文様は対になっている。	砂粒・長石・石英 雲母 橙色 普通	100% 21片 二次焼成 P114
6	深鉢形土器 阿玉台Ⅲ	A(24.6) B(16.8)	胴部は外傾しながら立ち上がり，口縁部に至る。口縁部には断面カマボコ状の隆帯が1本周回している。無文である。口縁部は横位のナデ，胴部外面は縦位のナデが施され，内面は摩耗している。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通	20% 6片 P140
第129図 7	深鉢形土器 阿玉台Ⅲ	A(27.5) B(10.2)	口縁部から胴部上位にかけての破片である。口縁部は小突起によって区画され，区画内には隆帯に沿って結節沈線文が施されている。胴部は単節RLの縄文が斜位に施されている。	砂粒・長石・雲母 褐灰色 普通	10% 4片 P115
8	深鉢形土器 阿玉台Ⅲ	B (3.8) C(10.8)	胴部下位から底部にかけての土器片で，底部は網代痕を有する平底である。	砂粒・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	10% 5片 P146



第128図　第32号土坑出土土器実測図・拓影図(1)



第129図　第32号土坑出土土器実測図・拓影図(2)

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴　及　び　文　様	胎土・色調・焼成	備　考
第129図 9	深鉢形土器 阿玉台Ⅲ	B(10.7) C 11.6	円筒形を呈する土器である。無文で，胴部外面は縦位のていねいなナデが施されている。	砂粒・雲母 浅黄橙色 良好	40%　10片 P111
10	深鉢形土器 阿玉台Ⅲ	B (8.2) C 12.0	底部は平底を呈し，胴部は底部から軽く外傾しながら立ち上がっている。胴部には単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。底部直上は横位のナデが施されている。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	20%　4片 P112

第129図11～16は，第32号土坑から出土した縄文土器片の拓影図である。11～14は口縁部及び口縁部から胴部にかけての土器片である。11は波状を呈し，口縁部下位に断面カマボコ状の隆帯が貼付され，口唇部と隆帯の間に２列の刺突文が横位に施されている。胴部は単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。12は右方向からの刺突文を有する隆帯を１列横位に巡らし，その下方に「し」の字状を施し，「し」の字の両端と片側に結節沈線文を施している。胴部は細い沈線が斜位に施されている。口縁部下位の内面に稜を有している。13は下方向から刺突した細い結節沈線文が深く縦位に施されている。14は勝坂系の土器片で，口唇部，口縁部下位，及びその間に斜位に隆帯が設けられている。斜位の隆帯上には２列の「Ｃ」形刺突文，横位の隆帯上には１列の「Ｃ」形刺突文が施されている。口唇部直下，斜位の隆帯の両端，及び口縁部下位の上端には「Ｄ」形刺突文が施され，それらのペン先形刺突文がそれぞれ施されている。

15・16は胴部片で，15は眼鏡部とつる状部が接合した「$\mathcal{O}$」状を呈し，その接合部に小突起を備えている。器面には横位と斜位の沈線がそれぞれ施されている。16は結節沈線文がわずかに窺え，その下側に幅の広い波状沈線文が浅く横位に施されている。

第64号土坑（第148図）

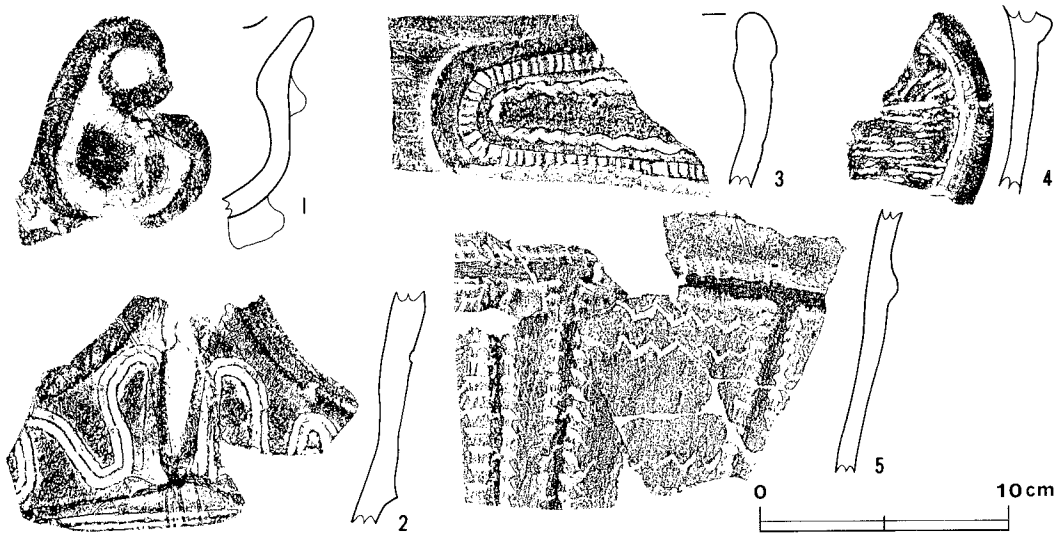
本跡はD2a_0区に確認され，縄文時代前期黒浜期の第54号住居跡の北西側と同中期の阿玉台期の第53号住居跡の南東コーナー部を掘り込み，逆に南側で縄文時代中期の加曽利Ｅ期の第262号土坑に掘られている。

上面の平面形は円形を呈し，規模は長径0.75ｍ・短径0.7ｍ・深さ１ｍであり，断面形はフラスコ状を呈している。底面の平面形は円形を呈し，直径は2.4ｍである。壁はロームで硬く，南西壁は底面から0.2ｍほど内彎しながら立ち上がった後，急角度で0.5ｍほど内傾し，更に，0.5ｍほどゆるやかに内傾しながら上面に至る。北東壁は底面から0.2ｍほど内彎しながら立ち上がった後，直線的に急な角度で内傾しながら立ち上がって上面に至る。底面はほぼ平坦で，硬く締まっている。

遺物は，覆土中・下層から縄文時代中期の阿玉台式土器片86片と勝坂式土器片が出土し，その他，加曽利Ｅ式の土器片が覆土上層から48片，土器片錘（第182図140）が１点出土している。

出土土器

第130図１～５は，第64号土坑から出土した縄文土器片の拓影図である。１は把手で，隆帯による楕円形状の文様を施し，内面は楕円形の片方上側に凹みを有する渦巻文がある。楕円形の部分は無文で，凹みを有し，外面は無文で中央はやや出っ張り，指頭痕が隆帯脇に認められる。把手の付け根には単節の縄文が施されているのがわずかに窺える。２・３は口縁部片で，２は波状を呈し，波頂下から凹みを施した隆帯が口縁下位まで垂下し，その左右両側に２列の波状沈線文が



第130図　第64号土坑出土土器拓影図

横位に施されている。3は隆帯による楕円形が施され，隆帯の内側に沿って幅の広い結節沈線文と波状沈線文が施されている。

4・5は胴部片である。4は隆帯による円文が設けられ，隆帯の内側に沿って1本の沈線が施されている。沈線の内側に無節の縄文が横位と斜位に施されている。5は断面三角形状の隆帯が横位に1本，縦位に3本施されている。横位の隆帯には，隆帯の上端部と一部下端部に刺突文を斜位に施している。3本の隆帯のうち右側の縦位の隆帯は両端に横位の結節沈線文を施し，中側の縦位の隆帯は右端に斜位の刺突文と左端に横位の結節沈線文を施し，左側の縦位の隆帯は右端に斜位，左端に横位の結節沈線文をそれぞれ施されている。右側と中側の隆帯の間には2列の山形沈線文が2段横位に施されている。

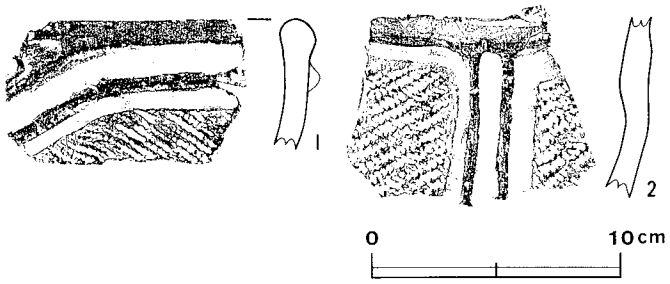
第71号土坑（第148図）

本跡は，当遺跡の南西側D2j_1区に確認され，古墳時代の第20号住居跡に北西側を切られている。

平面形は楕円形を呈し，長径方向はN－65°－Eで，規模は長径2.4m・短径2m・深さ1mである。断面形は円筒形を呈している。壁はロームで硬く，南東壁がややオーバーハング状に，その他の壁は垂直に立ち上がり，底面は平坦な硬いロームで，南東壁下と中央部の2か所に深さ0.65～0.85mの楕円形と円形を呈するピットが存在する。

覆土は4層から成り，上層はローム粒子少量・焼土粒子を微量含む黒褐色土，下層はローム粒子を多量含む褐色土等が自然堆積している。

遺物は，縄文時代中期の加曽利E式の土器片が覆土上・中層から137片等が出土している。



第131図　第71号土坑出土土器拓影図

出土土器

第131図１・２は，第71号土坑から出土した縄文土器片の拓影図である。１は口縁部片で，隆帯と沈線による半楕円文で区画され，区画内に無節Ｒの縄文が斜位に施されている。

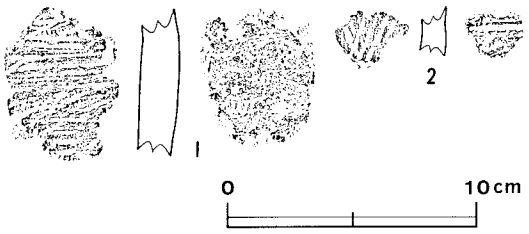
２は胴部片で，横位の沈線が巡り，凹みを有する隆帯が垂下し，単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。

第111号土坑（第152図）

本跡は，D2h$_7$に確認され，当初住居跡の柱穴として調査を実施したが，柱穴にはならず土坑として取り扱った。

平面形は直径0.5ｍの円形を呈し，深さは約１ｍである。壁はロームで硬く，垂直に立ち上がり，底面は平坦で，硬いロームである。ピット状の土坑で幅が狭いため土層図はとらなかった。

遺物は，覆土中層から貝（マガキ・ハマグリ・ヤマトシジミ・ハイガイ・アサリ・オキシジミ・シオフキ）と茅山式の土器小片１片がまとまって出土し，更に，縄文時代早期の茅山式と前期の黒浜式の土器片各１片等が出土している。



第132図　第111号土坑出土土器拓影図

出土土器

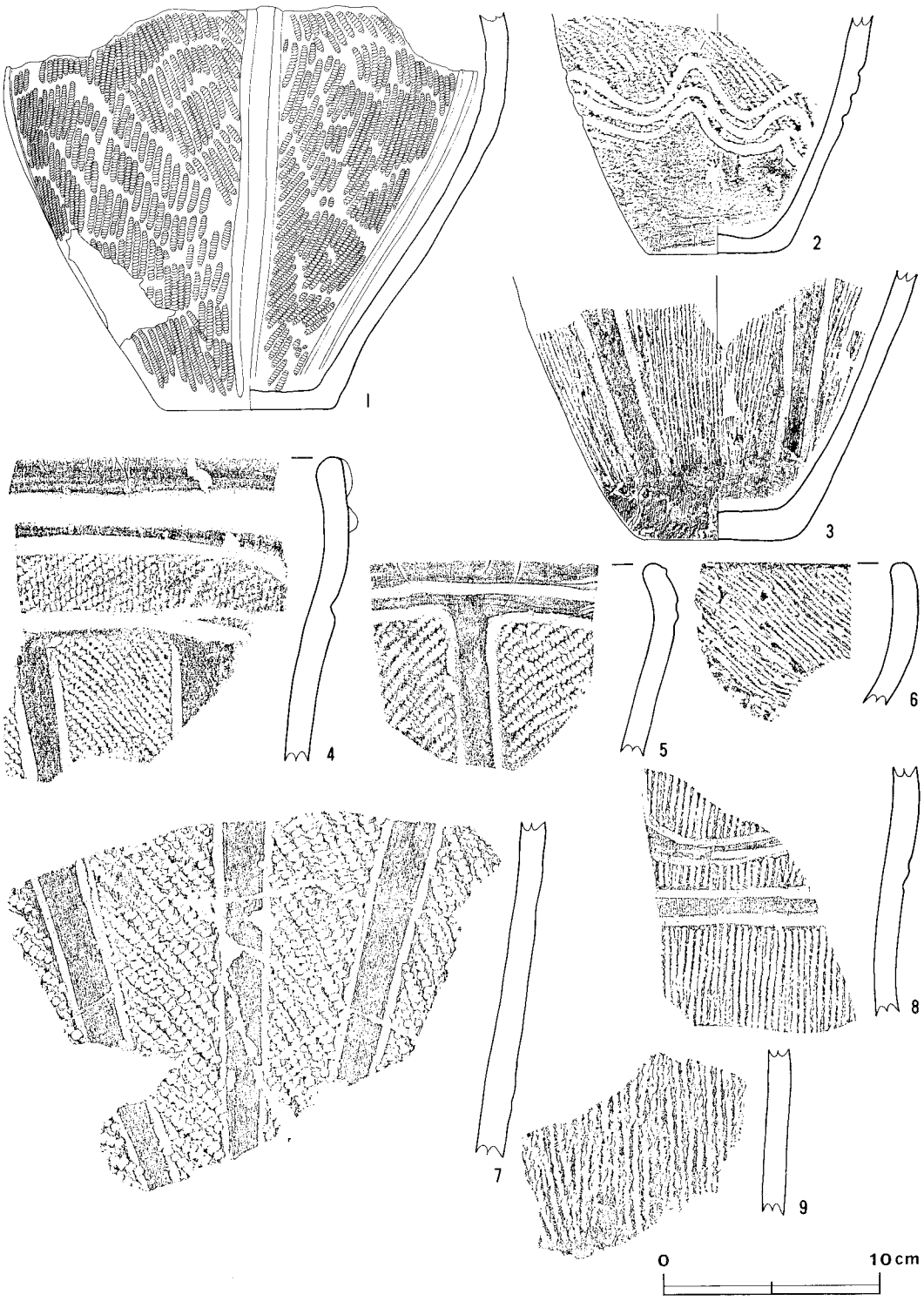
第132図１・２は第111号土坑から出土した縄文土器片の拓影図である。１・２は胴部片で，１は外面に条痕文が横位に，２は内・外面に斜位に施されている。

第138号土坑（第154図）

本跡は，当遺跡の南西側D2c$_9$区に確認され，北側に位置する第206号土坑を掘り込み，底面は本跡が0.4ｍほど低い。

平面形は楕円形を呈し，長径方向はＮ－74°－Ｗで，規模は長径３ｍ・短径2.3ｍ・深さ0.6ｍである。断面形は円筒形を呈している。壁はロームで硬く，ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は平坦で硬いロームを呈し，直径0.4～0.8ｍ・深さ0.8～1.2ｍのピットが３か所存在する。北壁下のピットはオーバーハング状に，南壁下のピットは垂直に掘り込まれている。

覆土は４層から成り，上層はローム粒子を中量から多量・焼土粒子少量・炭化物微量を含む暗褐色土が，下層はローム粒子多量・ローム小ブロック中量を含む褐色土がレンズ状に自然堆積している。



第133図　第138号土坑出土土器実測図・拓影図

遺物は，縄文時代中期の加曽利Ｅ式の土器片が覆土中層を中心に888片出土し，大部分が胴部片で投棄されたものと考えられる。深鉢形土器（第133図１）が中層から横位の状態で出土している。その他に，覆土土層から前期の黒浜式・阿玉台式の土器片も少量出土しているほか大木式の土器片１片，土器片錘（第182図157～161）５点，磨製石斧（第187図42）１点，磨石１点が出土している。

第138号土坑出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第133図 1	深鉢形土器 加曽利ＥⅡ	B(18.9) C 8.3	底部は平底を呈し，内彎しながら外側に開いて立ち上がっている。胴部中位以上は欠損している。胴部は幅の狭い磨消帯によって６単位に区画され，区画内に単節ＬＲの縄文が斜位や縦位に施されている。胴部内面は横位と縦位のナデが施されている。	砂粒・長石 橙色 良好	40% 8片 P43
2	深鉢形土器 加曽利ＥⅡ	B(11.2) C 6.4	底部から胴部下位にかけての土器である。胴部には単節ＲＬの縄文が斜位に施され，更に３本の波状沈線が周回している。底部直上は横位のナデ，胴部内面は縦位のナデが施されている。	砂粒・長石 にぶい橙色 良好	40% 1片 P119
3	深鉢形土器 加曽利ＥⅡ	B(12.2) C 7.5	底部は平底を呈し，胴部は底部から外傾しながら立ち上がっている。胴部は６単位の幅の狭い磨消帯によって区画され，区画内には縦位の細い沈線が施されている。内面は縦位のナデが施されている。	砂粒・長石 褐色 普通	40% 8片 P118

第133図４～９は，第138号土坑から出土した縄文土器片の拓影図である。４～６は口縁部から胴部にかけての土器片である。４は口縁部が隆帯と沈線による長楕円文で区画され，区画内に単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。胴部は幅の広い磨消帯と幅の狭い磨消帯が垂下し，その間には単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。５は口唇直下に沈線が横位に施され，その下方は，磨消による逆「Ｕ」字文で区画され，区画内に単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。６は口唇直下から条線文が器面に斜位に施されている。

７～９は胴部片である。７は大形深鉢形土器の破片で，幅の狭い磨消帯が垂下し，磨消帯と磨消帯の間には撚りの太い単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。８は無節Ｌの撚糸文が縦位に施され，幅の狭い磨消帯で沈線と「Ｕ」字文が施されている。９は撚りの太い無節Ｌの撚糸文が縦位に施されている。

第200号土坑（第161図）

本跡は，当遺跡の南西側D2c$_8$区に確認され，第212号フラスコ状土坑の南西側を掘り込んでいる。

平面形は直径2.2ｍの円形を呈し，深さ0.8ｍである。断面形は円筒形を呈している。壁はロームで硬く，ほぼ垂直に立ち上がっている。底面は平坦な硬いロームで，やや北側に直径0.4ｍ，深さ0.4ｍのピットが１か所存在する。北東側は約0.2ｍ段差があり，本跡の方が高い。

覆土はローム粒子を多量，ローム小ブロックを少量含む褐色土と暗褐色土が自然堆積している。

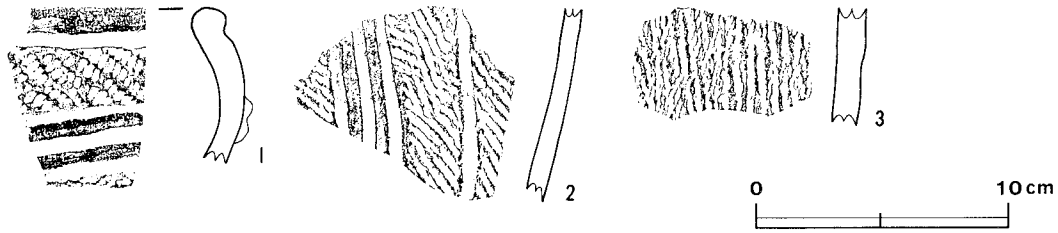
遺物は，覆土中層を中心にして，縄文時代中期の加曽利Ｅ式土器片102片等が出土している。

出土土器

第134図１～３は，第200号土坑から出土した縄文土器片の拓影図である。１は口縁部片で，沈

線を有する隆帯と沈線が横位に施され，隆帯と沈線の間には単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。

２・３は胴部片で，２は幅の広い磨消帯が垂下し，磨消帯と磨消帯の間には無節Ｒの縄文が斜位に施され，更に，沈線が垂下している。３は無節Ｌの撚糸文が縦位に施されている。



第134図　第200号土坑出土土器拓影図

第218号土坑（第163図）

本跡は，当遺跡の南西側D2d$_9$区に検出され，縄文時代中期の第53号住居跡の10m南側に存在する。

平面形は楕円形を呈し，長径方向はＮ－50°－Ｅで，規模は長径2.2m・短径1.8m・深さ0.4mである。断面形はなべ状を呈している。壁はローム で硬く南西壁がややオーバーハング状，その他の壁は外傾しながら立ち上がっている。底面は平坦で硬い。南西壁下に長径0.8m・短径0.6m・深さ0.6ｍの楕円形のピットが１か所存在する。

覆土はほぼ３層から成り，上層はローム粒子を中量含む極暗褐色土，下層はローム粒子を中量含む暗褐色土がほぼ自然堆積している。

遺物は縄文時代中期の加曽利Ｅ式の土器片50片や勝坂式の土器片少量が覆土上・下層から出土し，復元できた勝坂式土器は円筒形の有孔鍔付土器（第135図１）である。

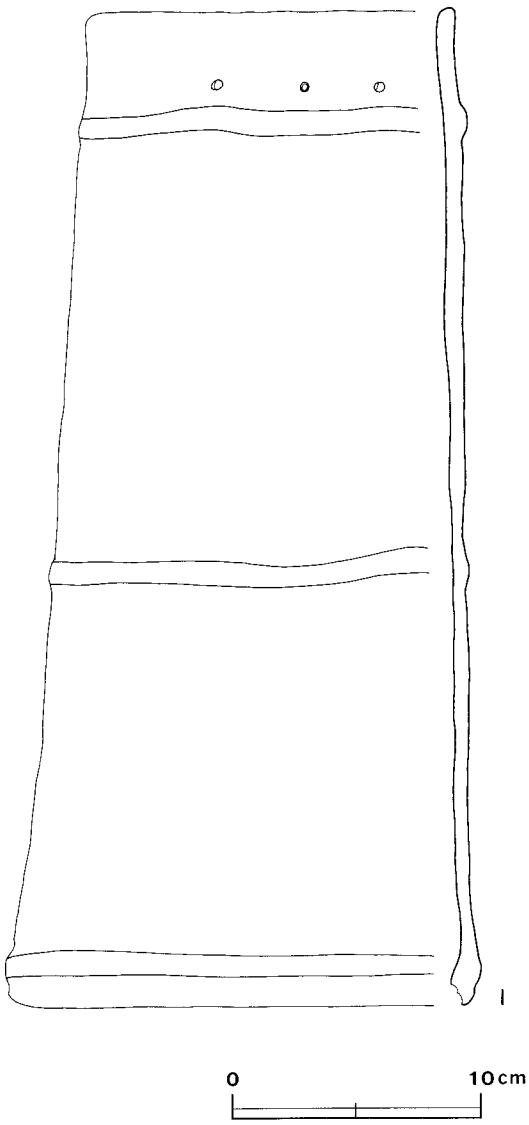
第218号出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴　及　び　文　様	胎土・色調・焼成	備　考
第135図 1	有孔鍔付土器 勝　坂　系	A 14.9 B 40.4 C(19.7)	口縁部のやや狭い円筒形の土器で，底部は欠損している。口縁下に対になる3孔を有し，口縁部直下，胴部中位，及び底部直上に隆帯が設けられている。口縁部内・外面は横位のナデ，胴部内・外面は縦位のナデが施されている。	砂粒・スコリア 長石 赤色 不良	50%　48片 口縁部・胴部一部赤彩 P124

第241号土坑（第165図）

本跡は，D2f$_7$区に確認され，第194号土坑の１ｍ東側に位置している。

平面形は楕円形を呈し，長径方向はＮ－76°－Ｗで，規模は長径2.8mm・短径2.3m・深さ0.6mである。断面形はなべ状を呈している。壁はローム で硬く，東壁は垂直に，西壁は外傾しながら立ち上がっている。底面は平坦で硬いローム で，ほぼ中央と南壁下に直径0.2～0.4ｍ・深さ0.1～0.3ｍのピットが２か所存在している。



第135図　第218号土坑出土土器実測図

覆土は３層から成り，上層はローム粒子を中量，炭化粒子・焼土粒子を微量含む暗褐色土，下層はローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子を微量含む褐色土が自然堆積している。

遺物は，縄文時代中期の加曽利Ｅ式の胴部から底部にかけての小形深鉢形土器が覆土上層から横位に投棄された状態で出土している。また，同時期の土器片は上・中層を中心に111片出土している。その他に前期の黒浜式や阿玉台式の土器片も５・６片出土しているが周囲からの流入と思われる。

出土土器

第136図２～４は，第241号土坑から出土した縄文土器片の拓影図である。２・３は口縁部から胴部にかけての破片である。２は波状口縁を呈し，口唇直下から単節ＲＬの縄文が器面全体に斜位に施されている。３は口唇直下から沈線が浅く斜位に施された後，沈線が縦位に施されている。

４は薄手の胴部片で，幅の狭い磨消帯が垂下し，磨消帯の間には複節ＲＬＲの縄文が斜位に施されている。

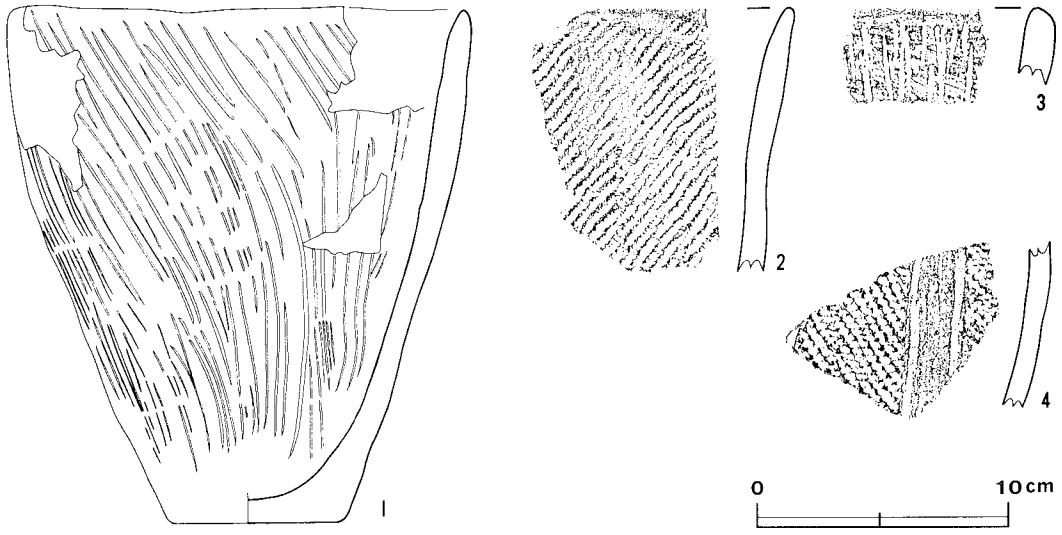
第241号土坑出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴　及　び　文　様	胎土・色調・焼成	備　考
第136図 1	深鉢形土器 加曽利Ｅ	A 18.7 B 21.0 C 7.5	底部は平底を呈し，胴部は底部から内彎気味に軽く外側に開きながら立ち上がり口縁部に至る。器面には縦位と斜位の細い沈線が施されている。外面の一部と内面は摩滅している。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	90%　35片 二次焼成 P42

第246号土坑（第166図）

本跡は，D2e$_6$区に確認され，第243号土坑に隣接している。

平面形は楕円形を呈し，長径方向はＮ－82°－Ｗで，規模は長径３ｍ・短径2.4ｍ・深さ0.4ｍで



第136図　第241号土坑出土土器実測図・拓影図

ある。断面形は円筒状を呈している。壁はロームで硬く，垂直に立ち上がっている。底面は平坦で，硬いロームを呈し，ピットが大小合せて４か所存在している。南壁下のピットはオーバーハング状に掘り込まれ，長径１ｍ・短径0.8ｍの楕円形を呈しており，深さは0.8ｍである。

覆土は６層から成り，上層はローム粒子多量・焼土粒子を微量含む極暗褐色土，下層はローム粒子中量・ローム小ブロックを中量含む褐色土がほぼ自然堆積している。

遺物は，縄文時代中期の加曽利Ｅ式の深鉢形土器（第137図１）が北壁下のピットの中から斜位の状態で出土している。そのほか覆土中・下層から加曽利Ｅ式の土器片が110片等出土している。

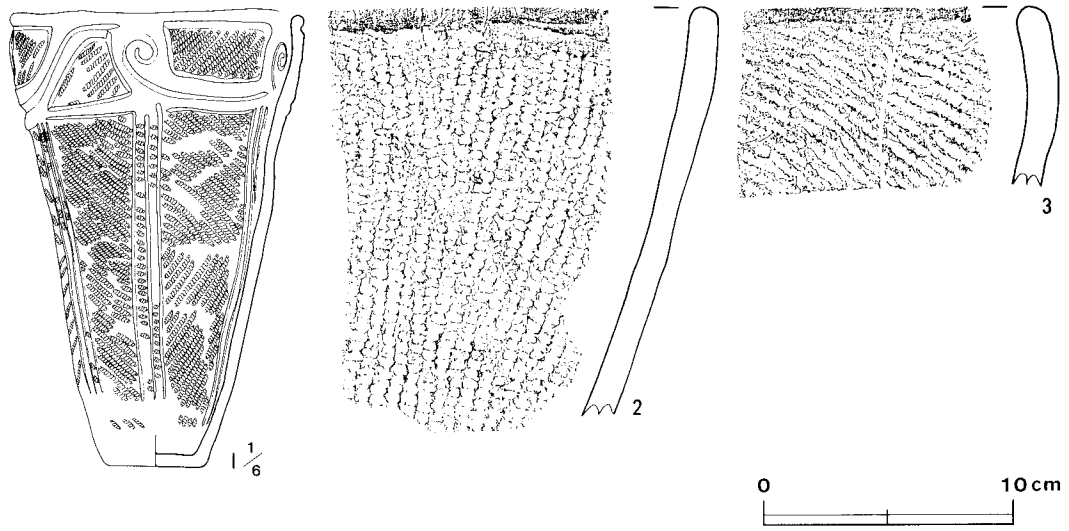
第246号土坑出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴　及　び　文　様	胎土・色調・焼成	備　考
第137図 1	深鉢形土器 加曽利Ｅ	Ａ 23.6 Ｂ 37.0 Ｃ 8.0	底部は平底を呈し，胴部は底部から軽く外傾しながら立ち上がっている。口縁部はやや内彎している。口縁部文様帯は，隆帯と沈線によって，４単位の渦巻文で区画され，渦巻文と渦巻文の間には長方形状や台形状の文様が施され，その中に単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。胴部文様帯は，３本１組の沈線によって６単位に区画され，区画内には単節ＬＲの縄文がそれぞれ斜位に施されている。口縁部・胴部内面は横位のナデが施されている。	砂粒・雲母・石英・長石 褐色 良好	95%　36片 Ｐ34

第137図２・３は，第246号土坑から出土した縄文土器片の拓影図である。２・３とも口縁部から胴部にかけての土器片で，２は口唇直下から単節ＲＬの縄文が器面全体に縦位に施されている。３は口唇直下から無節Ｒの縄文が器面全体に斜位に施されている。

第284号土坑（第171図）

本跡は，当遺跡の南西側$D2b_7$区に確認され，西側の第290号土坑を掘り込み，南側を第285号土



第137図　第246号土坑出土土器実測図・拓影図

坑に若干切られている。

平面形は円形を呈し，規模は長径2.1m・短径2.0m・深さ0.8mである。断面形は円筒状を呈している。壁は切られている部分を除いて垂直に立ち上がっている。底面は平坦で硬く，南側に深さ0.1mほどのピットが1か所存在している。

覆土は4層から成り，上層はローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子を微量含む暗褐色土，下層はローム粒子少量，炭化粒子を微量含む暗褐色土が自然堆積している。

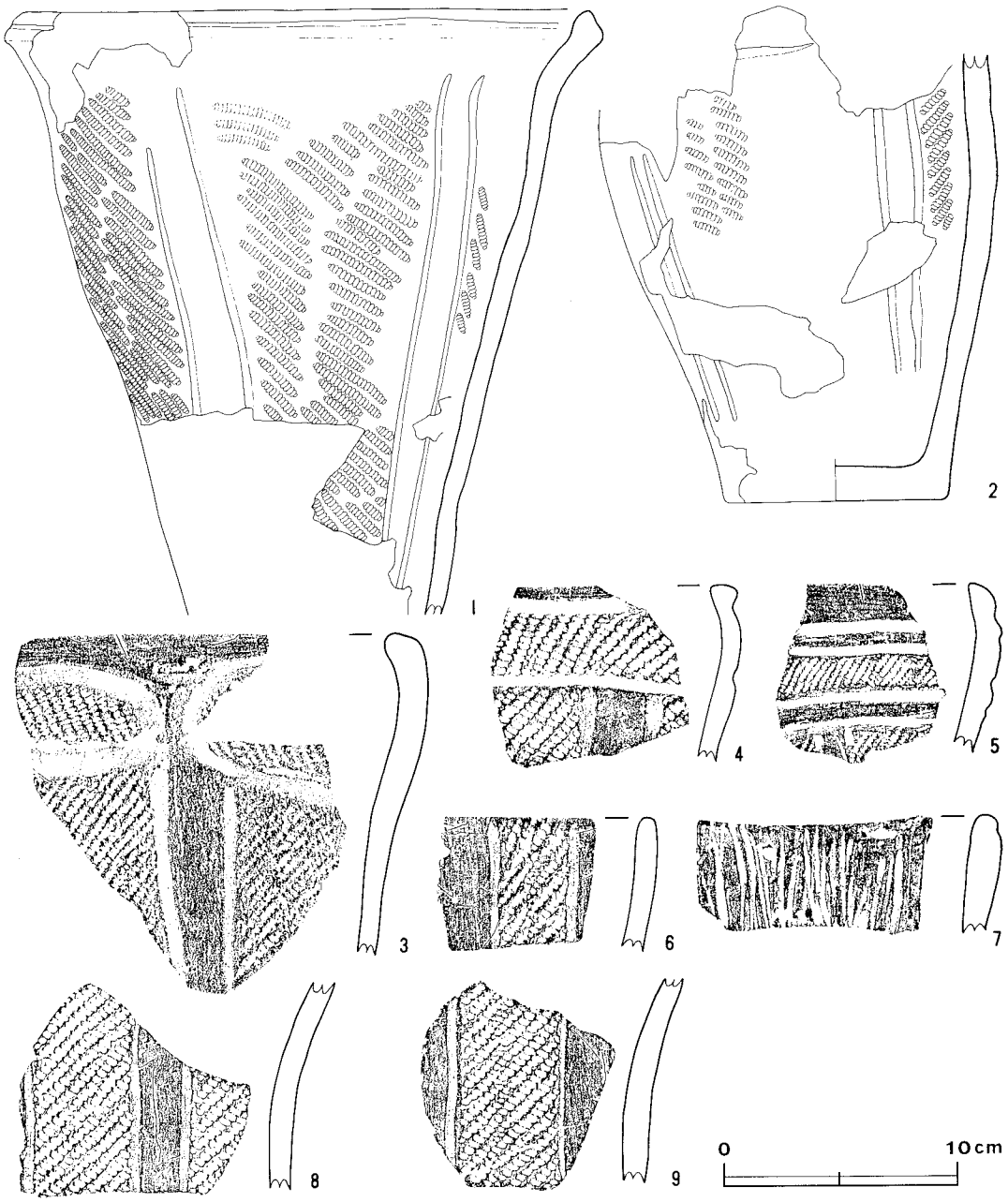
遺物は，ほぼ完形の加曽利E式の深鉢形土器（第138図1）が覆土下層から，半完形の深鉢形土器（第138図2）が覆土上層からそれぞれ横位の状態で出土している。そのほか，覆土中層から加曽利E式土器片356片，阿玉台式の土器片15片等が出土している。

第284号土坑出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第138図 1	深鉢形土器 加曽利E	A 25.8 B(26.1)	胴部は外傾しながら立ち上がり，口縁部は更に外傾している。胴部下位以下は欠損している。口唇部に1本の沈線が周回し，口縁部は無文である。胴部は2本1組の沈線が4単位と，1本の蛇行沈線文で区画されている。区画内には，雑な単節RLの縄文が斜位に施されている。口縁部内・外面，胴部内面は横位のナデが施されている。	砂粒・雲母・スコリヤ 灰褐色 普通	60%　16片 P37
2	深鉢形土器 加曽利E	B(22.0) C (9.4)	底部は平底を呈し，胴部は底部から内彎気味に立ち上がっている。口縁部は欠損している。胴部は2本の沈線によって4単位に区画され，区画内には単節RLとLRの縄文が斜位に施されている。中位以下の一部は縦位のナデにより磨消されている。胴部内面は横位のナデが施されている。	砂粒・長石 赤褐色 普通	40%　30片 P38

第138図3～9は，第248号土坑から出土した縄文土器片の拓影図である。3～7は口縁部及び口縁部から胴部にかけての破片である。3は口縁部が沈線による楕円文で区画され，区画内に単節RLの縄文が斜位に施され，胴部は幅の狭い磨消帯が垂下し，磨消帯と磨消帯の間には単節R

Lの縄文が斜位に施されている。4は口縁部が隆帯と沈線によって区画され，区画内に単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。胴部には幅の狭い磨消帯が垂下し，磨消帯の間には単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。5は口縁部が隆帯と沈線によって区画され，区画内に単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。胴部は磨消帯がわずかに認められ，単節ＬＲの縄文が斜位に施され



第138図　第284号土坑出土土器実測図・拓影図

ている。６は口唇部直下から磨消帯が垂下し，磨消帯と磨消帯の間に単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。７は口唇部直下から雑な沈線が器面全体に縦位に施されている。

８・９は胴部片で，いずれも磨消帯が垂下し，磨消帯の間には単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。

第285号土坑（第171図）

本跡は，D2c$_7$区に確認され，北西側の第209号土坑と，北側の第284号土坑の一部をそれぞれ掘り込んでいる。

平面形は楕円形を呈し，長径方向はN－74°－Wで，規模は長径2.3m・短径1.8m・深さ0.8mである。断面形は円筒状を呈している。壁はほぼ垂直に立ち上がり，底面は平坦で硬く，長径0.3～0.6m・短径0.3～0.45m・深さ0.2～0.7mのピットがほぼ中央と西壁ぎわの２か所に存在している。

覆土は３層から成り，上層はローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子を微量含む褐色土，下層はローム粒子・ローム中ブロックを微量含む褐色土が自然堆積している。

遺物は，縄文時代中期の加曽利Ｅ式の完形の深鉢形土器（第139図２）がほぼ中央の床面を若干掘り込んで，逆位の状態で出土している。そのほか，覆土中・下層から同期の土器片が少量出土している。

第285号出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第139図 1	深鉢形土器 加曽利ＥII	A(34.2) B(25.2)	口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は隆帯と沈線によって渦巻文，楕円文，及び長楕円文で区画され，区画内には単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。胴部は幅の狭い磨消帯が垂下し，磨消帯と磨消帯の間には単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。内面は横位のナデが施されている。	砂粒・長石・雲母にぶい橙色 普通	20%　7片 P150
2	深鉢形土器 加曽利ＥII	A 31.3 B 37.1 C 8.3	キャリパー形を呈する土器である。口縁部は２本の列点文と１本の沈線が周回している。胴部は単節ＬＲの撚糸文が縦位に施されている。更に中央に２本の沈線が周回し，上位には２本の波状沈線文が３段周回している。下位には２本の沈線によって逆「Ｕ」字文が５単位施されている。口縁部内面・胴部上位内面は横位のナデが施されている。その他は摩耗している。	砂粒・長石 橙色 良好	100%　11片 P39

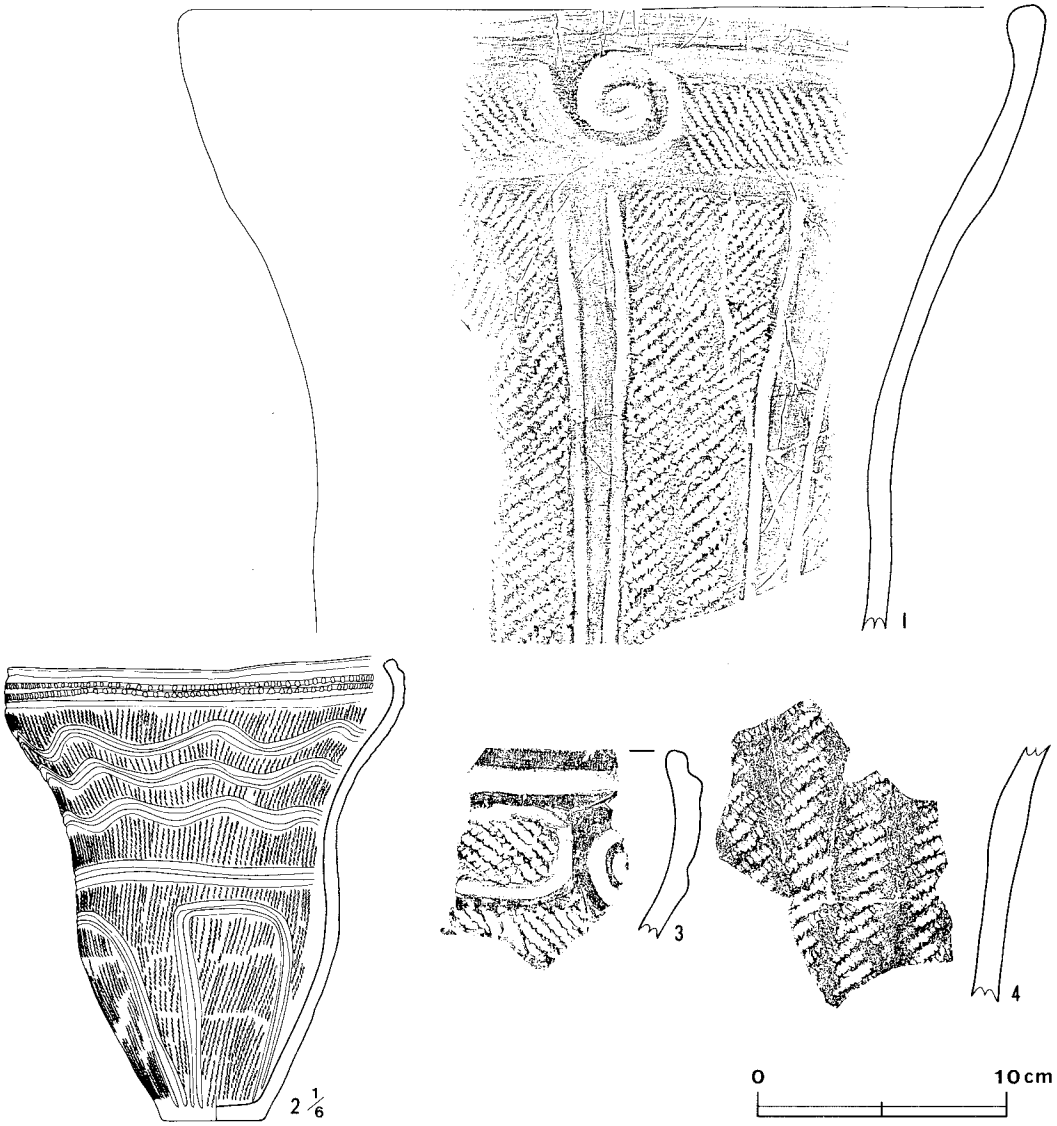
第139図３・４は，第285号土坑から出土した縄文土器片の拓影図である。３は口縁部片で，隆帯と沈線による楕円文で区画され，区画内に単節ＬＲの縄文が斜位に施され，また，渦巻文がわずかに窺える。４は胴部片で，単節ＲＬの縄文が間隔をあけて斜位に施されている。

第291号土坑（第171図）

本跡は，D2d$_7$区に確認され，東側に位置する第278号土坑と接している。

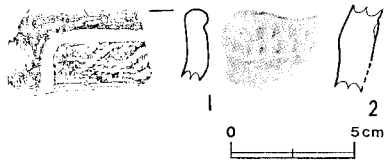
平面形は楕円形を呈し，長径方向はN－55°－Wで，規模は長径１m・短径0.7m・深さ1.1mである。断面形は円筒状を呈している。壁はロームで垂直に立ち上がり，底面は平坦なロームである。

覆土の記録については，本跡が第278号土坑の調査中に検出されたことや，ピット状のため土層の記録ができなかった。



第139図　第285号土坑出土土器実測図・拓影図

遺物は，底面から縄文時代中期の加曽利E式土器片１片，覆土中から同じく３片出土している。なお，覆土下層から縄文の文様や刻み目を有する加曽利E式の未焼成の土器片50片が出土している。



第140図　第291号土坑
出土土器拓影図

出土土器

第140図１・２は，第291号土坑から出土した縄文土器片の拓影図である。１は口縁部片で，沈線と縄文が施され，２は未焼成の土器片で，キザミ目が施されている。

第3表　土坑一覧表

(1)

図版番号 土坑番号	位置	平面形	長径方向	規模 長径×短径×深さ(m)	底面	覆土	出土遺物	形態分類	備考
第141図 1	A4i_0	円形	—	1.2×1.0×0.4	凹凸状	N	阿玉台4片，加曽利E13片	I Bb_1	第122図 1
2	A4e_9	(楕円形)	(N−48°−E)	(1.0×0.4)×0.4	平坦， 硬く締まっている	N	石器1点，貝（ヤマトシジミ）	II Bb_1	
3	A4h_9	円形	—	1.0×0.9×0.4	ほぼ平坦， 硬い	N	加曽利E16片	I Bb_1	
4	A4f_0	円形	—	1.2×1.2×0.6	ほぼ平坦， 硬い	A	黒浜1片，阿玉台3片，加曽利E36片	I Bb_2	
5	E2a_1	不整円形	—	4.0×3.8×1.0	ほぼ平坦， 硬い	A	茅山1片，黒浜23片，阿玉台16片，加曽利E805片，陶器21片	I Bd_3	墓壙
6	E2a_3	円形	—	5.0×5.0×0.9	多少凹凸状， 硬い	N	黒浜13片，阿玉台8片，加曽利378片，土師器4片，陶器10片，石器2点	I Bd_2	墓壙
7	E2b_2	円形	—	2.8×2.8×0.3	平坦， 硬い， ピット3本	N	黒浜5片，加曽利E33片，石器1点	I Cc_1	
第142図 8	D1h_0	不整楕円形	N−51°−E	4.4×2.8×0.7	平坦， 硬く締まる， ピット3本	N	黒浜10片，阿玉台5片，加曽利E96片，石器1点	II Ad_2	
9	C4d_1	楕円形	N−70°−E	1.4×1.1×0.2	ほぼ平坦， 硬い， ピット1本	N	黒浜1片，阿玉台1片，加曽利E1片，石1点	II Bb_1	
10	C3a_5	円形	—	1.2×1.1×0.8	平坦， 硬い，	N	黒浜1片，阿玉台11片，加曽利E16片	I Ab_2	
11	C3h_7	円形	—	2.6×2.6×1.1	平坦， 硬い， ピット2本	N	黒浜11片，阿玉台11片，加曽利E610片，土器片錘3点，石器1点，貝(ヤマトシジミ)	I Ac_3	
12	C3g_0	楕円形	N−38°−W	1.5×1.1×1.15	平坦， 硬い，	N	なし	II Ab_1	
13	D1h_0	(不整円形)	—	(3.1×3.0)×0.2	ほぼ平坦， 硬い，	A	黒浜6片，加曽利E185片。	I Bd_1	
第143図 14	D3b_2	楕円形	N−13°−W	3.2×2.6×0.7	平坦， 硬い， ピット2本	N	黒浜8片，諸磯2片，阿玉台16片，曽利1片，加曽利E548片，土器片錘4点，石器3点	II Bd_2	第124図 2
15	D3a_1	円形	—	2.6×2.6×0.7−0.8	平坦， 硬く締まっている	A N	黒浜4片，阿玉台21片，加曽利E338片，土器片錘1点	I Ac_2	第173図 1
16	C3j_2	円形	—	1.1×1×0.8	ほぼ平坦， 硬く締まっている	A	茅山1片，黒浜3片，前期末1片，阿玉台1片，加曽利E48片	I Ab_2	
17	C3i_1	円形	—	2.3×2.2×1.5	ほぼ平坦， 硬く締まっている	N	黒浜5片，阿玉台63片，勝坂9片，加曽利E21片，土器片錘3点	I Dc_3	フラスコ状土坑
18	D3a_3	円形	—	2.3×2.2×0.6	平坦， 硬い， ピット2本	N	黒浜38片，諸磯1片，前期末1片，阿玉台7片，加曽利E130片，土器片錘2点	I Bc_2	
19	C2i_0	円形	—	2.1×2.1×1.5	平坦， 硬く締まっている	A	黒浜10片，前期末2片，阿玉台128片，加曽利E16片，土器片錘4点	I Dc_3	フラスコ状土坑
20	D3a_1	楕円形	N−58°−W	1.4×1.0×0.2	西から東側に緩傾斜， ピット1本	N	阿玉台3片	II Cb_1	
21	C3h_2	円形	—	2.4×2.1×0.5	平坦， 硬い， ピット1本	A	黒浜3片，阿玉台12片，加曽利E103片，土器片錘1点	I Cc_2	
第144図 22	D3a_5	円形	—	2.0×1.8×0.4	平坦， 硬い， ピット3本	N	黒浜1片，浮島1片，阿玉台6片，大木7a（半完形1個），加曽利E12片	I Bc_1	第173図 2
23	C3h_2	楕円形	N−80°−E	2.0×1.7×0.8	平坦， 硬く締まっている	N	黒浜1片，阿玉台1片，加曽利E1片	II Dc_2	フラスコ状土坑
24	D3c_3	円形	—	1.3×1.1×0.2	ほぼ平坦， 硬い， ピット1本	A	阿玉台11片，加曽利E19片	I Cb_1	
25	C3j_7	(円形)	—	(1.5×1.4)×0.4	平坦， 硬い	N	黒浜1片，阿玉台13片，加曽利15片，土器片錘1点	IV Bb_1	
26	D3d_5	円形	—	0.85×0.8×0.6	平坦， 硬い	A	黒浜5片	I Aa_2	
27	D3b_3	楕円形	N−41°−E	0.85×0.5×1.0	平坦， 硬い	N	阿玉台2片	II Aa_3	
28	D3b_3	楕円形	N−20°−W	0.85×0.6×2.1	平坦， 硬い	N	黒浜2片	II Aa_3	
29	C3j_7	不整楕円形	N−23°−W	2.2×1.4×0.4	凹凸状， 硬い	N	黒浜7片，阿玉台31片，勝坂2片，加曽利E72片，土器片錘1点，石器1点	II Bc_1	
30	C2i_8	円形	—	1.6×1.5×0.4	ほぼ平坦， 硬い	N	黒浜2片，阿玉台8片，加曽利E16片，石器1点，貝（ヤマトシジミ）	I Bb_1	
31	C3i_7	(不整楕円形)	(N−55°−W)	(1.6×1.0)×0.5	東から西側に緩傾斜， ピット1本	A	黒浜2片，阿玉台8片，加曽利E16片，貝（ヤマトシジミ）	II Ab_2	

図版番号 土坑番号	位置	平面形	長径方向	規模 長径×短径×深さ(m)	底面	覆土	出土遺物	形態分類	備考
第145図 32	C2h$_0$	不整円形	—	2.4×2.2×1.0	ほぼ平坦，硬く締まっている	N	黒浜9片，阿玉台完形1個，ほぼ完形2個，阿玉台140片，勝坂1片，加曽利E16片，土器片錘2点，貝（ヤマトシジミ）	IDc$_3$	第128図 1～6 第129図 7～10
33	D3b$_7$	円形	—	0.75×0.7×0.7	ほぼ平坦，硬い	N	なし	IAa$_2$	
34	C2j$_0$	楕円形	N－89°－E	1.2×1.0×0.2	ほぼ平坦，硬い，ピット1本	A	なし	IICb$_1$	
35	D3b$_1$	円形	—	1.0×1.0×0.2	平坦，硬い	N	加曽利E3片	ICb$_1$	
36	C3c$_2$	（楕円形）	（N－39°－E）	（1.3×0.9）×0.8	ほぼ平坦，硬い	A	阿玉台5片，加曽利E4片	IIBb$_2$	
37	C3c$_3$	（不整楕円形）	（N－53°－W）	（2×1.6）×0.4	平坦，硬く締まっている	A	なし	IIBc$_1$	
38	C3c$_3$	楕円形	N－34°－E	1.3×1.0×0.2	ほぼ平坦，硬い	A	なし	IICb$_1$	
39	C3e$_1$	（不整円形）	—	（2.4×2.2）×0.3	ほぼ平坦，硬い	A	黒浜2片，阿玉台7片，加曽利E22片，土器片錘1点	ICc$_1$	
40	C3f$_3$	円形	—	2.4×2.3×0.8	ほぼ平坦，硬い，ピット2本	N	黒浜5片，阿玉台19片，加曽利E111片，手捏ね1個，石器2点，貝（ヤマトシジミ）	IAc$_2$	
第146図 41	D3b$_1$	楕円形	N－78°－W	2.5×2×0.4	ほぼ平坦，硬い，ピット1本	A	黒浜114片，加曽利E125片	IIBc$_1$	
42	C3g$_5$	円形	—	1.3×1.2×0.4	やや凹凸状，硬い	N	阿玉台18片	IBb$_1$	
43	C3g$_4$	不整楕円形	N－86°－W	1.4×1.1×0.4	ほぼ平坦，硬い，ピット1本	N	黒浜2片，阿玉台8片 加曽利E5片	IIBb$_1$	
44	C3h$_4$	不整楕円形	N－54°－E	1.7×0.9×0.8	ほぼ平坦，ピット1本	N	黒浜2片，阿玉台1片 加曽利E12片	IIAb$_2$	
45	C3h$_5$	円形	—	1.3×1.1×0.5	平坦，硬い	N	黒浜1片，阿玉台9片，加曽利E1片	IAb$_2$	
46	C3g$_5$	楕円形	N－23°－W	1×0.7×0.4	丸味をおびる，硬く締まる，ピット1本	N	黒浜3片，阿玉台12片	IIEb$_1$	
47	C3g$_5$	楕円形	N－87°－E	0.8×0.6×0.3	ほぼ平坦，硬い，ピット1本	A	なし	IIBa$_1$	
48	C3d$_2$	（不整楕円形）	（N－38°－E）	（1.4×1.2）×1.6	ほぼ平坦，硬い	N	黒浜1片，阿玉台4片	IIBb$_3$	
49	C3e$_1$	楕円形	N－38°－E	2.8×1.7×0.5	平坦，硬い	N	黒浜3片，阿玉台22片，加曽利E39片，土器片錘1点	IIBc$_2$	
50	D3b$_1$	楕円形	N－77°－E	2×1.5×0.6	平坦，硬い	N	茅山1片，黒浜12片，阿玉台3片，加曽利E37片，曽利1片，	IIAc$_2$	
51	D3b$_6$	楕円形	N－85°－W	1×0.6×0.8	ほぼ平坦，硬い，ピット1本	A	なし	IIAb$_2$	
第147図 52	C3e$_5$	楕円形	N－83°－W	1.5×0.9×0.2	ほぼ平坦，硬い，ピット1本	N	阿玉台4片	IICb$_1$	
53	C3e$_5$	楕円形	N－40°－E	1.7×1.3×0.2	ほぼ平坦，硬い	N	阿玉台4片，加曽利E4片	IICb$_1$	
54	C3e$_5$	円形	—	1×1×0.3	凹凸状，硬い	N	なし	IBb$_1$	
55	C3e$_5$	円形	—	1.4×1.2×0.2	ほぼ平坦，硬い	N	加曽利E1片	ICb$_1$	
56	C3e$_4$	円形	—	0.75×0.7×0.4	平坦，硬い	N	黒浜1片，阿玉台1片	IBa$_1$	
57	C3h$_6$	円形	—	1×0.9×0.15	多少凹凸状，硬い，ピット1本	N	阿玉台4片	ICb$_1$	
58	C3i$_8$	円形	—	2.3×2×0.5	ほぼ平坦，硬い，ピット3本	N	黒浜3片，浮島3片，阿玉台36片，加曽利E42片，土器片錘1点，石器1点	IAc$_2$	
59	C3j$_6$	円形	—	1.5×1.4×0.3	平坦，硬い	A	黒浜2片，浮島6片 阿玉台6片	IBb$_1$	
60	C3g$_5$	円形	—	1.2×1×0.8	鉢状，狭い底面，硬い	NA	黒浜1片，阿玉台2片，加曽利E5片	IAb$_2$	
61	C3g$_6$	（不整楕円形）	（N－37°－W）	（2.6×0.7）×0.4	平坦，硬い，南東端にピット1本	A	黒浜2片，阿玉台1片，加曽利E22片	IIBc$_1$	
62	C3h$_5$	円形	—	0.8×0.7×0.6	丸味をおびた底面，硬い	A	阿玉台5片，加曽利E4片	IEa$_2$	

図版番号 土坑番号	位置	平面形	長径方向	規模 長径×短径×深さ(m)	底面	覆土	出土遺物	形態分類	備考
第147図 63	C3g$_3$	円形	—	1×1×0.4	ほぼ平坦，硬い	A	加曽利E1片	IBb$_1$	
第148図 64	D2a$_0$	円形	—	2.4×2.4×1	ほぼ平坦，硬く締まっている	N	黒浜16片，阿玉台86片，勝坂1片，加曽利E48片，土器片錘1点	IDb$_3$	フラスコ状土坑
65	E1a$_0$	円形	—	2.3×2×0.4	ほぼ平坦，硬い，ピット4本	A	黒浜36片，興津1片，前期末1片，加曽利E127片	IAc$_1$	第173図 3
66	E1a$_9$	円形	—	1.8×1.6×0.4	平坦，硬い，ピット3本	N	黒浜1片，加曽利E14片	IBb$_1$	
67	D1j$_9$	円形	—	2.2×1.9×0.4	ほぼ平坦，硬い，ピット2本	N	黒浜9片，阿玉台3片，加曽利E59片	IBc$_1$	
68	C3d$_5$	楕円形	N−25°−E	1×0.6×0.1	ほぼ平坦，硬い，ピット1本	N	阿玉台5片，加曽利E2片，土器片錘1点	IICb$_1$	
69	D1i$_9$	円形	—	2×2×0.2	ほぼ平坦，硬い，ピット3本	N	茅山1片，黒浜11片，阿玉台2片，加曽利E54片，曽利（半完形）1個，土器片錘1点	ICc$_1$	
70	E1a$_0$	円形	—	2.5×2.4×0.4	南側に傾斜，硬い，ピット4本	NA	茅山4片，黒浜14片，阿玉台5片，加曽利E56片，原石1点，石器1点	IBc$_1$	
71	D2j$_1$	楕円形	N−65°−E	2.4×2×1	平坦，硬い，ピット2本	N	黒浜6片，阿玉台1片，加曽利E137片，土器片錘1点	IIAc$_3$	
72	D3a$_5$	楕円形	N−13°−W	1.6×1.2×0.3	ほぼ平坦，硬い，ピット1本	N	茅山1片，黒浜2片，阿玉台3片，加曽利E2片	IICb$_1$	
第149図 73	D3a$_3$	不整円形	—	3.1×2.7×0.3	ほぼ平坦，硬い，ピット6本	A	黒浜3片，阿玉台5片，加曽利E43片，土器片錘1点	IBd$_1$	
74	D3b$_4$	円形	—	2×1.8×0.3	ほぼ平坦，硬い	N	阿玉台18片，加曽利E6片，土器片錘1点	IBc$_1$	
75	D3b$_4$	楕円形	N−89°−W	2.8×2×0.4	ほぼ平坦，硬い，ピット5本	A	黒浜4片，阿玉台14片，加曽利E66片，土器片錘2点，石器2点	IIBc$_1$	
76	D3c$_3$	円形	—	2.3×2×0.3	平坦，硬い，ピット3本	A	黒浜7片，阿玉台5片，加曽利E96片	IBc$_1$	
77	D3c$_5$	円形	—	0.9×0.9×0.4	ほぼ平坦，硬い	N	阿玉台2片，加曽利E12片	IBa$_1$	
78	E2b$_1$	不整楕円形	N−75°−E	2.2×1.2×0.3	ほぼ平坦，硬い，ピット2本	A	茅山2片，黒浜6片，加曽利E66片，土器片錘1点	IICc$_1$	
79	E1c$_0$	円形	—	0.6×0.6×0.6	平坦，硬い	N	黒浜3片，加曽利E25片，土器片錘1点，石器1点	IEa$_2$	
80	E1a$_8$	不整楕円形	N−34°−E	1.8×1.1×0.4	平坦，硬い，ピット1本	N	茅山1片，黒浜4片，前期末1片，加曽利E11片	IBb$_1$	
81	E1a$_8$	楕円形	N−81°−W	2×1.1×0.2	平坦，硬い，ピット2本	A	なし	IICc$_1$	
82	E2b$_1$	不整楕円形	N−5°−E	2×1.2×0.4	ほぼ平坦，硬い，ピット2本	A	茅山2片，黒浜2片，加曽利E18片，石器1点，鉄片3点	IIAc$_1$	
第150図 83	E2a$_1$	楕円形	N−82°−E	2×1.6×0.3	ほぼ平坦，硬く締まっている，ピット1本	A	茅山2片，黒浜23片，加曽利E34片	IIBc$_1$	
84	D2j$_2$	円形	—	1.5×1.4×0.4	平坦，硬い	N	阿玉台1片	IBb$_1$	
85	E2b$_2$	楕円形	N−0°	2.2×1.8×0.4	平坦，硬い，ピット2本	N	茅山1片，黒浜6片，阿玉台2片，加曽利E68片，土器片錘1点	IIBc$_1$	
86	E2b$_1$	円形	—	2×2×0.5	平坦，硬い，ピット2本	N	茅山1片，黒浜6片，阿玉台2片，加曽利E160片，耳栓1点，石器1点	IAc$_2$	
87	E2c$_2$	円形	—	1.2×1.2×0.2	ほぼ平坦，硬い	N	加曽利E6片，石器1片	ICb$_1$	
88	E2c$_1$	円形	—	1.7×1.7×0.3	平坦，硬い，ピット1本	N	黒浜3片，阿玉台1片，加曽利E11片	ICb$_1$	
89	E2c$_1$	不定形	—	0.9×0.6×0.4	平坦，硬い，ピット1本	A	加曽利E27片	IVBa$_1$	
90	E2d$_1$	楕円形	N−21°−W	1.3×0.8×0.2	平坦，硬い	N	なし	IICb$_1$	
91	E2d$_2$	楕円形	N−74°−W	1×0.8×0.2	ほぼ平坦，硬い	N	なし	IICb$_1$	
92	C3i$_6$	楕円形	N−82°−E	1.5×1.2×0.2	平坦，硬い，ピット2本	N	阿玉台6片，石器1点	IICb$_1$	
93	C3i$_7$	（楕円形）	（N−36°−W）	（1.2×0.9）×0.2	ほぼ平坦，硬い	A	阿玉台3片，加曽利E12片	IICb$_1$	

図版番号 土坑番号	位置	平面形	長径方向	規模 長径×短径×深さ(m)	底面	覆土	出土遺物	形態分類	備考
第150図 94	C3i$_7$	楕円形	N−26°−E	2×1.4×0.5	平坦 硬い ピット2本	N	黒浜1片，阿玉台11片，加曽利E35片	IIAc$_2$	
第151図 95	C3e$_6$	円形	—	0.65×0.6×0.6	ほぼ平坦， 硬い， 段状	N	黒浜2片，阿玉台6片，加曽利E14片	IAa$_2$	
96	E1c$_0$	楕円形	N−12°−W	0.65×0.4×0.5	平坦， 硬い	NA	なし	IIAa$_2$	
97	E2d$_2$	(円形)	—	(2×1.8)×0.3	ほぼ平坦， 硬い， ピット1本	N	黒浜6片，阿玉台2片，加曽利E26片	ICc$_1$	
98	E2c$_2$	(円形)	—	2.4×2.2×0.4	平坦 硬い ピット3本	N	黒浜9片，阿玉台1片，加曽利E68片，石器1点	IBc$_1$	
99	E2c$_2$	(円形)	—	1×1×0.8	ほぼ平坦， 硬い	N	黒浜9片，加曽利E5片	IEb$_2$	
100	E2b$_2$	(円形)	—	2.4×2.3×0.4	平坦， 硬い， ピット3本	N	黒浜7片，阿玉台16片，加曽利E16片，土器片錘1点	IBc$_1$	
101	E2c$_3$	楕円形	N−56°−E	1.2×1×0.2	平坦， 硬い	N	黒浜2片，阿玉台2片，加曽利E1片	IICb$_1$	
102	E2b$_3$	(楕円形)	(N−82°−W)	(3.2×2.8)×0.4	ほぼ平坦， 硬い， ピット4本	A	茅山1片，黒浜45片，諸磯2片，前期末2片，加曽利E264片	IIBd$_1$	
103	E2b$_3$	円形	—	2.2×2.2×0.6	平坦，硬く締まっている， ピット3本	A	茅山5片，黒浜40片，諸磯1片，興津4片，阿玉台10片，加曽利E132片，土器片錘1点	IAc$_2$	
第152図 104	E2c$_4$	円形	—	2.5×2.4×0.8	ほぼ平坦， 硬い， ピット2本	N	黒浜4片，諸磯3片，加曽利E91片	IAc$_2$	第173図 4
105	E2c$_4$	円形	—	1.9×1.8×0.3	ほぼ平坦， 硬い， ピット1本	N	黒浜1片，前期末2片，加曽利E36片，石器1点	IBb$_1$	
106	E2e$_5$	円形	—	2.2×2.1×0.6	平坦， 硬い， ピット3本	N	茅山1片，加曽利E129片，土器片錘1点	IAc$_2$	
107	D1j$_0$	(円形)	—	(2.6×2.4)×0.2	平坦， 硬い， ピット2本	N	黒浜9片，諸磯1片，阿玉台6片，加曽利E134片，土器片錘1点，石器1点	ICc$_1$	
108	C2j$_8$	(円形)	—	(1.6×1.4)×0.3	平坦， 硬い	N	黒浜1片，加曽利E12片	IBb$_1$	
109	C2j$_8$	楕円形	—	1×0.8×0.8	ほぼ平坦， 硬い	N	黒浜1片，阿玉台1片	IAb$_2$	
110	C2i$_8$	円形	—	0.7×0.7×0.9	ほぼ平坦， 硬い	N	加曽利EIII	IAa$_2$	
111	D2h$_7$	円形	—	0.5×0.5×1	ほぼ平坦， 硬い	N	茅山2片，阿玉台3片，加曽利E92片，石器3点，貝（マガキ，ハマグリ，ヤマトシジミ，ハイガイ，アサリ等）	IAa$_3$	
112	D3a$_6$	(楕円形)	(N−69°−W)	(0.8×0.6)×0.4	ほぼ平坦， 硬い	A	加曽利E10片	IIBa$_1$	
113	C2i$_8$	楕円形	N−52°−W	1.6×1×0.1	ほぼ平坦， 硬い， ピット1本	N	加曽利E3片	IICb$_1$	
114	D1j$_8$	楕円形	N−85°−E	1.3×1×0.6	平坦， 硬い	N	黒浜1片，加曽利E1片	IIAb$_2$	
115	D2b$_8$	楕円形	N−30°−E	2.3×2×0.5	平坦， 硬い， ピット3本	N	茅山1片，浮島2片，阿玉台1片，加曽利E28片，土師器1片	IIAc$_2$	
第153図 116	E2c$_5$	楕円形	N−31°−W	1.6×1.4×1.4	平坦 硬い ピット2本	N	黒浜6片，阿玉台1片，加曽利E12片	IIBb$_1$	
117	E2c$_5$	円形	—	0.7×0.65×0.6	平坦， 硬い	N	加曽利E1片	IAa$_2$	
118	D1j$_8$	(不整楕円形)	(N−31°−E)	(2.6×1.7)×0.5	平坦， 硬い， ピット1本	N	阿玉台4片，加曽利E19片	IAc$_2$	
119	E1a$_7$	不定形	—	1.2×0.6×0.2〜0.5	凹凸状， 硬い， ピット1本	A	なし	IVEb$_2$	
120	E2b$_5$	楕円形	N−87°−W	1.4×1.1×0.2	平坦， 硬い， ピット1本	N	茅山5片，黒浜1片，加曽利E6片	IICb$_1$	
121	E2a$_4$	楕円形	N−83°−W	1.8×1.3×0.4	平坦， 硬い	N	黒浜5片，加曽利E11片，石器1点	IIBb$_1$	
122	E2b$_6$	円形	—	2.1×2×0.6	平坦， 硬い， ピット3本	N	茅山1片，黒浜2片，阿玉台13片，加曽利E25片	IAc$_2$	
123	E2a$_5$	円形	—	2.5×2.2×0.4	ほぼ平坦， 硬い， ピット1本	N	黒浜1片，諸磯1片，前期末1片，阿玉台2片，加曽利E13片	IBc$_1$	
124	E2a$_5$	円形	—	1.1×1.0×0.4	平坦， 硬い	N	黒浜2片	IBb$_1$	

図版番号 土坑番号	位置	平面形	長径方向	規模 長径×短径×深さ(m)	底面	覆土	出土遺物	形態分類	備考
第153図 125	E2a$_5$	楕円形	N−77°−W	0.8×0.6×0.9	ほぼ平坦， 硬い	N	加曽利E 1片	IIEa$_2$	
126	E2a$_5$	円形	—	0.6×0.6×0.2	平坦， 硬い	A	なし	I Ca$_1$	
127	E2a$_5$	円形	—	0.7×0.7×0.2	平坦	N	なし	I Ca$_1$	
第154図 128	E2a$_4$	円形	—	0.9×0.9×1.0	ほぼ平坦， 硬い	N	黒浜1片，加曽利E 1片	I Aa$_3$	
129	D2i$_2$	楕円形	N−71°−E	2.8×2.4×0.4	平坦， 硬い， ピット4本	N	茅山1片，黒浜3片，加曽利E25片	IIBc$_1$	
130	C2i$_8$	楕円形	N−56°−E	0.9×0.7×0.2	ほぼ平坦， 硬い	N	黒浜1片，加曽利E14片，曽利1片	IICa$_1$	
131	C3g$_6$	楕円形	N−68°−W	0.8×0.4×0.6	平坦， 硬い	A	阿玉台1片，加曽利E 2片	IIAa$_2$	
132	C3g$_6$	楕円形	N−71°−W	0.7×0.5×0.8	ほぼ平坦， 硬い	A	阿玉台7片	IIAa$_2$	
133	C3g$_6$	楕円形	N−59°−W	0.5×0.4×0.5	ほぼ平坦， 硬い	A	なし	IIAa$_2$	
134	C3f$_6$	円形	—	0.7×0.7×0.7	ほぼ平坦， 硬い	A	なし	I Aa$_2$	
135	C3h$_5$	楕円形	N−62°−E	0.8×0.6×0.6	平坦， 硬い	N	なし	IIAa$_2$	
136	D3b$_1$	不整円形	—	1×0.9×0.2	平坦， 硬い， ピット1本	A	なし	I Cb$_1$	
137	C3d$_1$	(不整円形)	—	(1.4×1.4)×0.4	ほぼ平坦， 硬い	N	黒浜2片，阿玉台16片，加曽利E97片，土器片錘1点	I Bb$_1$	
138	D2c$_9$	楕円形	N−74°−W	3×2.3×0.6	平坦， 硬い， ピット3本	N	黒浜21片，大木1片，阿玉台32片，加曽利E（半定形2個)888片，曽利12片，土器片錘5点，石器2点	IIAd$_2$	第133図 1・2・3
第155図 139	D2i$_9$	円形	—	(2.4×2.4)×0.8	平坦 硬い ピット4本	A	茅山1片，黒浜5片，諸磯1片，前期末2片，阿玉台5片，加曽利E305片，土器片錘6点	IVAc$_2$	
140	D2j$_8$	(不正楕円形)	(N−39°−E)	(1.6×1.1)×0.3	平坦， 硬い	N	黒浜7片，前期末4片，加曽利E10片	I Bb$_1$	
141	D2i$_9$	(楕円形)	(N−49°−W)	(3.2×2.6)×0.6	平坦， 硬い， ピット2本	N	茅山1片，黒浜36片，前期末2片，阿玉台3片，加曽利E（ほぼ完形1個）79片	IIAd$_2$	
142	D3d$_1$	楕円形	N−15°−W	0.8×0.65×0.5	ほぼ平坦， 硬い	N	黒浜24片，大木1片，阿玉台2片，加曽利E249片，土器片錘1点	IIAa$_2$	
143	D3e$_1$	不定形	—	3.8×3.7×0.6	ほぼ平坦， 硬い， ピット3本	N	黒浜5片，諸磯1片，阿玉台4片，加曽利E116片	IVBd$_2$	
144	E2b$_5$	楕円形	N−31°−E	2.6×2.2×0.3	ほぼ平坦， 硬い， ピット5本	A	黒浜7片，阿玉台1片，加曽利E217片	IIBc$_1$	
145	E2c$_3$	円形	—	2.4×2.2×0.4	平坦， 硬い， ピット4本	A	黒浜12片，加曽利E18片	I Bc$_1$	
146	E2c$_3$	円形	—	2.2×2.1×0.3	平坦， 硬い， ピット2本	N	茅山1片，黒浜9片，加曽利E54片	I Bc$_1$	
第156図 147	E2c$_5$	楕円形	N−16°−W	2.6×2.2×0.6	平坦， 硬い， ピット3本	N	黒浜4片，前期末2片，加曽利E135片，土器片錘1点	IIAc$_2$	
148	E2b$_5$	楕円形	N−4°−E	2.0×1.8×0.2	ほぼ平坦， 硬い， ピット1本	N	黒浜8片，諸磯2片，阿玉台3片，加曽利E35片	IICc$_1$	第173図
149	E2c$_5$	楕円形	N−43°−E	3.8×3×0.4	平坦， 硬い， ピット3本	N	茅山9片，黒浜60片，諸磯5片，阿玉台2片，加曽利E519片，曽利2片，中峠1片，土器片錘6点	IIBd$_1$	
150	D1i$_0$	円形	—	3.1×2.8×0.3	平坦， 硬い， ピット7本	A	黒浜1片，阿玉台1片，加曽利E11片	I Bd$_1$	
151	E2c$_3$	楕円形	N−16°−E	1.1×0.8×0.2~0.3	ほぼ平坦， 硬い	N	なし	IICb$_1$	
152	E2d$_2$	円形	—	1.3×1.1×0.8	平坦， 硬い	A	なし	I Ab$_2$	
153	E1a$_8$	(円形)	—	(1.1×1.1)×0.1~0.2	平坦， 硬い， ピット1本	N	加曽利E 1片	I Cb$_1$	
154	E2a$_3$	円形	—	2.3×2×0.3	ほぼ平坦， 硬い，ピット1本	N	茅山1片，黒浜22片，加曽利E20片	I Bc$_1$	
第157図 155	D2j$_3$	円形	—	1.5×1.4×0.5	平坦， 硬い	N	黒浜2片，加曽利E34片	I Ab$_2$	

図版番号 土坑番号	位置	平面形	長径方向	規模 長径×短径×深さ(m)	底面	覆土	出土遺物	形態分類	備考
第157図 156	E2a$_6$	隅丸方形	N−32°−E	2×2×0.2~0.6	ほぼ平坦， 硬い， ピット5本	N	茅山1片，黒浜2片，加曽利E49片，石器1点	ⅢBc$_2$	
157	E2a$_7$	(楕円形)	(N−0°)	(3.6×2.0)×0.3	平坦， 硬い	A	茅山1片，黒浜1片，阿玉台1片，加曽利E63片	ⅡBd$_1$	第174図 6
158	D2h$_2$	円形	—	1.1×1×0.2	平坦， 硬い	N	阿玉台1片，加曽利E1片	ⅠCc$_1$	
159	E2b$_7$	(楕円形)	(N−49°−W)	(3.3×2.2)×0.3	ほぼ平坦， 硬い， ピット3本	N	阿玉台2片，加曽利E19片	ⅡBd$_1$	
160	E2b$_7$	(楕円形)	(N−59°−W)	(2.8×2.0)×0.2	ほぼ平坦， 浅い掘り込みあり	N	黒浜1片，阿玉台1片，加曽利E17片	ⅡCc$_1$	
161	D2e$_0$	楕円形	N−39°−W	1.7×1.4×0.4	ほぼ平坦， 硬い， ピット1本	A	黒浜7片，阿玉台1片，加曽利E31片	ⅡBb$_1$	
162	D2i$_4$	円形	—	1×1×0.5	ほぼ平坦， 硬い	A	加曽利E1片	ⅠAb$_2$	
163	D2i$_4$	楕円形	N−42°−W	2.8×2.1×0.2~0.4	ほぼ平坦， 硬い	N	加曽利E7片	ⅡBc$_1$	
第158図 164	D2g$_4$	円形	—	1.3×1.3×0.15	ほぼ平坦， 硬い	A	黒浜2片，阿玉台1片，浮子1点，石器1点	ⅠCb$_1$	
165	D2b$_8$	円形	—	2.4×2.3×0.5	平坦， 硬い， ピット2本	N	黒浜7片，阿玉台3片，加曽利E44片	ⅠAc$_2$	
166	E2a$_4$	円形	—	1.2×1.2×0.3	皿状， 硬い	A	黒浜2片，加曽利E1片	ⅠBb$_1$	
167	D2j$_6$	円形	—	0.7×0.6×0.4	ほぼ平坦， 硬い	N	加曽利E3片	ⅠBa$_1$	
168	D2j$_6$	楕円形	N−39°−W	0.9×0.5×0.3	平坦， 硬い	N	なし	ⅡBa$_1$	
169	D2j$_6$	楕円形	N−36°−W	1.3×1.0×0.3	平坦， 硬い， ピット1本	A	黒浜1片，阿玉台1片	ⅡBb$_1$	
170	D2j$_6$	楕円形	N−19°−W	1.6×1.4×0.2	硬い， 平坦	N	加曽利E3片	ⅡCb$_1$	
171	D2j$_6$	円形	—	2.3×2.1×0.3	ほぼ平坦， 硬い， ピット2本	N	加曽利E8片，石器1点	ⅠBc$_1$	
172	D2j$_6$	円形	—	1.8×1.8×0.3	平坦， 硬い， ピット1本	N	茅山1片，加曽利E19片	ⅠBb$_1$	
173	D2j$_6$	円形	—	1.9×1.8×0.6	平坦， 硬い	N	茅山1片，黒浜6片，加曽利E9片	ⅠDb$_2$	フラスコ状土坑
174	D2h$_3$	円形	—	1.0×1.0×0.3	ほぼ平坦， 硬い	N	土器片錘1点	ⅠBb$_1$	
175	E2b$_7$	(不整楕円形)	(N−0°)	(2.2×1.8)×0.3	平坦， 硬い	A	黒浜1片，前期末1片，加曽利E50片，土器片錘1点	ⅡBc$_1$	
第159図 176	E2a$_7$	楕円形	N−75°−W	2.8×1.8×0.5	ほぼ平坦， 硬い	N	茅山1片，黒浜15片，加曽利E100片	ⅡAc$_2$	
177	D2i$_6$	楕円形	N−31°−E	2.4×1.9×0.4	ほぼ平坦， 硬い， ピット2本	N	茅山1片，黒浜2片，阿玉台21片，勝坂1片，加曽利E14片，土器片錘1点，石器1点	ⅡBc$_1$	
178	E2b$_6$	(円形)	—	(1.2×1.2)×0.2	ほぼ平坦， 硬い	N	黒浜2片，加曽利E6片	ⅠCb$_1$	
179	D2i$_8$	円形	—	0.7×0.7×0.6	平坦， 硬く締まっている	N	茅山1片	ⅠAa$_2$	
180	D2h$_8$	円形	—	0.7×0.7×0.2	平坦， 硬い	N	なし	ⅠCa$_1$	
181	D2g$_9$	円形	—	0.8×0.8×0.5	平坦， 硬い	N	黒浜1片，加曽利E4片	ⅠAa$_2$	
182	D2j$_0$	楕円形	N−62°−W	2.1×1.5×0.2	平坦， 硬い	N	なし	ⅡCc$_1$	
183	D2f$_0$	隅丸方形	N−50°−W	2.4×0.9×0.5	ほぼ平坦， 硬い， ピット1本	N	加曽利E46片	ⅢAc$_2$	
184	D1j$_9$	楕円形	N−17°−W	1.2×0.9×0.4	平坦， 硬い	A	なし	ⅡBb$_1$	
185	E2b$_1$	不定形	—	2.4×1.6×0.4	ほぼ平坦， 硬い， ピット1本	N	加曽利E2片，曽利1片	ⅣBc$_1$	
186	E1b$_8$	隅丸方形	N−63°−W	0.8×0.6×0.15	ほぼ平坦， 硬い	N	なし	ⅢCa$_1$	

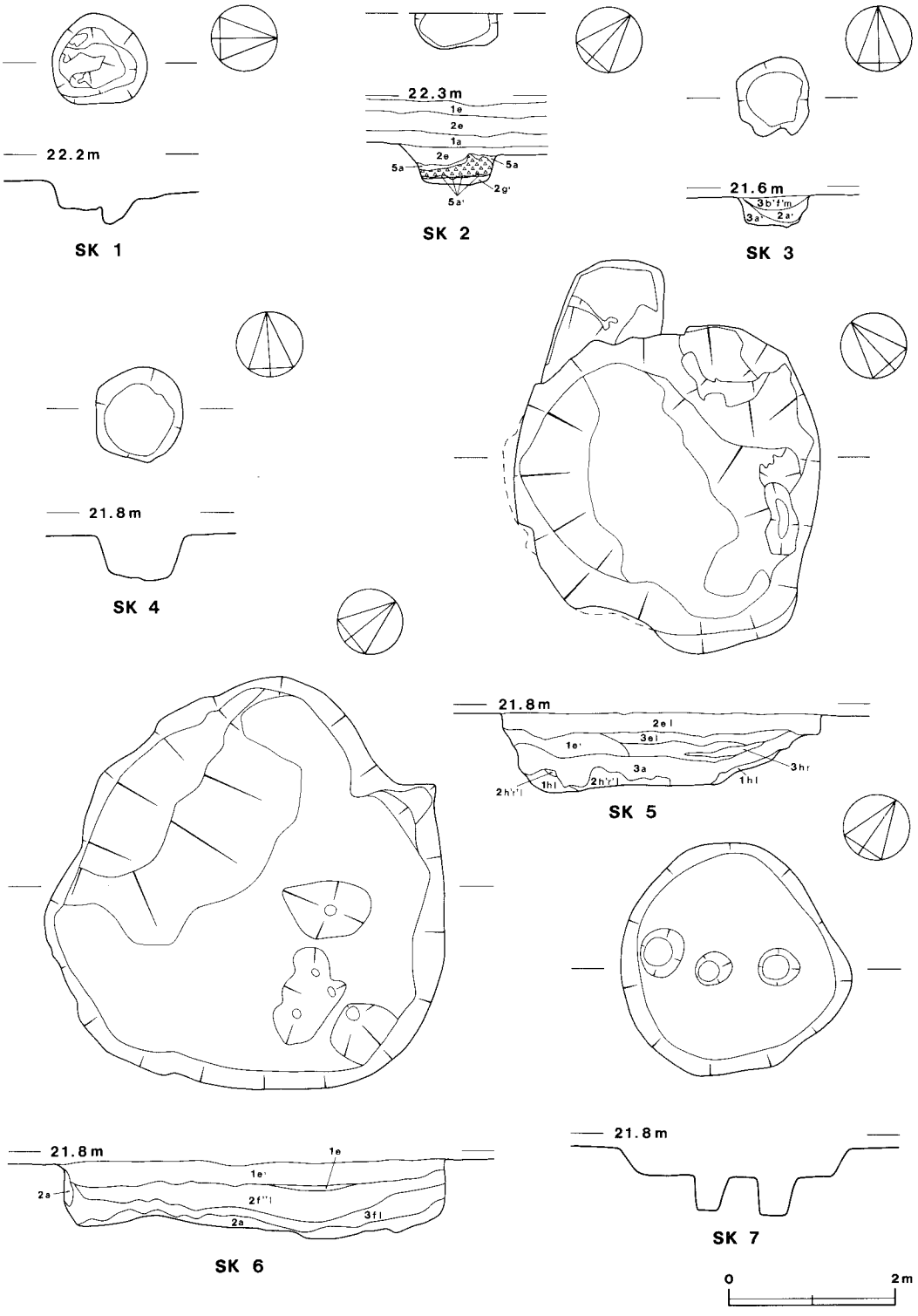
図版番号 土坑番号	位置	平面形	長径方向	規模 長径×短径×深さ(m)	底面	覆土	出土遺物	形態分類	備考
第159図 187	E2c$_6$	(楕円形)	(N−33°−E)	(2.5×1.4)×0.4	ほぼ平坦, 硬い	N	黒浜8片, 加曽利E(半完形1個)54片	IIBc$_1$	第174図 7
第160図 188	E2c$_6$	(楕円形)	(N−32°−E)	(1.8×1.3)×0.4	ほぼ平坦, 硬い, ピット1本	N	浮島1片, 加曽利E29片	IIBb$_1$	
189	D2h$_3$	円形	—	0.9×0.9×0.2	多少凹凸状 硬い	N	なし	ICa$_1$	
190	D2g$_3$	円形	—	1.3×1.2×0.3	ほぼ平坦, 硬い	N	加曽利E4片	IBb$_1$	
191	D2g$_1$	円形	—	1.1×1.0×0.6	平坦, 硬く締まっている	N	加曽利E35片	IAb$_2$	第174図 8
192	D1g$_0$	円形	—	1.5×1.4×0.2	平坦, 硬い, ピット1本	A	黒浜3片, 阿玉台3片, 加曽利E5片	ICb$_1$	
193	D2e$_0$	円形	—	0.5×0.5×0.6	平坦, 硬い	N	茅山2片, 黒浜3片, 加曽利E17片	IAa$_2$	
194	D2f$_7$	円形	—	2.6×2.4×0.6	平坦, 硬い, ピット1本	N	茅山4片, 黒浜9片, 阿玉台2片, 加曽利E273片, 曽利7片	IAc$_2$	
195	D2g$_1$	不整楕円形	N−9°−E	3.2×2.1×0.2	中央に向かって傾斜, 硬い ピット4本	A	阿玉台5片, 加曽利E33片	IVEd$_1$	
196	D1g$_0$	(不整方形)	(N−37°−E)	(3.0×3.0)×0.1~0.8	段状である, 硬い, ピット2本	A	茅山1片, 黒浜2片, 加曽利E124片, 石器1点	IIIEd$_2$	第174図 9
第161図 197	D2g$_5$	円形	—	2.7×2.5×0.3	平坦 硬い ピット1本	A	茅山1片, 黒浜4片, 阿玉台2片	IIBc$_1$	
198	D3g$_1$	楕円形	N−63°−W	3.2×2.4×0.6	平坦, 硬い, ピット1本	A	茅山1片, 黒浜4片, 阿玉台1片, 加曽利E114片, 土器片錘1点, 石器1点	IIAd$_2$	
199	D2f$_9$	楕円形	N−73°−W	3.2×2.6×0.4	平坦, 硬い, ピット4本	N	黒浜9片, 浮島1片, 阿玉台1片, 加曽利E29片	IIBd$_1$	
200	D2c$_8$	円形	—	2.2×2.2×0.8	平坦, 硬く締まっている, ピット1本	N	黒浜21片, 阿玉台23片, 勝坂1片, 加曽利E102片, 土器片錘1点	IAc$_2$	
201	D2e$_0$	不定形	—	3.3×12×0.4~0.7	ほぼ平坦, 硬い, ピット3本	N	黒浜9片, 阿玉台2片, 加曽利E89片	IVAd$_2$	
202	D2e$_0$	楕円形	N−45°−W	0.9×0.5×0.5	ほぼ平坦, 硬い, ピット1本	A	阿玉台3片, 加曽利E1片	IIAa$_2$	
203	D2e$_0$	円形	—	0.8×0.7×0.7	ほぼ平坦, 硬い, ピット1本	N	なし	IAa$_2$	
第162図 204	D2d$_0$	楕円形	N−57°−W	0.8×0.6×0.3	ほぼ平坦, 硬い	N	なし	IIBa$_1$	
205	D2d$_0$	円形	—	1.4×1.3×0.3	平坦, 硬い	A	黒浜2片 加曽利E18片	IBb$_1$	
206	D2b$_9$	隅丸方形	N−63°−W	2.8×2.5×0.5	平坦, 硬い, ピット4本	A	阿玉台7片, 加曽利E(半完形1個)160片, 土器片錘1点, 石器1点	IIIAc$_2$	第174図 10
207	D2g$_6$	円形	—	2.1×2×0.8	平坦, 硬く締まっている, ピット3本	A	黒浜11片, 中峠2片, 加曽利E70片, 曽利1片, 石器2点	IAc$_2$	
208	D2g$_6$	円形	—	2.1×2.1×0.6	北東から南西に緩傾斜, 硬い, ピット3本	A	黒浜6片, 阿玉台1片, 加曽利E114片	IAc$_2$	
209	E2b$_5$	(隅丸方形)	(N−34°−W)	(0.9×0.8)×0.1	平坦, 硬い	—	なし	IIICa$_1$	
210	E2b$_5$	(楕円形)	(N−80°−W)	(1.0×0.8)×0.3	平坦, 硬い, ピット1本	N	なし	IIBc$_1$	
211	E2b$_4$	円形	—	0.5×0.5×1.2	やや丸味, 硬い	N	なし	IAa$_3$	
212	D2c$_9$	円形	—	2.2×2.2×1.4	ほぼ平坦, 硬く締まっている	N	黒浜1片, 大木1片, 阿玉台66片, 勝坂2片, 加曽利E31片, 土器片錘3点, 軽石1点, 石器1点	IDc$_3$	フラスコ状土坑
第163図 213	E2b$_6$	(不整楕円形)	(N−43°−W)	(1.0×0.8)×0.3	ほぼ平坦, 硬い	A	浮島1片, 阿玉台2片, 加曽利E10片, 貝(ヤマトシジミ)	IIBb$_1$	
214	E2a$_6$	(楕円形)	(N−33°−W)	(2.8×2.1)×0.2~0.4	平坦, 硬い	N	加曽利E6片	IIBc$_1$	
215	E2d$_5$	楕円形	N−66°−W	0.8×0.5×0.2	平坦, 硬い	A	なし	IICa$_1$	
216	D2c$_0$	円形	—	0.9×0.8×0.4	ほぼ平坦, 硬い, ピット1本	A	加曽利E3片	IEa$_1$	
217	D3d$_1$	楕円形	N−68°−W	1.3×0.9×0.4	ほぼ平坦, 硬い	N	加曽利E3片	IIBb$_1$	

図版番号 土坑番号	位置	平面形	長径方向	規模 長径×短径×深さ(m)	底面	覆土	出土遺物	形態分類	備考
第163図 218	D2d$_9$	楕円形	N−50°−E	2.2×1.8×0.4	平坦， 硬い， ピット1本	N	黒浜1片，前期末3片，勝坂（半完形1個），中峠1片，加曽利E50片，土器片錘，石器2点	IIBc$_1$	
219	D2d$_9$	楕円形	N−54°−W	1.5×1.1×0.4	平坦， 硬い	A	加曽利E4片	IIBb$_1$	
220	D2g$_5$	楕円形	N−0°	2.8×2.1×0.2	平坦， 硬い， ピット1本	A	茅山1片，黒浜2片，浮島1片，加曽利E15片	IICc$_1$	炉穴
221	D2g$_6$	円形	—	2.2×2.2×0.4	平坦，硬く締まっている， ピット3本	A	茅山2片，黒浜10片，加曽利E24片	IBc$_1$	
222	D2e$_9$	円形	—	2.3×2.3×0.7	平坦，硬く締まっている， ピット1本	A	黒浜2片，阿玉台1片，加曽利E（半完形1個）241片，曽利1片，耳栓1点，石器2点	IAc$_2$	第174図 11
223	D2a$_9$	隅丸長方形	N−45°−W	2.1×1.3×0.4	ほぼ平坦， 硬い	N	茅山1片， 加曽利E10片	IIIBc$_1$	
224	D2a$_9$	不定形	—	2.2×1.4×0.8	平坦， 硬い	N	前期末1片，阿玉台1片， 加曽利E29片	IVAc$_2$	
第164図 225	D2e$_8$	楕円形	N−79°−W	2.8×2.1×0.3	平坦， 硬い， ピット2本	N	黒浜6片，阿玉台1片，加曽利E7片	IIBc$_1$	
226	D2d$_8$	円形	—	2.3×2.2×0.7	平坦，硬く締まっている， ピット3本	N	黒浜8片，加曽利E242片，曽利5片，土器片錘1点	IAc$_2$	
227	D2f$_6$	円形	—	1.1×1.1×0.3	ほぼ平坦， 硬い	N	人骨，古銭（寛永通宝），キセル	IBb$_1$	墓壙
228	D2i$_9$	（楕円形）	（N−17°−W）	（2.2×0.8）×0.6	平坦， 硬い， ピット1本	N	なし	IIAb$_2$	
229	D2h$_8$	円形	—	1.0×1×0.2	ほぼ平坦， 硬い， ピット1本	N	加曽利E1片	ICb$_1$	
230	D2h$_8$	円形	—	0.9×0.9×0.3	ほぼ平坦， 硬い	N	阿玉台2片， 加曽利E7片	IBa$_1$	
231	D2h$_7$	不整楕円形	N−68°−W	2.8×2.3×0.4	平坦， 硬い， ピット1本	A	茅山1片，黒浜4片，加曽利E25片	IIBc$_1$	
232	D2g$_8$	円形	—	2.4×2.2×0.7	平坦，硬く締まっている， ピット2本	A	茅山1片，黒浜8片，諸磯1片，勝坂1片，加曽利E287片，耳栓1点，土器片錘1点	IAc$_2$	
233	E2b$_7$	（楕円形）	（N−87°−W）	（2.4×1.6）×0.4	平坦， 硬い	A	なし	IVBc$_1$	
234	D2g$_7$	楕円形	N−51°−W	1.8×1.2×0.4	ほぼ平坦， 硬い	N	加曽利E7片	IIBb$_1$	
第165図 235	D2h$_8$	不整円形	—	0.8×0.7×0.2	中央に向って緩傾斜， 硬い	N	茅山20片	ICa$_1$	炉穴
236	D2g$_8$	楕円形	N−88°−W	2.3×1.6×0.2	平坦， 硬い， ピット1本	N	茅山1片，加曽利E4片	IICc$_1$	炉穴
237	D2g$_8$	楕円形	N−45°−E	1.0×0.8×0.2	平坦， 硬く焼けている	N	茅山（半完形1個）3片	IICb$_1$	第176図 1　炉穴
238	D2g$_9$	円形	—	0.8×0.8×0.2	なべ状， 硬く焼けている	N	なし	ICa$_1$	炉穴
239	D2i$_7$	不整楕円形	N−5°−W	4.1×2.3×0.6	ほぼ平坦， 硬い， ピット5本	A	茅山4片，黒浜51片，興津1片，加曽利E177片，石器2点	IIAd$_2$	
240	C3i$_6$	円形	—	2.5×2.5×0.7	平坦，硬く締まっている， ピット2本	—	茅山2片，黒浜37片，阿玉台93片，勝坂1片，加曽利E551片，土器片錘3点	IAc$_2$	
241	D2f$_7$	楕円形	N−76°−W	2.8×2.3×0.6	平坦， 硬い， ピット2本	N	黒浜5片，阿玉台6片，加曽利E（完形1個）111片	IIAc$_2$	
242	D2e$_7$	楕円形	N−27°−W	2.5×2.2×0.5	平坦， 硬い， ピット2本	A	茅山3片，阿玉台1片，加曽利E89片，曽利1片，土器片錘1点	IIAc$_2$	
第166図 243	D2f$_6$	円形	—	2.4×2.2×0.5	平坦， 硬い， ピット4本	N	黒浜10片，阿玉台4片， 加曽利E97片	IAc$_2$	
244	D2f$_5$	不整楕円形	N−90°−W	1.4×0.7×0.4	平坦， 硬い	N	黒浜1片，阿玉台9片， 加曽利E13片	IIBb$_1$	
245	D2f$_5$	楕円形	N−89°−W	4×3.1×0.3	平坦， 硬い， ピット3本	N	黒浜8片，阿玉台8片，加曽利E（ほぼ完形1個）19片	IICd$_1$	
246	D2e$_6$	楕円形	N−82°−W	3×2.4×0.4	ほぼ平坦， 硬い， ピット4本	N	茅山1片，黒浜15片，浮島1片，加曽利E（完形1個）110片，土器片錘1点	IIBd$_1$	第137図 1
247	D2b$_4$	（不整楕円形）	（N−59°−W）	（2.7×2.2）×0.4	平坦， 硬い， ピット3本	N	黒浜2片，阿玉台1片，加曽利E93片，土器片錘1点	IIBc$_1$	
248	D2d$_6$	楕円形	N−0°	2.5×2.2×0.5	南側に傾斜， 硬い ピット1本	A	茅山1片，阿玉台5片， 加曽利E77片	IIAc$_2$	

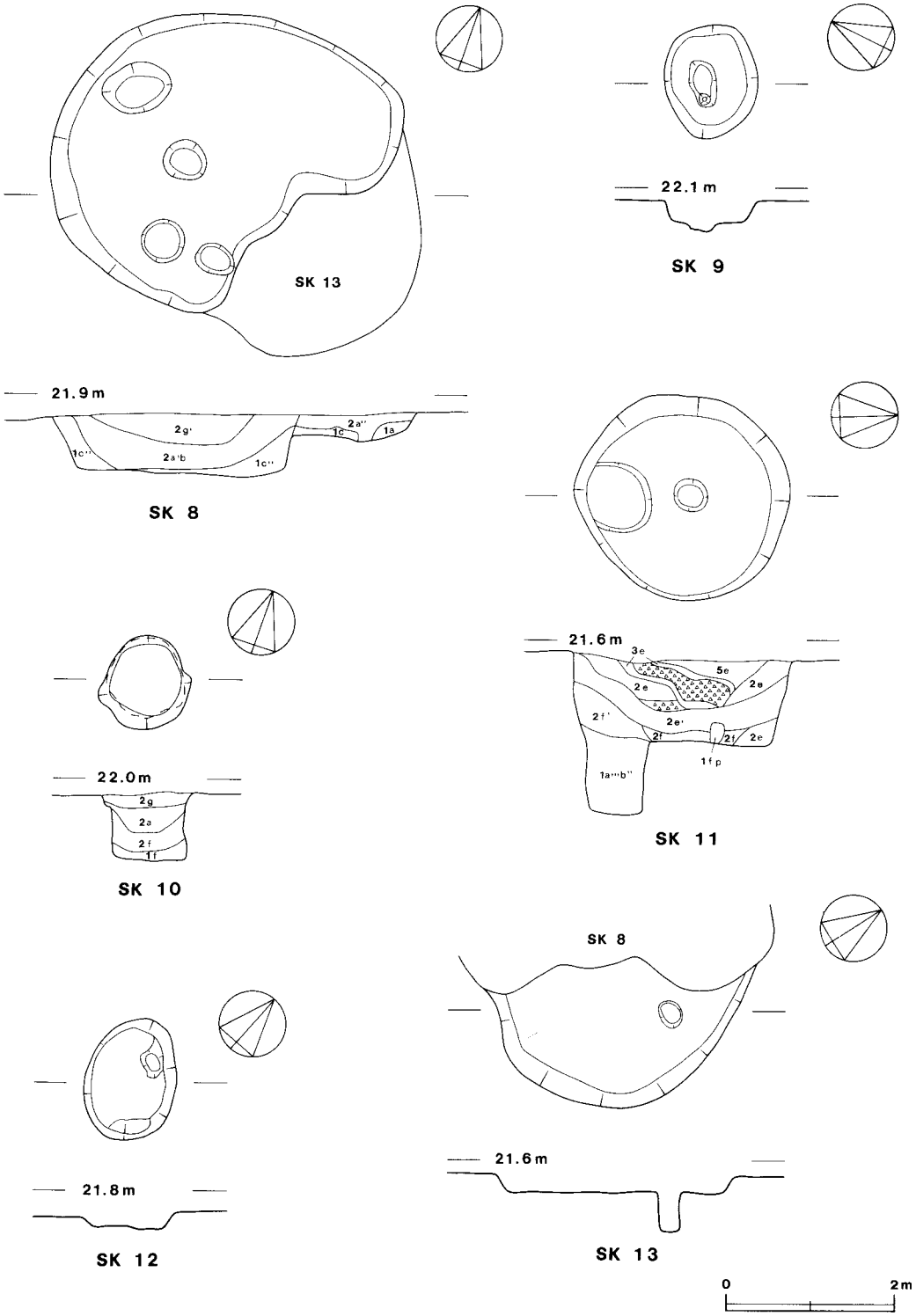
図版番号 土坑番号	位置	平面形	長径方向	規模 長径×短径×深さ(m)	底面	覆土	出土遺物	形態分類	備考
第166図 249	D2d$_5$	楕円形	N－28°－W	2.2×1.7×0.5	平坦， 硬い， ピット1本	N	阿玉台1片，加曽利E20片	IIAc$_2$	
第167図 250	D2c$_5$	円形	—	2.3×2.1×0.6	ほぼ平坦， 硬い， ピット4本	A	黒浜6片，阿玉台6片，加曽利E225片，曽利4片	IIAc$_2$	第175図 12
251	D2g$_6$	楕円形	N－0°	2.1×1×0.2～0.3	ほぼ平坦，硬い，南端は硬く焼けている	N	なし	IIBc$_1$	炉穴
252	D2e$_4$	不整円形	—	2.4×2.2×0.4	東側に緩傾斜，硬い ピット2本	A	加曽利E11片	IBc$_1$	
253	D2e$_4$	円形	—	1.2×1×0.3	平坦， 硬い	N	加曽利E(口縁部1個)2片	IBb$_1$	第175図 13
254	D2d$_3$	(楕円形)	(N－40°－E)	(2.8×1.4)×0.4	ほぼ平坦， 硬い	A	加曽利E3片	IIBc$_1$	
255	D2c$_3$	(円形)	—	(2×2)×0.4	ほぼ平坦， 硬い， ピット1本	N	黒浜2片，阿玉台1片， 加曽利E76片	IBc$_1$	
256	D2e$_4$	楕円形	N－23°－W	2.5×2.1×0.7	平坦， 硬い， ピット1本	A	黒浜1片， 加曽利E5片	IIAc$_2$	第175図 14
257	D2d$_4$	不整楕円形	N－8°－W	4×2.2×0.5	平坦， 硬い， ピット2本	A	阿玉台13片，加曽利E(ほぼ完形1個)29片，土器片錘3点，石器1点	IIAd$_2$	第175図 15
第168図 258	D2d$_8$	不整楕円形	N－18°－W	2.7×2×0.4	平坦， 硬い， ピット2本	A	黒浜3片， 加曽利E62片， 土器片錘1点	IIBc$_1$	
259	D2d$_6$	円形	—	0.5×0.5×0.5	平坦， 硬い	N	阿玉台1片， 加曽利E9片， 縄取(半完形)1個	IAa$_2$	
260	D2b$_6$	隅丸方形	N－67°－W	2.6×2.3×0.7	平坦， 硬い， ピット1本	A	黒浜1片， 加曽利E126片	IIIAc$_2$	
261	D2b$_6$	楕円形	N－33°－E	2.8×2.3×0.6	平坦， 硬い， ピット2本	A	黒浜4片，阿玉台5片， 加曽利E272片， 土器片錘2点	IIAc$_2$	
262	D2b$_9$	楕円形	N－0°	2.5×2.2×0.9	平坦，硬く締まっている ピット1本	N	黒浜1片， 加曽利E167片， 土器片錘1点	IIAc$_2$	
263	D2d$_6$	楕円形	N－37°－E	2.6×2.2×0.4	ほぼ平坦， 硬い， ピット3本	N	黒浜5片，阿玉台2片， 加曽利E44片	IIBc$_1$	
264	D2d$_6$	円形	—	1.2×1.2×0.5	ピットに向って緩傾斜 ピット1本	A	黒浜1片，加曽利E6片	IAb$_2$	
第169図 265	D2e$_5$	楕円形	N－71°－E	3×2.5×0.4	ほぼ平坦， 硬い， ピット1本	N	黒浜4片，阿玉台(半完形1個)7片，加曽利E8片， 土器片錘1点	IIBd$_1$	第175図 16
266	D2c$_6$	円形	—	2.3×2.3×0.6	ほぼ平坦， 硬い， ピット1本	N	黒浜4片，阿玉台8片， 加曽利E190片， 土器片錘2点	IAc$_2$	
267	D2f$_8$	不整円形	—	0.4×0.4×0.9	やや丸味， 硬い	—	黒浜1片， 加曽利E1片	IAa$_2$	
268	D2e$_8$	楕円形	N－60°－E	0.6×0.5×0.9	ほぼ平坦， 硬い	—	黒浜2片， 加曽利E4片	IIAa$_2$	
269	D2h$_7$	円形	—	1.2×1.2×0.4	平坦， 硬い	—	なし	IBb$_1$	
270	C2j$_7$	(不整楕円形)	(N－43°－E)	(2.2×1.6)×0.8	ほぼ平坦， 硬い， ピット1本	A	阿玉台1片，加曽利E103片， 土器片錘1点，石器1点	IIAc$_2$	
271	D2c$_4$	楕円形	N－0°	2.1×1.6×0.3	ほぼ平坦， 硬い， ピット2本	N	黒浜3片，阿玉台2片， 加曽利E16片	IIBc$_1$	
272	E2a$_8$	(楕円形)	(N－44°－W)	(0.6×0.4)×0.4	平坦， 硬い	—	加曽利E7片	IIBa$_1$	
273	E2a$_8$	円形	—	0.6×0.6×0.4	ほぼ平坦， 硬い	—	なし	IBa$_1$	
274	E2a$_8$	楕円形	N－62°－W	0.8×0.6×0.4	ほぼ平坦， 硬い	—	黒浜6片， 加曽利E15片	IIBa$_1$	
275	D2j$_8$	不整楕円形	N－39°－E	0.4×0.3×0.3	ほぼ平坦， 硬い	—	なし	IIBa$_1$	
第170図 276	D2c$_5$	楕円形	N－59°－E	1.6×1.2×0.5	平坦， 硬い	NA	阿玉台5片， 加曽利E10片	IIAb$_2$	
277	D2d$_8$	楕円形	N－15°－E	1.8×1.5×0.4	平坦， 硬い	—	なし	IIBb$_1$	
278	D2d$_7$	不整楕円形	N－88°－W	3.3×2.3×0.7	西から東に緩傾斜，硬い ピット5本	N	黒浜11片，阿玉台9片，加曽利E53片，土器片錘1点，石器1点	IIAd$_2$	
279	D2d$_5$	円形	—	2.2×2.2×1.2	緩傾斜，中央が低い， 硬い	N	黒浜3片， 阿玉台145片， 土器片錘1点	IIDc$_3$	フラスコ状土坑

図版番号 土坑番号	位置	平面形	長径方向	規模 長径×短径×深さ(m)	底面	覆土	出土遺物	形態分類	備考
第170図 280	D2e$_6$	(円形)	—	(2.3×2.3)×0.9	ほぼ平坦, 硬い, ピット3本	A	黒浜3片, 阿玉台33片, 勝坂1片, 加曽利E22片, 土器片錘3点	IDc$_2$	フラスコ状土坑
281	D2a$_6$	円形	—	0.9×0.9×0.3	平坦, 硬い	N	黒浜5片, 加曽利E26片,	IBa$_1$	
282	D2b$_5$	楕円形	N−0°	1.7×1.2×0.5	平坦, 硬い, ピット2本	N	阿玉台1片, 加曽利E20片,	IIAb$_2$	
283	D2c$_6$	不整楕円形	N−34°−W	2.2×1.6×0.5	平坦, 硬い, ピット1本	A	黒浜1片, 阿玉台1片, 加曽利E12片	IIAc$_2$	
第171図 284	D2b$_7$	円形	—	2.1×2×0.8	平坦, 硬い, ピット1本	N	黒浜17片, 阿玉台15片, 加曽利E(半完形2個)356片, 土器片錘2点	IAc$_2$	第138図 1・2
285	D2c$_7$	楕円形	N−74°−W	2.3×1.8×0.8	平坦, 硬い, ピット2本	N	黒浜1片, 加曽利E(完形1個)27片	IIAc$_2$	第139図 1・2
286	D2a$_6$	円形	—	2.4×2.3×0.8	平坦, 硬い, ピット5本	N	黒浜3片, 阿玉台3片, 加曽利E158片, 土器片錘1点	IAc$_2$	第175図 17
287	C2j$_7$	不整楕円形	N−18°−E	1.5×0.9×0.2	ほぼ平坦, 硬い	N	黒浜1片, 加曽利E(半完形1個)22片	IICb$_1$	第175図 18
288	C2j$_8$	楕円形	N−41°−E	1×0.8×0.3	ほぼ平坦, 硬い	N	なし	IIBb$_1$	
289	D2b$_8$	楕円形	N−53°−E	1.7×1.3×0.3	平坦, 硬い, ピット1本	A	黒浜1片, 加曽利E4片	IIBb$_1$	
290	D2b$_6$	(楕円形)	(N−85°−W)	(1.8×1.3)×0.5	平坦, 硬い, ピット2本	A	なし	IIAb$_2$	
291	D2d$_7$	楕円形	N−55°−W	1×0.7×1.1	平坦, 硬い	N	加曽利E4片, 加曽利Eの未焼成土器50片	IIAb$_3$	
292	D3a$_1$	楕円形	N−32°−W	0.8×0.6×0.4	平坦, 硬い	A	なし	IIBa$_1$	
293	D2c$_7$	円形	—	1.9×1.9×0.6	平坦, 硬い, ピット1本	N	茅山1片, 加曽利E33片	IAb$_2$	
第172図 294	D3a$_1$	円形	—	0.5×0.5×0.8	ほぼ平坦, 硬い	N	黒浜3片, 阿玉台4片, 加曽利E12片, 曽利1片	IAa$_2$	
295	D3a$_1$	円形	—	0.5×0.5×0.9	平坦, 硬い	N	曽浜2片, 加曽利E12片	IAa$_2$	
296	D2c$_8$	楕円形	N−50°−W	1.5×1.2×0.4	ほぼ平坦, 硬い, ピット1本	N	加曽利E16片	IIBb$_1$	
297	D2c$_8$	楕円形	N−46°−E	1.9×1.6×0.4	北から東側に緩傾斜, ピット4本	NA	阿玉台1片, 加曽利E55片, 石器1点	IIBb$_1$	
298	D2a$_7$	不整楕円形	N−77°−W	1.9×1.1×0.4	西から東側に傾斜, 硬い, ピット1本	A	なし	IIBb$_1$	
299	D2a$_7$	不整円形	—	2.0×2×0.3	ほぼ平坦, 硬い, ピット2本	N	黒浜7片, 加曽利E36片, 原石1点, 石器1点	IBc$_1$	
300	D2b$_7$	円形	—	1.8×1.7×0.5	平坦, 硬い, ピット2本	N	加曽利E14片	IAb$_2$	
301	D3b$_4$	楕円形	N−90°−E	0.9×0.5×0.6	ほぼ平坦, 硬い	A	なし	IIAa$_2$	
302	D3b$_4$	円形	—	0.8×0.7×0.6	ほぼ平坦, 硬い	A	なし	IAa$_2$	

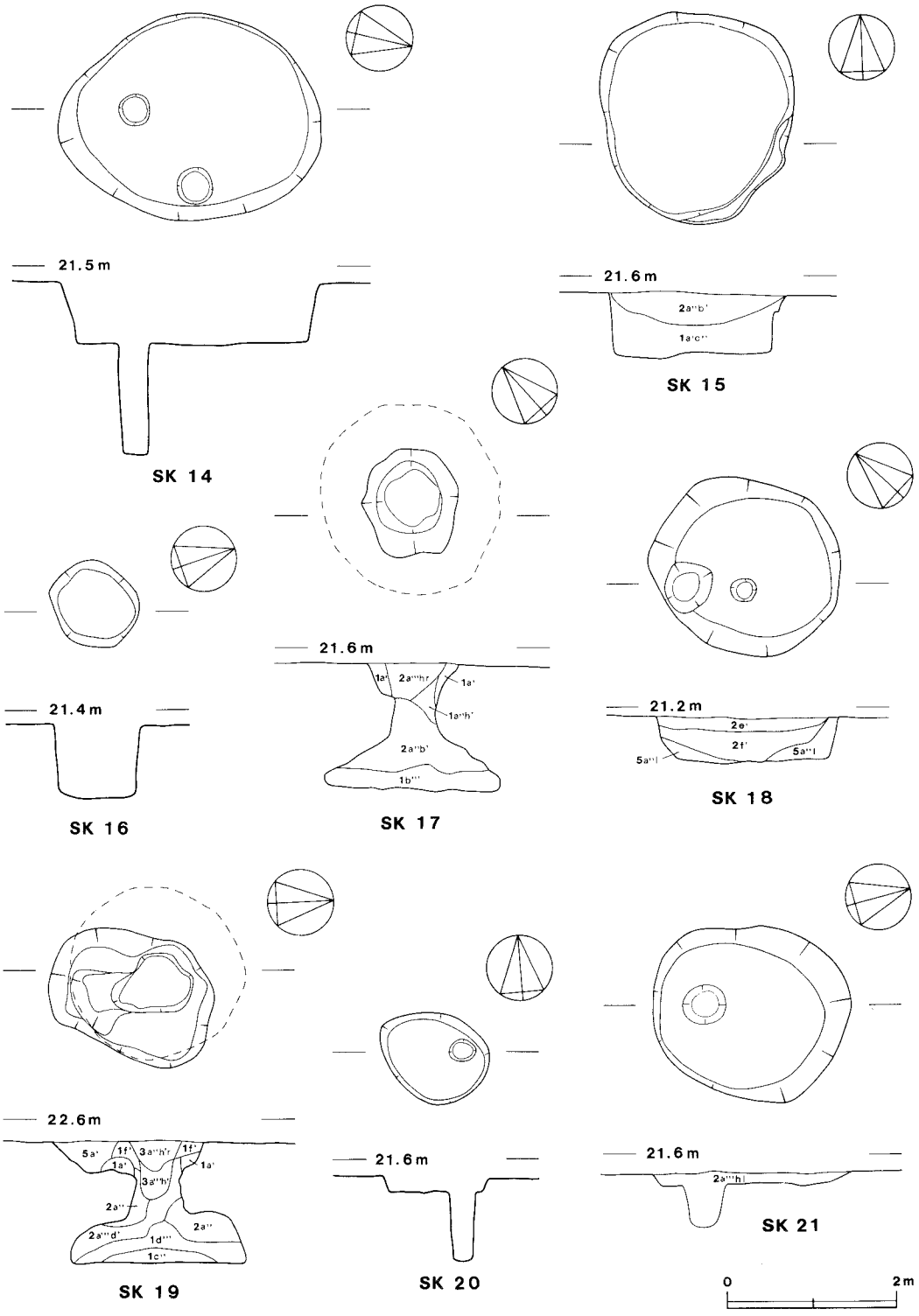
・フラスコ状土坑は坑底面の形状及び規模である。



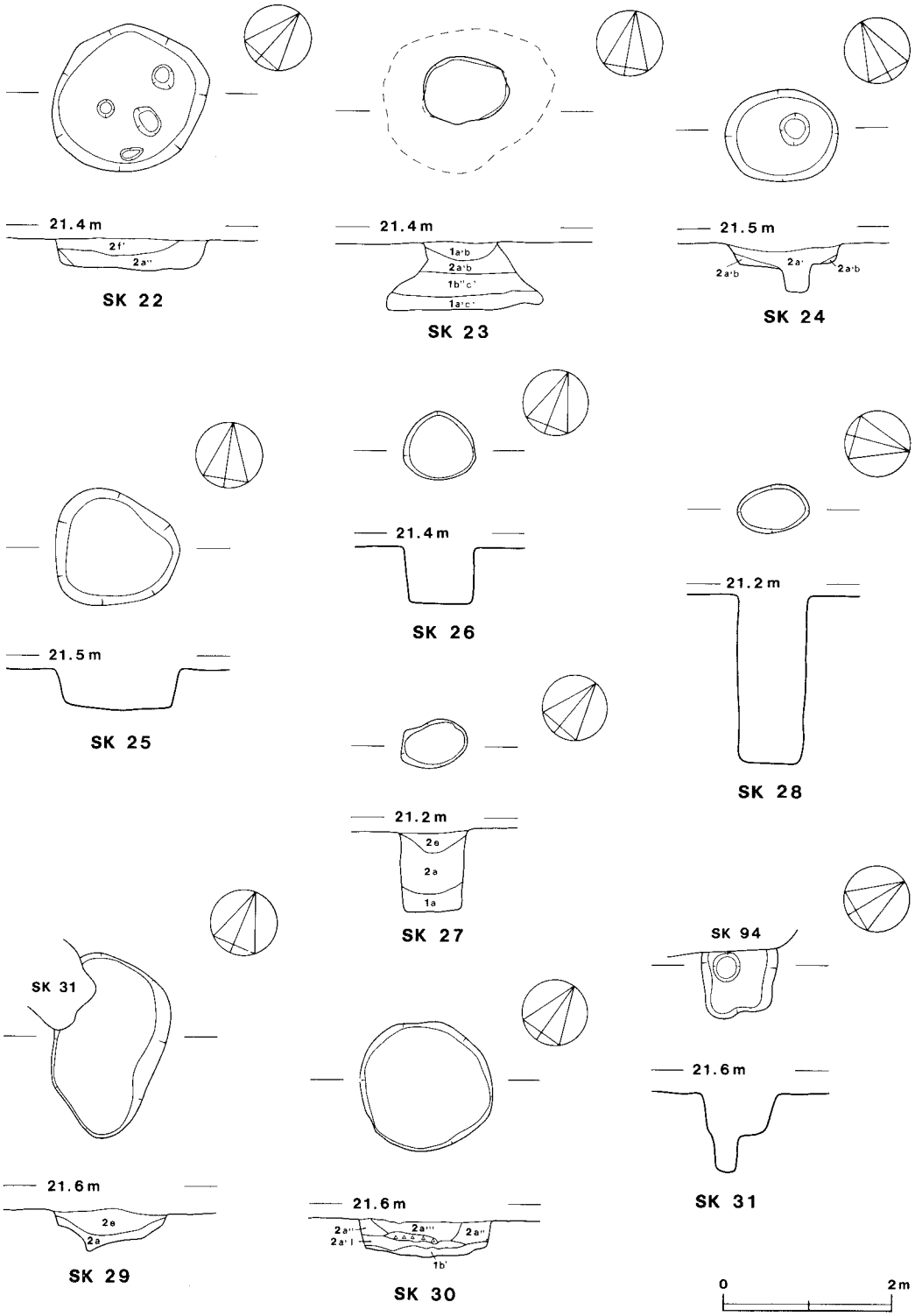
第141図　土坑実測図(1)



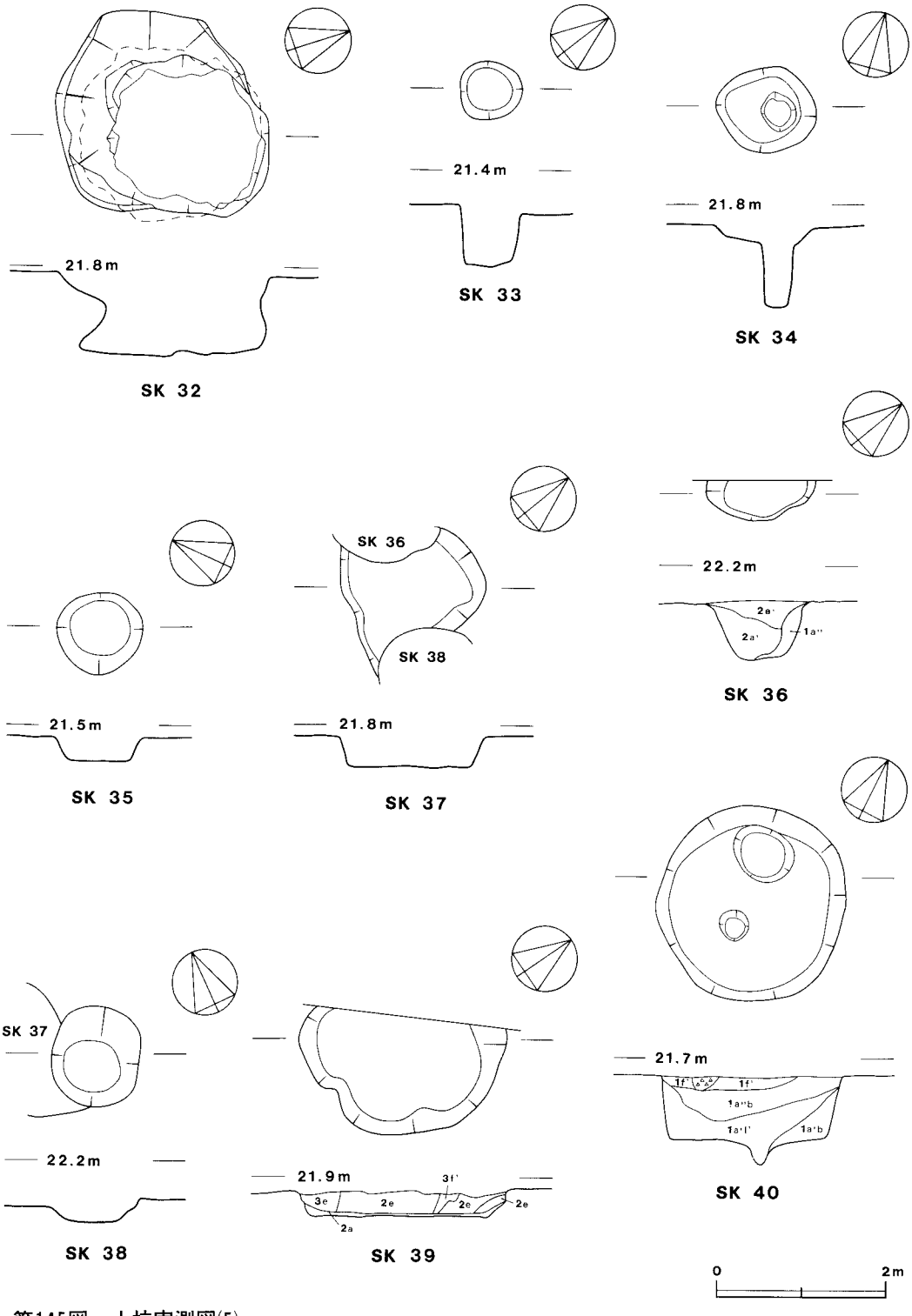
第142図　土坑実測図(2)



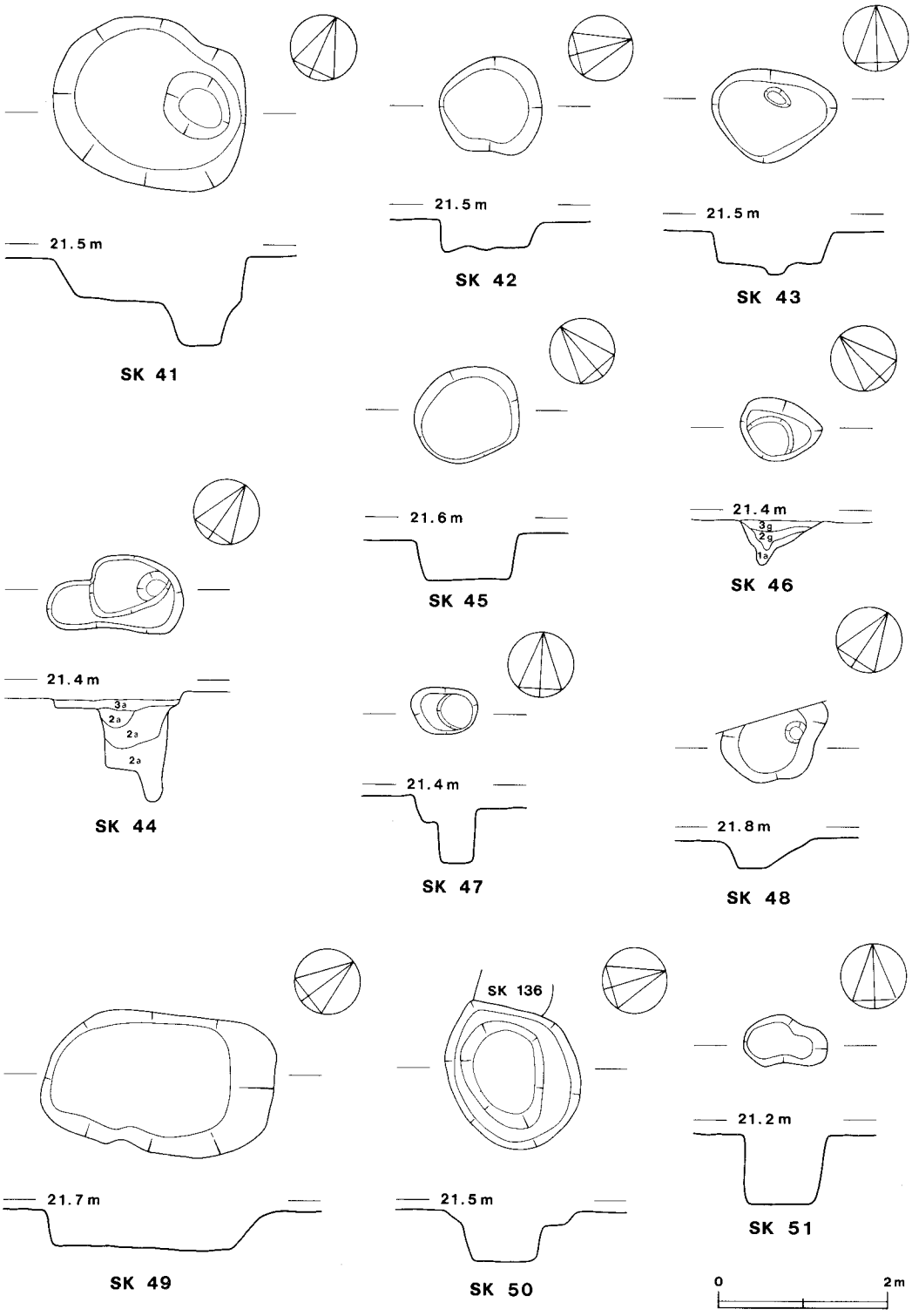
第143図　土坑実測図(3)



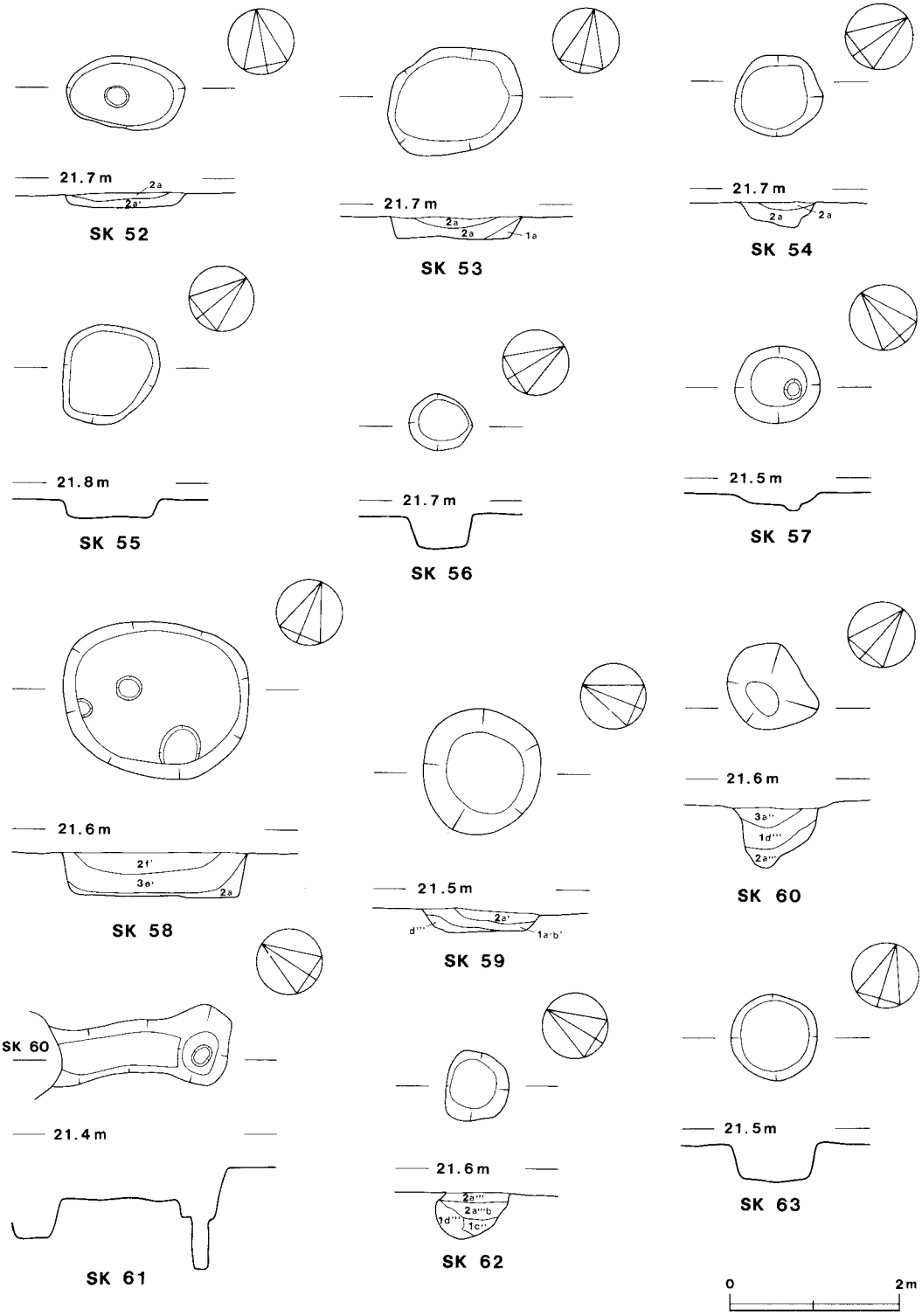
第144図　土坑実測図(4)



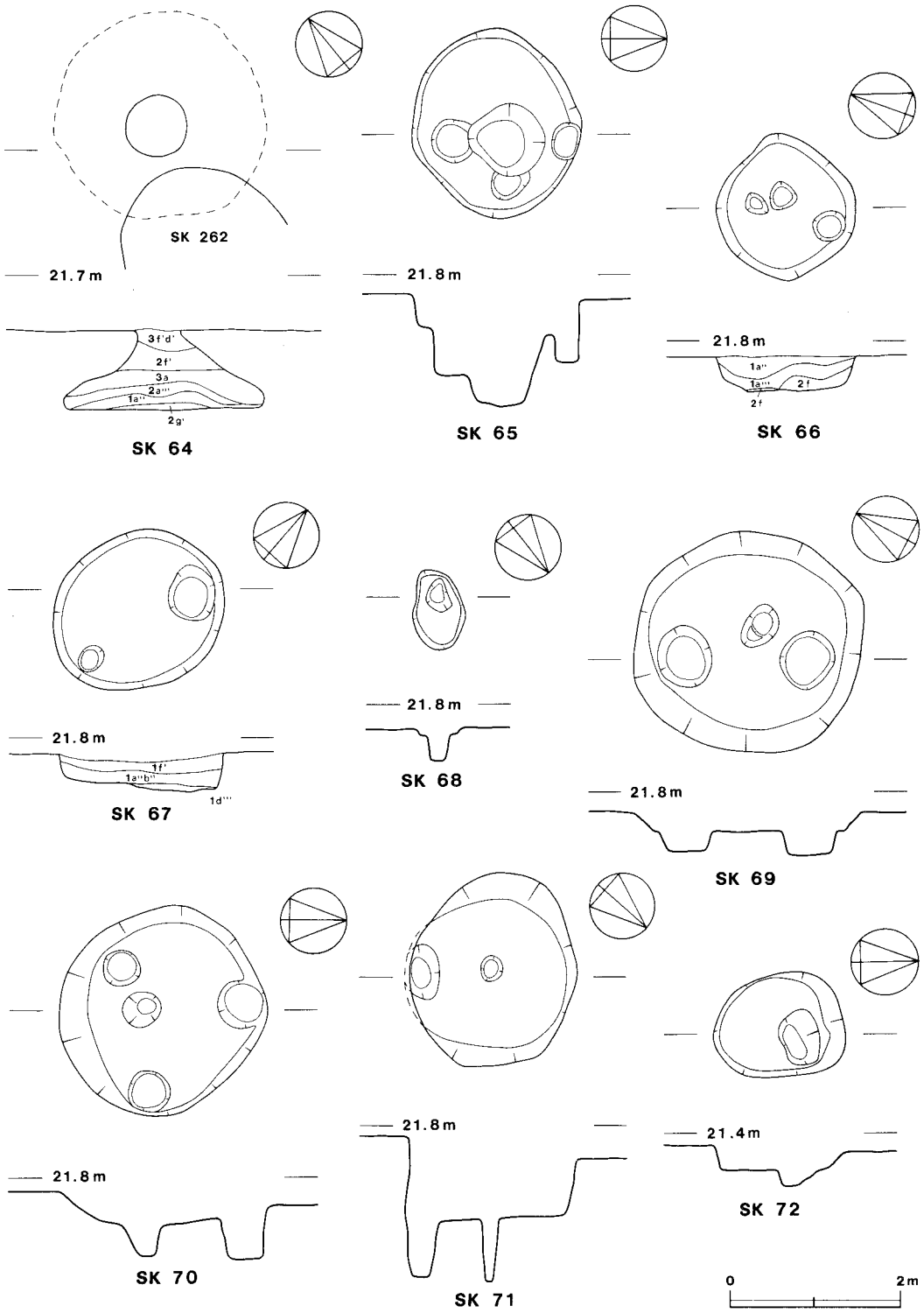
第145図　土坑実測図(5)



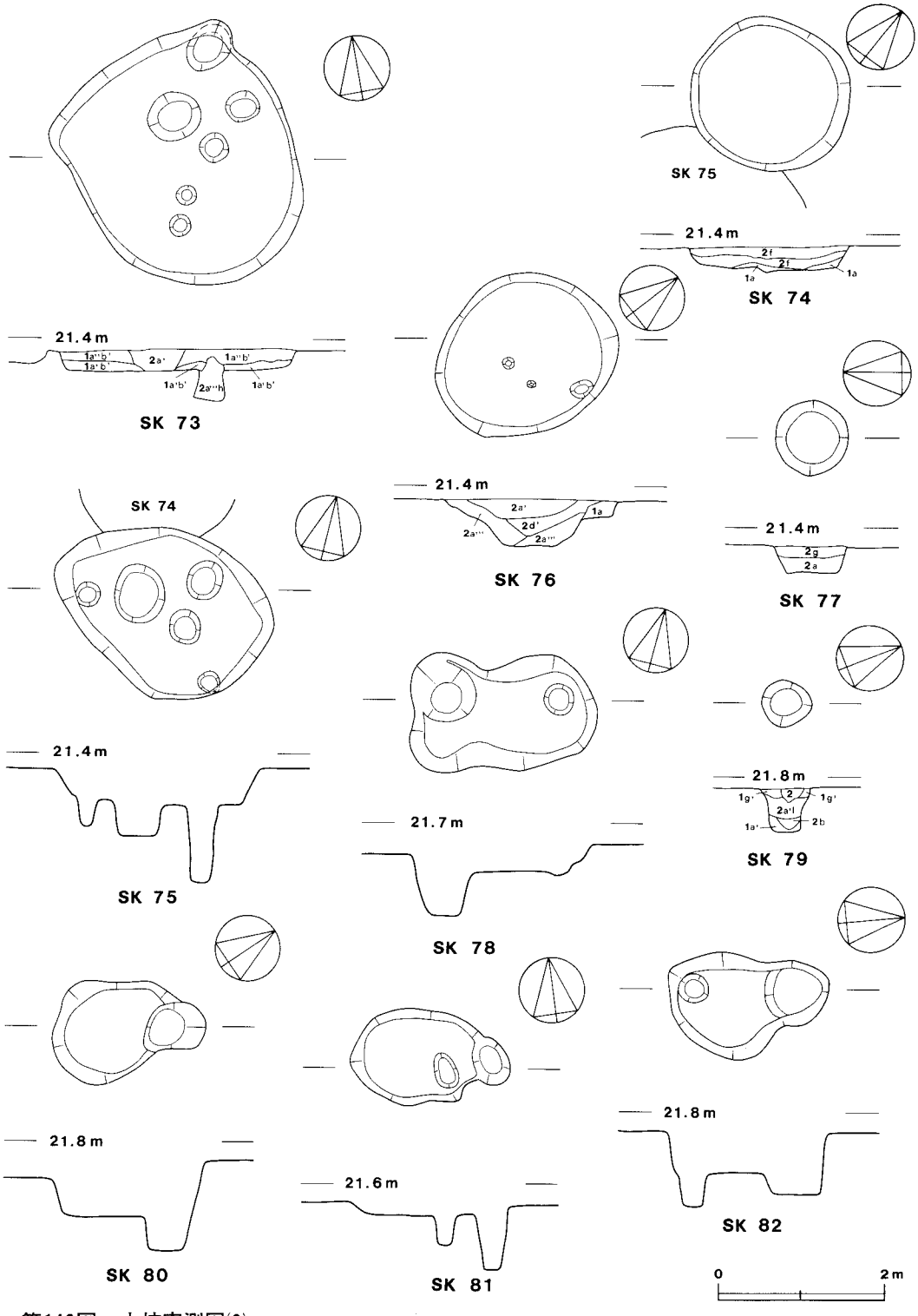
第146図　土坑実測図(6)



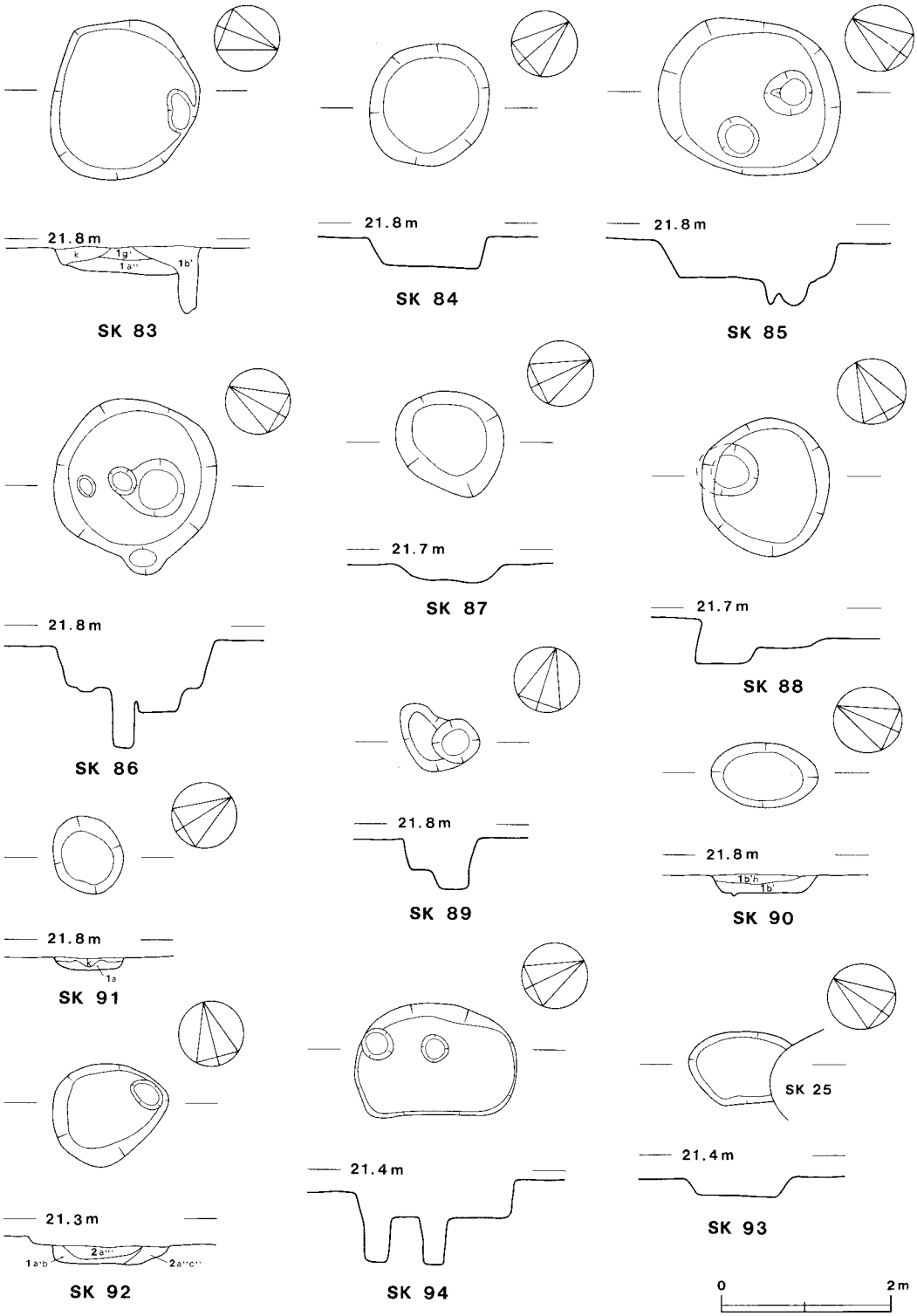
第147図　土坑実測図(7)



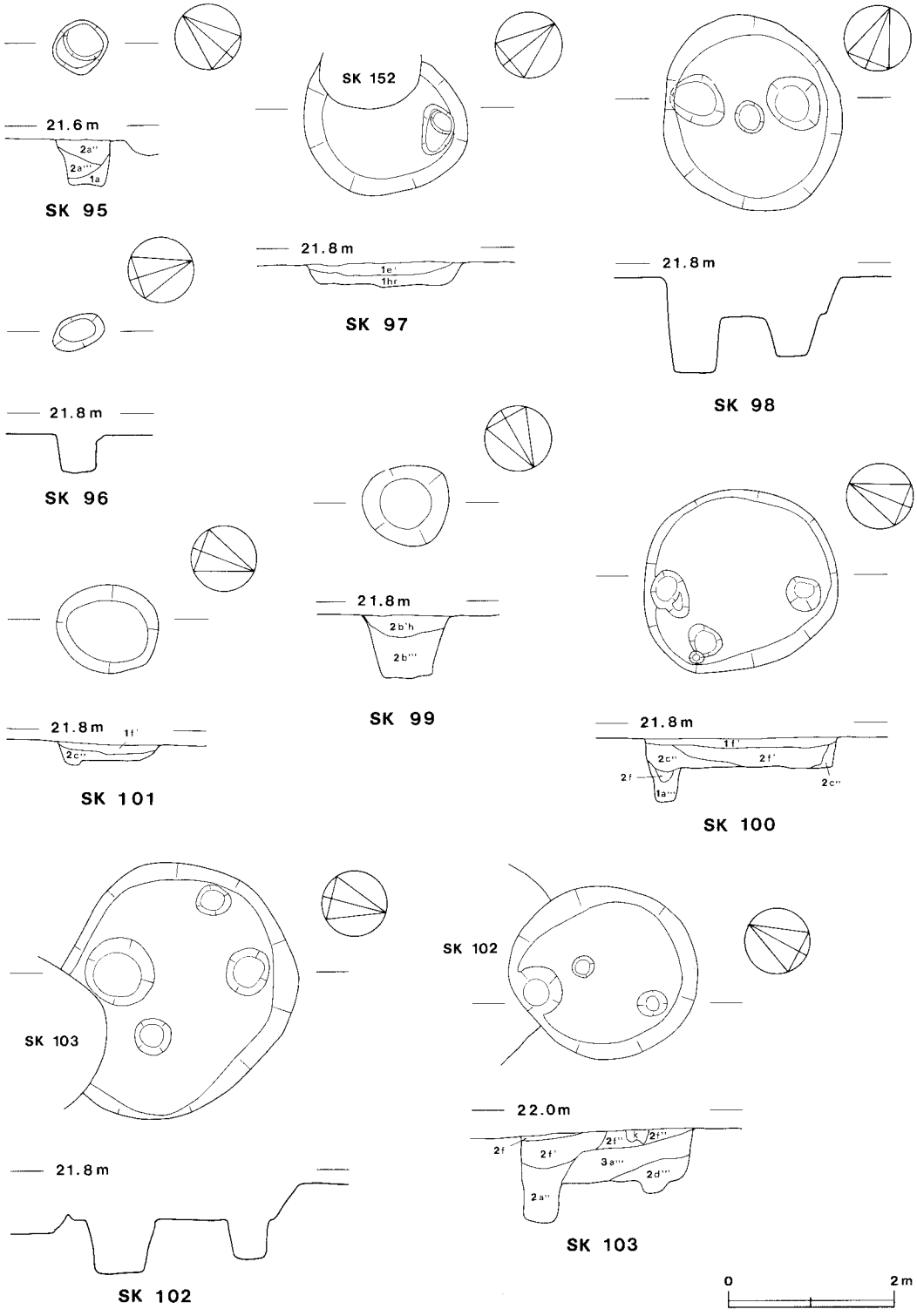
第148図　土坑実測図(8)



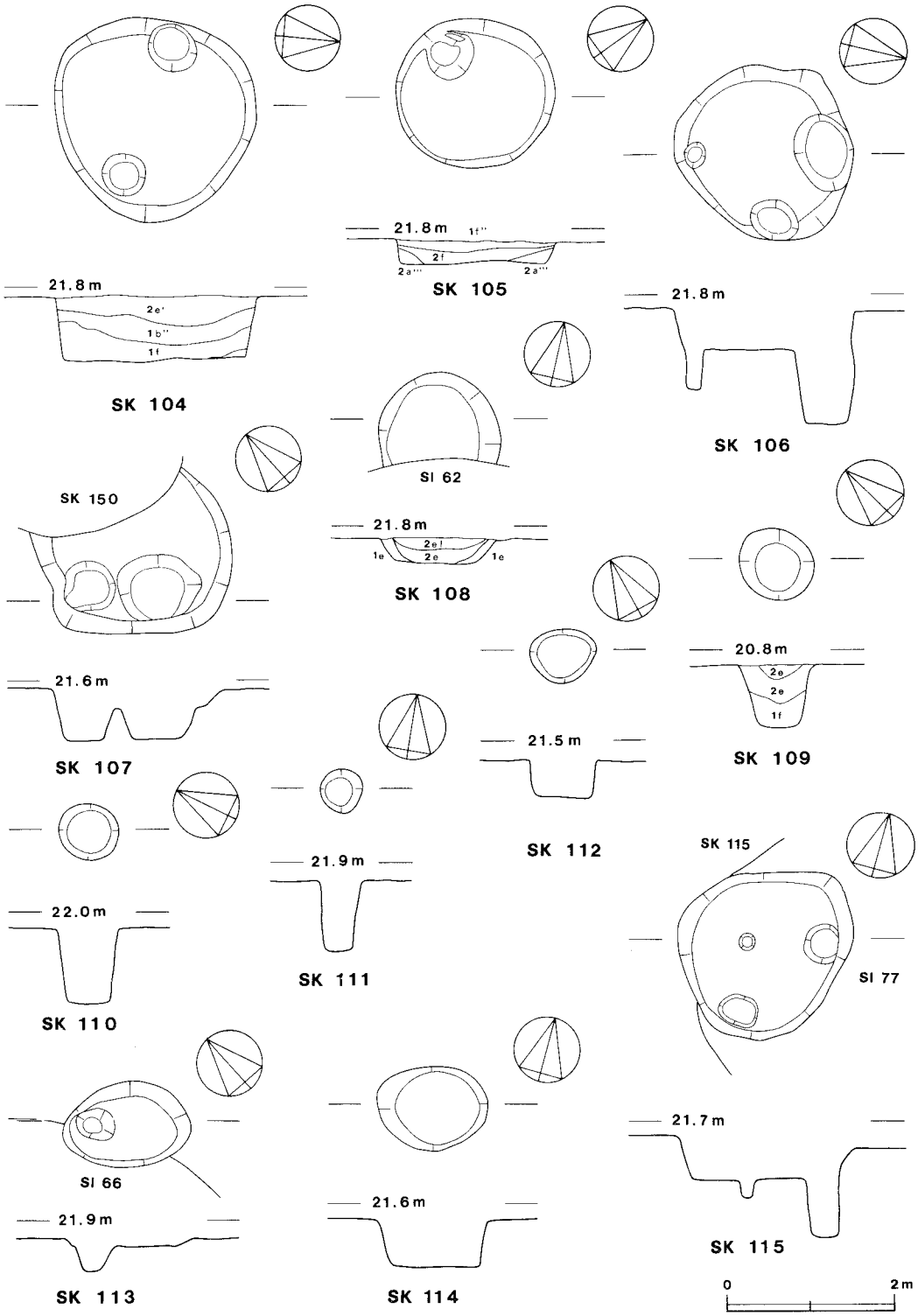
第149図　土坑実測図(9)



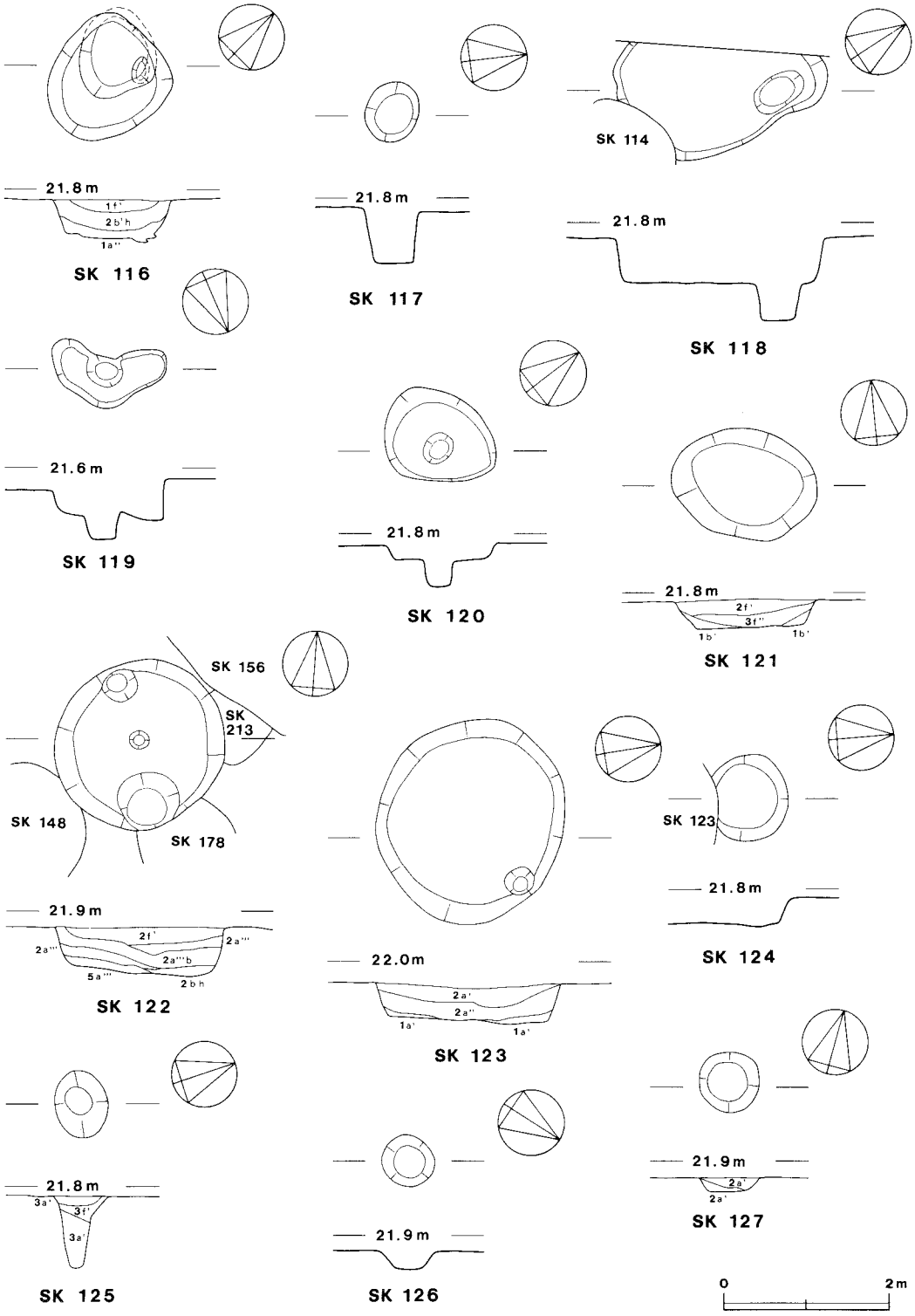
第150図　土坑実測図(10)



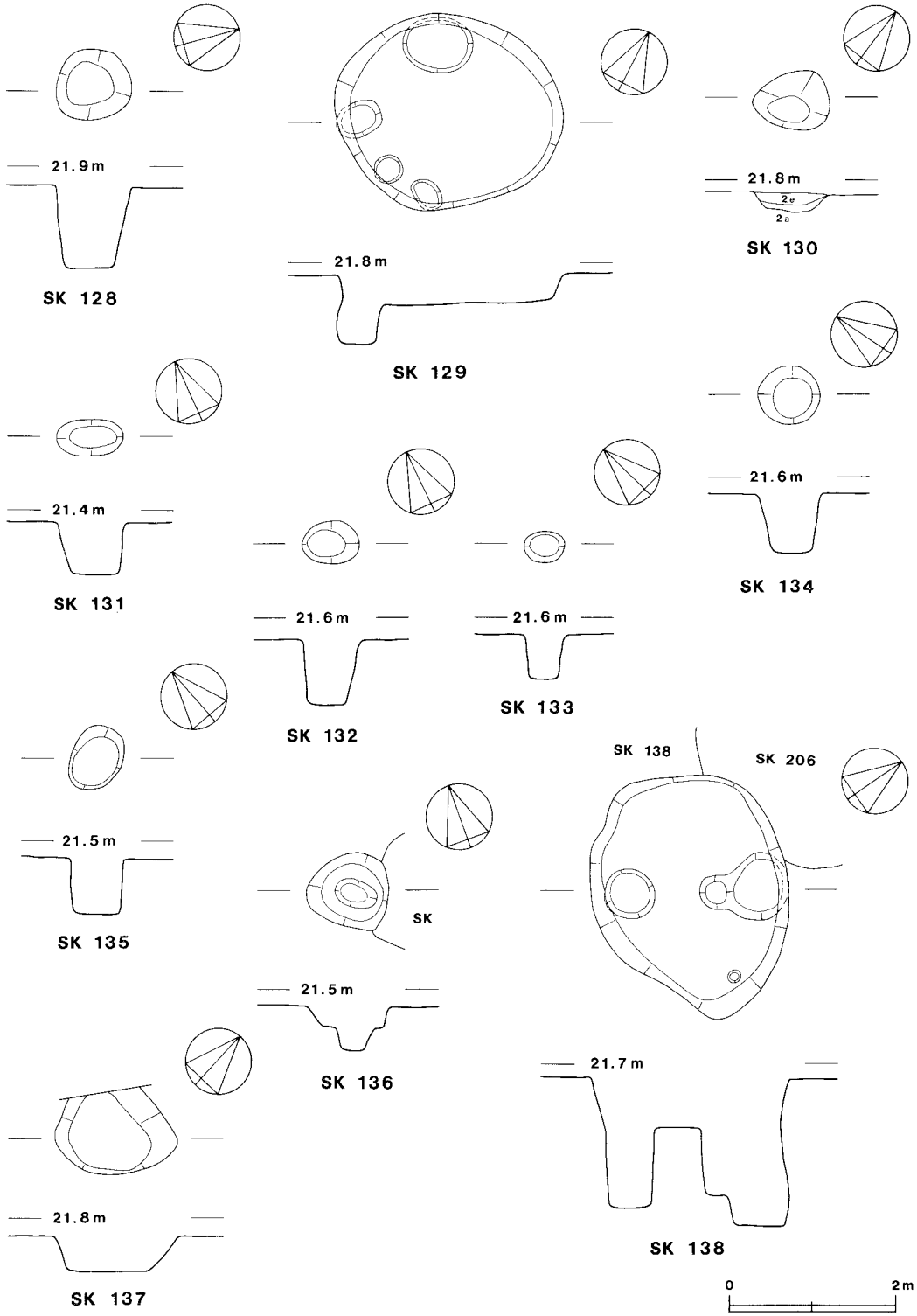
第151図　土坑実測図(11)



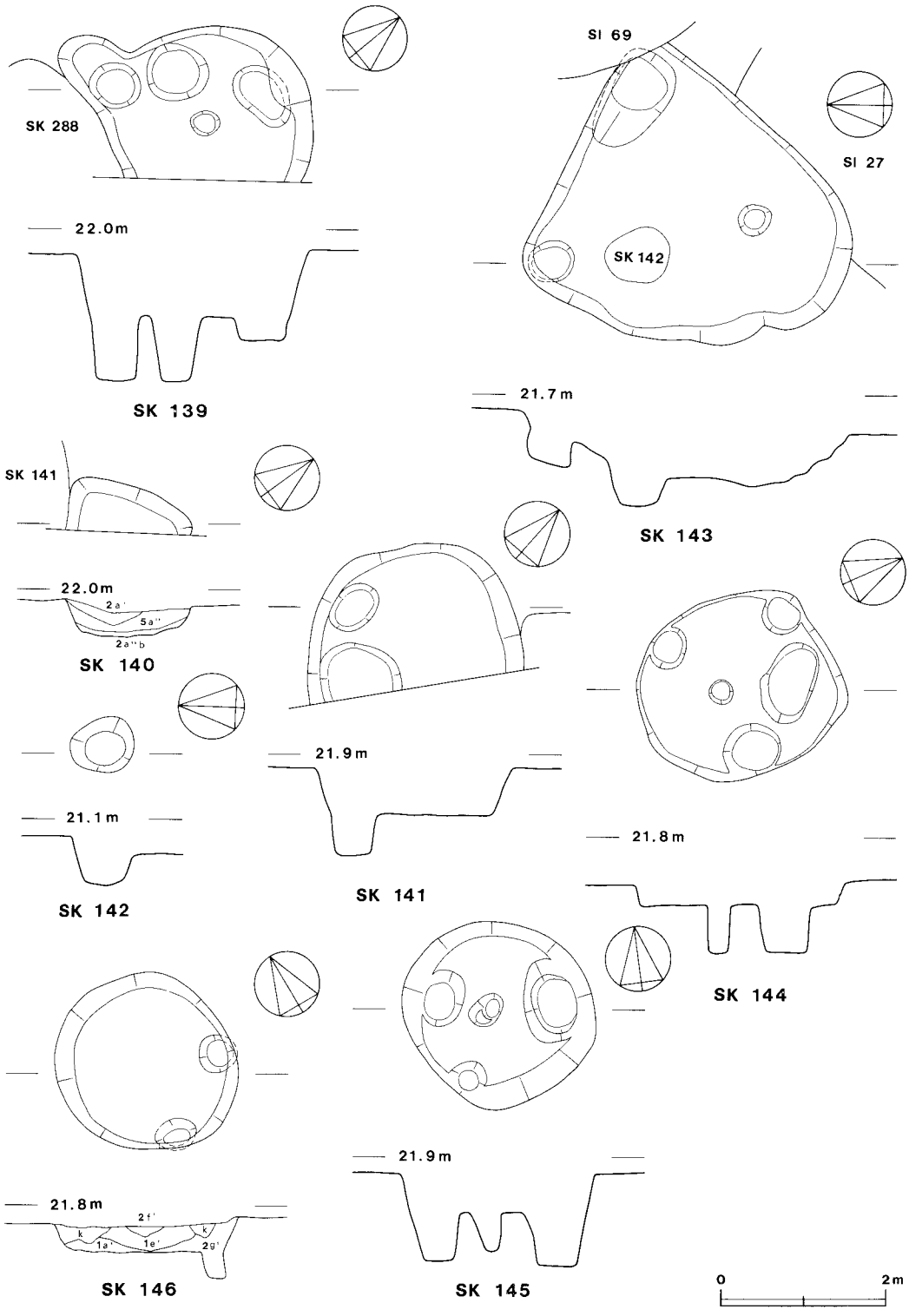
第152図　土坑実測図(12)



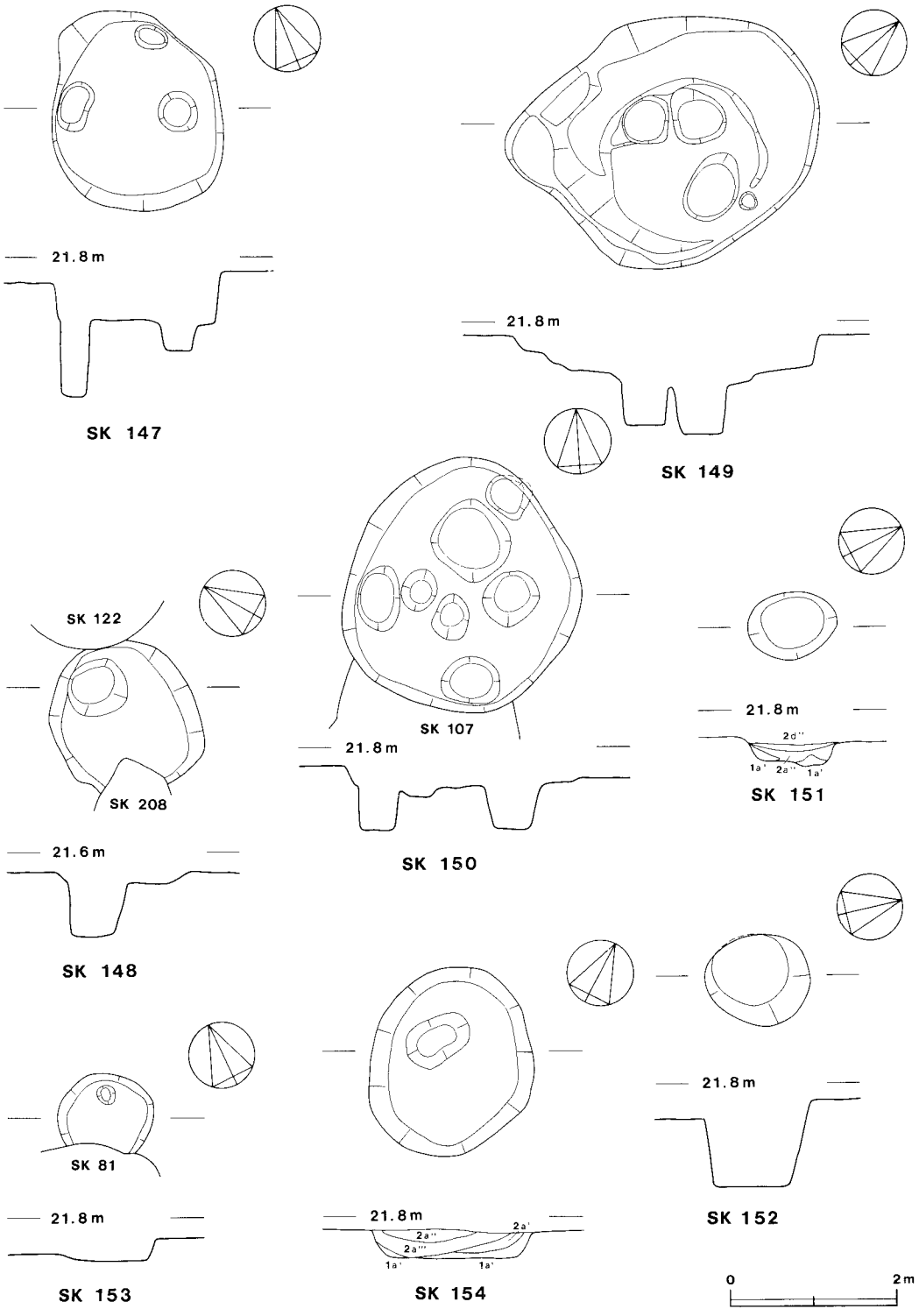
第153図　土坑実測図(13)



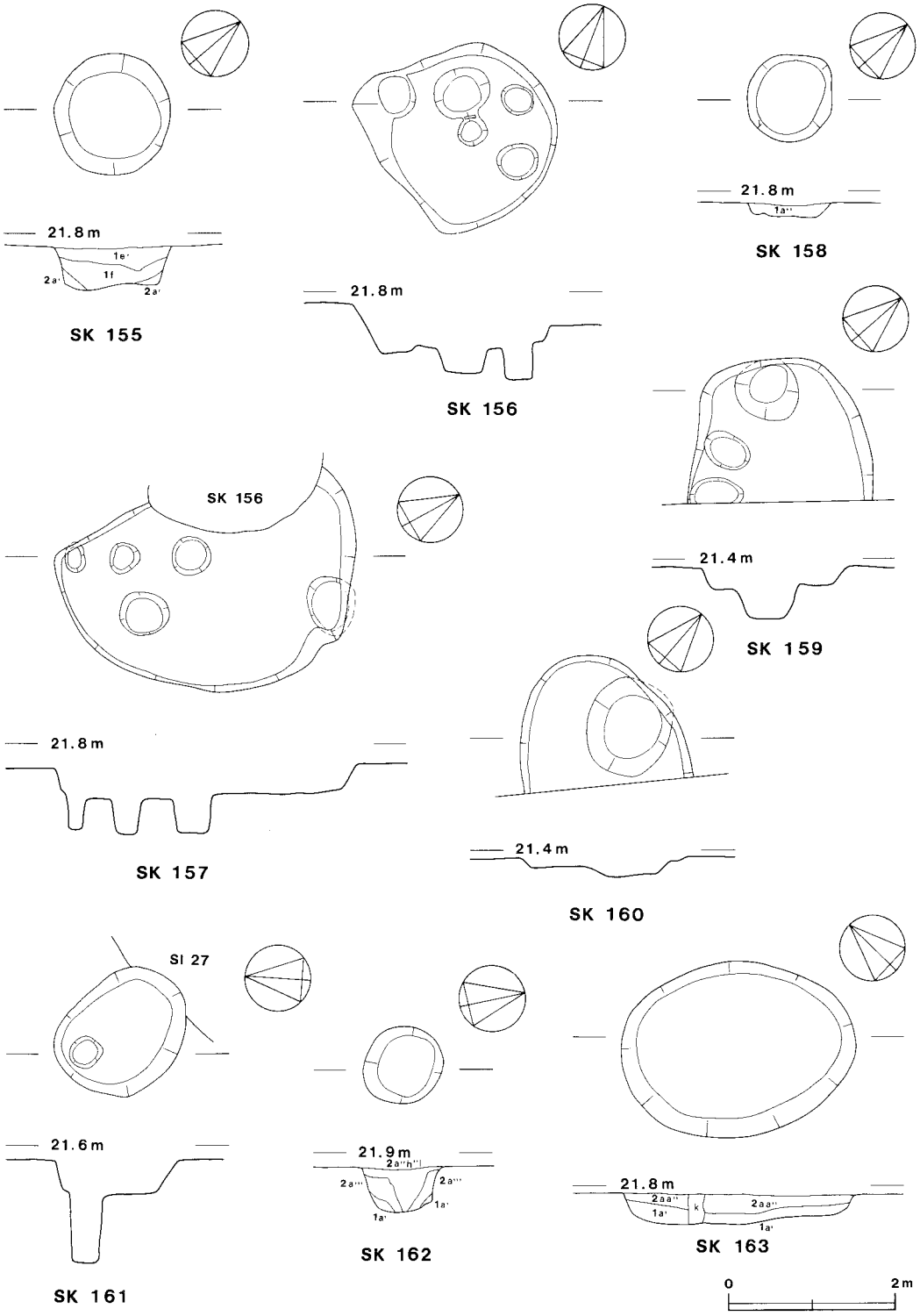
第154図　土坑実測図(14)



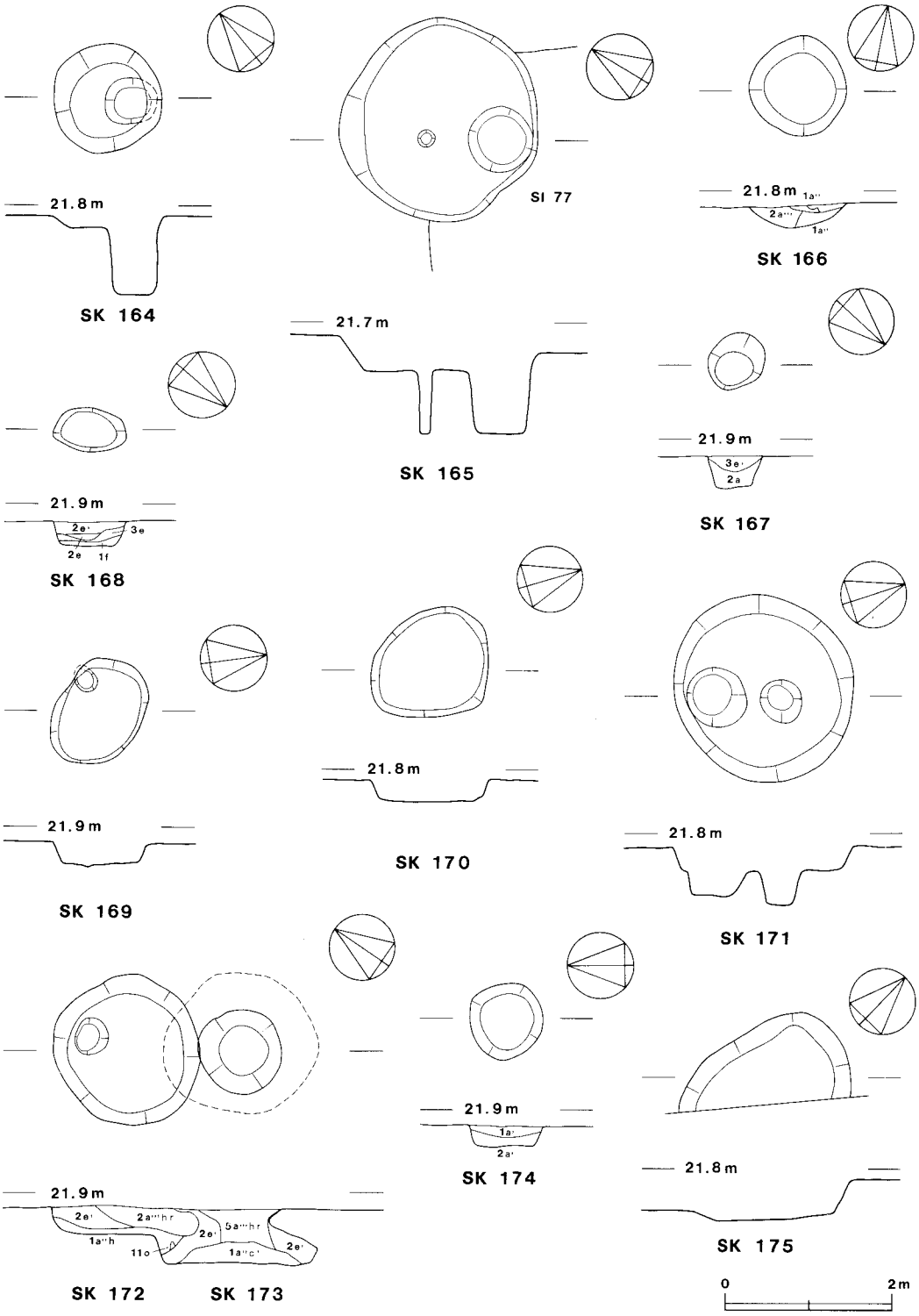
第155図　土坑実測図(15)



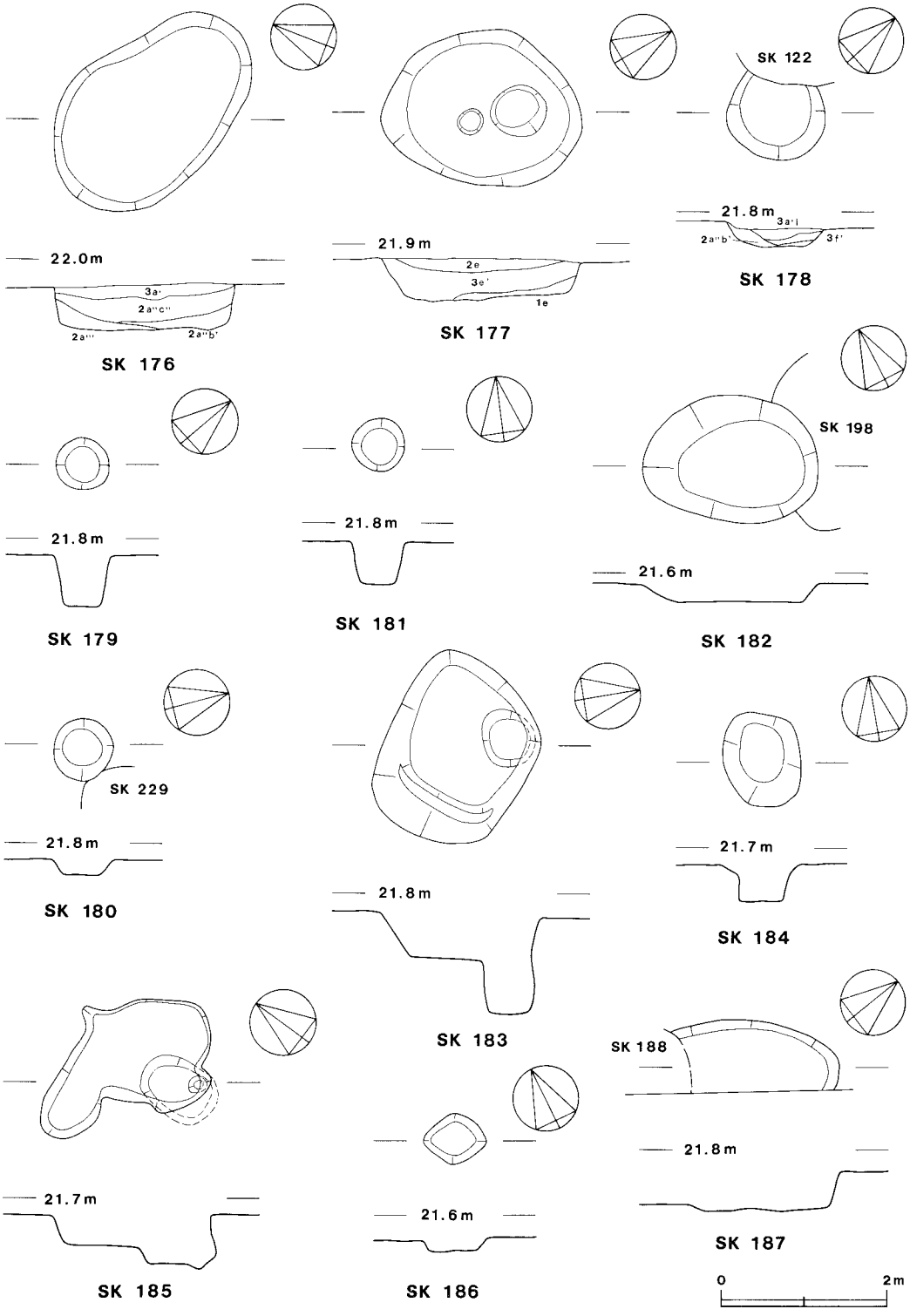
第156図　土坑実測図(16)



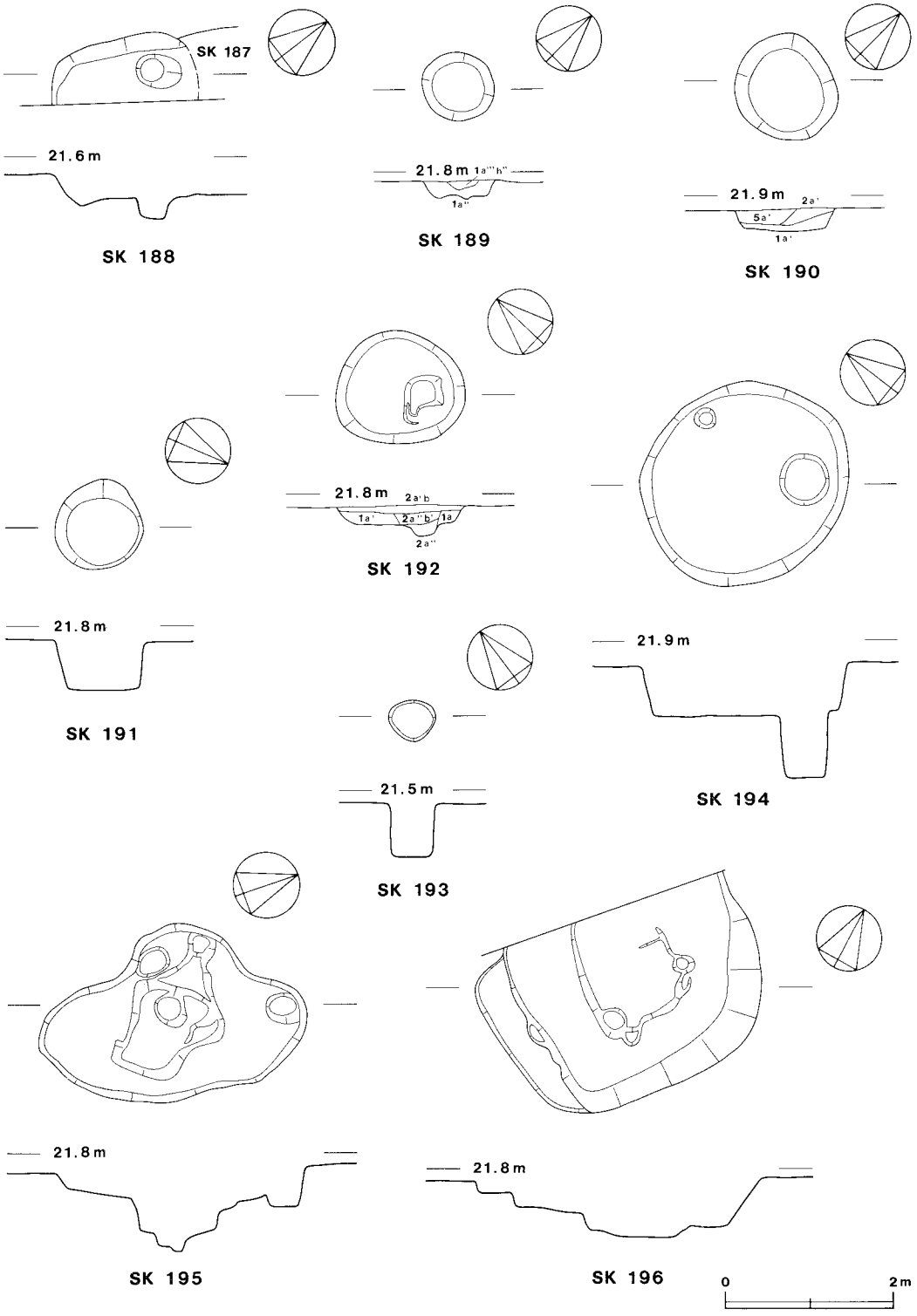
第157図　土坑実測図(17)



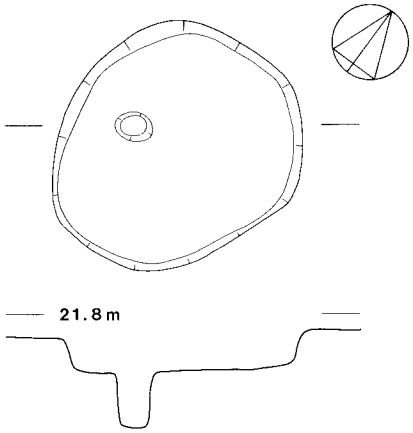
第158図　土坑実測図(18)



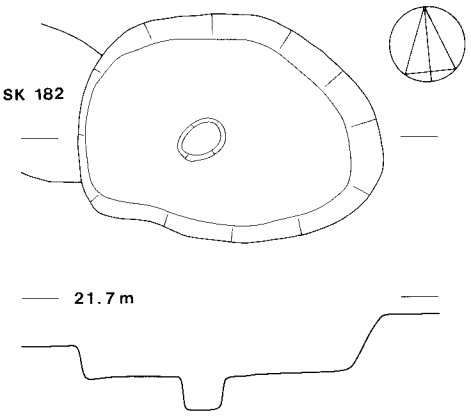
第159図　土坑実測図(19)



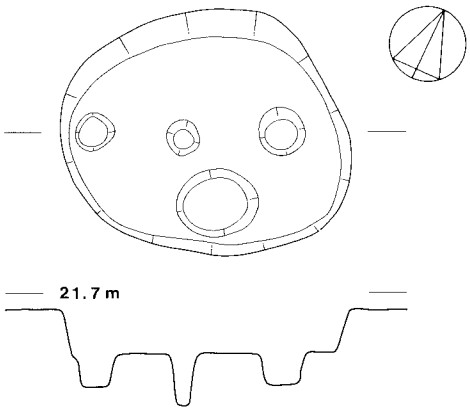
第160図　土坑実測図(20)



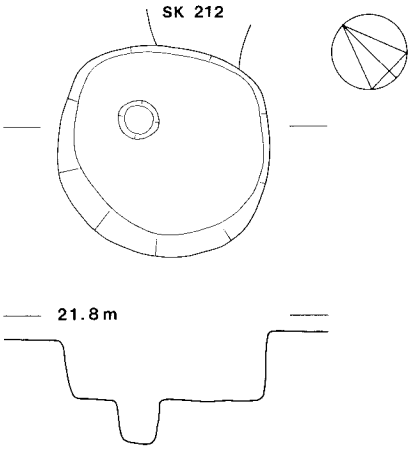
SK 197



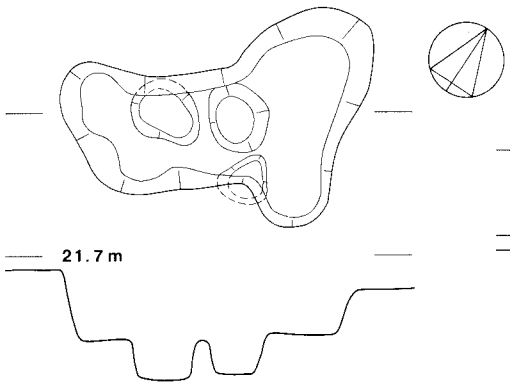
SK 198



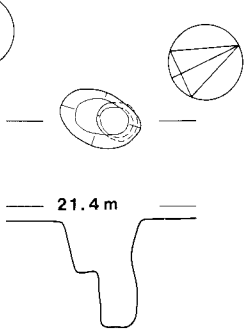
SK 199



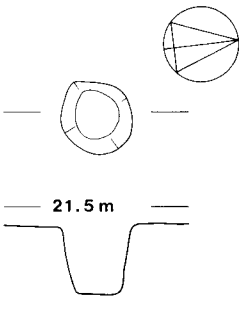
SK 200



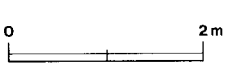
SK 201



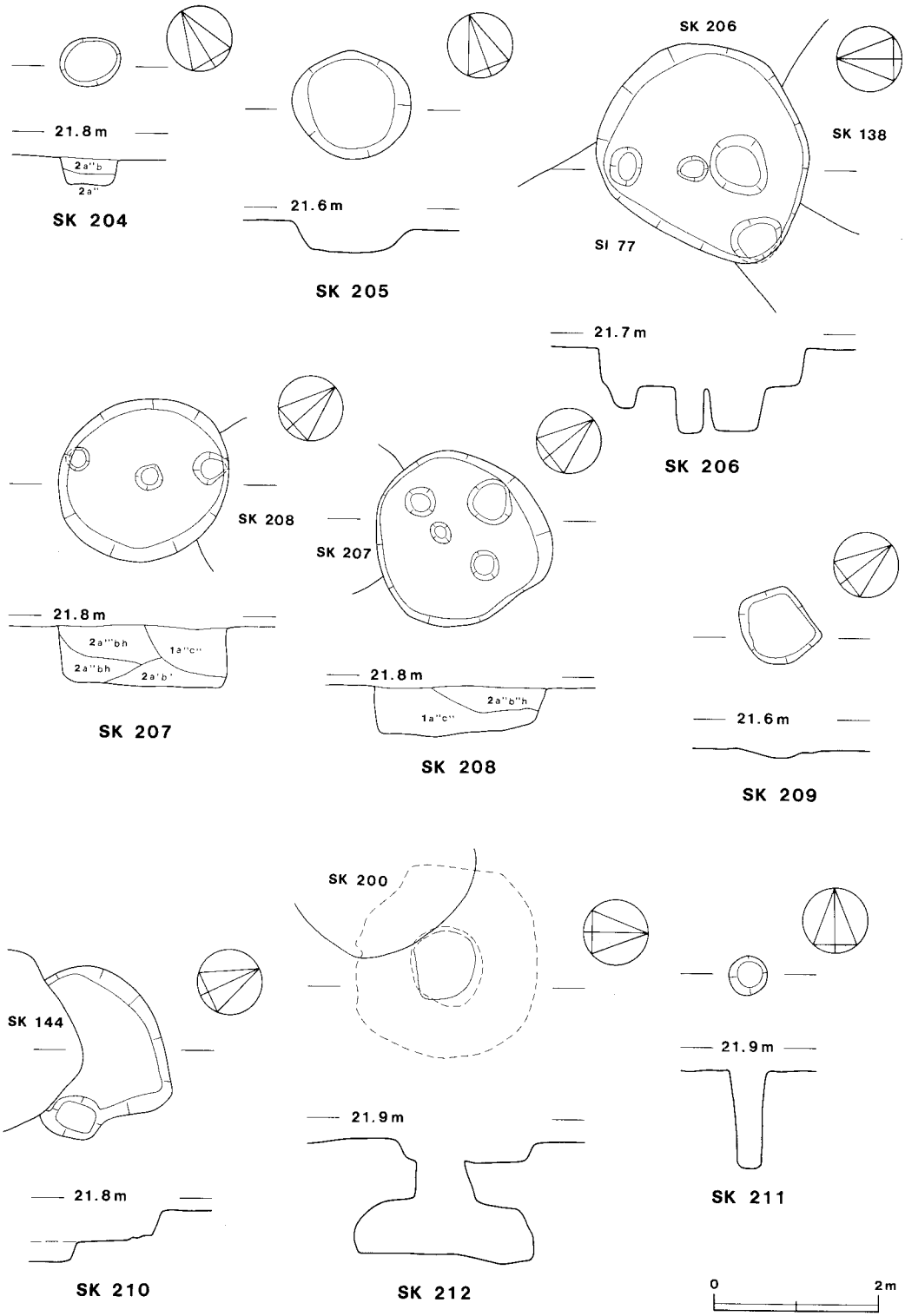
SK 202



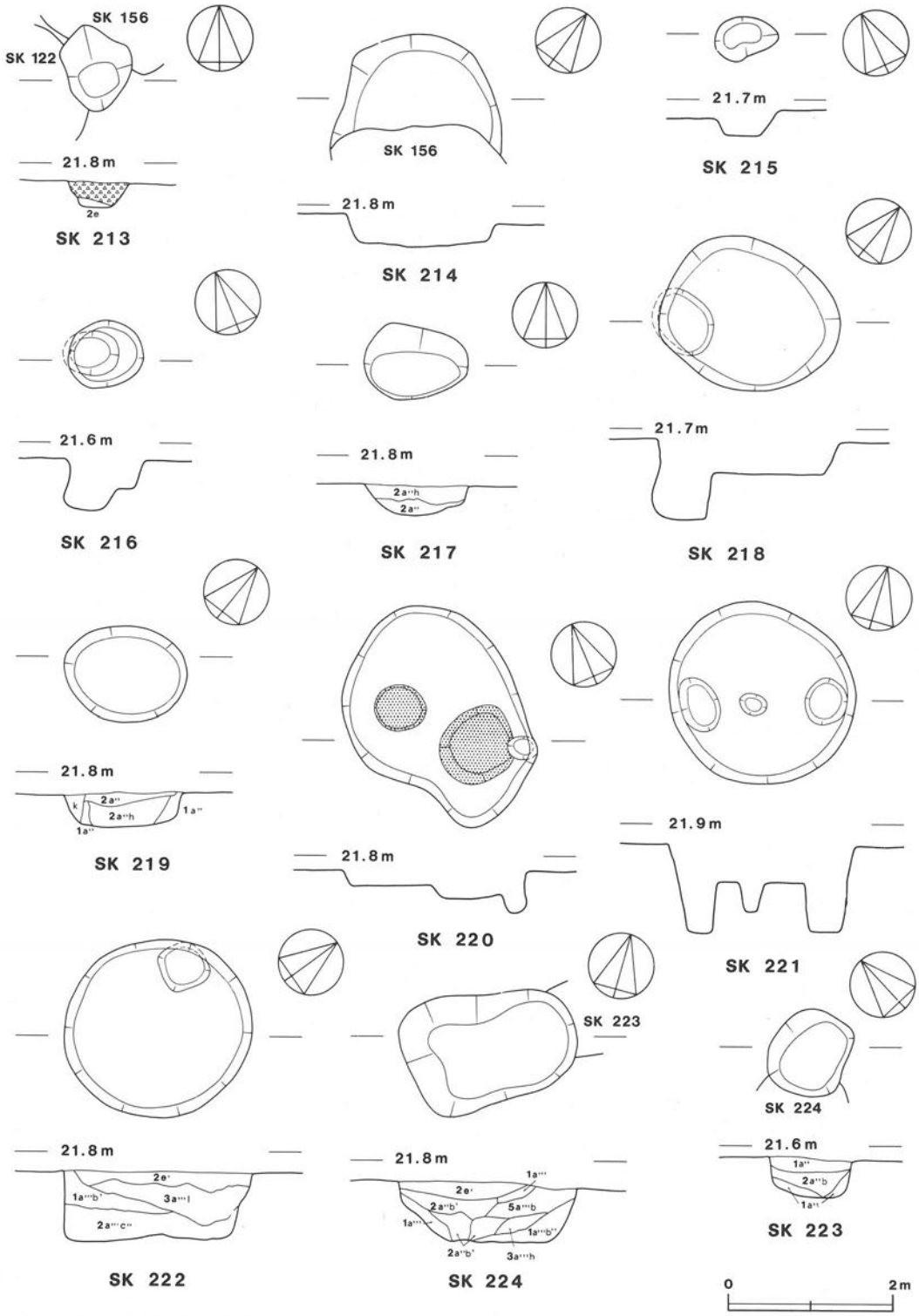
SK 203



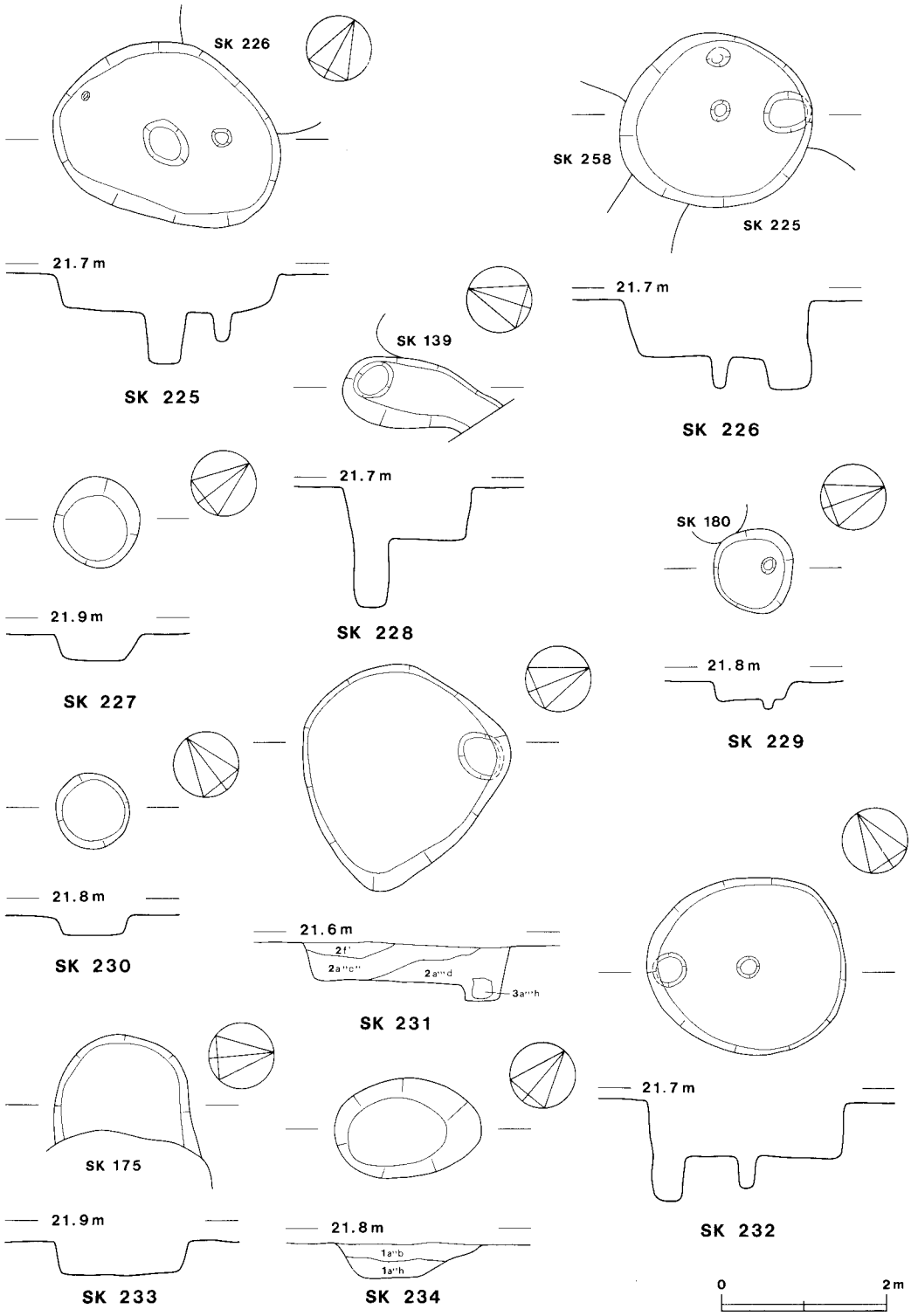
第161図　土坑実測図(21)



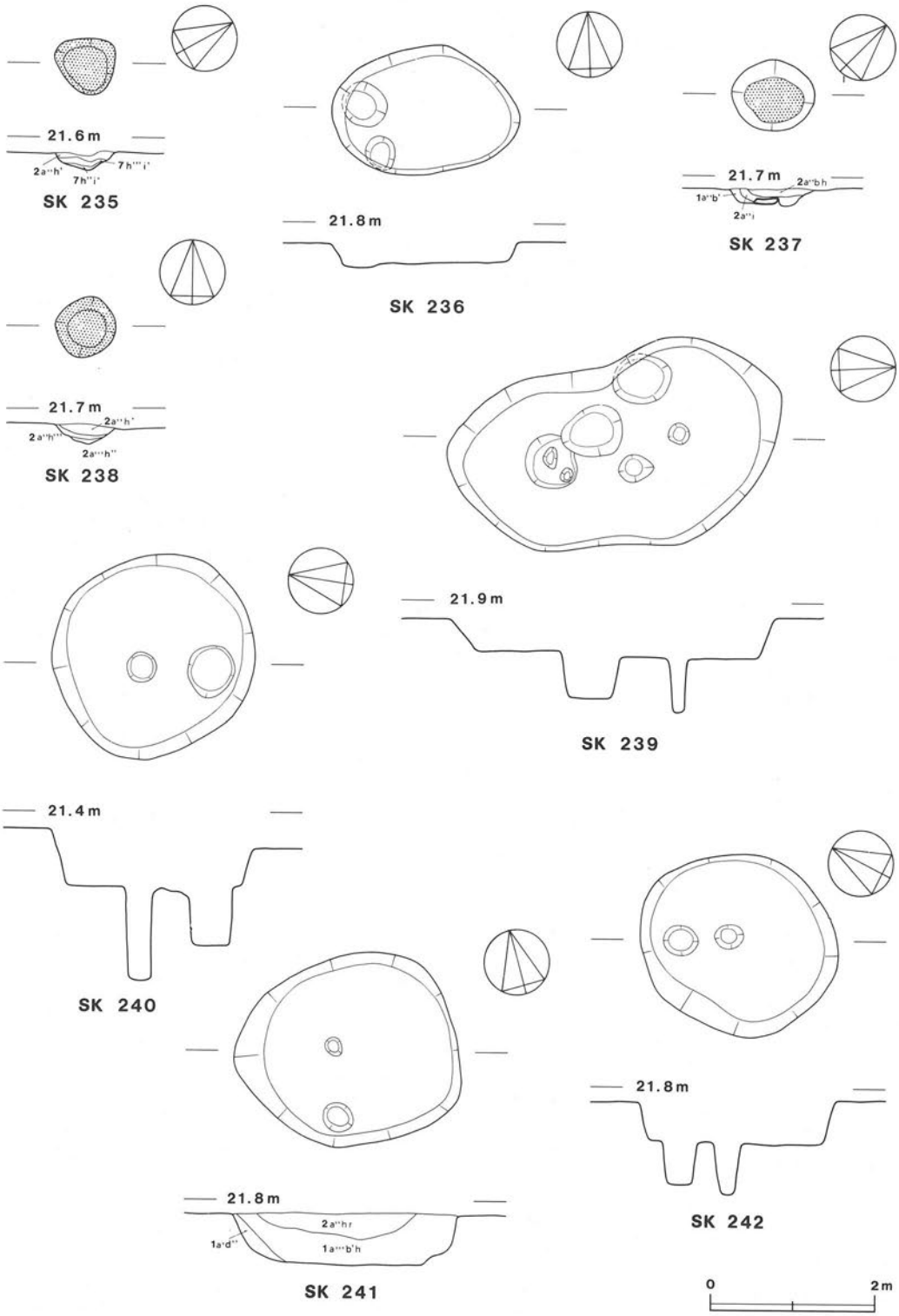
第162図　土坑実測図(22)



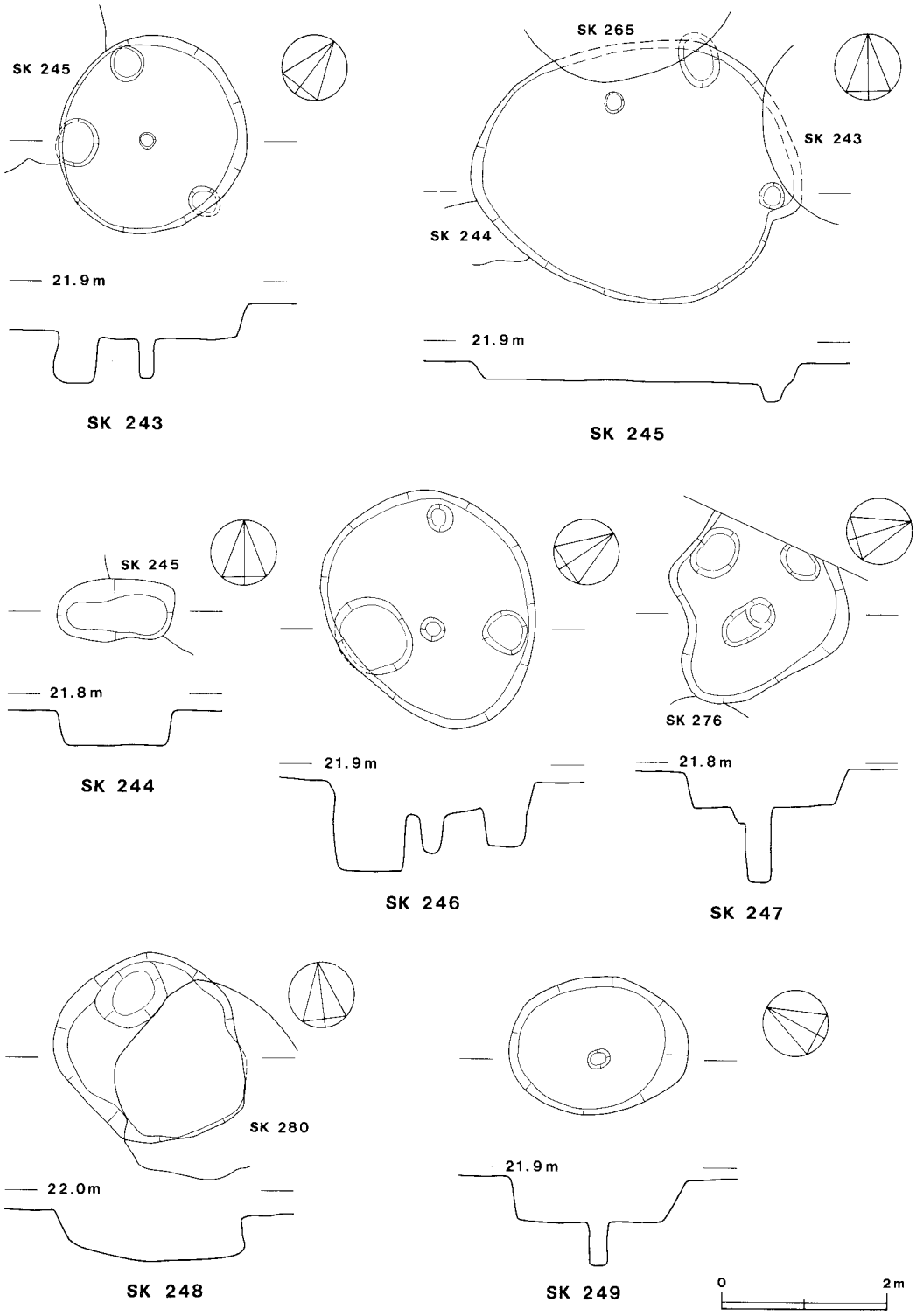
第163図　土坑実測図(23)



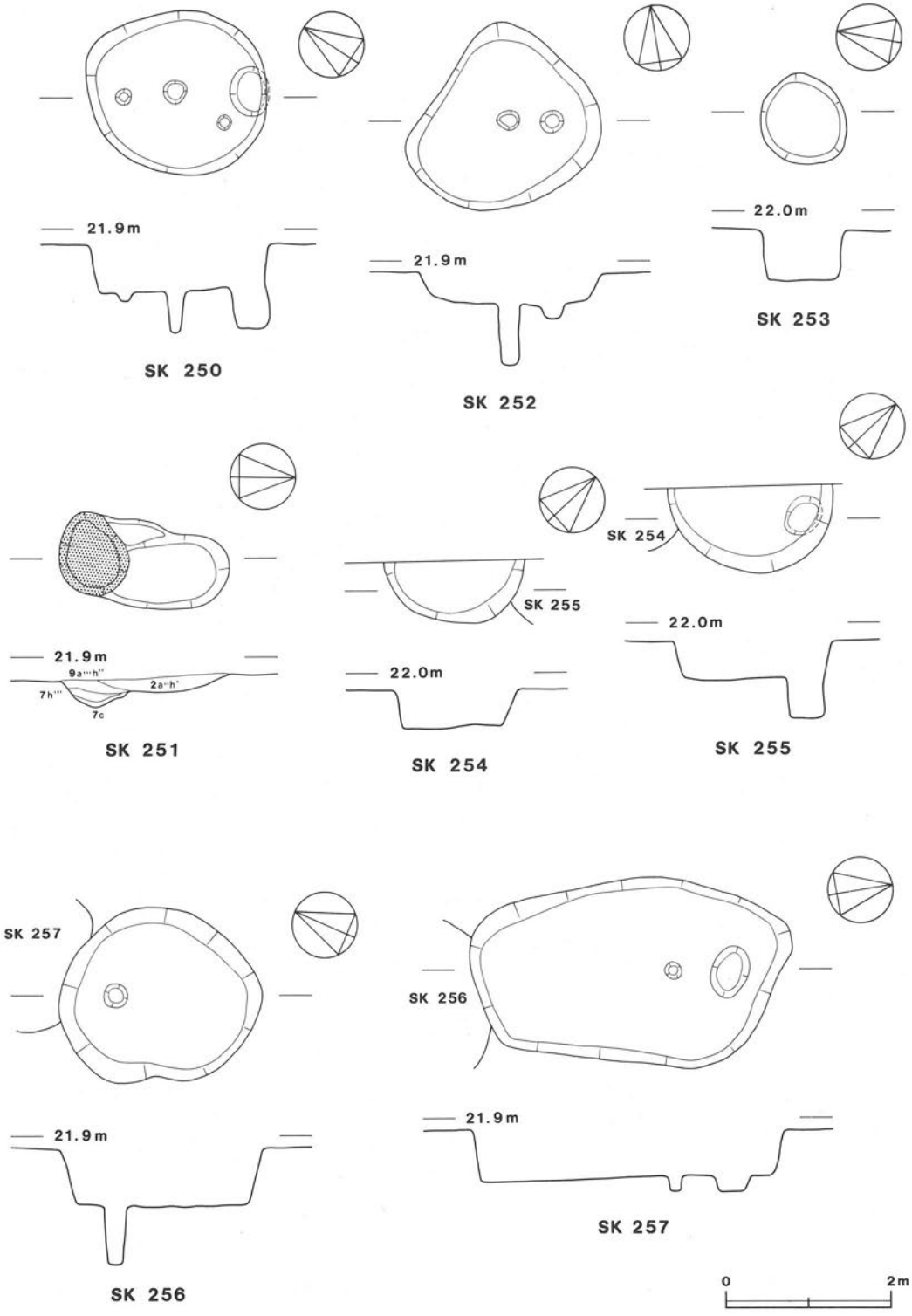
第164図　土坑実測図(24)



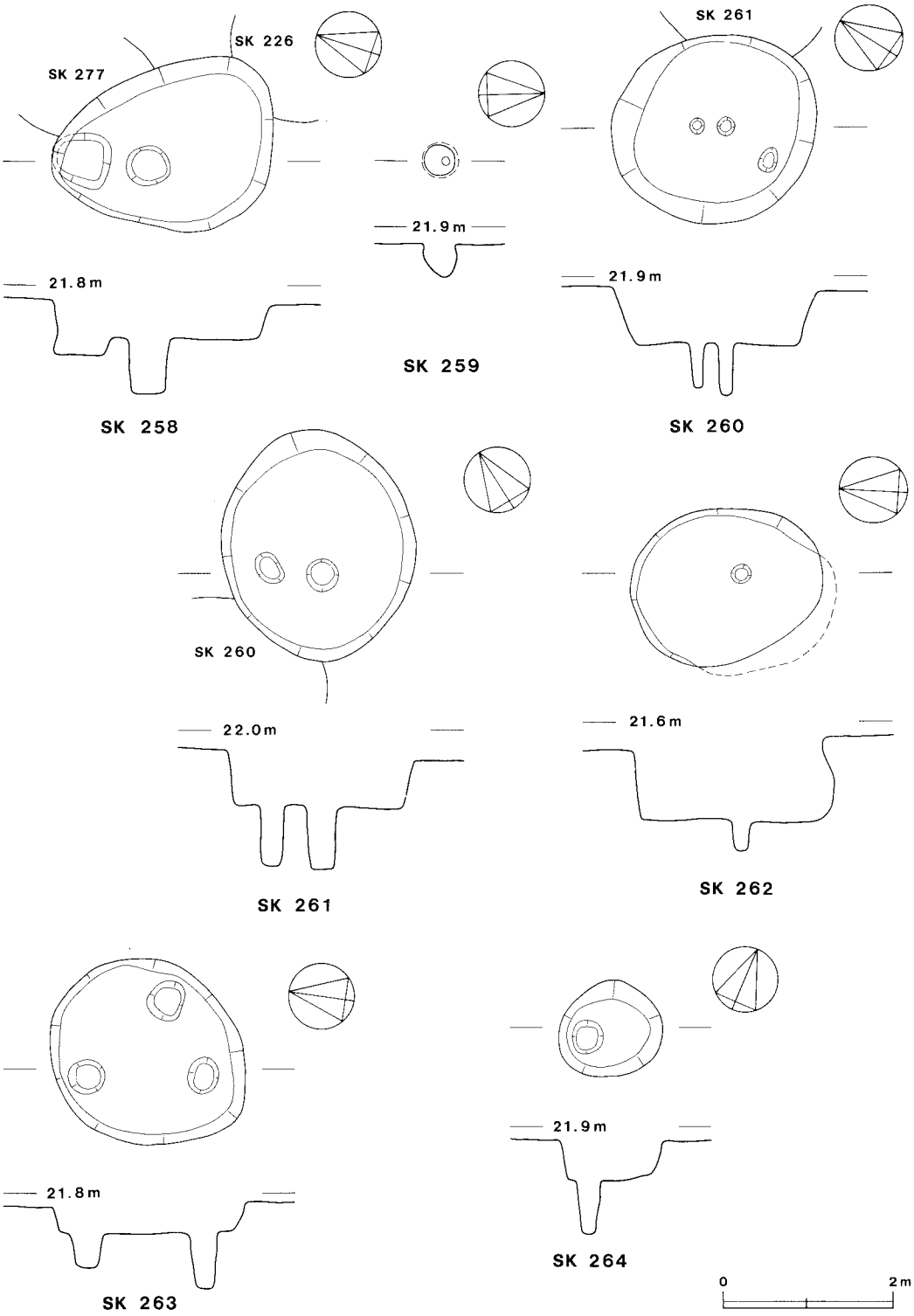
第165図　土坑実測図(25)



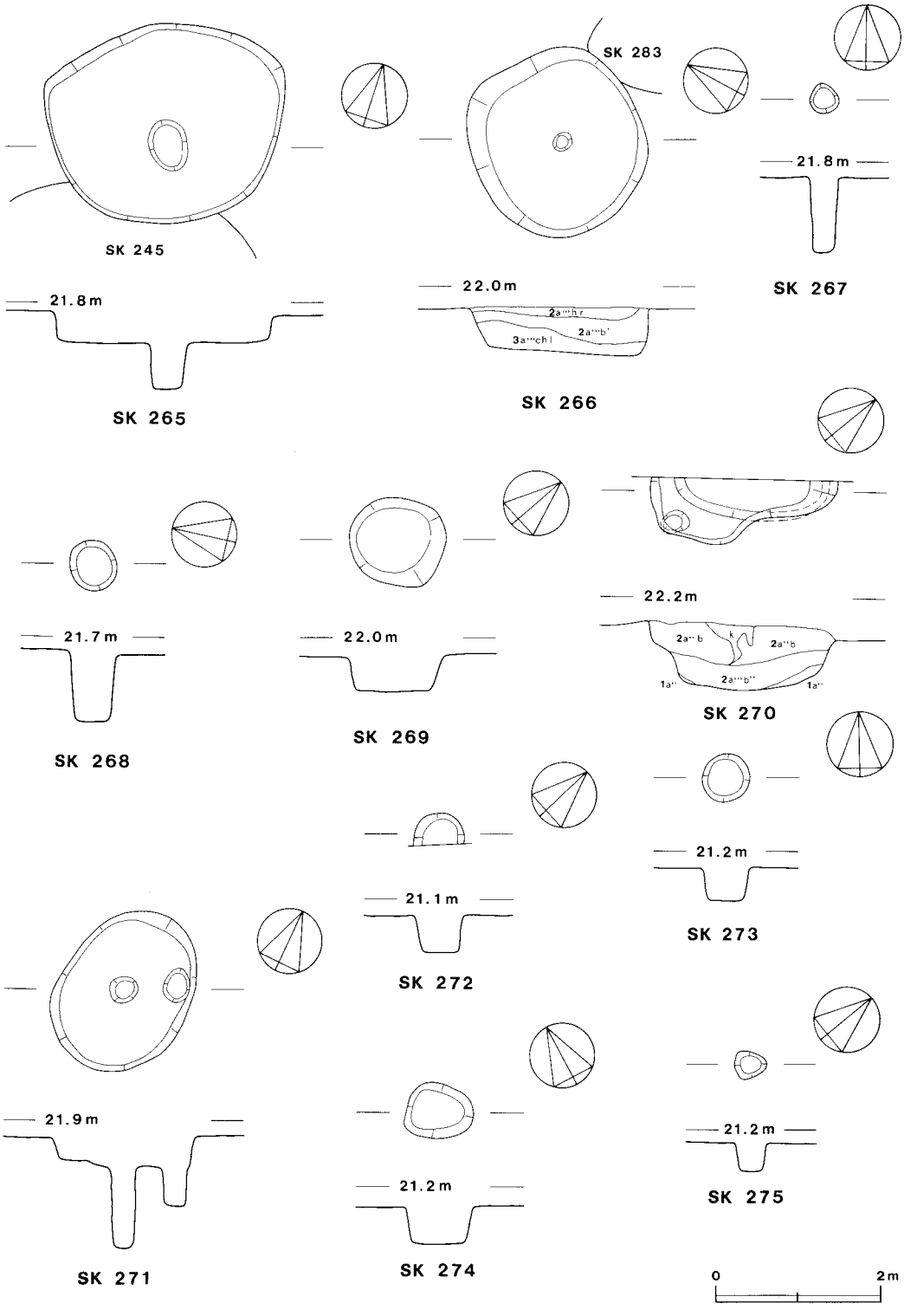
第166図　土坑実測図(26)



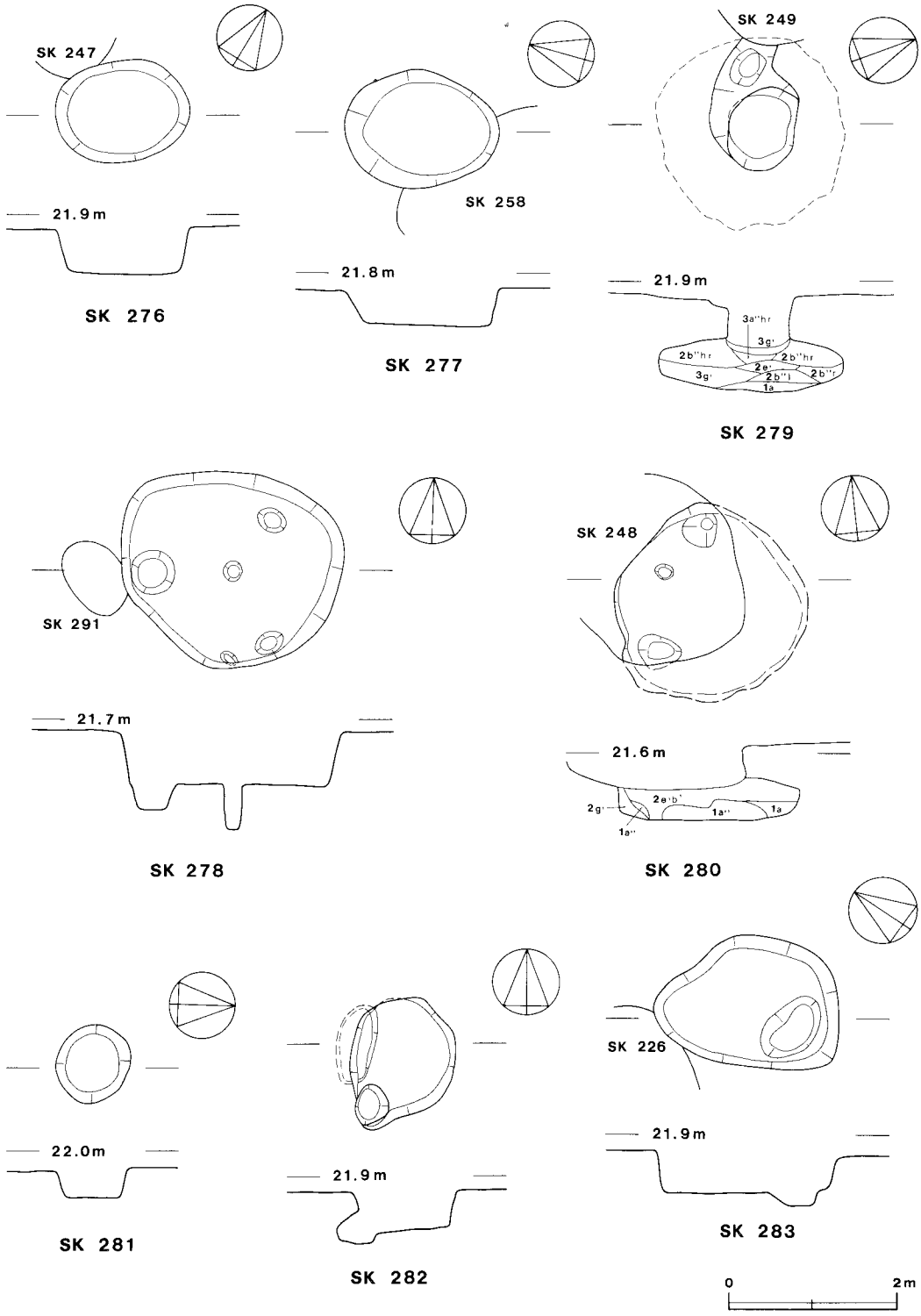
第167図　土坑実測図(27)



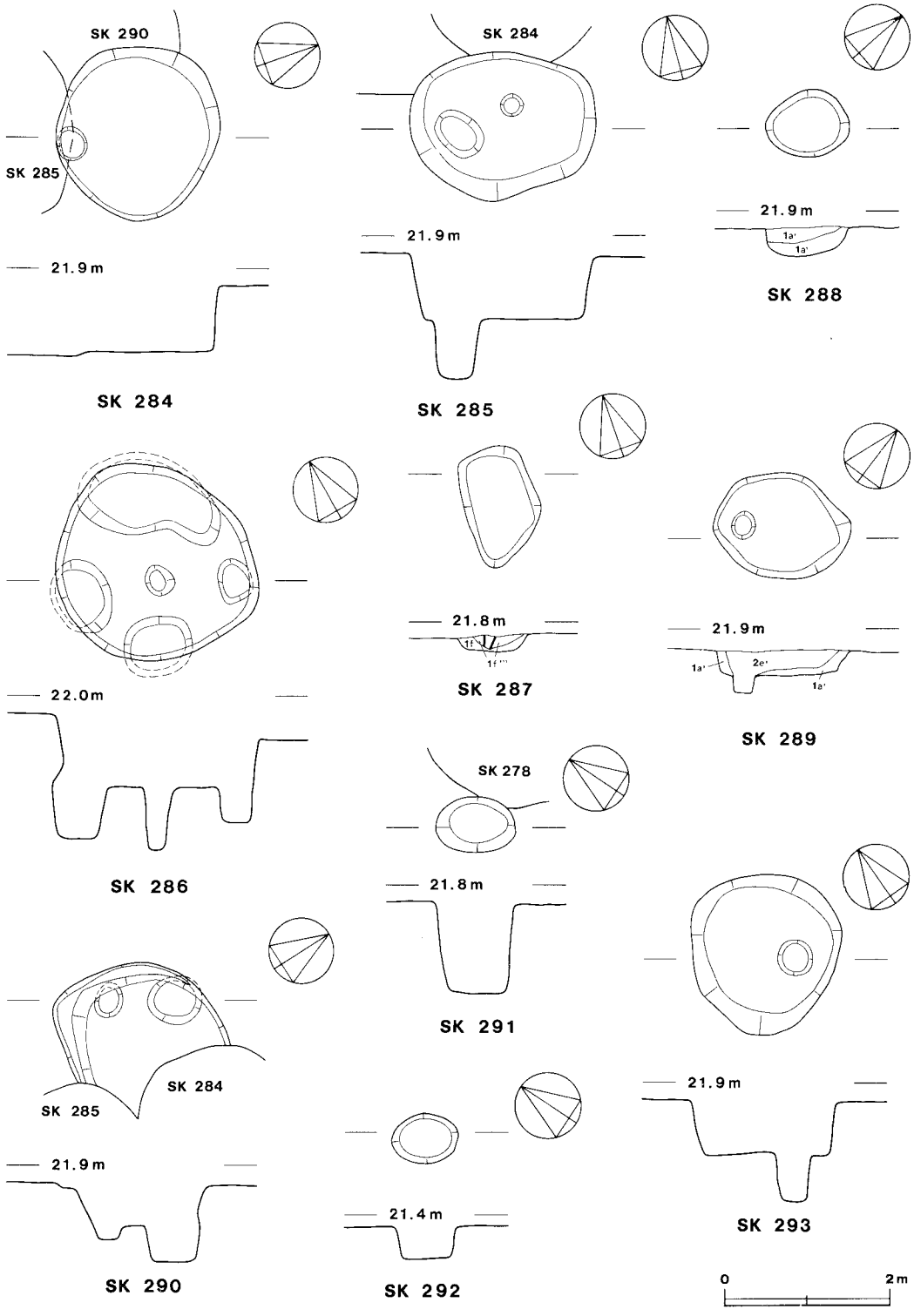
第168図　土坑実測図(28)



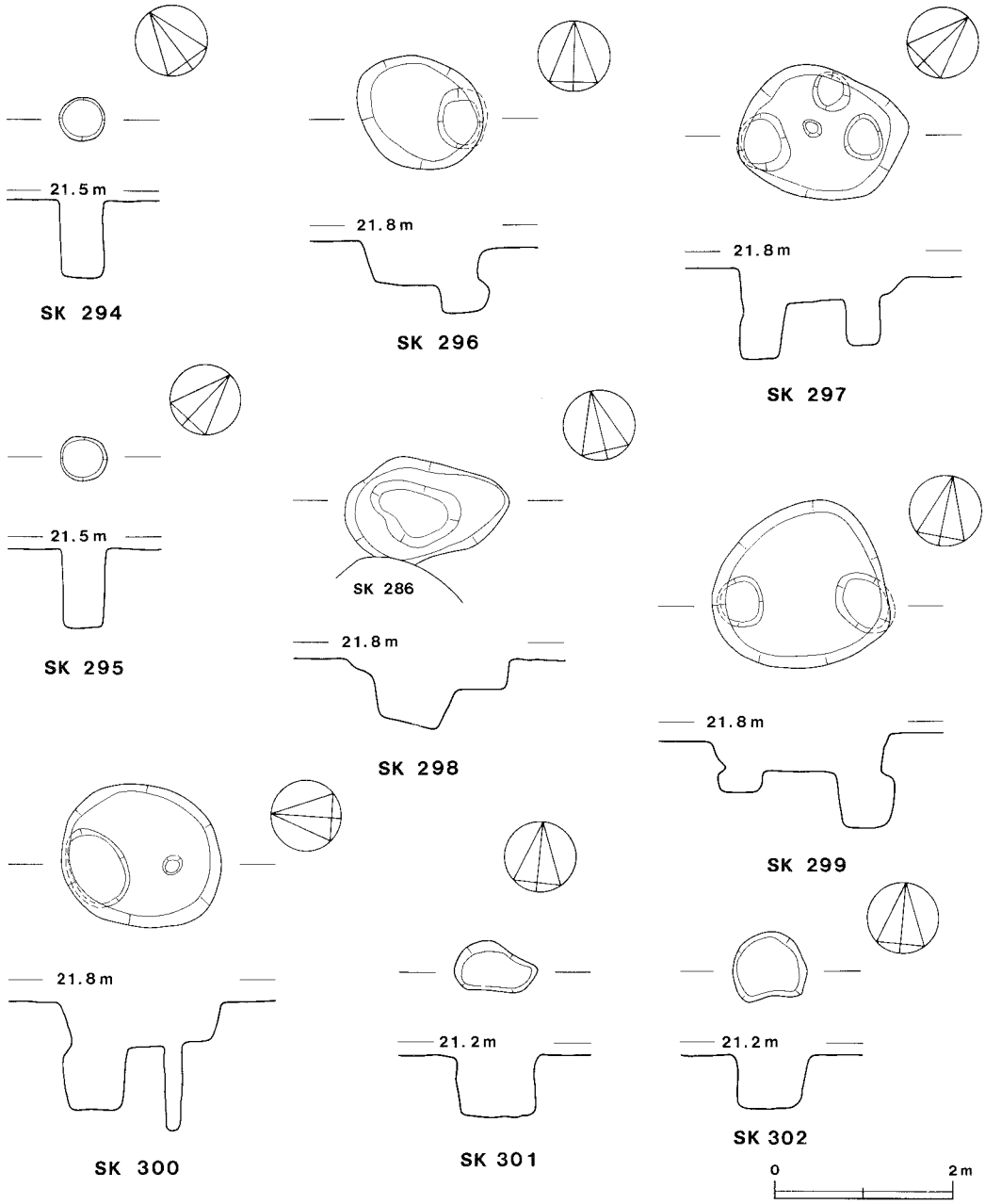
第169図　土坑実測図(29)



第170図　土坑実測図(30)



第171図　土坑実測図(31)



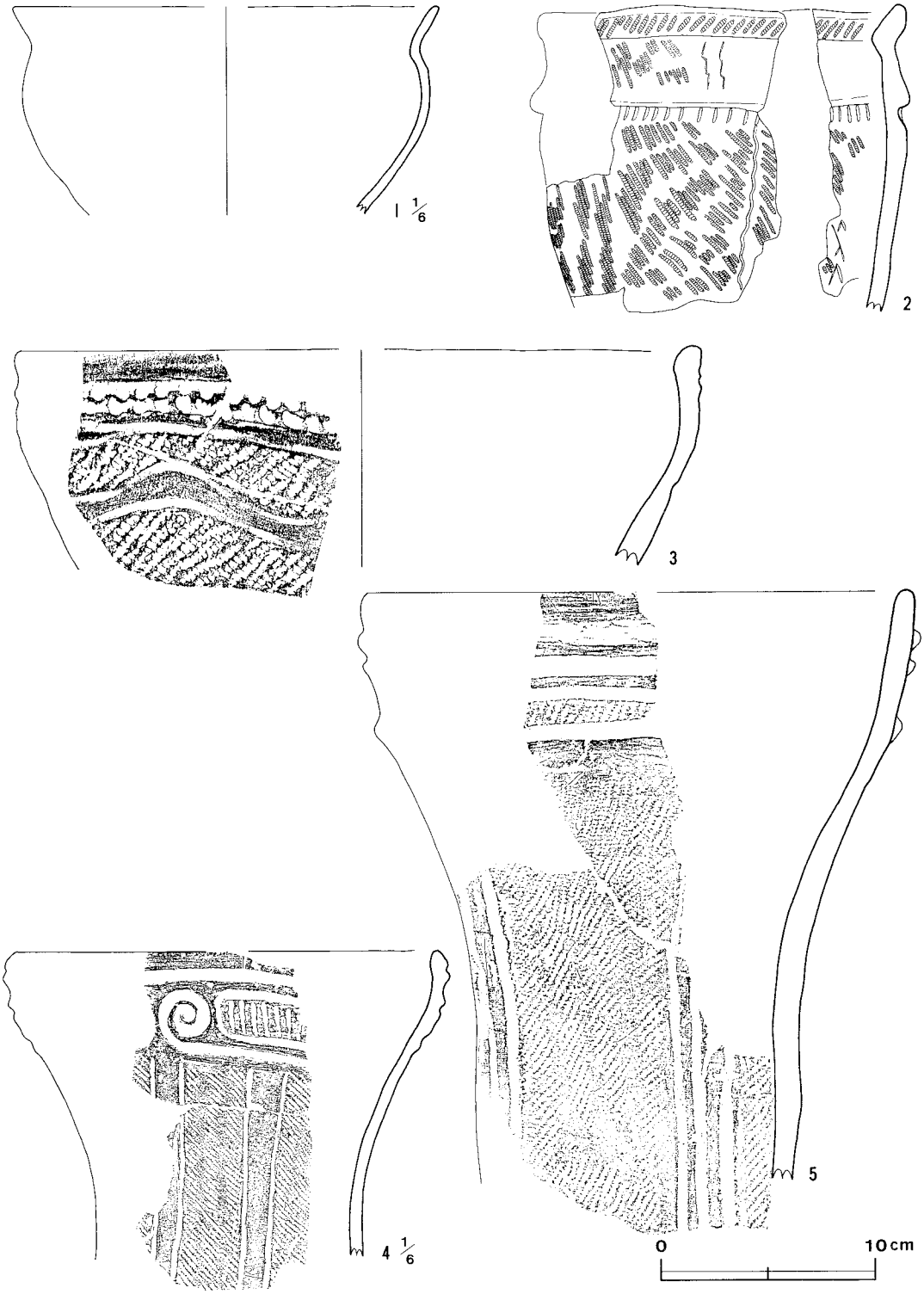
第172図　土坑実測図(32)

出土土器

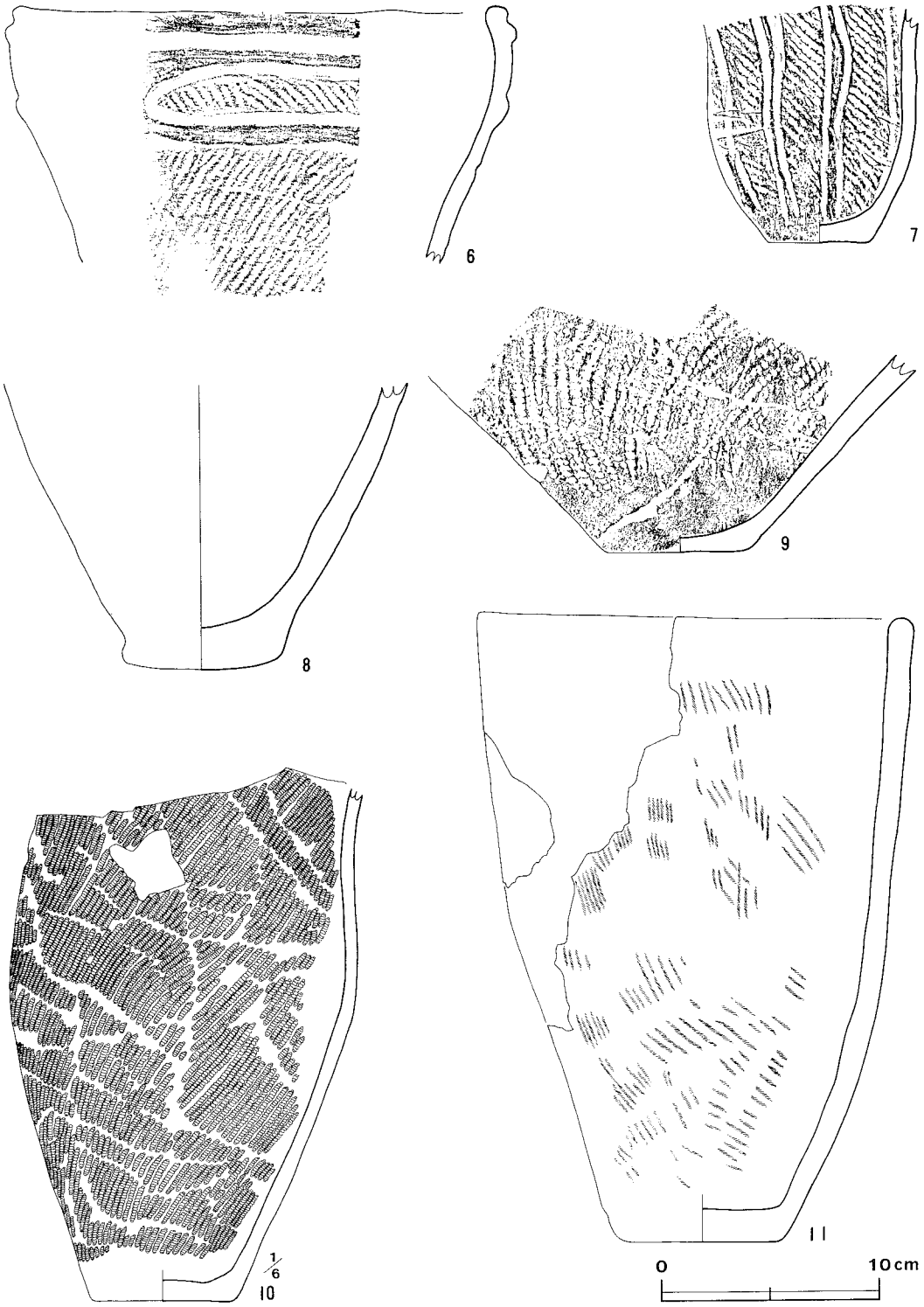
その他の土坑出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第173図 1	深鉢形土器 加曽利E	A(39.9) B(19.7)	胴部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は外傾している。無文である。外面はていねいな横位のナデ，内面は横位のナデが施されている。	砂粒・石英 褐灰色 普通	20%　6片 P110 SK15
2	深鉢形土器 大木 7a	A 17.8 B(14.3)	胴部はほぼ直立し，口縁部は内彎し，口唇直下で外傾している。口縁部文様帯は口縁直下に単節LRの縄文が斜位に施され，その下側は2本1組の細い沈線によって6単位に区画されている。区画内の外面はほとんど摩滅しているが，単節LRの縄文が認められる。胴部は口縁部との境にキザミ目が周回し，小突起を1か所備えている。また，単節RLの縄文が斜位に施され，所々に1本の細い蛇行沈線文が施されている。口縁部・胴部内面は横位のナデが施されている。	砂粒・雲母・石英 長石 橙色 普通	20%　9片 P41 SK22
3	深鉢形土器 加曽利EIII	A(32.0) B(10.3)	口縁部はやや内彎気味に立ち上がる。口縁部は2列の列点文と1本の沈線が周回している。胴部は単節LRの縄文が斜位に施され，更に口縁部の境に2本の波状沈線が周回している。内面は横位のナデが施されている。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	10%　6片 P116 SK65
4	深鉢形土器 加曽利EII	A(41.4) B(29.0)	口縁部から胴部上位にかけての破片である。口縁部は隆帯と沈線によって渦巻文と楕円文で区画され，区画内には縦位の沈線が施されている。胴部は幅の広い磨消帯が垂下し，磨消帯と磨消帯の間には単節RLの縄文が斜位に施されている。	砂粒・長石 橙色 普通	20%　13片 P117 SK104
5	深鉢形土器 加曽利EII	A(25.9) B(28.5)	胴部は下位から外彎しながら立ち上がり，口縁部はほぼ直立している。口縁部は隆帯と沈線による長楕円文で区画されるものと思われる。区画内には単節LRの縄文が斜位に施されている。胴部は幅の広い磨消帯によって6単位に区画され，区画内には単節LRの縄文が斜位に施されている。口縁部内・外面，胴部上位内面は横位のナデ，胴部中位以下は縦位のナデが施されている。	砂粒・長石 灰褐色 普通	30%　8片 P120 SK148
第174図 6	深鉢形土器 加曽利EII	A(22.5) B(11.8)	口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は隆帯と沈線による楕円文で区画され，区画内には単節RLの縄文が斜位に施されている。胴部は幅の狭い磨消帯が認められ，単節LRの縄文が斜位に施されている。内面は横位のナデが施されている。	砂粒・長石 橙色 良好	20%　8片 P121 SK157
7	小形深鉢形土器 加曽利EII	B(10.1) C 4.8	底部は平底を呈し，胴部は底部から外傾した後，直立している。胴部の一部は文様が摩滅している。胴部には無節Rの縄文が斜位に施され，更に2本1組の沈線が8単位と，1本の沈線が垂下している。	砂粒・石英・長石 にぶい橙色 普通	50%　4片 P122 SK187
8	深鉢形土器 加曽利E	B(13.3) C 7.3	底部はやや丸味をおび，胴部は底部から外傾しながら立ち上がっている。無文である。内・外面とも縦位の雑なナデが施されている。	砂粒・長石 橙色 普通	30%　3片 P123 SK191
9	鉢形土器 加曽利EII	B (8.5) C 6.7	底部は平底を呈し，胴部は外側に大きく外傾しながら立ち上がっている。胴部には単節LRの縄文が斜位に施されている。内面は縦位のナデが施されている。	砂粒・長石 橙色 普通	20%　8片 P141 SK196
10	深鉢形土器 加曽利E	B(49.7) C 13.5	底部は平底を呈し，胴部は底部から内彎気味にやや外側に開きながら立ち上がっている。口縁部は欠損している。胴部全面には単節LRの縄文が斜位に施されている。底部直上の外面は横位のナデ，胴部内面は縦位のナデが施されている。	砂粒・長石 橙色 良好	70%　32片 P30 SK206
11	深鉢形土器 加曽利E	A 20.0 B 29.1 C 8.0	底部は平底を呈し，胴部は軽く外傾しながら立ち上がり口縁部に至る。器面全体に無節Lの縄文が斜位や縦位に雑に施されている。口縁部内面は横位のナデが施され，その他は摩滅している。	砂粒 にぶい褐色 普通	70%　21片 P31 SK222
第175図 12	深鉢形土器 加曽利EII	A(30.1) B(22.0)	口縁部から胴部上位にかけての土器片である。口縁部は隆帯と沈線によって渦巻文と半楕円形の区画が施され，区画内には単節LRの縄文が斜位に施されている。胴部は幅の狭い磨消帯が垂下し，磨消帯と磨消帯の間には単節LRの縄文が斜位に施されている。口縁部内面は横位のナデが施され，胴部内面は摩耗している。	砂粒・長石 灰褐色 普通	20%　12片 P149 SK250

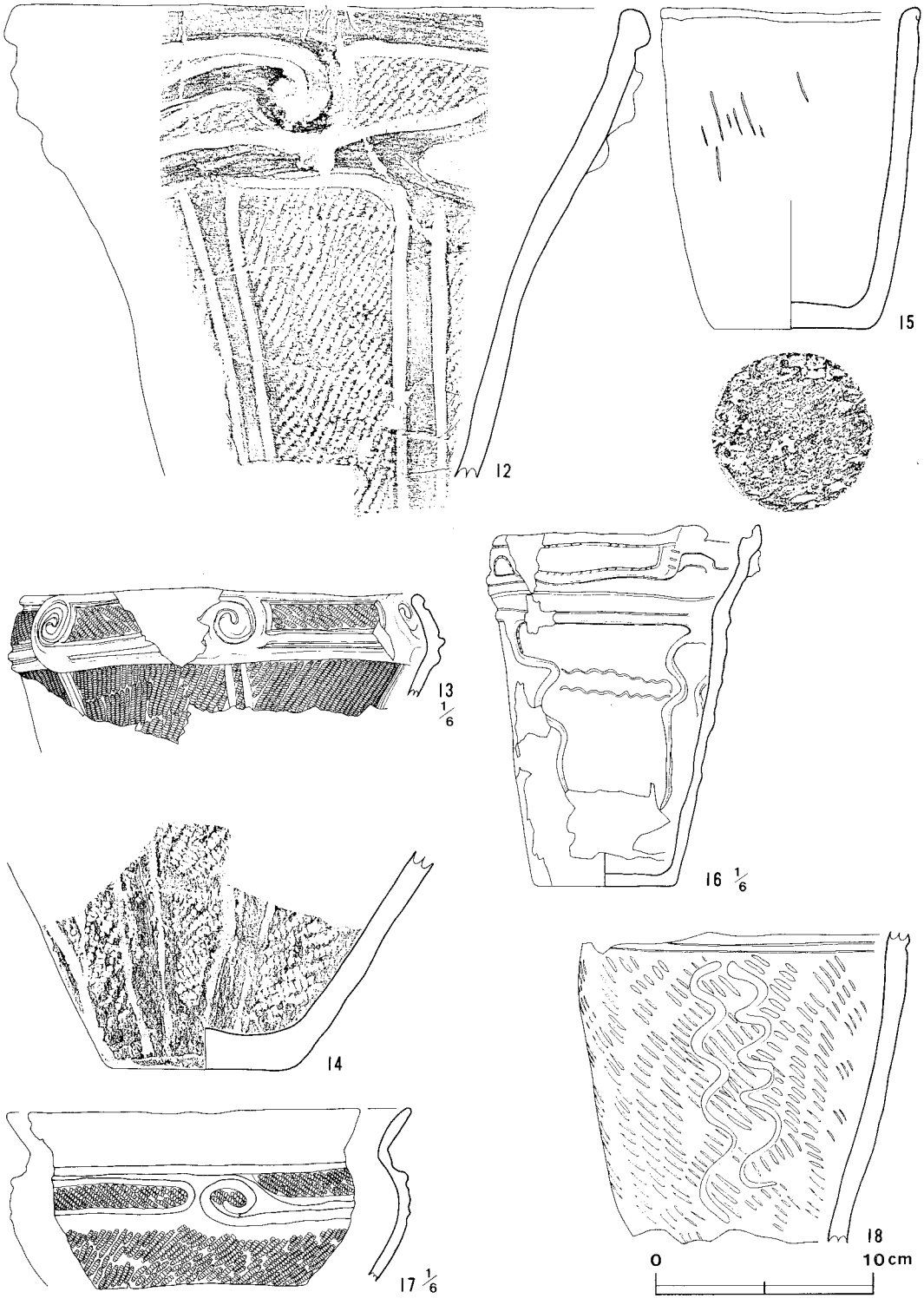
図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備　考
第175図 13	深鉢形土器 加曽利EII	A 37.1 B(14.5)	口縁部から胴部上位にかけての大形の破片である。口縁部は隆帯と沈線による渦巻文が6単位構成されるものと思われる。渦巻文との間には単節RLの縄文が施されている。胴部は2本の沈線によって6単位に区画され，区画内には単節RLの縄文が斜位に施されている。口縁部・胴部内面は横位のハケ目が施されている。	砂粒・長石 にぶい赤褐色 普通	20%　11片 P35 SK253
14	深鉢形土器 加曽利E	B (9.7) C 8.5	底部は平底を呈し，胴部は底部から外傾しながら立ち上がっている。胴部は単節LRの縄文が斜位に施され，幅の狭い磨消帯が10本胴部下位まで垂下している。内面は摩滅している。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	30%　7片 P126 SK256
15	小形深鉢形土器 阿玉台	A(12.0) B 15.0 C 7.4	無文のほぼ円筒形を呈する土器で，口縁部内・外面，胴部内面は横位のナデ，胴部外面は縦位のていねいなナデが施されている。底部に網代痕がわずかに認められる。	砂粒・石英・長石 にぶい橙色 良好	60% 1個体 P127 SK257
16	深鉢形土器 阿玉台	A 26.2 B 33.6 C 13.5	口縁部のやや広い円筒形を呈する土器である。口縁部と胴部は縦半分欠損している。口縁部は2列の結節沈線文の両端にキザミ目を施した2個の突起を有するものと思われる。突起間には一列の結節沈線文を沿わせた隆帯で長楕円区画が施されている。楕円区画直下には1本の沈線が周回している。口縁部と胴部との境には両端に1列の結節沈線文を沿わせた断面カマボコ状の隆帯を周回させている。胴部には断面三角形を呈する「S」字状と逆「S」字状の隆帯を断面カマボコ状の隆帯と結合した形で1単位として垂下させ，その間に2本の波状沈線文を横位に施している。	砂粒・雲母・石英 長石 にぶい褐色 普通	70%　48片 P33 SK265
17	深鉢形土器 加曽利EIII	A(37.2) B(16.3)	口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は無文である。胴部は口縁部直下に1本の沈線が横位に周回し，その下側は隆帯と沈線によって渦巻文と長楕円文区画が施され，区画内には単節RLの縄文が斜位に施されている。沈線の下側にはなぞりが見られる。更に，単節RLの縄文が斜位に施されている。口縁部内・外面，胴部内面は横位のていねいなナデが施されている。	砂粒・長石 浅黄橙色 良好	20%　3片 P129 SK286
18	深鉢形土器 加曽利E	B(14.0)	胴部片である。胴部には1本の横位の沈線が巡え，器面にL{比の縄文が斜位に施されている。更に2本の蛇行沈線が4単位垂下している。内面は摩滅している。	砂粒・長石 橙色 不良	40%　3片 二次焼成 P40SK287



第173図　その他の土坑出土土器実測図(1)



第174図　その他の土坑出土土器実測図(2)



第175図　その他の土坑出土土器実測図(3)

3 炉　　穴

第237号土坑（第165図）

本跡は当遺跡の南西側D2g$_8$区に確認され，本跡の近辺に第235・236・238号土坑，約10m西側に第220・251号土坑が存在している。本跡を含めこれらの土坑も，土坑として通し番号で扱っているがいずれも炉穴である。なお，本文では，炉穴の立ち上がり部を炉壁，炉穴の底面部を炉穴底面，火の焚かれたと思われる掘り込み部を炉床と呼称した。

平面形は楕円形を呈し，長径方向はN－45°－Eで，規模は長径1m，短径0.8m，深さ0.2mである。炉壁全体は赤く焼け，ややゆるやかに立ち上がり，炉床は皿状を呈し，非常に硬く焼けている。炉穴の覆土上層はローム粒子中量・ローム小ブロック微量・焼土粒子微量を含む暗褐色土，下層はローム粒子中層・焼土粒子・焼土小ブロックを微量含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物は，覆土上・中層から縄文時代早期の茅山式の深鉢形土器の口縁部から胴部片にかけてのもので，つぶれた状態でまとまって出土している。なお，同じ形態の炉穴は第235・238号土坑である。

出土土器

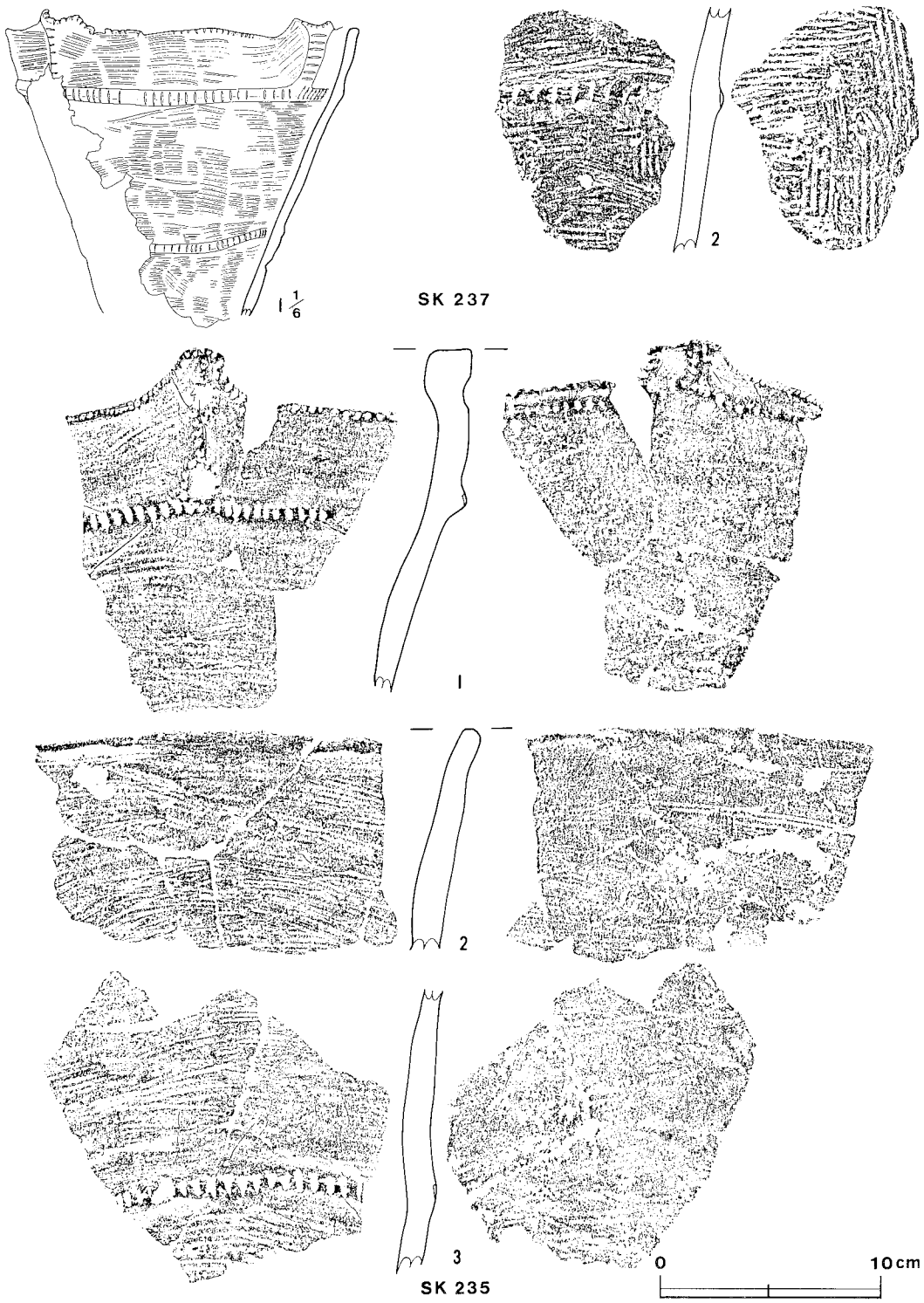
第237号土坑出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備　考
第176図 1	深鉢形土器 茅　山	A 32.5 B(28.6)	胴部は外傾しながら立ち上がり，口縁部はほぼ直立している。口縁部は半分以上欠損しているので明確ではないが，隆帯にキザミ目と，上面にキザミ目をもつ小突起により4単位に区画されている。区画内には横位の条痕文が施され，口唇部にはキザミ目が施されている。胴部はそれぞれキザミ目を有する2段の隆帯が横位に巡り，上段の隆帯は口縁部と胴部とを区画している。下段の隆帯の上・下段には条痕文が横位に施されている。内面も条痕文が横位や斜位に施されている。	砂粒・長石 灰褐色 不良	30%　41片 P32

第176図2は，第237号土坑（炉穴）から出土した縄文土器片の拓影図である。2は胴部片で，隆線が横位に施され，隆線上にキザミ目が施されている。外面は条痕文が横位や斜位に施され，内面は条痕文を横位に施し，その上に縦位の条痕文が重なるように施されている。

第235号土坑出土土器

第176図1～3は，第235号土坑（炉穴）から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は口縁部から胴部にかけての破片である。1は突起を備え，口唇部の内面は下側から刺突文が，口唇部の外面は竹管による圧痕文が施されている。口縁部は突起直下から竹管文を下から刺突した刺突文で「ʕ」状を描き，上下の「○」の中は半円形の指頭圧痕が加えられている。また，竹管によって下から刺突の施された横位の隆帯によって口縁部と胴部が区画されている。内・外面に条痕文が横位や斜位に施され，内面の条痕文は消されている。2はやや雑な作りで，内・外面に条



第176図　第237・235号土坑出土土器実測図・拓影図

痕文を横位に施し，内面の条痕文は一部を除いて消されている。口唇直下に楕円形の補修孔が外面から穿たれている。

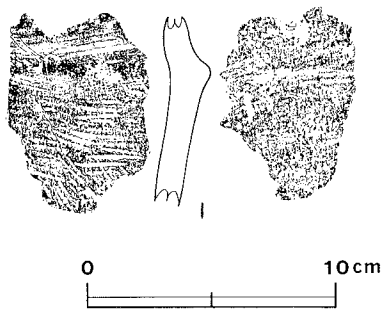
3は胴部片である。1と同一個体である。低い隆線が横位に施され，隆線上に竹管によって下側から刺突文が施されている。外面は条痕文が横位に施され，内面は摩滅している。

第220号土坑（第163図）

本跡は$D2g_5$区に確認され，縄文時代中期の第197号土坑に北側を掘り込まれている。

平面形は楕円形を呈し，長径方向はN－0°で，規模は長径2.8m，短径2.1m，深さ0.2mである。炉壁はロームで硬く，外傾しながら立ち上がり，炉底面はほぼ平坦で硬い。南東壁下に長径0.3m，短径0.2m，深さ0.2mのピットが存在している。南東側には長径1m，短径0.9mの円形の炉床と，やや西側には長径0.6m・短径0.5mの円形の炉床が存在し，それぞれ皿状に20cm掘り下げられている。炉床は双方とも硬く焼け，焼土粒子を多量に含む暗赤褐色土が充満している。

炉穴覆土はローム粒子中量・焼土粒子少量を含む極暗褐色土，北西壁ぎわの下層は焼土粒子多量を含む暗褐色土がほぼ自然堆積している。



第177図
第220号土坑出土土器拓影図

遺物は，覆土中・下層から茅山式の土器片1片，黒浜式の土器片2片，浮島式の土器片1片，加曽利E式の土器片が15片出土している。

出土土器

第177図1は，第220号土坑（炉穴）から出土した縄文土器片の拓影図である。1は胴部片で，断面三角形の隆線が横位に施され，内・外面に横位の条痕文，内面は一部を残して条痕文が磨消されている。

第251号土坑（第167図）

本跡は当遺跡の南西側$D2g_6$区に確認され，第220号炉穴に隣接している。

平面形は楕円形を呈し，長径方向はN－0°で，規模は長径2.1m，短径1m，深さ0.2～0.3mである。炉壁はゆるやかに立ち上がり，炉穴底面はほぼ平坦で硬く，南端に長径0.8m・短径0.7mの円形の炉床が存在し，皿状に約0.2m掘り下げられている。炉床は硬く焼け，焼土粒子を多量含む暗赤褐色土が堆積している。

炉穴の覆土は上層から下層にかけて焼土粒子・ローム粒子を多量含む暗褐色土と，にぶい褐色土がほぼ自然堆積している。

遺物は，出土しなかった。

4　埋　　甕

当遺跡から検出された埋甕遺構は，わずかに１基のみである。確認の段階では埋甕遺構の存在が認められず第259号土坑として取り扱ってきたが，調査進展に伴い埋甕遺構であることが判明した。したがって，本項を設け，遺構の概要を略述することとする。

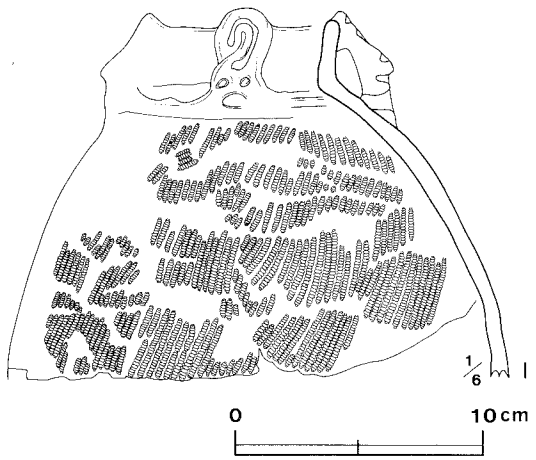
第１号埋甕遺構（第168図）

本跡は当遺跡の南西側D2d$_6$区に確認され，縄文時代中期の第264号土坑と0.6m離れた第263号土坑との間に位置している。本跡は直径0.5ｍ・深さ約0.5ｍの円形を呈する土坑から検出され胴部中位から底部を欠損した縄文時代後期の網取式の深鉢形土器（第178図１）を75°南西側に傾けて埋設されていたもので，逆位状態で検出された。土器は土坑の底面まで達せず，覆土内に埋設されており，掘り方は確認できなかった。

土器内の覆土は４層から成り，上層はローム粒子少量・焼土粒子・炭化粒子を微量含む褐色土，下層はローム粒子を少量含む暗褐色土が自然堆積している。また，埋甕の下の土層はピット状の狭い土坑にすっぽり土器が埋設されていたため，掘り込んでしまい，土層は不明である。

第１号埋甕遺構出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴　及　び　文　様	胎土・色調・焼成	備　考
第178図 1	深鉢形土器 網　　取	A 16.7 B(29.7)	胴部は中位からやや内彎しながら立ち上がり，口縁部は直立している。胴部中位以下は欠損している。口縁部は両端の凹んだ「ᘐ」状の沈線と，その下側に横に２つの穴を施した把手によって４単位に区画されている。口縁部は無文である。胴部は単節ＬＲの縄文が斜位にやや雑に施されている。口縁部内・外面，胴部内面は横位のナデが施されている。	砂粒・長石 橙色 良好	50%　54片 P36



第178図　第１号埋甕遺構出土土器実測図

5　土　製　品

当遺跡からは，耳栓・有孔円板・円板・土器片錘などの土製品が出土している。本項では，各器種ごとに解説を概述し，個々の土製品の出土位置，法量等については一覧表にして掲載した。

(1)　耳　　栓（第180図）

耳栓は５個出土しているが，完形品は１個のみで，４個は一部ないし半分欠損している。１は完形品で，滑車形を呈し中央に直径0.8cmの孔が貫通している。直径が3.3cm，くびれ部の直径が２cmである。無文で，ナデが全面に施されている。胎土は砂粒・雲母が含まれ，色調は褐色である。縄文時代中期の加曽利Ｅ期の第62号住居跡からの出土である。４は一部欠損しているが，上径約3.1cm，下径4.5cmで，器台の形状を呈している。無文で，外面は剥離している。胎土は砂粒・長石を含み，色調は明褐色である。第222号土坑からの出土である。

(2)　玦状耳飾（第180図）

６は$C2h_9$区から１個のみ出土しているが，半分欠損している。周縁に横位の細い沈線を数本施し，その上に縦位の細い沈線が深めに１本横切っている。胎土は砂粒を含み，色調は灰褐色である。

(3)　手　捏　ね（第180図）

７は雑な作りである。底部は平底状で，胴部は厚い。内部は指１本入る位の大きさである。内外面にナデが施され，無文である。胎土は砂粒を含み，色調は橙色である。第40号土坑からの出土である。

(4)　有孔円板（第180図）

有孔円板は６個出土しているが，完形品は１個のみで，４個は一部ないし，３分の１が欠損し，他の１個は穿孔途中のものである。14は完形品で，縄文土器の胴部片を利用したものである。長径3.6cm・短径3.3cm，孔の大きさは0.9cmである。やや片寄った位置に両側から穿孔されている。胎土は砂粒を含み，色調は橙色である。$A5d_2$区からの出土である。12は一部欠損しており，縄文土器胴部片の中央部に直径0.8cmの孔を片側から穿っている。胎土は砂粒を含み，色調は明赤褐色である。第15号住居跡からの出土である。15は無文の土器片で，直径0.9cm，深さ0.2cmの穿孔途中の凹みが認められる。胎土は砂粒を含み，色調は明褐灰色である。$A4e_0$区からの出土である。

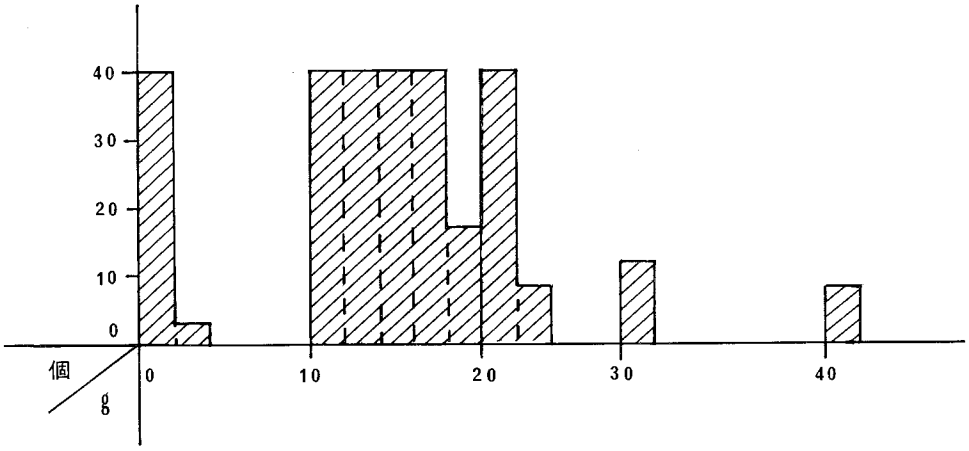
(5)　円　　板（第180図）

円板は10個出土しているが，17は縄文土器の底部片を利用したもので，長径7.1cm・短径6.4cmと大きい。胎土は砂粒を含み，色調はにぶい褐色である。第２号住居跡出土である。残りの９個は縄文土器片の胴部片を利用したものである。

(6)　土器片錘（第180～184図）

土器片錘は合計297点出土している。住居跡出土136点，土坑出土97点，周溝出土２点，グリッ

ド出土59点，表採３点である。第53号住居跡からは11個とまとまって出土している。また，遺存状態をみると完形品，ほぼ完形品が288点で，約97%を占めている。完形品の重量をみると，最も重いものが47.0ｇ，最も軽いものが5.1ｇである。



第179図　土器片錘重量分布図

第４表　土製品一覧表

図版番号	名称	出土地点	法量 上径(cm)	下径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
第180図1	耳栓	SI 62	3.3	3.3	3.2	22.9	DP310
2	耳栓	SI 27	−	4.8	(2.5)	(25.7)	半分欠損 DP309
3	耳栓	SK86	(2.7)	3.7	2.1	(13.3)	一部欠損 DP311
4	耳栓	SK222	(3.1)	4.5	4.2	(32.1)	一部欠損 DP312
5	耳栓	SK232	(1.7)	(3.2)	2.5	(13.7	一部欠損 DP313
6	玦状耳飾	C2h9	3.4	2.0	1.3	(8.2)	半分欠損 DP322

図版番号	名称	出土地点	法量 長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
第180図7	手捏ね	SK40	(2.1)	3.1	1.7	(16.3)	一部欠損 DP333
8	土製品	SI 1	(3.3)	(0.9)	0.8	(2.5)	一部欠損 DP315
9	装飾品	SI 46	(4.3)	4.0	1.6	(15.6)	半分欠損 DP318
10	有孔円板	SI 1	(6.1)	(3.4)	1.4	(30.1)	一部欠損 DP306
11	有孔円板	SI 1	(4.2)	(2.1)	1.1	(9.8)	1/4のみ DP307
12	有孔円板	SI 15	4.9	(4.9)	0.9	(25.5)	一部欠損 DP305
13	有孔円板	SI 31	(4.0)	(2.2)	(1.2)	(7.0)	1/4のみ DP321
14	有孔円板	A5d2	3.6	3.3	0.7	9.6	DP308
15	有孔円板	A4e9	3.5	3.5	1.1	13.6	穿孔途中 DP326
16	円板	SI 2	4.2	3.9	1.3	18.2	DP299
17	円板	SI 2	7.1	6.4	1.6	75.9	DP298
18	円板	SI 3	5.9	6.0	1.2	34.5	DP300
19	円板	SI 4	2.9	2.7	1.1	7.6	DP323
20	円板	SI 12	3.2	2.9	0.8	8.1	DP301
21	円板	SI 14	4.3	4.3	1.1	20.8	DP302
22	円板	SI 22	4.2	4.5	1.4	26.9	DP324

図版番号	名称	出土地点	法量 長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
第180図23	円板	SI 37	2.6	2.6	0.8	4.7	DP325
24	円板	SI 38	1.7	1.9	1.0	5.5	DP303
25	円板	SI 53	3.9	4.1	0.9	14.6	DP304
26	土器片錘	SI 1	3.8	3.5	1.2	15.1	DP1
27	土器片錘	SI 1	2.5	2.8	1.1	9.5	DP2
28	土器片錘	SI 3	2.7	2.6	1.3	7.8	DP3
29	土器片錘	SI 13	4.0	(4.7)	0.9	(17.6)	一部欠損 DP6
30	土器片錘	SI 13	4.1	3.9	0.9	15.3	DP7
31	土器片錘	SI 14	4.3	3.9	1.1	17.3	DP8
32	土器片錘	SI 26	3.5	2.5	0.9	9.6	DP19
33	土器片錘	SI 28	4.4	3.4	0.7	19.8	DP23
34	土器片錘	SI 35	4.3	3.5	1.1	19.0	DP48
35	土器片錘	SI 35	4.2	(3.3)	0.9	(14.5)	一部欠損 DP49
36	土器片錘	SI 35	3.4	(2.7)	0.9	(11.2)	DP50
37	土器片錘	SI 35	3.2	2.6	1.0	10.4	DP51
38	土器片錘	SI 35	3.6	2.6	1.0	12.9	DP52
39	土器片錘	SI 41	2.6	3.1	1.2	10.2	DP63
40	土器片錘	SI 41	3.8	3.1	1.0	12.7	DP64
41	土器片錘	SI 41	4.7	4.2	1.0	19.8	DP65
42	土器片錘	SI 43	4.0	3.7	0.8	19.5	DP66
43	土器片錘	SI 43	4.1	3.2	1.0	17.0	DP67
44	土器片錘	SI 43	3.9	3.3	1.1	21.5	DP68
45	土器片錘	SI 43	3.9	3.5	1.2	19.5	DP69
46	土器片錘	SI 43	4.8	3.5	1.4	21.4	DP70

図版番号	名称	出土地点	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
第180図 47	土器片錘	SI 44	3.4	3.0	1.1	12.5	DP71
48	土器片錘	SI 45	6.8	3.9	1.4	34.0	DP72
49	土器片錘	SI 45	4.7	4.3	1.3	25.5	DP73
50	土器片錘	SI 45	4.2	2.7	1.3	16.0	DP74
51	土器片錘	SI 45	4.5	4.1	1.1	22.7	DP75
52	土器片錘	SI 45	3.3	3.3	1.0	10.9	DP76
53	土器片錘	SI 45	4.3	3.3	1.2	19.8	DP77
54	土器片錘	SI 45	4.5	3.2	1.0	15.7	貝層の中 DP334
55	土器片錘	SI 45	3.8	2.9	0.8	11.7	貝層の中 DP335
56	土器片錘	SI 47	4.5	3.6	1.1	24.0	DP78
57	土器片錘	SI 47	4.4	2.6	1.0	17.6	DP79
58	土器片錘	SI 47	3.8	3.0	0.9	17.0	DP80
第181図 59	土器片錘	SI 47	3.4	3.0	0.7	14.5	DP81
60	土器片錘	SI 47	4.6	2.8	1.0	18.2	DP82
61	土器片錘	SI 47	4.0	3.2	0.9	18.6	DP83
62	土器片錘	SI 47	3.7	3.3	1.0	15.0	DP84
63	土器片錘	SI 51	(2.5)	2.6	0.7	(6.2)	一部欠損 DP85
64	土器片錘	SI 51	3.8	2.6	0.8	11.2	DP86
65	土器片錘	SI 51	4.1	3.9	0.8	13.6	DP87
66	土器片錘	SI 51	3.7	3.0	1.2	15.8	DP88
67	土器片錘	SI 51	3.3	3.1	1.0	12.1	DP89
68	土器片錘	SI 51	3.4	3.1	0.8	10.1	DP90
69	土器片錘	SI 51	2.9	2.6	1.0	8.4	DP91
70	土器片錘	SI 51	(3.5)	2.9	0.9	(8.5)	一部欠損 DP92
71	土器片錘	SI 51	2.7	2.6	1.0	7.5	DP93
72	土器片錘	SI 52	3.4	3.5	1.0	11.8	DP94
73	土器片錘	SI 52	4.5	3.2	0.9	15.5	DP95
74	土器片錘	SI 53	5.5	4.3	1.1	24.3	DP96
75	土器片錘	SI 53	4.2	3.9	1.0	16.4	DP97
76	土器片錘	SI 53	4.6	3.2	1.0	16.1	DP98
77	土器片錘	SI 53	3.3	3.2	1.2	10.8	DP99
78	土器片錘	SI 53	4.3	2.9	0.9	11.9	DP100
79	土器片錘	SI 53	4.9	4.4	0.9	23.3	DP101
80	土器片錘	SI 53	4.2	3.4	1.1	17.4	DP102
81	土器片錘	SI 53	4.8	3.6	1.1	22.2	DP103
82	土器片錘	SI 53	4.1	3.9	0.9	13.5	DP104
83	土器片錘	SI 53	3.7	2.6	1.2	11.5	DP105
84	土器片錘	SI 53	3.6	3.9	0.9	13.8	DP106
85	土器片錘	SI 54	4.7	2.7	1.0	18.5	DP107
86	土器片錘	SI 56	5.4	3.4	1.1	23.2	DP108
87	土器片錘	SI 56	4.5	4.3	0.8	23.0	DP109
88	土器片錘	SI 56	4.8	5.0	1.0	33.0	DP110
89	土器片錘	SI 56	5.2	4.1	1.0	32.1	DP111
90	土器片錘	SI 56	4.6	3.7	0.8	17.2	DP112
91	土器片錘	SI 60	4.0	3.8	1.3	17.7	DP113
92	土器片錘	SI 60	4.2	2.9	1.6	18.3	DP114

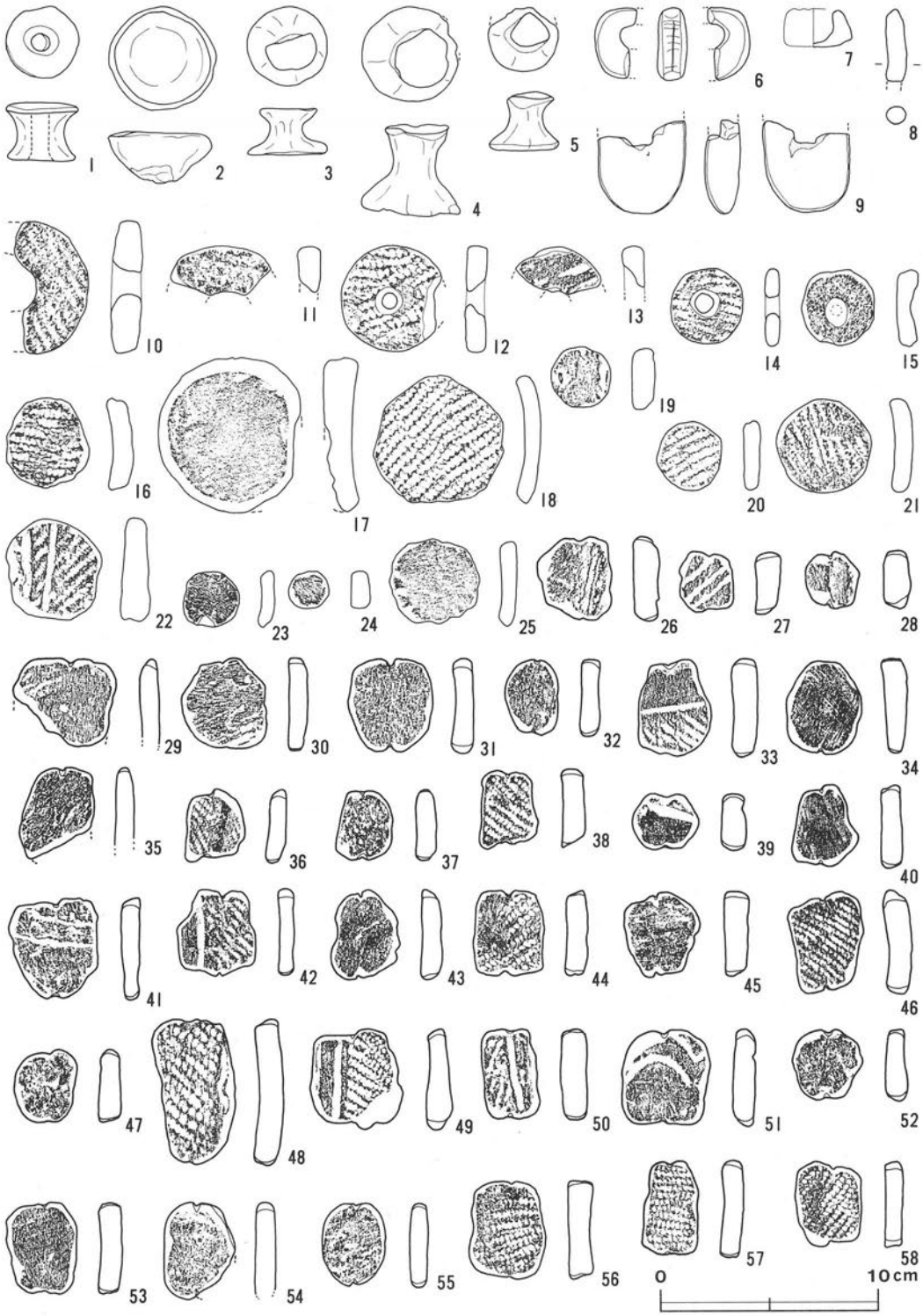
図版番号	名称	出土地点	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
第181図 93	土器片錘	SI 61	3.8	2.8	0.9	11.3	DP115
94	土器片錘	SI 62	(3.5)	4.3	1.3	(22.5)	半分欠損 DP116
95	土器片錘	SI 62	4.5	2.7	0.9	15.0	DP117
96	土器片錘	SI 62	2.6	2.4	1.2	8.0	DP118
97	土器片錘	SI 63	3.6	2.9	0.8	10.3	DP119
98	土器片錘	SI 66	4.3	3.3	1.5	21.1	DP120
99	土器片錘	SI 66	3.6	3.1	0.8	13.8	DP121
100	土器片錘	SI 68	4.4	3.2	1.0	17.1	DP122
101	土器片錘	SI 68	4.8	3.4	1.1	17.9	DP123
102	土器片錘	SI 68	3.6	2.7	1.2	12.7	DP124
103	土器片錘	SI 68	5.6	4.0	1.5	31.7	DP125
104	土器片錘	SI 68	3.3	3.8	1.0	17.4	DP126
105	土器片錘	SI 68	4.2	3.5	0.9	16.7	DP127
106	土器片錘	SI 68	4.1	3.8	1.0	22.7	DP128
107	土器片錘	SI 68	4.0	3.5	1.6	23.3	DP129
108	土器片錘	SI 68	4.6	3.6	1.2	23.6	DP130
109	土器片錘	SI 68	4.0	3.0	4.1	19.3	DP131
110	土器片錘	SI 68	(3.3)	3.0	0.9	(8.6)	一部欠損 DP132
111	土器片錘	SI 68	3.7	2.9	1.0	11.3	DP133
112	土器片錘	SI 69	3.8	2.8	1.0	11.5	DP134
113	土器片錘	SI 69	4.0	3.2	1.0	14.9	DP135
114	土器片錘	SI 69	4.8	2.9	1.5	20.5	DP136
115	土器片錘	SK11	4.6	3.7	1.1	19.9	DP137
116	土器片錘	SK11	3.8	(3.7)	0.9	(12.5)	一部欠損 DP138
117	土器片錘	SK11	4.9	3.9	1.1	25.2	DP139
118	土器片錘	SK14	4.6	4.1	0.9	22.5	DP140
119	土器片錘	SK14	5.2	4.5	1.1	29.2	DP141
第182図 120	土器片錘	SK14	4.5	3.2	0.9	17.8	DP142
121	土器片錘	SK14	3.9	3.4	1.2	18.8	DP143
122	土器片錘	SK15	4.1	3.3	0.9	17.9	DP144
123	土器片錘	SK17	4.3	3.6	1.1	17.7	DP145
124	土器片錘	SK17	3.8	3.8	0.7	13.2	DP146
125	土器片錘	SK17	3.8	2.5	1.3	13.6	DP147
126	土器片錘	SK18	5.5	3.5	1.3	27.3	DP148
127	土器片錘	SK18	4.7	3.6	0.9	16.9	DP149
128	土器片錘	SK19	5.0	3.8	1.0	26.8	DP150
129	土器片錘	SK19	4.1	3.1	0.8	14.2	DP151
130	土器片錘	SK19	3.3	3.1	0.8	11.9	DP152
131	土器片錘	SK19	3.7	2.6	1.1	8.7	DP153
132	土器片錘	SK21	4.3	4.3	1.0	21.0	DP154
133	土器片錘	SK25	3.5	2.9	1.0	11.5	DP155
134	土器片錘	SK29	4.2	3.5	1.0	16.6	DP156
135	土器片錘	SK32	4.3	3.1	1.2	16.5	DP157
136	土器片錘	SK32	3.2	2.6	1.2	10.8	DP158
137	土器片錘	SK39	3.7	2.5	0.8	9.6	DP159
138	土器片錘	SK49	2.9	2.7	1.0	9.1	DP160

図版番号	名称	出土地点	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
第182図139	土器片錘	SK58	4.4	3.3	1.2	22.4	DP161
140	土器片錘	SK64	4.0	3.3	1.2	18.0	DP162
141	土器片錘	SK68	4.1	3.0	1.2	15.2	DP163
142	土器片錘	SK69	3.1	2.5	1.0	9.2	DP164
143	土器片錘	SK71	3.6	3.9	1.3	19.9	DP165
144	土器片錘	SK73	4.1	3.5	0.9	15.9	DP166
145	土器片錘	SK74	4.5	3.4	1.0	14.6	DP167
146	土器片錘	SK75	3.0	2.7	1.0	8.4	DP168
147	土器片錘	SK75	3.9	3.1	1.1	15.9	DP169
148	土器片錘	SK78	4.1	3.1	0.9	14.2	DP170
149	土器片錘	SK79	3.6	3.0	1.0	13.0	DP171
150	土器片錘	SK85	5.0	4.0	1.0	20.8	DP172
151	土器片錘	SK100	3.3	2.9	0.9	13.2	DP173
152	土器片錘	SK102	2.5	3.2	0.8	7.2	DP174
153	土器片錘	SK103	3.5	3.0	1.0	13.2	DP175
154	土器片錘	SK106	3.4	2.9	0.9	9.7	DP176
155	土器片錘	SK107	5.6	4.5	1.3	33.6	DP177
156	土器片錘	SK137	4.2	4.4	1.4	21.5	一部欠損 DP178
157	土器片錘	SK138	4.1	3.1	0.9	13.2	DP179
158	土器片錘	SK138	3.7	2.5	1.3	14.3	DP180
159	土器片錘	SK138	4.8	4.3	1.5	28.8	DP181
160	土器片錘	SK138	6.0	4.9	1.4	46.6	DP182
161	土器片錘	SK138	4.7	3.6	1.1	19.2	DP183
162	土器片錘	SK139	5.7	3.0	1.6	27.1	DP184
163	土器片錘	SK139	6.4	5.0	1.3	45.6	DP185
164	土器片錘	SK139	5.1	4.1	1.2	26.1	DP186
165	土器片錘	SK139	5.2	4.8	1.2	30.9	DP187
166	土器片錘	SK139	3.8	2.9	1.3	19.0	DP188
167	土器片錘	SK139	2.8	3.1	0.7	9.3	DP189
168	土器片錘	SK142	3.8	3.5	1.3	18.5	DP190
169	土器片錘	SK147	4.2	3.6	0.9	18.0	DP191
170	土器片錘	SK149	4.0	4.0	1.0	22.3	DP192
171	土器片錘	SK149	5.3	3.9	1.1	26.8	DP193
172	土器片錘	SK149	3.6	2.6	1.0	11.7	DP194
173	土器片錘	SK149	3.1	2.5	1.0	8.6	DP195
174	土器片錘	SK149	3.4	2.4	1.3	12.3	DP196
175	土器片錘	SK149	3.5	3.6	0.8	19.0	DP197
176	土器片錘	SK175	3.7	3.7	1.0	13.9	DP198
177	土器片錘	SK177	(3.3)	3.1	1.3	(14.2)	一部欠損 DP199
178	土器片錘	SK198	3.1	3.3	0.8	10.8	DP200
179	土器片錘	SK200	3.7	2.9	0.9	12.9	DP201
180	土器片錘	SK206	4.5	4.4	1.3	21.6	DP202
181	土器片錘	SK212	4.6	3.5	1.1	19.6	DP203
第183図182	土器片錘	SK212	3.7	4.1	0.9	16.8	DP204
183	土器片錘	SK212	4.3	3.6	1.0	18.8	DP205
184	土器片錘	SK218	3.2	3.1	1.1	12.8	DP206

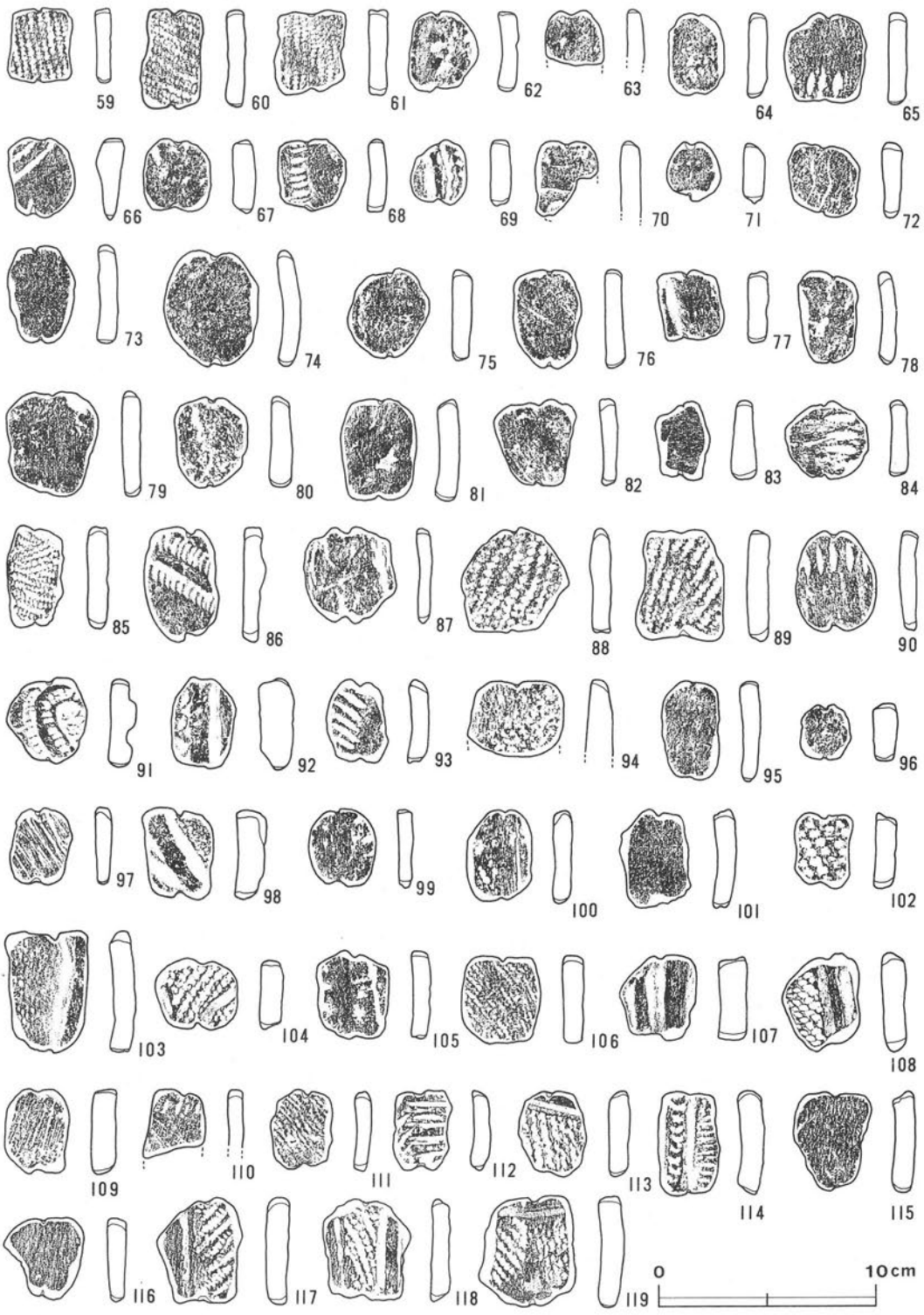
図版番号	名称	出土地点	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
第183図185	土器片錘	SK226	3.2	2.6	1.4	11.4	DP207
186	土器片錘	SK232	3.3	2.7	1.0	11.2	DP208
187	土器片錘	SK240	4.3	2.8	1.1	15.0	DP209
188	土器片錘	SK240	6.4	4.2	1.2	36.4	DP210
189	土器片錘	SK240	4.0	4.1	0.9	19.1	DP211
190	土器片錘	SK242	3.9	4.3	1.1	21.7	DP212
191	土器片錘	SK246	4.9	3.3	1.0	22.0	DP213
192	土器片錘	SK247	4.1	4.2	1.0	16.3	DP214
193	土器片錘	SK257	3.6	2.6	1.8	17.5	DP215
194	土器片錘	SK257	4.0	3.1	1.2	18.3	DP216
195	土器片錘	SK257	4.5	2.6	1.1	14.3	DP217
196	土器片錘	SK258	3.0	2.9	1.0	12.3	DP218
197	土器片錘	SK261	2.3	2.5	1.0	7.4	DP219
198	土器片錘	SK261	4.1	3.6	1.0	33.4	DP220
199	土器片錘	SK262	3.4	2.9	1.1	14.4	DP221
200	土器片錘	SK265	3.5	3.1	0.9	11.8	DP222
201	土器片錘	SK266	4.0	3.2	1.1	17.3	DP223
202	土器片錘	SK266	3.1	3.0	1.0	13.9	DP224
203	土器片錘	SK270	2.6	1.7	0.8	4.4	DP225
204	土器片錘	SK278	3.8	3.1	1.1	15.6	DP226
205	土器片錘	SK279	2.7	2.5	0.9	8.5	DP227
206	土器片錘	SK280	3.2	3.4	0.8	14.4	DP228
207	土器片錘	SK280	3.1	3.3	0.6	9.9	DP229
208	土器片錘	SK280	2.7	2.0	0.9	6.7	DP230
209	土器片錘	SK284	3.7	3.1	1.2	15.7	DP231
210	土器片錘	SK284	3.0	2.7	0.9	8.5	DP232
211	土器片錘	SK286	4.2	3.0	0.8	13.1	DP233
212	土器片錘	周溝	(3.2)	3.5	0.9	(9.6)	半分欠損 DP234
213	土器片錘	周溝	3.6	3.4	1.1	15.7	DP235
214	土器片錘	表採	3.0	2.1	0.9	5.7	DP236
215	土器片錘	表採	4.4	4.8	1.7	34.7	DP237
216	土器片錘	表採	2.8	3.0	1.0	7.5	DP238
217	土器片錘	A4e$_9$	2.9	3.0	0.8	6.8	DP239
218	土器片錘	B4c$_4$	2.8	3.7	0.8	7.4	DP240
219	土器片錘	B4e$_3$	5.8	5.2	1.4	47.3	DP241
220	土器片錘	C2h$_9$	4.1	4.2	1.1	13.6	DP242
221	土器片錘	C2h$_2$	5.1	3.7	1.4	25.7	DP243
222	土器片錘	C2h$_9$	4.2	3.2	0.9	16.9	DP244
223	土器片錘	C2h$_9$	3.7	3.4	1.1	12.9	DP245
224	土器片錘	C2i$_7$	4.0	3.0	1.0	11.7	DP246
225	土器片錘	C2j$_8$	4.2	3.9	0.9	16.2	DP247
226	土器片錘	C3j$_9$	4.3	3.4	1.1	17.1	DP248
227	土器片錘	C2j$_9$	4.1	3.5	2.3	22.9	DP249
228	土器片錘	C3e$_1$	3.7	3.5	0.9	11.2	DP250
229	土器片錘	C3e$_2$	3.0	2.2	1.3	8.6	DP251
230	土器片錘	C3e$_2$	3.5	3.6	1.0	13.3	DP252

図版番号	名称	出土地点	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
第183図231	土器片錘	C3f1	5.1	3.5	1.4	21.9	DP253
232	土器片錘	C3f1	4.5	3.4	1.1	18.2	DP254
233	土器片錘	C3f4	(3.8)	4.5	0.9	(17.6)	半分欠損 DP255
234	土器片錘	C3g2	4.6	4.4	1.3	22.5	DP256
235	土器片錘	C3g3	4.1	3.0	1.1	12.5	DP257
236	土器片錘	C3h4	3.3	3.1	0.9	10.6	DP258
237	土器片錘	C3h6	5.1	4.5	1.4	29.0	DP259
238	土器片錘	C3i4	4.7	4.5	0.9	22.1	DP260
239	土器片錘	C3i4	4.1	4.1	1.0	17.0	DP261
240	土器片錘	C3i4	4.4	2.9	1.1	15.2	DP262
241	土器片錘	C3i6	3.8	4.1	1.1	16.4	DP263
242	土器片錘	C3i6	4.5	4.7	1.0	20.0	DP264
243	土器片錘	C3i7	3.0	3.0	1.0	8.7	DP265
244	土器片錘	C3i8	3.8	2.5	1.2	10.6	DP266
245	土器片錘	C3j8	4.1	3.3	1.2	15.3	DP267
246	土器片錘	C3j6	3.6	3.2	1.3	16.0	DP268
247	土器片錘	C3j7	3.6	3.1	1.3	11.2	DP269
248	土器片錘	C3j7	(3.5)	3.8	1.3	(8.6)	半分欠損 DP270
249	土器片錘	D2a9	4.9	4.0	1.1	15.9	DP271
250	土器片錘	D2a6	4.0	3.0	1.0	12.9	DP272
251	土器片錘	D2a0	4.6	2.2	0.9	14.1	DP273
252	土器片錘	D3a1	4.6	4.4	1.3	15.2	DP274
第184図253	土器片錘	D3a2	2.5	2.1	0.8	4.5	DP275
254	土器片錘	D3a2	4.0	2.7	1.0	11.0	DP276
255	土器片錘	D3a2	4.4	4.3	1.3	28.1	DP277
256	土器片錘	D3a2	4.5	3.5	1.0	17.3	DP278
257	土器片錘	D3a4	3.1	2.9	1.1	10.6	DP279
258	土器片錘	D3a5	(4.3)	3.3	1.4	(16.9)	一部欠損 DP280
259	土器片錘	D3a5	4.8	3.3	1.4	11.5	DP281
260	土器片錘	D3a6	(2.5)	3.5	1.0	(9.9)	半分欠損 DP281
261	土器片錘	D3b2	4.4	4.5	1.4	30.2	DP283
262	土器片錘	D3b2	4.2	3.0	1.0	13.6	DP284
263	土器片錘	D3b4	6.1	5.6	1.3	39.8	DP285
264	土器片錘	D3b4	3.7	2.9	1.2	13.0	DP286
265	土器片錘	D3b6	3.7	4.3	0.9	17.2	DP287
266	土器片錘	D3b7	3.1	2.8	1.0	8.4	DP288
267	土器片錘	D3b6	3.2	3.0	1.0	13.4	DP289
268	土器片錘	D3b9	3.4	2.8	1.0	10.7	DP290
269	土器片錘	D3c5	4.9	4.0	1.4	20.7	DP291
270	土器片錘	D3c5	3.9	2.7	1.1	10.7	DP292
271	土器片錘	D3c5	3.5	2.7	0.9	10.4	DP293
272	土器片錘	D3c5	3.8	3.7	1.1	19.3	DP294
273	土器片錘	D3d5	4.0	3.2	1.0	17.7	DP295
274	土器片錘	D3d5	4.5	3.8	1.0	16.9	DP296
275	土器片錘	D3d5	(5.1)	6.2	(1.3)	(30.2)	一部欠損 DP297
276	土器片錘	SI 8	4.9	3.5	1.35	21.6	DP5

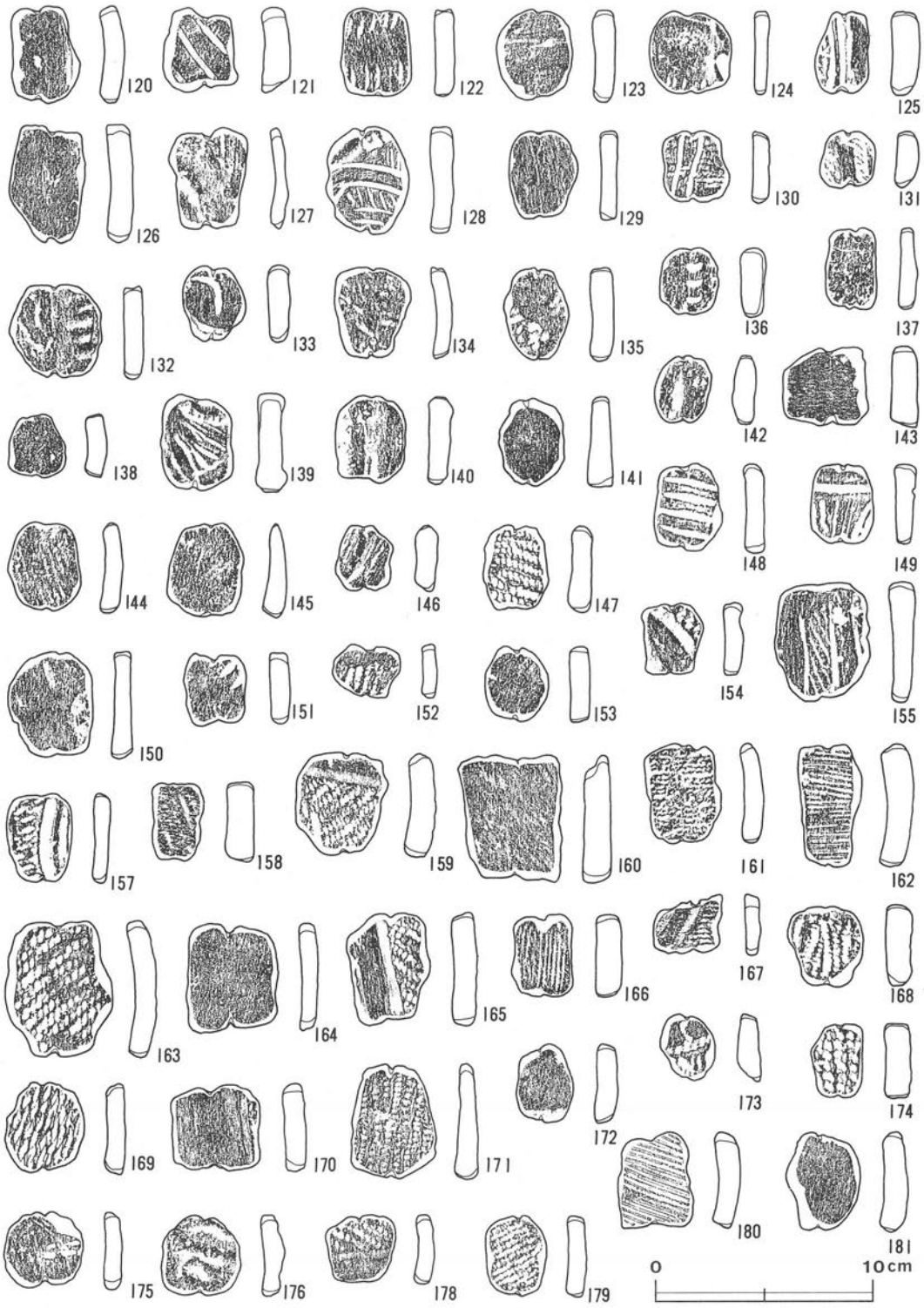
図版番号	名称	出土地点	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
第184図277	土器片錘	SI 19	3.7	3.3	1.1	14.7	DP9
278	土器片錘	SI 19	3.1	2.7	1.1	9.8	DP10
279	土器片錘	SI 19	4.2	3.0	0.9	16.9	DP11
280	土器片錘	SI 19	4.3	3.0	1.1	16.2	DP12
281	土器片錘	SI 22	3.5	3.1	0.7	9.4	DP13
282	土器片錘	SI 22	4.0	3.3	1.1	16.0	DP15
283	土器片錘	SI 22	4.0	3.4	1.0	14.6	DP16
284	土器片錘	SI 22	4.8	2.8	1.1	14.1	DP17
285	土器片錘	SI 22	3.8	2.6	1.0	11.0	DP18
286	土器片錘	SI 27	4.0	4.1	1.3	21.3	DP20
287	土器片錘	SI 27	4.3	3.4	1.1	14.8	DP21
288	土器片錘	SI 27	3.8	3.5	1.1	14.5	DP22
289	土器片錘	SI 29	3.5	(3.3)	0.9	(14.1)	一部欠損 DP24
290	土器片錘	SI 29	3.7	2.6	0.7	7.5	DP25
291	土器片錘	SI 29	5.3	3.2	1.2	24.1	DP26
292	土器片錘	SI 29	4.4	(3.1)	1.2	(12.9)	一部欠損 DP27
293	土器片錘	SI 29	6.5	4.6	1.5	47.0	DP28
294	土器片錘	SI 29	5.2	4.5	1.1	28.3	DP29
295	土器片錘	SI 29	4.5	3.9	1.3	22.2	DP30
296	土器片錘	SI 29	3.5	2.6	1.2	12.8	DP31
297	土器片錘	SI 29	3.1	2.7	1.0	10.3	DP32
298	土器片錘	SI 29	3.4	3.2	0.9	10.6	DP33
299	土器片錘	SI 29	4.3	(3.2)	1.1	(15.3)	一部欠損 DP34
300	土器片錘	SI 29	4.5	3.4	0.9	17.8	DP35
301	土器片錘	SI 29	3.7	3.2	1.1	15.6	DP36
302	土器片錘	SI 29	2.7	2.4	1.0	8.9	DP37
303	土器片錘	SI 29	3.3	3.4	1.0	12.7	DP38
304	土器片錘	SI 29	3.3	2.8	1.3	13.4	DP39
305	土器片錘	SI 29	3.8	2.8	0.7	11.4	DP40
306	土器片錘	SI 32	5.2	4.0	1.2	23.8	DP41
307	土器片錘	SI 32	4.2	(3.4)	1.2	(17.7)	一部欠損 DP42
308	土器片錘	SI 34	4.9	3.2	1.2	20.4	DP43
309	土器片錘	SI 34	4.0	3.3	1.0	19.5	DP44
310	土器片錘	SI 34	2.3	2.4	1.1	10.0	DP45
311	土器片錘	SI 34	4.1	3.3	1.1	17.3	DP46
312	土器片錘	SI 34	3.1	2.9	1.1	10.9	DP47
313	土器片錘	SI 36	3.6	2.9	0.9	11.0	DP53
314	土器片錘	SI 37	2.5	2.1	1.1	9.7	DP54
315	土器片錘	SI 37	2.6	2.5	0.7	3.9	DP55
316	土器片錘	SI 37	3.3	3.5	0.9	7.5	DP56
317	土器片錘	SI 37	(2.6)	3.1	0.9	(7.5)	一部欠損 DP57
318	土器片錘	SI 39	4.3	3.6	1.1	19.7	DP58
319	土器片錘	SI 39	4.0	3.7	1.0	15.2	DP59
320	土器片錘	SI 40	4.2	3.5	1.0	16.4	DP60
321	土器片錘	SI 40	2.7	2.3	1.0	6.7	DP61
322	土器片錘	SI 40	3.6	2.4	1.3	11.3	DP62



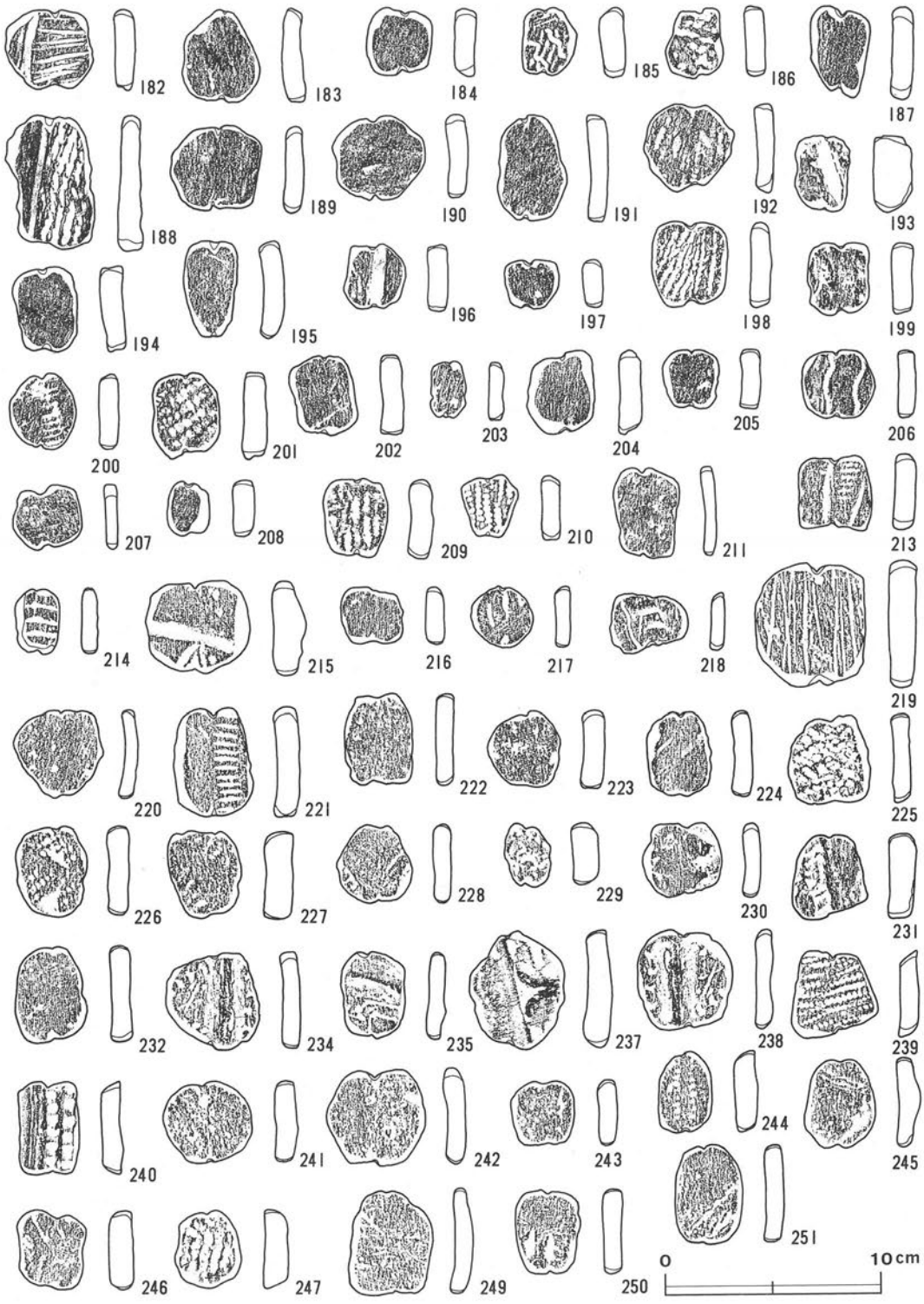
第180図　土製品実測図(1)



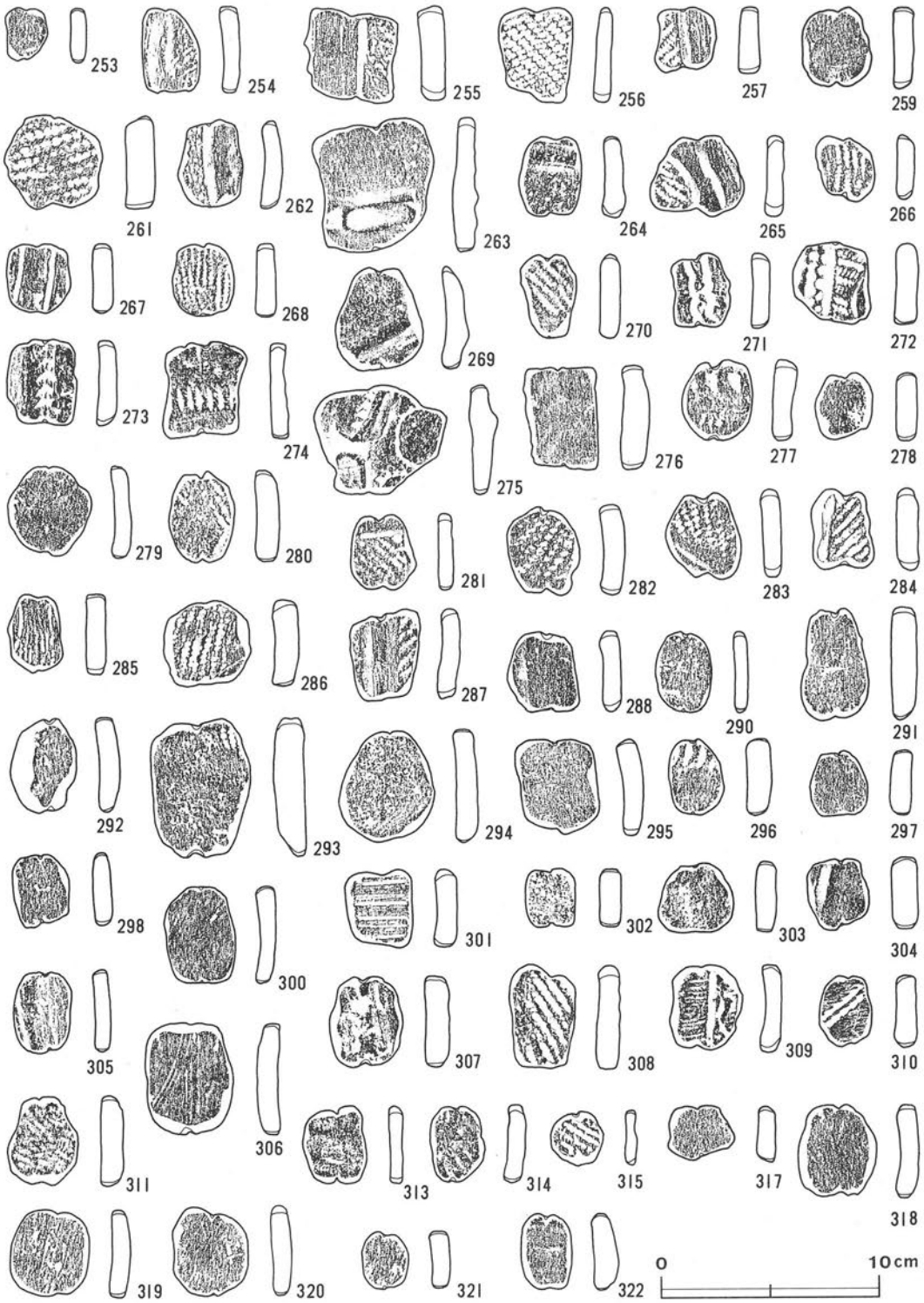
第181図　土製品実測図(2)



第182図　土製品実測図(3)



第183図　土製品実測図(4)



第184図　土製品実測図(5)

6　石器・石製品

当遺跡からは，石鏃・打製石斧・磨製石斧・磨石・敲石・石匙・浮子などの石器が出土している。本項では，若干の解説を加え，個々の石器の出土位置，法量等については一覧表にして掲載した。

(1)　石　　鏃（第185図）

石鏃は，住居跡や土坑等から15点出土している。完存品は12点で，他の３点は基部の一部や先端部が欠損している。石質はチャートが多く12点で，黒曜石は３点である。また，石鏃は有茎石鏃１点，無茎石鏃14点で，抉りの深いもの８点，浅いもの３点，ないもの２点となっている。他の１点は欠損品のため抉りの状況は不明である。この中で，特徴的な石鏃は11で，全体的にやや丸味を帯びている。第40号土坑からの出土である。13は片面に平坦な部分があり，磨られているものと思われる。第156号土坑からの出土である。

(2)　打製石斧（第185～186図）

打製石斧は，住居跡と土坑から12点出土している。完存品は８点で，他の４点は基部や刃部が欠損している。石質は安山岩が５点と多く，他に流紋岩２点，片麻岩，縁泥片岩，頁岩，角閃片岩，及び凝灰岩が各１点ずつである。殆どが分銅形で11点出土しているが，25は短冊形を呈し，やや一方にそっている。刃部は粗い作りである。石質は頁岩で，長さ11.5cm，幅6.4cm，厚さ2.3cm，重量134.3ｇである。第11号土坑からの出土である。

(3)　磨製石斧（第186～187図）

磨製石斧は，住居跡と土坑から16点出土している。完存品は４点で，12点は基部や刃部が欠損している。石質は縁泥片岩４点，安山岩３点，砂岩２点，角閃片岩２点，その他砂岩，玢岩，石英玢岩，石英，及び粘板岩が各１点ずつ出土している。石斧は全て定角式磨製石斧で，両側縁及び基部はていねいに研磨されている。ハマグリ刃の刃部付近を除き全体的に厚く，基部付近ではほぼ円形に近い形をしている。その中で，38は代表例の１つで，ていねいに研磨されている。石質は縁泥片岩で，長さ13.6cm，幅5.9cm，厚さ3.1cm，重量467.2ｇである。偏刃で，当遺跡の中では最大のものであり，第43号住居跡からの出土である。31は石質が石英で，長さ7.1cm，幅4.7cm，厚さ1.7cm，重量108.8ｇを測り，直刃である。刃部に一部使用痕が認められ，比較的小形なもので，第２号住居跡からの出土である。

(4)　石　　匙（第188図）

石匙は，住居跡から１点出土している。基部と刃部が直交する横形石匙で，完存品である。石質はメノウである。基部・刃部とも両面から調整が加えられ，丁寧に作り出されている。長さ3.5cm，幅3.4cm，厚さ1.1cm，重量9.7ｇである。第53号住居跡からの出土である。

(5) 浮　　子（第188図）

浮子は，住居跡と土坑から各１点ずつ出土している。いずれも軽石製である。54は長さ5.8cm，幅7.1cm，厚さ1.4cm，重量6.8ｇで，小形の隅丸台形状を呈し，一方に直径0.7cmの孔が穿たれている。第15号住居跡からの出土である。55は長さ6.6cm，幅6.1cm，厚さ2.5cm，重量17.6ｇで，54と比べると厚い。不整楕円形状を呈し，片方に直径0.6cmの孔が穿たれている。第164号土坑からの出土である。

第５表　石器・石製品一覧表

図版番号	器種	出土地点	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
第185図 1	石鏃	SI 2	2.2	1.6	0.5	1.3	チャート	Q1
2	石鏃	SI 4	3.5	1.4	0.8	2.3	チャート	Q197
3	石鏃	SI 16	2.4	1.7	0.45	1.2	チャート	Q3
4	石鏃	SI 27	2.3	2.2	0.5	1.1	チャート	Q168
5	石鏃	SI 27	(2.0)	1.2	0.5	(0.8)	チャート	先端部欠損 Q169
6	石鏃	SI 27	1.7	1.3	0.3	0.4	黒曜石	Q170
7	石鏃	SI 27	1.8	1.2	0.4	0.6	チャート	Q171
8	石鏃	SI 35	2.4	(1.7)	0.6	(1.7)	チャート	基部欠損 Q4
9	石鏃	SI 49	2.6	1.9	0.5	1.6	チャート	Q5
10	石鏃	SI 52	2.5	1.7	0.5	1.1	黒曜石	Q6
11	石鏃	SK40	2.8	1.6	0.6	1.6	チャート	Q11
12	石鏃	SK144	2.4	2.0	0.5	1.3	チャート	Q12
13	石鏃	SK156	2.7	1.7	0.6	2.1	チャート	Q13
14	石鏃	SK239	2.1	1.7	0.45	1.3	チャート	Q14
15	石鏃	$D3a_5$	2.9	(2.3)	0.7	(2.6)	黒曜石	基部一部欠損 Q15
16	打製石斧	SI 15	9.5	6.6	1.6	87.4	片麻岩	Q36
17	打製石斧	SI 27	(9.7)	6.3	1.4	(74.3)	流紋岩	一部欠損 Q175
18	打製石斧	SI 52	10.8	6.9	2.0	210.9	流紋岩	Q38
19	打製石斧	SI 54	8.0	5.2	2.1	106.5	緑泥片岩	Q40
第186図 20	打製石斧	SI 69	12.5	8.6	2.9	328.3	安山岩	Q41
21	打製石斧	SI 69	(6.0)	5.8	1.6	(63.8)	安山岩	半分欠損 Q42
22	打製石斧	SI 69	(9.2)	6.9	2.0	(146.5)	安山岩	一部欠損 Q43
23	打製石斧	SI 69	11.6	7.6	2.5	203.0	安山岩	Q44
24	打製石斧	SI 69	(6.4)	6.2	1.5	(79.1)	角閃片岩	両端欠損 Q45
25	打製石斧	SK11	11.5	5.3	2.3	134.3	頁岩	Q46
26	打製石斧	SK14	12.3	6.4	2.4	158.8	凝灰岩	Q47
27	打製石斧	SK239	11.6	6.7	2.3	197.8	安山岩	Q49
28	打製石斧	$A4e_9$	8.7	6.7	1.8	139.1	安山岩	Q50
29	打製石斧	$C2i_7$	10.8	7.3	1.7	154.9	安山岩	Q51
30	磨製石斧	SI 1	9.3	4.1	2.4	164.9	角閃片岩	Q19

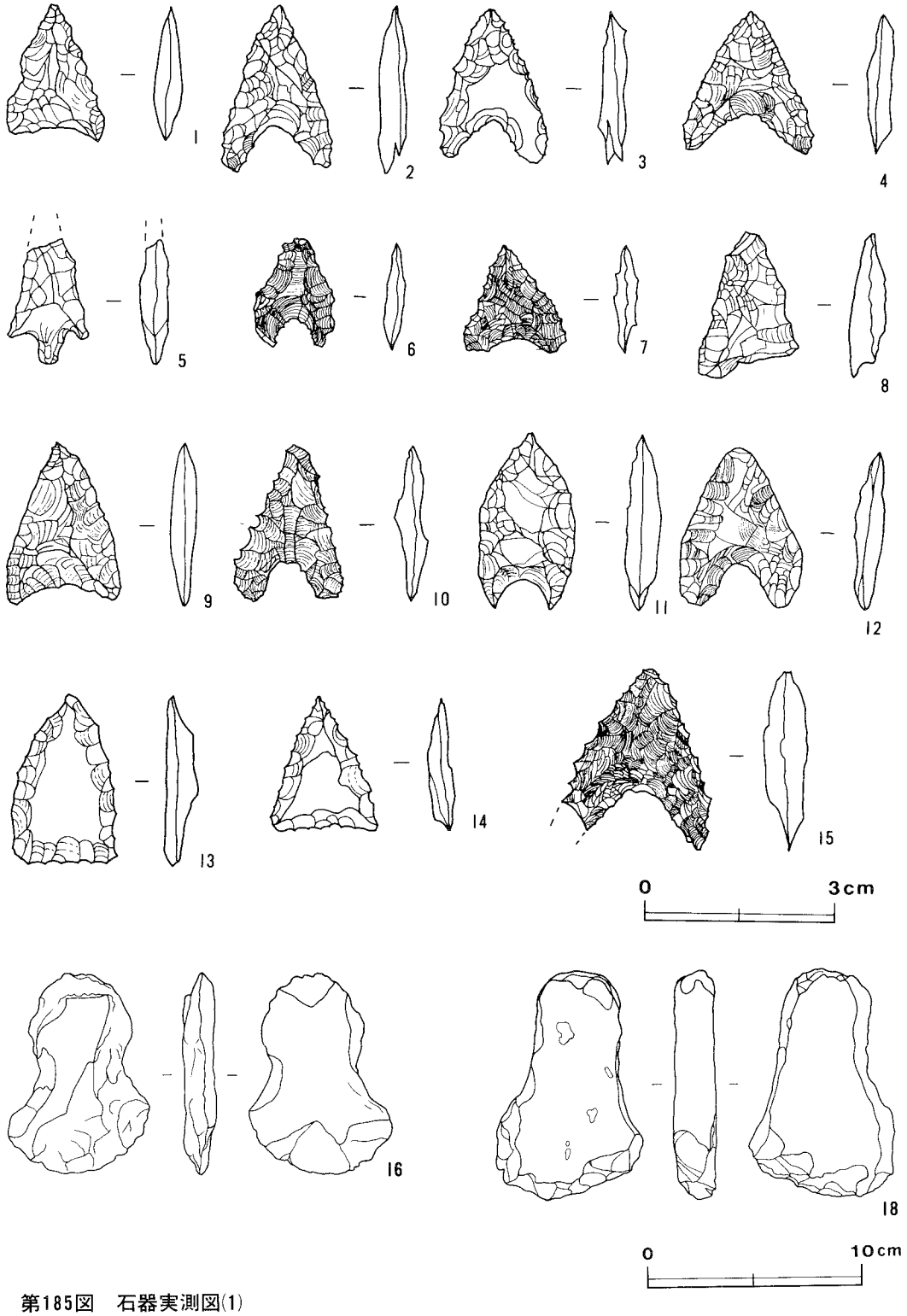
図版番号	器種	出土地点	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
第186図 31	磨製石斧	SI 2	7.1	4.7	1.7	108.8	石英	Q20
第187図 32	磨製石斧	SI 14	(8.5)	6.2	3.1	(264.7)	角閃片岩	基部欠損 Q21
33	磨製石斧	SI 22	(4.8)	(3.7)	1.3	(34.6)	緑泥片岩	基部半分欠損 Q174
34	磨製石斧	SI 26	(7.8)	4.9	2.5	(71.2)	安山岩	基部のみ Q37
35	磨製石斧	SI 35	(5.9)	4.2	3.0	(105.1)	緑泥片岩	刃部欠損 Q22
36	磨製石斧	SI 35	(6.0)	4.3	2.2	(22.0)	砂岩	刃部のみ Q23
37	磨製石斧	SI 35	(6.2)	5.1	3.0	(81.0)	石英玢岩	刃部のみ Q24
38	磨製石斧	SI 43	13.6	5.9	3.1	467.2	緑泥片岩	Q25
39	磨製石斧	SI 52	8.5	4.2	2.7	115.9	安山岩	Q26
40	磨製石斧	SI 53	(11.5)	5.1	3.5	(283.5)	玢岩	刃部欠損 Q39
41	磨製石斧	SI 53	(5.5)	5.0	3.1	(97.2)	安山岩	刃部のみ Q27
42	磨製石斧	SK138	(4.6)	4.1	2.7	(82.9)	緑泥片岩	基端部のみ Q28
43	磨製石斧	SK207	(7.2)	5.4	2.3	(104.3)	粘板岩	一部欠損 Q48
44	磨製石斧	SK257	(10.0)	4.1	2.7	(196.0)	砂岩	刃部欠損 Q29
45	磨製石斧	SK297	(7.2)	3.6	2.2	(76.7)	緑泥片岩	基部欠損 Q30
46	磨製石斧	$C3e_2$	10.4	4.3	2.4	178.3	砂岩	Q32
47	磨製石斧	$C3f_9$	7.4	4.4	1.3	44.9	流紋岩	Q33
48	磨製石斧	$D3a_1$	6.6	3.4	1.5	51.2	緑泥片岩	Q34
49	磨製石斧	$D3a_6$	(7.4)	5.4	3.1	(195.8)	角閃片岩	刃部欠損 Q35
50	磨製石斧	表採	8.6	3.6	1.7	64.5	砂岩	Q31
第188図 51	石匙	SI 53	3.5	3.4	1.1	9.7	メノウ	Q7
52	石匙	$C4e_1$	3.8	2.4	1.1	8.1	頁岩	Q198
53	尖頭器	SK8	5.1	2.0	0.9	5.9	黒曜石	Q10
54	浮子	SI 15	5.8	7.1	1.4	6.8	軽石	Q205
55	浮子	SK164	6.6	6.1	2.5	17.6	軽石	Q160
56	浮子	$C4c_1$	8.0	6.1	1.0	8.0	軽石	Q149
57	石皿	SI 54	(12.1)	11.8	4.0	(391.4)	安山岩	半分欠損 Q147
58	石皿	SI 59	(16.8)	21.7	10.5	(2689.4)	安山岩	半分欠損 Q148
59	石錐	SI 27	2.6	2.6	0.7	3.5	チャート	Q172
60	円板	SI 35	3.1	2.6	0.4	4.0	雲母片岩	Q18

図版番号	器種	出土地点	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
第188図61	装飾品	SI 19	(4.5)	(2.2)	0.7	(9.5)	チャート	一部のみ Q173
62	装飾品	SK222	(3.9)	3.4	0.9	(19.0)	チャート	一部のみ Q17
63	石錘	C3f1	6.0	3.8	1.2	38.1	流紋岩	Q16
64	磨石	SI 1	14.1	7.9	5.5	876.2	流紋岩	Q76
65	磨石	SI 1	(8.2)	10.5	9.3	(842.9)	石英斑岩	一部欠損 Q178
66	磨石(敲)	SI 1	(13.5)	6.1	3.3	(272.4)	砂岩	一部欠損 Q77
67	磨石	SI 3	7.0	3.8	2.6	60.8	砂岩	Q78
68	磨石	SI 3	10.1	6.5	2.9	269.8	砂岩	Q79
69	磨石	SI 3	15.9	7.7	5.9	705.8	石英斑岩	Q80
70	磨石	SI 5	7.2	5.8	3.9	160.3	砂岩	Q179
71	磨石	SI 10	5.7	5.0	1.5	52.6	流紋岩	Q180
72	磨石	SI 10	12.2	8.3	4.6	543.0	砂岩	Q181
73	磨石	SI 12	(2.8)	3.7	2.3	(22.5)	砂岩	半分欠損 Q199
74	磨石	SI 14	11.5	8.0	4.5	597.0	安山岩	Q81
75	磨石(敲)	SI 15	(10.2)	9.3	4.0	(572.4)	安山岩	一部欠損 Q82
76	磨石	SI 19	(6.1)	5.6	2.8	(78.9)	安山岩	半分欠損 Q182
77	磨石	SI 22	(5.1)	(4.4)	3.8	(89.0)	安山岩	半分欠損 Q183
78	磨石	SI 22	(9.8)	3.8	5.8	(227.3)	流紋岩	半分欠損 Q184
79	磨石	SI 22	11.7	7.8	3.6	330.9	砂岩	Q185
80	磨石	SI 27	(9.8)	3.0	7.5	(683.4)	チャート	一部欠損 Q186
81	磨石	SI 27	(6.6)	8.3	4.5	(280.1)	砂岩	半分欠損 Q187
82	磨石	SI 30	7.1	5.3	4.9	265.9	砂岩	Q83
83	磨石	SI 34	11.3	4.3	6.2	237.7	砂岩	Q188
84	磨石	SI 37	6.4	2.9	0.8	23.5	片麻岩	Q189
85	磨石(敲)	SI 38	10.5	6.9	4.1	358.4	ホルンヘルス	Q84
第189図86	磨石	SI 41	9.6	7.6	3.7	352.9	安山岩	Q85
87	磨石	SI 43	10.8	7.4	4.3	474.5	砂岩	Q86
88	磨石	SI 45	(6.1)	4.6	2.9	(83.0)	砂岩	一部欠損 Q87
89	磨石	SI 45	(5.6)	5.0	2.7	(95.1)	砂岩	一部欠損 Q88
90	磨石	SI 45	(8.3)	7.0	5.3	(284.8)	流紋岩	一部欠損 Q89
91	磨石	SI 45	(6.4)	4.7	2.4	(51.4)	砂岩	一部欠損 Q90
92	磨石	SI 46	9.3	6.6	4.2	281.0	砂岩	Q91
93	磨石(敲)	SI 47	(5.8)	5.0	4.4	(126.8)	砂岩	一部欠損 Q92
94	磨石	SI 51	(3.8)	6.2	3.4	(113.5)	砂岩	半分欠損 Q93
95	磨石	SI 52	10.0	5.5	4.2	224.4	砂岩	Q94
96	磨石	SI 53	5.4	4.5	3.4	120.5	砂岩	Q95
97	磨石	SI 55	(7.8)	5.9	2.8	(158.4)	緑泥片岩	半分欠損 Q96
98	磨石	SI 68	(8.5)	7.8	5.3	(446.1)	安山岩	半分欠損 Q97
99	磨石	SI 68	10.7	9.0	7.1	878.9	安山岩	Q98

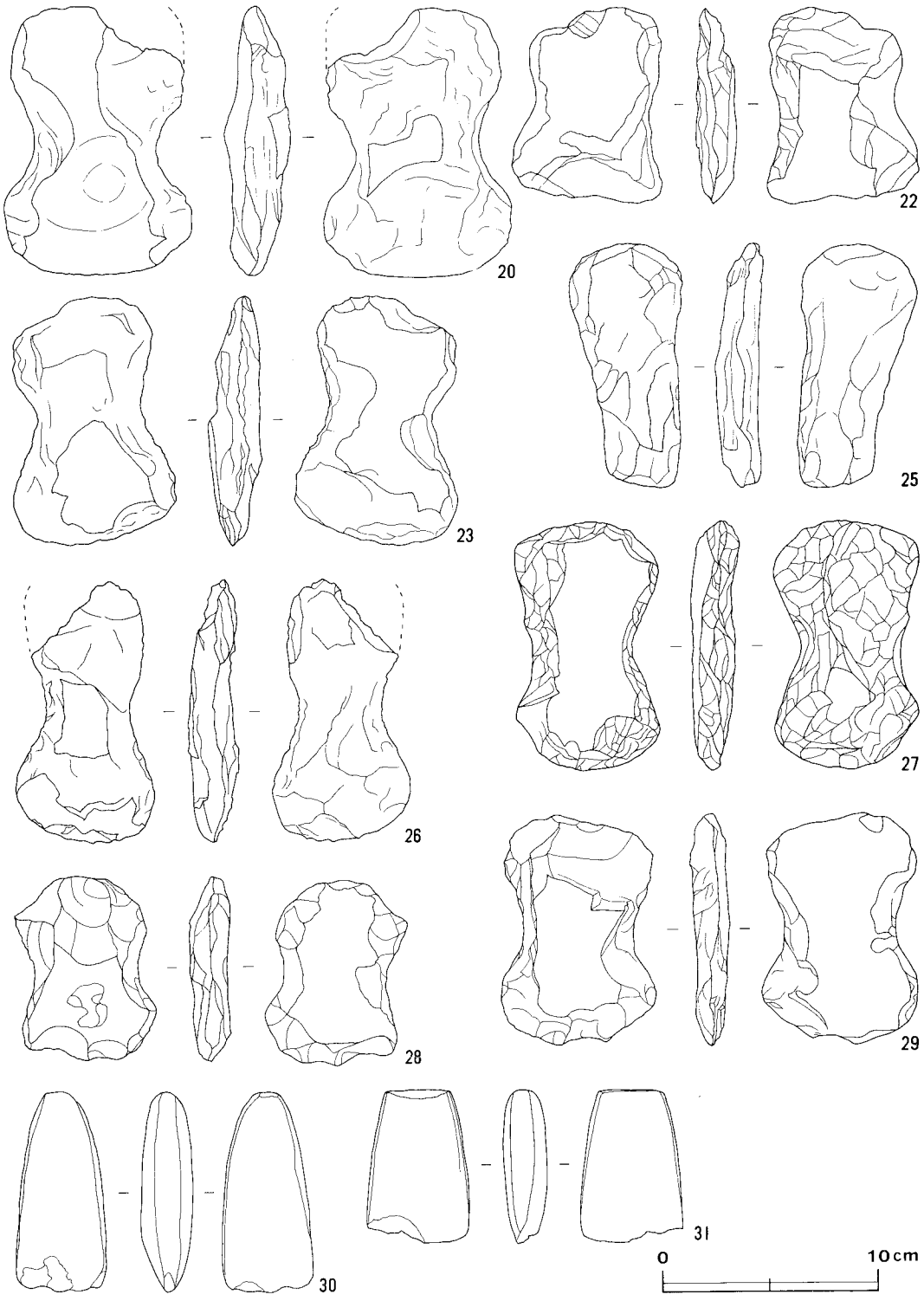
図版番号	器種	出土地点	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
第189図100	磨石	SI 68	(8.1)	7.8	4.7	(378.6)	安山岩	半分欠損 Q99
101	磨石(凹)	SI 68	7.7	9.0	4.6	451.4	石英玢岩	Q100
102	磨石	SI 69	6.8	(5.5)	2.6	(108.7)	砂岩	半分欠損 Q101
103	磨石	SI 69	7.3	(2.9)	3.7	(83.8)	砂岩	半分欠損 Q102
104	磨石	SI 72	4.6	4.5	1.5	43.2	砂岩	Q200
105	磨石	SI 74	(6.6)	3.3	2.5	(56.3)	砂岩	一部欠損 Q201
106	磨石	SI 75	6.8	5.7	4.0	206.0	流紋岩	Q103
107	磨石	SI 75	9.9	(8.7)	5.4	(627.8)	流紋岩	一部欠損 Q104
108	磨石	SI 75	(6.4)	5.2	2.4	(89.1)	砂岩	半分欠損 Q105
109	磨石	SI 75	(6.9)	5.4	5.1	(299.0)	安山岩	半分欠損 Q106
110	磨石	SI 75	(6.9)	4.6	3.5	(126.7)	砂岩	半分欠損 Q107
111	磨石	SI 75	(9.3)	6.8	3.6	(274.5)	砂岩	半分欠損 Q108
112	磨石	SI 76	(5.8)	3.3	(3.2)	(66.6)	砂岩	一部欠損 Q202
113	磨石	SI 76	(5.8)	2.7	2.6	(64.4)	砂岩	一部欠損 Q203
114	磨石	SK6	(4.8)	4.9	4.0	(125.9)	安山岩	半分欠損 Q109
115	磨石	SK14	10.0	7.0	4.6	493.2	砂岩	Q110
116	磨石	SK58	(8.0)	(4.6)	(5.0)	(161.4)	安山岩	一部欠損 Q111
117	磨石	SK75	(6.7)	6.5	3.3	(165.7)	砂岩	半分欠損 Q112
118	磨石	SK86	(11.9)	8.1	7.0	(677.6)	安山岩	一部欠損 Q113
119	磨石	SK92	9.5	5.4	3.4	205.5	砂岩	Q114
120	磨石(敲)	SK98	(7.4)	7.5	4.1	(287.5)	砂岩	一部欠損 Q115
121	磨石	SK105	(9.6)	4.3	4.0	(162.9)	砂岩	一部欠損 Q116
122	磨石	SK107	(6.2)	6.0	3.5	(153.3)	砂岩	半分欠損 Q117
123	磨石	SK111	(5.3)	(4.1)	(3.9)	(99.6)	砂岩	半分欠損 Q118
124	磨石	SK111	(7.4)	6.8	3.6	(167.7)	砂岩	一部欠損 Q119
125	磨石(敲)	SK111	(4.8)	5.4	2.7	(61.5)	頁岩	半分欠損 Q120
126	磨石	SK138	5.7	5.0	2.8	113.8	流紋岩	Q121
127	磨石	SK206	7.1	5.9	3.8	237.9	安山岩	Q122
128	磨石	SK218	6.7	5.1	5.9	206.6	砂岩	Q123
129	磨石(敲)	SK222	8.7	5.3	2.9	184.3	砂岩	Q124
130	磨石	SK278	(9.7)	9.6	4.3	543.0	安山岩	半分欠損 Q125
131	磨石	C2j8	5.4	5.1	5.1	202.1	安山岩	Q127
132	磨石	C3i1	(7.1)	5.6	2.2	(129.2)	砂岩	一部欠損 Q128
133	磨石	D2a6	(9.4)	6.7	4.5	(352.3)	砂岩	一部欠損 Q129
134	磨石	D3a6	(5.3)	6.5	3.4	(105.4)	砂岩	半分欠損 Q130
135	磨石	表採	10.0	6.6	4.5	457.0	流紋岩	Q126
136	敲石	SI 1	6.7	4.5	3.8	154.3	砂岩	Q52
137	敲石	SI 1	9.3	6.3	5.0	344.5	流紋岩	Q53
138	敲石	SI 2	6.0	4.8	4.1	172.9	流紋岩	Q54

図版番号	器種	出土地点	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
第190図 139	敲石	SI 10	12.0	7.6	4.3	512.3	石英班岩	Q176
140	敲石	SI 22	10.6	6.9	4.0	468.8	石英班岩	Q177
141	敲石	SI 26	10.3	6.4	3.7	343.0	砂岩	Q55
142	敲石	SI 28	(6.9)	4.6	3.4	(126.4)	砂岩	半分欠損 Q204
143	敲石	SI 35	11.5	4.6	3.7	271.9	流紋岩	Q56
144	敲石	SI 41	7.2	3.4	3.4	121.6	砂岩	Q57
145	敲石	SI 43	7.1	5.1	3.2	152.8	砂岩	Q58
146	敲石(磨)	SI 43	12.0	5.5	3.1	308.4	砂岩	Q59
147	敲石	SI 46	13.0	6.6	7.2	676.5	安山岩	Q60
148	敲石	SI 46	10.5	7.6	2.2	404.0	安山岩	Q61
149	敲石	SI 46	8.9	4.2	4.0	205.0	流紋岩	Q62
150	敲石	SI 51	8.8	7.0	4.5	382.5	流紋岩	Q63
151	敲石	SI 53	7.8	4.6	2.5	131.0	流紋岩	Q64
152	敲石	SI 62	7.1	5.7	3.0	170.9	流紋岩	Q65
153	敲石	SI 68	(8.4)	5.1	4.5	(243.4)	流文岩	半分欠損 Q66
154	敲石	SI 68	(6.5)	7.6	4.0	(230.6)	石英玢岩	半分欠損 Q67
155	敲石	SI 69	11.0	5.9	4.9	346.5	砂岩	Q68
156	敲石	SK2	6.0	3.2	1.5	41.4	石英班岩	Q69
157	敲石	SK14	8.4	6.2	3.2	232.6	アプライト	Q70
158	敲石(磨)	SK30	12.3	8.1	5.6	613.0	石英玢岩	Q71
159	敲石	SK40	(12.2)	6.1	5.1	(373.6)	石英玢岩	一部欠損 Q72
第191図 160	敲石	SK121	10.8	7.0	6.6	723.4	石英玢岩	Q73
161	敲石	SK270	7.6	4.2	3.3	149.0	砂岩	Q74
162	敲石	$A4a_9$	8.3	6.4	3.0	237.0	流紋岩	Q75
163	凹石	SI 13	20.4	15.4	3.8	1254.0	片麻岩	Q131
164	凹石	SI 31	9.6	5.8	3.5	225.3	安山岩	Q190
165	凹石	SI 34	16.3	8.2	4.4	459.9	安山岩	Q191
166	凹石	SI 35	9.5	7.9	3.5	265.8	片麻岩	Q132
167	凹石	SI 46	11.1	10.3	6.8	850.2	安山岩	Q133

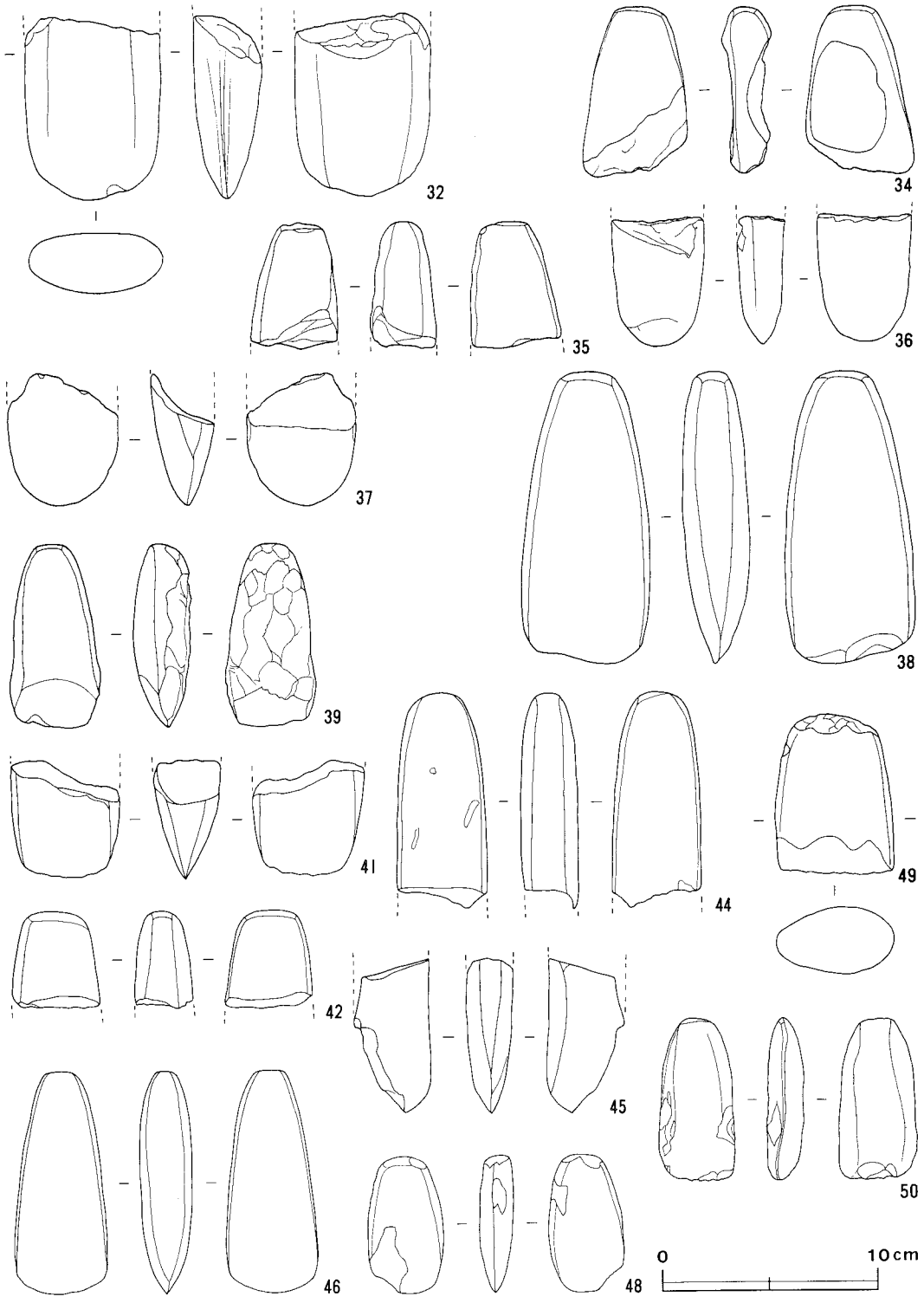
図版番号	器種	出土地点	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
第191図 168	凹石	SI 46	(11.1)	(7.7)	4.5	(532.0)	安山岩	一部欠損 Q134
169	凹石	SI 52	(11.2)	11.4	2.6	(344.3)	片麻岩	一部欠損 Q135
170	凹石	SI 67	8.4	5.5	3.1	146.7	片麻岩	Q136
171	凹石	SK6	13.2	7.5	5.0	401.4	熔岩	Q137
第192図 172	凹石	SK75	12.5	8.4	3.4	374.1	安山岩	Q138
173	凹石	SK79	(6.7)	7.7	4.8	(234.8)	安山岩	半分欠損 Q139
174	凹石	SK171	9.6	7.1	4.5	403.0	安山岩	Q140
175	凹石	$A4i_7$	8.7	7.7	4.4	420.9	流紋岩	Q141
176	軽石	SI 1	5.6	3.4	2.3	22.5	熔岩	Q152
177	軽石	SI 12	6.0	4.9	3.2	34.8	熔岩	Q153
178	軽石	SI 35	5.1	2.9	3.1	30.0	熔岩	Q154
179	軽石	SI 45	11.4	7.2	2.7	158.5	安山岩	Q155
180	軽石	SI 55	6.3	6.1	3.2	74.6	熔岩	Q156
181	軽石	SI 68	8.5	6.3	3.5	137.4	熔岩	Q157
182	軽石	SI 68	9.0	5.7	2.9	109.1	熔岩	Q158
183	軽石	SI 68	6.2	3.3	2.6	36.5	熔岩	Q159
184	軽石	SK212	9.0	7.0	5.4	206.7	熔岩	Q161
185	軽石	表採	7.8	6.0	3.3	21.6	熔岩	Q162
186	剥片	SI 28	3.8	4.5	1.1	16.1	泥岩	Q151
187	剥片	SI 69	3.0	3.1	1.3	13.2	チャート	Q8
188	剥片	SI 69	4.7	2.8	1.3	14.2	チャート	Q9
189	石核	SI 76	11.0	7.9	5.5	586.7	砂岩	Q150
190	焼石	SI 46	7.3	8.0	7.3	433.6	流紋岩	Q163
191	原石	SI 31	12.5	12.1	6.1	1038.3	斑粉岩	Q193
192	原石	SI 36	7.3	7.4	4.0	266.4	チャート	Q194
193	原石	SI 62	6.1	4.4	4.0	113.4	メノウ	Q164
194	原石	SI 67	4.2	3.2	2.4	47.4	メノウ	Q165
195	原石	SK70	7.9	5.9	2.6	138.5	メノウ	Q166
196	原石	SK299	10.8	6.2	6.8	489.7	安山岩	Q167



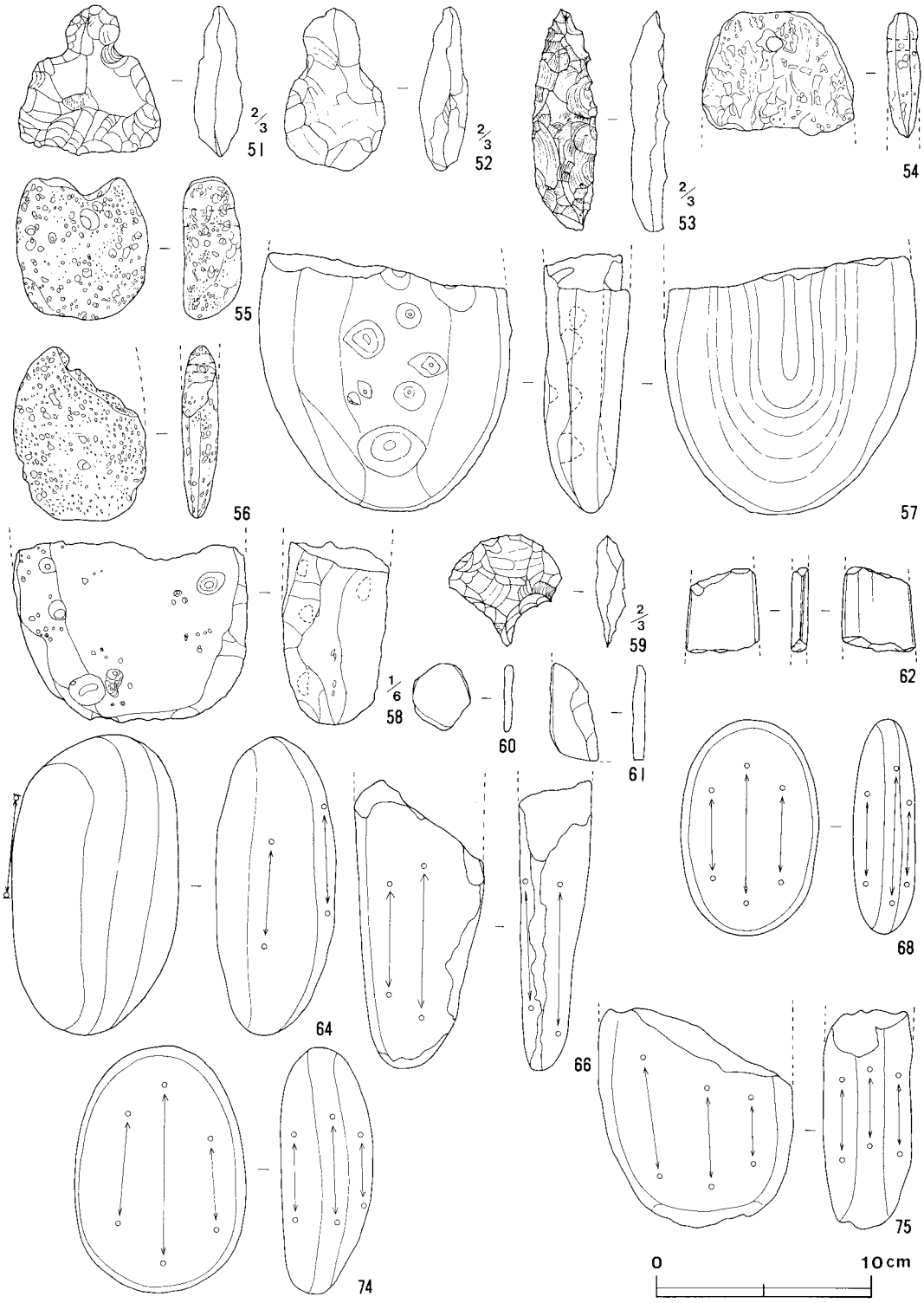
第185図　石器実測図(1)



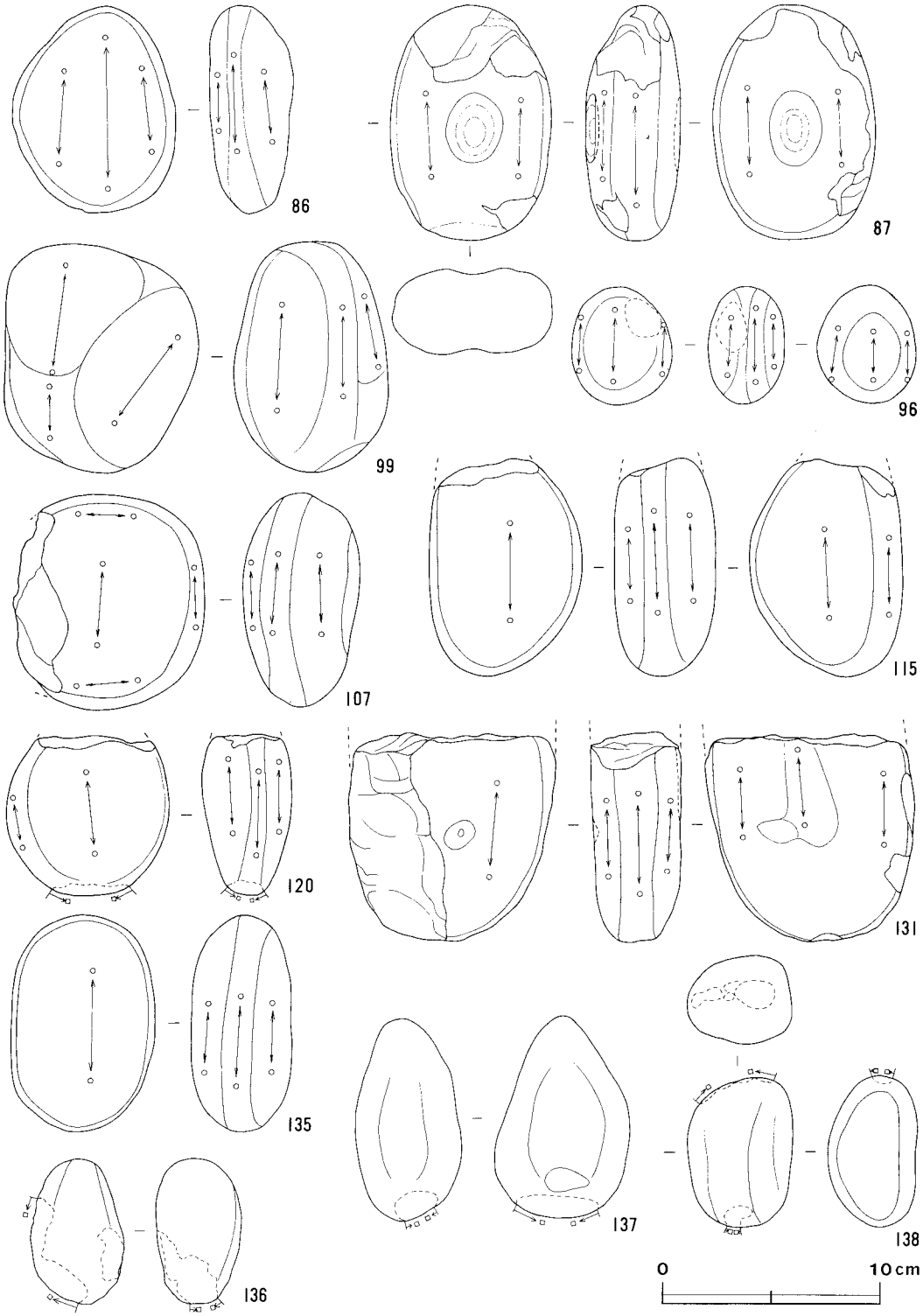
第186図　石器実測図(2)



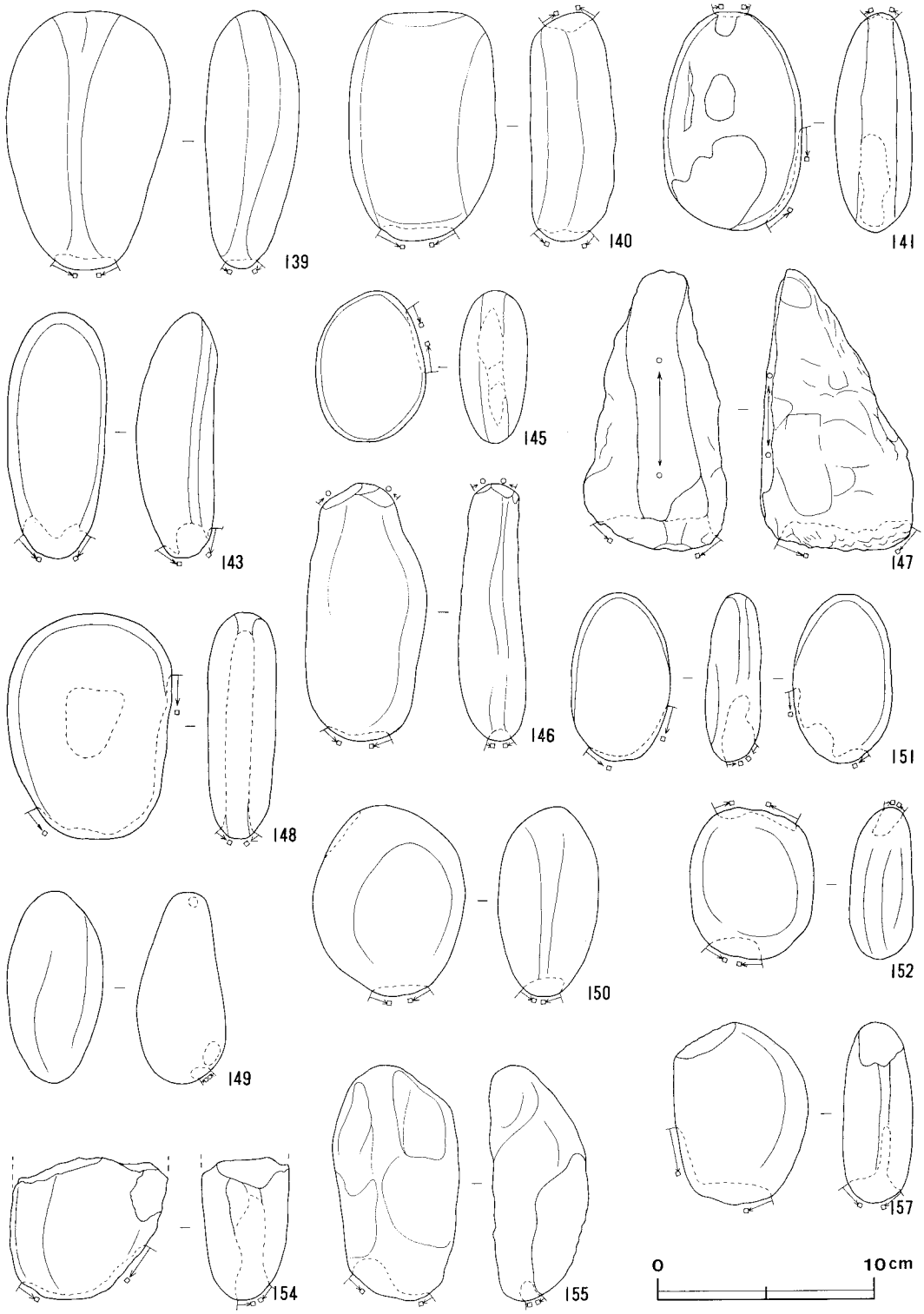
第187図　石器実測図(3)



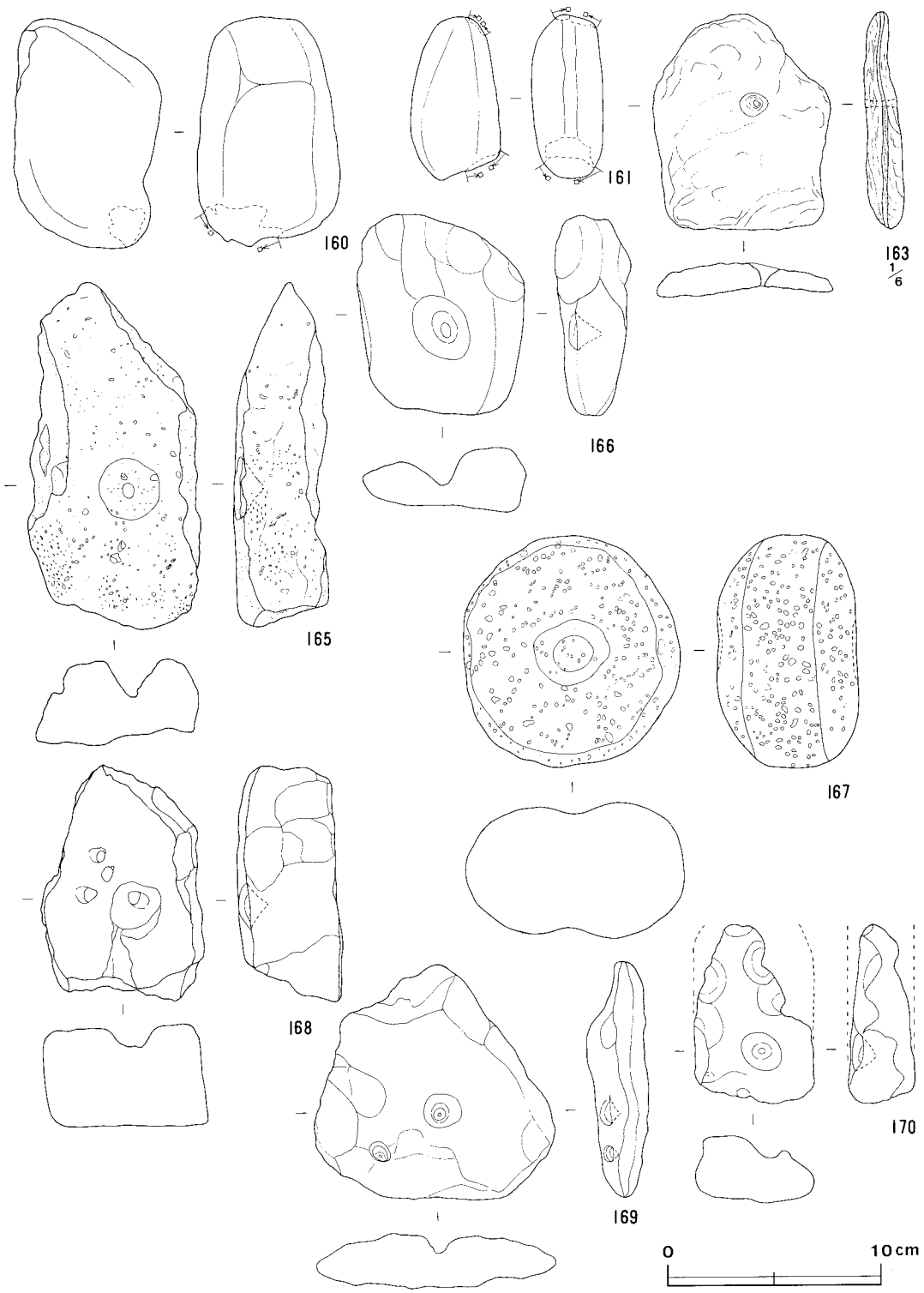
第188図　石器・石製品実測図(4)



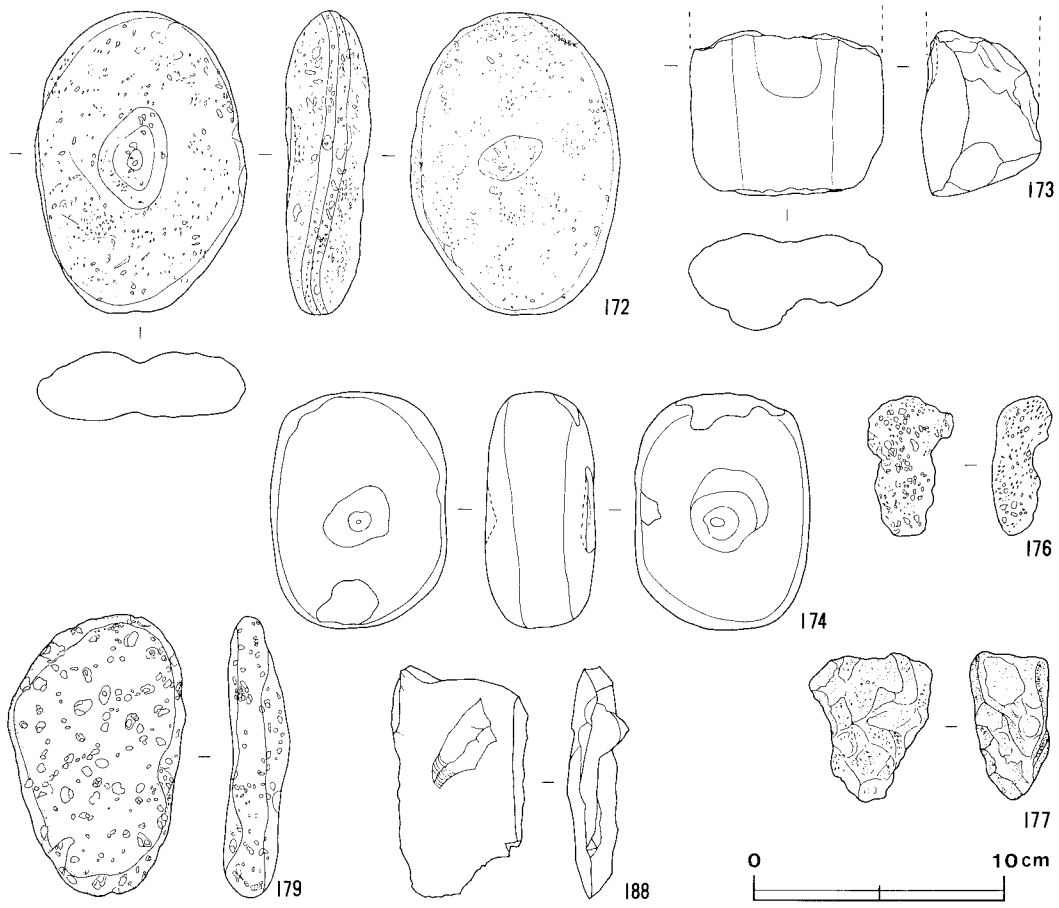
第189図　石器実測図(5)



第190図　石器実測図(6)



第191図　石器実測図(7)

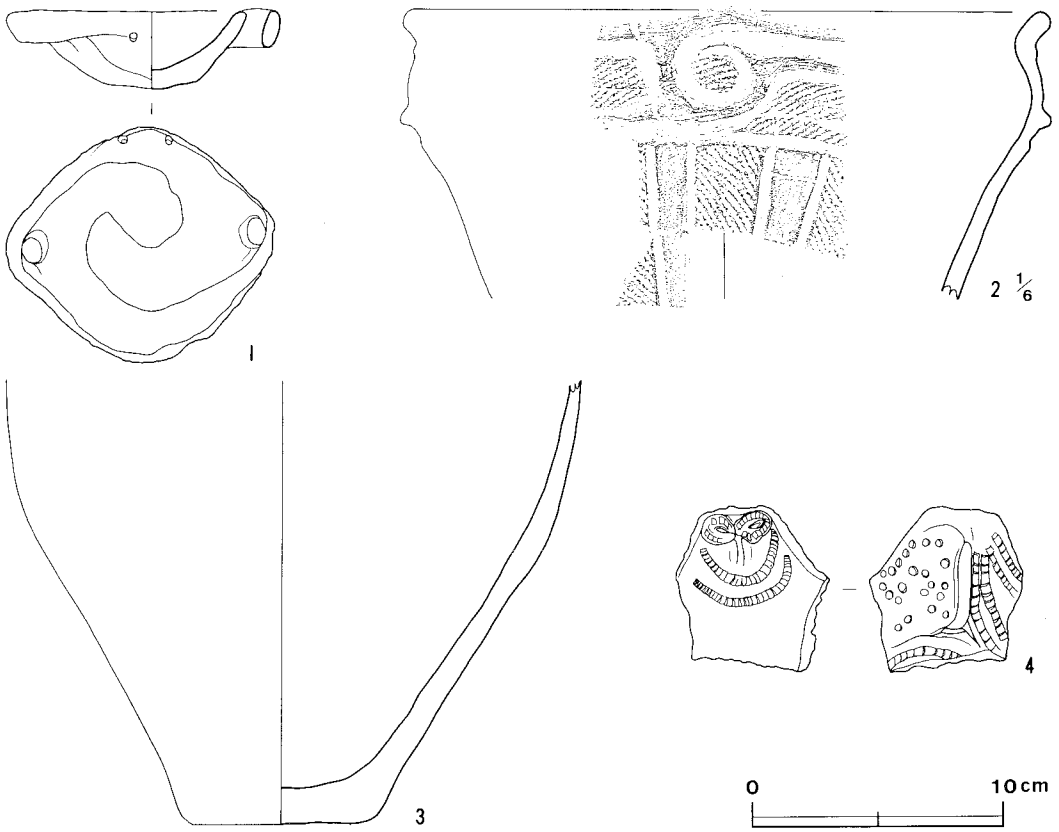


第192図　石器実測図(8)

7　遺構外出土土器

グリッド出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴　及　び　文　様	胎土・色調・焼成	備　考
第193図 1	小形鉢形土器（祭祀用品） 加曽利E	A 12.6 B 3.1	浅い鉢状を呈し，両端に直径1cmの穴と，長径1.4cm・短径0.8cmの楕円形の穴が穿たれ，その他直径0.3cmの円形の穴が2個並んで穿たれている。底部から胴部にかけて巴文が施されている。内面は少し摩滅し，外面は巴文に沿ってナデが施されている。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	100%1個体 内・外面赤彩一部残る P437 A5f$_1$
2	深鉢形土器 加曽利EIII	A(50.5) B(23.4)	波状の口縁部から胴部上位にかけての破片である。大形の深鉢形土器になると思われる。口縁部は隆帯と沈線によって渦巻文と長楕円文で区画され，区画内には単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。胴部は幅の広い磨消帯が施され，磨消帯の間には単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。内面は横位のナデが施されている。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	10%　8片 P131 C2j$_8$
3	深鉢形土器 加曽利EII	B(17.9) C (7.6)	底部は平底を呈し，胴部は内彎しながら外側に開いている。胴部中位以上は欠損している。無文で，胴部外面は縦位のナデが施され，内面は摩滅している。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	30%　15片 P130 C4c$_1$
4	深鉢形土器 阿玉台	B (6.4)	波状口縁の一部である。内面には結節沈線文を施した細い粘土紐を楕円形に貼りつけて目を表現し，その下側に小突起を施して鼻を抽象化している。更に，それらを囲むように，2列の結節沈線文を施している。人面を象徴化しているものと思われる。外面は波頂部から垂下させた隆帯で文様を区画し，その右側に4列の結節沈線文を，左側に円形刺突文を施している。	砂粒・長石 にぶい褐色 普通	5%　1片 P439 D3d$_5$



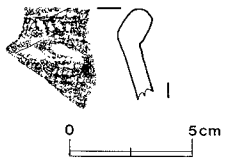
第193図　グリッド出土土器実測図

8　住居跡覆土内混入出土遺物

住居跡調査の過程で，当該期の住居跡に伴わない土器片が出土しているが，それらの土器片について，次のような分類に基づいて掲載した。但し，大木7a・大木7b・加曽利ＥⅠ・同ＥⅣ・前野町式土器・五領式のそれぞれの土器は住居跡の覆土からは出土していない。

土器の分類

Ⅰ群	縄文時代早期前葉		井草式土器
Ⅱ群	縄文時代早期後葉		茅山式土器
Ⅲ群	縄文時代前期前葉	a類	黒浜式土器
		b類	大木2b式土器
Ⅳ群	縄文時代前期後葉	a類	諸磯式土器
		b類	浮島式土器
		c類	興津式土器
Ⅴ群	縄文時代中期前葉	a類	阿玉台式土器
		b類	勝坂式土器
		c類	大木7a式土器
		d類	大木7b式土器
		e類	中峠式土器
Ⅵ群	縄文時代中期中・後葉	a類	加曽利ＥⅠ式土器
		b_1類	加曽利ＥⅡ・Ⅲ式土器，b_2類　連弧文式土器
		c類	加曽利ＥⅣ式土器
		d類	曽利式土器
Ⅶ群	縄文時代後期前葉		綱取式土器
Ⅷ群	弥生時代中期	a類	女方式土器
	後期	b_1類	前野町式土器，b_2類　東関東系土器，b_3類　弥生最終末土器
Ⅸ群	古墳時代前期		五領式土器



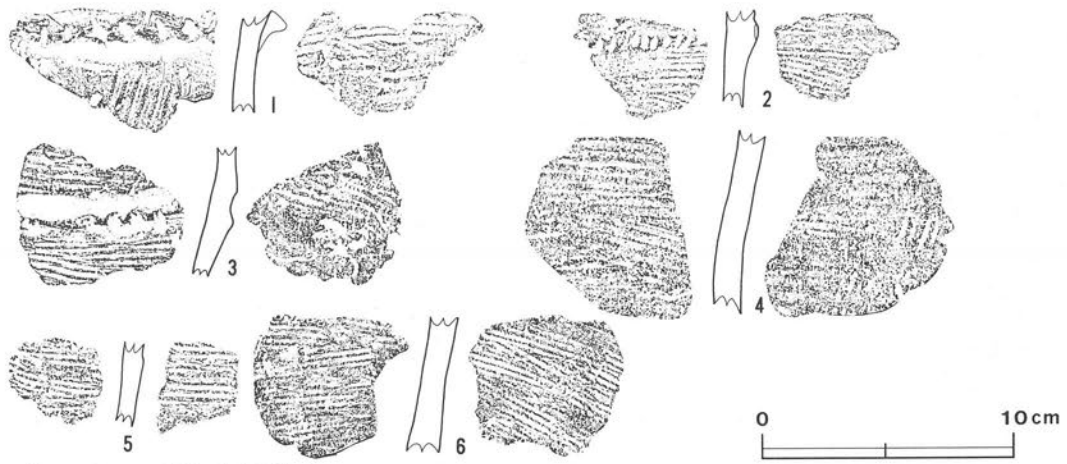
第194図
Ⅰ群土器拓影図

Ⅰ群土器（第194図）

1は口縁部小片で，口縁部は外反し，やや肥厚している。口唇部に縄文原体を押圧し，口唇部外面は縄文が斜位に施されている。口唇下に縄文がわずかに認められ，口唇直下に指頭圧痕が窺える。第29号住居跡からの出土土器片である。

II群土器（第195図）

1～6は胴部片である。1は横位の隆帯に竹管による圧痕が斜位に施され，外面は斜位の条痕文，内面は横位の条痕文が施されている。2は低い横位の隆帯に斜位のキザミ目を施し，内・外面は横位の条痕文が施されている。3は断面三角形状の隆帯に楕円形状の刺突文が4か所縦位に施され，隆帯の上側に隆帯に沿ってナデが施されている。4～6は横位の条痕文が内・外面に施されている。2・5は第35号，1は第49号，4は第62号，3・6は第68号住居跡からの出土である。



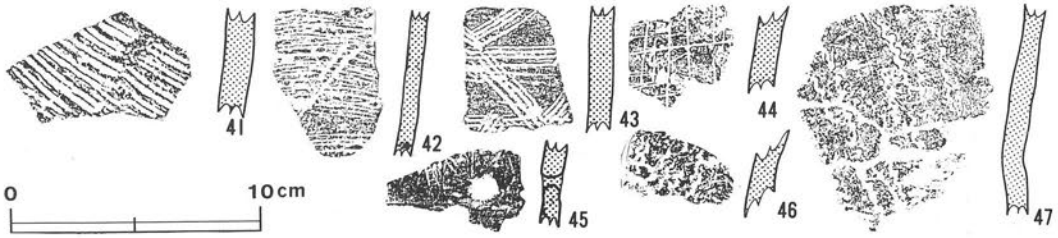
第195図　II群土器拓影図

III群a類土器（第196・197図）

1～19は口縁部である。1～6は2本組の撚糸文で，1は無節LとRの撚糸文が斜位に，3は無節Lの撚糸文で菱形文が施され，単節の縄文もわずかに窺える。4・5は撚りの太い無節の縄文の上に無節Lの撚糸文が斜位に施され，6は撚糸文の上には付加条縄文が斜位に施されている。7～9は単節の縄文が斜位に施され，7・8はLR，9はRLで，口唇部直下に浅い押圧が横位に施されている。10は付加条縄文が斜位や横位に，11は無節Rの縄文が斜位に施されている。12～15は刺突文が施されている。12は口唇部直下から単節LRの縄文が斜位に施され，その上に竹管による円形の刺突文が口唇部直下に横位に施されている。13は半截竹管文が横位に2段施されている。更に，口唇部直下に横位の沈線が2段施され，沈線上に半截竹管文を刺突している。14は胴部に原体の異なる付加条縄文がそれぞれ斜位に施され，13と同じように刺突されている。15は口唇部直下に半截竹管文が横位に，その下側に竹管による圧痕を有する隆帯が横位に施されている。隆帯の下側に2段の沈線が巡り，沈線上に半截竹管文が施されている。16は口唇直下に2列の押引文が横位に，その下側に単節LRの縄文と押引文が斜位に施されている。17～19は沈線が施され，17は横位に，18は山形に，19は斜位に施されている。

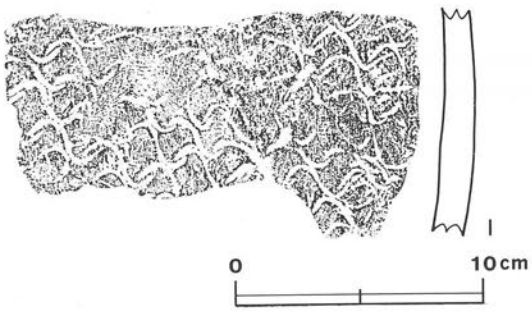
20～47は胴部片である。20～23は2本組の撚糸文で，20・21は無節Lの撚糸文を斜位に，22は

第196図　Ⅲ群ａ類土器拓影図(1)



第197図　Ⅲ群ａ類土器拓影図(2)

無節ＬとＲの撚糸文が縦位に施されている。23は無節Ｒの撚糸文が菱形を構成している。24は５本組の細い撚糸文が横位に施され，２か所指頭痕が認められる。25～28は単節の縄文が施され，25・26はＲＬの縄文，27・28はＬＲの縄文が浅くそれぞれ斜位に施されている。29・30は付加条縄文が斜位に施され，31は原体の異なる付加条縄文が斜位に施されている。32・33は無節Ｒの縄文が斜位に，32は浅く施されている。34は半截竹管による刺突文が４方向に交差し，縄文の地文がわずかに窺える。35～38は押引文が施されている。37・38は単節ＬＲの縄文の上に１列と２列の押引文が横位や斜位に施されている。39～44は沈線文で，39は小突起を備え，横位に太く，40は間隔をあけて，横位に太く施している。41は密に太く，斜位に，42は密に細く横位に沈線文を施している。43は４本単位に山形文を作り，44は細い格子文を施している。45は雑な細い沈線が施され，更に，補修孔が外面から穿たれている。46・47はアナダラ属の貝殻腹縁文が縦位に施されている。１・５・８・12・19・23は第１号，３・６・31・44は第２号，９・25・27は第13号，４・20は第14号，33は第15号，28・30・43は第35号，14は第36号，42は第38号，16は第42号，32・37・38・46は第43号，13・21・34・39は第45号，47は第46号，41は第56号，２・18は第57号，７・15・24・26は第62号，22・35・36は第68号，17・29・40・45は第69号，10は第74号，11は第76号の住居跡からの出土である。



第198図　Ⅲ群ｂ類土器拓影図

Ⅲ群ｂ類土器（第198図）

１は胴部片で，連鎖状撚糸文が全面に横位に施されている。第68号住居跡からの出土である。

Ⅳ群ａ類土器（第199図）

１～３は口縁部片である。１は波状を呈し，細い爪形文が３段施され，竹管文が４か所施され

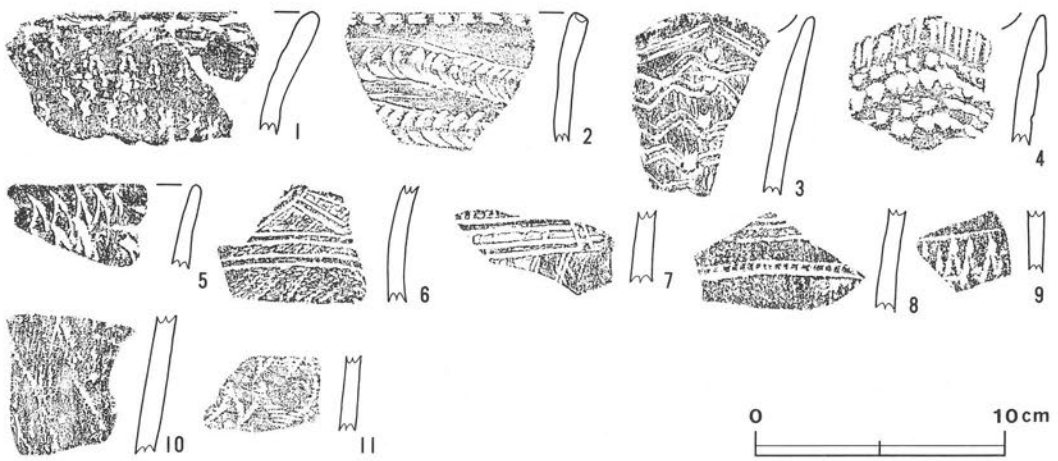
ている。２は細かい爪形文が密に３段横位に施され，３は１・２と比べると爪形文はやや幅が広く，横位に２段施されている。４は胴部片で，単節ＬＲの縄文の地文に爪形文が縦位，横位，及び斜位に施されている。１は第36号，４は第39号，２・３は第62号住居跡からの出土である。

第199図　Ⅳ群ａ類土器拓影図

Ⅳ群ｂ類土器（第200図）

１～５は口縁部片で，１は口唇部に右方向から棒状施文具で刺突文を施し，貝殻腹縁文が波状に，アナダラ属の貝殻腹縁文が縦位に施されている。２は口唇部に刺突文が１列施され，変形爪形文が２段横位に施されている。更に，爪形文の上側に細い沈線が施されている。３は波状を呈し，２本の沈線により大きい山形文と，５本の波状沈線文が横位に施されている。更に，上方から縦位に刺突文が除々に強く施されている。４は波状を呈し，口唇直下に縦位の条線文が施され，その下側に三角刺突文が山形状に施されている。５は口唇部に押圧が施され，波状を呈し，波状貝殻文が２段横位に施されている。

６～11は胴部片である。６は無節Ｌの撚糸文が斜位に，更に，沈線による山形文が施されている。７は２本組の無節の撚糸文が斜位に，更に，４本の沈線が横位に施され，斜位の２本の沈線と交差している。８は３本の沈線と１本の爪形文が横位に施されている。９は波状貝殻文が施され，10はアナダラ属の貝殻腹縁文が斜位に施されている。11はアナダラ属の貝殻腹縁文による貝殻波状文が２段施され，１か所はややねせて幅広く施されている。５は第29号，４・11は第35号，



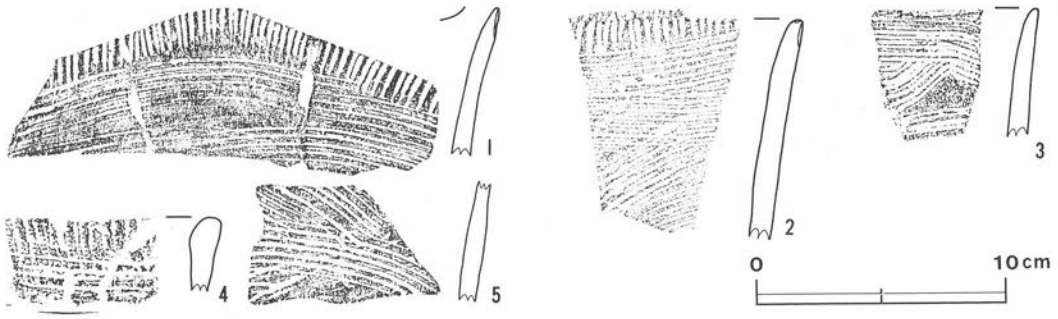
第200図　Ⅳ群ｂ類土器拓影図

2は第42号，1・6は第54号，3・7・9は第68号，8・10は第74号住居跡からの出土である。

Ⅳ群ｃ類土器（第201図）

1～4は口縁部から胴部にかけての土器片で，1～3は横位や斜位の条線が施されている。1は波状を呈し，口唇直下に縦位の沈線が施されている。2は平縁で，1と同じ文様である。3は器面全体に7本単位の櫛歯状の条線文が横位と波状に施されている。4は口唇直下にアナダラ属の貝殻腹縁文が縦位に施され，更に，その下方に3本の沈線が横位に施されている。

5は胴部片で，1と同一個体であると思われる。4は第21号，1・5は第29号，2は第46号，3は第62号住居跡からの出土である。

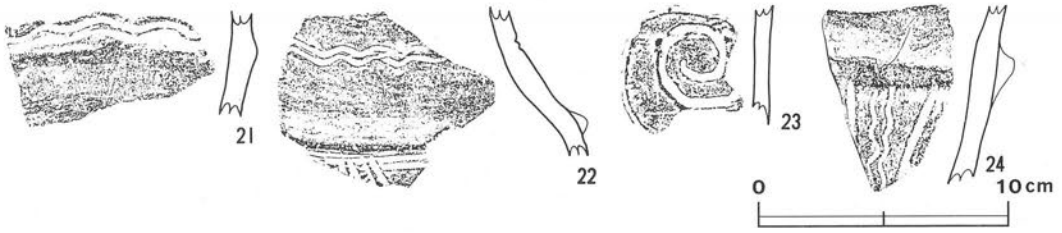


第201図　Ⅳ群ｃ類土器拓影図

Ⅴ群ａ類土器（第202・203図）

1・2は把手で，1は先端に楕円形の凹みを設けた隆帯を貼付し，隆帯に沿って2列の結節沈線文が，中側にもわずかに2列の結節沈線文が施されている。2は渦巻状の沈線が施され，孔を有している。3～11は口縁部及び胴部片である。3は波状を呈し，刺突文を施した隆帯が施され，隆帯に沿って結節沈線文が施されている。4・5は突起を設け，4は圧痕を4か所施した隆帯を有し，隆帯に沿って1列の結節沈線文を施し，その内側に結節沈線文によって変形波状文が施されている。口唇直下の内側に稜を有している。5は竹管による圧痕と結節沈線文を有する突起から隆帯に続き，隆帯で長方形を区画している。更に，隆帯に沿って簡略化した結節沈線文が2列施されている。口唇部にも結節沈線文とキザミ目が施されている。6は口唇部に竹管による圧痕を斜位に施し，隆帯によって長楕円文が口縁部に区画されている。隆帯に沿って2列の結節沈線文が施され，胴部に斜位の結節沈線文を施している。7は口唇部に結節沈線文を1列施し，隆帯によって楕円文が作られ，隆帯に沿って結節沈線文，内側に2～4列の結節沈線文が斜位に施されている。8は口唇部にキザミ目を有し，口唇部直下に波状沈線文，下方に2本の沈線文が横位に施されている。9は口唇部直下に1段の爪形文が施され，10は口唇部に逆「し」の字状の隆帯が貼付され，無文である。11は浅鉢形土器片で，口唇部直下の外面は肥厚し，内面は口縁部下位で段状になっている。12は橋状把手を有し，隆帯に沿って1列の結節沈線文が施されている。

第202図　V群ａ類土器拓影図(1)

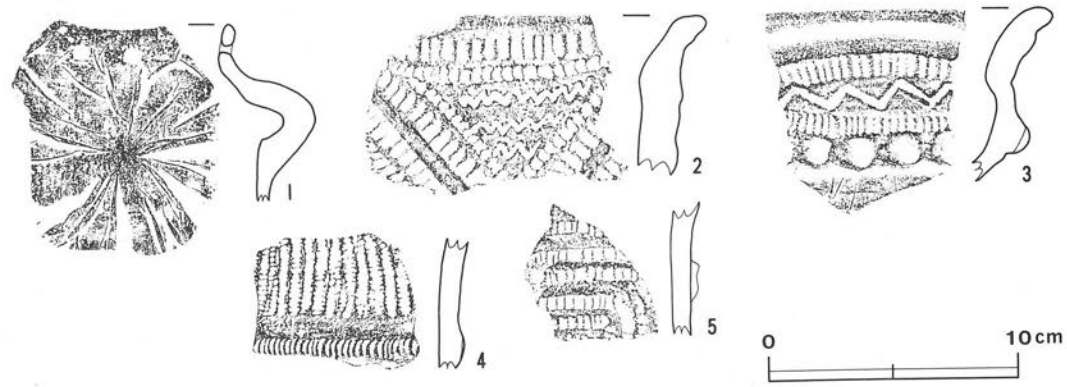


第203図　Ⅴ群ａ類土器拓影図(2)

13～24は胴部片である。13～17は隆帯に沿って結節沈線文が施され，13～15は楕円文状に，13は隆帯の内側に２列，外側に１列結節沈線文を施している。14は隆帯間に波状沈線文を横位に施し，15は刺突文が１列横位に施されている。16は結節沈線文を方形状に１列と２列施し，17は三角形状に１列から３列施している。18・19は爪形文が施され，18は横位と縦位の隆帯に沿って両側に爪形文が施され，更に，山形沈線文が施しているのが窺える。19は２段の爪形文が横位に施されている。20～24は沈線文が施されている。20は横位の沈線と山形文が横位に，21は横位に２本の波状文を，22は横位に２本の波状文と隆帯の下側に２本の沈線が横位と斜位に施されているのが窺える。23は渦巻文，24は隆帯下に２本の蛇行沈線を挟むように２本の沈線が垂下している。７・15・19・22は第１号，６・14は第13号，17は第14号，２・12は第35号，５は第36号，23は第38号，10・13・24は第43号，11は第45号，20は第46号，18・21は第47号，９は第49号，４は第55号，８は第67号，１・３・16は第68号住居跡からの出土である。

Ⅴ群ｂ類土器（第204図）

１～３は口縁部片である。１は口唇部直下に２孔が横位に穿たれ，円錐状の突起を有し，無文である。２は２列の結節沈線文を両側に沿わせた隆帯で逆三角形を構成し，更に，３本の波状沈線文が横位に施されている。３は口縁部下位に指頭圧痕を有する隆帯を貼付し，口唇部と隆帯の



第204図　Ⅴ群ｂ類土器拓影図

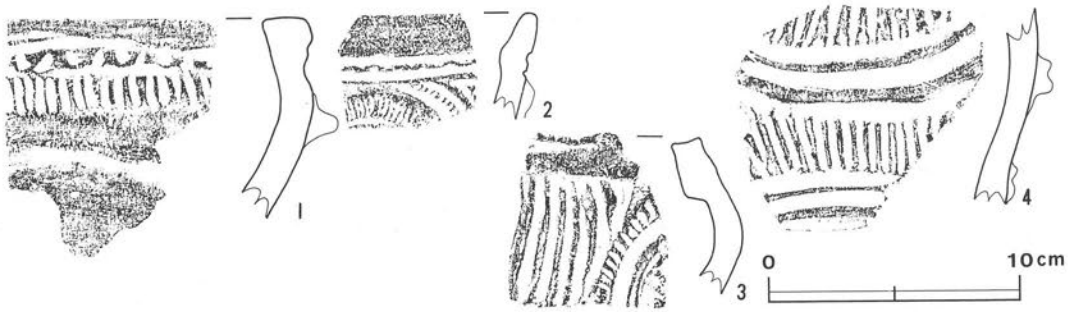
間に上から沈線文，結節沈線文，山形沈線文，及び結節沈線文が横位に施されている。

4・5は胴部片で，4は爪形文を密に施した横位の隆帯を有し，単節RLの縄文を縦位に施している。5は結節沈線文を施した「コ」の字状の隆帯を有し，隆帯に沿って両側に2列の結節沈線文が施されている。1・4は第29号，5は第35号，3は第38号，2は第64号の各住居跡からの出土である。

V群e類土器（第205図）

1～3は口縁部及び胴部片で，1は口唇部直下に雑な沈線と各方向からの刺突文，沈線が横位に巡り，その下側に高い隆帯を貼付している。2は口唇直下に連続「コ」の字文が横位に施され，その下側に刺突文を施した隆帯を有し，隆帯に沿って2本の沈線が施され，沈線間に刺突文が施されている。3は口唇直下に縦位の沈線，キザミ目を施した曲線の隆帯が施され，隆帯に沿って沈線が施されている。口縁部内面は複合を呈し，薄い粘土帯が貼り付けられている。

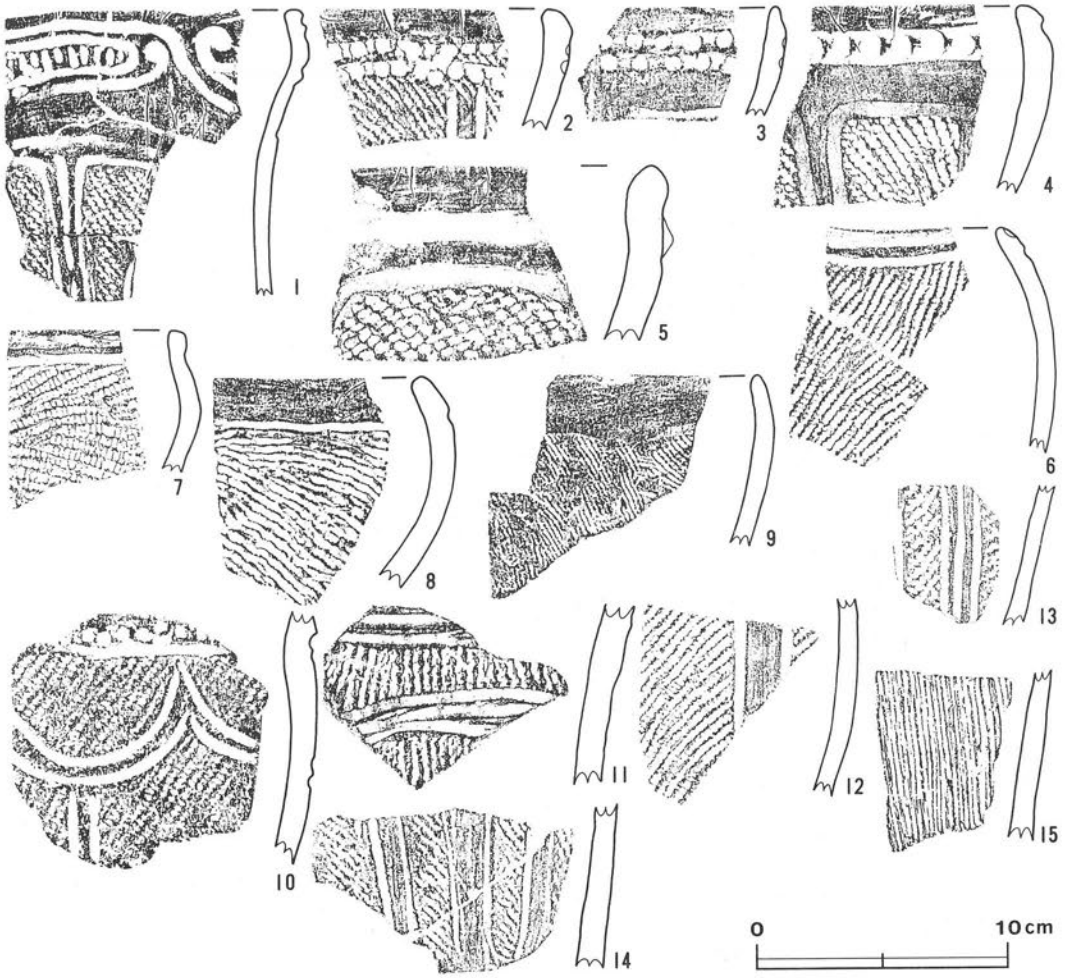
4は胴部片で，沈線を有する隆帯が貼り付けられ，隆帯の上下に縦位の沈線が施されている。3は第29号，1・2・4は第62号住居跡からの出土である。



第205図　V群e類土器拓影図

VI群b_1・b_2類土器（第206図）

1～10は口縁部及び胴部片である。1は薄手の土器で，隆帯と沈線によって渦巻文と楕円文とが区画され，楕円文区画内に縦位の沈線が施されている。胴部は沈線を有する磨消帯による逆「U」字文が施され，磨消帯間には単節LRの縄文が斜位に施されている。2・3は口唇直下に2列の円形刺突文が横位に巡り，2は竹管によって，3は棒状施文具によって施されている。2は磨消帯が垂下し，磨消帯と磨消帯の間には無節Lの縄文が斜位に施されている。3は無文である。4は口唇部直下に1列の大きい圧痕が横位に施され，磨消帯による逆「U」字文が描かれ，磨消帯間に単節LRの縄文が斜位に施されている。5は口唇部直下に隆帯と沈線が横位に施され，単節LRの縄文が斜位に施されている。6は浅い凹線と沈線が口唇部直下に横位に巡り，単節RLの縄文が斜位に施されている。7は口唇部直下に1本の沈線が横位に巡り，単節RLの縄文が斜位に施され，8は無節Lの縄文が斜位に施されている。9は口唇部直下が無文で，無節Rの撚糸文が浅く斜位に施されている。10は刺突文がわずかに窺え，胴部は2本の連弧文が横位に，更に



第206図　Ⅵ群b_1・b_2類土器拓影図

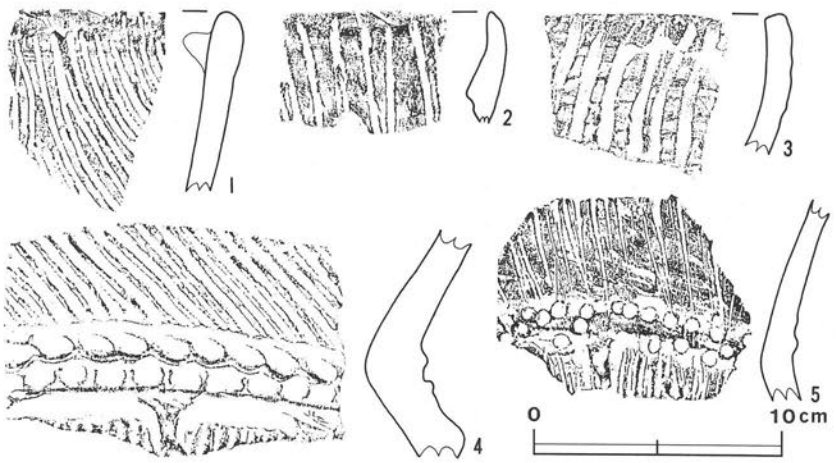
2本の沈線を垂下させ，単節ＲＬの縄文を斜位に施している。

11～15は胴部片である。11は縦位の撚糸文が施され，連弧文の一部が認められる。12～14は磨消帯が垂下し，12・13は磨消帯間に単節ＲＬの縄文が斜位に施され，14は無節Ｒの縄文が斜位に施されている。15は条線文が縦位に施されている。９は第３号，６・８・12は第12号，２は第22号，10は第29号，１は第36号，７・13は第49号，３・５・14は第54号，４・11・15は第76号の各住居跡からの出土である。これらの土器片のうち，殆どがb_1類に含まれ，b_2類は，10・11の土器片である。

Ⅵ群ｄ類土器（第207図）

１～５は口縁部及び胴部片である。口唇部直下から半截竹管による重弧文が施され，口唇部直下の内面に突帯が横位に施されている。２は口唇部直下から棒状施文具による沈線が雑に縦位に施されている。内面は複合し，明瞭な段状が認められる。３は太い沈線が斜位に施されている。

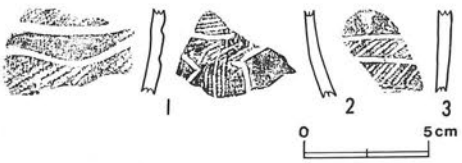
4は口縁部に斜位の沈線が施され，胴部に楕円形と円形の刺突文が２段と，その下側に縦位の隆帯が認められる。更に，隆帯に沿う沈線と，縦位の沈線が施されている。口縁部の器肉断面にキザミ目が施され，輪積みされた所である。５は口縁部に斜位の沈線が施され，胴部に横位の隆帯を設け，隆帯上や両側に雑な刺突文が施されている。また，縦位の隆帯と縦位の沈線が施されている。１は第29号，３は第35号，４は第39号，５は第68号，２は第76号住居跡からの出土である。



第207図　Ⅵ群ｄ類土器拓影図

Ⅷ群ａ類土器（第208図）

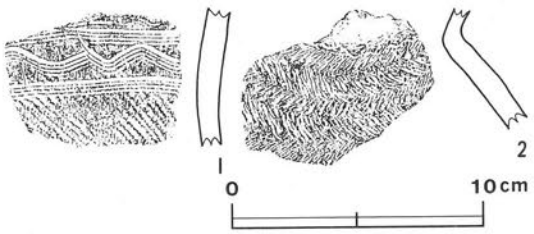
１～３は胴部片である。１は２本の沈線が横位に巡り，単節ＬＲの縄文を斜位に施し，２は沈線による無文帯が区画され，細い単節ＲＬの縄文が横位，斜位，及び縦位に施されている。３は無文帯を有し，単節ＲＬの縄文が斜位に施され，２本の沈線が斜位に施されている。２・３は同一個体で，薄手である。１～３は第27号住居跡からの出土である。



第208図　Ⅷ群ａ類土器拓影図

Ⅷ群b_2類土器（第209図）

１・２は胴部片である。１は４本単位の櫛歯状文が波状に，その両側に同じく櫛歯状の文が横位に施され，その下側に単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。２は反撚りの縄文と無節Ｒの縄文が交互に施され，羽状を呈している。１は第22号，２は第37号住居跡からの出土である。



第209図　Ⅷ群b_2類土器拓影図

第３節　弥生時代の遺構と遺物

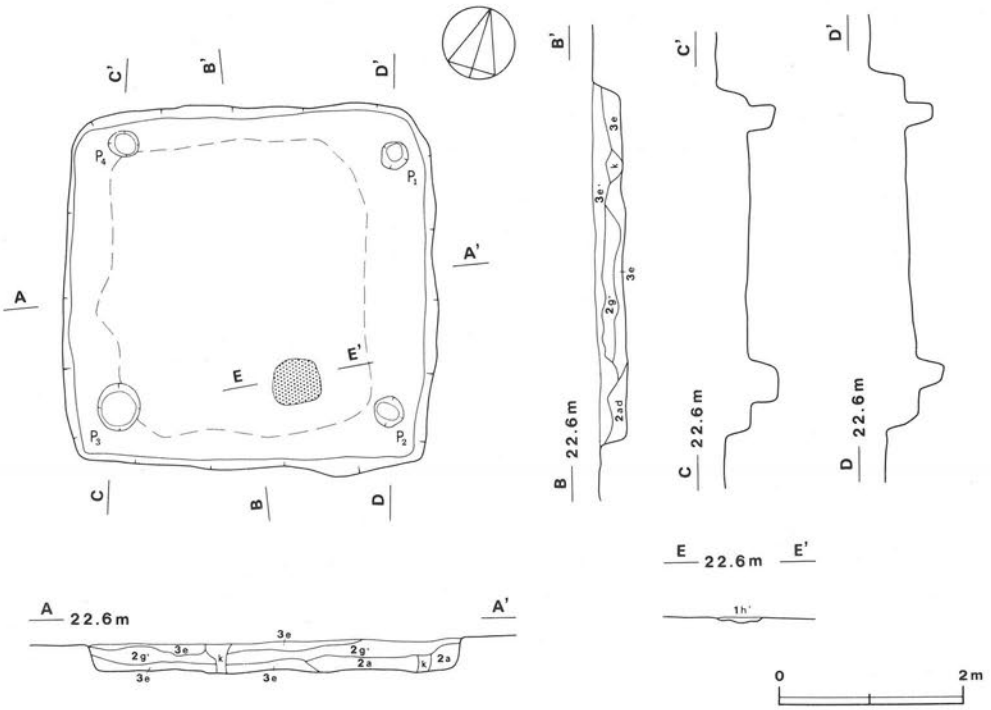
１　竪穴住居跡

第17号住居跡（第210図）

本跡は，当遺跡のほぼ中央部B4f₁区を中心に確認され，第５号住居跡の６ｍ南西側に存在している。

平面形は隅丸方形を呈し，長軸方向はＮ－72°－Ｅを指し，規模は長軸4.2ｍ・短軸４ｍである。壁は，ロームで硬く各壁とも，ほぼ垂直に立ち上がり，壁高は30～40cmで西コーナー付近が浅い。床面はほぼ平坦で，全体的に硬いロームである。図中の壁周辺を除いた破線内は踏み固められて，パカパカに硬く締まっている。

炉跡はP₂近くの南東側に位置し，長軸55cm・短軸50cmのやや不整隅丸方形を呈し，床面を皿状に７cmほど掘り込んでいる地床炉である。炉内には，焼土粒子少量含む褐色土がかすかに堆積し，炉床はレンガ状に硬く焼けている。ピットは４か所検出され，配列や規模からP₁～P₄が主柱穴と考えられる。主柱穴は，いずれも各コーナー部の壁ぎわに位置し，規模は長径33～55cm・短径24～48cm・深さ25～30cmである。P₃は本跡の中で最大規模で，長径55cm・短径48cmの円形を呈し，



第210図　第17号住居跡実測図

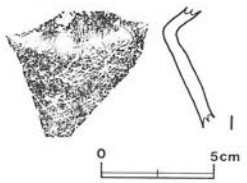
P_2・P_4の柱穴の底面は傾斜して掘られている。貯蔵穴は，検出できなかった。

覆土はほぼ3層から成り，上層はローム粒子を少量，焼土粒子・炭化粒子を微量含む黒褐色土，中層はローム粒子を少量，炭化粒子を微量含む暗褐色土，下層はローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む黒褐色土等が自然堆積の様相を呈している。一部に上層から下層にかけて攪乱がみられる。

遺物は，P_3の主柱穴の覆土中層から坩の頸部片や甕の底部片が出土しており，そのほか，中央の床面や南コーナー部の覆土上層や覆土中から土器片67片が出土している。なお，その中には赤彩された壺の口縁部の破片が1片含まれている。

出土土器

第211図1は頸部から胴部にかけての土器片で，網目状撚糸文が施されている。



第211図　第17号住居跡出土土器拓影図

第22号住居跡（第212図）

本跡は，当遺跡南西端の台地縁辺部E2d_3区を中心に確認され，第25号住居跡の8m東側に存在している。

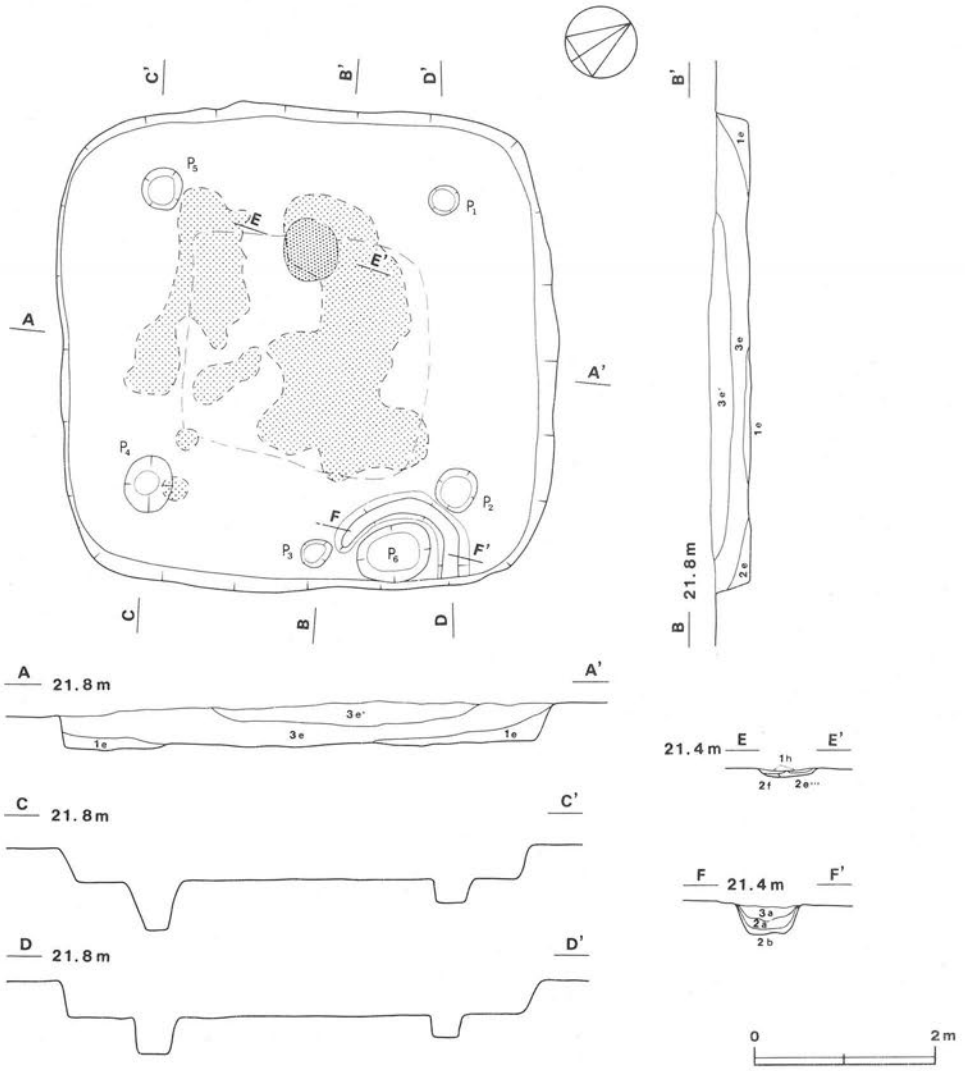
平面形は隅丸方形を呈し，長軸方向はN－56°－Wを指し，規模は長軸5.5m・短軸5.4mである。壁はロームで硬く締まり，全壁ともほぼ垂直に立ち上がり，壁高は40cmである。床面は平坦で，全体的に硬く締まっているロームで，主柱穴より内側の破線で示した範囲内は踏み固められ，特に硬く締まっている。

炉跡は北西壁近くに位置し，長径70cm・短径60cmの楕円形を呈し，床面を皿状に10cmほど掘り込んでいる地床炉である。炉内にはローム粒子・焼土粒子・炭化粒子等多量とローム粒子・焼土粒子を微量含む暗褐色土等が堆積し，炉床は硬く焼けている。ピットは6か所検出されたが，位置や規模からP_1・P_2・P_4・P_5が主柱穴と考えられる。主柱穴は各コーナーに位置し，規模は長径35～65cm・短径35～55cm・深さ25～55cmである。P_3は支柱穴と考えられる。貯蔵穴（P_6）は東コーナー部付近の南東壁下に位置し，長径80cm・短径65cmの楕円形を呈し，深さ30cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり，底面はほぼ平坦である。また，貯蔵穴を囲むように上幅13～15cm・下幅30～35cm・高さ3cm・長さ2mの周堤が存在している。

覆土はほぼ3層から成り，ローム粒子少量・焼土粒子・炭化粒子を微量含む黒褐色土，下層はローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む暗褐色土と褐色土がおおむねレンズ状に自然堆積している。また，本跡は炭化材と厚さ10cm内外の焼土が主柱穴に囲まれた内側の広い範囲に堆積していることから，焼失家屋と考えられる。

遺物は，東コーナー部の壁ぎわや南東壁ぎわから，完形の壺（第213図1～3）3個体やほぼ

完形の甕（第213図４・５）２個体，台部（第213図９）等が，正位や斜位および横位の状態でまとまって出土している。また，中央部の床面や覆土下層からつぶされた状態で甕（第213図６・７）が出土している。そのほか，貯蔵穴や覆土中・下層を中心に，土器片237片が出土しており，縄文土器片多量，土器片錘（第184図181～185）５点，土製円板（第180図22）１点等が出土している。

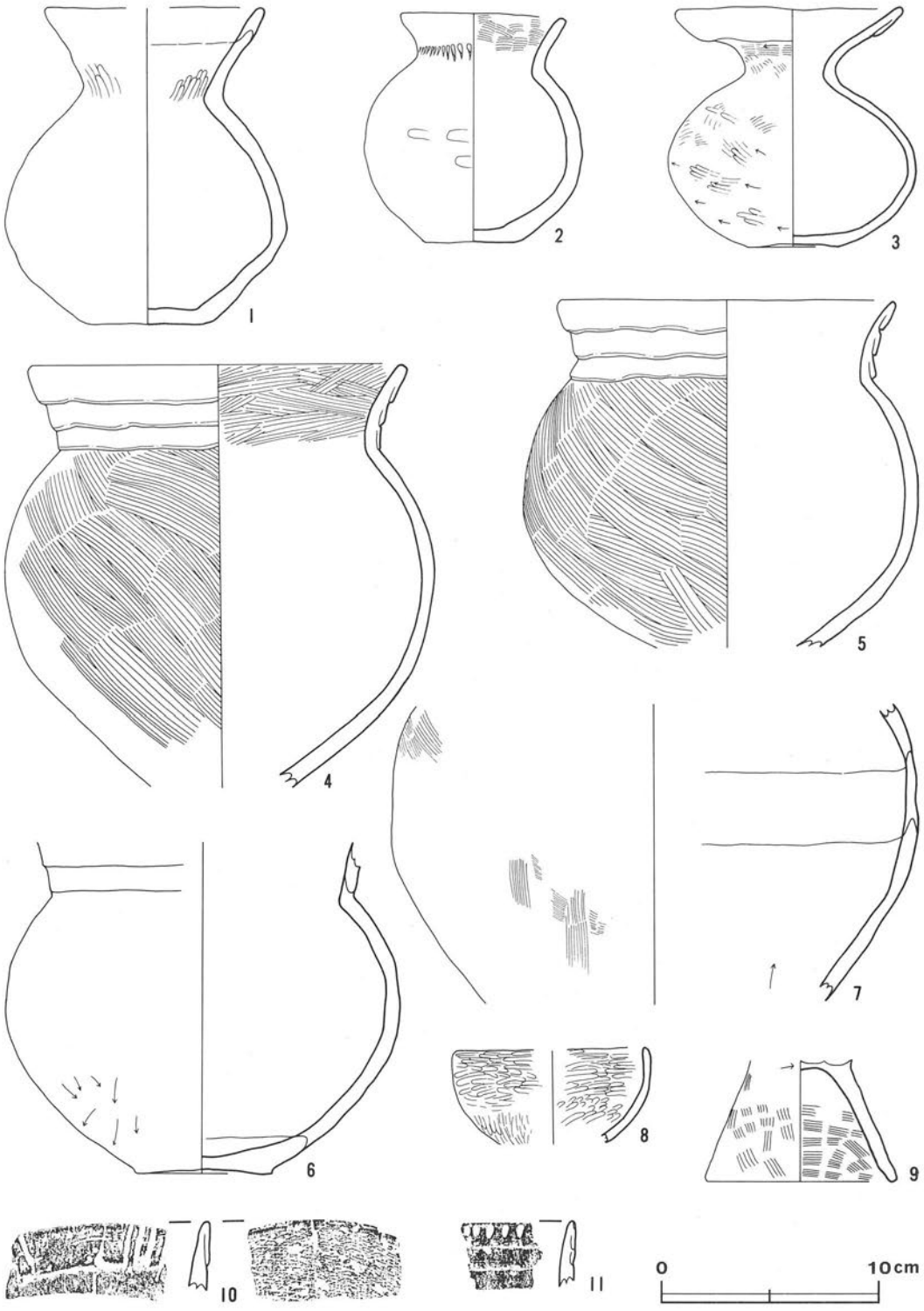


第212図　第22号住居跡実測図

出土土器

第22号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第213図 1	壺	A(10.8) B 14.7 C 5.4	底面は平底を呈し，胴部はほぼ球形で，中位に最大径を有する。口縁部は外傾している。	口縁部内・外面は縦位のヘラ磨き，胴部外面も縦位のヘラ磨き，内面は横位のナデが施され，輪積痕がわずかに窺える。	砂粒 にぶい橙色 良好	90% 1個体 輪積痕 P331



第213図　第22号住居跡出土土器実測図・拓影図

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第213図 2	壺	A　7.5 B 10.6 C　4.6	底部は平底を呈する。胴部は球形を呈し，中位に最大径を有する。口縁部は外傾している。	口縁部内面は横位のハケ目，外面は斜位のハケ目を施し，その上に横位のナデを軽く施している。胴部内・外面は横位のナデが施され，外面はていねいなナデである。頸部にキザミ目を施している。	砂粒 にぶい橙色 良好	100%1個体 P329
3	壺	A 10.4 B 11.0 C　4.1	底部は平底を呈し，胴部はややつぶれた球形を呈し，胴部や中位よりやや下に最大径を有している。口縁部は複合口縁を呈し，大きく外傾している。	口縁部内・外面は横位のナデ胴部外面は横位のナデが施されている。	砂粒 にぶい橙色 普通	90%　4片 P330
4	台付甕	A 17.6 B(19.5)	胴部は球形を呈し，中位に最大径を有する。口縁部は頸部から外傾しながら立ち上がっている。底部は欠損している。	口縁部内面は横位のハケ目が施されている。外面は3段の輪積痕が明瞭に残っている。胴部外面は斜位のハケ目，内面はナデが施されている。	砂粒・長石・スコリア 赤褐色 普通	90%　7片 輪積痕に指頭圧痕 P46
5	台付甕	A 15.7 B(16.0)	胴部は球形を呈し，中位に最大径を有する。口縁部は外反している。底部は欠損している。	口縁部内面は横位のナデが施されている。外面は3段の輪積痕が明瞭に残っている。胴部外面は斜位のハケ目，内面は横位のナデが施されている。	砂粒・長石・スコリア 黒褐色 普通	90%　6片 P45
6	甕	B(15.4) C　6.4	底部は平底を呈し，胴部は球形で，胴部中位に最大径を有する。口縁部は軽く外傾し，口唇部付近は欠損している。	口縁部内面は横位のナデ，外面に輪積痕が残っている。胴部外面は横位と斜位と縦位のナデが雑に施されている。	砂粒 にぶい褐色 普通	30%　9片 P338
7	甕	B(13.8)	胴部は球形を呈する。底部と口縁部は欠損している。	胴部外面はハケ目を施している。輪積痕が認められる。	砂粒・雲母 橙色 不良	30%　12片 P337
8	埦	A (8.6) B (4.4)	体部から口縁部にかけての土器片で，口縁部は内彎している。	体部内・外面はヘラ磨きが施されている。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	20%　1片 P340
9	台付甕	D　8.8	台部は「ハ」の字状に開いて裾部に至る。	内・外面はハケ目が施されている。	砂粒 赤色 普通	20%　1片 P336

第213図10・11は口縁部片で，10は複合口縁を呈している。複合口縁部に縦位の沈線が4本認められ，内面は網目状撚糸文が施されている。口縁部外面は赤彩が施され，複合部は赤彩が殆ど消えている。11は外面の輪積痕が2段明瞭に残り，口唇直下に棒状施文具による押圧が縦位に施されている。

第23号住居跡（第214図）

本跡は，当遺跡の中央C3c$_9$区を中心に確認され，第19号住居跡の6m北西側に存在している。

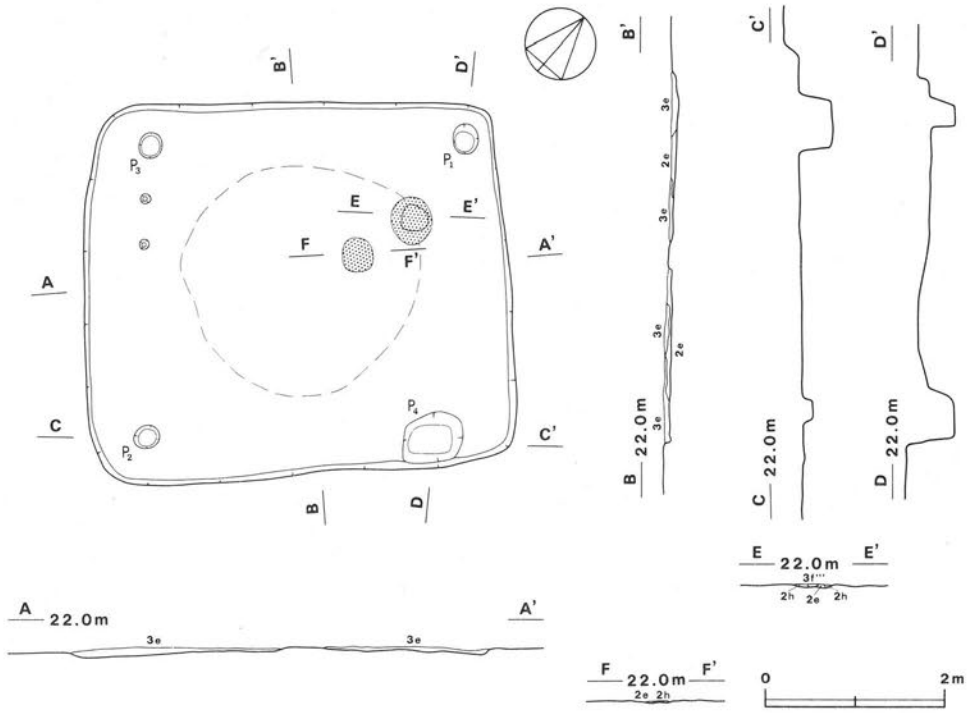
平面形は隅丸方形を呈し，長軸方向はN－46°－Eを指し，規模は長軸4.8m・短軸4.2mである。壁はロームで硬く，全体に重機によって削平されて浅い壁である。壁高は4～20cmで，東コーナー部付近がやや高い。床面はロームを掘り込み，ほぼ平坦で全体的に硬く，中央部は踏み固められて特に硬く締まっている。

炉跡は北コーナー部付近に2か所検出され，北コーナー部に近い炉跡は長径55cm・短径45cm，

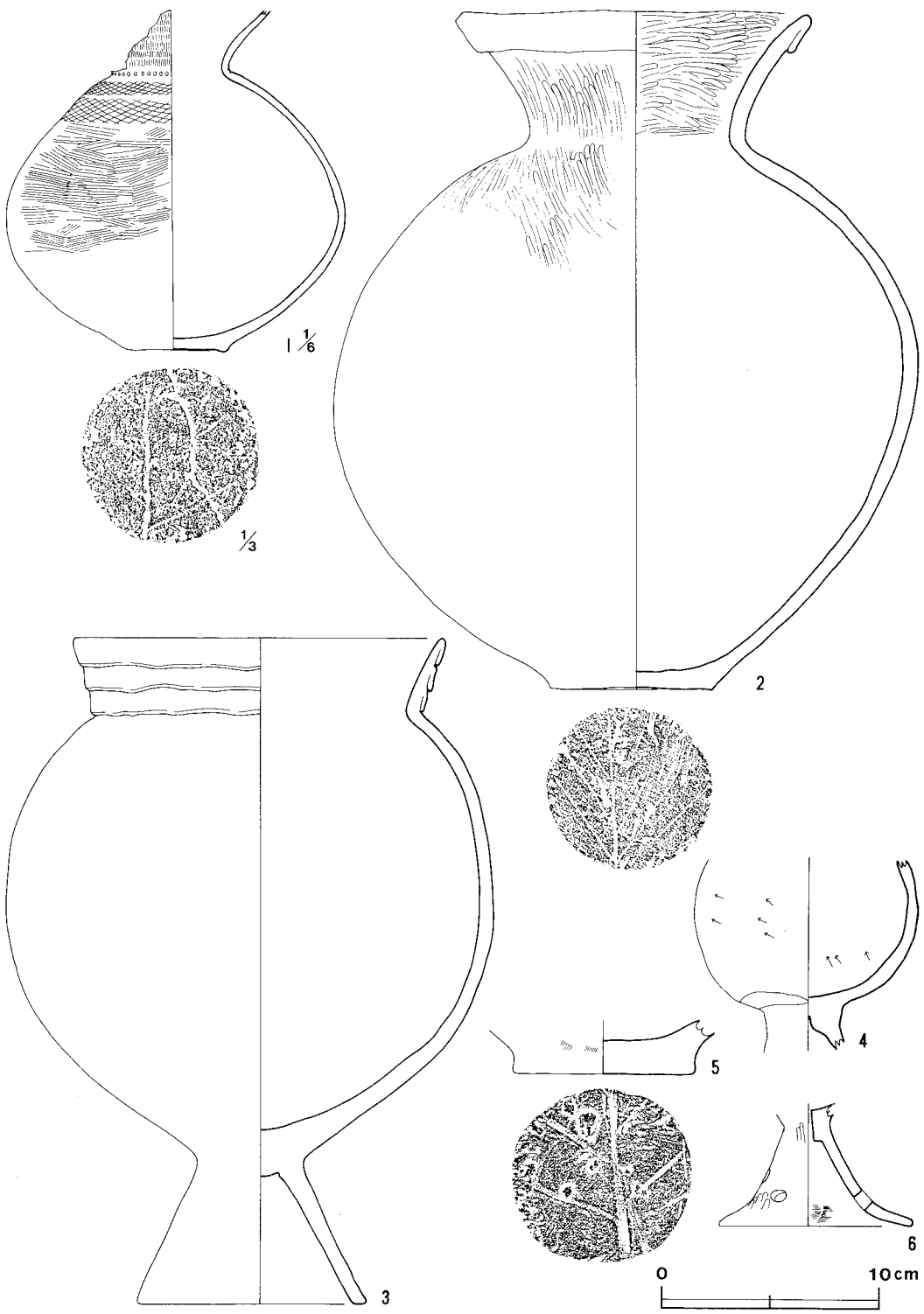
中央に近い炉跡は長径40cm・短径35cmで，床面をそれぞれ４cmと２cmほど皿状に掘り込んでいる地床炉である。炉内にはそれぞれ焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子を微量含む暗褐色土が堆積している。炉床は硬く焼けているが，中央に近い炉跡の炉床はレンガ状に硬く焼け，締まっている。炉床の焼け方から，中央に近い炉跡が主に使用されたものと考えられる。ピットは４か所検出され，位置の規模からP_1～P_3が主柱穴と考えられる。P_1～P_3は各コーナーの壁ぎわに位置し，規模は長径30～35cm・短径25～30cm・深さ13～30cmである。東コーナー部付近では，住居内・外部とも確認したが，柱穴と思われるものは検出できなかった。P_4は東コーナー部の南東壁下に位置する貯蔵穴で，長軸65cm・短軸55cmの隅丸長方形を呈し，深さ30cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり，底面は平坦である。

覆土は重機により削平され薄いが，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む暗褐色土と黒褐色土が５～10cmの厚さで堆積している。

遺物は，東コーナーに位置する貯蔵穴から，弥生式土器の壺形土器（第215図１），台付甕（第215図３），器台の脚部（第215図６）が，横位及び正位の状態でまとまって出土している。そのほか，擬似木葉痕を有する底部片が北東壁付近の床面から逆位の状態で，また，球状土錘（第222図１・２）が２点南東壁ぎわの床面から出土している。なお，土器片は床面や覆土中から26片出土している。



第214図　第23号住居跡実測図



第215図　第23号住居跡出土土器実測図

出土土器

第23号出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第215図 1	壺 前野町	B(31.2) C　9.0	底部は平底で，胴部は横長の球形を呈し，胴中位下に最大径を有し，下ぶくれである。頸部は「く」の字状を呈し，口縁部は外傾している。	口縁部内面はヘラナデ，外面は縦位のハケ目を施している。頸部に1列の刺突文と2段の網目状撚糸文が施され，端部3か所は横位にナデが施されている。胴部外面は横位のハケ目が施され，内面は摩滅している。底部に擬似木葉痕が認められる。	砂粒・長石 橙色 良好	90%　50片 P48
2	壺	A 16.2 B 31.4 C　7.4	平底で胴部は球形を呈し，中位に最大径を有する。口縁部は外反し，複合口縁である。	口縁部内面は横位のヘラ磨き外面上位は横ナデ，上位以下ヘラ磨きが施され，胴部内面はヘラナデ，外面はヘラ磨キが施されている。底部に木葉痕が認められる。	砂粒 橙色 普通	60%　40片 P346
3	台付甕	A 17.2 B 30.7 D 10.5	台部は「ハ」の字状を呈し，底部は厚い。胴部は球形を呈し，中位に最大径を有する。口縁部は軽く外傾している。	口縁部内面は横位のヘラナデ外面は3段の輪積痕が明瞭に残っている。胴部内・外面はナデが施され，台部内・外面もナデが施されている。	砂粒 暗赤褐色 普通	80%　45片 輪積痕に指頭圧痕 P47
4	小形台付甕	B (8.9)	胴部は球形を呈し，中位に最大径を有する。台部の一部と頸部・口縁部は欠損している。	胴部内・外面は横位や斜位に雑なヘラナデが施されている。	砂粒 灰白色 普通	70%　1個体 P343
5	壺	B (2.0) C　8.0	底部片である。	擬似木葉痕が認められる。	砂粒 橙色 普通	10%　1片 P344
6	器　台	B (5.4) E　9.9	脚部は「八」の字状を呈し，裾部で大きく開いている。器受部の中心に孔を有し，脚部下位にも3孔ずつ2段に孔が穿たれている。	脚部外面は縦位のヘラ磨き，内面の裾部にはハケ目が見られる。	砂粒 橙色 良好	50%　1個体 P345

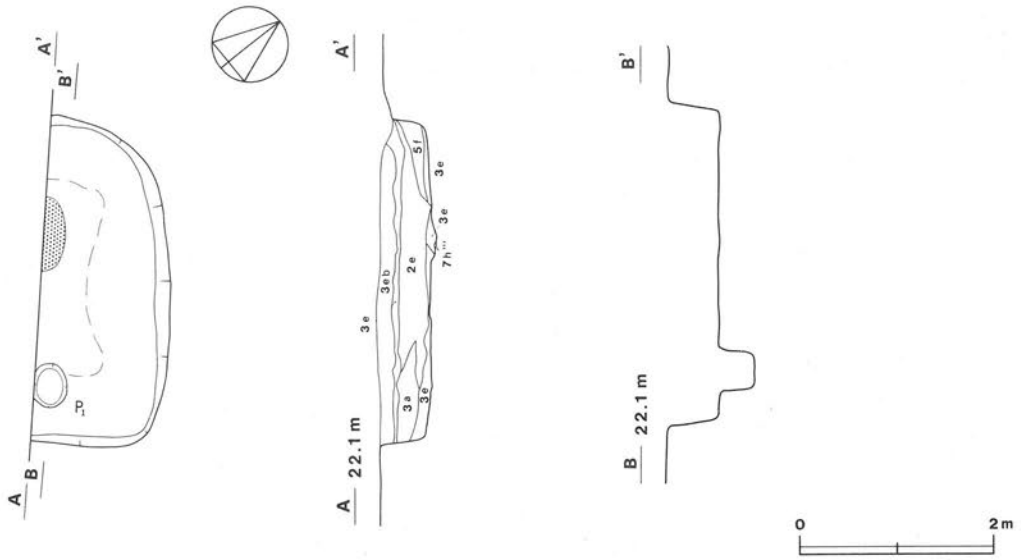
第25号住居跡（第216図）

本跡は，当遺跡南西側の台地縁辺部E1c$_0$区を中心に確認され，第24号住居跡の2m南東側に存在する。本跡の南西側の半分はエリヤ付近のため調査できなかった。

平面形は隅丸方形か隅丸長方形を呈するものと考えられ，北東壁はN－50°－Eを指し，北東壁の長さは3.5mである。壁はロームで硬く垂直に立ち上がり，壁高は55cmである。北コーナー部は，東コーナー部と比べるとゆるやかなカーブを呈している。床面は平坦で，硬く締まっているロームで，壁周辺を除いて踏み固められている。

炉跡は，やや北側に位置するものと考えられ，約半分ほど調査したが，長径80cm・短径は推定で55cmの楕円形を呈し，床面を皿状に7cmほど掘り込んでいる地床炉と考えられる。炉内には焼土粒子を多量含む暗赤褐色土やローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む黒褐色土が堆積し，炉床は硬く焼けている。ピットは1か所検出され，位置や規模から主柱穴と考えられる。P$_1$は東コーナーの南東壁ぎわに位置し，規模は長径45cm・短径35cm・深さ25cmである。

覆土はおおむね3層から成り，上層はローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロックを



第216図　第25号住居跡実測図

微量含む黒褐色土，下層はローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む黒褐色土と暗褐色土等がほぼ自然堆積の様相を呈している。

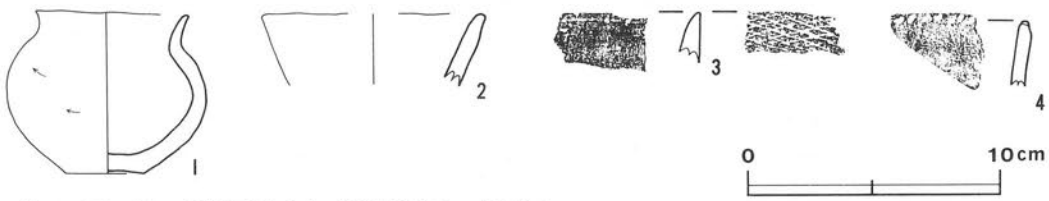
遺物は，北東壁ぎわの覆土下層から，完形の小形甕（第217図１）が正位の状態で出土している。その他，北東側の覆土下層から土器片８片が出土している。なお，この中には赤彩された土器片２片が含まれている。

出土土器

第25号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第217図 1	小形甕	A　6.1 B　6.5 C　3.1	底部は平底を呈し，胴部は横長の球形を呈し，中位に最大径を有する。口縁部は外反し，短い。	口縁部内・外面は横位のヘラナデ，胴部内・外面も横位のヘラナデが施されている。	砂粒 にぶい橙色 良好	100%1個体 P347
2	壺	A (9.0) B (2.9)	口縁部は外傾している。	口縁部内・外面は摩耗している。	砂粒 褐灰色 普通	10%　1片 P348

第217図３・４は口縁部片で，３は外面に赤彩が施され，内面は網目状撚糸文が施されている。４は口唇部に棒状施文具による押圧が斜位に施されている。



第217図　第25号住居跡出土土器実測図・拓影図

第36号住居跡（第218図）

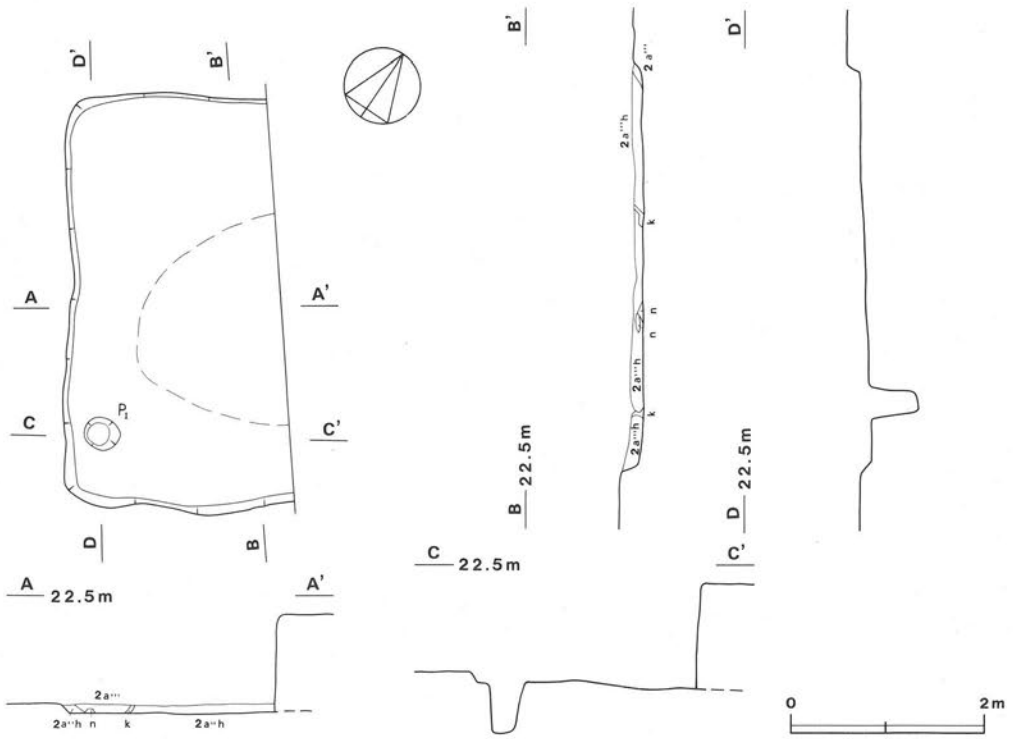
本跡は，当遺跡の中央部C3g$_8$区を中心に確認されたもので，本跡の北東側の一部は，農道下のため調査ができなかった。

平面形は隅丸方形か隅丸長方形になるものと思われ，主軸方向は不明で，規模は南西壁の長さが4.5ｍである。壁はロームで硬く，ややゆるやかに外傾しながら立ち上がり，壁高は10～20cmである。当遺跡の弥生時代の住居跡の中では壁高が浅い。床面はほぼ平坦で，全体的に硬く締まっているロームで，P$_1$の北側の破線で結ばれた範囲が踏み固められ，特に硬く締まっている。

炉跡と貯蔵穴は，確認できなかった。ピットは南コーナー付近から１か所検出され，位置や規模から主柱穴と考えられる。P$_1$の規模は長径40cm・短径35cm・深さは45cmである。そのほかのピットは確認できなかった。

覆土は，ローム粒子多量・焼土粒子を微量含む暗褐色土等が自然堆積の様相を呈している。

遺物は，農道の南側や南コーナー部及び南東壁ぎわの床面から，弥生式土器片47片が出土し，半完形であるが復元できた遺物は，南関東系の壺（第219図１）である。高坏の坏部（第219図２）は，主柱穴の覆土中の土器片13片と主柱穴ぎわの土器片１片が接合して復元できたものである。そのほか，覆土中からチャートの原石１点のほか土器片も少量出土している。

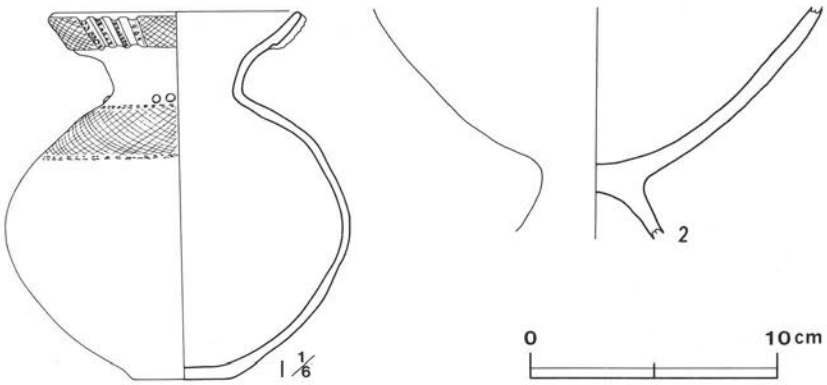


第218図　第36号住居跡実測図

出土土器

第36号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第219図 1	壺 前野町	A 20.6 B 29.5 C 8.3	底部は平底で，胴部は横長の球形を呈し，中位に最大径を有する。口縁部は複合口縁を呈し，キザミ目を持つ4本の棒状浮文を単位として，4単位有している。また，頸部にも4個の円形浮文を1単位として3単位飾られている。	口縁部内面は横位のナデが施され，外面は複合口縁部に施された棒状浮文によって区画され，区画内には網目状撚糸文が施されている。頸部から胴部上位にかけても網目状撚糸文が施されている。胴部外面はていねいな横位のナデが施されている。	砂粒・長石 橙色 良好	60%　47片 P53
2	高　坏	A 17.9 B (8.8)	坏部はやや内彎気味に開いている。脚部は殆ど欠損している。	坏部内・外面は横位のナデが施されている。	砂粒 にぶい橙色 普通	60%　14片 P417



第219図　第36号住居跡出土土器実測図

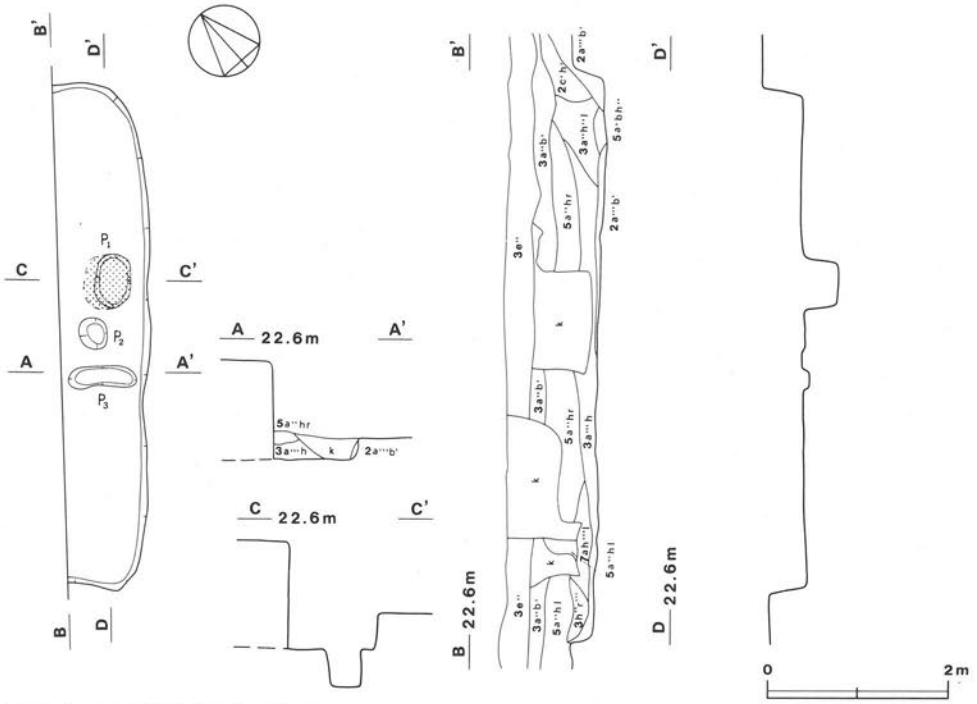
第40号住居跡（第220図）

本跡は，当遺跡の中央C2j₀区を中心に確認され，第29号住居跡の4m西側に位置している。北西側エリヤ境界に存在しているため，調査ができたのは南東側のごく一部である。

平面形は隅丸方形か隅丸長方形を呈するものと考えられ，南東壁はN－44°－Eを指し，南東壁の長さは5.6mである。その他は不明である。壁は垂直に立ち上り，壁高は40cmである。東コーナー部は南コーナー部と比べると丸味を帯びている。床面は壁周辺を除いて少し掘り過ぎたため段状の状態を呈しているが本来は平坦であると思われる。

炉跡は検出されなかった。ピットは3か所検出されたが，主柱穴は検出できなかった。P_1は貯蔵穴と考えられ，長径60cm・短径40cmの楕円形を呈し，深さ45cmである。壁は垂直に立ち上がり，底面は平坦である。P_2・P_3は深さが10～15cmと浅く，性格不明のピットで，本跡には伴わないものと考えられる。

覆土は一部明瞭に攪乱を受けているが，ほぼ2～3層から成り，上層はローム粒子を多量，焼土粒子・炭化粒子を微量含む極暗褐色土，下層はローム粒子多量・焼土粒子を微量含む黒褐色



第220図　第40号住居跡実測図

土が堆積している。また，本跡の貯蔵穴周辺に焼土があることと，覆土下層に焼土粒子・炭化粒子・炭化物を含んでいることから，焼失家屋と考えられる。

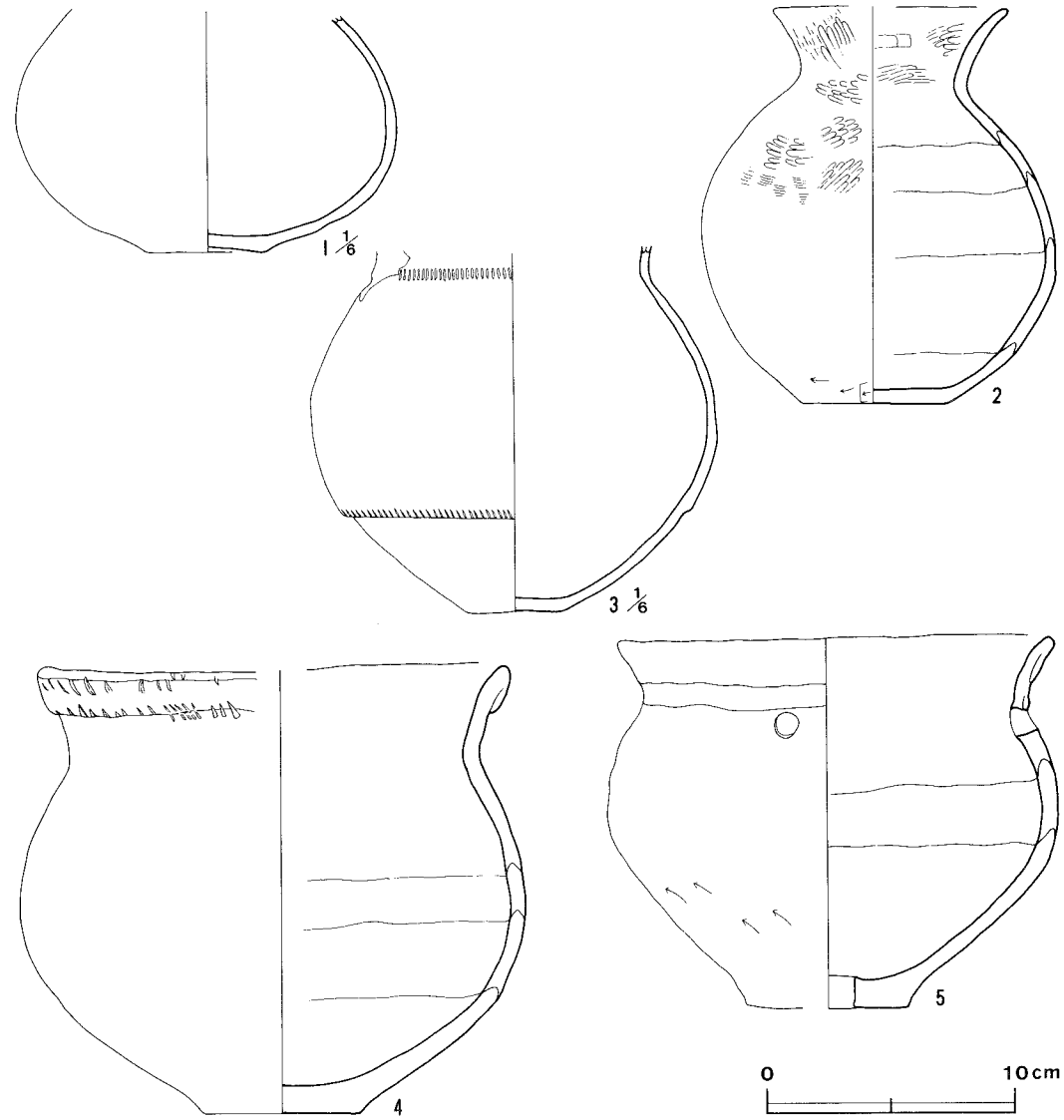
遺物は，東コーナー部付近の覆土下層から，壺（第221図１）の上に甕（第221図４）が正位で重なった状態のものと，甑（第221図５）が斜位で出土した。南コーナー部付近の覆土下層からは，壺（第221図２）が横位の状態で出土している。そのほか，覆土中から土器片11片，土器片錘３点，縄文土器片少量が出土している。

出土土器

第40号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第221図 1	壺	B(21.5) C　9.5	底部はやや上げ底で，胴部は横に張った球形を呈し，下ぶくれ状で，中位のやや下側に最大径を有する。胴部上位と口縁部は欠損している。	胴部外面は横位のていねいなナデ，内面は雑なナデが施されている。	砂粒・長石にぶい赤褐色 良好	85%　1個体 外面の一部赤彩 二次焼成 P55
2	壺	A　(9.5) B　15.1 C　5.8	底部は平底で，胴部は球形を呈し，口縁部は外反している。	口縁部外面は縦位のナデ内面は横位のナデが施されている。胴部外面は横位のナデが施されている。いずれもていねいなナデである。内面は横位のナデが施されている。輪積痕が４段窺える。	砂粒・長石にぶい橙色 良好	90%　1個体 二次焼成 P429

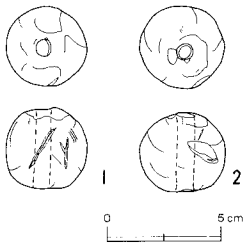
図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第221図 3	甕	B(30.0) C　7.6	底部は平底で，胴部は球形を呈し中位に最大径を有する。口縁部の大部分は欠損している。	口縁端部に細かいキザミ目が施されている。胴部外面は横位のナデ，内面は摩滅している。胴部下位の接合部にキザミ目を施している。	砂粒・長石・スコリア にぶい橙色 不良	85%　38片 P54
4	甕	A 18.9 B 18.1 C　6.2	底部は平底で，胴部は球形を呈し，中位に最大径を有する。	複合口縁部の両端部にキザミ目を有し，口縁部内面は横位のナデ，胴部外面は横位のナデが施されている。内面は摩滅している。	砂粒・長石 赤橙色 普通	80%　20片 二次焼成 P428
5	甑	A 17.6 B 15.0 C　6.4	平底で底部中央に孔を有する。胴部は内彎しながら外側に大きく開き，上位に最大径を有する。頸部には対になる孔を有し，口縁部は外反している。	口縁部外面は2段の輪積痕が明瞭に残り，内面は横位のナデが施されている。胴部外面は摩滅し，内面は横位のナデが施されている。	砂粒 にぶい橙色 普通	95%　2片 二次焼成 P430



第221図　第40号住居跡出土土器実測図

2　土　製　品

球状土錘（第222図）



第222図　土製品実測図(6)

球状土錘１・２は，大形の完形品である。長さ3.5～3.7cm・幅3.6～3.7cm・重さ41.9～48.0gで，ほぼ中央に0.7～0.8cmの貫通孔を有している。胎土は砂粒を含み，色調はにぶい橙色である。第23号住居跡からの出土である。

第６表　土製品一覧表

図版番号	名　称	出土地点	法量 長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	図版番号	名　称	出土地点	法量 長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
第222図 1	球状土錘	SI 23	3.7	3.6	3.6	41.9	DP331	第222図 2	球状土錘	SI 23	3.5	3.7	3.7	43.6	DP330

第７表　住居跡一覧表

住居跡番号	位　置	平面形態	規模（m） 長径×短径	壁　高	長径方向	炉	柱穴	覆土	出　土　遺　物	備考
第17号	B4f$_1$	隅丸方形	4.2×4.0	0.3～0.4	N－72°－E	南東側	4	N	坩，甕，土器片67片，赤彩壺口縁１片	
第22号	E2d$_3$	隅丸方形	5.5×5.4	0.4	N－56°－W	北西側	4	N	壺，甕，土器片239片，縄文土器片多量，土器片錘５点，土製円板１点，石器５点	火災
第23号	C3c$_9$	隅丸方形	4.8×4.2	0.04～0.2	N－46°－E	北コーナー２か所	3	－	台付甕，器台，土器片26片，壺，木葉痕底部，土製品２点	
第25号	E1c$_0$	隅丸方形 隅丸長方形	3.5	0.55	N－50°－E	北　側	1	N	甕，土器片６片，赤彩土器片２片	
第36号	C3g$_8$	隅丸方形ないし隅丸長方形	4.5	0.1～0.2	不　明	－	1	N	壺，高坏，土器片29片，土器片錘６点，原石１点	
第40号	C2j$_0$	隅丸方形ないし隅丸長方形	5.6	0.4	N－44°－E	－	－	NA	壺，甕，甑，土器片11片，縄文土器片少量，土器片錘３点	火災

第4節　古墳時代の遺構と遺物

1　竪穴住居跡

第4号住居跡（第223図）

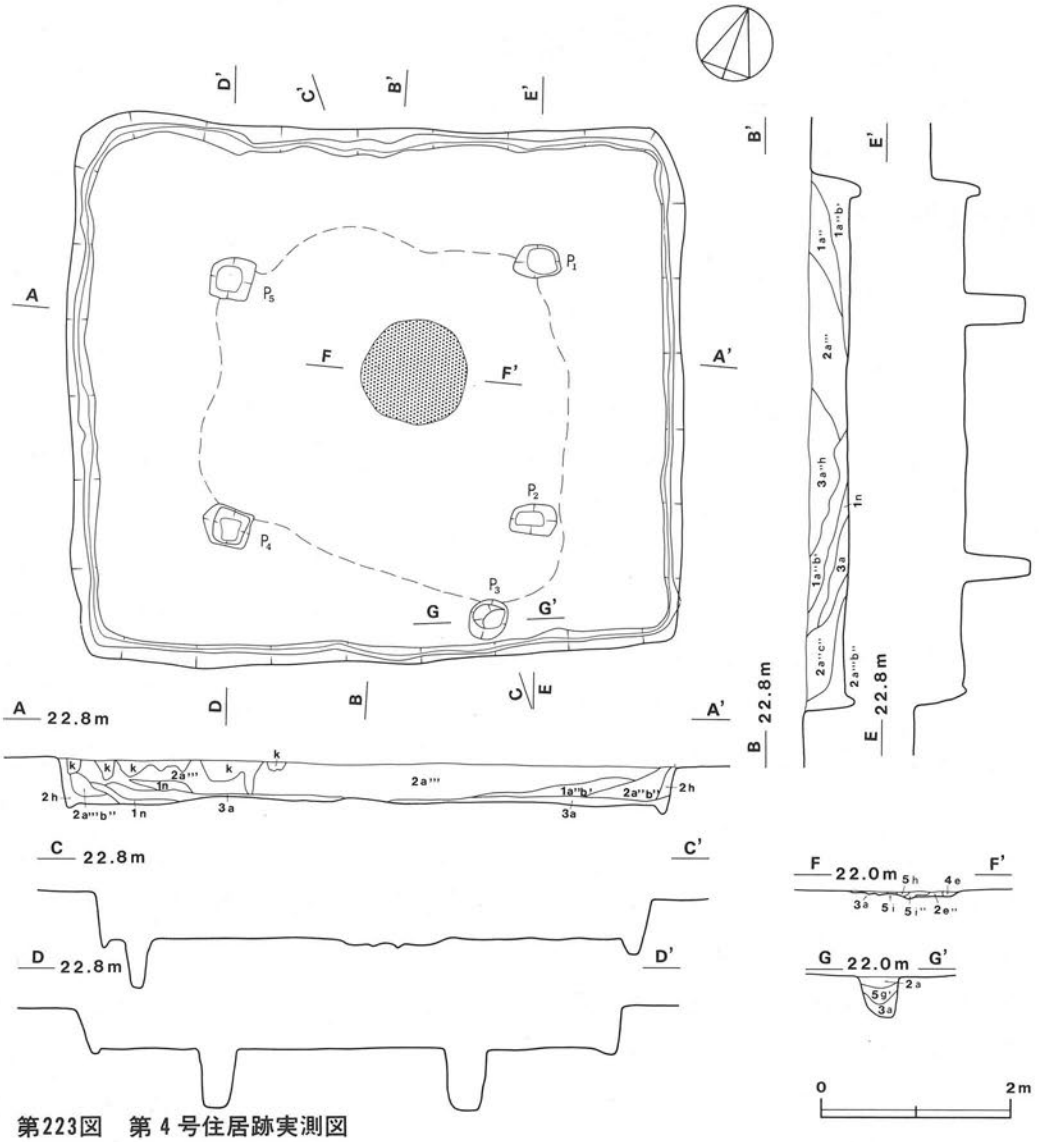
本跡は，当遺跡のほぼ中央部B4f$_4$区を中心に確認され，第5号住居跡の4ｍ南側に存在している。近辺には，古墳時代前期の住居跡が8軒存在している。

平面形は隅丸長方形を呈し，長軸方向はN－68°－Eを指し，規模は長軸6.5ｍ・短軸5.7ｍである。壁はロームで硬く締まり，各壁とも垂直に立ち上がっている。壁下には，壁溝が上幅20cm・下幅5cm・深さ10～20cmの規模で周回している。壁高は40～45cmである。床面は平坦で，壁周辺は軟らかいロームであるが，図中の各主柱穴を結ぶ破線内は踏み固められて非常に硬く締まっている。

炉跡はごくわずかに北側に位置し，直径110cmの円形を呈し，床面を皿状に10cmほど掘り込んでいる地床炉である。炉内には焼土粒子や焼土小ブロック・炭化粒子等を中量含む極暗褐色土が堆積し，炉床はレンガ状に硬く焼け，ゴツゴツしている。ピットは5か所検出され，位置や規模からP$_1$・P$_2$・P$_4$・P$_5$が主柱穴と考えられる。主柱穴は各コーナーの内側に位置し，規模は長軸50cm・短軸30～50cm・深さ60～70cmである。主柱穴の平面形は隅丸長方形を呈し，底面も隅丸方形や隅丸長方形を呈している。南壁ぎわのやや東側に位置するP$_3$は貯蔵穴と考えられ，直径40cmの円形を呈し，深さ40cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり，底面は東側に傾斜している。

覆土は一部攪乱を受けているが，B－B′のセクション図を見ると9層に細分され，ローム粒子中量・焼土粒子を微量含む黒褐色土，下層はローム粒子中量・ローム小ブロックを少量含む褐色土やローム粒子を微量含む黒褐色土がおおむね自然堆積の様相を呈している。

遺物は，南東壁下や南東コーナー部の床面から，土師器の半完形の甕（第224図1）とほぼ完形の小形台付甕（第224図2）が横位の状態で出土している。また，甕，器台の底部，脚部の小片も床面から出土している。更に，土師器片が覆土中層・下層から271片と土製円板1点，覆土中層から石鏃が1点出土している。

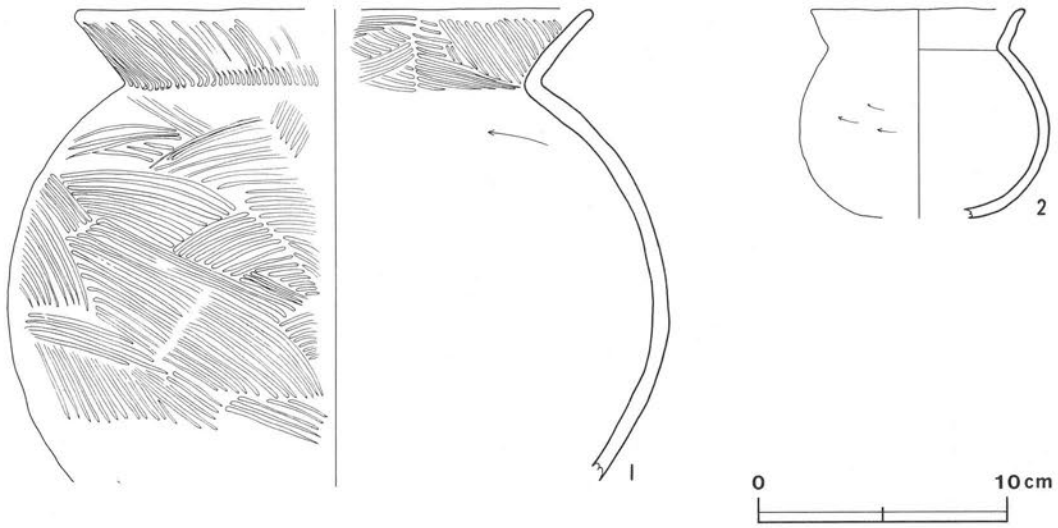


第223図　第４号住居跡実測図

出土土器

第４号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第224図 1	甕 五　領	A(20.5) B(19.2)	胴部はほぼ球形を呈し，中位に最大径を有する。頸部は「く」の字状を呈し，口縁部は強く外傾している。胴部下位と底部は欠損している。	口縁部外面は斜位のハケ目，内面は横位や斜位のハケ目が施され，胴部外面は斜位のハケ目，内面は横位のナデを施している。	砂粒・スコリア 橙色 普通	50%　7片 P301
2	小形台付甕 五　領	A　8.6 B　(8.5)	胴部はほぼ球形を呈し，中位に最大径を有する。頸部は「く」の字状を呈し，口縁部は外傾している。台部は欠損している。	口縁部内・外面は横位のナデ，胴部外面は斜位のナデを施している。	砂粒・雲母にぶい橙色 良好	90%　1個体 P300



第224図　第４号住居跡出土土器実測図

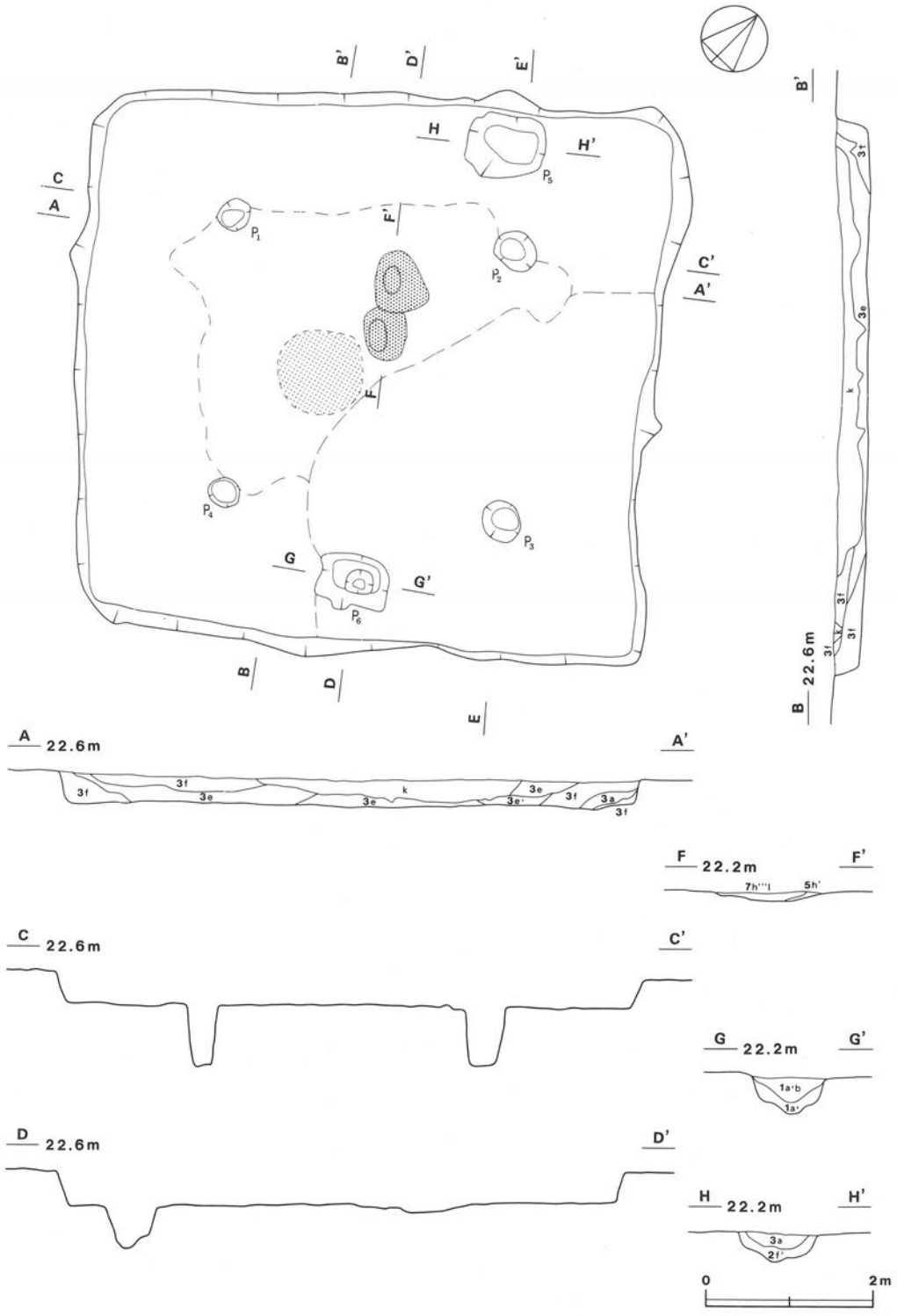
第５号住居跡（第225・226図）

本跡は，当遺跡の中央部B4d₃区を中心に確認され，第４号住居跡の４ｍ北側に存在している。当初から東側半分位の表土が，重機等の掘削により攪乱を受けていた。

平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。長軸方向はＮ－47°－Ｅを指し，長軸6.9ｍ・短軸6.7ｍと推定される。壁はロームで硬く，ほぼ垂直に立ち上がり，壁高は40～50cmである。床面は東コーナー部付近が約３分の１ほど削平を受けているが，ほぼ平坦で全体的に硬いロームであり，図中の３本の柱穴を結ぶ破線内は踏み固められて，特に硬く締まっている。

炉跡はやや北側に位置し，炉床が２か所検出され，床面を皿状に10cmほど掘り込んでいる地床炉である。北側の炉跡は，長径80cm・短径60cmの楕円形を，南側の炉跡は長径80cm・短径50cmの楕円形を呈するものと考えられる。炉内には，焼土粒子多量と炭化物を微量含む暗赤褐色土や焼土粒子を少量含む極暗褐色土が堆積し，炉床は，いずれもレンガ状に硬く焼けている。ピットは６か所検出され，配列や規模からP_1～P_4が主柱穴と考えられる。主柱穴は各コーナーの内側２ｍに位置し，規模は長径40～50cm・短径35～45cm・深さ70cm前後である。貯蔵穴は，南東壁ぎわ中央のP_5と北コーナー部付近のP_6の２か所に検出された。P_5は隅丸長方形を呈し，長軸85cm・短軸60cm・深さ30cmである。南壁はゆるやかに，北壁は急に立ち上がっている。底面はやや丸味を帯び，中央部に直径30cm・深さ10cmの円形のピットを有している。P_6も隅丸方形状を呈し，長軸100cm・短軸80cm・深さ35cmである。壁はややゆるやかに立ち上がり，底面はほぼ平坦である。

覆土の上層は攪乱を受けているが，下層はローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む暗褐色土等がおおむね自然堆積の様相を呈している。また，床面に焼土や細かい炭化物が多くあること



第225図　第５号住居跡実測図(1)

第226図　第５号住居跡実測図(2)

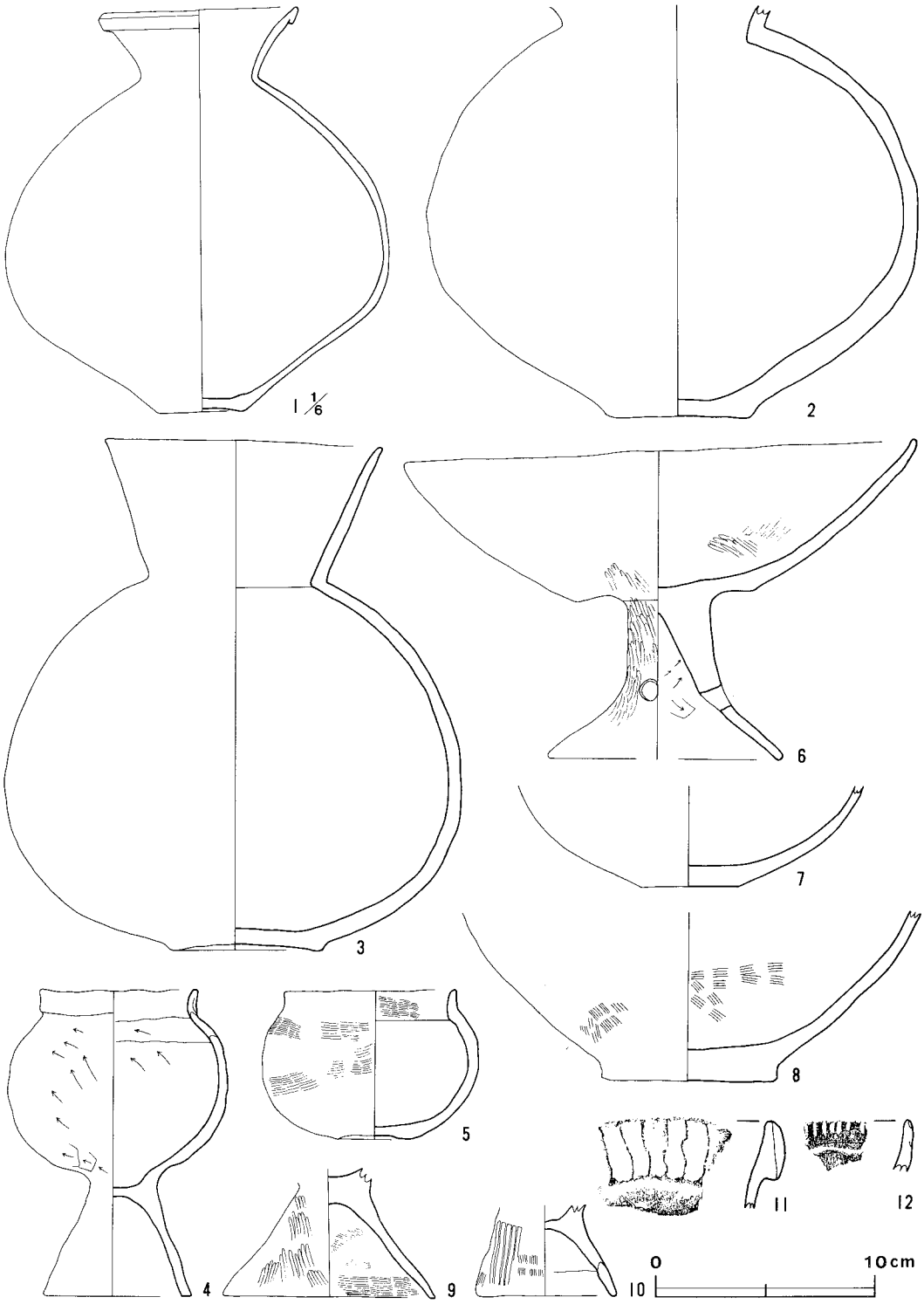
や覆土下層に焼土粒子・炭化粒子が含まれていることから，焼失家屋と考えられる。

遺物は，北コーナー部のほぼ床面から土師器の完形の大形壺（第227図１）が横位の状態で出土し，西コーナー部の覆土下層から復元できた長頸壺（第227図３）がつぶれた状態で，同所から完形の小形甕（第227図５）が逆位の状態で出土している。また，北コーナー部壁下からは完形の台付甕（第227図４）が横位の状態で，北西壁側の床面直上からはほぼ完形の高坏（第227図６）が出土している。更に，北西側と南コーナー部の覆土中・下層から台付甕の脚部（第227図９・10）２個が横位の状態で，北東壁下の床面から棒状浮文の口縁部片と赤彩された土器片８片が出土している。そのほか，覆土中から土師器片122片と縄文土器片少量，磨石１点が出土している。また，本跡から次のような弥生式土器片が出土している。第227図11・12は口縁部で，複合口縁を呈し，11は棒状浮文が６本認められ，浮文間に網目状撚糸文がわずかに窺える。12は口唇直下に棒状施文具による押圧が縦位に施されている。

出土土器

第５号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第227図 1	壺 五　領	A 18.2 B 37.1 C 8.0	底部はやや凹む。胴部は下ぶくれを呈し，胴部下位に最大径を有する。口縁部は複合口縁を呈し，外傾している。	口縁部内面は横位のナデ，外面は縦位のナデが施されている。胴部内外面は横位のナデが施されている。	砂粒・長石 橙色 良好	90%　22片 P44
2	壺 五　領	B(19.1) C 6.6	底部は平底で，胴部はややつぶれた球形を呈し，下位に最大径を有する。口縁部は頸部直上を除いて欠損している。	胴部外面は縦位のていねいなヘラ磨き，内面はナデが施されている。	砂粒 明赤褐色 良好	80%　1個体 P304
3	壺 五　領	A 12.7 B 23.7 C 7.0	底部は平底を呈し，中央がやや凹む。胴部は下位の張った下ぶくれを呈し，下位に最大径を有する。口縁部は頸部から直線的に外傾しながら７cm位立ち上がっている。	口縁部外面は上方⅔が横位のナデ，残り⅓は縦位のナデ，内面は横位のナデを施している。胴部内・外面は横位と斜位のナデが施されている。	砂粒 明赤褐色 良好	85%　22片 P306
4	小形台付甕 五　領	A 7.1 B 14.2 D 6.8	台部は「ハ」の字状を呈し，裾部に至る。胴部は球形を呈し，口縁部は垂直に立ち上がり，複合口縁である。	口縁内部内・外面は横位のナデが施され，外面に輪積痕が残っている。胴部外面は横位と斜位の雑なナデ，内面は横位のナデが施されている。台部外面は斜位の雑なナデ，内面は横位のナデが施されている。	砂粒・スコリア にぶい黄橙色 普通	100%1個体 P305



第227図　第5号住居跡出土土器実測図・拓影図

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第227図 5	小形甕 五　領	A　7.9 B　7.0 C　3.2	底部は平底であるが中央部はやや凹む。胴部はほぼ球形を呈し，中位に最大径を有する。口縁部は短く，垂直に立ち上がっている。内面にやや弱い稜をもっている。	口縁部内面は横位のハケ目，外面は横位のナデが施されている。胴部外面は横位のハケ目，内面は横位のナデが施されている。	砂粒 にぶい橙色 良好	100%1個体 P303
6	高　坏 五　領	A 23.5 B 14.4 E(10.7)	脚部は孔の所までほぼ円筒形状を呈しその後大きく「八」の字状に開く。脚部に3孔を有し，坏部は大きくゆるやかに内彎しながら口縁部に至る。器受部近くに外稜を有する。	坏部内・外面はヘラ磨キが施されている。脚部外面は縦位のハケ目が加えられ，内面は斜位のナデが施されている。	砂粒・石英 にぶい橙色 普通	60%　14片 P302
7	甕 五　領	B (4.7) C　4.4	胴部下位から底部にかけての破片で平底を呈し，小さい。胴部は内彎気味に立ち上がっている。	胴部内・外面は横位のていねいなナデが施されている。	砂粒 赤褐色 良好	10%　2片 P310
8	壺 五　領	B (8.0) C　8.0	胴部下位から底部にかけての破片で，底部は厚い平底である。胴部は底部からゆるやかに開きながら立ち上がっている。	胴部内・外面の一部にハケ目が施されている。	砂粒 明赤褐色 普通	10%　9片 P308
9	台付甕 五　領	B (6.0) D　9.7	台付甕の台部で，接合部からほぼ直線的にロート状に開く。	台部外面は縦位の磨き，内面は横位のナデが施されている。	砂粒 にぶい橙色 良好	20%　1片 P309
10	台付甕 五　領	B (4.2) D　6.7	台付甕の台部で，接合部からほぼ直線的に「ハ」の字状に開いている。	台部内・外面ともナデが施されている。輪積痕が観える。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	10%　1片 二次焼成 P307

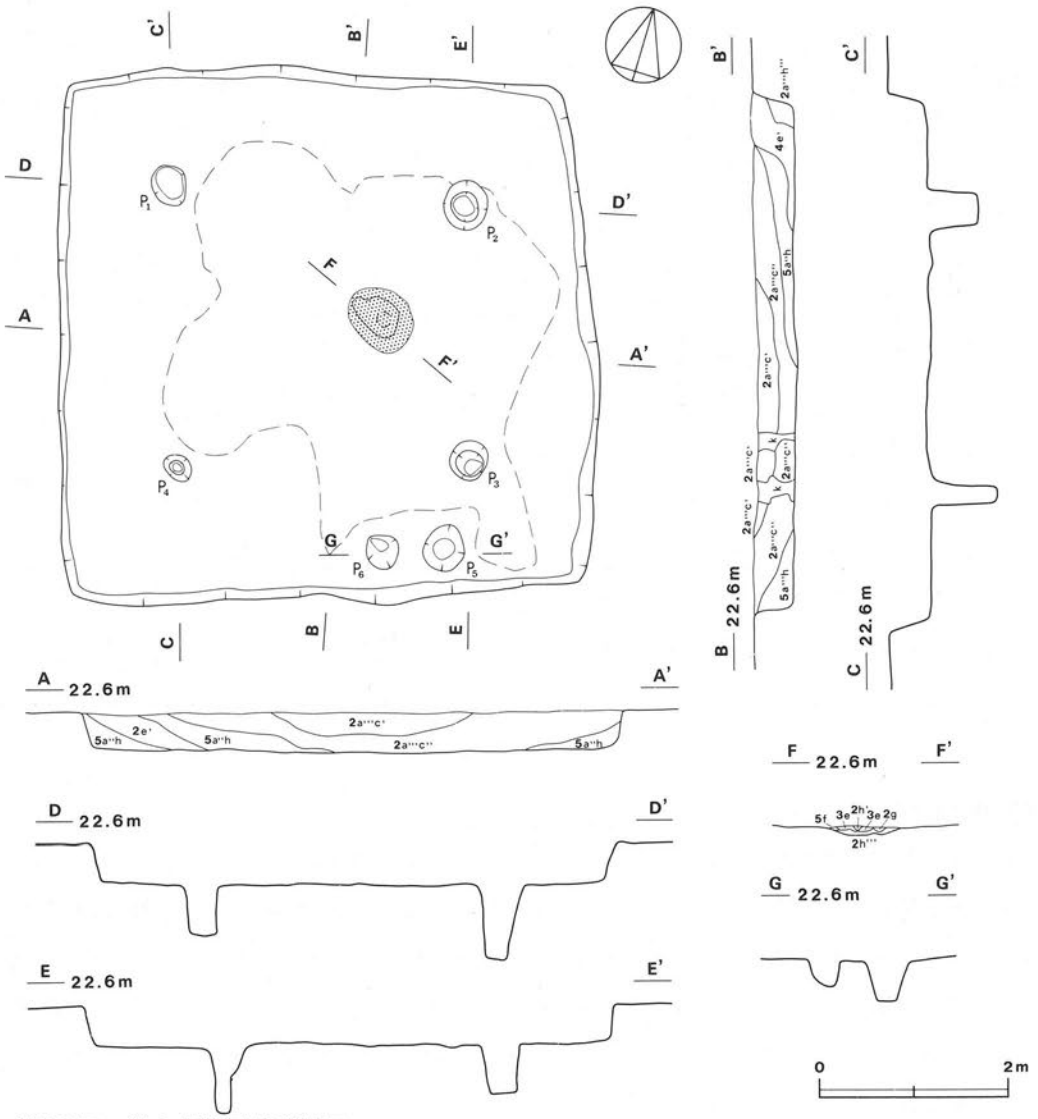
第6号住居跡（第228図）

本跡は，当遺跡のほぼ中央部B4i_4区を中心に確認され，第4号住居跡の5m南側に存在している。

平面形は隅丸方形を呈し，長軸方向はN－71°－Eを指し，規模は長軸5.7m・短軸5.5mである。壁はロームで硬く垂直に立ち上がり，壁高は40～45cmである。床面はほぼ平坦で，全体的に硬いロームで，図中の破線で結んだ内側は踏み固められて硬く締まり，P_1の東側とP_5・P_3の中間の一部分の床面は，特に硬く踏み固められている。また，南壁ぎわのP_5周辺はごくわずかに高く盛り上がり硬く踏み固められている。

炉跡はわずかに北東側に位置し，長径75cm・短径60cmの楕円形を呈し，床面を皿状に10cmほど掘り込んでいる地床炉である。炉内には焼土粒子を少量から多量含む暗褐色土等が堆積し，炉床は硬く焼けている。ピットは6か所検出され，位置や規模からP_1～P_4が主柱穴と考えられる。主柱穴は各コーナー部の内側に位置し，規模は長径30～55cm・短径25～50cm・深さ50～80cmである。主柱穴の中でP_2は，長径55cm・短径50cmのほぼ円形を呈し，深さ80cmとしっかりしている。P_3は北側が途中まで広く掘られている。また，貯蔵穴と考えられるP_5は，長径50cm・短径40cmの卵形を呈し，深さ45cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり，底面は平坦である。第4号住居跡の柱穴状の貯蔵穴と同形態である。

覆土はA－A′のセクション図のように6層から成り，上層はローム粒子多量・ローム中ブロック少量を含む暗褐色土，中層はローム粒子多量・ローム中ブロック中量を含む暗褐色土と，ロー



第228図　第６号住居跡実測図

ム粒子中量・焼土粒子微量を含む極暗褐色土，下層はローム粒子中量・焼土粒子を微量含む極暗褐色土がほぼレンズ状に堆積している。なお，南北セクションのB－B'には一部攪乱が認められる。

遺物は，貯蔵穴付近と北西壁ぎわから，土師器片が覆土中層・下層から147片出土したが接合できたのは２片である。床面出土の土器片は数点である。また球状土錘（第264図５）が貯蔵穴の覆土中層の北壁から１点出土している。

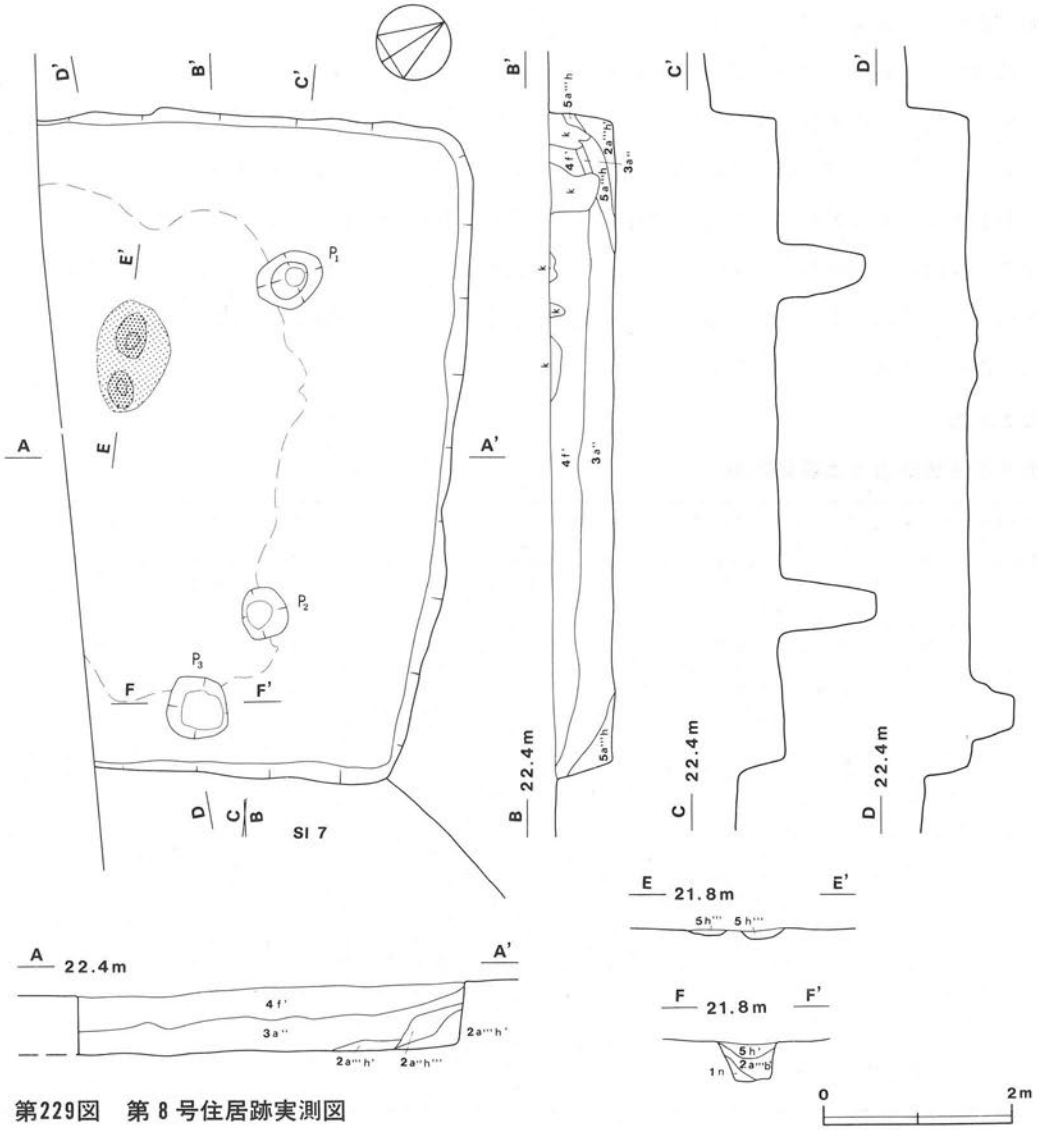
第８号住居跡（第229図）

本跡は，当遺跡の中央部B3j$_0$区を中心に確認され，当遺跡のほぼ中央を横切る町道下に遺構が

存在するため南西側の約半分は調査ができなかった。また，東側に位置する縄文時代の第７号住居跡の西側を掘り込んでいる。

平面形は隅丸長方形か方形を呈するものと考えられ，北東壁の長さは７ｍである。長軸方向は不明である。壁はロームで硬く締まり，垂直に立ち上がっている。壁高は50～70cmで，当遺跡における一番深く掘り込んでいる住居跡である。床面はほぼ平坦で，全体的に硬いロームで，図中の各柱穴や貯蔵穴を結ぶ破線の内側は踏み固められて特に硬く締まっている。

当初，P_1の南側に長径120cm・短径80cmの楕円形を呈する焼土が確認された。調査を進めると，炉跡が２か所検出され，北西側の炉跡は長径50cm・短径30cmの楕円形，南東側の炉跡は長径35cm・短径25cmの楕円形を呈し，床面を皿状にそれぞれ10cm，７cmほど掘り込んでいる地床炉である。



第229図　第８号住居跡実測図

炉内には焼土粒子を多量含む極暗褐色土が堆積し，炉床は赤く硬く焼けている。炉跡は，２か所とも使用されている。ピットは３か所検出され，位置や規模からP_1・P_2が主柱穴と考えられる。いずれもコーナー部から約２ｍ内側に位置し，規模は長径55～75cm・短径50～55cm・深さ90～100cmで，太くしっかりした柱穴である。P_3は東コーナー部付近の南東壁ぎわに位置している貯蔵穴で，直径65cmのほぼ円形を呈し，深さ40cmである。東コーナー部はほぼ垂直に，西コーナー部はややゆるやかに立ち上がっている。底部は平坦である。

覆土は，上面や北西壁近くに一部攪乱があるもののおおむね２層から成り，上層はローム粒子少量・焼土粒子微量を含む黒色土，下層はローム粒子中量を含む黒褐色土がほぼ自然堆積の様相を呈している。また，壁ぎわには，ローム粒子を多量・焼土粒子を微量から多量含む暗褐色土と極暗褐色土が堆積している。

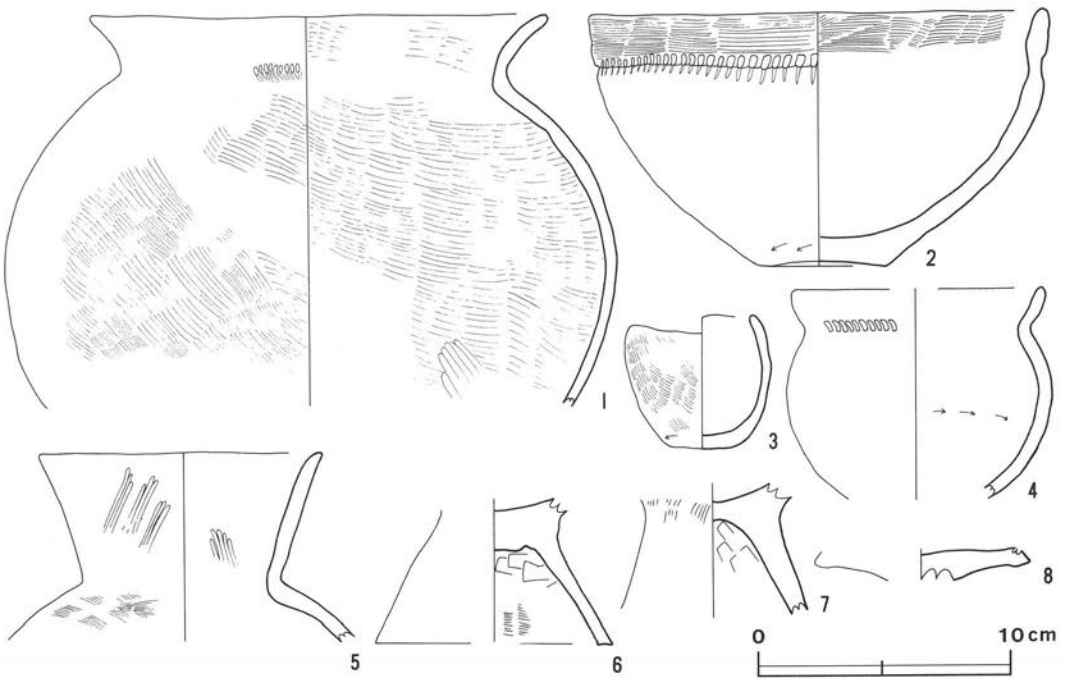
遺物は，貯蔵穴の30cm北側の床面や床面直上から，半完形の大型甕（第230図１）が横位につぶれた状態で，小形甕（第230図４）がP_1（主柱穴）と北西壁の間の床面直上からつぶれた状態で出土している。埦（第230図２）が主柱穴のP_2ぎわの床面から正位の状態で，完形のぐい呑状の小形土器（第230図３）が主柱穴のP_1の西ぎわから横位の状態で出土している。そのほか長頸壺の口縁部が北西壁ぎわの覆土下層から破片の状態で出土し，台付甕の脚部がP_2付近の覆土下層から正位の状態で出土している。なお，覆土中・下層から土師器片が363片，覆土上層から縄文式土器片が少量出土している。

出土土器

第８号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第230図 1	甕 五領	A 18.3 B(15.0)	胴部はほぼ球形を呈し，口縁部は大きく外反している。底部は欠損している。	器面内・外面は雑なハケ目が施されている。	砂粒・雲母 にぶい橙色	30% 4片 P315
2	埦 五領	A 18.4 B 10.2 C 5.5	底部は平底であるが，中央はやや凹む。体部は内彎気味を呈しながら大きく開いている。口縁部はごくわずかに外傾している。	口縁部内・外面はハケ目が施され，胴部内・外面はヘラナデが加えられている。口縁直下にキザミ目を有している。	砂粒 にぶい橙色 良好	100%1個体 P311
3	手捏ね 五領	A 5.2 B 5.4 C 2.6	底部は平底を呈し，胴部は内彎気味に立ち上がっている。	外面にはハケ目を，内面には横位のナデが施されている。	砂粒 にぶい橙色 良好	100%1個体 P312
4	小形甕 五領	A (9.8) B (8.6)	胴部は球形を呈し，口縁部はやや内彎気味に外に開いている。口縁部内面に稜を有する。	口縁部下位の外面は斜位のナデ，内面はナデ，胴部内・外面は横ナデとナデが施されている。	砂粒・長石 橙色 良好	60% 5片 P313
5	壺 五領	A 11.4 B (7.6)	口縁部は外傾し，頸部から胴部にかけては内彎気味に大きく開いている。	口縁部外面は斜位のヘラ磨キ，内面は横位のヘラ磨キが施されている。頸部外面は横位や斜位のヘラ磨キが加えられている。	砂粒 橙色 普通	20% 7片 P316
6	台付甕 五領	B (5.9) D 9.5	台部で「ハ」の字状に開いている。	外面はナデを，内面はハケ目とナデが施されている。	砂粒 にぶい橙色 良好	10% 1片 P314

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第230図 7	台付甕 五　領	B（5.4）	台部である。やや開きが狭い。	外面はヘラ磨き，内面はヘラナデが施されている。	砂粒 にぶい橙色 普通	10% 1片 P319
8	装飾器台 五　領	B（1.3）	装飾器台の装飾部分の一部である。	外面の一部にハケ目が施されている。	砂粒 橙色 普通	5% 1片 P318



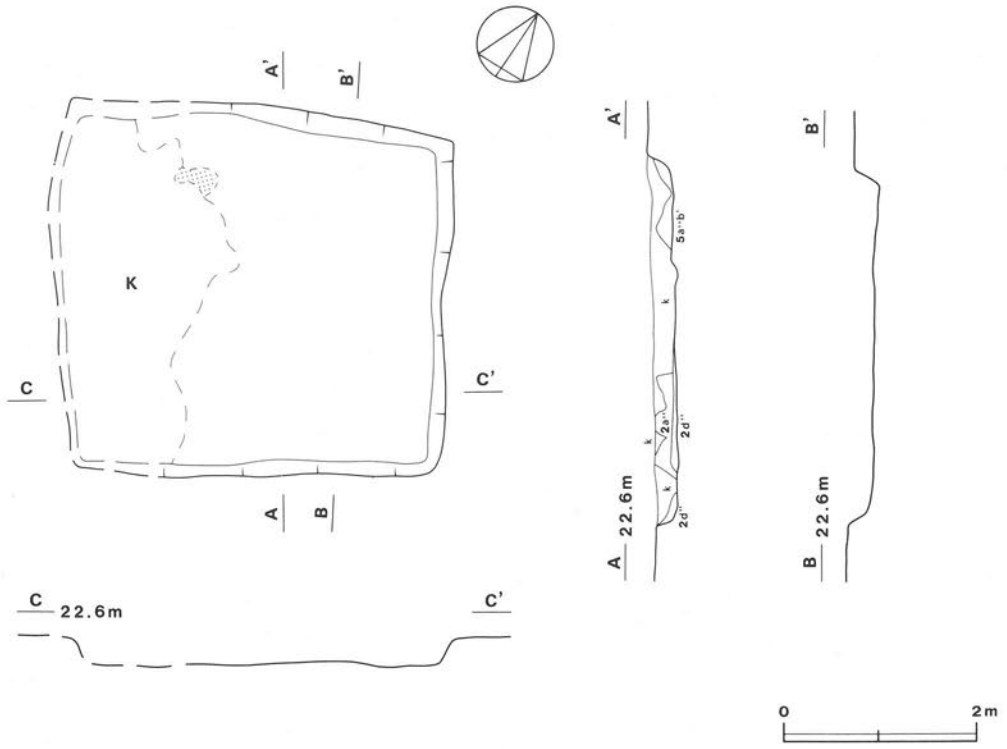
第230図　第８号住居跡出土土器実測図

第９号住居跡（第231図）

本跡は，当遺跡の中央B3g₀区を中心に確認され，第17号住居跡の２ｍ南西側に存在している。

平面形は南西側の約３分の１が重機等の掘削を受けて不明瞭であるが，残存部から判断して，方形ないし長方形を呈するものと考えられる。主軸方向は不明で，規模は北東壁が3.6ｍである。壁はローム で硬く，北西壁はややゆるやかに外傾し，南東壁と北東壁は外傾しながら立ち上がっている。壁高は25～30cmである。南西壁・西・南コーナー部付近の壁は，重機等の掘削のため存在しない。床面はほぼ平坦で，全体的に硬いロームである。南西側床面の３分の１は，攪乱を受けて存在しない。焼土が北西壁近くに認められるが，掘り込みや熱を受けた形跡が無い。結局本跡において，炉跡は掘削されて消滅したかあるいは元来ないものと考えられる。ピットは住居跡内・外いずれからも検出できなかった。

覆土は大部分攪乱を受けているが，ローム粒子を中量含む暗褐色土，ローム大ブロックを中量含む暗褐色土，ローム粒子中量・ローム小ブロックを少量含む極暗褐色土が堆積している。



第231図　第９号住居跡実測図

遺物は，覆土中から土師器片が35片出土したが，接合・復元できたものはなかった。

第10号住居跡（第232図）

本跡は，当遺跡の中央B3f$_8$区に確認され，北西側の調査エリヤ境界付近に存在している。また，第17号住居跡の６ｍ西側に近接している。

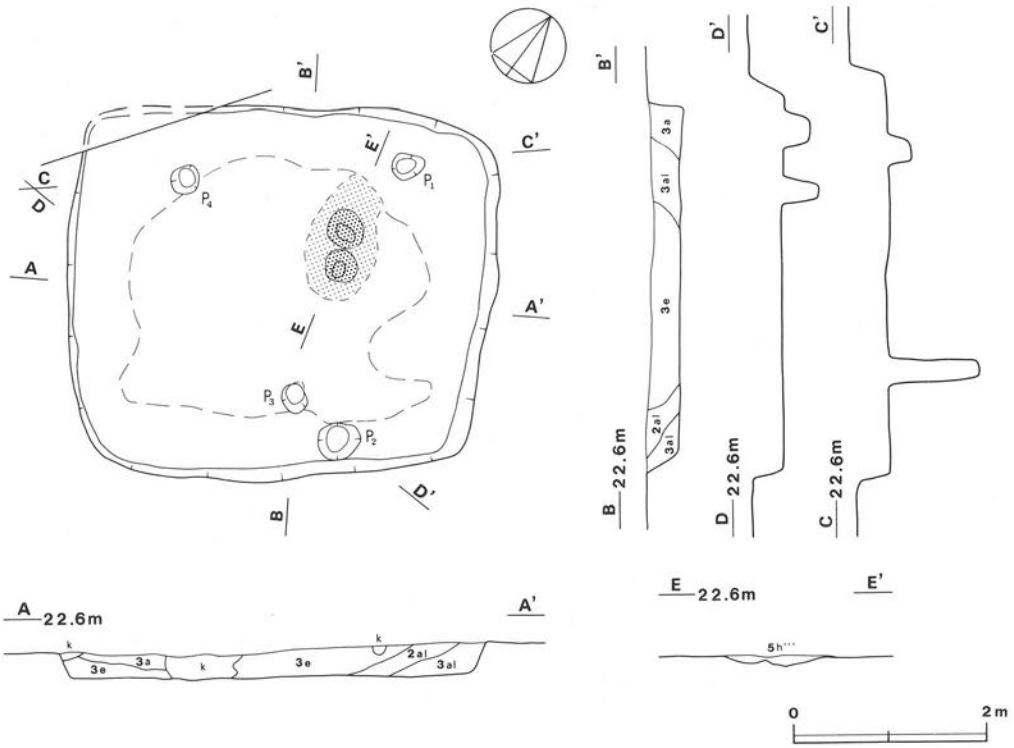
平面形は隅丸長方形を呈し，長軸方向はＮ－52°－Ｅを指し，規模は長軸4.4ｍ・短径４ｍである。壁はロームで硬く，北壁は垂直，その他の壁はほぼ垂直に立ち上がり，壁高は35～40cmである。床面はほぼ平坦で，全体的に硬く締まり，図中の主柱穴を結ぶ破線の内側は，踏み固められて特に硬く締まっている。

当初，中央からやや北側に長径120cm・短径80cmの楕円形を呈する焼土を確認した。調査を進めると，炉床を２か所有する炉跡になり，土師器片を炉の炉の間に斜めに立てて，しきりとしている。北側の炉跡は長径45cm・短径38cm，南側の炉跡は長径35cm・短径33cmで，いずれも円形を呈し，床面を12cmと16cm掘り込んでいる地床炉である。双方の炉内には，焼土粒子を多量に含む暗褐色土が堆積し，炉床はレンガ状に硬く焼け，ゴツゴツしている。ピットは４か所検出され，位置や規模からP_1・P_3・P_4が主柱穴と考えられる。P_1・P_4はそれぞれ北・西コーナーに，P_3は南

東壁のほぼ中間の壁近くに位置している。規模は長径32～35cm・短径22～28cm・深さ25～90cmである。P_3は掘り方がやや外側に傾いている。P_4は90cmと一番深く，しっかりしている。P_2はP_1の東側の南東壁下に位置し，貯蔵穴と考えられる。長径45cm・短径40cmの円形を呈し，深さ30cmである。北壁は垂直にその他の壁もほぼ垂直に立ち上がり，底面は平坦である。

覆土はB－B′のセクション図のように，中央部はローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む黒褐色土，壁ぎわはローム粒子・炭化物を微量含む黒褐色土とローム粒子を微量含む黒褐色土が堆積している。東西セクションA－A′の一部分に攪乱が認められる。

遺物は，北コーナー部の覆土下層からほぼ完形の甕（第233図１）が斜位の状態で，東コーナー部の床面から完形の高坏（第233図２）が逆位の状態で出土し，更に，P_4の東ぎわから脚部が欠損している装飾器台（第233図６）が正位の状態で出土している。また，P_4の南東ぎわと北コーナー部の床面から小形甕（第233図３・４）が，北コーナー部付近の覆土下層から完形と半分程欠損している球状土錘（第264図６・７）や壺（第233図５）の一部のほか，土師器片165片が出土している。更に，覆土上層から縄文土器片少量，石器３点が出土している。なお，本跡で注目されるのは，高坏の坏部の破片を立てて炉のしきりにしていることである。

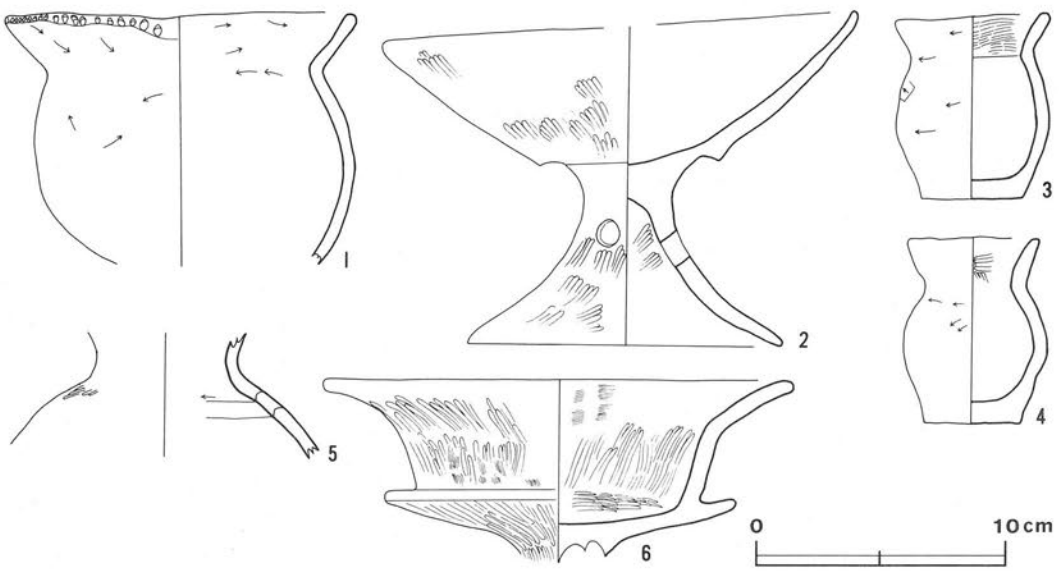


第232図　第10号住居跡実測図

出土土器

第10号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第233図 1	小形甕 五　領	A 14.1 B(10.1)	胴部は球形を呈し，中位に最大径を有する。頸部は「く」の字状を呈し，口縁部は外傾する。口唇部には刺突文が施され最大径を口縁部にもつ。底部は欠損している。	口縁部外面は斜位のナデ，内面は横位のナデが施されている。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	50%　9片 P325
2	高　坏 五　領	A 19.0 B 13.0 E 12.6	脚部は外反しながら裾部に至り，脚部上位に3孔を有する。坏部は大きく内彎しながら口縁部に至る。底部外面に明確な稜を有する。	坏部内・外面は縦位のヘラ磨キ 脚部内・外面はヘラ磨キが施されている。	砂粒 橙色 良好	100%　7片 P324
3	小形甕	A 6.1 B 7.3 C 3.9	底部は厚手の平底を呈し，胴部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は頸部から軽く外傾している。	口縁部内・外面は横位のヘラナデ，胴部外面は横位のナデが施されている。	砂粒 にぶい赤褐色 良好	100%1個体 P321
4	小形甕	A 5.1 B 7.4 C 3.8	器形は3と酷似している。	口縁部内面は横や斜位のナデが施され，胴部外面は横ナデが施されている。	砂粒 にぶい赤褐色 良好	100%1個体 P320
5	壺 五　領	B (4.6)	口縁部はゆるやかに外反し，胴部上半が内彎している。	口縁部から頸部にかけての外面はヘラ磨キ，内面は横位のナデが施されている。	砂粒 橙色 不良	20%　8片 輪積痕 P323
6	装飾器台 五　領	A 18.9 B (7.5)	器受部外面に装飾用の突帯を持ち，器受部底面から外傾気味に立ち上がり，中位から再び外反しながら大きく開いている。脚部は欠損している。	器面は全体にヘラ磨キが施されている。	砂粒・雲母 にぶい橙色 良好	60%　1個体 P322



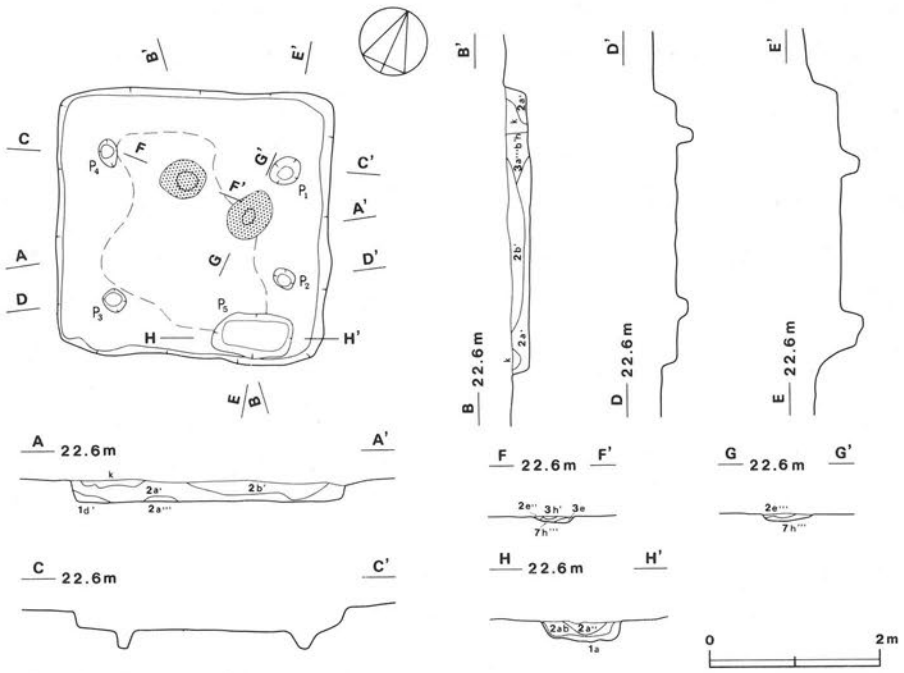
第233図　第10号住居跡出土土器実測図

第11号住居跡（第234図）

本跡は，当遺跡の中央部B4j₃区を中心に確認され，第６号住居跡の１ｍ南西側に存在する小形の住居跡である。

平面形は隅丸方形を呈し，長軸方向はＮ－65°－Ｅを指し，規模は長軸3.2ｍ・短軸3.15ｍである。壁はロームで硬く，全壁ともほぼ垂直に立ち上がり，壁高は20～40cmで東壁が高い。床面はロームを掘り込みほぼ中央部に厚さ10cm内外の暗褐色土の貼り床がなされ，全体的にほぼ平坦で硬い。図中の柱穴，炉跡と貯蔵穴を結ぶ破線内は踏み固められて特に硬く締まっている。

炉跡は中央から北側に２か所検出され，東側の炉跡は長径65cm・短径45cmの楕円形，西側の炉跡は長径55cm・短径45cmの楕円形を呈し，床面をそれぞれ10cm，８cm掘り込んでいる地床跡である。炉内には焼土粒子を多量に含む暗赤褐色土やローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を中量から多量含む暗褐色土が堆積し，炉床は双方ともレンガ状に硬く焼けている。東側の炉跡は，焼土の堆積状況から西側の炉跡より長期間使用されたものと考えられる。ピットは５か所検出され，配列や規模からP_1～P_4が主柱穴と考えられる。P_1・P_3・P_4はコーナー部に位置しているが，P_2は東コーナー部から若干北側に位置し，規模は長径25～40cm・短径20～30cm・深さ15～20cmである。貯蔵穴P_5は東コーナー部よりの南東壁下に位置し，長軸90cm・短軸50cmの隅丸長方形を呈し，深さ25cmである。北壁はほぼ垂直に，南壁は壁下からややゆるやかに掘られている。底面は南側にゆるく傾斜し，北側は平坦である。



第234図　第11号住居跡実測図

覆土は一部分攪乱を受けているが，ほぼ２層から成り，上層はローム小ブロック少量を含む暗褐色土，下層はローム粒子少量を含む暗褐色土等がおおむね自然堆積の様相を呈している。

遺物は，東側の炉の東端の床面や覆土下層を中心にして土師器片17片が出土している。

第18号住居跡（第235図）

本跡は，当遺跡のほぼ中央部B4h_2区を中心に確認され，第４号住居跡の４ｍ南西側に存在し，古墳時代前期の住居跡群に属している。

平面形は，隅丸方形を呈し，長軸方向はＮ－68°－Ｅを指し，規模は長軸４ｍ・短軸3.7ｍである。壁はロームで硬く締まり，各壁とも垂直に立ち上がり，壁高は20～30cmである。床面は平坦で，全体的に硬く締まっているロームで，図中で示した壁周辺を除いた破線内の部分は，踏み固められて非常に硬く締まっている。

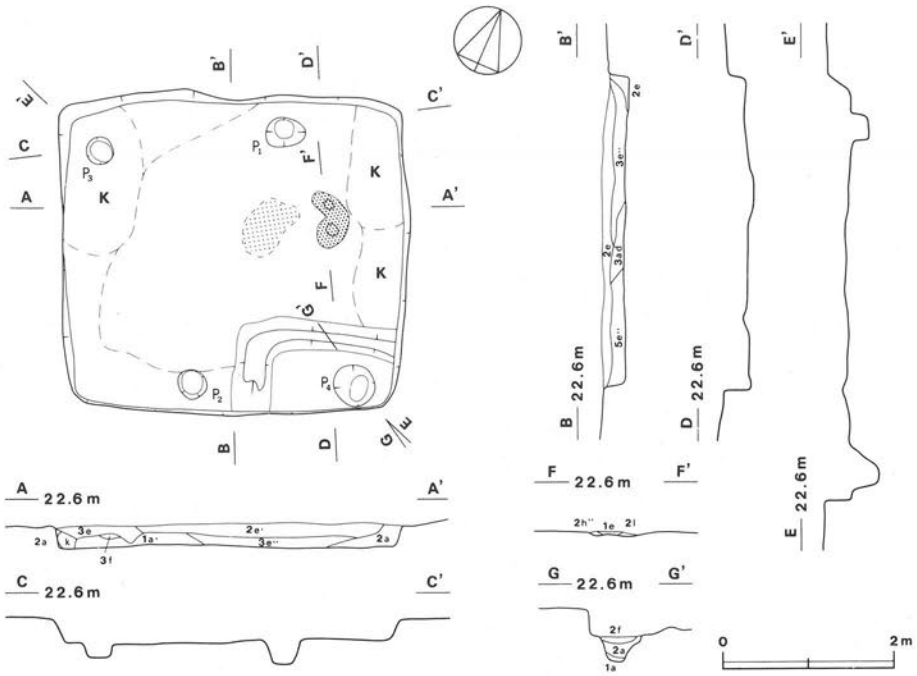
炉跡は北東側に位置し，ブーメランのような不定形を呈する炉床が２か所検出された。北側の炉跡は推定で長径50cm・短径25cmで，南側の炉跡も推定で長径50cm・短径30cmである。２か所とも楕円形を呈するものと思われ，床面を皿状に７cm～10cm掘り込んでいる地床炉である。北側の炉内には炭化物を含む暗褐色土，南側の炉内には焼土粒子を多量に含む暗褐色土等が堆積し，炉床は２か所ともレンガ状に硬く焼けている。ピットは４か所検出され，位置や規模からP_1～P_3が主柱穴と考えられる。P_3は，西コーナー部壁ぎわに，P_1は北コーナーから１ｍ離れた北西壁ぎわに，P_2は，南コーナーから1.2ｍ離れた南東壁ぎわにそれぞれ位置している。P_1は長径50cm・短径35cmの楕円形を呈し，P_2は深さ35cmである。P_3は直径30cmの円形で，深さ20cmと浅い。東コーナー部壁下にP_4が存在し，位置から考えると柱穴とも考えられるが，上幅10～33cm・下幅35～45cm・高さ約10cm・長さ2.5ｍのＬ字状の周堤がP_4を囲むように存在するので貯蔵穴とした。平面形は直径50cmの円形を呈し，深さは30cmである。床面から７cmの所から楕円形となり，壁はほぼ垂直に立ち上がり，底面はやや丸味を帯び狭い。

覆土は南西壁下に一部攪乱があるがおおむね２層から成り，上層はローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量を含む暗褐色土，下層はローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量を含む黒褐色土と極暗褐色土等がほぼ自然堆積の様相を呈している。南北セクションのＢ－Ｂ′の下層にローム粒子・ローム大ブロック微量を含む黒褐色土の堆積がみられる。

遺物は，覆土下層を中心にして土師器片が92片出土し，この中には赤彩された土器片６片が含まれている。なお縄文土器片も少量覆土上層に含まれており，混入したものと思われる。

第19号住居跡（第236図）

本跡は，当遺跡の中央部C3f_0区を中心に確認され，第36号住居跡の８ｍ北東側に存在している。



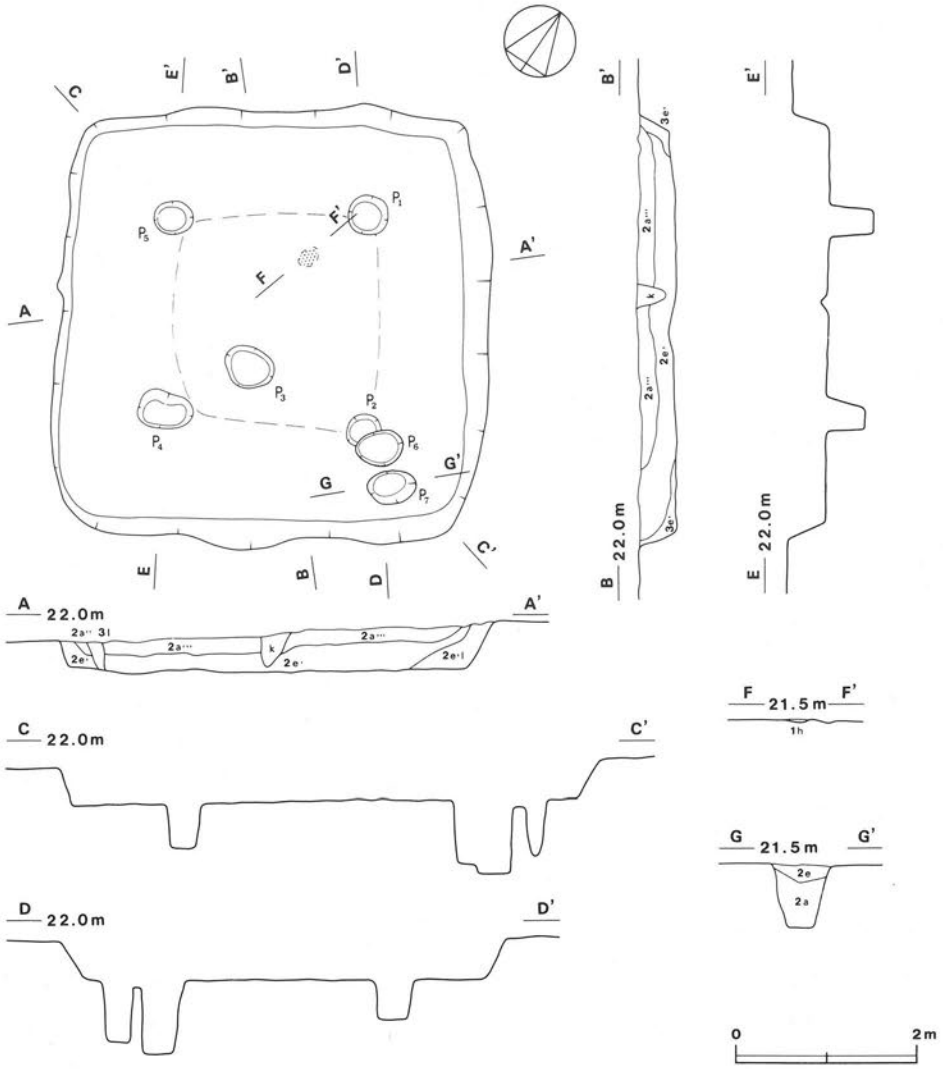
第235図　第18号住居跡実測図

平面形は隅丸方形を呈し，長軸方向はN－35°－Wを指し，規模は長軸4.8m・短軸4.7mである。壁はロームで硬く，南東壁と北東壁は外傾しながら，南西壁はほぼ垂直に立ち上がり，壁高は40cmである。床面はほぼ平坦で，全体的に硬いロームである。主柱穴に囲まれた内側は踏み固められて硬く，特に炉跡の東側は硬く締まっている。

炉跡はやや北側に位置し，長径25cm・短径18cmの楕円形を呈し，床面を皿状に５cmほど掘り込んでいる地床炉である。炉床は硬くレンガ状に焼けている。ピットは７か所検出され，位置や規模からP_1・P_2・P_4～P_6が主柱穴と考えられる。主柱穴は各コーナー部のやや内側に配列され，規模は，長径40～60cm・短径36～40cm・深さ45～80cmである。P_6は，P_2を掘り込んでいる主柱穴で建替え等が考えられる。P_3は本跡に伴わないピットと考えられ，不明である。P_7は貯蔵穴と考えられ，東コーナー部に位置し，長径60cm・短径40cmの楕円形を呈し，深さ70cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり，底面は平坦である。

覆土は一部攪乱を受けているがほぼ２層から成り，暗褐色土が主体で，上層はローム粒子を多量，下層はローム粒子少量・焼土粒子・炭化粒子を微量含む暗褐色土等が自然堆積の様相を呈している。また，炭化材が床面直上に検出されていることと炭化物・焼土粒子・炭化粒子が覆土下層に含まれていることから本跡は焼失家屋と考えられる。

遺物は，北コーナー部の覆土下層から甕の底部小片と，同じく東コーナー部の覆土下層から甕



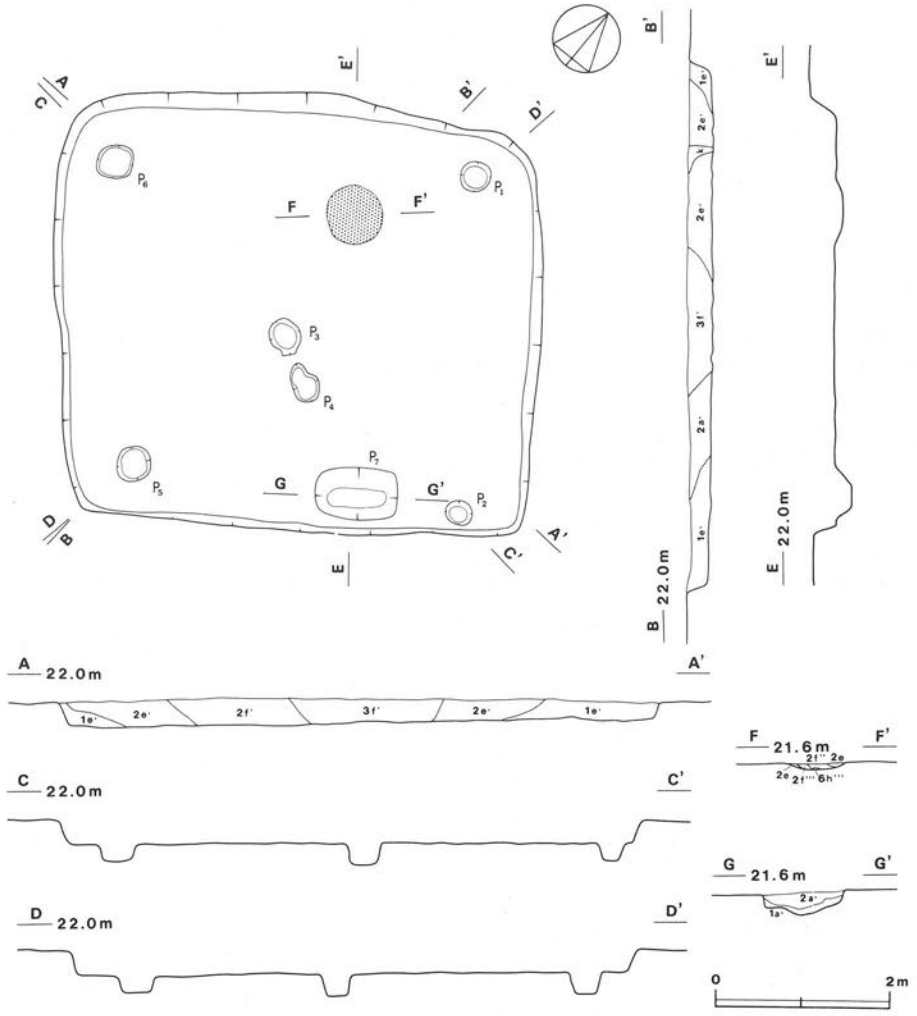
第236図　第19号住居跡実測図

の口縁部小片が出土し，また，中央部の覆土下層から台付甕の台部小片が，更に，貯蔵穴覆土上層から甕の胴部小片と自然石が出土している。覆土中・下層からは土師器片が171片と，土器片錘４点，縄文土器片，石製装飾品の一部（第188図61），磨石１点が出土している。

第20号住居跡（第237図）

本跡は，当遺跡の南西側D2i₁区を中心に確認され，第24号住居跡の６ｍ北側に存在している。

平面形は隅丸方形を呈し，主軸方向はN－51°－Eを指し，規模は長軸5.7m・短軸5.2mである。壁はロームで硬く，垂直に立ち上がり，壁高は20cmである。床面は西コーナーの一部を除いて，



第237図　第20号住居跡実測図

東側から西側にかけてごくゆるやかに傾斜し，硬く締まっているロームで，主柱穴に囲まれた内側はよく踏み固められている。

炉跡は北コーナー部寄りに位置し，長径70cm・短径65cmの円形で，床面を皿状に８cmほど掘り込んでいる地床炉である。炉内には，焼土粒子を多量含む赤褐色土やローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む暗褐色土が堆積し，炉床はレンガ状に硬く焼け，ゴツゴツしている。ピットは７か所検出され，位置や規模からP_1・P_2・P_5・P_6が主柱穴と考えられる。主柱穴は，各コーナーぎわに配列され，規模は長径30～40cm・短径28～38cm・深さ20～25cmで，比較的浅い柱穴である。P_3は支柱穴と考えられる。P_4は形状から性格不明のピットと判断した。P_7は南東壁ぎわの東コーナー部近くに位置する貯蔵穴で，隅丸長方形を呈し，長軸95cm・短軸60cm・深さ30cmである。

壁は外側に開きながら立ち上がり，底面はやや丸味を帯びている。

覆土は黒褐色土・暗褐色土・褐色土が主で，中央はローム粒子少量，焼土粒子を微量含む黒褐色土，壁ぎわはローム粒子少量・焼土粒子・炭化粒子を微量含む褐色土が20～30cm堆積している。

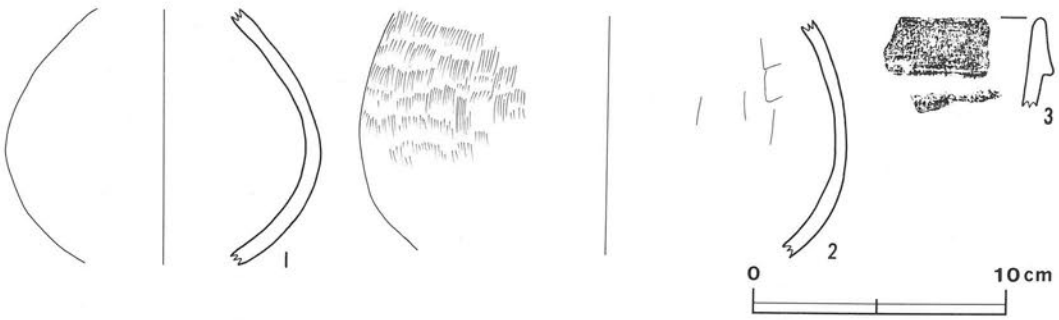
遺物は，北西壁付近の床面から甕の胴部片（第238図２）が出土し，壺の胴部小片が北壁付近の覆土下層から出土している。そのほか覆土中から土師器片110片が出土しており，この中には赤彩された弥生式土器の口縁部や胴部片２片が含まれている。

出土土器

第20号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第238図 1	壺 五　領	B(10.3)	ほぼ球形を呈する胴部片で，最大径は中位よりやや下方に有する。口縁部と底部は欠損している。	胴部外面は縦位のハケ目，内面は横位のナデが施されている。	砂粒 にぶい橙色 普通	25% 5片 P326
2	甕 五　領	B (9.5)	球形を呈する胴部片で，口縁部と底部は欠損している。	胴部外面はハケ目，内面はナデが施されている。	砂粒 にぶい橙色 普通	10% 5片 P327

第238図３は口縁部片で，複合口縁を呈し，無文である。内・外面に赤彩が施されている。



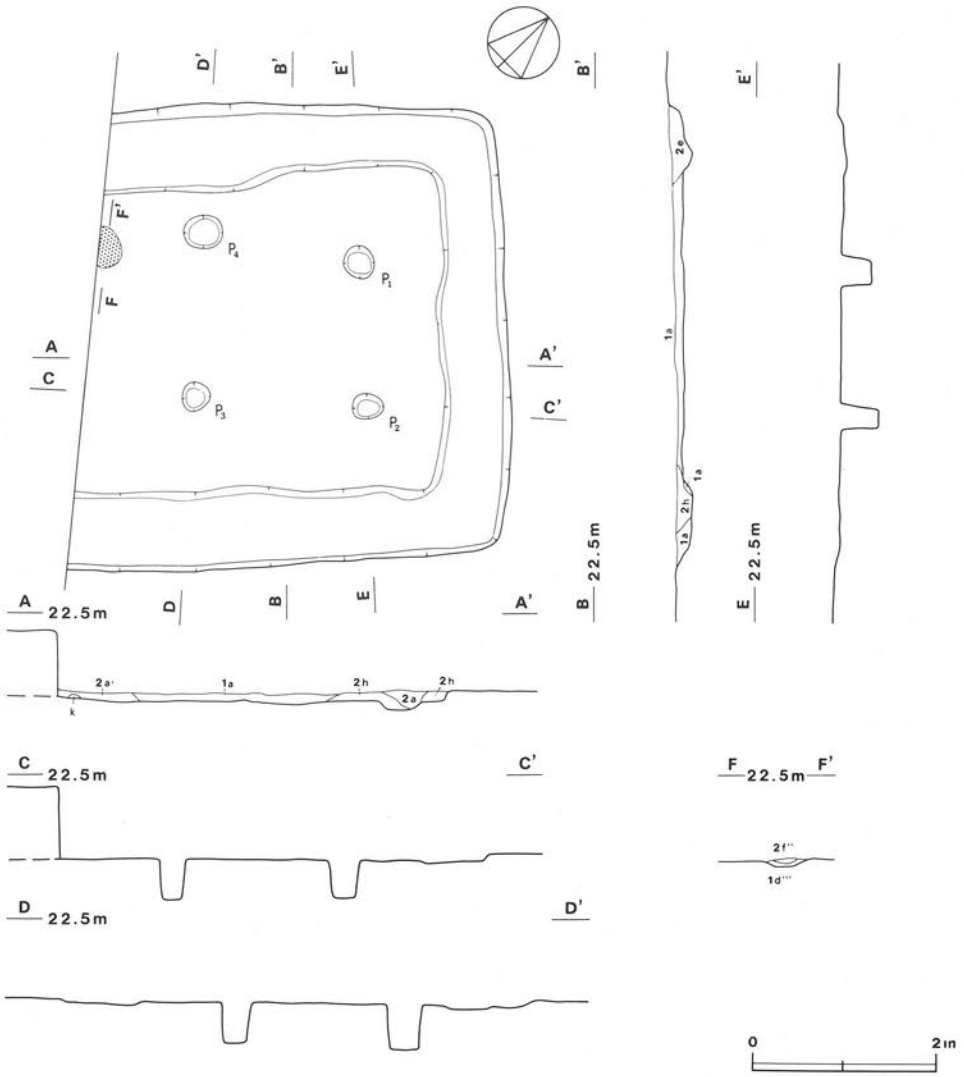
第238図　第20号住居跡出土土器実測図・拓影図

第21号住居跡（第239図）

本跡は，当遺跡のほぼ中央C3e$_8$区を中心に確認され，第23号住居跡の２ｍ南西側に存在している。農道が当遺跡を横切るように存在し，本跡の南西側はその農道下のため調査ができなかった。

平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられ，北東壁はN－47°－Wを指し，北東壁の長さは５ｍである。壁はロームで硬く，ややゆるやかに立ち上がり，壁高は10cm内外である。床面はほぼ平坦で，全体的に硬いロームである。壁の内側に溝が掘られ，規模は上幅65～90cm・下幅50～75cm・深さ10cm内外である。南西側は農道下のため，溝が全周しているかどうか不明である。この溝は幅が広く，覆土の色調にも相違があり，壁溝とは判断できなかった。

炉跡は西側に位置し，長径45cm・短径は推定で40cmのややいびつな円形を呈するものと考えら



第239図　第21号住居跡実測図

れ，床面を10cmほど皿状に掘り込んでいる地床炉である。炉内はローム粒子・焼土粒子を少量含む暗褐色土等が堆積し，炉床は硬く焼けている。ピットは４か所検出され，配列や規模からP_1～P_4が主柱穴と考えられる。主柱穴は壁から内側に位置し，規模は長径35～45cm・短径28～40cm・深さ30～45cmである。貯蔵穴は検出されなかった。

覆土は２層から成り，褐色土・暗褐色土が主体で，ローム粒子微量を含む褐色土やローム粒子少量と焼土粒子を微量含む暗褐色土等が10cmほど堆積している。

遺物は，北西壁ぎわのほぼ床面から半完形の埦（第240図１）が破片の状態で出土し，覆土中からは土師器片５片が出土している。

出土土器

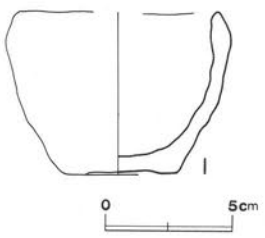
第21号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器種の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第240図 1	埦 五　領	A　8.0 B　6.6 C　4.5	底部はほぼ平底を呈し，体部は底部から内彎気味に外側に開き，口縁部は軽く内彎している。	口縁部内・外面は横位のナデ体部外面は斜位のナデが施されている。内面は摩滅している	砂粒 褐灰色 不良	40%　19片 P328

第24号住居跡（第241図）

本跡は，当遺跡南西端の台地縁辺部E1b$_0$区を中心に確認され，第２号住居跡の６ｍ南側に存在する。

平面形は方形を呈し，長軸方向はＮ－38°－Ｗを指し，規模は長軸4.2ｍ・短軸3.8ｍである。壁は重機によって削平を受けて浅く，南西壁は残存しない。南東壁はロームで硬く，外傾しながら立ち上がり，壁高は20cmである。床面はほぼ平坦で硬いロームであり，柱穴の内側の破線で示された範囲は跡み固められて特に硬く締まっている。



第240図 第21号住居跡出土土器実測図

炉跡はやや北西側に位置し，長径60cm・短径40cmの楕円形を呈し，床面を皿状に15cmほど掘り込んでいる地床炉である。炉内には焼土粒子・ローム粒子を微量と焼土粒子・焼土小ブロック・ローム粒子を微量含む暗褐色土が充満し，炉床はレンガ状に硬く焼けている。ピットは５か所検出され，位置や規模からP$_1$～P$_4$が主柱穴と考えられる。主柱穴はいずれも壁ぎわに位置し，規模は直径40～50cm，深さ40～80cmである。P$_5$は貯蔵穴と考えられ，長径45cm・短径43cmの円形を呈し，深さ30cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり，底面はほぼ平坦である。

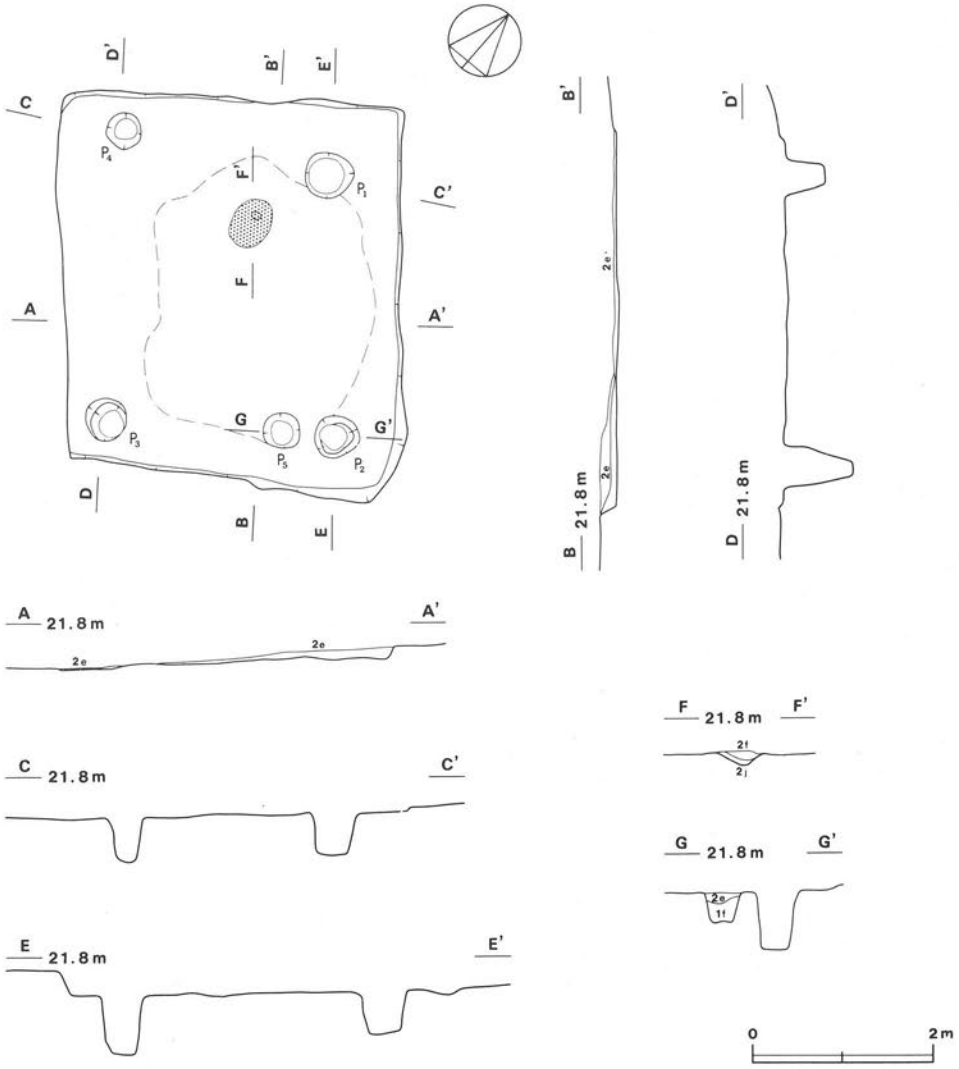
覆土も，重機により大部分削平されてしまったが，北東側と南東側の覆土が少し残る。覆土はローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む暗褐色土が堆積している。

遺物は，覆土を削平されたため少量の出土量で，南コーナー部付近の床面直上から，台付甕の脚部１片と土師器片８片が出土している。

第27号住居跡（第242図）

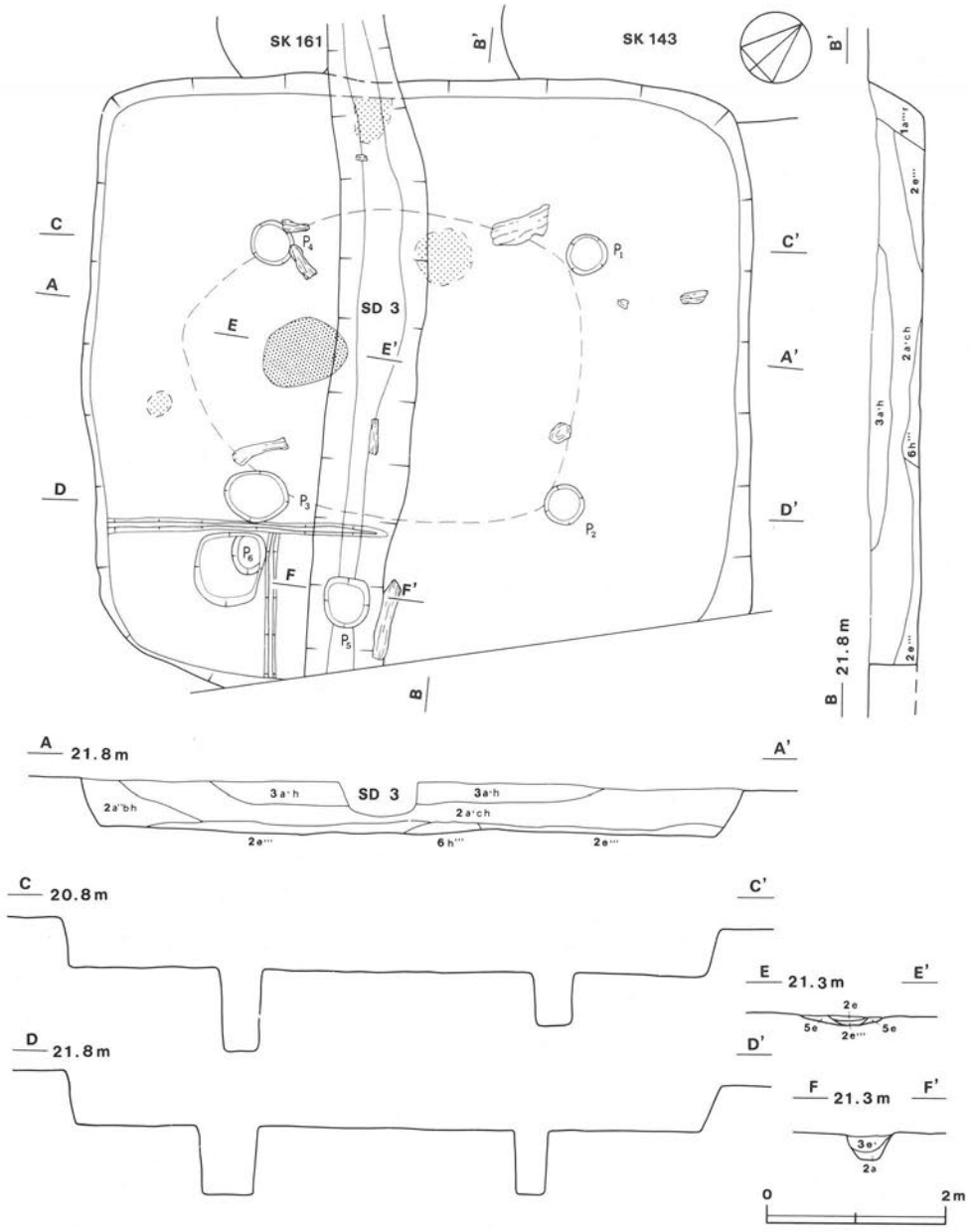
本跡は，当遺跡の南西側D3f$_1$区を中心に確認され，南東側の調査エリヤ境界に位置し，第29号住居跡の29ｍ南側に存在している。本跡は北コーナー部や北西壁の第143・161号土坑を掘り込み，中央部を第３号溝に掘られている。

平面形は隅丸方形を呈し，長軸方向はＮ－42°－Ｅを指し，規模は長軸7.5ｍ・短軸7.2ｍである。壁は北コーナー部や北西壁を除いて，硬く締まっているロームで，ほぼ垂直に立ち上がり，壁高は55～60cmである。南東壁の一部は，エリヤ外のため調査できなかった。床面はほぼ平坦で，全体的に硬いが，ピットの内側は硬く締まり，炉跡の周囲は特に硬く踏み固められて締まっている。



第241図　第24号住居跡実測図

炉床はやや南西側に位置し，長径95cm・短径70cmの楕円形を呈し，床面を10cmほど皿状に掘り込んだ地床炉である。炉内はローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む暗褐色土と極暗褐色土等が堆積し，炉床は硬く焼けている。ピットは６か所検出され，位置や規模からP_1～P_4が主柱穴と考えられる。主柱穴は各コーナーからそれぞれ２ｍ内側に位置し，規模は長径45～75cm・短径40～60cm・深さ70～80cmである。P_3は長径75cm・短径60cmの楕円形を呈し，深さ80cmで，本跡の柱穴では一番太く，しっかりしている。P_5は貯蔵穴と考えられ，南コーナー近くに位置し，長径55cm・短径50cmの不整円形を呈し，深さ30cmである。壁はゆるやかに立ち上がり，底面は平坦である。南コーナー付近のP_3・P_6の間と，P_5・P_6の間のP_6寄りに上幅８cm・下幅15cm・高さ約５cm・



第242図　第27号住居跡実測図

長さ３ｍの周堤と，上幅８cm・下幅16cm・高さ約５cm・長さ1.5ｍの周堤が，「T」字状に設けられている。P_6は性格不明のピットである。

覆土はおおむね３層から成り，上層はローム粒子少量・焼土粒子を微量含む黒褐色土，中層はローム粒子少量・ローム中ブロック・焼土粒子を微量含む暗褐色土，下層はローム粒子・炭化粒子微量・焼土粒子を少量含む暗褐色土がほぼレンズ状に自然堆積している。また，炭化材・炭化物・焼土

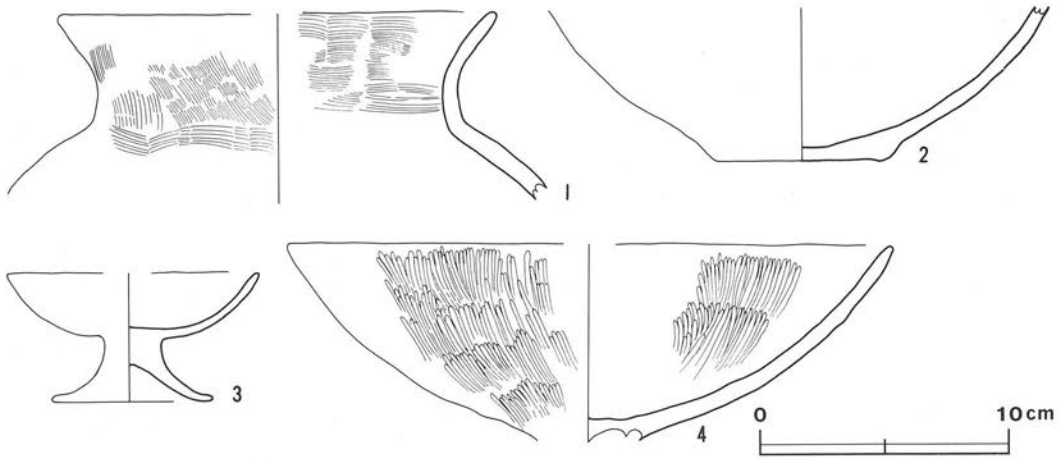
が床面直上に出土していることと，覆土下層に赤褐色土がみられることから，焼失家屋と考えられる。

遺物は，炉跡の南東ぎわから，高坏の坏部（第243図４）２片が出土し，北西壁ぎわのほぼ床面から高坏（第243図３）が正位で出土している。また，南コーナー部の壁下の床面から甕の口縁部が破片の状態で出土し，そのほか，覆土中・下層から土師器片62片等が出土している。

出土土器

第27号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第243図 1	甕 五領	A(17.6) B (7.2)	口縁部はゆるやかに外傾している。	口縁部内面は横位のハケ目，外面上位は横位のナデ，中位以下は斜位や縦位のハケ目を施し，頸部は横位のハケ目が施されている。	砂粒・長石・石英 にぶい赤褐色 普通	10% 2片 P351
2	甕 五領	B (6.2) C (6.6)	底部は平底を呈し，胴部は大きく開きながら立ち上がっている。	胴部外面はナデが施され，内面は摩滅している。	砂粒・長石 黒褐色 普通	10% 5片 P352
3	小形高坏 五領	A(10.1) B 5.2 E 6.4	脚部は「八」の字状に大きく開いている。坏部は内彎しながら立ちあがり口縁部に至る。	器面全体にナデが施されている。	砂粒 橙色 普通	60% 2片 P350
4	高坏 五領	A(24.4) B (7.9)	坏部は内彎気味に大きく開きながら口縁部に至る。脚部は欠損している。	坏部内・外面はヘラ磨キが施されている。	砂粒 橙色 良好	30% 2片 P349

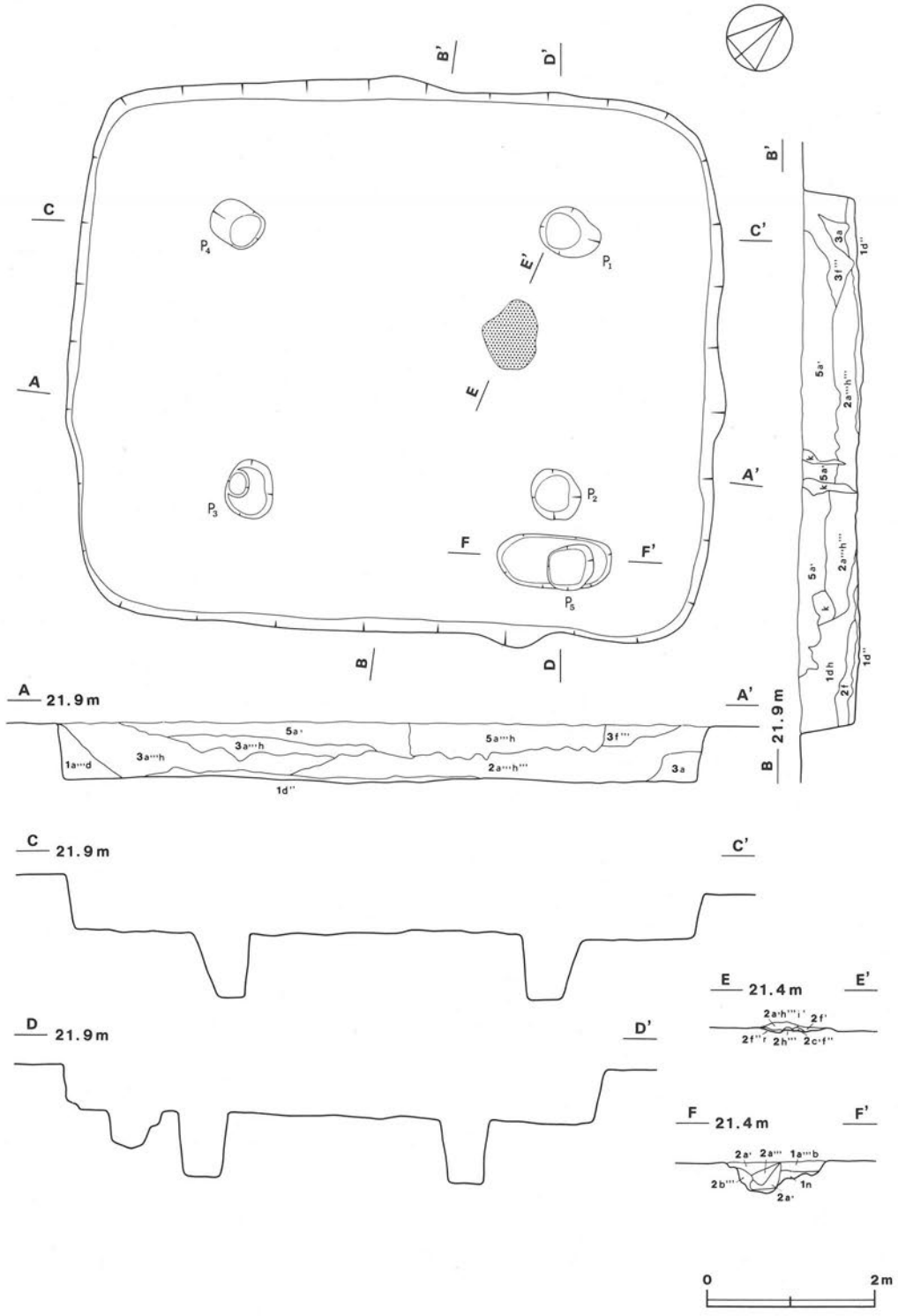


第243図　第27号住居跡出土土器実測図

第29号住居跡（第244図）

本跡は，当遺跡の中央部C3g₁区を中心に確認され，第37号住居跡の10m西側に存在している。

平面形は隅丸長方形を呈し，長軸方向はN－42°－Eを指し，規模は長軸7.8m・短軸6.6mである。壁はロームで硬く締まり，垂直に立ち上がり，壁高は50～65cmである。床面はほぼ平坦で，全体的に硬いロームである。他の住居跡によくみられるピットの内側が硬く踏み固められている部分



第244図　第29号住居跡実測図

はない。

炉跡はやや北東側に位置し，長径85cm・短径65cmの不定形を呈し，床面を皿状に10cm掘り込んでいる地床炉である。炉内には，焼土粒子多量・焼土小ブロック・炭化粒子・ローム粒子等を微量から中量含む暗褐色土が堆積し，炉床はレンガ状に硬く焼けている。ピットは５か所検出され，配列や規模からP_1～P_4が主柱穴と考えられる。主柱穴は各コーナーのやや内側に配列され，規模は長径65～75cm・短径50～60cm・深さ75cmである。P_1は北東側が広く掘られ，P_3は東側が段状に掘られ，P_4は楕円形に掘られている。P_5は貯蔵穴と考えられ，東コーナー付近に位置し，長径140cm・短径65cmの長楕円形を呈しているが，南西側は掘り過ぎているため，長径75cm・短径65cmの楕円形を呈するものと考えられる。南西壁は硬く，ほぼ垂直に立ち上がっている。

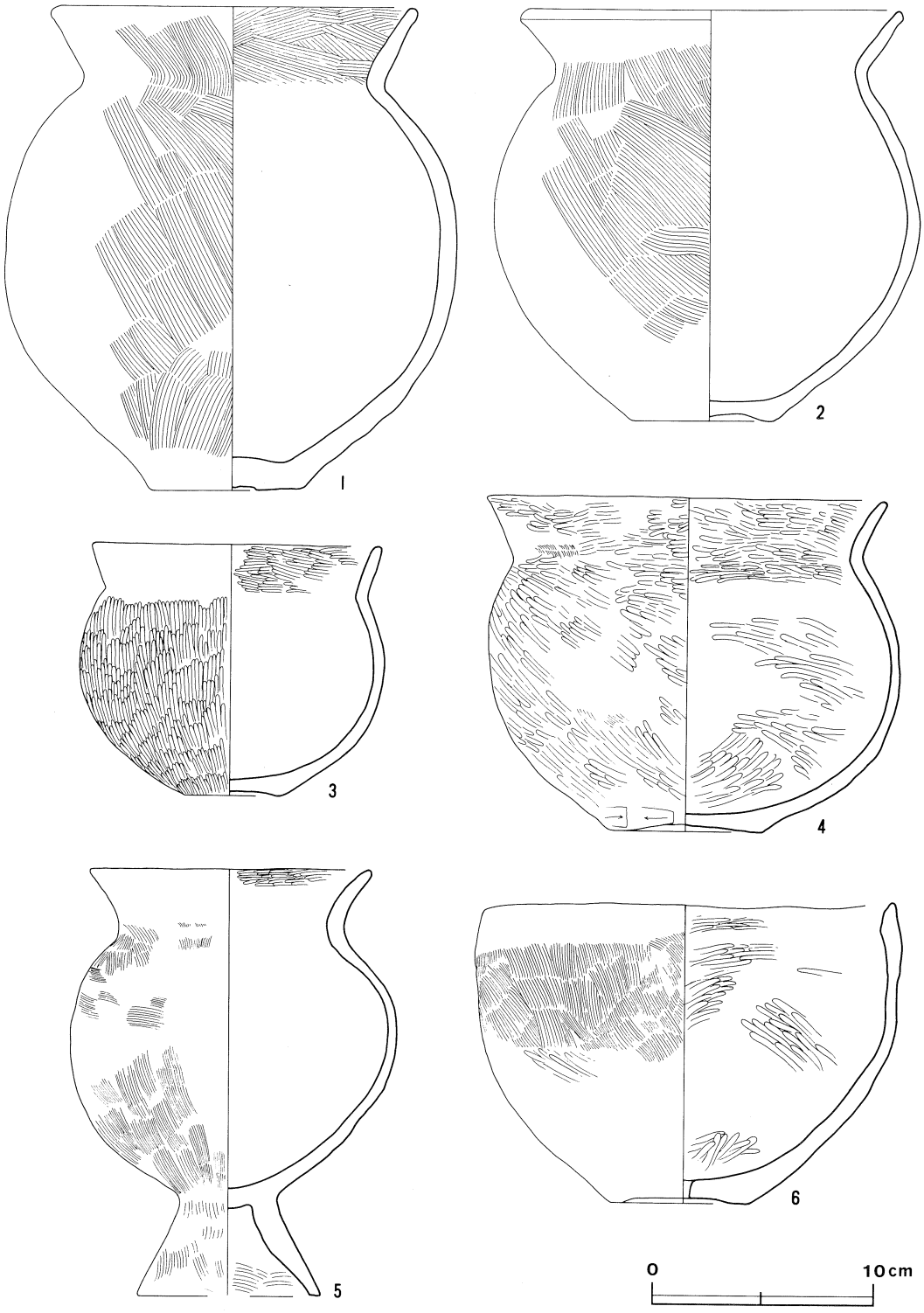
覆土は，B－B′のセクション図のように一部上層から下層にかけて攪乱があるが，おおむね４層から成り，上層はローム粒子を少量含む極暗褐色土，下層はローム粒子・焼土粒子を多量含む暗褐色土，ローム大ブロックを中量含む褐色土等が堆積しているが，A－A′のセクションの東側の一部は人為堆積と思われる。

遺物は，炉跡の北側と北コーナー部壁下の床面及び東コーナー部の覆土中層の３か所から集中して出土し，しかも完形品が殆どで復元できた遺物も多い。炉跡の北側から壺（第246図８・９）が口縁部を下にした斜位の状態で２個，破片から復元できたもの１個（第246図７），甕（第245図２・４）が逆位の状態で２個，横位につぶれた状態で１個（第246図12），台付甕（第245図５）が逆位の状態で１個，甑（第245図６）と高坏（第247図24）が逆位の状態で各１個体まとまって出土している。北コーナー部壁下の床面からも甕（第245図１）と（第246図11）が横位につぶれた状態で２個体出土している。また，東コーナー部の覆土中層から台付甕の台部や高坏の脚部が横位や逆位の状態でそれぞれ出土している。そのほか，覆土上・中層から土師器片201片，半分欠損している球状土錘（第264図８）が出土している。遺物が逆位の状態で出土しているのと，台付甕の台部が16個と多く出土しているのが本跡の特徴である。

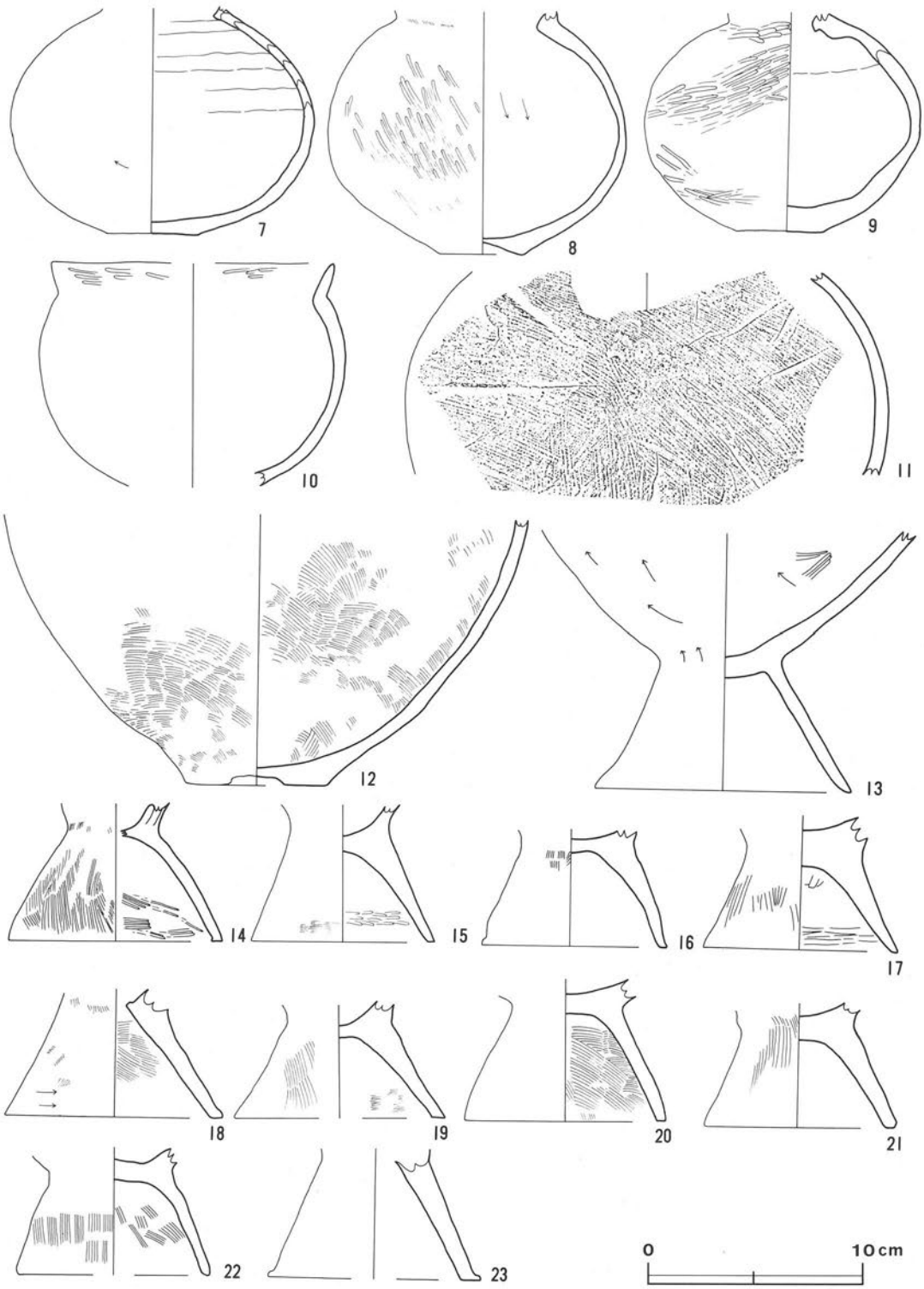
出土土器

第29号住居跡出土土器観察表

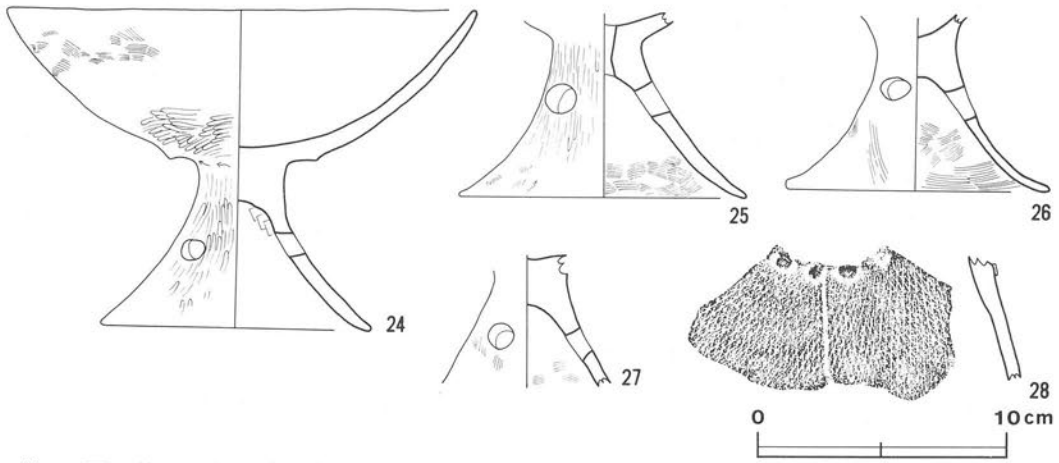
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第245図 1	甕 五領	A 16.9 B 22.3 C 7.2	底部は平底で，中央がやや凹む。胴部は球形を呈し，中位よりやや下に最大径を有する。頸部は「く」の字状を呈し，口縁部は外傾している。	口縁部内面は横位のハケ目，外面は横位のナデと斜位のハケ目が施されている。胴部外面は斜位のハケ目，内面はナデが見られる。	砂粒 灰褐色 良好	100% 17片 P49
2	甕 五領	A 17.5 B 19.0 C 6.7	底部はやや上げ底状で，胴部は球形を呈し，中位に最大径を有する。口縁部は外傾している。	口縁部内・外面は横位のナデ，胴部外面は斜位のハケ目，内面は縦位のナデが施されている。	砂粒・スコリア 橙色 良好	80% 17片 P50
3	小形甕 五領	A 13.3 B 11.6 C 4.2	底部はやや上げ底状で，胴部は横長の球形を呈し，中位に最大径を有する。口縁部は軽く外傾している。	口縁部内・外面は横位のナデが施され，胴部外面は縦位のヘラ磨キ，内面は斜位のヘラ磨キが成されている。	砂粒・長石 明赤褐色 良好	100%1個体 P356



第245図　第29号住居跡出土土器実測図(1)



第246図　第29号住居跡出土土器実測図(2)



第247図　第29号住居跡出土土器実測図・拓影図(3)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第245図 4	小形甕	A 18.2 B 15.0 C 7.0	底部はやや上げ底状で，胴部は横長の球形を呈し，口縁部は軽く外傾している。	口縁部内・外面は横位のヘラ磨キ，胴部外面は斜位のヘラ磨キ，内面は横位のナデが施されている。	砂粒・長石 にぶい褐色 良好	100%1個体 P358
5	台付甕 五領	A 13.2 B 19.7 D (8.4)	台部は「ハ」の字状に開き，裾部に至る。胴部は球形を呈し，中位に最大径を有する。口縁部は外反している。	口縁部内面は横位のヘラ磨キ，外面はヘラナデが成されている。胴部外面はハケ目，内面はナデ，台部外面はハケ目が施されている。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	90%　15片 P354
6	甑 五領	A 18.8 B 13.9 C 6.6	底部は孔を有し，胴部は底部から内彎し，中位から垂直に立ち上がり口縁部に至る。	口縁部内・外面は横位のヘラ磨キ，体部中位までの外面は斜位・縦位のハケ目，中位以下は，ヘラ磨キ，内面は横位のナデが施されている。	砂粒・長石 赤褐色 良好	100%1個体 P353
第246図 7	壺 五領	B(10.7) C 4.3	底部は平底を呈し，胴部は横長の球形を呈し，中位に最大径を有する。口縁部は欠損している。	胴部外面は横位のヘラナデが施され，輪積痕が見られる。	砂粒 橙色 良好	90%　1片 P359
8	壺 五領	B(11.6) C 3.9	底部は上げ底を呈し，小さい。胴部は球形を呈し，中位に最大径を有する。口縁部は欠損している。	胴部外面はヘラ磨キ，内面は横位のナデが施されている。	砂粒・雲母 橙色 良好	90%　1片 胴部に傷がある P362
9	壺 五領	B(10.3) C 4.0	底部は平底を呈し，胴部は横長の球形を呈し，中位に最大径を有する。口縁部は欠損している。	胴部外面はヘラ磨キ，内面はナデが施されている。輪積痕が認められる。	砂粒 にぶい橙色 普通	80%　10片 P363
10	小形甕 五領	A(13.3) B(10.6)	胴部は球形を呈し，口径が大きい。口縁部は軽く外傾し，短い。底部は欠損している。	口縁部内・外面はヘラ磨キ，胴部外面は棒状工具で整形し，内面はヘラナデが成されている。	砂粒 にぶい橙色 不良	40%　5片 P357
11	壺 五領	B (9.5)	球形を呈する胴部片である。	胴部には斜位のハケ目，器内面は横位のナデが施されている。	砂粒・石英・雲母 橙色 普通	10%　1片 P298
12	甕 五領	B(12.7) C 6.8	底部は中央が凹む。胴部は内彎しながら大きく開く。	胴部内・外面はハケ目が施されている。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	30%　8片 P360

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第246図 13	台付甕 五　領	B(12.2) D 12.0	台部は「ハ」の字状に開き，裾部に至る。胴部は大きく開きながら立ち上がっている。	器面全体にヘラナデが施されている。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	20%　1片 P361
14	台付甕 五　領	B (6.5) D 10.0	台部は「ハ」の字状に開き裾部に至る。	外面はハケ目，内面はヘラ磨キが施されている。	砂粒・橙色・ 良好	20%　1片 P364
15	台付甕 五　領	B (6.5) D 8.6	台部は「ハ」の字状に開き裾部に至る。	外面はヘラ磨き，内面はナデが施されている。	砂粒・褐灰色・ 普通	20%　1片 P365
16	台付甕 五　領	B (5.4) D 8.6	台部は「ハ」の字状に開き裾部に至る。	外面は横位のナデが施されている。	砂粒・黒褐色・ 普通	20%　1片 P369
17	台付甕 五　領	B (6.8) D 9.0	台部は「ハ」の字状に開き裾部に至る。	外面は縦位のハケ目，内面は横位のナデが施されている。	砂粒・黒褐色・ 良好	20%　1片 P370
18	台付甕 五　領	B (6.0) D 10.2	台部は「ハ」の字状に開き裾部に至る。	外面は磨滅している。内面は横位のハケ目が施されている。	砂粒・にぶい 橙色・良好	20%　1片 P371
19	台付甕 五　領	B (5.4) D (9.9)	台部は「ハ」の字状に開き裾部に至る。	外面はハケ目，内面はナデが施されている。	砂粒・にぶい 橙色・普通	10%　1片 P372
20	台付甕 五　領	B (6.7) D 9.5	台部は「ハ」の字状に開き裾部に至る。	外面はナデ，内面はハケ目が施されている。	砂粒・褐灰色・ 普通	20%　1片 P373
21	台付甕 五　領	B (5.8) D 8.8	台部は「ハ」の字状に開き裾部に至る。	外面はハケ目，内面はナデが施されている。	砂粒・にぶい 赤褐色・普通	15%　1片 P374
22	台付甕 五　領	B (5.9) D 9.0	台部は「ハ」の字状に開き裾部に至る。	内・外面はハケ目が施されている。	砂粒・にぶい 橙色・普通	10%　1片 P375
23	台付甕 五　領	B (6.2) D(10.0)	台部は「ハ」の字状に開き裾部に至る。	内・外面は横位のナデが施されている。	砂粒・橙色・ 普通	10%　1片 P376
第247図 24	高　坏 五　領	A 18.8 B 12.8 E 10.8	脚部は「ハ」の字状に開き，裾部に至る。3孔を有する。坏部は内彎気味に大きく開き，口縁部に至る。坏底部に外稜を有する。	坏部内・外面は横位のヘラ磨キ，脚部外面はヘラ磨キ，内面はナデが施されている。	砂粒 にぶい橙色 良好	100%1個体 P355
25	高　坏 五　領	B (7.2) E 11.5	脚部は外反しながら裾部に至る。上位に3孔を有する。坏部は欠損している。	脚部外面は縦位のていねいなヘラ磨キ，内面は横位のハケ目が施されている。	砂粒 橙色 良好	50%　1片 P366
26	高　坏 五　領	B (7.1) E 10.5	脚部は外反しながら裾部に至る。上位に3孔を有する。坏部は欠損している。	脚部内・外面はハケ目が施されている。	砂粒 橙色 普通	50%　1片 P367
27	高　坏 五　領	B (5.1)	脚部片で，3孔を有する。	脚部外面はヘラ磨キ，内面はナデが施されている。	砂粒 橙色 普通	20%　1片 P368

その他，本跡から次のような弥生式土器片が出土している。第247図28は胴部片で，胴部上位に3個の円形浮文と網目撚糸文が施されている。やや摩耗している。

第31号住居跡（第248図）

本跡は，当遺跡の中央C3c$_5$区を中心に確認され，当遺跡を横切っている農道が存在しているため，本跡の東側の一部は調査ができなかった。本跡は貼り床をしている古墳時代の第32号住居跡より古い。また，北側を掘り込んでいる古墳時代の第33号住居跡は本跡より新しい。

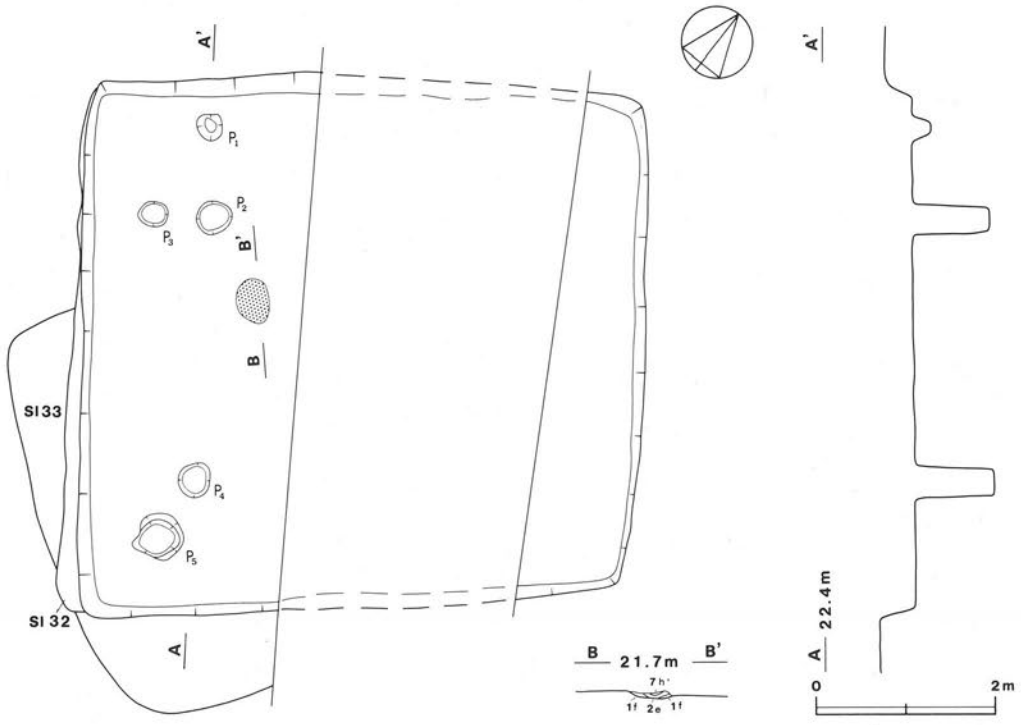
平面形は隅丸方形を呈し，長軸方向は，N－45°－Eを指し，規模は長軸6.5m・短軸6mである。壁はロームで，ほぼ垂直に立ち上がり，硬く締まっており，壁高は30～40cmである。床面は

ロームを呈し，ごくゆるやかに北側から南側に傾き，全体的に硬く締まり，炉の南側から南東側の一部分は踏み固められて硬く締まっている。

炉跡はやや西側よりに位置し，長径50cm・短径36cmの楕円形を呈し，床面を皿状に７cmほど掘り込んだ地床炉である。炉内には焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子を含む暗褐色土や暗赤褐色土が堆積しているが，炉床はそれほど硬く焼けていない。ピットは５か所検出され，位置や規模から，P_2・P_4が主柱穴と考えられる。主柱穴は壁からやや離れた内側に位置し，規模は長径40cm・短径36cm・深さ85cmである。P_3は深さ17cmであり，P_2の支柱穴と考えられる。P_5は南コーナー部に位置し，長径58cm・短径55cmの円形を呈し，深さは40cmで貯蔵穴と考えられるが，遺物の出土もなく断定はできなかった。

覆土はおおむね２層から成り，上層はローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む暗褐色土，下層はローム粒子少量・焼土粒子を微量含む暗褐色土がほぼ自然堆積の様相を呈している。また，焼土が，東コーナー部北東壁・炉跡の南東側の床面に出土していることと，炭化物・焼土粒子・炭化粒子が覆土に含まれていることから焼失家屋と考えられる。

遺物は，炉跡の南東辺から正位の状態で立てた甕の底部（第249図１）２片と，縄文時代中期の住居跡と重複しているため縄文土器片，凹石，原石等が出土している。

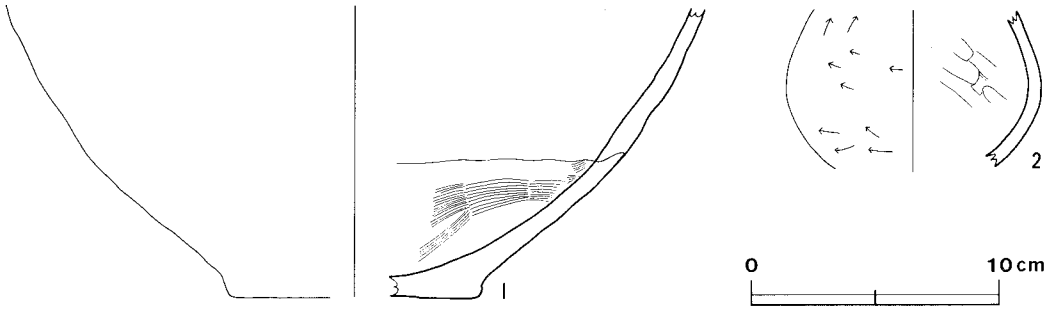


第248図　第31号住居跡実測図

出土土器

第31号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第249図 1	甕 五領	B(11.8) C(10.0)	底部は平底を呈し，胴部は外上方に大きく内彎する。	器外面は横位のナデ，内面はナデが施されているが，底部直上は横位のハケ目が施されている。輪積痕が窺える。	砂粒・長石 赤褐色 普通	20% 2片 二次焼成 P380
2	壺 五領	B (6.2)	球形を呈する胴部片である。	器内・外面は横位のナデが施されている。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	20% 1片 P387



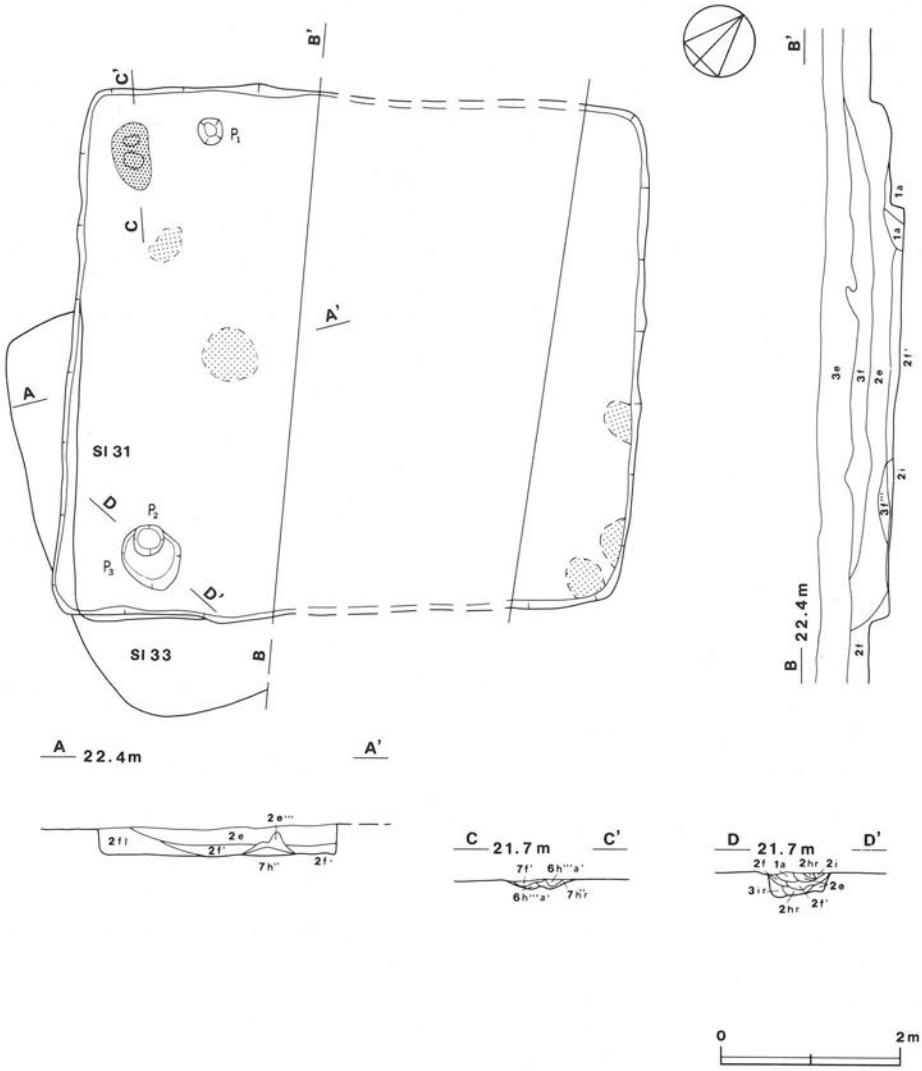
第249図　第31号住居跡出土土器実測図

第32号住居跡（第250図）

本跡は，当遺跡の中央部C3c$_5$区を中心に確認され，当遺跡を横切っている農道が存在しているため，一部調査ができなかった。本跡は古墳時代の第31号住居跡との重複部に床を貼り，南側に位置する第33号住居跡に南側を掘られている。本跡は第31号住居跡より新しく，第33号住居跡より古い。

平面形は隅丸方形を呈し，長軸方向はN－49°－Eを指し，規模は長軸6.4m・短軸5.8mである。壁はロームで硬く，ほぼ垂直に立ち上がり，壁高は30cmである。床面は硬くほぼ平坦で，中央部を貼り床としている。

炉跡は西コーナー付近に位置し，長径75cm・短径40cmの楕円形を呈し，床面を皿状に10cmほど掘り込んでいる地床炉である。本跡の場合も，炉床が2か所検出され，北西側の炉跡は推定で直径40cmの円形を呈するものと考えられ，炉内には焼土粒子多量・ローム粒子を少量含む赤褐色土，焼土粒子中量・炭化粒子を微量含む暗赤褐色土が堆積し，南東側の炉跡は推定で長径50cm・短径40cmの楕円形を呈するものと考えられる。炉内にはローム粒子・焼土粒子を少量含む暗赤褐色土や焼土粒子多量・ローム粒子を少量含む赤褐色土が堆積している。炉床は両方とも硬く焼けている。ピットは3か所検出され，位置や規模からP$_1$が主柱穴と考えられる。P$_1$は北西壁ぎわに位置



第250図　第32号住居跡実測図

し，規模は直径30cm・深さ20cmである。P_3は貯蔵穴と考えられ，長径70cm・短径60cmの楕円形を呈し，深さ25cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり，床面はほぼ平坦である。P_2はP_3の北西側に位置し，P_3を掘り込んでいる性格の不明なピットである。

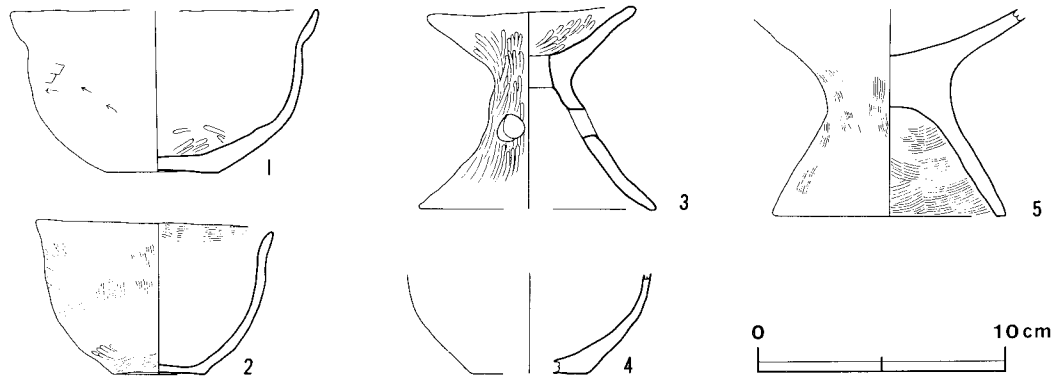
覆土は第31号住居跡の覆土と同じであり，覆土下層は貼り床部分でロームである。

遺物は，西側の覆土下層から小形甕（第251図１）が，北西壁ぎわの覆土下層から台付甕の底部（第251図５）が出土し，貯蔵穴の底面から器台（第251図３）と甕の底部（第251図４）が横位の状態で出土している。そのほか，北西壁ぎわの覆土上層から埦形土器（第251図２）が出土している。

出土土器

第32号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第251図 1	小形甕 五領	A(12.4) B 6.5 C 4.4	底部は平底を呈し，胴部は外上方に大きく内彎し，口縁部は外傾している。	器内・外面は横位のナデが施されている。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	30% 2片 P384
2	埦 五領	A 9.5 B 6.0 C 3.6	底部は平底を呈し，体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部でやや外傾している。	口縁部内・外面と体部外面は横位のナデ，体部内面はナデが施されている。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	80% 4片 P381
3	器台 五領	A 8.4 B 18.0 E (9.4)	脚部は「ハ」の字状を呈し，ほぼ中位に3孔を有する。器受部は外傾しながら立ち上がり，口縁部に至る。器受部中央に孔を有する。	坏部内・外面，脚部外面はヘラ磨き，脚部内面はナデが施されている。	砂粒 にぶい橙色 良好	80% 1個体 P382
4	甕 五領	B (4.0) C (4.6)	底部は平底を呈し，胴部は内彎しながら立ち上がっている。	器外面はナデ，内面は棒状工具による沈線が施されている。	砂粒 橙色 普通	30% 2片 P385
5	台付甕 五領	B (8.4) D 9.4	脚部は「ハ」の字状に開き，裾部に至る。胴部は開きながら立ち上がる。	脚部外面は縦位のナデ，内面は横位のハケ目が施されている。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	20% 1片 P383



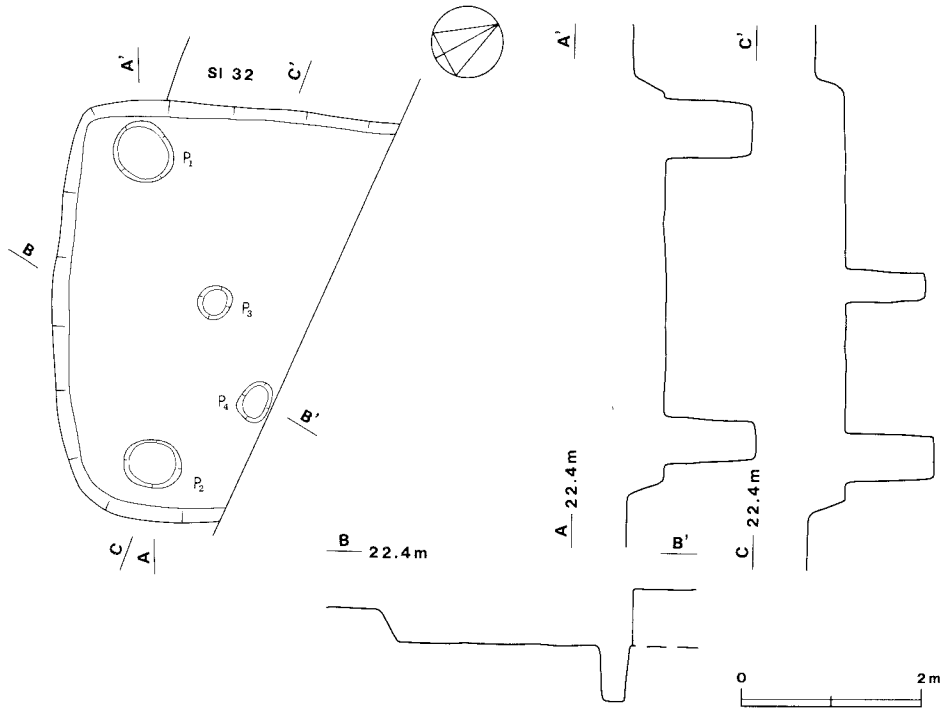
第251図　第32号住居跡出土土器実測図

第33号住居跡（第252図）

本跡は，当遺跡の中央C3c$_5$区を中心に確認され，農道が当遺跡を横切って存在しているため，本跡の北東側の一部は農道下のため調査ができなかった。本跡は北西側に位置する古墳時代の第31号と第32号住居跡を掘り込んでいる。

平面形は隅丸方形を呈し，南西壁はN－51°－Wを指し，南西壁の長さは4.6mである。壁はロームで硬く外傾しながら立ち上がり，壁高は35～40cmである。南コーナー部は，やや丸味を帯びている。床面は平坦で，全体的に硬いロームであり，P$_1$・P$_2$と農道の南西側に囲まれた床面は，壁周辺の床面より硬く締まっている。

炉跡と貯蔵穴は，検出できなかった。ピットは4か所検出され，位置や規模からP$_1$・P$_2$が主柱



第252図　第33号住居跡実測図

穴と考えられ，P_1・P_2は西と南のコーナー部の壁ぎわに位置し，規模は長径65～70cm・短径55cm・深さ90～100cmで，太く，深く，しっかりした柱穴である。P_3・P_4は本跡に伴わないピットであり，P_3は，第32号住居跡の主柱穴と考えられる。P_4は，性格の不明なピットである。

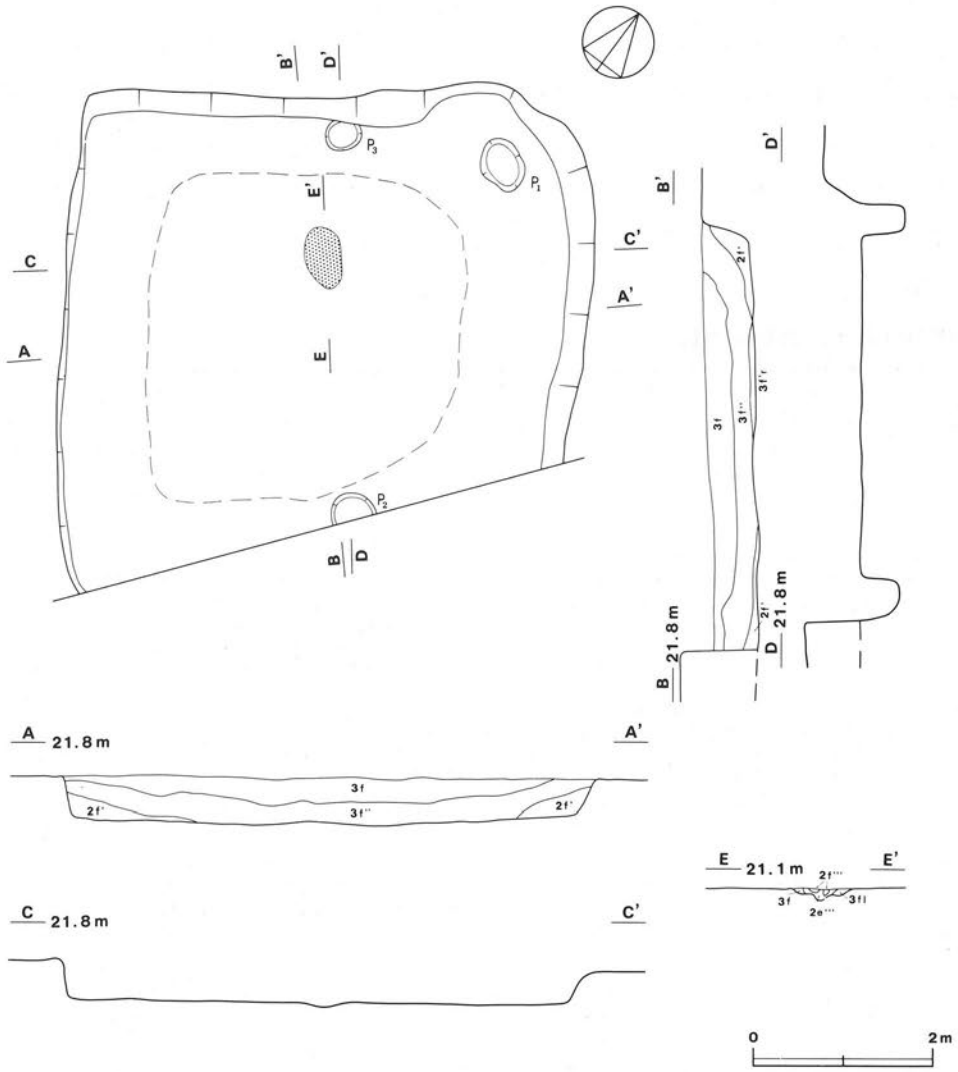
覆土は，第31号住居跡の覆土と同じである。

第34号住居跡（第253図）

本跡は，当遺跡の中央部D3a_7区を中心にして確認され，南東側は調査エリヤ外に位置するため，調査できなかった。第36号住居跡の８ｍ南側に存在している。

平面形は隅丸方形を呈するものと考えられ，北西壁はN－52°－Eを指し，規模は北西壁の長さが5.6ｍである。壁は北西壁と北コーナー部や調査のできない南東壁を除いて，ロームで硬く，南西壁は垂直に，北西・北東壁はほぼ垂直に立ち上がり，壁高は45cmである。床面は全体的に平坦であり，硬いロームで，壁周辺を除いて踏み固められて硬く締まり，特に炉の南側は，非常に硬く締まっている。

炉跡はやや北西側に位置し，長径70cm・短径40cmの楕円形を呈し，床面をほぼ皿状に10cmほど掘り込んだ地床炉である。炉内には焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子を多量に含む暗褐色土等が



第253図　第34号住居跡実測図

堆積し，炉床は硬く焼け，南東側はレンガ状に非常に硬く焼けている。ピットは３か所検出されたが，位置や規模からP₁が主柱穴と考えられる。P₁は北コーナーに位置し，規模は長径60cm・短径45cm・深さ35cmである。P₂は支柱穴と考えられ，P₃は本跡に伴わないピットと考えられる。

覆土は３層から成り，上層はローム粒子・焼土粒子を微量含む黒褐色土，下層はローム粒子・焼土粒子を中量含む黒褐色土やローム粒子少量・焼土粒子微量を含む暗褐色土がほぼレンズ状に自然堆積している。

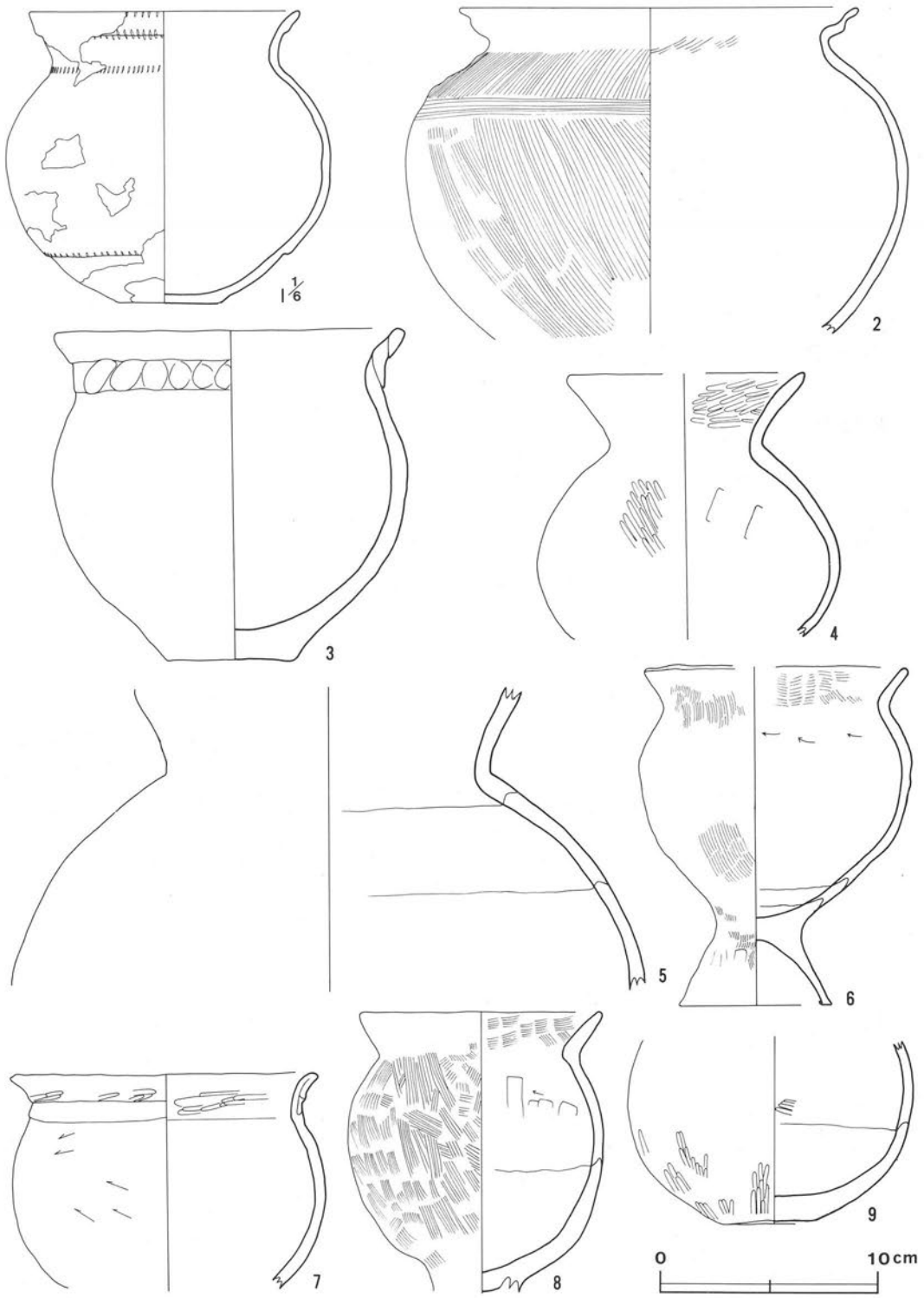
遺物は，中央の床面から壺（第254図５）がつぶれた状態で，北西壁近くの床面からも壺（第254図４）が逆位で出土し，中央からやや東側の床面でつぶれた状態の甕（第254図１）や，炉の

西側の床面から逆位の状態の「S」字状の台付甕（第254図２），北西壁下からもつぶれた状態の甕（第254図３）が出土している。また，北東側の床面から逆位の状態の台付甕（第254図６）と，つぶれた状態の台付甕（第254図８）が出土し，さらに北コーナー部付近の床面から出土した高坏（第255図11）と，北西壁ぎわの床面から正位の状態で出土した装飾器台（第255図10）等がある。そのほか，西コーナー部の床面からの管状土錘（第264図９），床面や覆土下層から壺・甕・台付甕の台部，高坏片，覆土から土師器小片216片が出土している。

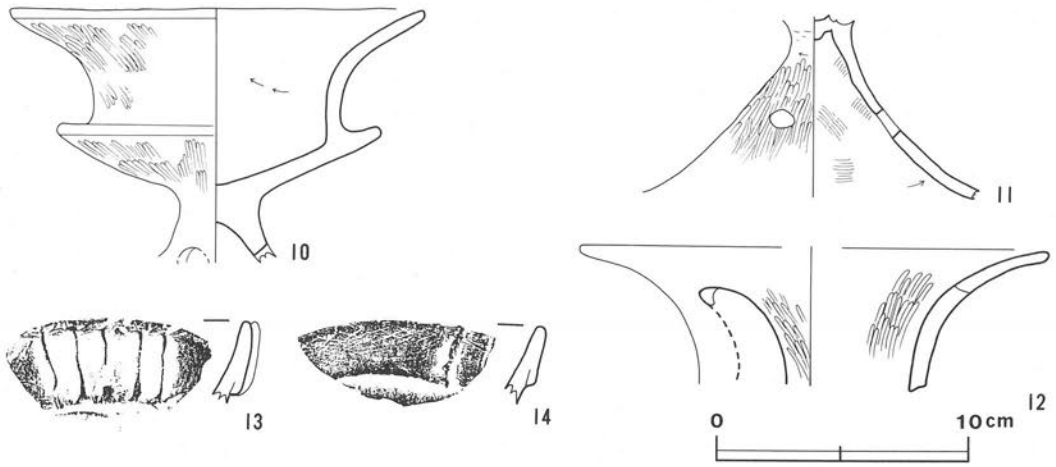
出土土器

第34号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第254図 1	甕 五領	A 24.7 B 27.0 C 9.5	底部は平底で，胴部は球形を呈し，中位に最大径を有する。口縁部は複合口縁を呈し，軽く外反している。	口縁部内・外面は横位のヘラナデ，口唇部と口唇部直下，及び頸部はキザミ目を施している。胴部内・外面は斜位と横位のヘラナデ，胴部下位の接合部にはキザミ目が施されている。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	80% 68片 P52
2	台付甕 五領	A 18.5 B(16.3)	胴部は横長の球形を呈し，中位のやや上側に最大径を有する。口縁部は「S」字状を呈する。台部は欠損している。	口縁部内・外面は横位のナデ，胴部上位に横位のハケ目，上下の両側は斜位のハケ目が施されている。頸部内面は粗い斜位のハケ目，胴部内面はナデが施されている。	砂粒・石英・長石 にぶい黄褐色 良好	70% 17片 P51
3	甕 五領	A(16.3) B 15.2 C 6.0	底部は平底で，胴部はほぼ球形を呈し，中位に最大径を有する。口縁部はやや外反し，胴部から口縁部の約半分は欠損している。	口縁部内面はナデが横位に施され，外面は２段の輪積痕が明瞭に残り，上段は横位のナデ，下段は指頭圧痕が認められる。胴部外面は斜位のナデが施されている。	砂粒 明褐色 良好	60% 6片 P396
4	壺 五領	A 10.8 B(12.3)	胴部は球形を呈し，中位に最大径を有する。口縁部は強く外傾している。底部は欠損している。	口縁部内・外面は横位のヘラ磨キ，胴部外面は縦位のヘラ磨キが施されている。	砂粒 明赤褐色 良好	70% 10片 P395
5	壺 五領	B(13.7)	口縁部から胴部にかけての大形破片である。胴部は球形を呈し，口縁部は外傾している。	器面内，外面はナデが施されている。輪積痕が認められる。	砂粒 にぶい橙色 普通	20% 12片 P400
6	台付甕 五領	A(12.1) B 15.7 D 7.0	台部は「ハ」の字状に開き，裾部に至る。胴部はほぼ球形を呈し，上位に最大径を有する。口縁部は外傾している。	口縁部内面はハケ目，外面は横位のナデが施され，胴部外面は斜位のハケ目，内面は横位のナデが施されている。胴部下位に輪積痕が認められる。	砂粒・長石 にぶい橙色 不良	60% 16片 P397
7	甕 五領	A 14.3 B(10.1)	胴部は球形を呈し，口縁部は外反している。底部は欠損している。	口縁部内面は横位のナデ，外面は２段の輪積痕が明瞭に認められる。胴部外面は斜位のナデ，内面はナデが見える。	砂粒・長石 にぶい赤褐色 普通	80% 9片 P393
8	台付甕 五領	A 11.4 B(13.1)	胴部は球形を呈し，中位に最大径を有する。頸部は「く」の字状を呈し，口縁部は強く外反している。台部は欠損している。	口縁部内面は横位のハケ目，外面はナデが施されている。胴部外面は斜位のハケ目，内面は横位のナデが窺える。	砂粒・雲母・長石 橙色 普通	80% 1個体 P392
9	壺 五領	B (8.5) C 4.5	底部は平底で，胴部は球形を呈し，中位に最大径を有する。胴部上位から口縁部は欠損している。	胴部外面は縦位のヘラ磨キ，内面は横位のナデとヘラ磨キが施されている。輪積痕が認められる。	砂粒 にぶい赤褐色 良好	60% 1個体 P391



第254図　第34号住居跡出土土器実測図



第255図　第34号住居跡出土土器実測図・拓影図(2)

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第255図 10	装飾器台 五　領	A 16.8 B(10.1)	器受部は脚部からゆるやかに立ち上がり，装飾用の突帯を有し，再び外反しながら口縁部に至る。脚部に３孔を有し，３孔より下は欠損している。	器内・外面はヘラ磨キが施されている。	砂粒・長石 にぶい橙色 良好	70%　２片 P394
11	高　坏 五　領	B (7.4)	脚部は「八」の字状に大きく開き，裾部に至る。坏部は欠損している。	脚部外面はヘラ磨キ，内面はハケ目，ナデが施されている。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	20%　２片 P403
12	装飾器台 五　領	A(18.8) B (5.6)	器受部は外反しており，飾り窓を有する。器受部中位以下は欠損している。	器内・外面ともヘラ磨キが施されている。	砂粒 にぶい黄橙色 普通	10%　２片 P405

その他，本跡から次のような弥生式土器片が出土している。第255図13・14は口縁部片で，複合口縁を呈し，13は棒状浮文が５本貼付され，14は１本認められ，網目状撚糸文が施されている。

第37号住居跡（第256図）

本跡は，当遺跡の中央C3f$_5$区を中心にして確認され，古墳時代の第36号住居跡の５ｍ北西側に存在している。

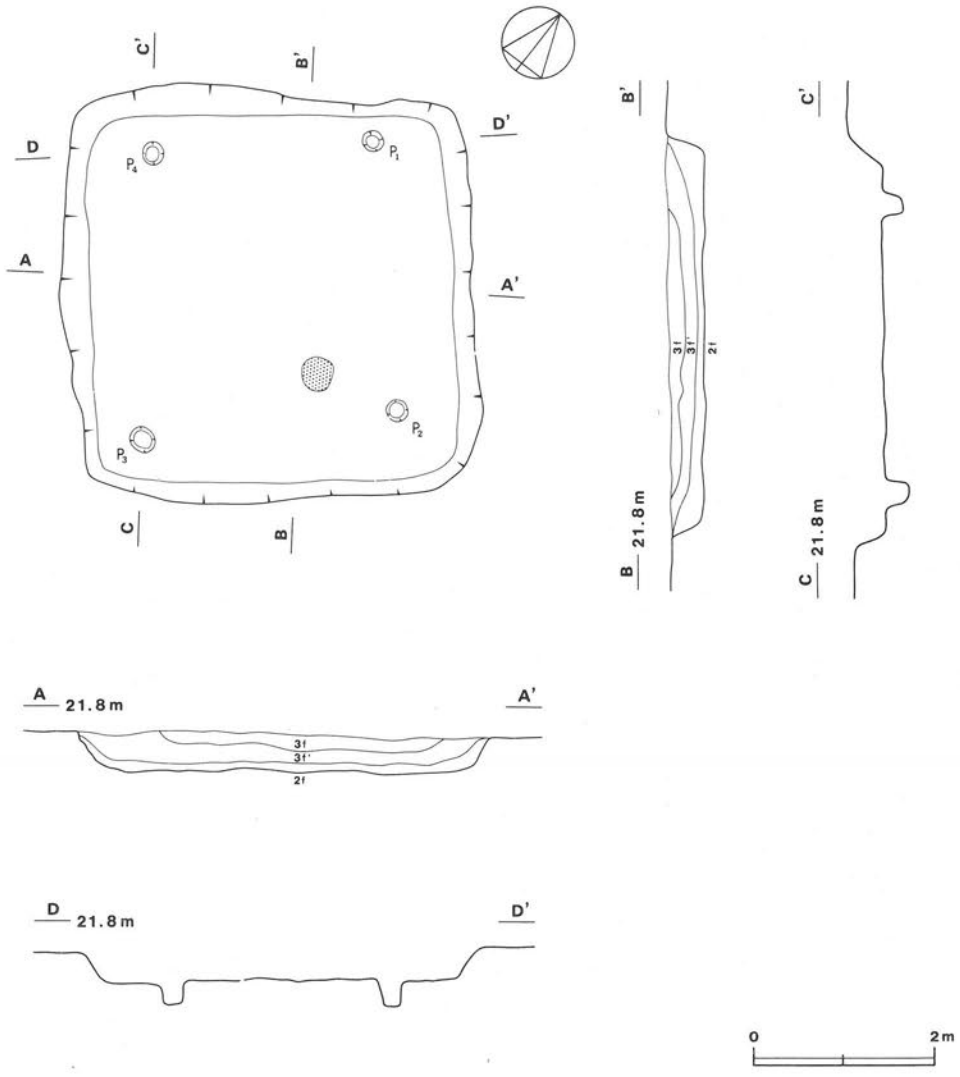
平面形は隅丸方形を呈し，長軸方向はＮ－41°－Ｗを指し，規模は長軸4.6ｍ・短軸4.5ｍである。壁は南壁上層を除いてロームで硬く，ややゆるやかに外傾しながら立ち上がり，壁高は40cmである。床面はほぼ平坦で，やや軟弱なロームである。

炉跡はやや東側に位置するが，少し床面を掘り過ぎてしまったために，炉床のみを確認しただけで，炉跡全体は確認できなかった。炉床の規模は，長径40cm・短径35cmで円形を呈している。ピットは４か所検出され，位置や規模からP$_1$～P$_4$が主柱穴と考えられ，各コーナー付近に位置し，

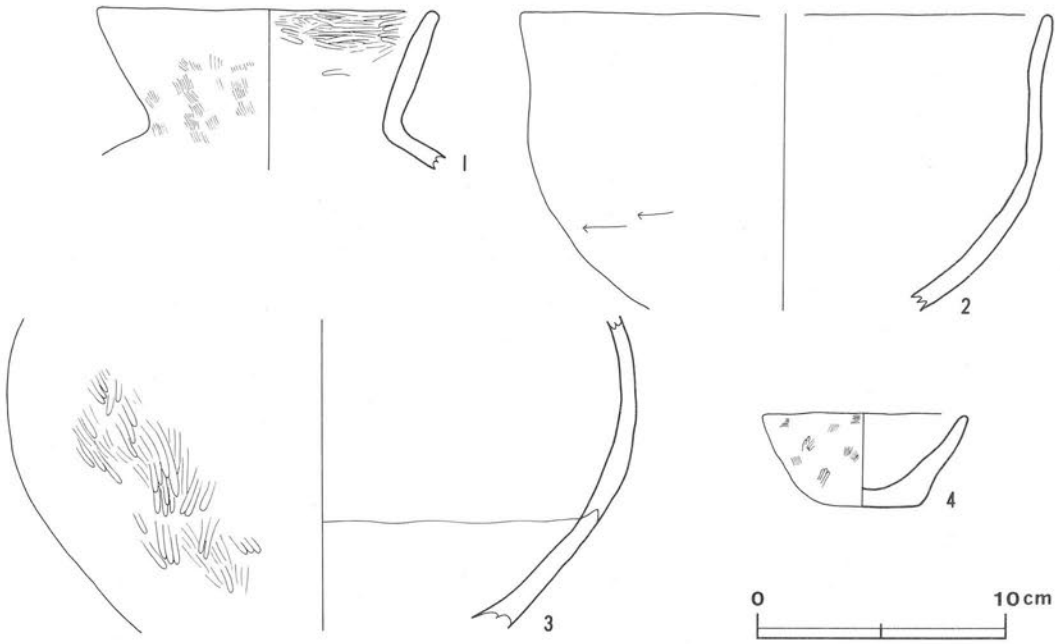
規模は長径25～30cm・短径23～25cm・深さ23～25cmである。貯蔵穴は検出できなかった。

覆土は３層から成り，上層はローム粒子・焼土粒子を微量含む黒褐色土，中層はローム粒子少量・焼土粒子を微量含む黒褐色土，下層はローム粒子・焼土粒子を微量含む暗褐色土がレンズ状に堆積している。

遺物は，北東壁付近の覆土下層から，壺の口縁部（第257図１）が正位の状態で出土し，また，ほぼ中央部の覆土下層から甕の胴部（第257図３），南コーナー部の床面直上から小形の鉢（第257図４）が出土している。また，西コーナー部の覆土上層から土製勾玉（第264図１）が出土している。なお覆土上層から下層にわたって，土師器片93片等が出土している。



第256図　第37号住居跡実測図



第257図　第37号住居跡出土土器実測図

出土土器

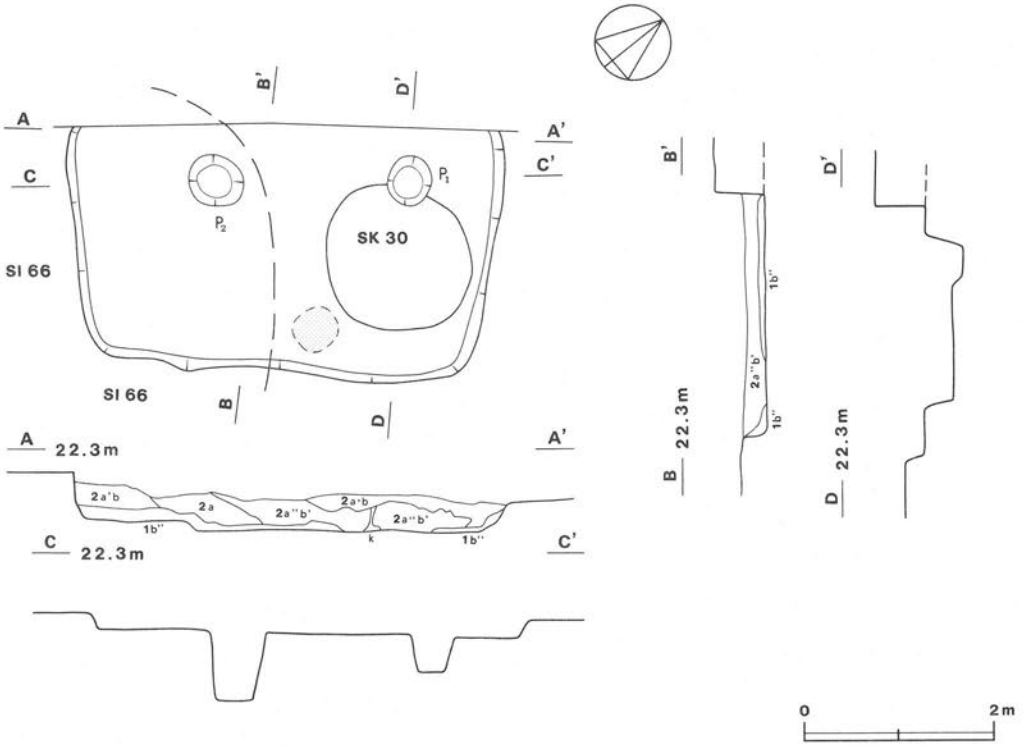
第37号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第257図 1	壺 五　領	A 13.7 B (6.3)	口縁部は外傾している。	口縁部内面は横位のハケ目を施し，外面は縦位のハケ目を横位のナデで部分的に磨消している。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	20%　2片 P419
2	甕 五　領	A(21.3) B(12.0)	胴部は内彎しながら中位に至り，中位から直立する。口縁部はやや外傾している。	口縁部・胴部内・外面は横位のナデが施されている。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	10%　4片 P424
3	甕 五　領	B(12.9)	胴部はほぼ球形を呈し，中位に最大径を有する。	胴部外面は横位や斜位のナデ，内面は横位のナデが施されている。	砂粒・スコリア 浅黄橙色 良好	70%　4片 P423
4	小形鉢 五　領	A　8.3 B　3.8 C　3.2	底部は平底を呈し，体部はやや外傾しながら開いて口唇端部に至る。	口縁部内・外面は横位のナデ，体部外面は斜位のハケ目，内面はナデが施されている。	砂粒・長石 橙色 良好	100%1個体 P418

第39号住居跡（第258図）

本跡は，当遺跡の西側C2i_7区を中心に確認され，北西側約半分は調査エリヤ外で調査ができなかった。

本跡の南側に位置する縄文時代の第66号住居跡の北側と，東コーナー部付近に位置する第30号土坑を掘り込んでいる。



第258図　第39号住居跡実測図

平面形は，隅丸方形か隅丸長方形を呈するものと考えられる。南東壁はN－44°－Eで，南東壁の長さは４ｍである。南西壁はほぼ垂直に，北東壁は外傾しながら立ち上がり，壁高は20～30cmである。床面は平坦で硬く，西側の一部は少し高い。

炉跡と貯蔵穴は検出されなかった。ピットは２か所検出され，位置や規模からP_1・P_2は主柱穴と考えられる。P_1は第30号土坑の北西側に半分重複して位置し，P_2はP_1から2.5ｍ南西側に位置しており，規模は長径50～55cm・短径45～55cm・深さ40～70cmである。

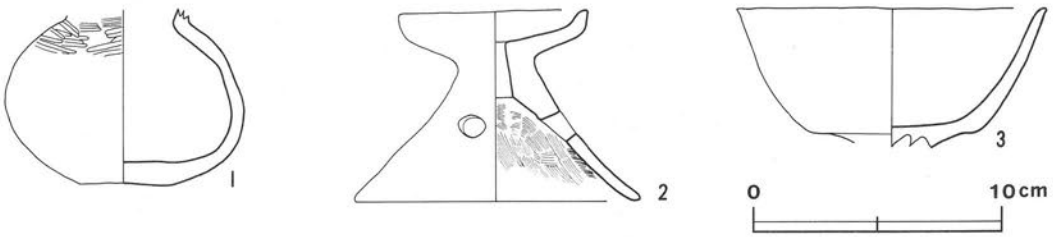
覆土はほぼ２～３層から成り，上層はローム粒子を中量・ローム小ブロックを少量含む暗褐色土，下層はローム粒子を中量含む褐色土が堆積しているが，A－A′のセクションを見る限りやや人為堆積の様相を呈している。

遺物は，東コーナー部の覆土上層から正位で小形壺（第259図１）が，エリヤ境界付近の覆土上層から高坏（第259図３）が横位で出土している。そのほか，東コーナー部の覆土上層から，器台（第259図２）が横位で出土し，覆土中から土師器片７片，ミニチュア土器（第264図２），土器片錘２点，縄文土器片少量が出土している。

出土土器

第39号住居跡出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	品形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第259図 1	小形壺 五領	B (7.0) C 3.8	底部は平底で，胴部は横長の球形を呈し，下位に最大径を有する。口縁部は欠損している。	胴部外面はていねいな横位のナデ，内面は横位のナデが施されている。	砂粒・長石 黒褐色 良好	85% 1個体 P425
2	器台 五領	A 7.6 B 7.7 E 11.5	脚部は「ハ」の字状に大きく開き，裾部に至る。中位に3孔を有する。器受部は皿状を呈している。器受部中央に孔を有する。	器受部内・外面，脚部外面はていねいなヘラ磨き，脚部内面は斜位のハケ目が施されている。	砂粒 にぶい褐色 良好	95% 1個体 P426
3	高坏 五領	A 12.4 B (5.6)	坏部は坏底部から外傾しながら口縁部に至る。坏底部外面に稜を有する。脚部は欠損している。	坏部内・外面は摩滅し，ナデは不明瞭である。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	40% 1片 P427



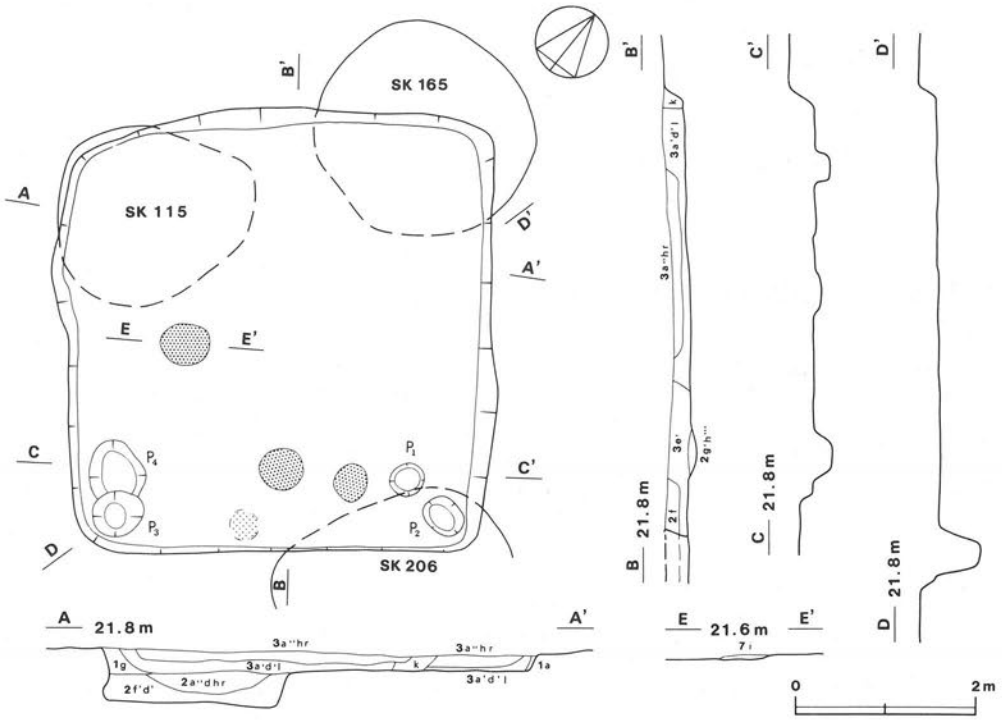
第259図　第39号住居跡出土土器実測図

第77号住居跡（第260図）

本跡は，当遺跡の南西側D2b$_9$を中心に確認され，第27号住居跡の12m北西側に存在している。本跡は西・北・東の各コーナー部に位置する縄文時代の第115・165・206号土坑を掘り込んでいる。

平面形は隅丸方形を呈し，長軸方向はN－37°－Wを指し，長軸5m・短軸4.7mである。壁は，西・北・東の各コーナー部とその周辺の壁を除いてロームで硬く，外傾しながら立ち上がり，壁高は18～30cmである。床面はロームや土坑の覆土を掘り込み，平坦で全体的に硬く締まっている。

炉跡は南西側に1基検出され，長径55cm・短径48cmの楕円形を呈し，床面を5cmほど掘り込んだ地床炉であり，炉内に焼土粒子・焼土小ブロックを微量含む暗褐色土が充満し，炉床は硬く焼けている。また，南東側にも2基検出され，1基はP$_1$の南西側に位置し，長径45cm・短径40cm，他の1基はP$_1$から1m南西側に位置し，長径50cm・短径45cmの円形を呈し，炉内は，それぞれ焼土粒子多量・ローム粒子少量・炭化粒子を微量含む暗褐色土等が充満し，炉床は硬く焼けている。ピットは4か所検出され，位置や規模からP$_2$・P$_3$が主柱穴と考えられ，コーナーぎわに位置し，規模は長径48～55cm・短径38～50cm・深さ45～70cmである。4か所以外にも北コーナー・西コーナーにピットが存在することが想定されるが土坑と重複し，確認できなかった。P$_1$は深さ18cmと



第260図　第77号住居跡実測図

浅く，P_2の支柱穴と考えられる。P_4はP_3と南東側を若干重複しているが，遺物が出ていることから貯蔵穴と考えられ，長径60cm・短径55cmの楕円形を呈し，深さは20cmである。壁はややゆるやかに外傾しながら立ち上り，底面は平坦である。

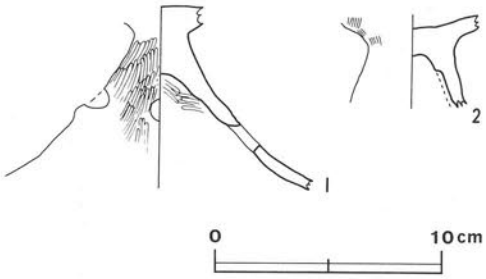
覆土は，一部攪乱を受けているものと考えられるが，A－A′のセクションを見ると，ほぼ2層から成り，上層はローム粒子中量・焼土粒子・炭化粒子を微量含む黒褐色土，下層はローム粒子・ローム大ブロック少量・炭化物を微量含む黒褐色土がほぼ自然堆積している。

遺物は，貯蔵穴の覆土中層から，高坏（第261図1）がつぶれた状態で出土し，そのほか，覆土中から小形壺と高坏及び台付甕の土器片等が11片出土している。

出土土器

第77号住居跡出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第261図 1	高　坏 五　領	B（8.2） E(14.2)	脚部は「ハ」の字状に大きく開き，裾部に至る。中位に6孔を有するものと考えられる。器受部は欠損している。	脚部外面は縦位のヘラ磨キ，内面は横位と縦位のハケ目が施されている。	砂粒 赤黒色 普通	30%　2片 P432
2	台付甕 五　領	B（4.0）	台部は「ハ」の字状を呈する。	胴部外面は縦位のハケ目が施されている。	砂粒 灰褐色 普通	10%　1片 P433



第261図　第77号住居跡出土土器実測図

2　周　　溝（第262図）

本跡は南東側の調査エリヤ境界付近のD2区に確認され，エリヤ外に主体部を有する方形周溝墓か方墳の一部と思われる。本跡は縄文時代の第73・74・75号住居跡と第182・198・274・275号土坑を掘り込んでいる。

周溝は，調査した部分から判断すると隅丸方形を呈するものと推定される。方台部のローム面は平坦である。現在，エリヤ外の畑の中に直径４ｍの方形状の軟らかい盛土が残存し，小祠が祀られている。畑との比高は0.8ｍである。調査した周溝は18ｍで，上幅３～3.5ｍ・下幅1.2ｍ・深さ約0.6～１ｍで，方形状に巡っている。北西側のセクションＡ－Ａ′の壁面は内側が急な角度で，外側が幾分ゆるやかに，同Ｂ－Ｂ′の壁面は内側がほぼ垂直に，外側が比較的急な角度で，同Ｃ－Ｃ′の壁面は方台部側がゆるやかに，外側はほぼ垂直にそれぞれ立ち上がり，壁面もそれぞれ硬い。底面は同Ｂ－Ｂ′付近の平坦な底面を除いて，やや丸味をおびた底面や周溝の外側に傾斜している底面である。

覆土は５～６層から成り，上層はローム粒子を少量含む黒褐色土，下層はローム中ブロックを微量含む暗褐色土が自然堆積している。

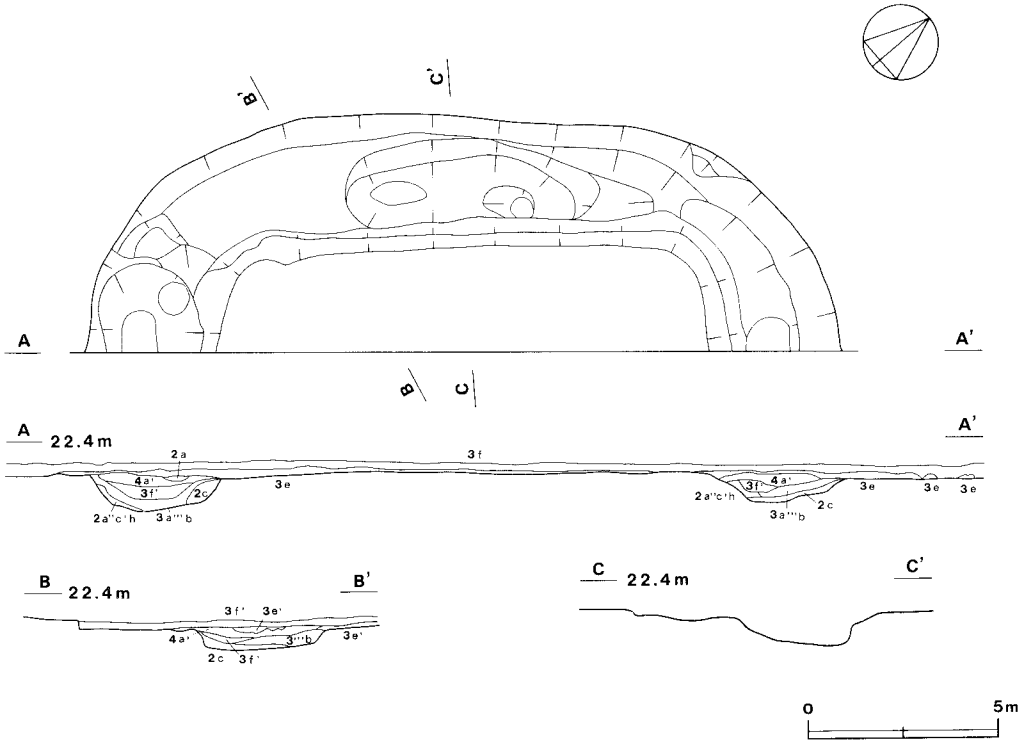
遺物は南西側の覆土下層から高坏の脚部（第263図２）と甕の口縁部の一部（第263図１）土師器片約100片や縄文式土器片約1000片，土器片錘１点が覆土中から出土している。

なお，周溝内の覆土下層から出土した高坏の脚部と甕の口縁部は，古墳時代前期に比定される土器である。また，古墳時代中期の鬼高期の住居跡が確認されず，覆土中から鬼高式の土器片が出土していないことから，この周溝は方形周溝墓に伴うものと考えるのが妥当かと思われる。

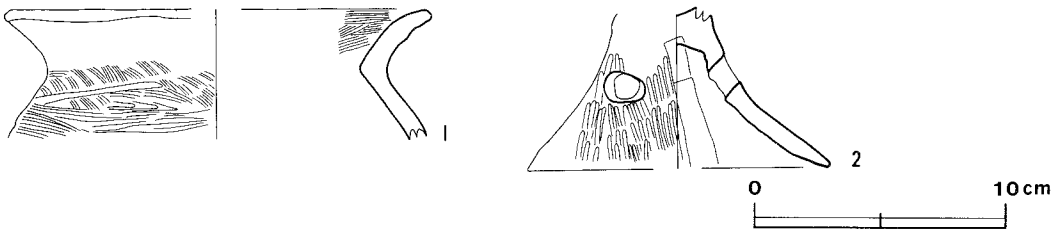
出土土器

周溝出土土器観察表

図版番号	器　種	法量(cm)	器　形　の　特　徴	手　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備　考
第263図 1	甕 五　領	A（17.2） B（5.2）	胴部から口縁部にかけての破片で，口縁部は外傾している。	口縁部内面は横位にハケ目を施し，外面はハケ目を横位のナデで消している。胴部内・外面は横位のハケ目が施されている。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 良好	10%　２片 P436
2	高　坏 五　領	B（6.7） E 12.2	脚部は「ハ」の字状にやや外反している。中位に３孔を有し坏部は欠損している。	脚部外面は縦位のていねいなヘラ磨き，内面は横位のナデが施されている。	砂粒・長石・スコリア にぶい橙色 良好	40%　１片 P435



第262図　周溝実測図



第263図　周溝出土土器実測図

3　土　製　品

(1)　勾　玉（第264図）

1は勾玉で，膨みを持った弧状を呈し，一方に孔を有している。やや雑な作りで，孔の所が破損している。長さ3.8cm，幅2.5cm，厚さ1.3cm，重量8.6gである。胎土は砂粒を含み，色調は橙色である。第37号住居跡からの出土である。

(2) ミニチュア土器（第264図）

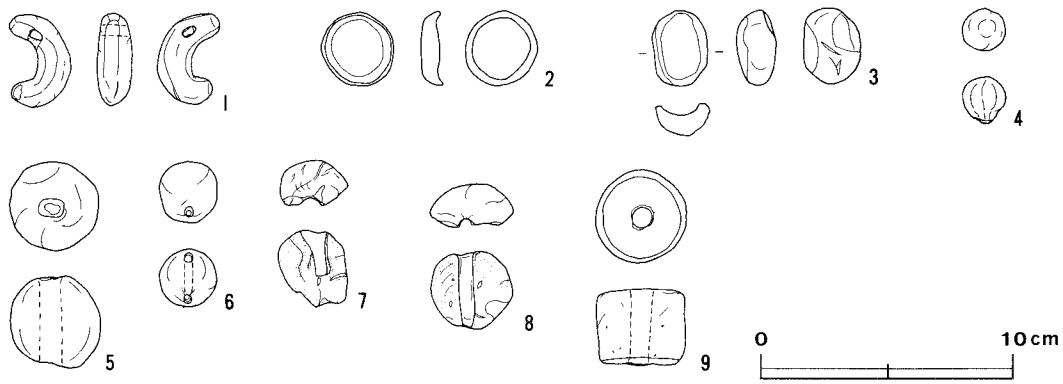
2は平底を呈し，口縁部はわずかに立ち上がっている。雑な作りである。胎土は砂粒を含み，色調は灰褐色である。第37号住居跡からの出土である。3は舟形を呈し，底部は丸味を帯び，内面は指が横に入る位の大きさである。胎土は砂粒を含み，色調は橙色である。第39号住居跡からの出土である。

(3) 球状土錘（第264図）

球状土錘は4個出土しているが，完形品は2個で，半分欠損しているものが2個である。5は大形で，長さ3.7cm・幅3.6cm・重さ40.4gで，ほぼ中央に0.8cmの貫通孔を有している。胎土は砂粒を含み，色調はにぶい橙色である。第6号住居跡からの出土である。6は小形で，長さ2.5cm・幅2.3cm・重さ11.2gで，いびつな形状を呈し，0.3cmの貫通孔が偏っている。胎土は砂粒を含み，色調はにぶい橙色である。第10号住居跡からの出土である。

(4) 管状土錘（第264図）

管状土錘は1個出土している。9は完形品で，ていねいな作りで，長さ・幅3.7cm・厚さ3.1cm・重さ50.5gで，中央に0.8cmの貫通孔を有している。胎土は砂粒を含み，色調は橙色である。第34号住居跡からの出土である。



第264図　土製品実測図(7)

第8表　土製品一覧表

図版番号	名　称	出土地点	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考	図版番号	名　称	出土地点	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考
1	勾　玉	SI 37	3.8	2.5	1.3	8.6	DP314	6	球状土錘	SI 10	2.5	2.3	2.1	11.2	DP328
2	ミニチュア土器	SI 37	3.3	2.9	0.9	6.9	DP316	7	球状土錘	SI 10	3.1	2.7	1.9	9.5	DP329 半分欠損
3	ミニチュア土器	SI 39	3.1	2.4	1.7	8.1	DP317	8	球状土錘	SI 29	3.2	3.3	1.8	13.3	DP332 半分欠損
4	つ ま み	SI 10	1.9	1.8	1.7	5.1	DP319	9	管状土錘	SI 34	3.7	3.7	3.1	50.5	DP320
5	球状土錘	SI 6	3.7	3.6	3.8	40.4	DP327								

第9表　住居跡一覧表

古墳時代（五領）

住居跡番号	位置	平面形態	規模（m）		長径方向	炉	柱穴	覆土	出土遺物	備考
			長径×短径	壁高						
第4号	B4f$_4$	隅丸長方形	6.5×5.7	0.4～0.45	N－68°－E	北側	4	N	甕，台付甕，土師器271片，土製円板1点，石器1点	
第5号	B4d$_3$	隅丸方形	6.9×6.7	0.4～0.5	N－47°－E	北側2か所	4	N	壺，長頸壺，甕，高坏，台付甕，土師器122片，赤彩土器8片，縄文土器片少量，石器2点	火災
第6号	B4i$_4$	隅丸方形	5.7×5.5	0.4～0.45	N－71°－E	北東側	4	N	土師器147片，土製品1点	
第8号	B3j$_0$	隅丸長方形ないし方形	7.0	0.5～0.7	不明	北西側2か所	2	N	甕，埦，壺，長頸壺，台付甕，土師器363片，縄文土器片少量，土器片錘1点	
第9号	B3g$_0$	方形ないし長方形	3.6	0.25～0.3	不明	－	－	A	土師器35片，赤彩壺胴部1片，縄文土器片少量	
第10号	B3f$_8$	隅丸長方形	4.4×4.0	0.35～0.4	N－52°－E	北側2か所	3	－	甕，高坏，装飾器台，壺，土師器165片，赤彩壺胴部2片，土製品3点，石器3点	
第11号	B4j$_3$	隅丸方形	3.2×3.15	0.2～0.4	N－65°－E	北側2か所	4	N	土師器17片	
第18号	B4h$_2$	隅丸方形	4.0×3.7	0.2～0.3	N－68°－E	北東側2か所	3	N	土師器86片，赤彩土器片6片，縄文土器片少量	
第19号	C3f$_0$	隅丸方形	4.8×4.7	0.4	N－35°－W	北側	5	N	甕，台付甕，土師器171片，土器片錘4点，石器2点	火災
第20号	D2i$_1$	隅丸方形	5.7×5.2	0.2	N－51°－E	北コーナー	4	－	甕，壺，土師器110片，赤彩弥生土器2片	
第21号	C3e$_8$	隅丸長方形	5.0	0.1	N－47°－W	西側	4	－	埦，土師器5片	
第24号	E1b$_0$	方形	4.2×3.8	0.2	N－38°－W	北西側	4	－	台付甕脚部，土師器8片	
第27号	D3f$_1$	隅丸方形	7.5×7.2	0.55～0.6	N－42°－E	南西側	4	N	高坏，甕，土師器62片，弥生式土器16片，縄文土器片多量，土器片錘3点，石器8点	火災
第29号	C3g$_1$	隅丸長方形	7.8×6.6	0.5～0.65	N－42°－E	北東側	4	NA	壺，甕，台付甕，甑，高坏，器台，土師器201片，土製品1点，土器片錘17点	
第31号	C3c$_5$	隅丸方形	6.5×6.0	0.3～0.4	N－45°－E	西側	2	N	土師器2片，縄文土器片少量，石器3点，有孔円板1点	火災
第32号	C3c$_5$	隅丸方形	6.4×5.8	0.3	N－49°－E	西コーナー2か所	1	N	壺，台付甕，器台，埦，土師器42片，土器片錘2点	
第33号	C3c$_5$	隅丸方形	4.6	0.35～0.4	N－51°－W	－	2	N	―――	
第34号	D3a$_7$	隅丸方形	5.6	0.45	N－52°－E	北西側	1	N	壺，甕，台付甕，高坏，装飾器台，土師器216片，土製品1点，土器片錘5点，石器2点	
第37号	C3f$_5$	隅丸方形	4.6×4.5	0.4	N－41°－W	東側	4	N	壺，甕，鉢，土師器93片，縄文土器片中量，土製品2点，円板1点，土器片錘4点，石器1点	
第39号	C2i$_7$	隅丸方形隅丸長方形	4.0	0.2～0.3	N－44°－E	－	2	A	壺，器台，高坏，土師器7片，縄文土器片少量，土製品1点，土器片錘2点	
第77号	D2b$_9$	隅丸方形	5.0×4.7	0.18～0.3	N－37°－W	南西側1か所南東側2か所	2	N	高坏，土師器11片	

第５節　その他の遺構と遺物

１　墓　　壙

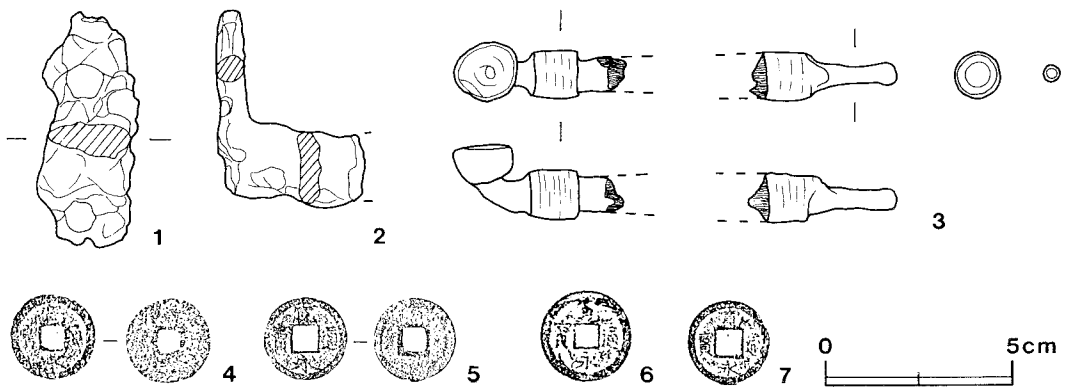
第５号土坑（土壙墓）（第141図）

本跡は，E2a$_1$区を中心に確認され，当遺跡の南西側に位置し，縄文時代中期の第70号住居跡の南東側を掘り込んでいる。当初，直径４ｍ程度の住居跡と思われたが，平面形は不整円形で，規模は長径４ｍ・短径3.8ｍ・深さ１ｍである。東壁はゆるやかに立ち上がり，底面はほぼ平坦で，硬いロームである。

覆土は，ほぼ５層から成り，上層はローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含む暗褐色土，下層はローム粒子を微量含む黒褐色土，焼土粒子・炭化粒子・炭化材を少量含む暗褐色土が堆積している。以上のことから，住居跡とは判断し難く性格不明の土坑とも考えられる。しかし，出土遺物からみると墓壙と考えられ，一応墓壙として取り扱った。墓壙とすると，規模から考えると複数の墓壙が存在したものと思われるが，覆土を掘り込んでしまい，１基ごとには確認できなかった。底面直上に焼土，炭化材等があることから火を燃やしたことが考えられ，疫病者が火葬にされたことも考えられる。

遺物は，陶磁器（第266図１），古銭（寛永通宝）（第265図４・５），鉄片（第265図１・２）が覆土中～下層から出土し，その他に縄文時代早期から中期の土器片845片が混入している。

なお，同様な遺構として第６号土坑（土壙墓）が本跡の１ｍ東側に存在している。



第265図　鉄製品実測図・古銭拓影図

第227号土坑（土壙墓）（第164図）

本跡は当遺跡の南西側D2f$_6$区に確認され，縄文時代中期の第194号土坑の北西側を掘り込んで

いる土壙墓である。平面形は円形を呈し，規模は直径1.1m・深さ0.3mである。壁は外傾しながら立ち上がり，底面は平坦で硬いロームで，一部硬く焼けている。覆土はローム粒子・焼土粒子を微量含む暗褐色土が堆積している。

人骨が北向きの斜位の状態で出土し，脊柱や骨盤付近にキセルの吸い口や古銭（寛永通宝）(第265図６・７他）４枚と木棺の一部が出土している。

２　溝

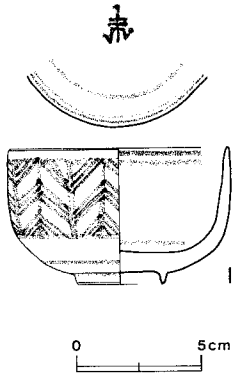
第１号溝（第267図）

本跡は，当遺跡の北東側Ａ４・Ａ５区に確認され，約1.5m南側に存在する第２号溝とほぼ並行している。本跡は調査エリヤの北東端を東西に走り，縄文時代中期の第15号住居跡の北側を掘り込み，更に，エリヤ外の畑へと続いている。

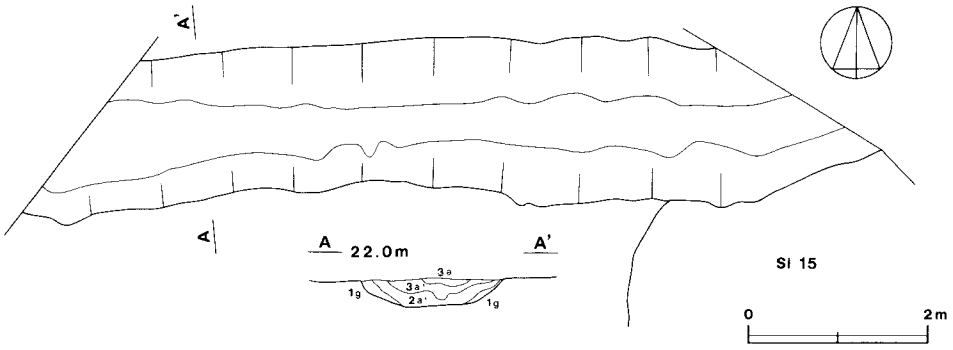
調査した溝の長さは7.2mで，主軸方向はN－90°－Eである。溝は上幅1.6～1.8m・下幅0.4～0.8m・深さ0.3～0.5mの規模を有している。壁はロームで硬く，断面形は皿状を呈し，底面は平坦で硬いロームである。西側の底面レベルは21.4m，東側の底面レベルは21.3mである。

覆土はほぼ４層から成り，上層はローム粒子を微量含む黒褐色土，下層はローム粒子を少量含む暗褐色土が自然堆積している。

遺物は縄文土器片が少量出土しているが，本跡には伴わない。



第266図 陶磁器実測図



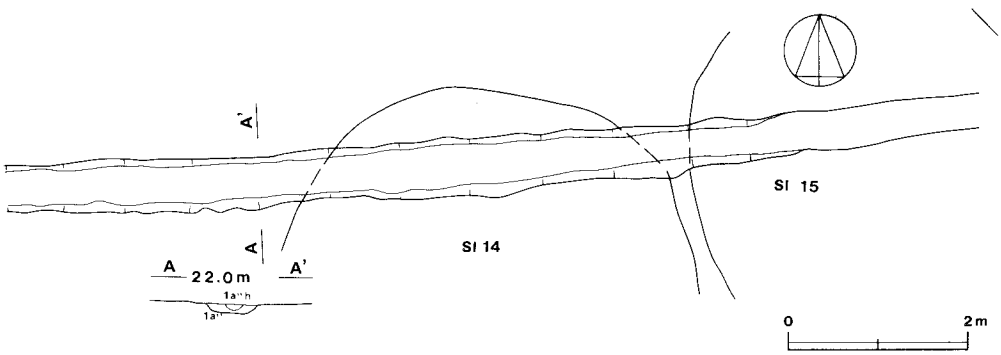
第267図　第１号溝実測図

第２号溝（第268図）

本跡は，第１号溝の約1.5m南側に位置し，第１号溝とほぼ並行している。調査エリヤの北東端を東西に走り，縄文時代中期の第14号住居跡の北側と第15号住居跡のほぼ中央部を掘り込み，

更に，エリヤ外の畑へと続いている。

調査した溝の長さは約11ｍで，主軸方向はＮ－87°－Ｅである。溝は上幅0.55～0.65m・下幅0.4～0.5ｍ・深さ0.15～0.2ｍの規模を有している。壁はロームで硬く，断面形はほぼ皿状を呈し，底面はほぼ平坦で硬いロームである。西側の底面レベルは21.6ｍ，東側の底面レベルは21.7ｍである。覆土は２層から成り，ローム粒子中量・焼土粒子を微量含む褐色土が堆積している。



第268図　第２号溝実測図

第３号溝（第269図）

本跡は，当遺跡の南西側Ｄ２・Ｄ３・Ｅ２区に確認され，古墳時代前期の第27号住居跡，縄文時代の土坑７基，方形周溝墓と思われる周溝部をそれぞれ掘り込んでいる。

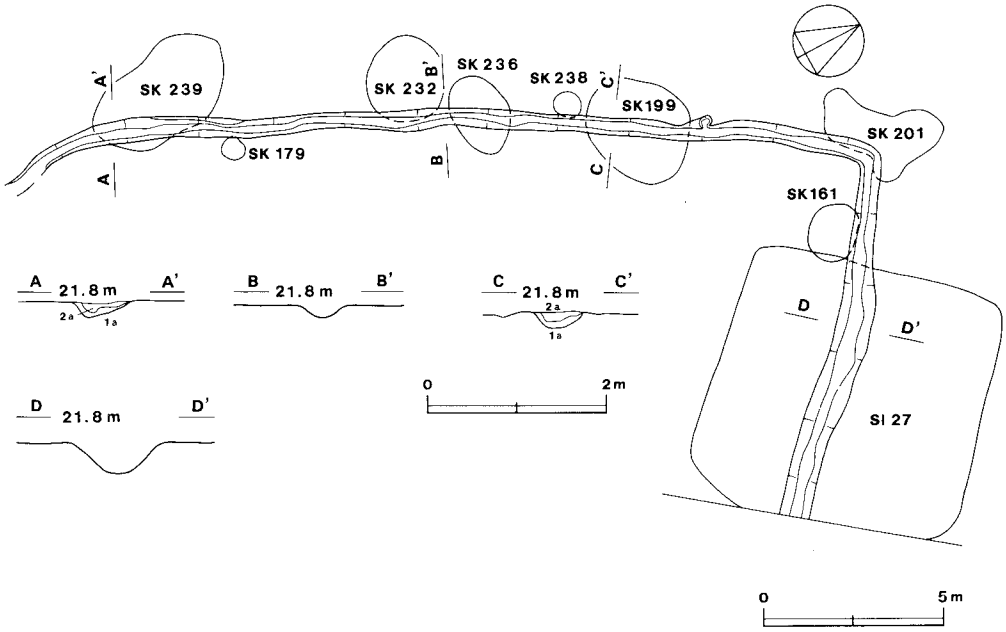
調査した溝の長さは41.5ｍであるが，溝はさらにエリヤ外へと続いている。南東側のE2a_8区からD2j_7区までの長さは８ｍを測り，主軸方向はＮ－29°－Ｗを指し，D2j_7区から第201号土坑までの長さは25ｍで，主軸方向はＮ－30°－Ｅである。第201号土坑付近から82°の急角度で屈曲し，南東方向に直線的に8.5ｍのびている。主軸方向はＮ－52°－Ｗを指している。溝は上幅0.5～１ｍ・下幅0.2～0.6ｍ・深さ0.15～0.35ｍの規模を有している。壁はロームで硬く，ゆるやかに立ち上がり，断面形はやや丸味をおびた皿状を呈している。Ａ－Ａ′の底面レベルは21.5ｍ，Ｄ－Ｄ′の底面レベルは21.2ｍである。

覆土は２層から成り，上層はローム粒子を微量含む暗褐色土，下層はローム粒子を微量含む褐色土が堆積している。

遺物は，縄文土器片が覆土中から少量出土しているが，本跡に伴う遺物は認められない。

第４号溝（第270図）

本跡は，当遺跡の中央部Ｃ４区に確認され，当遺跡を横切る町道と南東側調査エリヤ境界に挟まれた長さ約５ｍの溝である。

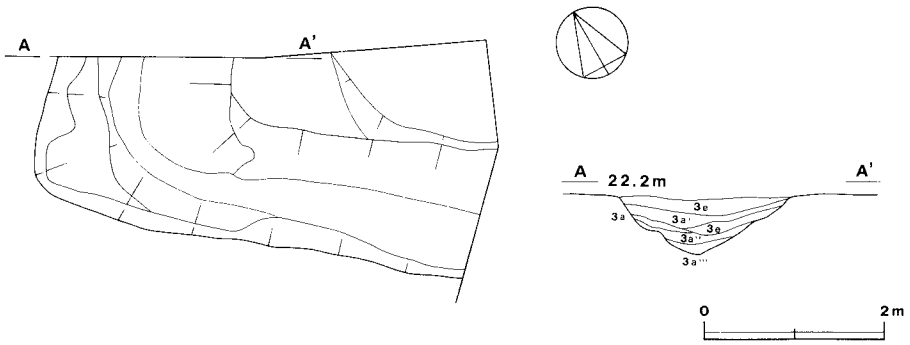


第269図　第３号溝実測図

主軸方向はN－49°－Wを指し，カギ状に１ｍ曲がり町道下に至る。規模は上幅1.6～２ｍ・下幅0.2～0.6ｍ・深さ0.3～0.6ｍである。壁はゆるやかに立ち上がり，底面は狭くやや丸味をおび，断面形はロート状を呈している。南東側のエリヤ境界付近の底面レベルは21.8ｍで，町道ぎわの底面レベルは21.4ｍである。

覆土は６層から成り，上層はローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含み，下層はローム粒子を多量含む黒褐色土が自然堆積している。

遺物は，縄文土器片や土師器片が少量出土しているが，本跡に伴う遺物かどうか判断できなかった。



第270図　第４号溝実測図

第5章　自然遺物

第1節　貝　　類

貝類は，住居跡7軒と土坑9基から出土している。貝層はヤマトシジミが主体である。他に少量のハイガイ・サルボウ・マガキ・アサリ・ハマグリ・シオフキ・オキシジミ・カワアイ等が出土している。なお，獣骨や獣の歯牙等も数点出土している。これらの貝層の調査については，3つの方法をとった。第1の方法は，4m四方の小調査区を50cm方眼の小区画に区画し，北側左端から右へ1，2，3……8，二段目北側左端へ戻って，また，右へ9・10・11……16というように分割した。小調査区が複数にまたがる場合は，各小調査区ごとの小区画名で取り上げ，分層は10cmとした。第2は，貝層を堆積順序にしたがって分層し，分層ごとに取り上げた。第3は，2分割法で取り上げた。収納後の取り扱いについては各層ごとに水洗し，乾燥重量の計測，土器片などの選別，フローテーション，拾い出し作業，貝・獣骨等の同定を実施した。なお，水洗分離においては，最初に4mmメッシュのふるいを使用し，次に1mmのメッシュのふるいを使用して微小な遺物の収集につとめた。同定等については，早稲田大学講師金子浩昌氏の指導と助言をいただいた。更に，波部忠重・小菅貞男共著標準原色図鑑全集『貝』(保育社　昭和54年）などの記載を参考にした。

貝層には，純貝層，混土貝層，混貝土層を呈するものがみられたが，大半は混土貝層ないしは混貝土層である。

貝種は，海産種，淡水産種，陸産種合わせて26種になるが，その殆どはヤマトシジミである。但し，第11号土坑の貝種の主体はマガキ・ハマグリである。

当遺跡から出土した貝種は，以下に示す斧足綱12種，腹足綱13種，掘足綱1種である。腹足綱の内3種は陸産種である。

斧足綱

ハイガイ	*Jegillarcagranosa (LINNE)*
サルボウ	*Scapharca subcrenata (LISCHKE)*
ベンケイガイ	*Glycymeris albolineata (DUNKER)*
マガキ	*Crassostre gigas (THUNBERG)*
マツカサガイ	*Unio japonensis (LEA)*
ヤマトシジミ	*Corbioulo japonica (PRLME)*
アサリ	*Japes (Amygdala) philippinarum (APAMS et REEVE)*
オキシジミ	*Cyclina sinensis (GMELIN)*
ハマグリ	*Meretrix lusoria (RÖDING)*

バカガイ	*Mactra chinensis (PHILIPPI)*
シオフキ	*Mactra veneriformis (REEVE)*
サビシラトリ	*Macoma contabulata (DESHAYES)*

腹足綱

ヒロクチカノコガイ	*Dostia violacea (GMELIN)*
オオタニシ	*Cipangopaludina japonica (v. MARTENS)*
カワニナ	*Semisulcospira bensoni (PHILIPPI)*
チリメンカワニナ	*S. b. trachea (WESTERLUND)*
カワアイ	*Cerithideopsilla djadjariensis (MARTIN)*
イボウミニナ	*Batillaria zonalis (BRUGUIÉRE)*
ウミニナ	*Batillaria mnltiformis (LISCHKE)*
アカニシ	*Rapara thomasiana CROSSE*
ムギガイ	*Mitrella bicincta (GOVLD)*
アラムシロ	*Hinia festiva (POWYS)*

腹足綱一陸産種

ナミコギセルガイ	*Euphaedusa tau (BÖTTGER)*
オカチョウジガイ	*Allopeas kyotoense (RILSBRY et HIRASE)*
ヒダリマキマイマイ	*Euhadra quaesita (DESHAYES)*

掘足綱

ツノガイ	*Antalis weinkauff (DUNKER)*

第13号住居跡覆土内貝層（第10表）

本跡の調査は貝層を10cmの分層で取り上げた。第１～３層で，ヤマトシジミのみである。その重量は188.4kgである。ヤマトシジミのみの貝層は，調査した貝塚のなかでは本跡だけである。

第15号住居跡覆土内貝層（第11表）

本跡は第13号住居跡覆土内貝層と同じ方法で取り上げた。第１～６層で，ヤマトシジミを主体とした貝層である。ヤマトシジミ以外では計測不能のハマグリ３点，チリメンカワニナ８点，及びカワアイ７点である。ヤマトシジミの総重量は300kgである。

第45号住居跡覆土内貝層

本跡の調査は50cmのメッシュを組み，10cmの分層で貝を取り上げた。貝はヤマトシジミが主体

である。ヤマトシジミを任意に１kgを選別した結果970点で，大きい貝は2.9ｇ，中位の貝は１ｇ，小さい貝は0.5ｇであった。

本跡の１層はヤマトシジミが圧倒的に多く11.9kg，最大は左向きのもので，殻長3.7cm・殻高3.3cm・重さ3.7ｇ，最少のものは右向きで，殻長１cm・殻高１cm・重さ0.1ｇである。その他にカワアイが５点出土し，２点計測でき，殻高2.7～3.2cmで，総重量は3.8ｇである。ハマグリは破砕され，重さ5.9ｇである。１層の重量は11.9kgである。

２層はヤマトシジミが47.3kgであり，非常に多量である。その中で，最大は左向きのもので，殻長3.4cm・殻高3.1cm・重さ3.3ｇ，最小は左向きのもので，殻長0.9cm・殻高0.9cm・重さ0.2ｇである。その他ヒロクチカノコガイが４点出土し，１点計測でき殻長1.1cm・殻高1.7cm・重さ1.2ｇである。カワアイは２点出土し，１点計測でき，殻高2.2cm・重さ2.1ｇである。ハマグリは１点出土し，殻長4.9cm・殻高4.1cm・重さ8.8ｇである。マガキとマツカサガイは破砕貝である。２層の重量は47.3kgである。

３層はヤマトシジミが25.7kgである。その中で，最大は左向きのもので，殻長3.2cm・殻高3.9cm・重さ4.2ｇ，最小のものは右向きで殻長1.3cm・殻高1.2cm・重さ0.2ｇである。その他にヒロクチカノコガイが23点出土し，重量25.7ｇである。そのうち１点計測でき，殻長1.2cm・殻高1.7cm・重さ1.3ｇである。計測はできないが，チリメンカワニナ７点，マガキ４点，カワアイ６点，ハイガイ２点，カワニナ１点，微小のムギガイ２点，オカチョウジガイ11点，キセルガイ１点，ヒダリマキマイマイ16点，及び破砕されたハマグリが出土している。３層の重量は25.7kgである。

４層はヤマトシジミが13.4kgである。最大の貝は殻長右向き3.8cm・殻高3.6cm・重さ4.5ｇ，最小は左向きのもので，殻長1.2cm・殻高1.1cm・重さ0.1ｇである。その他にヒロクチカノコガイ３点出土し，重量2.6ｇである。そのうち１点は計測でき，殻高1.6cm・重さ0.9ｇである。計測できないがマガキ３点，カワアイ・チリメンカワニナ・ムギガイ各１点，及び破砕されたアサリとハイガイが出土している。４層の重量は13.5kgである。ヤマトシジミの総重量は98.3kgである。ヤマトシジミ以外の貝の合計はわずかに0.1kgである。

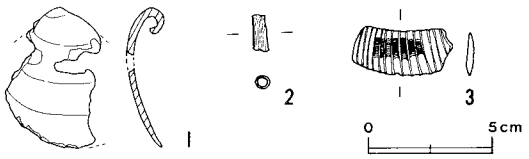
第55号住居跡覆土内貝層（第12表）

本跡は貝を分層ごとに取り上げた。第１～30層になり，ヤマトシジミが主体である。ヤマトシジミ以外では計測不能のカワアイ・ヒロクチカノコ・ナミコギセル・ヒダリマキマイマイが微量出土している。これらは表にして掲載した。

第11号土坑覆土内貝層（第13表）

本跡はヤマトシジミを主体とした貝層で，10cmの分層で８層に分けて貝を取り上げた。ヤマト

シジミの総重量は，125.2kgと膨大な数量である。その他，ハイガイ・サルボウ・マガキ・マツカサガイ・アサリ・ハマグリ・サビシラトリガイ・ヒロクチカノコガイ・オオタニシ・チリメンカワニナ・カワアイ・イボウミニナ・アカニシ・ムギガイ・アラムシロ・キセルガイ・オカチョウジガイ・ヒダリマキマイマイ・ツノガイが１～７層にごく少量438.7ｇ出土している。最下層の８層からはヤマトシジミ以外は検出されない。また，ヤマトシジミ以外では１～７層にヒロクチカノコガイとカワアイが多少数量にばらつきがあるが出土している。更に，２層から直径0.5cm，長さ１cmのツノガイ（第271図２）の小片と３層から火を受けているハマグリの貝刃（第271図１）の一部が出土していることは注目される。



第271図　第11号土坑出土貝実測図

第30号土坑覆土内貝層（第14表）

本跡は貝層を分層発掘の方法で取り上げた。第１～13層で，ヤマトシジミ主体の貝層である。ヤマトシジミ以外では計測不能のヒロクチカノコガイ８点，カワアイ30点である。ヤマトシジミの総重量は5.0kgである。

第111号土坑覆土内貝層

本跡の中層からまとまって出土した貝類は，７種を数え，その殆どが一部ないし部分的に破砕され，完存品は少ない。マガキは12点（右向き５・左向き７）で，計測できる完存品はない。重量は破砕貝を含めて143.4ｇである。ハマグリは20点（右向き７・左向き13）で，内３点が計測できた。それぞれの計測値は右向きで殻長3.3cm～４cm・殻高2.7～3.4cm・重さ1.8～4.2ｇ・左向きで殻長3.1cm・殻高2.6cm・重さ2.1ｇである。重量は破砕貝99.7ｇを含めて107.8ｇである。ヤマトシジミは18点（右向き12・左向き６）で，３点が計測できた。右向きで殻長2.2～2.3cm・殻高2.2～2.3cm・重さ1.2～1.5ｇ，左向きで殻長2.6cm・殻高2.5cm・重さ２ｇである。重量は破砕貝30.9ｇを含めて35.6ｇである。ハイガイは14点（右向き７・左向き７）で，２点が計測でき，いずれも右向きで殻長2.2～2.6cm・殻高1.8～2.1cm・重さ1.2～1.6ｇである。重量は破砕貝29.9ｇを含めて32.7ｇである。アサリは右向きのもの１点で，計測可能な完存品はない。破砕貝の重さは5.5ｇである。オキシジミも右向きのもの１点で，計測できる完存品はない。破砕貝の重さは5.4ｇである。シオフキは破砕貝のみで，重さは3.9ｇである。これらの貝の総重量は約0.4kgである。

遺構外出土貝（第271図）

当遺跡では貝層以外に，B3f_9区から長さ４cm・幅1.7cm・厚さ0.3cmのベンケイガイの貝輪（第271図３）の一部分が出土している。また，B4j_1区からベンケイガイの小貝片２点が出土している。な

ぜ貝層以外のか所からベンケイガイが出土したか不明であるが，B4j_1区出土のベンケイガイはB4j_1区に縄文時代前期の住居跡が存在していることから，その住居跡に伴うものと考えられる。B3f_9区出土のベンケイガイの貝輪が出土した付近には貝塚は検出されず，住居跡・土坑等も存在せず単独の出土として取り扱った。

第2節　獣　　骨

獣骨及び歯牙が縄文時代中期の加曽利E式の第15・45号住居跡と第11号土坑の貝層中からそれぞれ数点出土している。

偶蹄目　*Artiodactyla*

イノシシ科　*Suidae*

イノシシ　*Sus scrofa*

シカ科　*Cervidae*

ニホンジカ　*Cerous nippon*

PL38の1・2・3・4は第45号住居跡第3層のヤマトシジミを主とした貝層中から出土した獣骨と歯牙である。1はイノシシの下顎骨片と切歯で，かなりもろくなっている。2・3・4はシカの上顎骨片右側と上顎歯で，臼歯は月状歯になり，ややもろくなっている。また，同所からイノシシの上顎切歯と黒くこげている上顎骨片，非常にもろくなっているシカの未萠出の歯も出土している。第15号住居跡と第11号土坑のヤマトシジミの貝層中からシカかイノシシと思われる小骨片2点が出土し，第15号住居跡出土の骨は焼けている。

第10表　第13号住居跡覆土内貝層貝組成表

層	種 / 規模	ヤマトシジミ 最大殻長(cm) 最大殻高(cm)	ヤマトシジミ 最小殻長(cm) 最小殻高(cm)	ヤマトシジミ 重量(g)	ハイガイ	サルボウ	ベンケイ	マガキ	マツカサ	アサリ	オキシジミ	ハマグリ	バカガイ	シオフキ	サピシラトリ	ヒロクチカノコ	オオタニシ	カワニナ	チリメンカワニナ	カワアイ	イボウミニナ	ウミニナ	アカニシ	ムギガイ	アラムシロ	キセルガイ	オカチョウジガイ	ヒダリマキマイマイ	ツノガイ
					点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)
1		右 4.0 3.8	右 0.8 0.7	31,335.2																									
2		右 4.3 3.9	左 1.0 0.9	102,319.9																									
3		右 3.7 3.3	左 1.1 0.9	54,741.2																									
計				188,396.3																									

第11表　第15号住居跡覆土内貝層貝組成表

層	種 / 規模	ヤマトシジミ 最大殻長(cm) 最大殻高(cm)	ヤマトシジミ 最小殻長(cm) 最小殻高(cm)	ヤマトシジミ 重量(g)	ハイガイ	サルボウ	ベンケイ	マガキ	マツカサ	アサリ	オキシジミ	ハマグリ	バカガイ	シオフキ	サピシラトリ	ヒロクチカノコ	オオタニシ	カワニナ	チリメンカワニナ	カワアイ	イボウミニナ	ウミニナ	アカニシ	ムギガイ	アラムシロ	キセルガイ	オカチョウジガイ	ヒダリマキマイマイ	ツノガイ
					点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)
1		右 4.1 3.7	右 1.5 1.3	26,668.3																									
2		左 3.7 3.4	右 1.4 1.3	134,457.6								2 —																	
3		右 4.6 4.2	右 1.2 1.1	96,921.4															4 —	3 —									
4		右 4.0 3.7	左 1.3 1.2	34,986.0															4 —	4 —									
5		右 4.4 3.8	左 1.2 1.1	5,037.1								1 —																	
6		右 4.3 3.6	右 1.5 1.4	1,936.7																									
計				300,007.1								3 —							8 —	7 —									

註　—— 破砕貝
　　—— 計測不能

第12表　第55号住居跡覆土内貝層貝組成表

層	種 / 規模	ヤマトシジミ 最大殻長(cm) 最大殻高(cm)	ヤマトシジミ 最小殻長(cm) 最小殻高(cm)	ヤマトシジミ 重量(g)	マガキ 点 殻高(cm)	ハマグリ 点 殻高(cm)	ヒロクチカノコガイ 点 殻高(cm)	カワアイ 点 殻高(cm)	ヒダリマキマイマイ 点 殻高(cm)	ナミコキセル 点 殻高(cm)
1		右向き 3.0 2.8	右向き 1.1 1.1	676.2						
2		右向き 3.1 2.8	右向き 1.2 1.1	1,179.6						
3		左向き 3.8 3.5	左向き 1.1 1.0	1,839.9						
4		左向き 2.6 2.4	右向き 1.2 1.1	327.5						
5		右向き 3.8 3.5	右向き 1.2 1.1	1,486.0						
6		左向き 3.5 3.1	右向き 1.1 1.1	679.2						
7		左向き 3.0 2.7	右向き 1.0 0.9	1,228.6						
8		右向き 2.8 2.4	左向き 1.0 0.9	1,075.1						
9		右向き 3.3 3.0	左向き 0.8 0.8	2,817.3				2 —		
10		左向き 3.5 3.3	左向き 0.9 0.8	1,184.7				1 —		
11		右向き 3.9 3.3	右向き 1.1 1.1	142.3						
12		左向き 3.2 3.1	右向き 0.9 0.9	467.3						
13		左向き 3.1 2.9	左向き 1.1 1.0	1,781.3				2 —		
14		右向き 3.0 2.8	右向き 1.1 1.0	385.1				— —		
15		左向き 3.8 3.6	右向き 1.1 1.0	746.0						
16		右向き 3.0 2.7	左向き 1.2 1.2	2,379.0						
17		右向き 3.1 3.0	右向き 1.3 1.1	1,932.3			1 —	— —	1 —	— —
18		左向き 2.9 2.7	右向き 1.3 1.1	2,428.0						
19		右向き 3.4 3.1	右向き 1.1 1.0	2,732.5				4 —		
20		右向き 3.2 3.1	右向き 1.2 1.1	1,682.0				1 —		
21		左向き 3.5 3.1	右向き 1.1 1.0	1,782.8				— —		
22		右向き 3.2 2.9	左向き 1.0 0.9	780.3				— —		
23		右向き 3.4 3.2	左向き 1.1 0.9	1,131.3						
24		左向き 2.7 2.4	右向き 1.4 1.3	295.0						
25		右向き 2.7 2.4	左向き 1.3 1.2	243.7	— —					
26		左向き 2.6 2.4	右向き 1.1 1.0	175.9		— —				
27		右向き 3.2 2.8	右向き 1.2 1.1	327.3						
28		左向き 2.4 2.3	右向き 1.4 1.3	83.4						
29		右向き 2.5 2.3	右向き 1.6 1.5	74.4						
30		右向き 1.9 1.8	右向き 1.4 1.3	38.9						
計				32,142.7			1 —	10 —	1 —	

層	種 / 規模	ナミコキセル 点 殻高(cm)
17		— —
18		
19		
20		
21		
22		
23		
24		
25		
26		
27		
28		
29		
30		
計		

第13表　第11号土坑覆土内貝層貝組成表

層	種 / 規模	ヤマトシジミ 最大殻長(cm) 最大殻高(cm)	ヤマトシジミ 最小殻長(cm) 最小殻高(cm)	ヤマトシジミ 重量(g)	ハイガイ	サルボウ	ベンケイ	マガキ	マツカサ	アサリ	オキシジミ	ハマグリ	バカガイ	シオフキ	サビシラトリ	ヒロクチカノコ	オオタニシ	カワニナ	チリメンカワニナ	カワアイ	イボウミニナ	ウミニナ	アカニシ	ムギガイ	アラムシロ	キセルガイ	オカチョウジガイ	ヒダリマキマイマイ	ツノガイ
					点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)
1	右	3.5 3.4	1.3 1.3	19,692.0								1 —				1 —				32 —			—				2 —	36 —	
2	左	3.8 3.4	1.0 0.8	21,348.7		1 —			— —							10 —	1 —		1 —	180 —							2 —		1 —
3	左	4.0 3.3	1.0 0.9	17,456.2				1 —		— —		— —			—	14 —	1 —			26 —	— —		— —	2 —			5 —	3 —	
4	右	3.9 3.5	1.0 0.8	33,873.9	— —			— —				1 —				23 —				14 —				1 —	1 —	17 —	6 —	4 —	
5	右	3.5 3.0	1.2 1.0	14,355.1	— —			— —							—	14 —				4 —						6 —	11 —	7 —	
6	左	3.5 3.2	1.1 1.0	11,744.9								— —				3 —				2 —	—					1 —	12 —	4 —	
7	左	3.5 3.4	1.1 1.0	4,637.0	1 —			— —								1 —				1 —						2 —		4 —	
8	右	3.8 3.3	1.1 1.0	2,397.0																									
計				125,204.8	1 —	1 —		1 —				2 —				66 —	2 —		1 —	259 —				3 —	1 —	26 —	38 —	58 —	1 —

第14表　第30号土坑覆土内貝層貝組成表

層	種 / 規模	ヤマトシジミ 最大殻長(cm) 最大殻高(cm)	ヤマトシジミ 最小殻長(cm) 最小殻高(cm)	ヤマトシジミ 重量(g)	ハイガイ	サルボウ	ベンケイ	マガキ	マツカサ	アサリ	オキシジミ	ハマグリ	バカガイ	シオフキ	サビシラトリ	ヒロクチカノコ	オオタニシ	カワニナ	チリメンカワニナ	カワアイ	イボウミニナ	ウミニナ	アカニシ	ムギガイ	アラムシロ	キセルガイ	オカチョウ	ヒダリ	ツノガイ
					点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)	点 殻高(cm)
1	左	2.7 2.4	1.1 1.0	149.4																1 —									
2	左	2.8 2.5	1.3 1.1	85.8																									
3	左	3.0 2.6	1.1 1.0	39.4																									
4		— —	— —	6.8																									
5	左	3.3 3.2	0.9 0.9	306.2																1 —									
6	右	3.2 2.9	1.1 1.0	402.6																7 —									
7	左	3.2 2.9	1.1 0.9	777.5																5 —									
8	左	3.4 3.0	0.9 0.8	607.7																3 —									
9	右	3.0 2.8	1.0 0.9	302.6																									
10	左	3.0 2.8	0.9 0.8	879.1																5 —									
11	右	3.2 3.0	1.1 1.0	878.1												1 —				3 —									
12	左	2.7 2.5	1.1 1.0	116.7												1 —				3 —									
13	左	3.0 2.6	1.0 0.9	447.0												6 —				2 —									
計				4,999.5												8 —				30 —									

註　破碎貝
　　計測不能

第6章　ま　と　め

当遺跡において検出された遺構は，竪穴住居跡77軒，土坑302基，方形周溝墓１基，溝４条である。竪穴住居跡77軒の内訳は，縄文時代前期黒浜期に比定されるもの８軒，同中期阿玉台期12軒，同中期加曽利Ｅ期30軒，弥生時代後期６軒，古墳時代前期五領期21軒である。なお，土坑302基については，炉穴６基，フラスコ状土坑９基，埋甕１基，墓壙３基が含まれている。

遺物は，縄文時代早期の井草式・茅山式，同前期の黒浜式・大木2b式・浮島式・諸磯式・興津式・同中期の阿玉台Ⅰb～Ⅲ式・大木7a式・大木7b式・勝坂式・中峠式・加曽利ＥⅠ～Ⅳ式・大木8a式・曽利式の土器及び土器片が出土し，弥生時代の遺物としては中期女方式・後期前野町式等，古墳時代では前期五領式の土器が出土している。その他，これまでも触れてきたように，貝類，獣骨，石器，石製品，土製品，及び陶磁器等が出土している。

以上のことから，当遺跡は，断続的ではあるが縄文時代から近世に至るまで生活が営まれた遺跡で，複合遺跡の一つといえよう。

なお，調査の概要と各遺構・遺物等については前述したので，ここでは調査によって明らかとなった事実と問題点について若干述べることにする。

第１節　遺　　構

１　竪穴住居跡について

(1)　縄文時代前期（黒浜期）

縄文時代前期黒浜期に比定される住居跡は，第３・７・12・16・41・49・54・76号住居跡の８軒である。これらの住居跡の分布状況を見ると，遺跡北東側に３軒（第３・12・16号住居跡），ほぼ中央部に２軒（第７・49号住居跡），やや南西側に３軒（第41・54・76号住居跡）となっている。

次に，規模別に見ると，不整円形を含む円形ないし楕円形を呈する住居跡の中では第３号住居跡が長径6.8ｍと当遺跡において最大規模を有し，次いで第54号住居跡の6.0ｍ，第12号住居跡の5.2ｍ，以下，第16・19・76号住居跡は長径3.8～4.6ｍとなっている。また，１軒は推定となるが２軒の隅丸長方形を呈する住居跡では，第41号住居跡が長軸7.0ｍ，第７号住居跡が6.0ｍと，それぞれ規模に差異が認められる。したがって，当遺跡における該期住居跡の規模のあり方については，斉一性がないといえる。

長径及び長軸方向については，北東方向を指す第16号住居跡を除き，他は北西方向を指してお

り，これらはN－24°～56°－Wの範囲に分布している。

平面形については，円形ないし不整円形が５軒と最も多く，楕円形を呈するものは第54号住居跡のみである。また，前述のように第７・41号住居跡の２軒が隅丸長方形を呈している。黒浜期における住居跡の平面プランのあり方については，宮本長二郎氏の論文の中で，「黒浜期の住居跡の平面形は円形・不整形が少なく，方形が主流となる。」[1]と論じているが，当遺跡においては，方形を基調とした住居跡は，わずかに２軒である。

主柱穴については，各住居跡とも位置や柱穴数が異なり，共通性に乏しい。ただ，隅丸長方形を呈する第41号住居跡を除き，他の住居跡においては柱穴の深さが浅いという点で共通性がわずかに認められる。

炉跡は，検出されなかった第49号住居跡を除き中央ないしやや北寄りに位置しているが，当遺跡における加曽利Ｅ期のそれに比べ，炉覆土が少なく，焼土の量も少ない。また，炉の周辺及びその他のいずれの床面においても踏み固められた状態を示す遺構は認められなかった。

以上，当遺跡における該期住居跡の特徴を概述したが，近辺遺跡においてどのような状況となっているのかを表にまとめたのが第15表である。

第15表　近辺遺跡における黒浜期住居跡の形状・規模等一覧表

所在地		遺跡名 ＼ 形状・規模等	検出軒数	形状 平面の形状 (隅丸)方形	(隅丸)長方形	不整(長)方形	(不整)円形	(不整)楕円形	不定形	規模 長軸または長径の長さ 4m未満	4m以上5m未満	5m以上6m未満	6m以上	炉 炉有無 あり	なし	柱穴 規則性 あり	なし
茨城県	水海道市	大生郷[2]	11	3	6	・	・	2	・	1	1	5	4	・	11	3	5
	豊里町	大境[3]	1	・	・	・	・	1	・	・	1	・	・	1	・	1	・
	石岡市	外山[4]	3	1	・	・	・	2	・	2	1	・	・	2	1	・	3
	石岡市	新池台[5]	7	1	4	・	・	2	・	・	・	5	2	・	7	5	2
	勝田市	遠原[6]	4	2	・	・	・	2	・	3	1	・	・	3	1	1	2
	古河市	原町西[7]	2	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	2	・	・	2
	谷田部町	境松	8	・	2	・	5	1	・	1	2	1	4	7	1	3	5
千葉県	柏市	花前Ⅰ[8]	8	2	1	・	2	1	2	1	3	2	2	5	3	3	5
	柏市	鴻ノ巣[9]	21	5	2	12	・	・	2	2	12	4	2	20	1	10	10
合計			65	14	15	12	7	11	4	10	21	17	14	40	25	26	34

※１　原町西遺跡は平面形状・規模は不明である。
※２　柱穴の規則性の欄は柱穴がない住居跡があるので軒数と数字が一致しない。
※３　鴻ノ巣遺跡は長径・短径不明の住居跡１軒ある。また，境松遺跡は長径・短径の推定値もある。

茨城県ないし周辺においては，第15表の通り方形を基調とする住居跡が41軒であるのに対し，円形を基調とする住居跡は18軒と少なく，方形を基調とするものが多い。特に大生郷，新池台，鴻ノ巣遺跡では，圧倒的に方形を基調とするものが多い。しかし，当遺跡については円形を基調とするものが多い。規模については，長軸または長径の長さが４～６ｍの範囲に属するものが多

く，当遺跡の住居規模とほぼ一致している。炉については，有するもの40軒，有しないもの25軒で，有する例が非常に多い。しかし，大生郷，新池台遺跡では全く炉をもつ住居跡が見られず，地域的な差が認められると同時に該期においては同一遺跡内においても有するものと有しないものが存在したようである。柱穴の位置からみた規則性については，その有無がそれぞれ約半数に分かれるが，やや規則性のない場合が多い。しかし，比較的規則性のある住居跡は新池台や鴻ノ巣遺跡に多く，また方形状の住居跡に多い。

(2) 縄文時代中期（阿玉台期）

縄文時代中期阿玉台期に比定される住居跡は，第26・44・50～53・59～61・63・64・66号住居跡の12軒である。これらの住居跡の分布状況は，遺跡中央部と中央からやや西側に11軒（第44・50～53・59～61・63・64・66号住居跡），南西端に1軒（第26号住居跡）となっている。

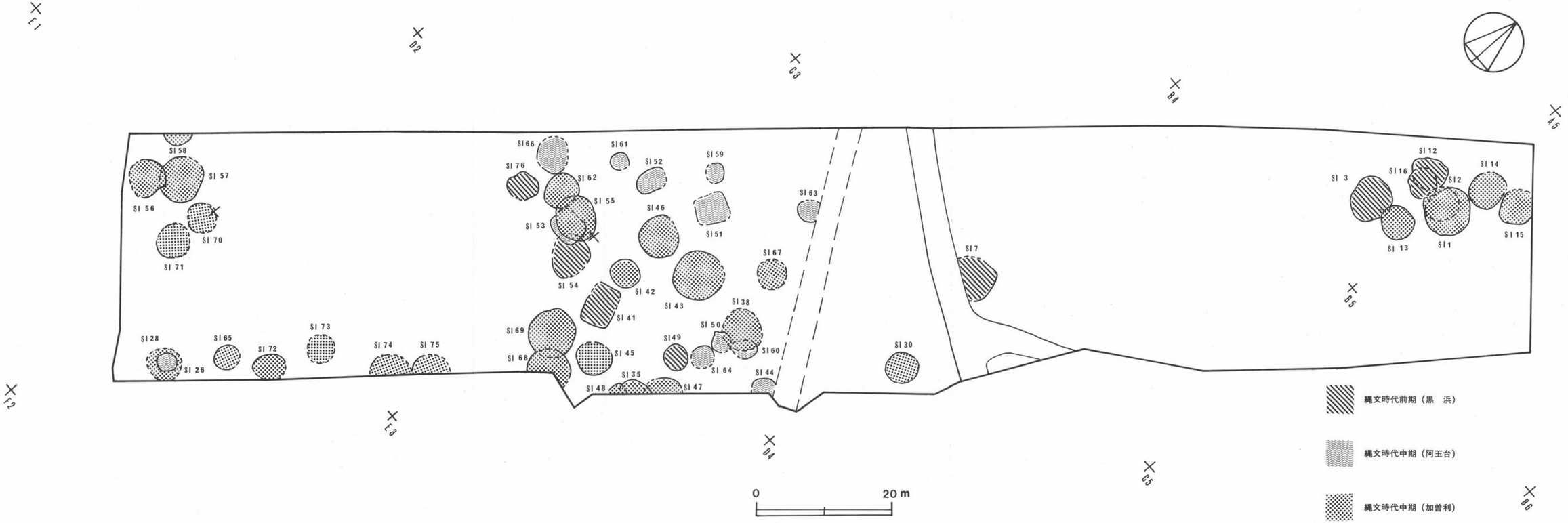
これらの住居跡の規模・形状・方向，及び規模別等の状況は第16表のとおりである。

第16表　阿玉台期住居跡規模等一覧表

住居跡＼項目	形状	規模(m)	長軸(径)方向	形状		規模（長軸または長径）			時期	備考	
				円形または楕円形	隅丸方形または隅丸長方形	4m未満	4m以上5m未満	5m以上		炉の有無	柱穴
第26号	楕円形	3×2.5	N−42°−E	○		○			阿玉台II	無	2
44	(不整円形ないし楕円形)	最大径 3.6	−	○		○			阿玉台II	−	−
50	円形	3.8×2.8	N−27°−W	○		○			阿玉台Ib~II	無	1
51	(不整隅丸方形)	(4.8×4.5)	N−26°−E		○		○		阿玉台II	無	4
52	隅丸長方形	4.6×3.7	N−15°−E		○		○		阿玉台II	無	5
53	隅丸長方形	4.9×4	N−90°−E		○		○		阿玉台II	無	3
59	(楕円形)	最大径 3	−	○		○			阿玉台II	−	1
60	(長楕円形)	(4×2.8)	N−37°−E	○			○		阿玉台II	無	−
61	(長楕円形)	2.8×2.4	N−33°−E	○		○			阿玉台Ib~II	無	3
63	(円形ないし楕円形)	最大径 3.4	−	○		○			阿玉台Ib~II	−	1
64	(ほぼ円形)	最大径 3.2	−	○		○			阿玉台II	−	1
66	(楕円形)	(5.5×4.4)	N−40°−W	○				○	阿玉台Ib~II	無	6
計				9軒	3軒	7軒	4軒	1軒			

上表でも明らかのように，当遺跡における阿玉台期の住居跡においては，第66号住居跡の長径5.5mが最大規模で，4m未満が7軒と，比較的小型の住居跡が多いといえよう。また，形状についても円形または楕円形が9軒と最も多く，方形状を呈する住居跡は少ない。長径(軸)方向については，第50・66号住居跡を除き，東または北東方向を指し，中でもN−15°～42°−Eに属するものが5軒と最も多い。

さて，阿玉台期における竪穴住居跡の形態分類については，平面形と柱穴の配置という二つの基本的要素に炉の有無と形態を加味して，鈴木美治氏が詳細な分類[10]を試みられているので，それ



第272図　縄文時代前期・中期住居跡配置図

をもとに当遺跡における該期住居跡をあてはめてみたい。

○　Ａ－１－ａ型の住居跡

円形または楕円形を基調とし，床面のほぼ中央部に(深い)柱穴をもつ炉のない住居跡で，第26・61号住居跡の２軒が該当する。第61号住居跡が阿玉台Ⅰb～Ⅱ式，第26号住居跡がⅡ式に比定される遺物が出土し，鈴木氏の報告事例と合致する。

○Ｂ－３－ａ型の住居跡

隅丸を含めた方形及び長方形を基調とし，柱穴が規則的に配列されている炉のない住居跡で，第51・52号住居跡の２軒が該当する。いずれの住居跡からも阿玉台Ⅱ式に比定される土器が出土しており，報告事列の同Ⅱ～Ⅲ式の範囲に属し，合致する。

○Ａ－４－ａ型の住居跡

円形または楕円形を基調とし，柱穴が不規則な炉をもたない住居跡で，第66号住居跡の１軒が該当する。本跡からは阿玉台Ⅱ式に比定される土器が出土しており，報告事例と合致している。

○Ｂ－４－ａ型の住居跡

形状は，前述したＢ－３－ａ型と同じ基調を呈し，柱穴が不規則な炉をもたない住居跡で，第53号住居跡が該当する。本跡からは，阿玉台Ⅱ式に比定される土器が出土している。なお，報告事例では，類例がないため具体事例を記載していないが，その意味では，本跡の事例は貴重なものといえよう。

以上，ここでは完存して分類できた６軒の住居跡を鈴木氏の設定した住居跡形態の分類にあてはめてみたが，前述の如く各事例とも合致し，阿玉台期住居跡形態の変遷をうなづけさせるものがあった。残りの６軒についても分類検討を試みたが，いずれの住居跡も他遺構との重複が激しく，原形をとどめていないため，ここでは正確な位置づけを避けたが，あえて平面形を推測して分類をするならば，次のようになろう。

残り６軒の住居跡は，いずれも円形を基調とした住居跡と思われ，床面のほぼ中央部に(深い)柱穴をもつ炉のない住居跡ないし，住居跡の長軸線上に２か所の柱穴をもつもの，または，柱穴が長軸線上にほぼ一列に配列される形態を有する炉のない住居跡に該当するものと思われる。すなわち，Ａ－１－ａかＡ－２－ａかのいずれかと思われる。ただし，第60号住居跡は柱穴が検出されていないことから，この２つの類型に属させるよりも，むしろ新しい類型と考える必要があるのかも知れない。いずれにせよ，完存の住居跡でないため，推測の域をでない。なお，これらの住居跡の時期については，第50・63号住居跡が阿玉台Ⅰb～Ⅱ式に比定され，第44・59・60・64号住居跡が阿玉台Ⅱ式に比定される。

当遺跡で検出された該期住居跡12軒についての形態や時期は前述のとおりであるが，再度ここ

で総括すれば，以下のとおりとなる。

阿玉台Ⅰb～Ⅱ式に比定される住居跡は４軒（第50・61・63・66号住居跡）で，円形ないし楕円形を呈し，大型の第66号住居跡を除き概して小型である。阿玉台Ⅱ式に比定される住居跡は残り８軒で，円形を基調とするもの５軒，方形を基調とするもの３軒となっている。

なお，参考までに近辺で阿玉台期の住居跡の検出された遺跡を列挙すれば，豊里町大境遺跡[3]，谷和原村大谷津Ａ遺跡[10]，桜村下広岡遺跡[11]，牛久市赤塚遺跡[12]，石岡市大作台遺跡[13]，千葉県松戸市子和清水遺跡[14]等がある。

(3) 縄文時代中期（加曽利Ｅ期）

当遺跡で検出された該期住居跡は，第１・２・13～15・28・30・35・38・42・43・45～48・55～58・62・65・67～75号住居跡の30軒である。これらの住居跡を時期別に細分すると第17表のとおりとなる。

第17表　加曽利Ｅ期住居跡時期別，形状・規模等一覧表

時期	軒数	住居跡番号	形状 規模	方位 炉 有無
加EⅠ	1軒	第62号	(楕円形) (5.4×4.5)	N－2°－W 地床炉
加曽利EⅡ	13軒	第28号	(円形) (4.5)	－ 土器埋設炉
		第45号	円形 5.4×4.8	N－55°－E 土器埋設炉
		第46号	円形 6.2×5.8	N－29°－W 地床炉
		第55号	(楕円形) 6.4	N－66°－E 地床炉
		第56号	(円形) 5.5	－ 地床炉
		第57号	円形 7.0×6.5	N－4°－E 土器埋設炉
		第58号	(不明) 4.0	－ (不明)
		第68号	(円形) 6.6	－ 土器埋設炉
		第69号	円形 7.2×7.0	N－21°－E 土器埋設炉
〃	〃	第71号	(円形) －	－ 地床炉
		第73号	(円形) －	－ 地床炉
		第74号	(円形) －	－ 地床炉
		第75号	(円形) －	－ 地床炉
加曽利EⅡ～EⅢ	7軒	第42号	円形 4.5×4.0	N－55°－E 地床炉
		第47号	楕円形 5.8	－ (不明)
		第48号	－ －	－ (不明)
		第65号	円形 3.8×3.6	N－2°－E 地床炉
		第67号	(楕)(円)形 4.6	－ (不明)
		第70号	(円形) 4.8	－ 地床炉
〃	〃	第72号	(円形) 5.0	－ 地床炉
加曽利EⅢ	7軒	第１号	円形 7.2×6.5	N－38°－W 地床炉
		第２号	(円形) 5.3	－ 地床炉
		第15号	円形 5.5×4.8	N－34°－W 地床炉
		第30号	円形 4.9×4.6	N－37°－E 地床炉
		第35号	(円形) 4.8	－ (不明)
		第38号	(円形) (6.8×6.3)	－ 地床炉
		第43号	円形 7.7×7.0	N－30°－E 地床炉
加EⅣ	2軒	第13号	円形 5.2×4.7	N－86°－W 地床炉
		第14号	楕円形 5.6×4.8	N－10°－W 地床炉

この表で明らかのように，加曽利ＥⅡ期に比定される住居跡が圧倒的に多く，13軒となっており，次いでＥⅡ～ＥⅢ，及びＥⅢの７軒，ＥⅣ，ＥⅠの順となっている。

30軒の住居跡の分布状況を見ると，ＥⅠ期の第62号住居跡は中央からやや西側に，ＥⅡ期は中央から南西側，南側，及び西側に円弧を描くように分布し，ＥⅡ～ＥⅢ期の住居跡は中央からやや西側に散在している。ＥⅢ期のものは中央付近の４軒と，北東側３軒に分かれ，ＥⅣ期のものは北東側に位置している。従って，大雑把であるが，集落の変遷は南西側から北東側に，他時期の遺構と重複しながら移っていったものと思われる。

次に，住居跡の規模については，同じく第17表住居跡時期別，形状・規模等一覧表から，次のよ

うな特徴を見い出すことができよう。すなわち，当遺跡においては，加曽利E Ⅰ期はほぼ中型住居跡に類し，E Ⅱ期は中型～大型，E Ⅱ～E Ⅲ期はやや小型に類する。E Ⅲ期は小型なものから大型とバラエティに富み，E Ⅳ期は中型に類することが言えよう。

長径方向については，北西を指すもの4軒，北東を指すもの6軒，ほぼ北を指すもの3軒，ほぼ西を指すもの1軒，不明16軒となっており，時期細分別に見ても一様の方向性は認められず，かなり多方向にバラついていると判断できる。

平面形については，形状推定したものも含め円形が多く25軒である。楕円形を呈する住居跡は5軒で，全体の2割弱である。

炉跡については，阿玉台期の住居跡と異なり，炉を持つ住居跡が圧倒的に多い。なお，第17表中の炉有無の欄で不明とした住居跡が5軒あるが，住居跡の一部が調査範囲外であったり，攪乱を受けて削平されていたりしたもので，本来炉跡が存在したものも多数あるものと予測される。炉の形態は，地床炉と土器埋設炉の2者に分けられ，前者は20軒で各時期に亘って検出されている。後者は5軒で，しかも加曽利E II期にのみ検出されている。この中で，特に第69号住居跡は，小形深鉢形土器が2個直立した形で並んで埋設されており，当遺跡においては注目される遺構といえる。また，当遺跡で検出された縄文時代前期黒浜式に比定される住居跡の炉と比べ，該期住居跡の炉の掘り込みが概して深く，特に，第1・13・43号住居跡のものは顕著である。そのほか，第13～15・45・55・62号住居跡において，住居跡廃絶後にヤマトシジミを主体として投棄された貝層が，炉跡を中心にして形成されているのも特徴的な一つであり，また，炉を中心として貝層が形成されるのはなぜなのか，問題点の一つとしてここに記しておきたい。

(4) 弥生時代後期

弥生時代後期最終末に比定される住居跡は第17・22・23・25・36・40号住居跡6軒である。これらの住居跡分布状況をみると，遺跡のやや北側に1軒（第17号住居跡），ほぼ中央に2軒（第23・36号住居跡），西側に1軒（第40号住居跡），南西端に2軒（第22・25号住居跡）である。

次に規模別に見ると，第22号住居跡が長径5.5mと当遺跡において最大規模を有し，次いで第23号住居跡の長径4.8m，第17号住居跡の長径4.2mと続いている。なお，長軸のみ計測の住居跡第25・36・40号は除いてある。

長軸方向については，上記の3軒を除くと，北西を指すのは第22号住居跡であり，他の2軒は北東方向を指しており，これらはN－46°～72°－Eの範囲に属している。

平面形については，3軒とも隅丸方形を呈している。残りの3軒第25・36・40号住居跡も調査した範囲では隅丸方形状を呈しており，楕円形・円形を呈する住居跡は検出されない。方形状を呈する住居跡のみも特徴の一つと言えよう。また，古墳時代になると方形・長方形を呈する住居

跡が斉一性を示すわけであるが，当遺跡の弥生後期最終末における住居跡が隅丸方形を呈していることは，古墳時代の先行遺構としてみると，うなづけるものと思われる。

主柱穴については，第17・22号住居跡とも４本がコーナー付近に位置している。また，第23号住居跡は，東コーナー部の柱穴が検出できなく，３本である。主柱穴の掘り込みは，やや深い。

炉跡は，第17号住居跡が東コーナー部，第22号住居跡が西側，第23号住居跡が北コーナー部に位置し，それぞれ相違を見せ，第23号住居跡は，２基の炉を有している。掘り込みは浅く，炉覆土が少なく，焼土の量も少ない。また第22・25号住居跡の炉跡の周辺は，踏み固められ硬く締まっている。更に，第22号住居跡は焼失家屋と思われ，焼土，炭化材等が検出された。

貯蔵穴は，第22・23号住居跡が有し，いずれも東コーナー部付近に位置している。第22号住居跡の貯蔵穴は，周提で囲まれ，第23号住居跡の貯蔵穴からは，壺・台付甕・高杯が一括して出土している。

以上のことから，弥生時代後期最終末における当遺跡の該期住居跡は，県内においては類例が少なく，注目されるものである。

(5) 古墳時代前期（五領期）

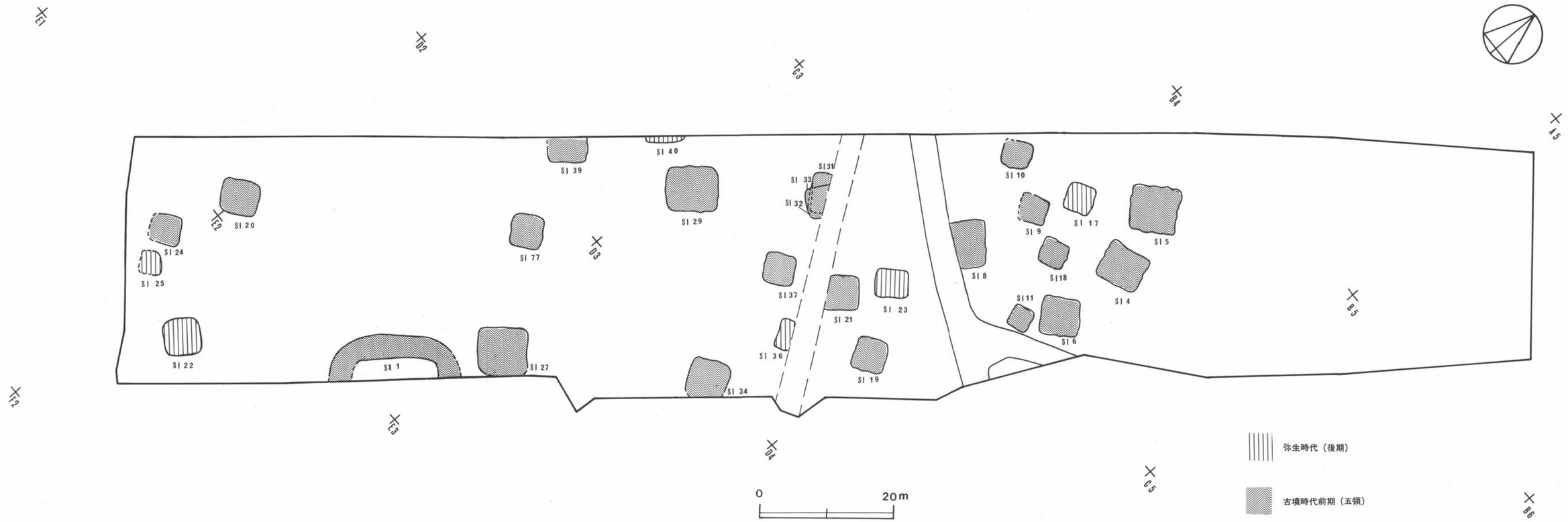
古墳時代前期に比定される住居跡は，第４～６・８～11・18～21・24・27・29・31～34・37・39・77号住居跡の21軒である。これらの住居跡の分布状況は当遺跡の中央より北側に８軒（第４～６・８～11・18号住居跡），ほぼ中央部に８軒（第19・21・29・31～34・37号住居跡），南西側に３軒（第27・39・77号住居跡），南西端に２軒（第20・24号住居跡）である。

次に，規模別にみると，第29号住居跡が長軸7.8mと当遺跡において最大規模を有し，次いで第27号住居跡が長軸7.5m，以下，第５号住居跡の6.9m，第４号住居跡の6.5m，第32号住居跡の6.4mと続く。第６・20・77号住居跡は５m代，第10・18・19・24・37号住居跡は４m代である。なお，第11号住居跡は長軸3.2mと最小規模である。それぞれ規模に差異が認められる。第５・27・29号住居跡を中心にして，周辺に中・小型の住居跡が存在しているように思える。

長軸方向について北西を指すものは第19・24・33・37・77号住居跡５軒で，N－35°～51°－Wの範囲にある。一方，北東を指すものは第４～６・10・11・18・20・21・27・29・31・32・34・39号住居跡の14軒であり，N－42°～71°－Eの範囲に分布し，特にN－42°～52°－Eには10軒が集中し，一つの方向性を示している。北東を指す住居跡が，北西を指す住居跡に比べると2.8倍で，圧倒的に多い。

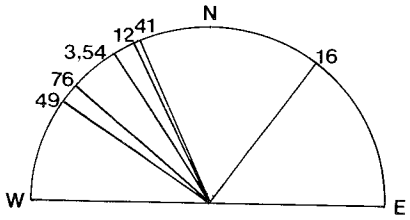
平面形については，方形を呈する住居跡が15軒と多く，長方形を呈する住居跡が３軒である。なお，短（長）軸の計測の不可能な住居跡９軒は除いた。

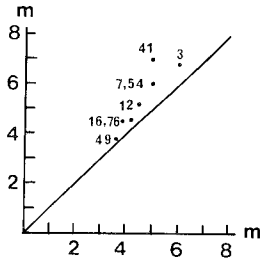
主柱穴は４本検出された住居跡が大部分であるが，３本柱穴の住居跡が２軒検出された。第10



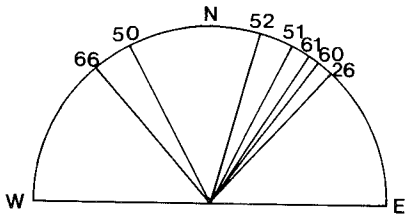
第273図　弥生・古墳時代住居跡配置図

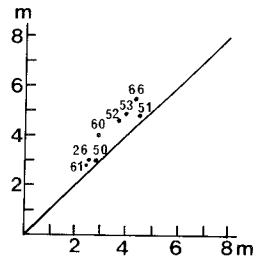
縄文時代前期（黒浜）



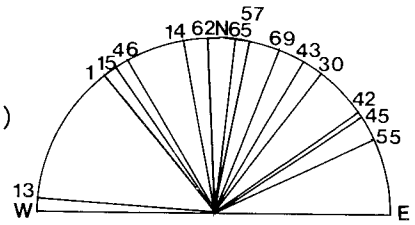


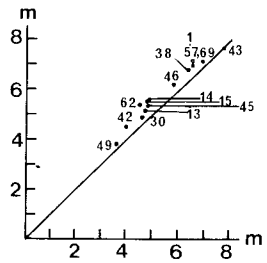
縄文時代中期（阿玉台）



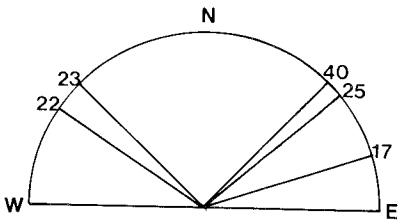


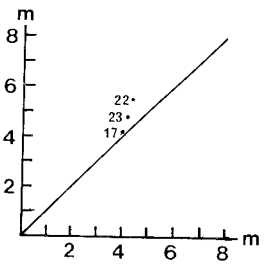
縄文時代中期（加曽利E）



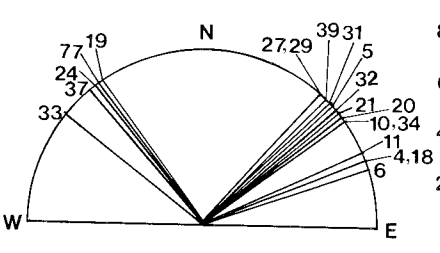


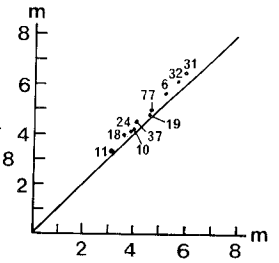
弥生時代後期





古墳時代前期（五領）





第274図　住居跡長軸方向・規模

・18号住居跡の２軒で，いずれの住居跡も１本の柱穴は南東壁のほぼ中央に位置し，ピット状の貯蔵穴を近くに備え，構造上非常によく似ている。また第９号住居跡は１本も検出されなかった。

炉跡は，第９・33・39号住居跡は切られたり，エリヤ外に住居跡が延びたため確認できなかった。その他の住居跡は炉跡を有している。第５・８・10・11・18・31号住居跡の６軒は複数の炉を有し，第77号住居跡は３基の炉をもっている。複数の炉を持つ住居跡では，炉は同時に使用されたのではなく，順次使用されたものと思われるが，不明な点が多い。第10号住居跡の土師器片でしきりをされた炉跡は，同時使用の可能性も考えられる。炉は床面に焼土が数cm堆積し，いずれも床面を掘り込んでいる地床炉である。

貯蔵穴は14軒の住居跡に備えられているが，ピット状のものと楕円形や隅丸長方形及び隅丸方形を呈しているものが見られる。位置は東コーナー部付近が10軒で圧倒的に多く，南コーナー部付近は３軒，第５号住居跡は貯蔵穴を北コーナー部付近と南東壁ぎわの中間に有している。また，貯蔵穴を囲むように周提を施しているのは第18・27号住居跡で，注目に値する。

床面については，13軒の住居跡がほぼ柱穴を結ぶ範囲内が踏み固められて硬く締まり，貯蔵穴の前面も同様に硬く締まっている。その他は硬い床面である。柱穴を結ぶ範囲内が硬く締まっていたのは炉を中心とした場所が生活の中心の場所であったためと思われる。

以上，該期の住居跡について概述してきたが，複数の炉の使用法については，順次使用したのか，同時に使用したのか，交互に使用したのかが明確にできず，今後の課題の一つになろう。また３本柱と貯蔵穴を有する同タイプの住居跡２軒が検出されたことは，住居跡の構造上どうなのか一つの問題点となろう。

２　土坑について

当遺跡から検出された土坑は，302基であり，円筒形，なべ底状，フラスコ状など各種の形態の土坑が検出されている。性格が明瞭に判明している土壙墓や，炉穴，埋甕遺構等もあるが，大半の土坑は性格が判明しない。特に円筒形を呈する土坑の性格は判然としないが，本項では，円筒形の土坑及びフラスコ状土坑に焦点をあて，それらのあり方について記していきたい。なお，記載にあたって，分類名を随所に用いているが，これについては，第４章１節の分類基準の方法を参照されたい。

ＩＡ類に分類された円筒形の土坑は，全体の約18%にあたる53基が検出され，平面形は円形で筒状を呈するものである。これらの土坑のうち，直径２ｍ以上３ｍ未満で，深さ0.5ｍ以上１ｍ未満の土坑（IAc_2類）と，１ｍ以上２ｍ未満で，深さ0.5ｍ以上１ｍ未満の土坑（IAb_2類）のものが大半を占めており，それらは南西側に多く検出され，位置的な規則性をもっていない。遺物は，覆土上・中層から加曽利Ｅ式の土器や土器片が多量に出土しているほか，少量の阿玉台・

黒浜式等の土器片が出土している。特に240号土坑は，加曽利E式の土器片が551片と多量に出土している。また，第40・240号土坑から，ヤマトシジミを主体とした貝層が，覆土上層から検出されている。

そのほか，円筒形土坑の中で，加曽利E式土器片610片と，ヤマトシジミを主体とした貝層が覆土上・中層に検出された直径２ｍ以上３ｍ未満，深さ１ｍ以上の規模をもつ大型（ＩAc$_3$類）の第11号土坑や，反対に，直径0.5ｍ未満，深さ１ｍ以上のピット状を呈する（ＩAa$_3$類）第111号土坑等も検出されている。

これらの円筒形を呈する土坑は，いずれも壁が垂直に立ち上がり，底面は平坦で，直径0.5ｍ未満の土坑を除いて，２～３本のピットを有する例が多い。また，ピットの規模や位置についても規則性をもたない土坑が多い。例えば，第11号土坑のように，中央に１か所と，壁下にややオーバーハング状に掘り込んでいる例や，第286号土坑のように，ほぼ中央に１か所と，壁下にややオーバーハング状に４か所も掘り込んでいる例がある。また，第200号土坑のように中央に１か所とその両端の２か所等があり，様々な形態が多い。

これらのピットについては，どのような構造的性格を有しているのか不明な点が多い。考えられる事を２～３列挙するならば，上屋構造に関わる柱としてのピット，貯蔵穴としてのピット等が挙げられよう。しかしながら，中央に掘られたやや細いピットは，上屋構造との関わりを高める好例といえようが，壁下のオーバーハング気味の太いピットは余りにも規模が大き過ぎて，柱穴としては不適当となろう。ならば貯蔵穴としてのピットとしてはどうか，これも１～２か所なら考えられようが，４か所もあることをどう説明するか。疑問とするところが多い。

次に，土坑自体の性格を考えた場合，どのようなことが言えるのであろうか。一般的に大きくは土坑自体を１つの貯蔵穴と見なす考えと，土壙墓としての考えの二つに分かれることが多いが，当遺跡において見る限り，決定的に結論づける遺構がなく，前述のようにその性格は判然としない。推測の部分が多いが，円筒形の土坑の中には，墓壙の可能性をもつピットを有さない土坑のあることや，ピットを有しても墓壙として考えることのできる遺構の存在も有り得ることから，土壙墓としての性格を有する土坑もあったものと思われる。他方，貯蔵穴としての性格を有する土坑も当然存在していたのではないかということも考えられる。例えば，本類の例ではないが，ＩＩＢ類の第246号土坑は，ほぼ中央と北西部に同程度の細いピットと，東側と南側に大きめなピットをもち，更に，東側のピットから斜位の状態で縄文土器を出土させている土坑であるが，この土坑は，検出状況から貯蔵穴の可能性を強く示す遺構と思われる。

また，ＩＩＡ類に分類された第291号土坑からは，覆土下層から未焼成の土器片が出土しており，失敗品の投棄及び，破砕した土器の投棄として利用された遺構と思われる。

以上のように，土坑の性格について，墓壙的，貯蔵的，ゴミ拾て場的土坑の存在を推測を混じえて記したが，明確な位置づけについては不明な点が多く，今後の課題の一つとしておきたい。

次に，フラスコ状（袋状）についてであるが，当遺跡から検出されたこの種の土坑は，９基であり，土坑全体の約３％である。これらの土坑の分類別検出数は，第18表のとおりで，ⅠDc$_3$類に属する比較的大型な土坑が６基と最も多い。

深さについても，１ｍ以上が７基で，ほとんどのフラスコ状況は深く掘り込んでいる。

第18表　フラスコ状土坑分類別検出数一覧表

分類＼基準		坑底面の規模	坑底までの深さ	検出数
ⅠD類（円形・フラスコ状）	b_2	１ｍ以上２ｍ未満	0.5ｍ以上１ｍ未満	１（第173号）
	c_2	１ｍ以上２ｍ未満	0.5ｍ以上１ｍ未満	１（第280号）
	c_3	２ｍ以上３ｍ未満	１ｍ以上２ｍ未満	６（第17・19・32・64・212・279号）
ⅡD類（楕円形・フラスコ状）	c_3	２ｍ以上３ｍ未満	１ｍ以上２ｍ未満	１（第23号）

分布状況については，主として遺跡南西側に集中しており，特に第17・19・23・32・64・212号土坑は，阿玉台期の住居跡付近に集中している。また，第64号土坑は阿玉台期の第53号住居跡，第32号土坑も阿玉台期の第61号住居跡を掘り込み，第23号土坑は加曽利ＥⅡ期の住居跡と重複している。

形態的に見ると，基本的には壁がオーバーハング気味に掘り込まれたフラスコ状を呈するが，さらに形を細分すると，いわゆる「 」状のもの（第17・23・64号土坑），「 」状のもの（第19・173・212・279・280号土坑），及び「 」状のもの（第32号土坑）の３つに分けられる。

平面形状については，第18表でも明らかのように，円形を呈するもの８基，楕円形を呈するもの１基となっており，円形が多い。ピットについては，いずれからも検出されなかった。

出土遺物は，阿玉台式を中心として，少量の勝坂式・加曽利Ｅ式の土器等が出土している。特に，第32号土坑からは，阿玉台Ⅲ式に比定される土器（第128・129図）が出土している。

以上，当遺跡から検出された９基の土坑のあり方を概述したが，これらの性格については，食料の貯蔵穴説，墓壙説，土器製作に関する説などあるものの，これらの諸点を納得させる確証が得られなかった。唯，第32号土坑においては，貯蔵穴の可能性が推測される。

３　炉穴について

当遺跡から検出された炉穴は６基で，遺跡中央から南西側のＤ２区にまとまって検出された。炉穴は，円形または楕円形を呈し，壁高は0.2～0.35ｍである。第235・237・238号が長径0.8～１ｍと小さく，第220・236・251号が長径2.1～2.8ｍと大きい。炉の数は第220号が２基のほかは，いずれも１基である。第220号炉穴の炉は南西側とやや西側に位置し，第236号が西端，第251号が南端である。他は，小さな円形を呈し，全体が焼けていることから，炉の中心は中央部にあった

ものと思われる。

遺物は，第237号の覆土上・中層から茅山式の半完形の土器が出土し，そのほか，第235号から20片，第220号から１片，第236号から１片のいずれも茅山式土器片が出土している。

時期については，第238号と第251号からは遺物が検出されていないが，炉穴の形状や検出された位置等から，これらの２基を含めいずれも茅山期に位置づけられるものと思われる。

これらの遺構に伴う集落の存在が当然予測されるが，残念ながら住居跡と見られる遺構は検出されなかった。しかし，それらの存在を裏づけるものとして，第235号土坑（炉穴）の南西側４ｍのところから，ピット状の第111号土坑が検出された。本坑の覆土中からハイガイ・マガキ・ヤマトシジミ・アサリ・オキシジミ・ハマグリ・シオフキと共に茅山式土器１片が出土したが，貝類の構成から見て早期の遺構と判断され，炉穴の存在とともに当時の人々の生活の痕跡を強く裏づけるものであり，さらにこのことが，当遺跡付近に該期集落の存在を十分可能ならしめることを一層強く示しているものと言えよう。

引用文献・参考文献

(1) 宮本長二郎 「関東地方の縄文時代竪穴住居跡の変遷」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集 同朋社 昭和58年３月

(2) 茨城県教育財団 『大生郷工業団地内埋蔵文化財調査報告書』 昭和56年９月

(3) 茨城県教育財団 『研究学園都市計画手子生工業団地造成事業地内埋蔵文化財調査報告書』 昭和61年３月

(4) 茨城県教育財団 『石岡都市計画事業南台土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書』 昭和57年３月

(5) 茨城県教育財団 『石岡都市計画事業南台土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書２』 昭和58年３月

(6) 川崎純徳ほか 『遠原貝塚調査報告書』 茨城県勝田市教育委員会 昭和55年３月

(7) 大塚初重ほか 『原町西貝塚発掘調査報告書』 原町西貝塚調査団・古河市史編さん委員会 昭和60年３月

(8) 千葉県文化財センター 『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書II』 昭和59年

(9) 千葉県都市公社 『柏市鴻ノ巣遺跡』 昭和49年

(10) 茨城県教育財団 『水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書３』 昭和60年３月

(11) 茨城県教育財団 『常磐自動車関係埋蔵文化財発掘調査報告書II』 昭和56年３月

(12) 河野辰男ほか 『赤塚遺跡発掘調査報告書』 牛久町赤塚遺跡調査会 昭和59年

(13) 川崎純徳ほか 『茨城県石岡市大作台遺跡発掘調査報告』 石岡市教育委員会

(14) 関根孝夫ほか 『子和清水貝塚 遺物編』 松戸市教育委員会 昭和42年

(14) 関根孝夫ほか 『子和清水貝塚 遺構図版編』 松戸市教育委員会 昭和43年

第2節　人工遺物

1　土器について

(1)　縄文時代早期～後期の土器について

当遺跡から出土した縄文土器は，縄文早期の井草式・茅山式，前期の黒浜式・大木2b式・諸磯式・浮島式・興津式，中期の阿玉台式・勝坂式・中峠式，大木7a式・大木7b式・加曽利ＥⅠ～ＥⅣ式・曽利式，及び後期の綱取式土器等である。器種としては深鉢形土器が圧倒的に多く，浅鉢形土器等は少ない。また，出土量については各期様々であるが，これらの中で最も出土量の多いのは，加曽利ＥⅡ・ＥⅢ式の土器である。出土地点については，南西側の台地縁辺部を中心とした遺構密集地区の住居跡や土坑からのものが大半である。

本項では，これらの縄文土器について，時期や型式に基づいて分類し，その概略を述べることとする。なお，分類の方法については，住居跡覆土内混入出土遺物の項で示した分類方法と同じ方法をとっており，また，個々の土器の詳細についても遺構ごとに掲載し，解説等を加えているので，それらの項を参照されたい。

Ⅰ群土器

本群は，縄文時代早期前葉の井草式に比定される土器群で，第29号住居跡（第194図1）から1片出土している。井草式から茅山式に至る間の土器群は，当遺跡においてまったく出土していない。

Ⅱ群土器

本群は，縄文時代早期後葉の茅山式に比定される土器群で，当遺跡南西側の住居跡の覆土や炉穴等から出土している。良好な資料としては，第235・237号土坑（炉穴）から出土している。特に，第237号出土土器（第176図1）は，茅山上層式のもので，深鉢形土器の器形が窺える半完形品の土器である。横位の条痕文を内・外面に施しており，口唇部や胴部には小突起と，キザミ目を施した隆帯が付されている。

Ⅲ群a類土器

本類は，縄文時代前期前葉の黒浜式に比定される土器群で，遺跡北東側，西側，及び南西側の住居跡や土坑，グリッド等から比較的多く出土している。いずれの土器も胎土に繊維を含み，焼成は不良である。繊維については，植物性と動物性のものが考えられるが，第12号住居跡出土土器片の胎土から炭化した繊維が検出され，分析[(1)]中であるので，その結果に期待したい。本群土器

の良好な資料としては，第12・41・76号住居跡から出土した土器（第12図１・２，第16図１，第23図２）等があり，いずれも器形を窺うことができる。器形は，口縁部径が底部径よりやや大きい円筒形を呈するもので，底部は上げ底である。文様は，縄文を地文とするものや，撚糸文，沈線文など多種の施文技法が用いられている。本群を，文様を中心に５つに細分すると，次のとおりである。

ア　縄　文　　無節，単節，及び付加条縄文を地文とし，無節のものは斜位と羽状に施されるものがある。単節や付加条の縄文はほとんど斜位に施されている。
（第８図８，第21図13，第10図11）

イ　撚糸文　　２本組の無節の撚糸文が殆どで，撚りの細いもの（第13図10）と荒いもの（第13図８）がある。斜位に施されるものも多く，その他雑なもの（第14図６），軸からはずれたままで施文したもの（第17図18），菱形文を構成するもの（第13図９・10）網目状撚糸文を施したもの（第10図10）等が見られる。

ウ　沈線文　　棒状施文具によって，波状，山形状，格子状，曲線状，及び斜位，横位，縦位に施されており，多様な沈線文が見られる。
（第16図１，第17図23・24，第10図19，第10図18，第10図７，第10図８，第13図33）

エ　貝殻腹縁文　　アナダラ属による貝殻腹縁文が縦位や斜位に施されているもので，第７・41・54号住居跡からの出土例が見られる。
（第10図23，第16図２，第21図21）

オ　櫛歯状文　　わずかに１片であるが，波状に施された土器片が第７号住居跡から出土している。（第10図24）

以上，文様を中心として細分したが，部分的に竹管による刺突文や押圧を施したもの（第17図29・22），縄文と押引文または沈線文を組み合せたもの（第10図15）等があり，各種の文様が１個体の土器に施されているものと思われる。また，逆に沈線文だけの土器（第16図１）も見られる。

なお，当遺跡における本群土器は，新しい段階とされるコンパス文，木葉文，及び肋骨文の施された土器が見られないことから，黒浜の古い段階の土器に比定されるものと思われる。

Ⅲ群ｂ類土器

本類は，縄文時代前期前葉の大木2b式に比定される土器群で，わずかに１片であるが第６号住居跡から出土（第198図１）しており，横位の連鎖状撚糸文が全面に施されている。この時期は，関東では黒浜期に対比される時期であり，おそらく持ち込まれたものと思われ，交流を裏づける意味で興味深い。

Ⅳ群ａ類土器

本類は，縄文時代前期後葉の諸磯式に比定される土器群で，遺跡中央部や西側部の住居跡から４片出土している。爪形文が主として施されている。（第199図１～４）

Ⅳ群ｂ類土器

本類は，縄文時代前期後葉の浮島式に比定される土器群で，西側や南西側の住居跡から11片出土している。浮島Ⅱ式に比定される貝殻腹縁文の施されたもの（第200図１・５・９・10・11）や，浮島Ⅲ式に比定される三角刺突文の施されたもの（第200図４）が見られる。

Ⅳ群ｃ類土器

本類は，縄文時代前期後葉の興津式に比定される土器群で，遺跡中央部や南西側寄りの住居跡から５片出土しており，口唇部直下に縦位の沈線や条線文が施されている。（第201図１～５）

当遺跡から出土した縄文時代前期の土器は，以上のとおりわずかな量であるが，該期における人々の生活の痕跡を裏づけるものであり，その意味では貴重な資料といえよう。

Ⅴ群ａ類土器

本類は，縄文時代中期前葉の阿玉台式に比定される土器群で，遺跡中央部や西側，及び南西側の住居跡や土坑等から数多く出土している。胎土に雲母を含み，新しい段階の土器を除き，縄文が施されていないのが特徴の１つである。良好な資料としては，第51・52・53号住居跡から出土したもの（第32図１，第36図１，第39図２）と，第32号土坑から出土したもの（第128・129図）がある。本類における大半の土器は，底部が平底であり，一部網代痕の見られる土器もある。胴部はやや円筒状を呈し，口縁部は大きく開き，内面に稜を有しているものが見られる。口縁部は，１列または２列の結節沈線文や連続刺突文を沿わせた隆帯によって各種の枠状区画を施し，また，多様な形状や文様を施した把手や突起を付し，口唇部にキザミ目を施したものが多い。胴部は，結節沈線文，爪形文，及び刺突文を沿わせた隆帯や，沿わせてない隆帯で円文や楕円文，あるいは懸垂文を施し，さらに，円文内に結節沈線文，波状沈線文，山形文等を施している。本類土器は，個々の文様構成を総括的に記載することが困難なほど多種多様にわたっており，前述した各種の文様が複雑に組み合って文様構成がなされているといえよう。そして，新しい段階になると，縄文を施したもの（第128図２）や無文の土器（第128図１）も見られるようになる。

なお，本類土器の中で特に例示しておきたいのが，第51号住居跡から出土した人面を模したと思われる阿玉台式的結節沈線文を施した土器（第36図１）である。この土器は，目の表現技法として勝坂式土器の手法である抉りの技法を施しており，文化の影響または交流という点で注目さ

れよう。

V群b類土器

本類は，縄文時代中期前葉の勝坂式に比定される土器群で，遺跡中央部や西側，及び南西側の住居跡や土坑から少量出土している。これらの土器の中には，阿玉台の住居跡から出土するもの（第37図12）もある。良好な資料としては，第218号土坑から出土した有孔鍔付土器（第135図１）がある。そのほか顔面把手や蛇体装飾把手（第28図１），隆帯に爪形文を施した土器（第129図14），キャタピラ文を施した土器（第204図２）なども出土している。

V群c類土器

本類は，縄文時代中期前葉の大木7a式に比定される土器群で，遺跡のほぼ中央に検出された第22号土坑から出土している。この土器（第173図２）は，口唇部直下に垂下する２本の沈線が施され，口縁部には単節ＬＲの縄文が斜位に施されている。胴部と口縁部の境には周回するキザミ目が施され，胴部には蛇行沈線文と単節ＲＬの縄文が斜位に施されている。

V群d類土器

本類は，縄文時代中期前葉の大木7b式に比定される土器群で，阿玉台期に比定される第51号住居跡から出土している。この土器（第32図２）は，縄文を地文とし，口唇部直下に結節沈線文が施されており，胎土には雲母を含んでいる。この手の土器は，日立市諏訪遺跡[(2)]にも見られる。

V群e類土器

本類は，縄文時代中期前葉の中峠式に比定される土器群で，遺跡南西側の第29・62号住居跡から４片（第205図１～４）出土している。本類の土器は，阿玉台式から加曽利ＥＩ式の中間に位置づけられるもので，阿玉台式から加曽利ＥＩ式をつなぐ土器とされている。出土した４片のうち３片（第205図１・２・４）は加曽利ＥＩ式に比定される第62号住居跡から出土している。

Ⅵ群a類土器

本類は，縄文時代中期中葉の加曽利ＥＩ式に比定される土器群で，遺跡南西側の第62号住居跡から出土している。これらの土器の中には，口縁部が無文のもの（第96図３）や，縄文を施したもの（第96図１），胴部全面に縄文を施すもの（第96図２），同じく沈線や蛇行沈線を施すもの（第96図１・５），あるいは無文の浅鉢形を呈する土器（第97図10）等がある。なお，この段階において磨消帯の施された土器は見られない。

Ⅵ群b_1類土器

本類は，縄文時代中期中葉～後葉の加曽利ＥⅡ～ＥⅢ式に比定される土器群で，遺跡中央部や北東側，及び南西側の住居跡や土坑から多量に出土している。加曽利ＥⅡ式に比定される土器は，第45・46・69号住居跡から出土（第79図１・３・４・９，第83図１・３，第106図２・３・５）しており，この段階になると幅の狭い磨消帯が現われる。口縁部文様帯は，隆帯と沈線によって渦巻文，楕円文，及び長方形状文で区画され，胴部には垂下する幅の狭い磨消帯や沈線を施している。加曽利ＥⅡ式に後続するＥⅢ式の土器は，第１・２・15・43号住居跡から出土（第54図３，第56図１，第63図１・２，第76図１）しており，この時期になると渦巻文は退化し，無文が見られるようになる。胴部は幅の広い磨消帯が施されるようになり，さらに，曲線的磨消帯や「Ｕ」字文，あるいは逆「Ｕ」字文が施される土器も見られる。その他，縄文だけを施した土器（第83図２）や，条線文を施した土器片（第107図10）等も見られ，器種として有孔鍔付土器（第70図28）も見られる。

Ⅵ群b_2類土器

本類は，縄文時代中期中葉～後葉の加曽利ＥⅡ～ＥⅢ式に対比される連弧文土器群で，該期住居跡や土坑等から出土している。良好な資料としては，第285号土坑から出土した完形品（第139図２）があげられる。そのほか，第45号住居跡からは，炉埋設として使用された小形の土器（第79図２）が出土し，また，第47・69号住居跡及び第14・138号土坑からも連弧文の土器片が出土している。当遺跡における連弧文土器の文様等の特色としては，口唇部直下に列点文，相互刺突文，沈線文等が施され，胴部上位に連弧文や波状文，中位に横線，下位に逆「Ｕ」字文や波状文が施されている。地文としては，縄文や撚糸文が認められるが，当遺跡においては撚糸文を施している土器が多い。

なお，連弧文土器については「いずれにしても連弧文モチーフは加曽利Ｅ式土器からは発生し得ないものであるが，その分布等をみると，西関東を中心として独自に成立したものと考えられ」[(3)]ることから，当遺跡から出土した連弧文土器は，運び込まれたものか，あるいは文化交流の所産として作出されたものなのかのいずれかと思われる。

Ⅵ群ｃ類土器

本類は，縄文時代中期後葉の加曽利ＥⅣ式に比定される土器群で，遺跡北東側の住居跡から少量であるが出土している。加曽利ＥⅢ式から発達したもので，沈線による曲線的な磨消帯を有するものも見られる。橋状把手の発達も特徴的である。なお，本類に該当する土器は，第13・14号住居跡から出土（第58図１・２，第60図１・２）している。

Ⅵ群ｄ類土器

本類は，縄文時代中期中葉の曽利式に比定される土器群で，遺跡の南西側の住居跡から少量出土している。本類の中には，口縁部に半截竹管による縦位の平行沈線文を施すもの（第207図２），重弧文を施すもの（第207図１），及び斜行文を施すもの（第207図４）等があり，胴部は強くくびれ，連続刺突文が横位に施されている。また，胴部下半に沈線と隆帯を縦位に施した土器（第107図14）も出土している。なお，本類に属する土器は，第24・35・39・68・69号住居跡の覆土から出土しており，曽利Ⅱ～Ⅲ式に比定されるものと思われる。

Ⅶ群土器

本群は，縄文時代後期初頭の称名寺式に並行する綱取Ⅰ式に比定されるもので，第259号土坑（埋甕遺構）から半完形の形で１個体（第178図１）出土している。口縁部は直立し，胴部との境を隆帯によって区画している。胴部断面形はゆるやかな曲線を呈している。

(2) 弥生時代中期～後期の土器について

当遺跡から出土した弥生式土器は，弥生時代中期女方式，後期東関東系・前野町式，及び後期最終末に比定される土器等である。器種としては，壺，甕，台付甕，甑，高杯等である。

Ⅷ群ａ類土器

本類は，弥生時代中期の女方式に比定される土器群で，遺跡南西側の古墳時代前期に比定される第27号住居跡の覆土から３片（第208図１～３）出土している。薄手の土器片で，縄文が斜位に施されている。

Ⅷ群b_1類土器

本類は，弥生時代後期の前野町式に比定される土器群で，遺跡中央部の住居跡から出土し，いずれも完形に近く，全体の器形を窺うことができる。第219図１の土器は第36号住居跡から出土したもので，複合口縁をもつ胴部が下ぶくれの土器で，口縁部文様帯に４単位の棒状浮文を付し，さらに網目状撚糸文を施している。頸部には，ボタン状の円形浮文を付し，胴部上位にも網目状撚糸文を施している。第215図１の土器は第23号住居跡から出土した壺形土器で，平底を呈する胴部が横長の下ぶくれの土器である。口縁部は外傾し，縦位のハケ目が施され，頸部に刺突文と，胴部上位に網目状撚糸文を施し，その下側に横位のハケ目が施されている。壺や台付甕，器台（第215図）等と一括して貯蔵穴（第214図P_4）から出土している。網目状撚糸文を施す土器については，県内において出土例が少なく，勝田市三反田遺跡[(4)]に見られる程度で，その意味で，当

遺跡の出土例は，良好な資料として提示できたものと思われる。

そのほか，本類に属すると思われる土器片が出土しているのは，第５・17・20・22・25・29・34号住居跡から出土しており，それぞれ掲図しておいたので参照されたい。

Ⅷ群b_2類土器

本類は，弥生時代後期の東関東系に属する土器群で，遺跡中央部や南西端の弥生時代後期の第22号住居跡の覆土から１点（第209図１）と，同じく古墳時代前期の第37号住居跡の覆土から１点（第209図２）出土している。いずれも胴部片で，１は櫛描文と縄文が見え，２は胴部に羽状の縄文が施されている。器形からなり大形の土器と思われる。

Ⅷ群b_3類土器

本類は，弥生時代後期最終末に位置づけられる土器群で，遺跡中央部や西側，及び南西端の第22・23・40号住居跡等から出土している。器種としては，壺，甕，台付甕，高杯，甑等であり，縄文の施されていない弥生式土器，否，むしろ土師器に近似している弥生式土器である。第213図１は壺形土器で，単口縁の胴部が下ぶくれ状の土器である。第213図３も壺形土器で，複合口縁をもつ胴部横長の下ぶくれ状を呈する土器である。第213図６は甕形土器で，胴部はやや横長を呈し，口縁部に輪積痕を残している。第215図２は壺形土器で，複合口縁を有し，胴部が球形を呈する土器である。第215図３は台付甕形土器で，台部は「ハ」の字状に開き，胴部は球形を呈している。口縁部は外傾し，３段の輪積痕が残っている。第221図４は複合口縁を有し，胴部横長の甕形土器で，口縁部はやや外反気味で，口唇部と複合口縁部にキザミ目を施している。中には，第221図３のように，更に頸部と胴部下位にもキザミ目を施している土器も見られる。また，第213図４・５のように，前記台付甕と器形の酷似した台部欠損の土器で，胴部にハケメを斜位に施した台付甕形土器等も見られる。

以上，弥生時代後期最終末に位置づけられる土器群を概述したが，県内におけるこの時期は，十王台式土器で終了し，古墳時代前期の五領式土器が取って変わるといわれている。当遺跡における本類の土器群は，土師器に近似しているものの，五領式土器の範疇に属さず，むしろ，南関東系の久ヶ原式以降の土器に見られるような輪積痕を残す手法や，器種が台付甕であることを考慮すれば，南関東系の影響を強く受けた弥生時代後期最終末に位置づけられる土器群と思われる。

しかし，一応ここでは最終末の時期として位置づけたが，弥生時代の住居形態よりもむしろ古墳時代前期の住居形態に酷似した遺構から出土していること等から，まだ不明な点が多く，課題の１つとしてここに例示しておきたい。

(3) 古墳時代前期の土器について

当遺跡から出土した古墳時代の土器は，古墳時代前期の五領Ⅰ式に比定される土器である。該期住居跡21軒から数多く出土しており，器種も豊富で，壺，甕，台付甕，甑，埦，高杯，器台，装飾器台，ミニチュア土器等がある。本項では，これらの土器をⅨ群土器とし，特に壺形土器，甕形土器，及び台付甕形土器について，器形や文様の特徴から細分し，その概略を記すこととする。

壺形土器

ア）胴部下位に最大径を有する土器群

本群に属する土器は，第５・27・29・34・39号住居跡から出土している。第227図１は第５号住居跡から出土したもので，底部が平底を呈し，口縁部は複合口縁で，外反し，胴部は下ぶくれを呈している。第254図４は単口縁を呈する土器で，最大径が胴部下位にある。第227図３も同様な土器であるが，口縁部が6.7cmと長い。

甕形土器

ア）胴部が球形を呈し，単口縁を有する土器群

本群に属する土器は，第29号住居跡から２個体出土している。第245図１・２は，平底を呈し，口縁部は外傾している。単口縁の土器で，胴部は球形を呈している。

イ）胴部が横長を呈し，広口の単口縁を有する土器群

本群に属する土器は，第５・29号住居跡から出土している。第227図５は第５号住居跡から出土し，小形で，底部は平底を呈し，胴部は横長である。口縁部は広口の単口縁で，短かく直立している。第245図３・４は第29号住居跡から出土し，底部は平底を呈し，胴部は横長で，口縁部が外傾する広口の単口縁の土器である。

ウ）口縁部が広口で，口縁部に最大径を有する土器群

本群に属する土器は，第32号住居跡から１個体（第251図１）出土している。平底の土器で，底部から内彎しながら外側に大きく開き，口縁部はやや外傾し，広口で口縁部に最大径を有している。

エ）頸部に文様を有する土器群

本群に属する土器は，第８号住居跡から１個体（第230図１）出土している。底部欠損で，胴

部はほぼ球形を呈している。口縁部は外反し，広口で，頸部には斜位のキザミ目が施されている。

オ）口縁部に輪積痕を有する土器群

本群に属する土器は，第34号住居跡から１個体（第254図３）出土している。底部は平底で，胴部はほぼ球形を呈しており，口縁部はやや外反している。また，口縁部には指頭圧痕が認められる。

カ）複合口縁を有する土器群

本群に属する土器は，第34号住居跡から１個体（第254図１）出土している。底部は平底で，胴部はやや横長を呈しており，口縁部は外反気味に立ち上がっている。複合口縁で，口唇部と複合口縁部，及び頸部と胴部下位にキザミ目が施されている。

キ）口唇部に刺突文を施している土器群

本群に属する土器は，第10号住居跡から１個体（第233図１）出土している。底部は欠損し，胴部はほぼ球形を呈している。口縁部は外傾し，口唇部に刺突文を施している。

台付甕形土器

ア）口縁部に輪積痕を残している土器群

本群に属する土器は，第５・34号住居跡から出土している。第227図４は第５号住居跡から出土しており，台部が「ハ」の字状に開く小形の土器である。胴部はほぼ球形を呈し，口縁部に１段の輪積痕を残している。第254図７は第34号住居跡から出土し，胴部が球形を呈している。口縁部はほぼ直立し，２段の輪積痕を残している。

イ）口縁部に輪積痕を残していない土器群

本群に属する土器は，第29・34号住居跡から出土（第245図５，第254図６）している。いずれも台部は「ハ」の字状に開き，胴部が球形で，口縁部は外反あるいは外傾している。口縁部には横位のナデが施され，輪積痕は認められない。

ウ）口縁部が「Ｓ」字状を呈する土器群

本群に属する土器は，第34号住居跡から１個体（第254図２）出土している。胴下半以下は欠損しているが，胴部はやや横長の球形を呈している。口縁部は「Ｓ」字状を呈し，胴部上位に横位のハケ目（平行線）が巡り，その上・下に斜位のハケ目が施されている。また，頸部内面にも

雑なハケ目が斜位に施されている。田口一郎氏の試案[5]に基づけば，II類に比定され，4世紀前半に位置づけられるものである。また，県内の「S」字状口縁を呈する土器と比べると，当遺跡におけるものは，胴部が横長の球形であるのに対し，富士ノ上遺跡[6]のものは胴部が球形であり，頸部にハケ目は認められないものの，その手法は当遺跡のものと近似している。なお，参考までに県内の「S」字状口縁を呈する土器を出土した遺跡を例示すると，勝田市三反田遺跡[7]，日立市曲松遺跡[8]，鹿島町木滝台遺跡[9]，水戸市大塚新地遺跡[10]等がある。

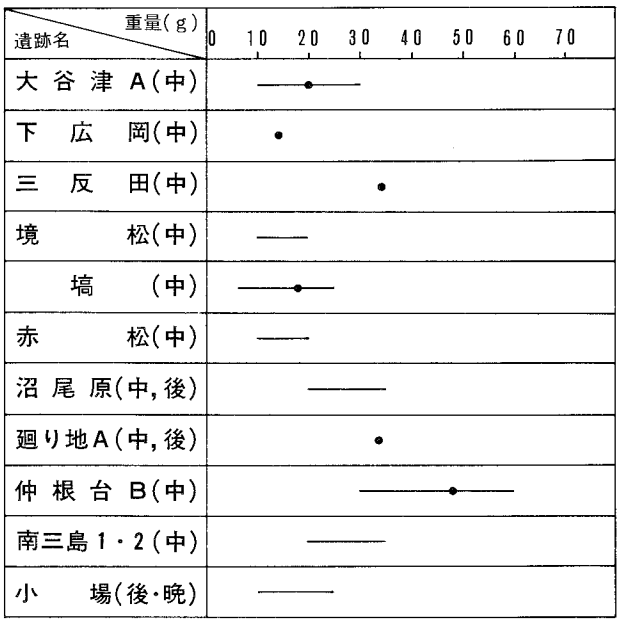
以上，古墳時代の壺形土器，甕形土器，及び台付甕形土器に限って概述してきたが，これらの土器群は，古墳時代前期でも古い段階の土器に位置づけられるものと思われる。

2　土製品について

当遺跡から出土した土製品は，耳栓・有孔円板・円板・土器片錘等である。これらの出土遺物の法量等については，すでに一覧表等で紹介しておいたので，本項では当遺跡において最も多く出土した土器片錘について，若干総括をしておきたい。

土器片錘は，住居跡・土坑・グリッド等から297個出土している。これらの中には完形品や，一部及び半分欠損しているものもあるが，ひどく欠損している土器片錘を除き，288個について重量分布について調べてみた。その結果，当遺跡における土器片錘の重量分布状況は，10～19ｇが約62%を占めて最も多く，次いで20～29ｇが約17%，１～９ｇが約15%であった。

さて，土器片錘の用途については，漁網錘としての位置づけがなされているが，当遺跡におけるこれらの土器片錘もそれらの機能を果したものと思われる。土器片錘の中には，１～９ｇと非常に軽いものも出土し，その機能を果し得るものかどうか疑問が残るものの，多数使用によって十分その機能を果し得ることができることから，これらの疑問を解決できるものと思われる。また，当遺跡から石錘はわずかに１個しか検出されないことから見ても，これらの土器片錘は，漁網錘として一層機能を果す機会が多かったと思われる。



第275図　県内出土の土器片錘平均重量図

なお，当遺跡から古墳時代前期の球状土錘や管状土錘が合せて３点出土しているが，これらの重量を見ると，40～59ｇであり，土器片錘に比べ非常な違いがみられ，時期的漁撈方法の違いを感じさせる。

また，同時代における土器片錘の重量のあり方についても，集落のおかれた位置的環境によって地域差もあるものと思われる。一応，参考までに県内における土器片錘を出土した遺跡における平均重量を11例図にして掲載したので参照されたい。

3　石器・石製品について

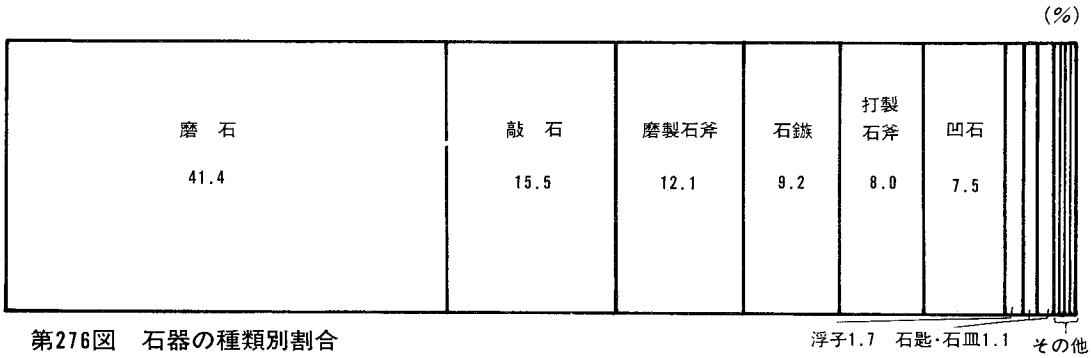
当遺跡から出土した石器は，石鏃・石匙・打製石斧・磨製石斧等14種類にのぼっている。出土数の多いものは，磨石72点，敲石27点，磨製石斧21点，石鏃16点，打製石斧14点，凹石13点等で，他に浮子３点が出土している。これらの石器の種類別出土点数の割合については，グラフ化して掲載しておいたので参照されたい。

前述で明らかのように，当遺跡においては，磨石と敲石が圧倒的に多く，約半数以上の57％を占めている。また，凹石，石皿等も出土しており，縄文人のくらしの中に採集活動のあったことを十分に見い出すことができる。前項の土器片錘の出土は漁撈活動を，石鏃の出土は狩猟活動を裏づけるものであり，当時の生業のあり方を今の人々に十分知らせてくれるのである。

さて，当遺跡から検出された豊富な器種のこれらの石器は，一様の石質によって作出されたものではなく，多種の石質を利用してつくられている。一覧表で示したとおり，安山岩・砂岩・流紋岩等が多いが，チャートや黒曜石，緑泥片岩等も見られ，石器の用途に応じて，適切な石質を選択していることがわかる。第185図でも示したが，石鏃にはチャートや黒曜石等のように硬く緻密な石質が，磨石・敲石には目の粗い砂岩等と，用途に応じて利用している。しかし，石斧のように，打製石斧では安山岩，磨製石斧では砂岩・緑泥片岩等が多く，用途に対し，その利用が異っている。これは，作出過程における容易さ等からくるものなのかも知れない。

次に，岩石の産地についてであるが，筑波山系から産出する岩石の利用が最も多いものと考えられる。しかし，黒曜石については，近辺から産出されないことから，他地域から運ばれたものと考えられる。

なお，最後となるが，当遺跡から出土した石製品の中に，チャートを刀のように薄くして，ていねいに磨いた装飾品（第188図61・62）と，雲母片岩を利用した小形の円板（第188図60）が１点出土していることを特記しておきたい。



第276図　石器の種類別割合

引用文献・参考文献

(1)　上條朝宏「縄文式土器の胎土分析」『茨城県教育財団調査報告第41集』昭和62年（本書附章）

(2)　鈴木裕芳ほか『諏訪遺跡発掘調査報告書』日立市教育委員会　昭和55年

(3)　桐生直彦「連弧文土器」『縄文文化の研究　4　縄文土器II』雄山閣　昭和56年

(4)　鴨志田篤二ほか『三反田遺跡調査報告書（第３次）』勝田市教育委員会　昭和54年

(5)　田口一郎ほか『元島名将軍塚古墳』高崎市文化財調査報告第22集　高崎市教育委員会　昭和59年

(6)　大森信英ほか『茨城県土師器集成　第１集』　昭和42年

(7)　鴨志田篤二ほか『三反田遺跡（一・二次）』勝田市教育委員会　昭和53年

(8)　斉藤　忠ほか『茨城県史料　考古資料編　古墳時代』茨城県　昭和49年

(9)　森重彰文ほか『木滝台遺跡　桜山古墳埋蔵文化財発掘調査報告書』日本文化財研究所　昭和53年

(10)　鈴木敏弘「那珂・久慈郡の源流と「Ｓ字口縁」土器」『常陸国風土記と考古学』雄山閣
昭和60年

終　章　む　す　び

県道取手筑波線の道路改良工事に伴う道路敷地内の埋蔵文化財発掘調査は，昭和60年４月から昭和61年３月末日までの１年間にわたって実施し，今年１年間の整理業務をもって終了した。

調査の結果，縄文時代から古墳時代にわたる竪穴住居跡77軒のほか，土坑302基（炉穴６基，フラスコ状土坑９基，埋甕１基，墓壙３基を含む）が検出された。遺物としては縄文時代早期に比定される井草式土器から，最も新しいものでは古墳時代前期に比定される五領式土器，更には近世の古銭に至るまで，多種多彩なものが収納箱にして517箱（土器等254箱，貝類263箱）出土した，そして，これらの遺構や遺物を通して，断続的ではあるが，当遺跡は，それぞれの時代に人々が生活を営んだ複合遺跡であることが判明した。

中でも，特筆すべき事項としては，縄文時代中期の大木式・曽利式の土器や連弧文土器，弥生時代後期の前野町式土器や南関東系の土器，及び「Ｓ」字状口縁を呈する土器等が出土し，文化の交流を考える上で，貴重な事例を提示してくれたことであり，また，弥生時代後期から古墳時代前期に移行する時期と思われる遺構や遺物が検出されたことも，該期遺構のあり方や，土器の編年を考える上で貴重な資料となったことがあげられる。

その他にも，縄文時代前期の黒浜期に比定される住居跡８軒，良好なフラスコ状土坑９基が検出されたことや，ヤマトシジミを主体とした貝層も検出されたことは，該期遺構のあり方や性格等を考える上で貴重なものであり，特筆に値するものといえる。

道路敷地内という限られた調査区域の中で，このような数多くの調査成果が上げられたことは，遺跡の所在する谷田部町のみならず周辺市町村における原始・古代の解明に大きく寄与するもので，発掘調査の意義は深い。しかしながら，当遺跡の発掘調査及び整理作業を担当して，微力ながら努力したつもりであるが，力量不足と問題意識の欠如から不十分な報告書となってしまったようである。当遺跡の集落構成や個々の遺構の性格等，まだまだ解明すべき諸点が残っており，調査・整理の自戒として，今後，多くの類例に基づき，比較検討して解決を図りたいと考えている。

なお，末筆ではあるが，この報告書をまとめるにあたり，調査に参加していただいた地元の方方をはじめ，関係各位に御協力や御指導を賜わったことに対し，心から感謝の意を表したい。

附　章　自然科学的分析

1　縄文式土器の胎土分析

㈶東京都埋蔵文化財センター
上條　朝宏

1　はじめに

今回の試料は，茨城県筑波郡谷田部町境松遺跡出土の縄文時代早期後半～中期の土器を対象とした。No.１～３は早期後半茅山式に属する土器であり，１～２はSK235，３はSK237から出土した土器である。No.４～10は前期前半の黒浜式に属する土器であり，No.４～７はSI１，８～10はSI12から出土した土器である。No.11～14は中期前半阿玉台式に属する土器であり，11～12はSI51，No.13はSK245，No.14はSK17から出土した土器である。No.15～20は中期後半加曽利Ｅ式に属する土器であり，No.15はSK291，No.16～20はSI69から出土した土器である。No.20はSI69から出土した土器であるが，焼成不充分のためか，胴下半部が粘土化しつつある胴部の破片である。

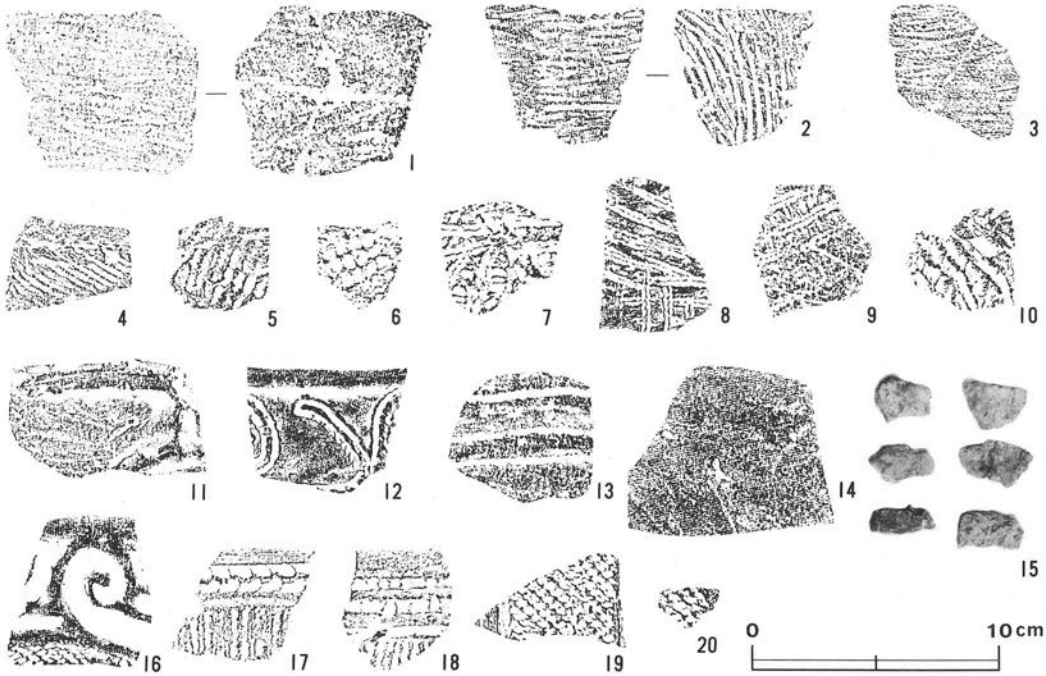
2　分析方法

供試土器の表面観察は，肉眼と実体顕微鏡で観察し，第19表に表示した。表中の色度記号は，新版標準土色帳（小山・竹原1976）を用いた。焼成および保存状態の判定は，非常に良・良・やや不良・不良の４つに分類した。表面観察を終えた各試料は，110°±５°Ｃの乾燥器で３時間乾燥したのち，１個体につき10ｇ採取した。採取した各試料は，１個体分ずつ鉄製乳鉢に入れ，胎土中の細礫等を砕かないように注意しながら細かくする。次に各試料を50ccの遠沈管に入れ，蒸留水を加えて超音波細胞破砕器を用い，20KHz100Wで３分間分散処理をした。次に遠心分離器と110°±５°Ｃの湯煎器を使用し，Aguilera and Jacksonのクエン酸法による脱鉄処理をくり返しおこなった。脱鉄処理を終えた各試料は，アメリカ法（USDA）のフルイ分けをおこなう。各試料の顕微鏡鑑定は，細礫（２～１mm）・粗砂（１～0.5mm）は，実体顕微鏡で岩片の種類を分類し，極細砂（0.13～0.046mm）は，カナダバルサムで封じ，偏光顕微鏡下でメカニカルステージを用いてプレパラート全面の一次鉱物を鑑定した。

3　分析結果

１）胎土中の細礫・粗砂（第20表）

１は石英，長石類の角礫に近い岩片を含み，石英は99粒，長石類は20粒含まれている。２は石英，長石類の岩片を含み，石英は26粒，長石類は８粒含まれている。１と同様に角礫に近い岩片である。３は石英２粒と赤色チャート１粒を含み，１～２とは量が異なっている。４は石英を１



第277図　分析土器拓影図

第19表　供試土器の表面観察

	時期・型式	遺構名	色度記号		焼成及び保存状態	表面観察
			外面	内面		
1	早期　茅山	SK－235	7.5YR3/1	7.5YR4/1	良	2㎜大の角礫な石英・長石粒を含み，細かい黒雲母を少量含んでいる。
2	早期　茅山	SK－235	7.5YR5/4	7.5YR6/3	良	0.5㎜大の長石粒を多く含む
3	早期　茅山	SK－237	2.5YR5/4	5YR4/1	良	0.5㎜大の石英・長石粒を含み，細かい白雲母を少量含む
4	前期　黒浜	SI－1	5YR5/6	5YR5/4	非常に良	0.5㎜以下の粗砂を多く含む
5	前期　黒浜	SI－1	5YR5/6	10YR5/4	非常に良	0.5㎜以下の粗砂を多く含む
6	前期　黒浜	SI－1	5YR2/1	7.5YR6/3	非常に良	0.5㎜以下の粗砂を多く含む
7	前期　黒浜	SI－1	10YR7/4	10YR6/4	非常に良	0.5㎜以下の粗砂を多く含む
8	前期　黒浜	SI－12	7.5YR4/2	7.5YR2/1	非常に良	0.5㎜以下の粗砂を多く含む
9	前期　黒浜	SI－12	7.5YR3/2	7.5YR5/4	良	0.5㎜以下の粗砂を多く含む
10	前期　黒浜	SI－12	5YR5/4	7.5YR5/3	良	炭化した繊維を含む
11	中期　阿玉台	SI－51	7.5YR5/4	7.5YR5/3	良	黒雲母と1㎜大の長石類を多く含む
12	中期　阿玉台	SI－51	7.5YR5/4	10YR5/3	非常に良	黒雲母と1～0.5㎜大の岩片を多く含む
13 a	中期　阿玉台	SK－245	5YR4/4	7.5YR6/4	良	2～1㎜大の角礫な石英・長石と黒雲母を含む
13 b	中期　阿玉台	SK－245	5YR4/4	7.5YR6/4	良	2～1㎜大の角礫な石英・長石と黒雲母を含む
14	中期　阿玉台	SK－17	7.5YR3/2	5YR4/4	非常に良	2～1㎜大の角礫な石英・長石と黒雲母を含む
15	中期加曽利E	未焼成SK－291	7.5YR5/1	7.5YR8/1	不良	0.5㎜大の砂粒を多く含んでいる
16	中期加曽利E	SI－69	7.5YR6/2	7.5YR5/3	良	2～3㎜大の粘質の塊りや細礫を含む
17	中期加曽利E	SI－69	7.5YR4/2	7.5YR4/4	良	0.5㎜大の砂粒を多く含んでいる
18	中期加曽利E	SI－69	7.5YR5/3	7.5YR5/4	非常に良	0.5㎜以下の長石粒を多く含む
19	中期加曽利E	SI－69	7.5YR4/3	7.5YR4/2	非常に良	0.5㎜以下の砂粒を多く含む
20	中期加曽利E	SI－69	10YR5/2	10YR4/2	不良	0.5㎜以下の砂粒を多く含む

粒含んでいる。５・６は１㎜以上の細礫を含まず粗砂の粒径で石英，長石類，黒・赤チャートを含んでいる。７は４と同じく石英を１粒含んでいる。８は赤色チャートを１粒含んでいる。９は細礫を含まず粗砂の粒径で石英，長石類，黒・赤色チャートを含んでいる。10は石英粒を３粒含んでいる。11は石英，長石類，黒雲母を含み，石英は50粒，長石類は13粒含んでいる。12は石英，長石類，白雲母片を含み，石英は29粒，長石類は３粒，白雲母を２片含んでいる。13は同一個体の異った部分の破片を用い，13ａと13ｂとした。13ａは石英を150粒，長石類を24粒含み，13ｂは石英を149粒，長石類を20粒含んでいる。同一個体ではあるが，他の土器に比較しても，細礫の割合がよく似た結果になっている。14は11～13と異なり，石英，長石類，黒色チャート，砂岩類の岩片を含み，石英は５粒，長石類は８粒含み，砂岩類４粒と黒色チャートを１粒含んでいる。なお，11～14の阿玉台式土器に含まれている石英・長石類の細礫は角礫に近い形の岩片である。15は黒色チャートを１粒含んでいる。16は石英３粒と赤色チャート１粒含み，砂岩類の岩片を２粒含んでいる。17は粗砂の粒径で石英と長石類を少量含んでいる。18は粗砂の粒径で石英粒をやや多く含み，長石類，黒・赤色チャートを少量含んでいる。19は石英を２粒含んでいる。20は粗砂の粒径で石英を多く含み，長石類と黒・赤色チャートを少量含んでいる。以上の細礫・粗砂について，大きく分類すると，

① 早期後半の茅山式土器１～３については石英・長石類を多く含む１～２，少量含む３の２つに分類できる。

② 前期前半の黒浜式土器４～10は，全体として細礫を含む量が少ないのが共通しているが，石英粒を少量含む４・７・10と赤色チャートを含む８，粗砂の粒径の５・６・９の３つに分類できる。

③ 中期前半の阿玉台式土器11～14は，全体として角礫に近い細礫を多く含むことで共通しており，石英・長石類を多く含む11～13，石英・長石類に黒色チャート，砂岩類の岩片を含む14の２つに分類できる。

④ 中期後半の加曽利Ｅ式土器15～20は，全体として細礫を少量含むことが共通しているが，黒色チャートを１粒含む15，石英，赤色チャート，砂岩類を含む16，石英粒を含む19，粗砂の粒径の17・18・20の４つに分類できる。

２）胎土中の極細砂の一次鉱物組成（第278図）土器胎土中に含有される一次鉱物は輝石類等を主とする重鉱物と，石英・長石類を主とする軽鉱物がある。今回は，それらの重・軽鉱物のうち重鉱物の粒数を主として数え，軽鉱物からは火山ガラスとイネ科の植物遺体である植物珪酸体の粒数を加えて粒数％で表示した。石英，長石類については，高温型石英とアルカリ長石を含んでいる場合に粒数％以外の鉱物として記した。

１は重鉱物の磁鉄鉱を多く含み240粒数えた。輝石類は少量で30粒含まれ，ジルコンは５粒含

第20表　胎土中の細礫・粗砂の分類

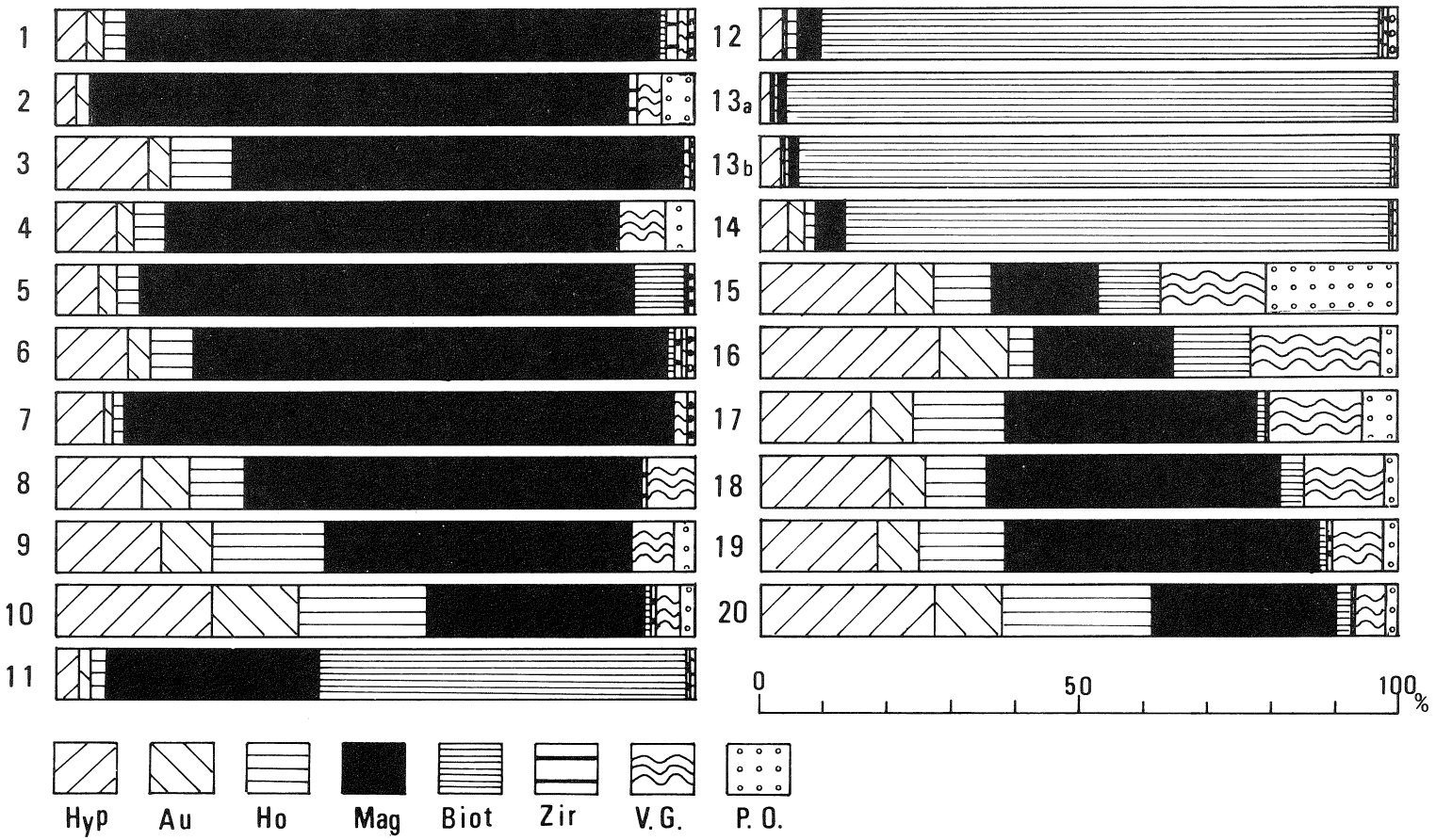
	細礫・粗砂の種類							
	石英	長石類	黒色チャート	赤色チャート	砂岩類	黒雲母	白雲母	g
1	99	20						0.44
2	26	8						0.10
3	2			1				0.01
4	1							0.004
5	◎	◎	○	○				
6	◎	◎	○	○				
7	1							0.005
8				1				0.004
9	◎	◎	○	○				
10	3							0.007
11	50	13				1		0.21
12	29	3					2	0.08
13 a	150	24						0.61
13 b	149	20						0.60
14	5	8	1		4			0.15
15			1					0.004
16	3			1	2			0.008
17	○	○						
18	◎	○	○	○				
19	2							0.02
20	◎	◎	○	○				

まれている。軽鉱物にはアルカリ長石が含まれている。脱鉄処理が不充分であったが，全体的に鉱物の風化が進んでいる。プレパラート全面で286粒数えた。2は重鉱物の磁鉄鉱を多く含み，202粒数えた。輝石類は少量で15粒であり，ジルコンは4粒含まれている。軽鉱物にはアルカリ長石が含まれている。鉱物は風化が進んでいる。プレパラート全面で241粒数えた。3は重鉱物の磁鉄鉱を多く含み，297粒数えた。輝石類は1～2に比べると多く含まれ119粒数えた。ジルコンは1粒含まれている。プレパラート全面で422粒数えた。4は重鉱物の磁鉄鉱を多く含み，242粒数えた。輝石類はやや少なく64粒でジルコンは1粒含まれている。プレパラート全面で，345粒数えた。5は重鉱物の磁鉄鉱を多く含み334粒数えた。輝石類はやや少なく55粒でジルコンは2粒含まれている。軽鉱物には高温型石英が2粒含まれている。プレパラート全面で433粒数えた。6は重鉱物の磁鉄鉱を多く含み207粒数えた。輝石類はやや少なく61粒でジルコンは4粒含まれている。プレパラート全面で279粒数えた。7は重鉱物の磁鉄鉱を多く含み282粒数えた。輝石数は少なく36粒である。軽鉱物には高温型石英を1粒含んでいる。プレパラート全面で325粒数えた。8～10は重鉱物の量が4～7に比べてやや少なくなる。8は重鉱物の磁鉄鉱を多く含み122粒数えた。輝石数はやや少なく57粒でジルコンを1粒含んでいる。プレパラート全面で193粒数えた。9は重鉱物の磁鉄鉱が多く含まれ124粒数えたが輝石類もやや多く含み108粒数えた。ジルコンは1粒含まれている。軽鉱物には高温型石英を6粒含んでいる。プレパラート全面で261粒

数えた。10は重鉱物の輝石類を多く含み119粒数えた。磁鉄鉱は71粒含まれ，ジルコンは１粒含まれている。軽鉱物にはアルカリ長石が含まれている。11は重鉱物の黒雲母を多く含み234粒数えた。磁鉄鉱は136粒で輝石類は少なく32粒である。ジルコンは２粒含まれている。プレパラート全面で407粒数えた。12は重鉱物の黒雲母を多く含み886粒数えた。輝石類はやや少なく59粒であり，磁鉄鉱は38粒含まれている。ジルコンは５粒含まれ，軽鉱物にはアルカリ長石が含まれている。プレパラート全面で1011粒数えた。13は同一個体の異なった部分を対象とした。13ａは重鉱物の黒雲母を多く含み1442粒数えた。輝石類は少なく35粒で磁鉄鉱は19粒である。ジルコンは４粒含まれている。軽鉱物には高温型石英１粒とアルカリ長石が含まれている。プレパラート全面で1502粒数えた。13ｂは重鉱物の黒雲母を多く含み852粒数えた。輝石類は少なく45粒で磁鉄鉱は14粒である。ジルコンは７粒含まれ，軽鉱物にはアルカリ長石が含まれている。プレパラート全面で922粒数えた。14は重鉱物の黒雲母を多く含み716粒数えた。輝石類はやや多く74粒含まれ，磁鉄鉱は38粒含まれている。ジルコンは１粒含まれ，軽鉱物にはアルカリ長石が含まれている。プレパラート全面で841粒数えた。15は未焼成の土器である。重鉱物は輝石類を多く含み132粒数えた。磁鉄鉱は60粒である。黒雲母は35粒含まれているが，11～14の黒雲母と異なり粘土中に含まれる２次堆積した細かい雲母である。軽鉱物では火山ガラスと植物珪酸体が多く含まれ，それぞれ58粒と74粒含まれている。高温型石英は２粒含まれている。プレパラート全面で359粒数えた。16は重鉱物の輝石類がやや多く含まれ84粒数えた。磁鉄鉱は43粒である。軽鉱物では火山ガラスが41粒とやや多く含まれ，アルカリ長石も含まれている。プレパラート全面で199粒数えた。鉱物は全体にやや変質し風化が進んでいるが，輝石類には少量の新鮮な結晶も含まれている。17は重鉱物の磁鉄鉱が108粒含まれ，輝石類は106粒含まれている。ジルコンは２粒含まれている。軽鉱物には火山ガラスが40粒とやや多く含まれ，高温型石英１粒とアルカリ長石が含まれている。植物珪酸体には海綿骨針状型(註１)を１粒含んでいる。プレパラート全面で276粒数えた。18は重鉱物の量が少なく，多く含まれている磁鉄鉱が73粒で輝石類は57粒である。軽鉱物には高温型石英２粒とアルカリ長石を含んでいる。プレパラート全面で159粒数えた。19は18と同様重鉱物の量が少なく，多く含まれている磁鉄鉱が75粒で輝石類が58粒である。軽鉱物には高温型石英１粒とアルカリ長石が含まれている。プレパラート全面で153粒数えた。20は重鉱物の輝石類を多く含み190粒数えた。磁鉄鉱は90粒でジルコンを２粒含んでいる。プレパラート全面で311粒数えた。以上，土器胎土中に含まれる一次鉱物のうち重鉱物を主として，軽鉱物の火山ガラスと植物珪酸体を合わせて鑑定した結果を述べた。

4　まとめ

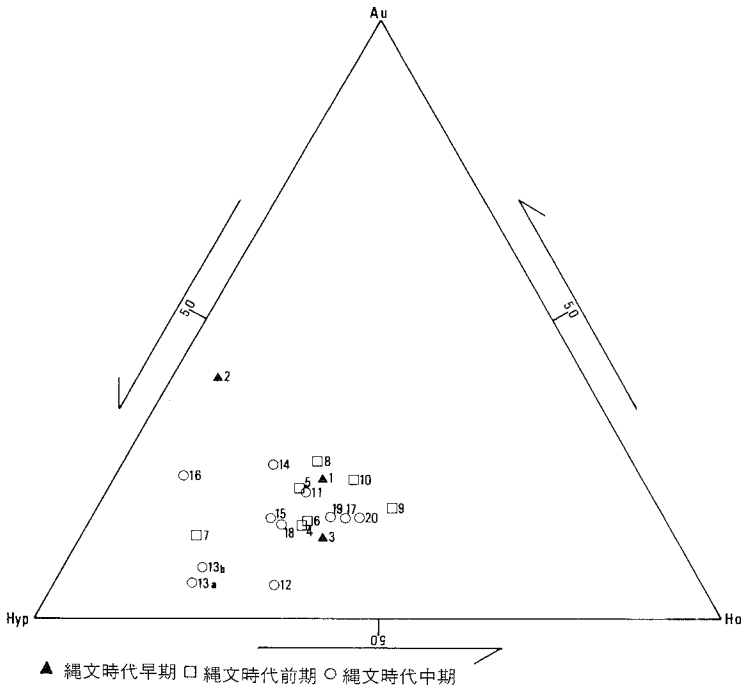
今回は，境松遺跡内出土の縄文時代早期後半から中期後半の土器の一次鉱物からみた胎土分析をおこなった。１～３は茅山式の土器であり，１・２がSK235，３がSK237から出土した土器で



Hyp：シソ輝石　Au：普通輝石　Ho：角閃石　Mag：磁鉄鉱　Biot：黒雲母　Zir：ジルコン
V.G：火山ガラス　P.O.：植物珪酸体

第278図　土器胎土中に含まれる一次鉱物組成

ある。細礫からみると１・２は石英・長石類の混入が似ており，３は粒数が少量である。極細砂では，輝石類の粒数が１・２は少量に比べ，３は多く含まれており，１・２と３は素地製作技法がやや異った土器といえる。４～10は黒浜式の土器であり，４～７はSI１，８～10はSI12から出土した土器である。４～７は細礫・粗砂ともよく似ており，極細砂でも割合よく似た組成をした土器といえる。７は角閃石がやや少量のため，三角ダイヤグラムでは離れた位置にある。８～10は細礫・粗砂は若干異なっており，極細砂や三角ダイヤグラムでも角閃石の量が異なっているため離れてみえるが，素地作製方法は割合よく似た土器といえる。11～14は阿玉台式の土器である。11～12はSI51から出土した土器である。細礫は石英・長石類とも共に多く含まれるが，極細砂では11が磁鉄鉱を多く含み，やや他の土器と異なっている。13はSK245で出土した土器である。この土器は同一個体の異なった部分を分析し，同一個体における差を鑑定したわけであるが，細礫はほぼ同数含まれ，極細砂も13ａが1502粒，13ｂが922粒数えたにもかかわらず，ほぼ近似した組成をしているといえる。三角ダイヤグラムでは13ｂがシソ輝石の多いだけ離れているが，細礫・極細砂の組成から判断し，同一個体の範疇といえる。14はSK17で出土した土器である。細礫では石英より長石類が，やや多く含まれ砂岩類の岩片も含まれている。極細砂では輝石類がやや多く含まれているが，11と比較した場合は12～13の組成に近いといえる。15はSK291で出土した未焼成の土器である。未焼成のため脱鉄処理が非常に良好にできた例であり，今後周辺の粘土と比較する場合は良好な試料といえる。16～20はSI69出土の土器である。16は



第279図　Hyp：シソ輝石，Au：普通輝石，Ho：角閃石の三角ダイヤグラム

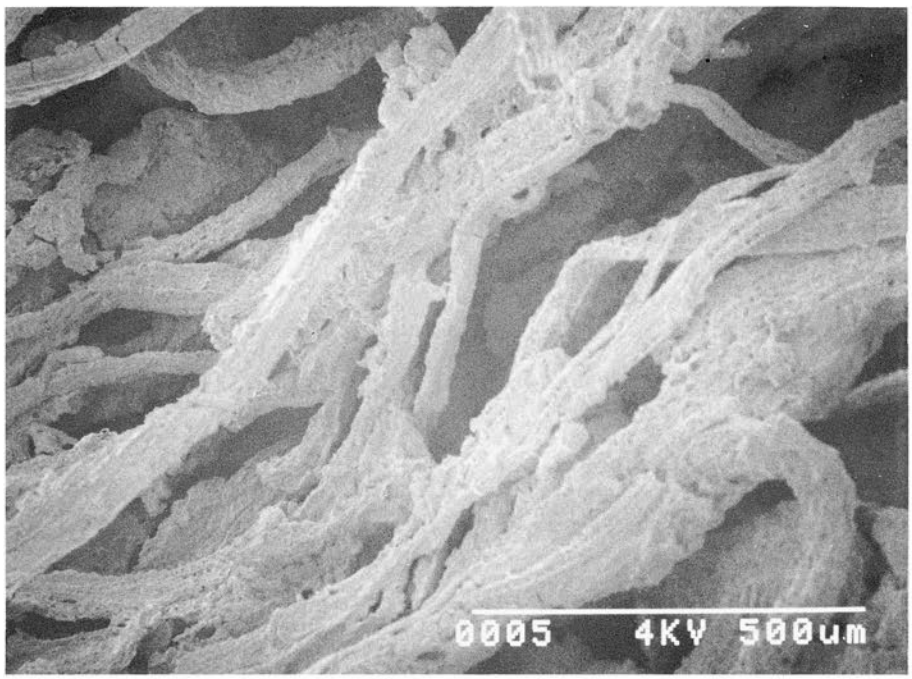
細礫で石英のほかに砂岩類の岩片を含んでいること，極細砂・三角ダイヤグラムでも普通輝石の量が多く角閃石が少ないことが他の土器と異なっている。17～19は細礫・粗砂や極細砂でもほぼ似ており，三角ダイヤグラムで18のシソ輝石が少し多く含まれている以外は，ほぼ同様な素地作製方法で製作された土器といえる。20は粗砂については17～19の土器と同様であるが，極細砂では輝石類を多く含むことが異なっている。しかし，三角ダイヤグラムでは，17・19と近い位置にある。この20の土器の胴下半部が焼成不足のため粘土化しつつある土器であり，遺跡周辺で製作された土器といえる。今後は15の未焼成の土器とともに当遺跡における加曽利E式土器の素地作製方法を考える上で良好な資料といえる。以上，No.1～20の土器について述べたが，特にNo.10の黒浜式土器の土器断面の空洞化した部分には写真図版P367にみられるような繊維の炭化物が検出された。繊維土器に含まれる繊維については，山内清男（1967）[註2]の詳細な研究があるが，その報文中の八戸市一王寺貝塚の3・空洞中の繊維に相当する資料ではないかと考えている。資料は現在，佐瀬隆氏に分析依頼してあり，繊維土器の繊維の種類についての鑑定結果が期待される。

次に，胎土中に多量の雲母を含む阿玉台式土器についてであるが，今回の試料でみると筑波山などの母岩に近いという理由かも知れないが，一般的にみられる風化によって金色にみえる黒雲母とともに未風化に近い黒雲母が多量に含まれていることである。この黒雲母の比較は肉眼で鑑定できるので周辺地域の阿玉台式土器の黒雲母を比較検討することにより，雲母の採取地や土器の製作地を推定する一手段になるかもしれない。今回は境松遺跡出土の土器を対象としたが，今後は周辺地域の土器を比較検討し，試料を増加するとともに関東ローム層下部にある常総粘土層なども対象として，粘土や黒雲母などの採取地を検討していく必要がある。

註1）　佐瀬　隆（1982）「Ⅴ　古墳時代住居跡の炉に関する焼土について」『多摩ニュータウン遺跡－昭和56年度第3分冊No.556遺跡』　P.303～306　㈶東京都埋蔵文化財センター

註2）　山内　清男（1967）「繊維土器に就て追加第三」『関東北に於ける繊維土器古式縄紋土器研究最近の情勢』P.84　山内清男・先史考古学論文集　第二冊

×30



×100

S－530型　日立走査電子顕微鏡（無蒸着）

2　谷田部町境松遺跡出土試料　花粉分析報告について

㈶茨城県教育財団

谷田部町境松遺跡試料
花粉分析報告

貴，㈶茨城県教育財団殿より御依頼のありました，谷田部町境松遺跡試料の花粉分析が終了しましたので，下記の通り結果を御報告致します。

記

1　花粉分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

昭和61年10月15日

1　花粉分析

1－1　試　　料

今回，花粉分析に使用した試料は，境松遺跡の縄文中期の住居跡床面直上（10cm）覆土試料である。試料の岩質は暗褐色シルトであった。

1－2　分析方法

花粉・胞子化石の抽出方法は，以下に示す方法で行なった。

1）秤量

試料をポリエチレン製ビーカーに各10ｇ秤量する。

2）ＨＦ（フッ化水素）処理

本処理は，試料中のケイ酸質の溶解と，試料の泥化を目的とする。

①　試料に48％ＨＦを20mℓ加えて，振とう式ホートプレートで60分間加熱攪拌する。

②　処理後，試料を20mℓの遠沈管に移しかえ，遠心分離（1500回転）し，上澄み液を捨てる。

③　蒸留水を加え，攪拌し，遠心分離を行ない上澄み液を捨て処理液を取り除く（以下，水洗とする）。この作業を２回行なう。

3）重液分離

本処理は，試料中の花粉・胞子化石などの有機物を，比重の違いを利用して分離する。花粉・胞子化石の比重は1.3～1.8以下で，鉱物質は２以上である。

①　$ZnBr_2$（臭化亜鉛）を10％塩酸（HCI）に溶かし，比重を2.2に調製する。その重液を，ＨＦ処理の終わった残渣に20mℓ加えて，よく攪拌する。

②　遠心分離器により，800回転で15分間，続けて2500回転で10分間遠心分離する。

③　遠心分離後の上澄み液を別の遠沈管に移し，蒸留水を加え比重を下げ，遠心分離する。

④　水洗を３回行なう。

4）アセトリシス処理

エルドマン（1934）が考案した方法で，植物遺体中のセルロースを加水分解する。

①　CH_3COOH（氷酢酸）10mℓを加えよく攪拌し，残渣の脱水を行なう。遠心分離する。

②　残渣に，$(CH_3CO)_2O$（無水酢酸）９部にH_2SO_4（濃硫酸）１部を混入した醋化液を10mℓ加え，ウォーターバスで５分間湯せんする。

③　水洗を３回行なう。

5）KOH処理

腐植酸の溶解を目的とする。

① 10%KOH（水酸化カリウム）を10mℓ加え，ウォーターバスで15分間湯せんする。

② 水洗を３回行なう。

６）封入

分析処理後の残渣をマイクロピペットで花粉・胞子数を調整し，グリセリンゼリーで封入し，検鏡した（グリセリンゼリーは，屈折率が1.43で，北米やわが国でよく使われる封入剤である）。

検鏡においてはプレパラート全面を走査し，その間に出現したすべての分類群及びその個数を計数した。

１－３ 結　果

今回の試料における花粉分析結果は，第21表に示した。検出された花粉の種類数は少なく，１亜科４属で，その花粉はすべて外膜が溶けていた。このような産出傾向は，風成堆積物中のロームの分析結果と極めて類似する。また，本試料は住居跡床面直上覆土より採取されたものであること，花粉・胞子が直射光と酸素により化学的に分解することより，本試料における花粉・胞子も堆積時，あるいは堆積後の経年変化に酸化分解し消失した可能性が考えられ，化石として残り得なかったものと思われる。したがって，住居跡床面直上の覆土が堆積する当時（縄文中期）の古植生については，第21表に示した樹木・草本類が生育していたとは考えられるが，これらの検出化石個体数では，その規模や割合が判断できない。しかも，消失した化石も多いと考えられるので，なおさら当時の植生を推定することは困難である。さらに，分析試料の量やプレパラート数を増やして，花粉・胞子化石を多く検出したとしても，その結果は当時の植生を反映している可能性は低いと考えられる。

今回の試料からは，古植生を推定する結果にはならなかったが，今後周辺地域の低地での発掘などにより，台地上での植生などが明らかにされると考える。

第21表　境松遺跡試料花粉分析結果

試料番号	
クルミ属	1
ハンノキ層	1
コナラ亜層	2
イネ科	8
ヨモギ属	4
タンポポ亜科	1
不明花粉	15
シダ類胞子	1
樹木花粉	4
草本花粉	13
不明花粉	15
シダ類胞子	1
総花粉・胞子	33

㈶ 茨 城 県 教 育 財 団

境 松 遺 跡 試 料　花 粉 分 析 報 告

貴，㈶茨城県教育財団殿より御依頼のありました，境松遺跡試料の花粉分析が終了しましたので，結果を御報告致します。

パリノ・サーヴェイ株式会社

昭和61年10月20日

1　試　　料

試料は，暗褐色シルト（風化火山灰土）の１点である。

2　分析方法

花粉分析の方法は，下記の手順で行なった。

○　試料10ｇ秤量

○　ＨＦ処理

○　重液分離

○　アセトリシス処理

○　KOH処理

○　封入

○　検境

3　分析結果

花粉分析の結果は，同定した分類群の個体数で表わし，第22表に示した。主な花粉の写真と顕微鏡下の状況写真はPLATEに載せた。

第22表にみられるように，花粉の産出は非常に少なく，コナラ亜属・ヌギ属・モミ属・クマシデ属－アサダ属・クリ属などの樹木花粉と，ヨモギ属・イネ科・カヤツリグサ科・アカザ科・キク亜科などの草本花粉が僅かに出現したにすぎなかった。このような結果から，これらの花粉の母植物が周辺に生育していたと考えられるが，古環境や古植生を推定することは困難である。

このように，花粉が少なかった理由として，花粉は一般に空気に触れるような堆積環境において分解されやすい。今回の資料は，風化火山灰土であることから，多くの花粉が風化・分解されてしまったものと考えられる。写真図版にもみられるように，出現した花粉の多くは，花粉膜が薄くなっている。このことからも，花粉が風化作用を受け，分解されていることがわかる。

第22表　境松遺跡試料花粉分析結果

試料番号	
モミ属	1
スギ属	3
クマシデ属－アサダ層	1
コナラ亜属	13
クリ属	1
イネ科	4
カヤツリグサ科	1
アカザ科	1
ヨモギ属	7
キク亜科	1
ヒカゲノカズラ属	1
他のシダ類胞子	1
樹木花粉	19
草本花粉	0
不明花粉	1
シダ類胞子	34
総花粉・胞子	54

3　谷田部町境松遺跡出土試料　^{14}C年代測定について

㈶茨城県教育財団

谷田部町境松遺跡試料
^{14}C年代測定報告

貴，㈶茨城県教育財団殿より御依頼のありました谷田部町境松遺跡試料の^{14}C年代測定が終了しましたので，下記の通り結果を御報告致します。

記

1　^{14}C年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

昭和61年10月15日

1　^{14}C年代測定

1－1　試　　料

測定試料は，SI45（$D3c_4$　3区－60）4層（縄文中期，住居跡）より出土した貝試料1点である。

1－2　測　　定

学習院大学放射性炭素年代測定室が行なった。

1－3　結　　果

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書参照。

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

10月15日

パリノ・サーヴェイ㈱殿

1986年7月10日受領致しました試料についての^{14}C年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差はβ線計数値の標準偏差σにもとずいて算出した年数で，標準偏差（one sigma）に相当する年代です。試料β線計数率と自然計数率の差が2σ以下のときは，3σに相当する年代を下限とする年代値（B.P.）のみを表示してあります。また試料の，β線計数値と現在の標準炭素についての計数率との差が2σ以下のときは，Modernと表示し，$\delta^{14}C$‰を付記してあります。

記

Code No.	試　料	B.P.年代(1950年よりの年数)
Gak-13032.	谷田部町境松遺跡，SI－45（$D3c_4$	5420±80
	3区－60）4層　貝	3470 B.C.

以上

木越邦彦

写　真　図　版

遺構全景（航空写真）

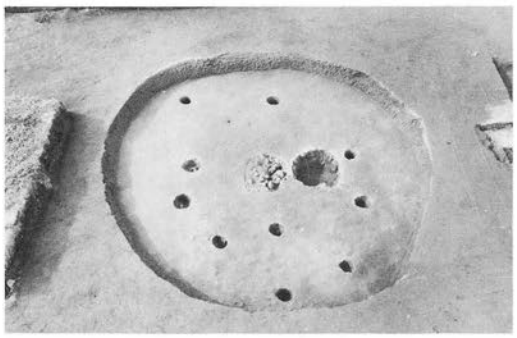
PL2

調査前全景

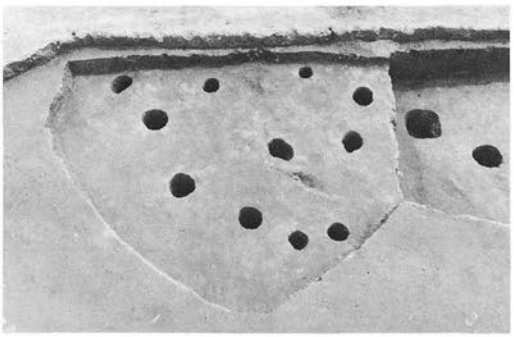
試　掘

作業風景

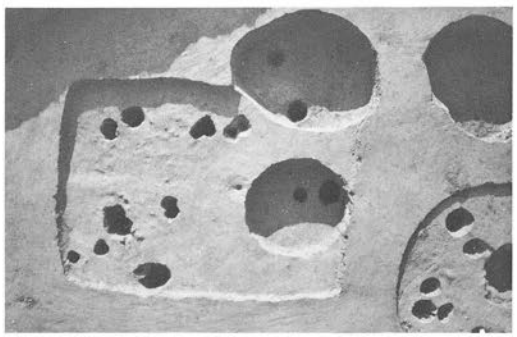
完掘全景



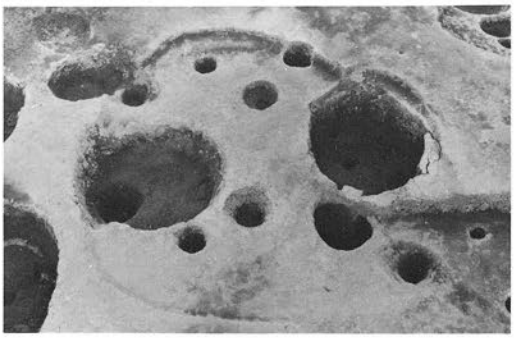
第 3 号住居跡



第 7 号住居跡



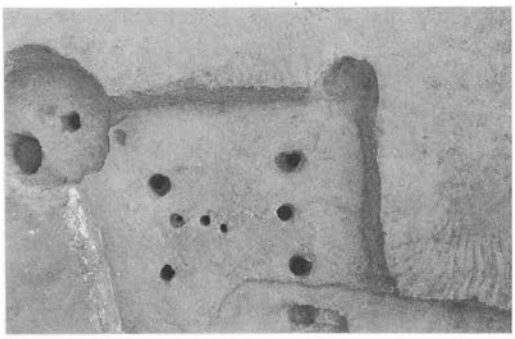
第41号住居跡



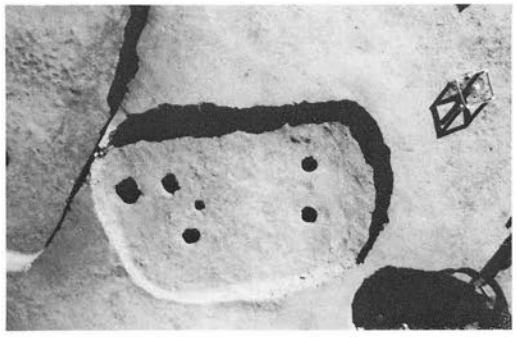
第54号住居跡

第76号住居跡

第44号住居跡

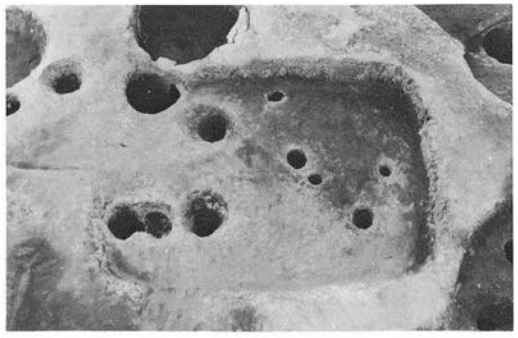


第51号住居跡

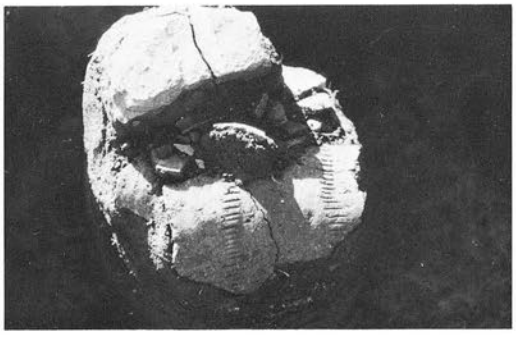


第52号住居跡

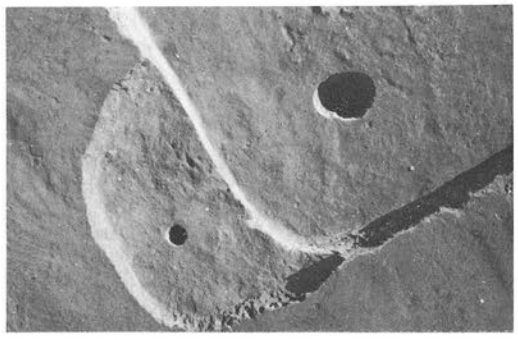
第52号住居跡遺物出土状況



第53号住居跡



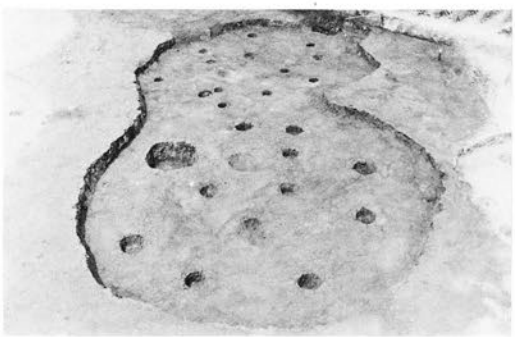
第53号住居跡遺物出土状況



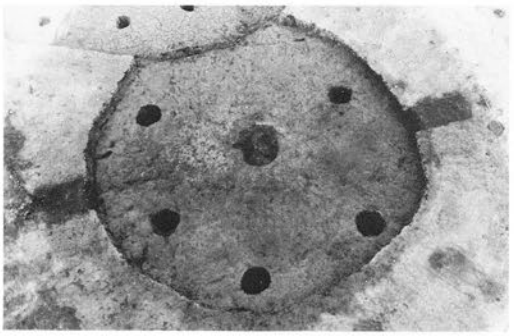
第29・59号住居跡

第66号住居跡

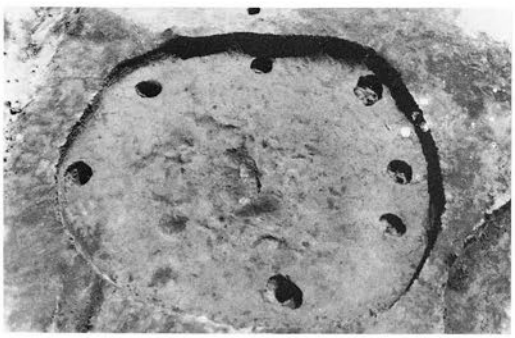
第66号住居跡遺物出土状況



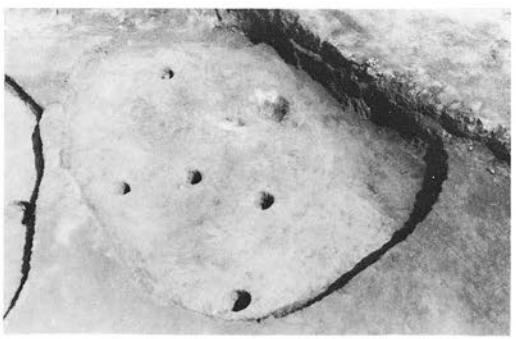
第1・2・12・16号住居跡



第13号住居跡

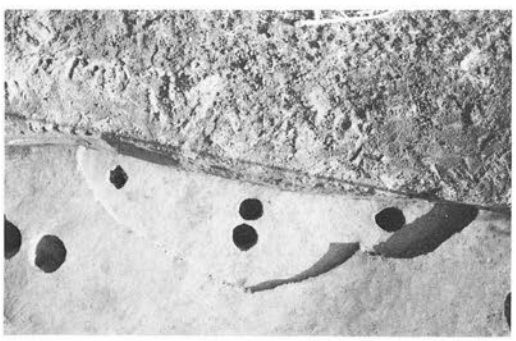


第14号住居跡

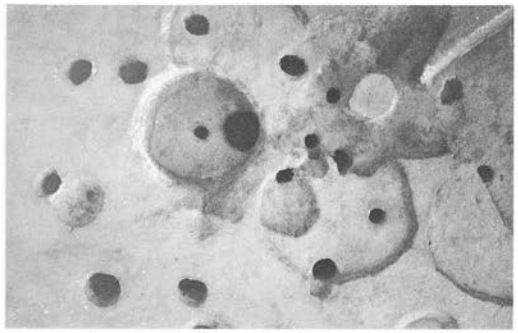


第15号住居跡

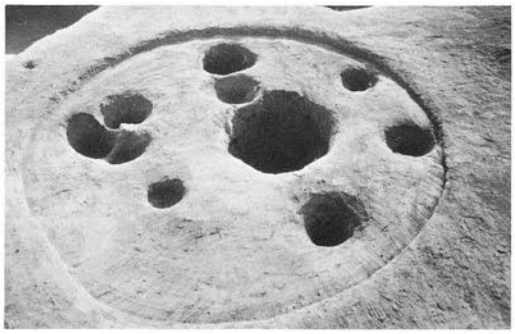
第30号住居跡



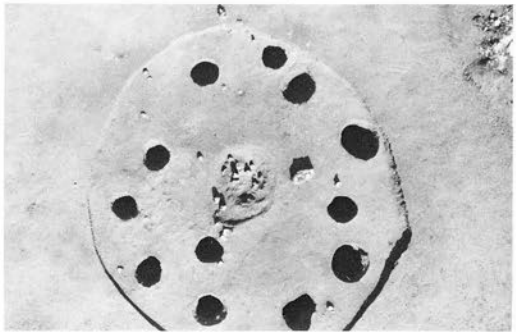
第35・47・48号住居跡



第38・50・60号住居跡



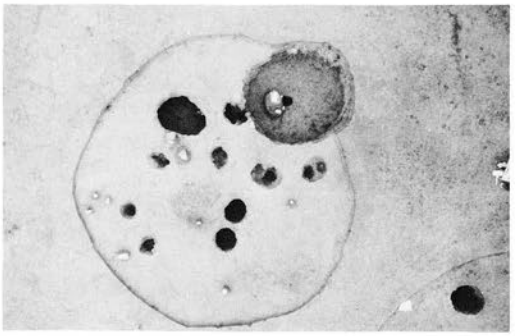
第42号住居跡



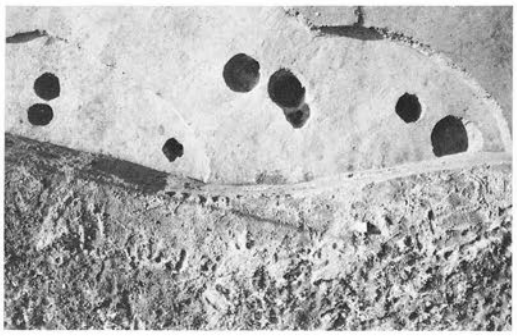
第43号住居跡

第45号住居跡

第45号住居跡遺物(シカの歯牙)出土状況

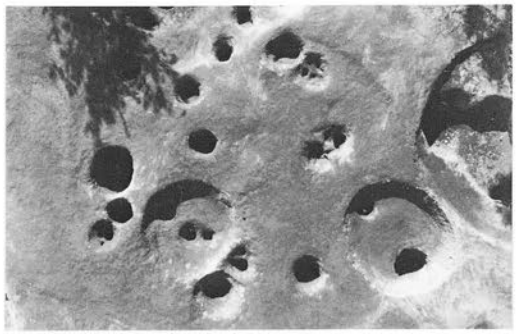


第46号住居跡



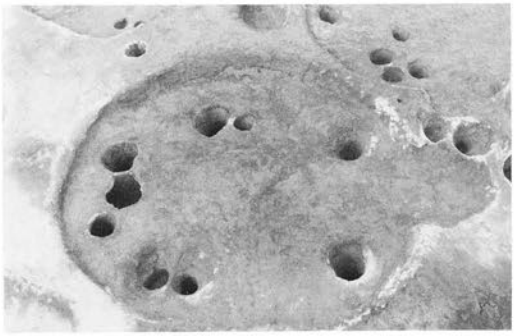
第47号住居跡

第55号住居跡



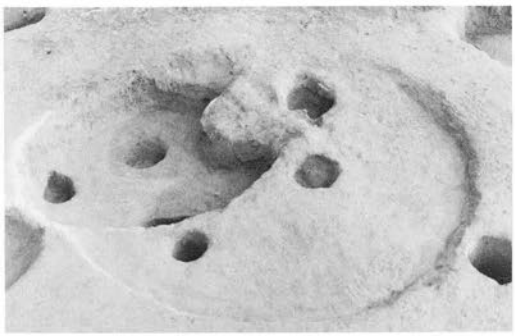
第57号住居跡

第58号住居跡



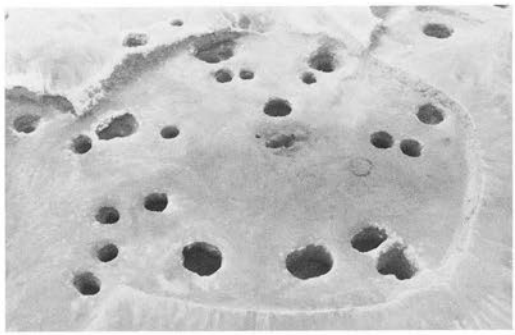
第62号住居跡

第62号住居跡遺物出土状況



第66号住居跡・第147号土坑

第68号住居跡

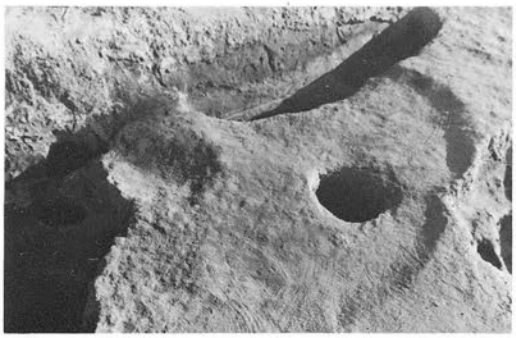


第69号住居跡

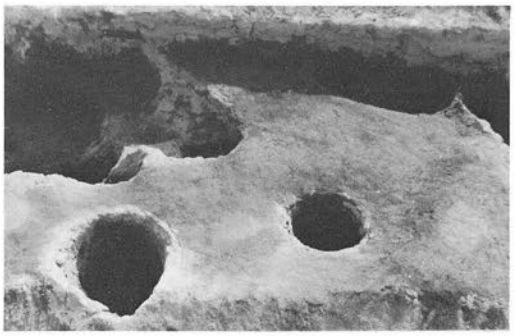
第69号住居跡遺物出土状況

第70号住居跡

第71号住居跡

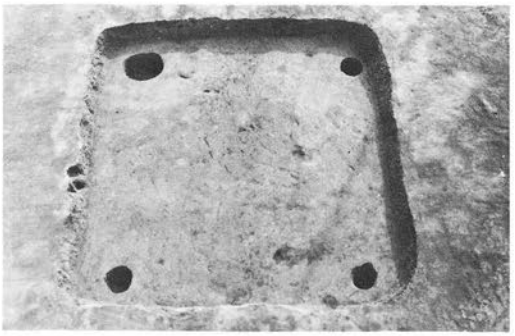


第72号住居跡

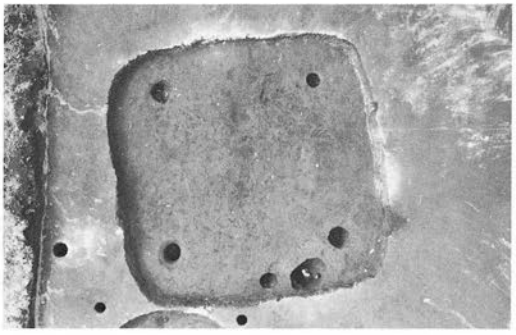


第74号住居跡

第75号住居跡

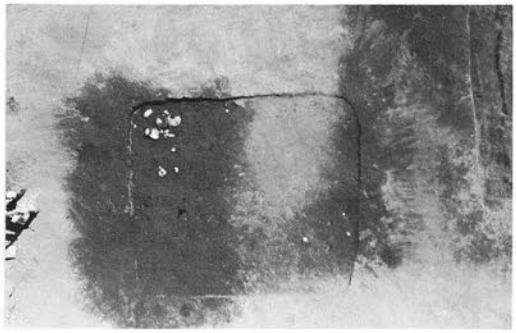


第17号住居跡

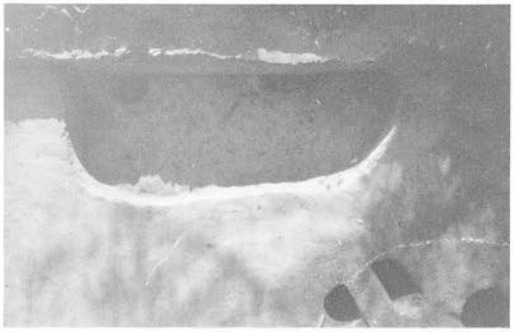


第22号住居跡

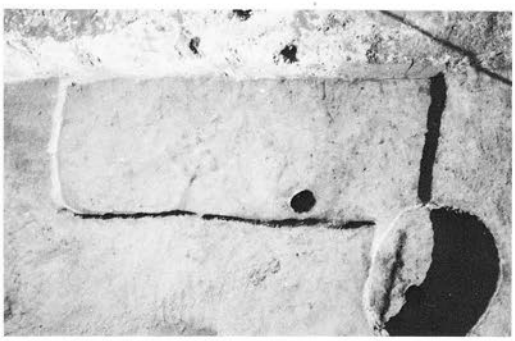
第22号住居跡遺物出土状況



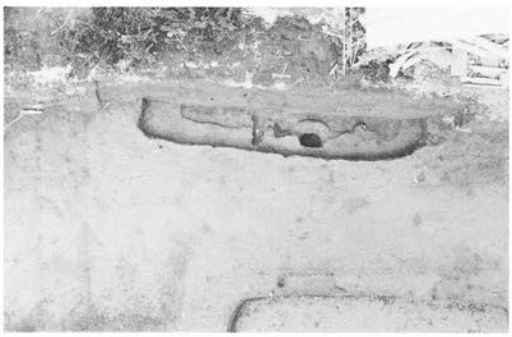
第23号住居跡



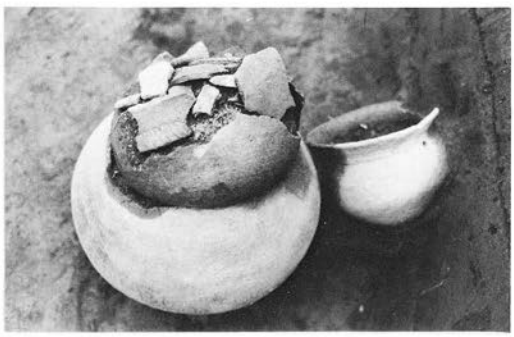
第25号住居跡



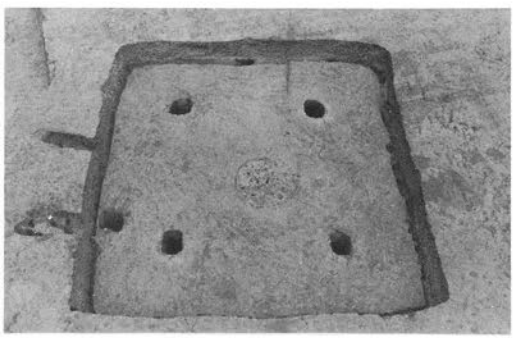
第36号住居跡



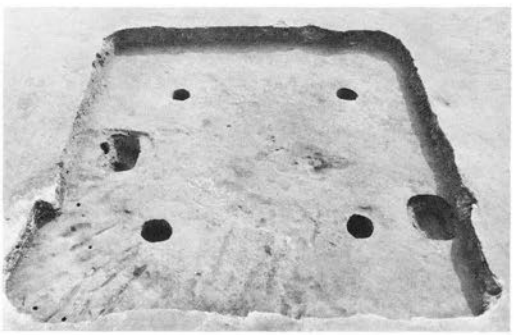
第40号住居跡



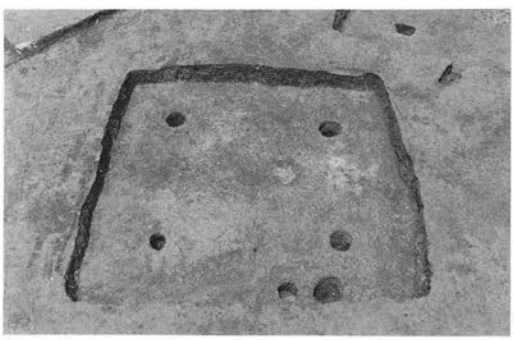
第40号住居跡遺物出土状況



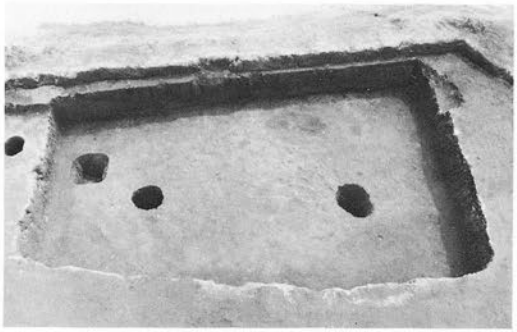
第 4 号住居跡



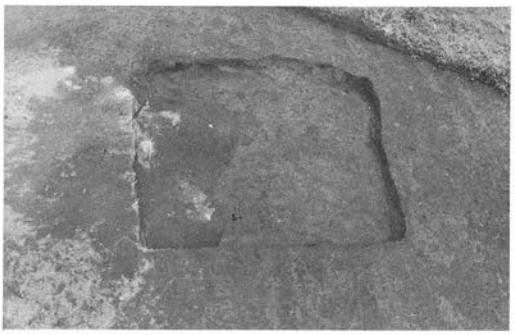
第 5 号住居跡



第 6 号住居跡

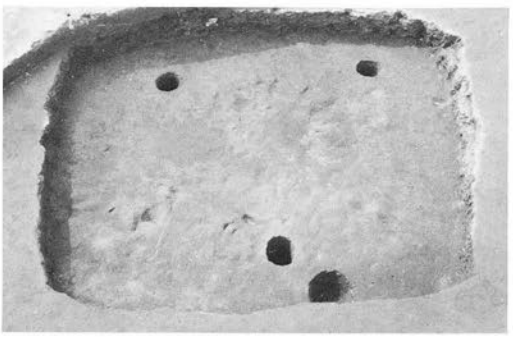


第 8 号住居跡

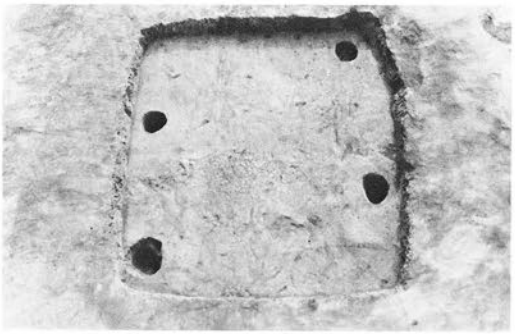


第 9 号住居跡

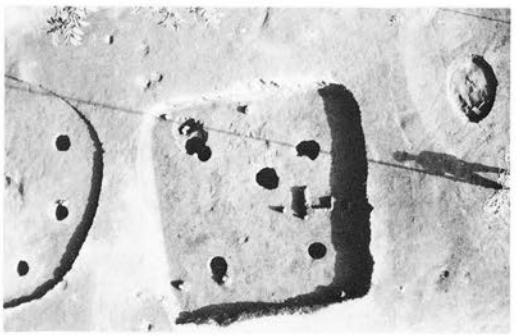
第10号住居跡



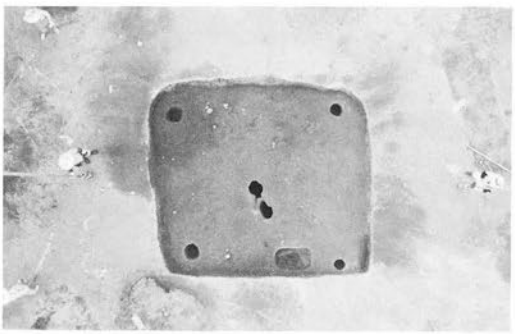
第11号住居跡



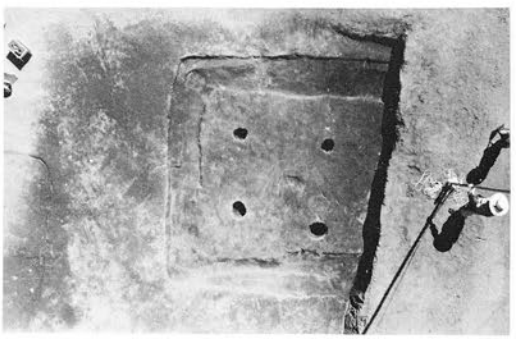
第18号住居跡



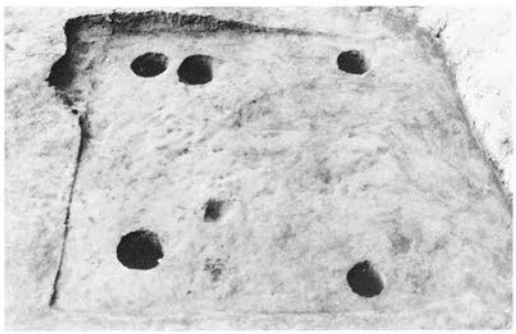
第19号住居跡



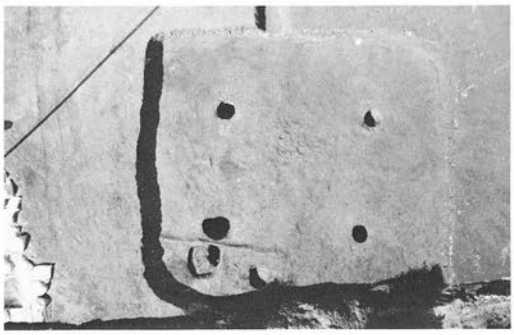
第20号住居跡



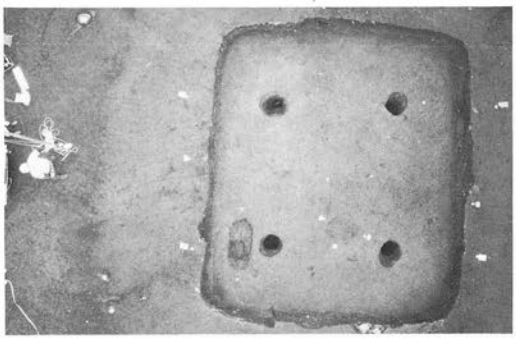
第21号住居跡



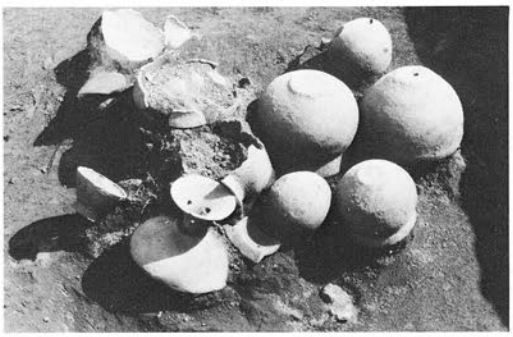
第24号住居跡



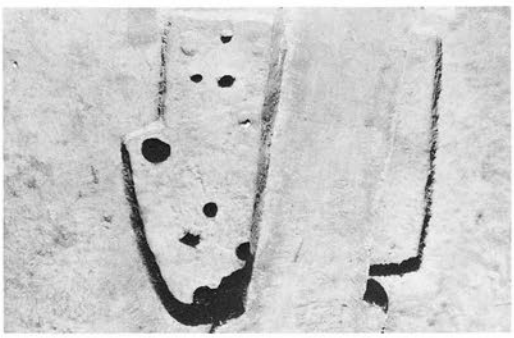
第27号住居跡



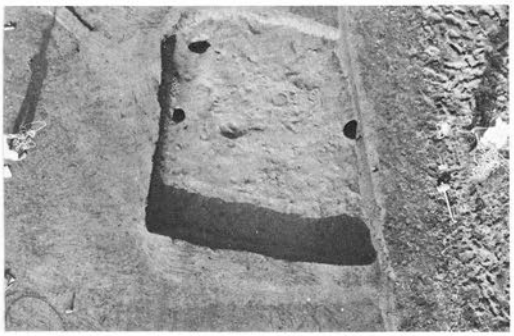
第29号住居跡



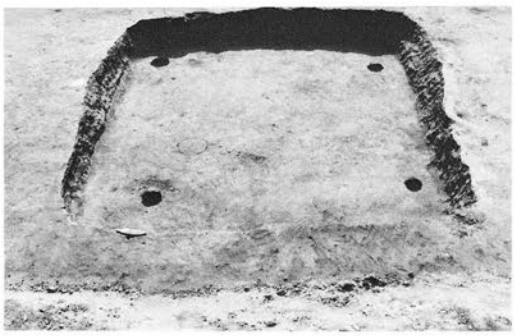
第29号住居跡遺物出土状況



第31・32・33号住居跡



第34号住居跡

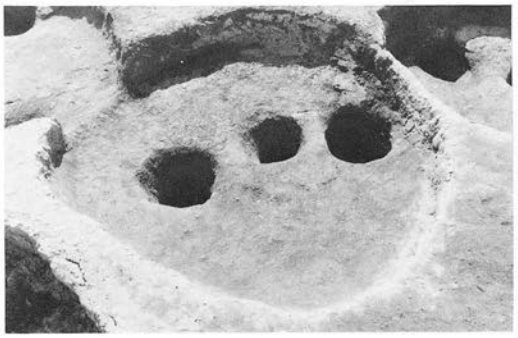


第37号住居跡

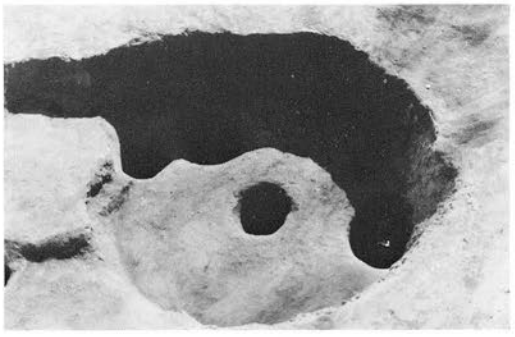
第39号住居跡

第3号土坑

第5号土壙

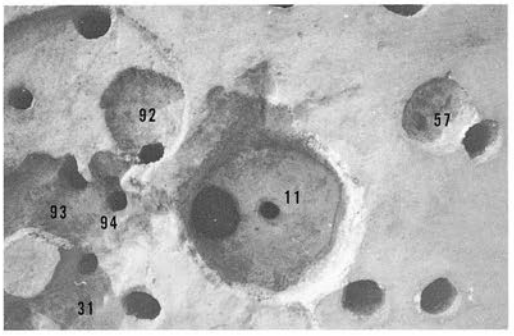


第7号土坑



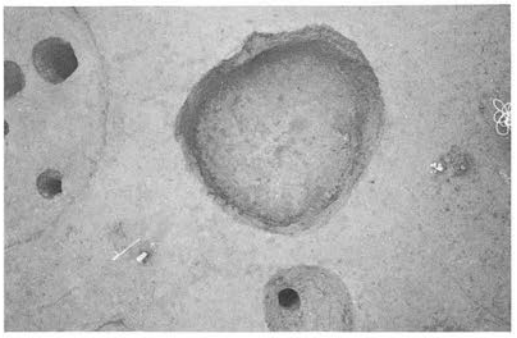
第8号土坑

第10号土坑



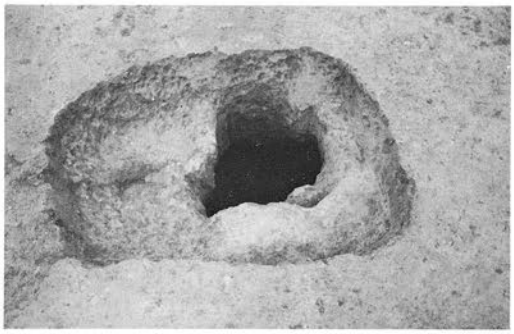
第11・31・57・92・93・94号土坑

第13号土坑



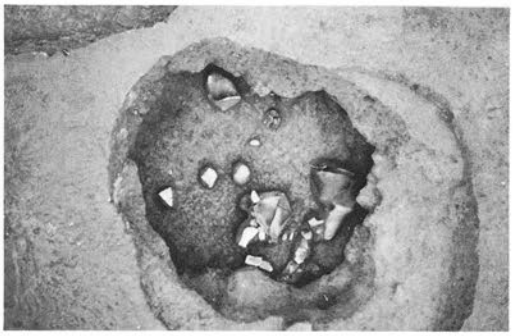
第15号土坑

第17号土坑

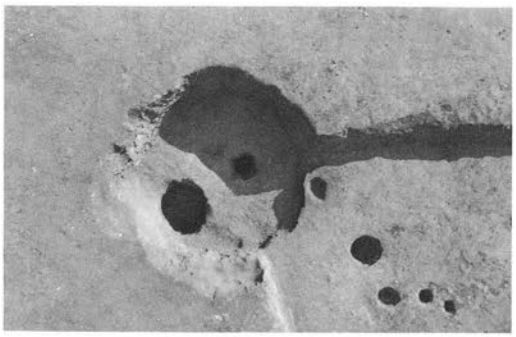


第19号土坑

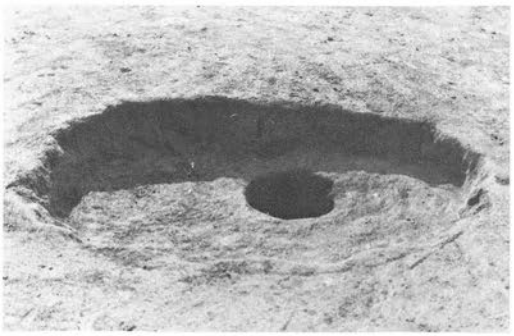
第30号土坑



第32号土坑遺物出土状況



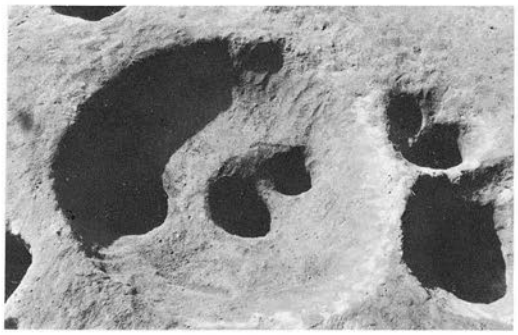
第40号土坑



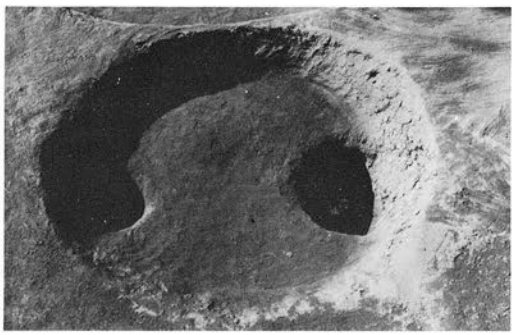
第52号土坑

第58号土坑

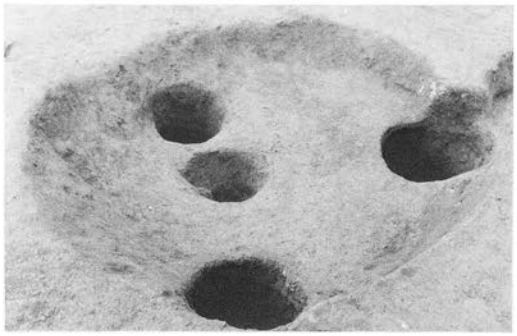
第64号土坑



第66号土坑

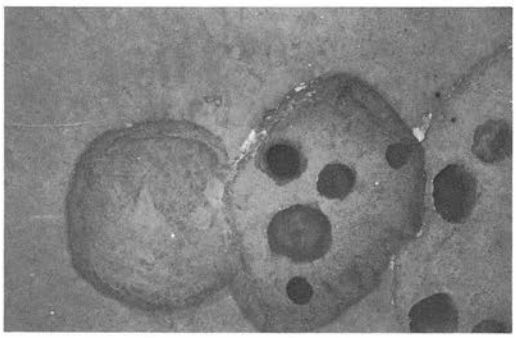


第67号土坑



第70号土坑

第71号土坑



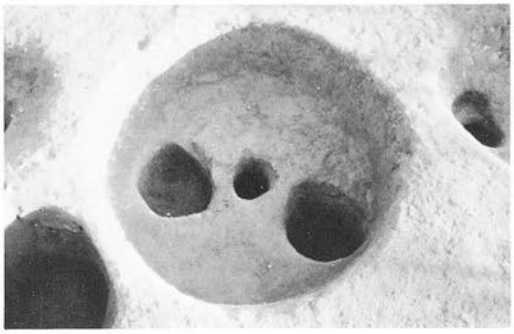
第74・75号土坑

第85号土坑

第86号土坑

第88号土坑

第97号土坑



第98号土坑

第100号土坑

第101号土坑

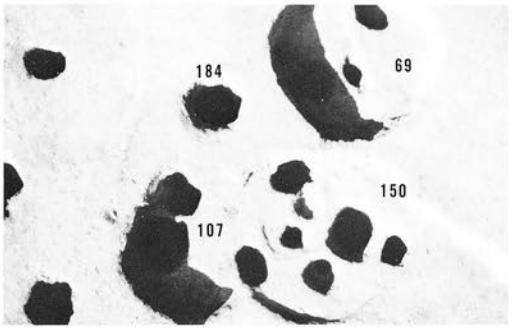
第102号土坑

第103号土坑

第104号土坑

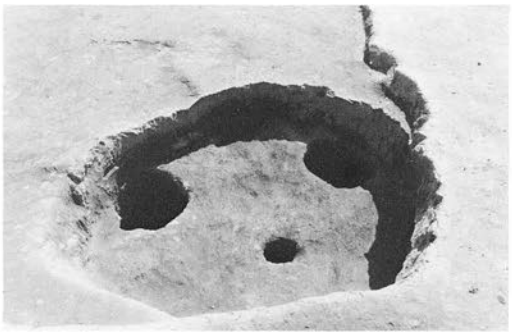
第105号土坑

第106号土坑



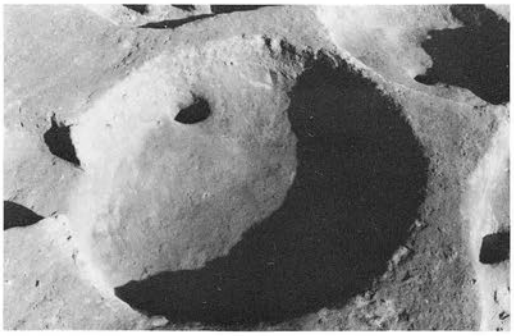
第69・107・150・184号土坑

第111号土坑

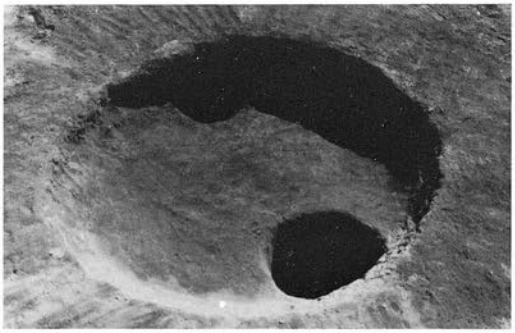


第115号土坑

第122号土坑

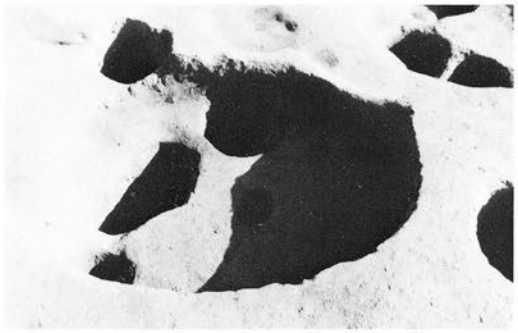


第123号土坑

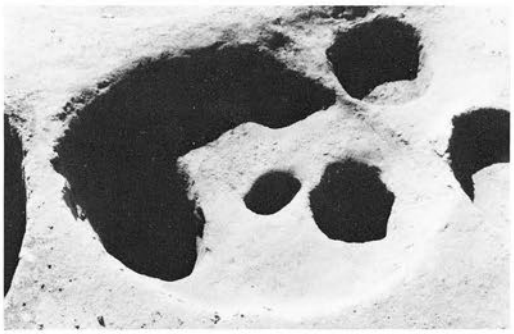


第129号土坑

第138号土坑



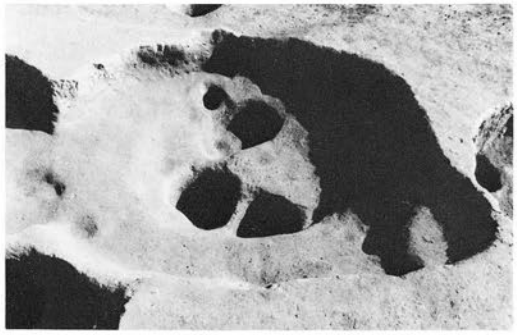
第144号土坑



第145号土坑

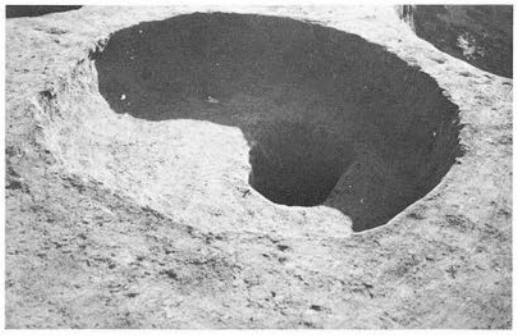
第146号土坑

第147号土坑

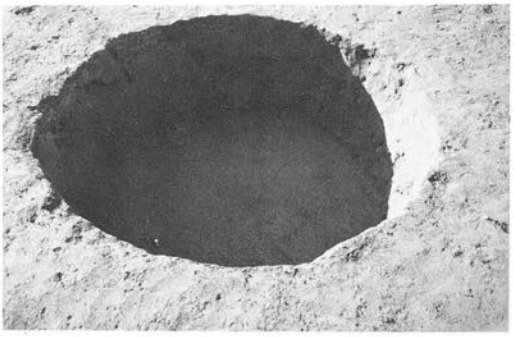


第149号土坑

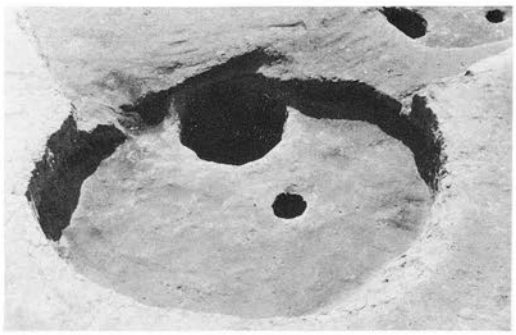
第150号土坑



第154号土坑

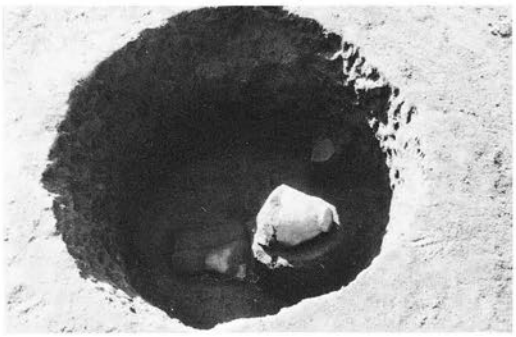


第155号土坑

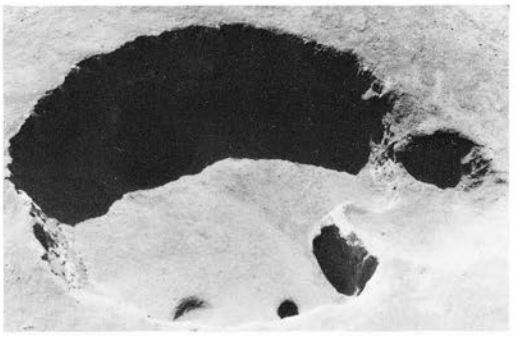


第165号土坑

第169号土坑



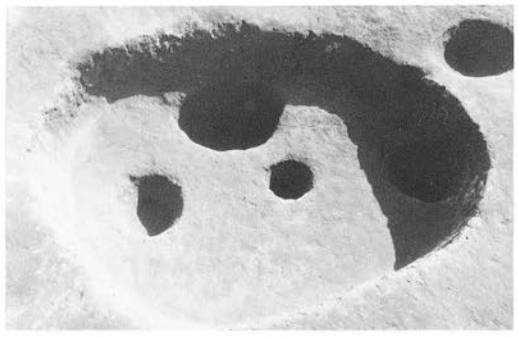
第191号土坑遺物出土状況



第194号土坑

第196号土坑

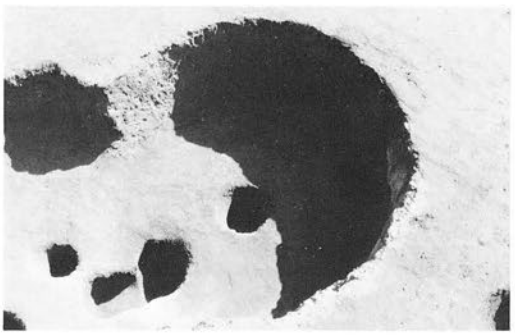
第197号土坑



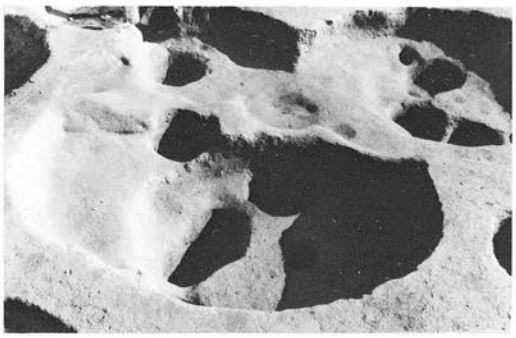
第199号土坑

第200号土坑

第206号土坑



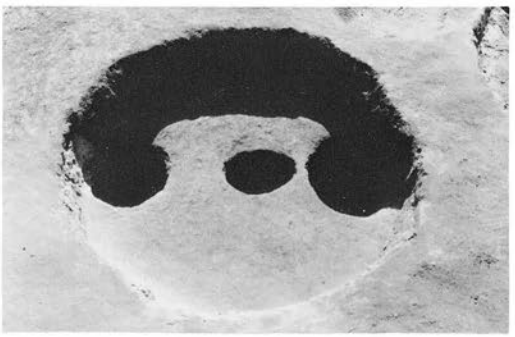
第207号土坑



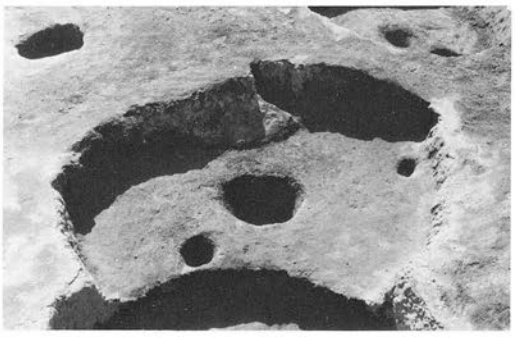
第210号土坑

第212号土坑

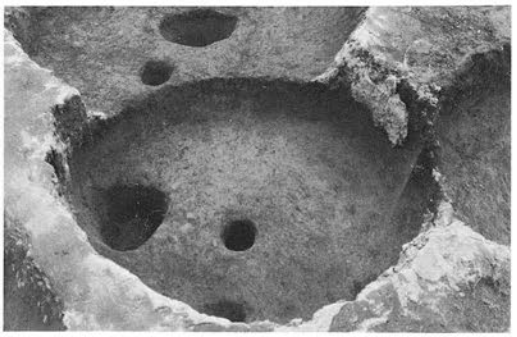
第220号土坑



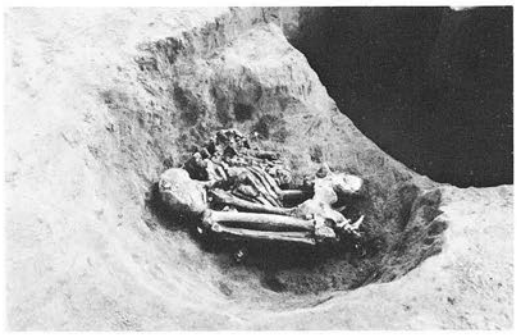
第221号土坑



第225号土坑

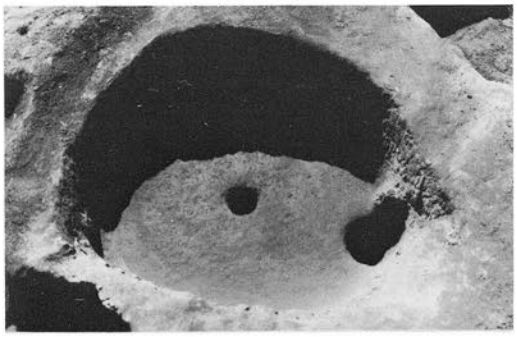


第226号土坑

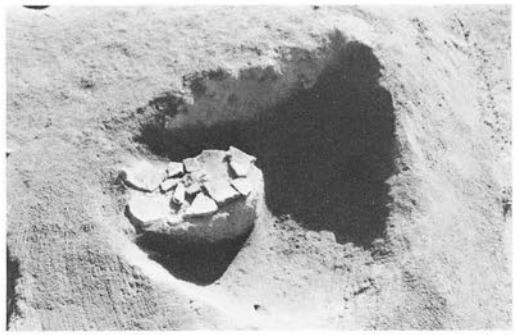


第227号土壙遺物(人骨)出土状況

第229号土坑



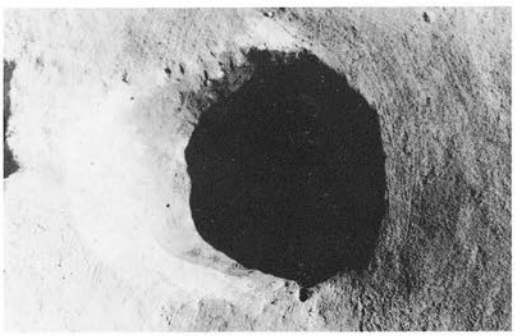
第232号土坑



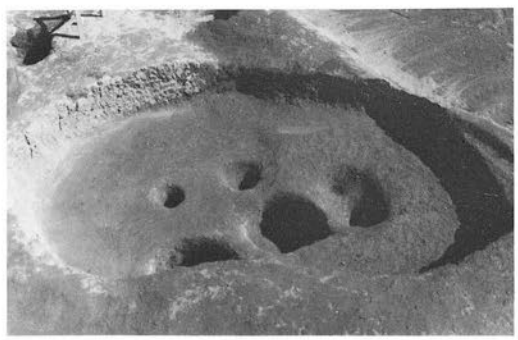
第235号土坑遺物出土状況

第236号土坑

第237号土坑遺物出土状況

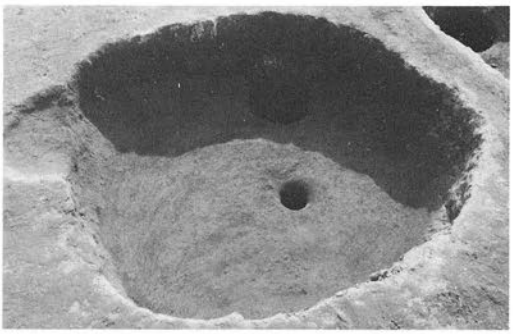


第238号土坑



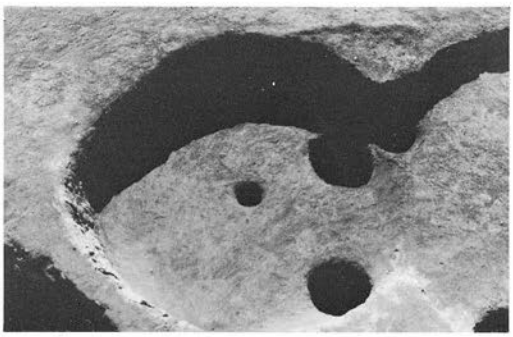
第239号土坑

第240号土坑

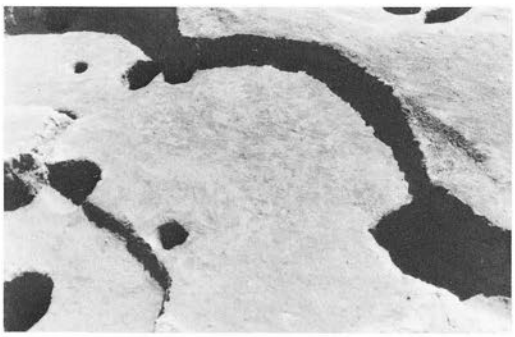


第241号土坑

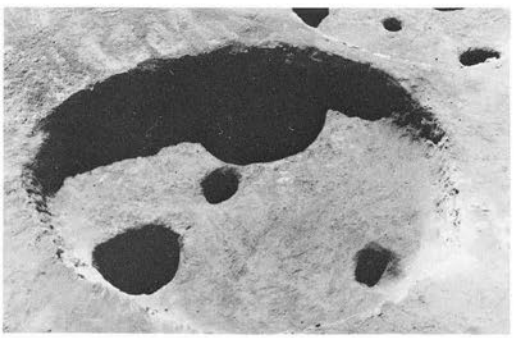
第242号土坑



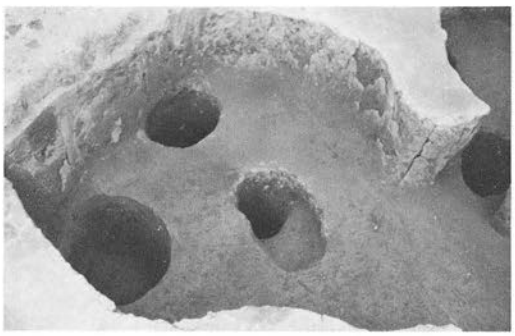
第243号土坑



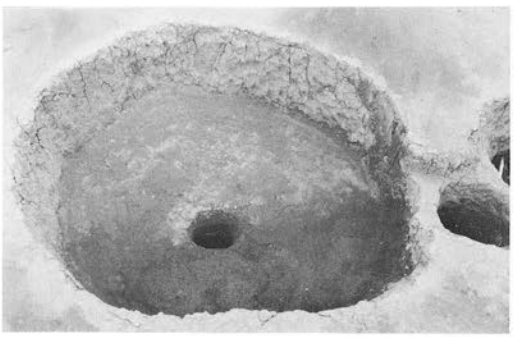
第245号土坑



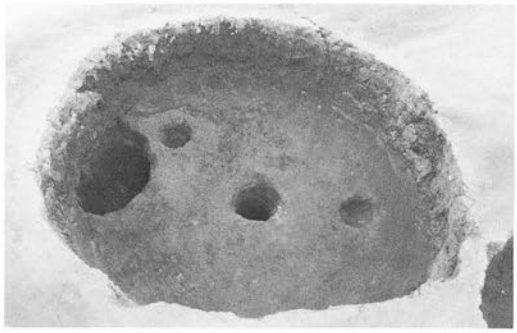
第246号土坑



第247号土坑



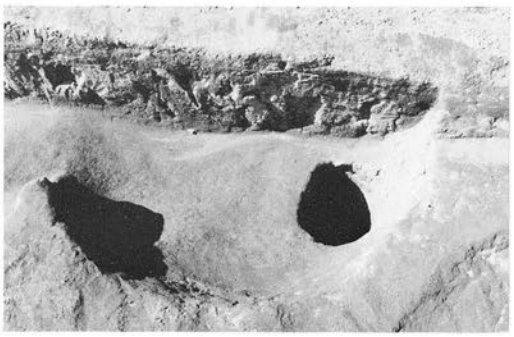
第249号土坑



第250号土坑

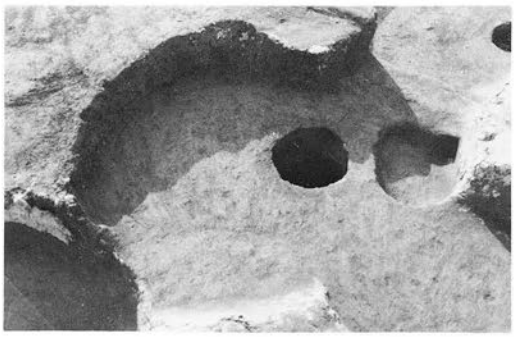
第251号土坑

第253号土坑



第255号土坑

第257号土坑



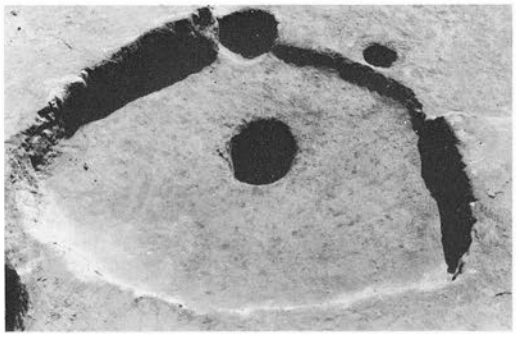
第258号土坑

第260号土坑

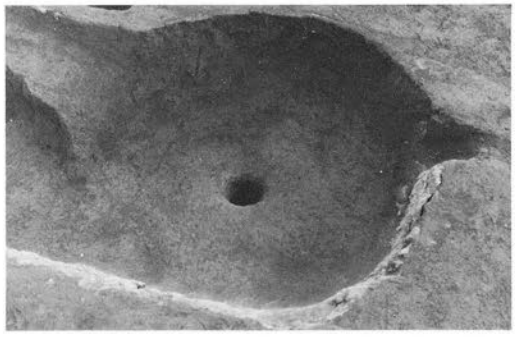
第261号土坑

第262号土坑

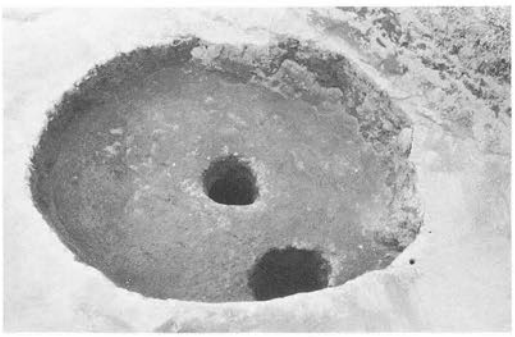
第264号土坑



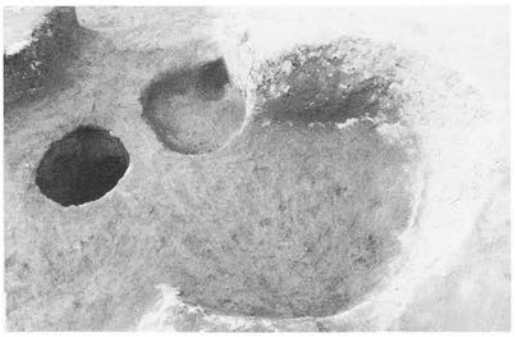
第265号土坑



第266号土坑

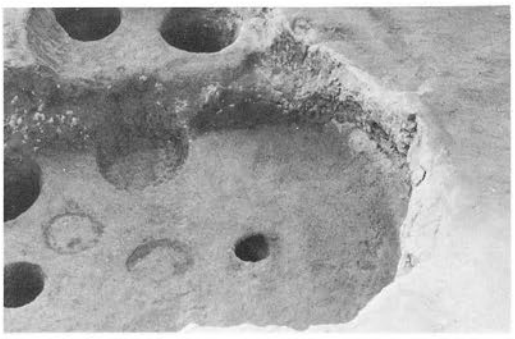


第271号土坑

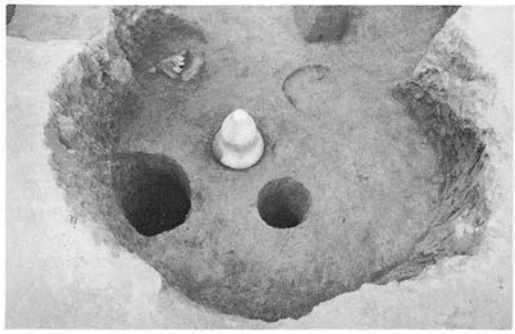


第277号土坑

第283号土坑

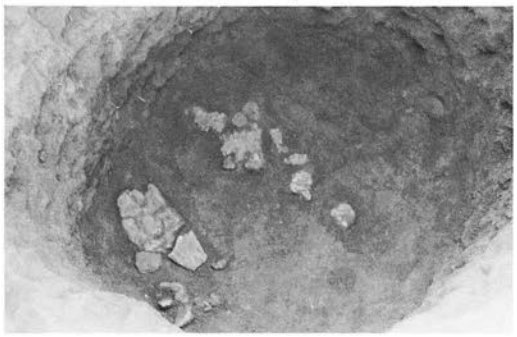


第284号土坑

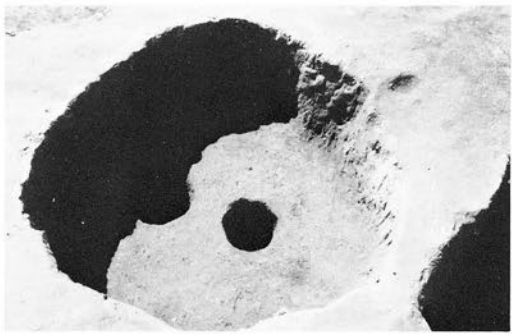


第285号土坑遺物出土状況

第286号土坑



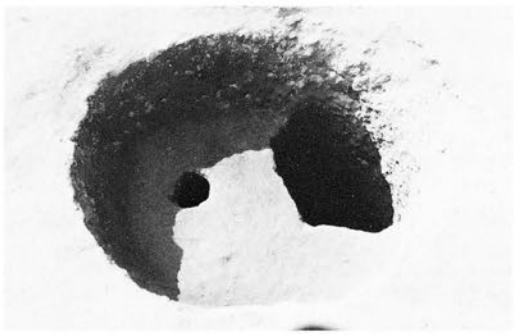
第291号土坑遺物出土状況



第293号土坑

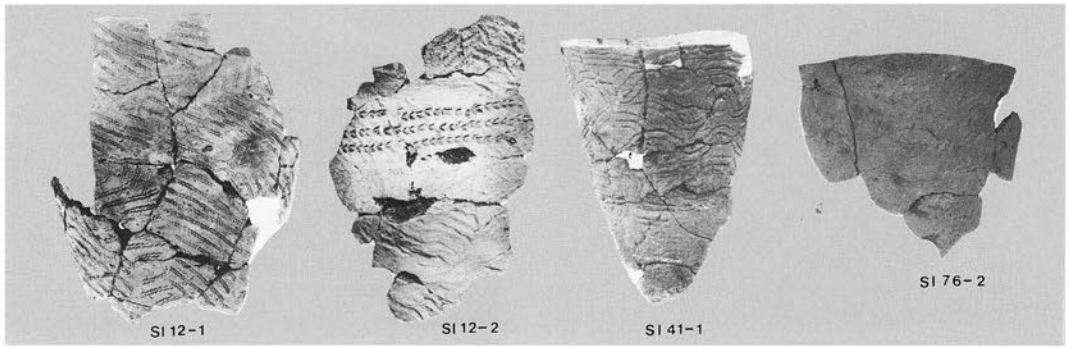
第297号土坑

第298号土坑

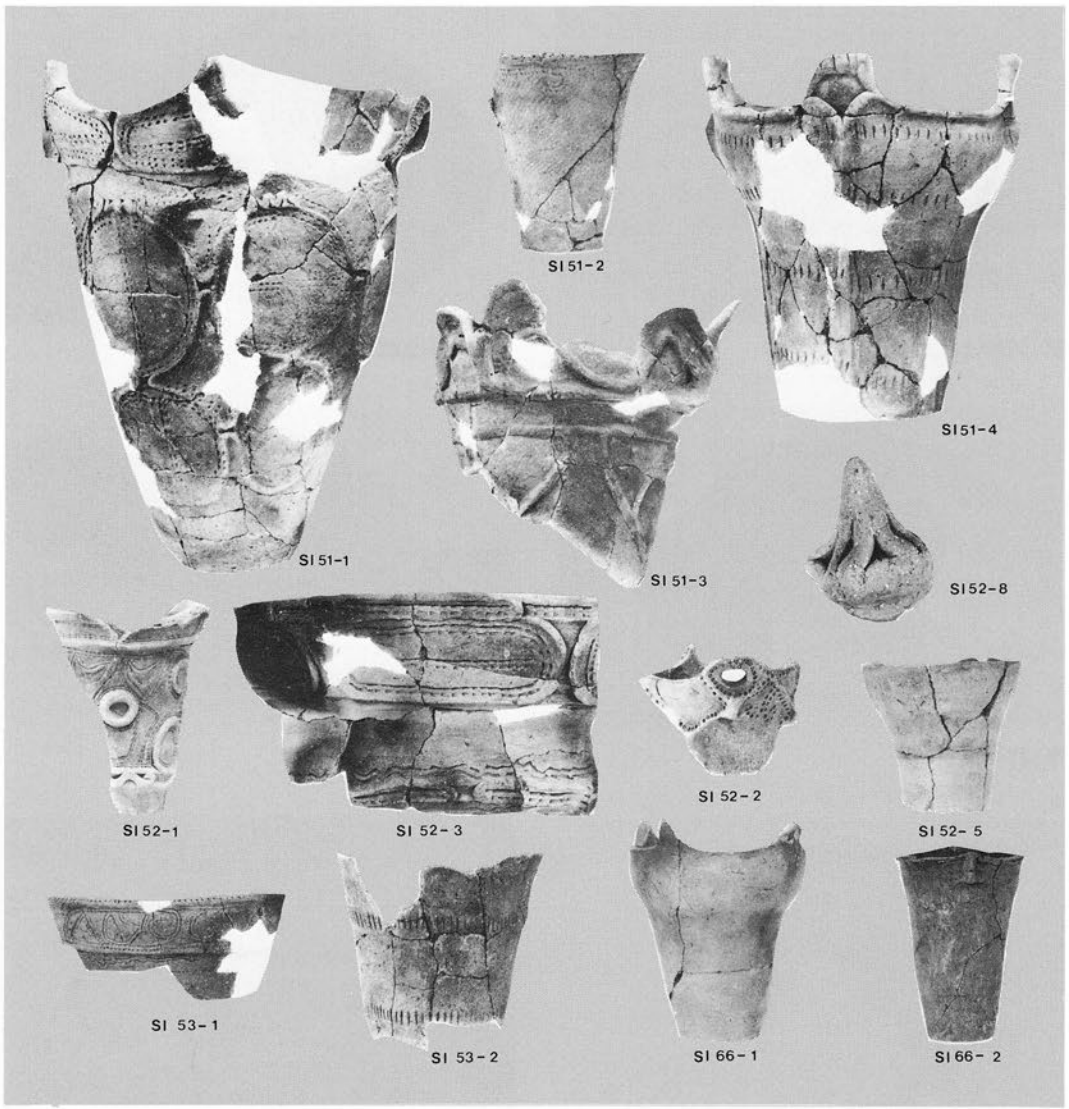


第300号土坑

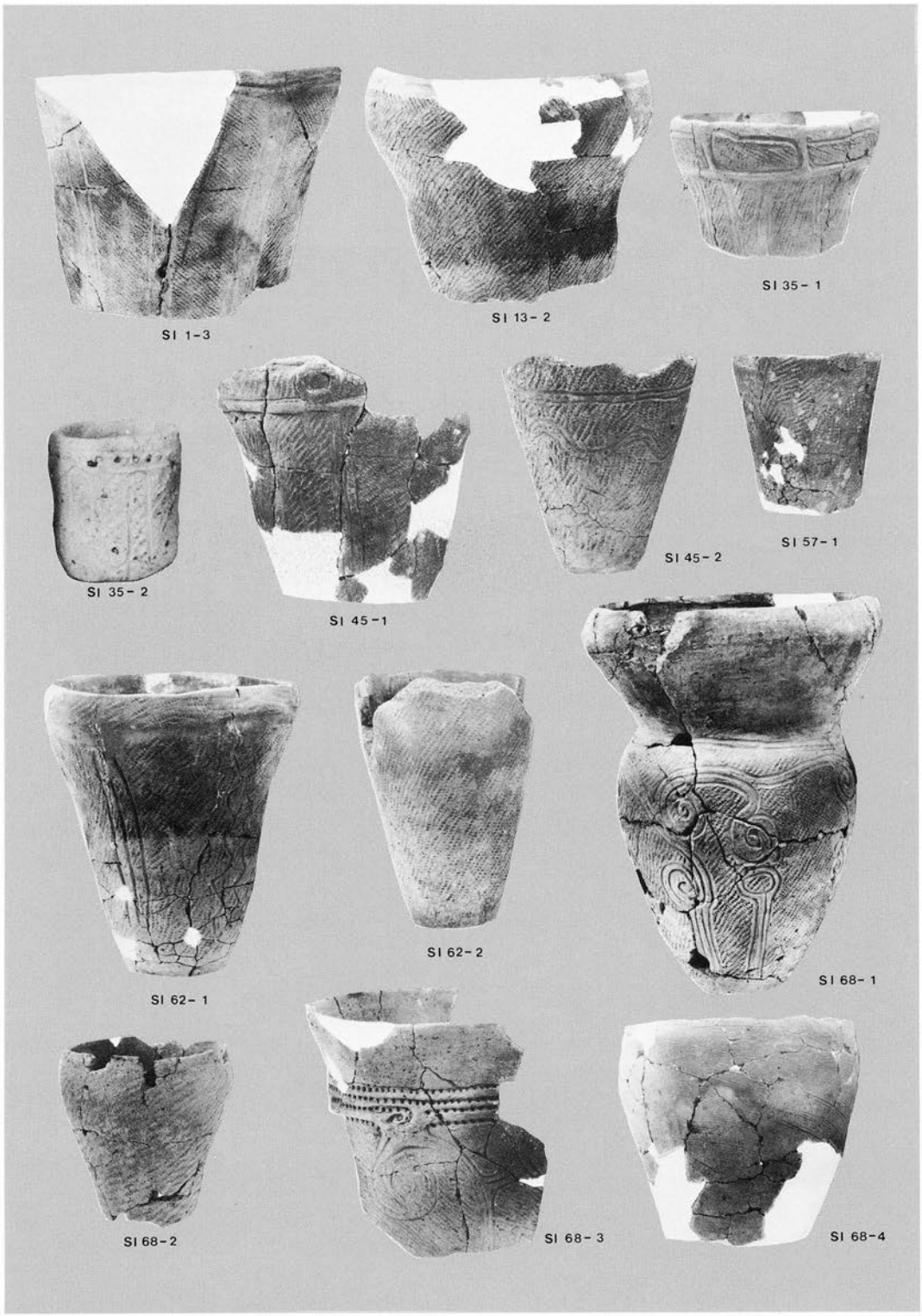
第１・２号溝



縄文時代前期(黒浜)住居跡出土土器

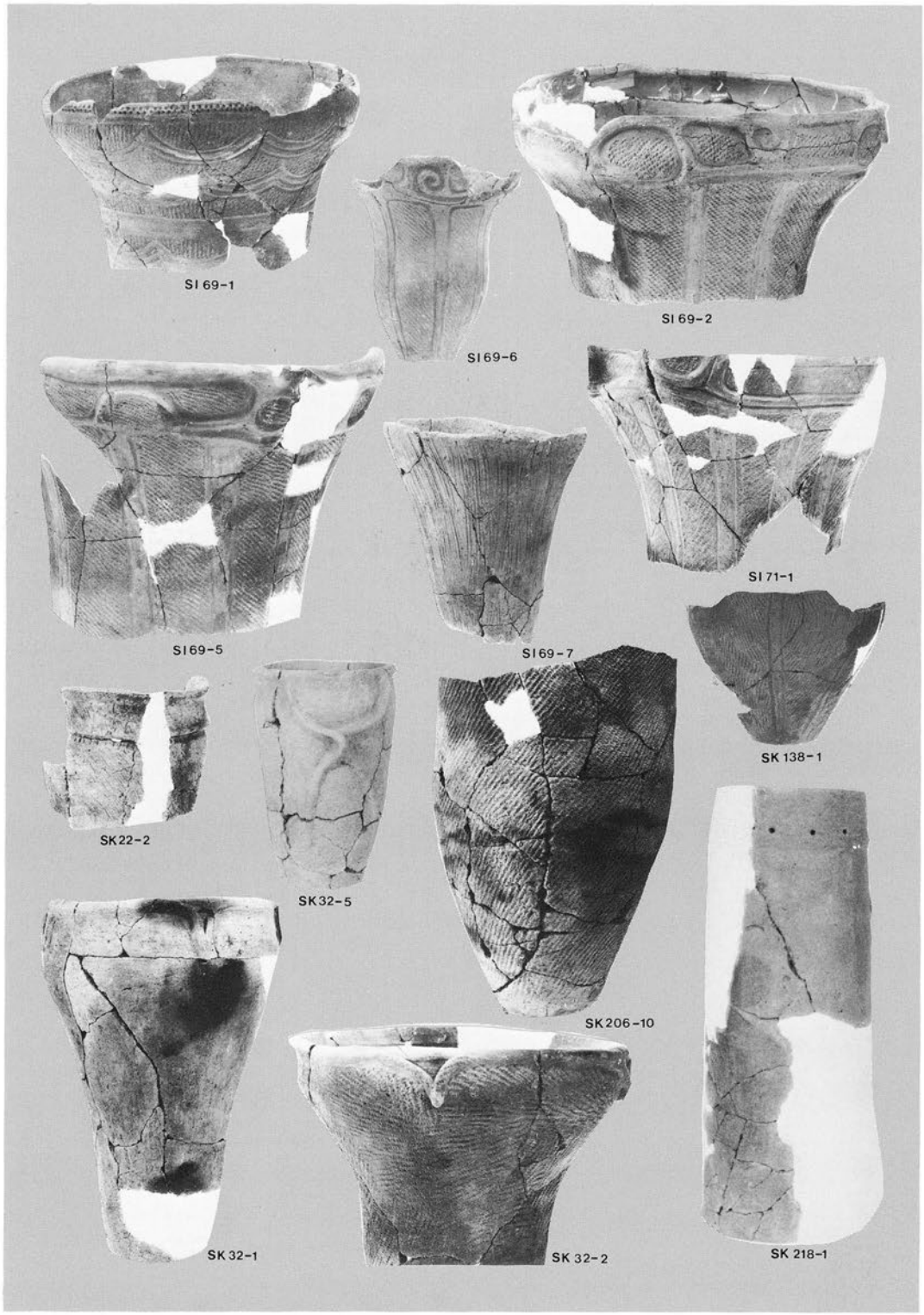


縄文時代中期(阿玉台)住居跡出土土器

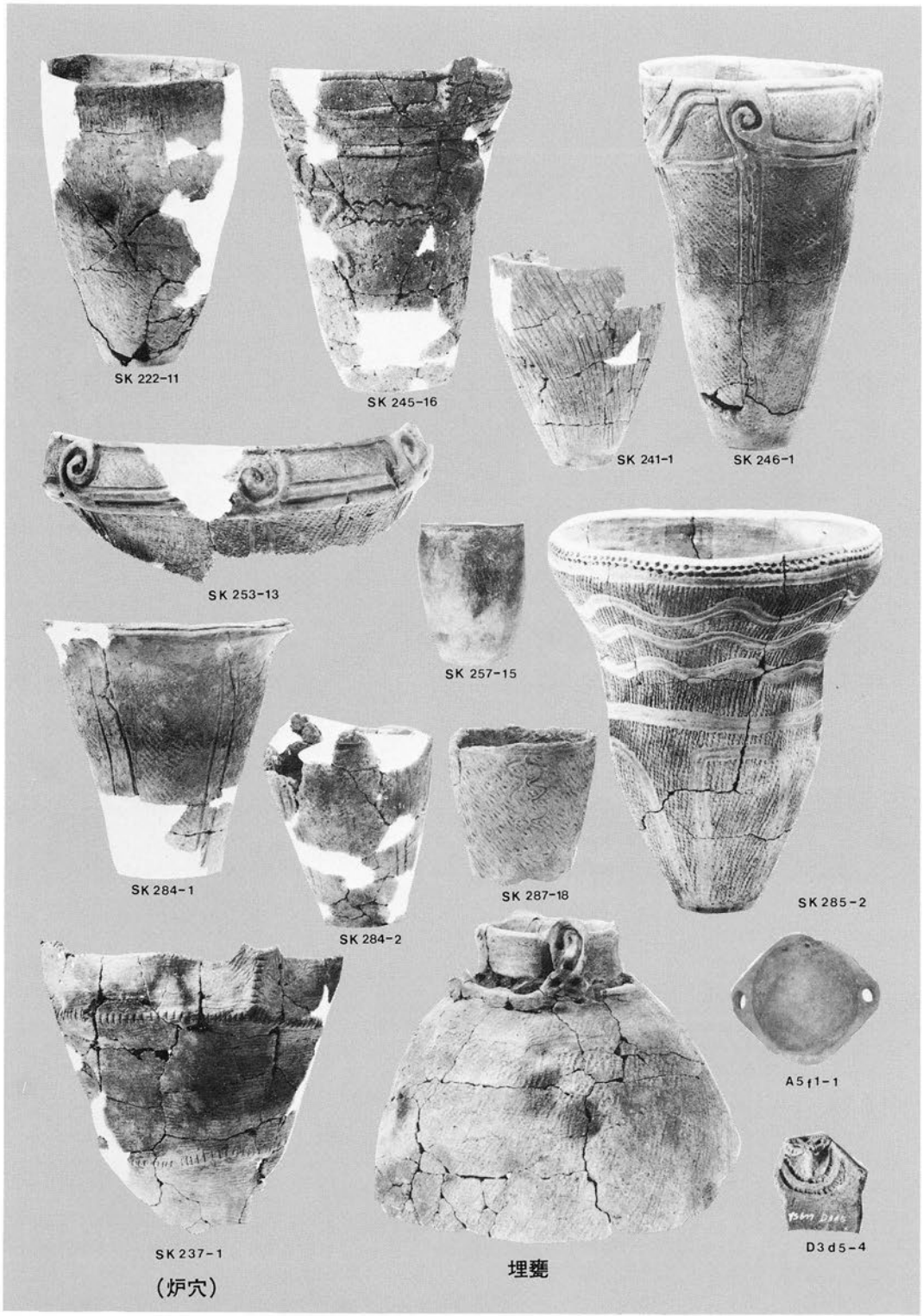


縄文時代中期(加曽利E)住居跡出土土器

PL26

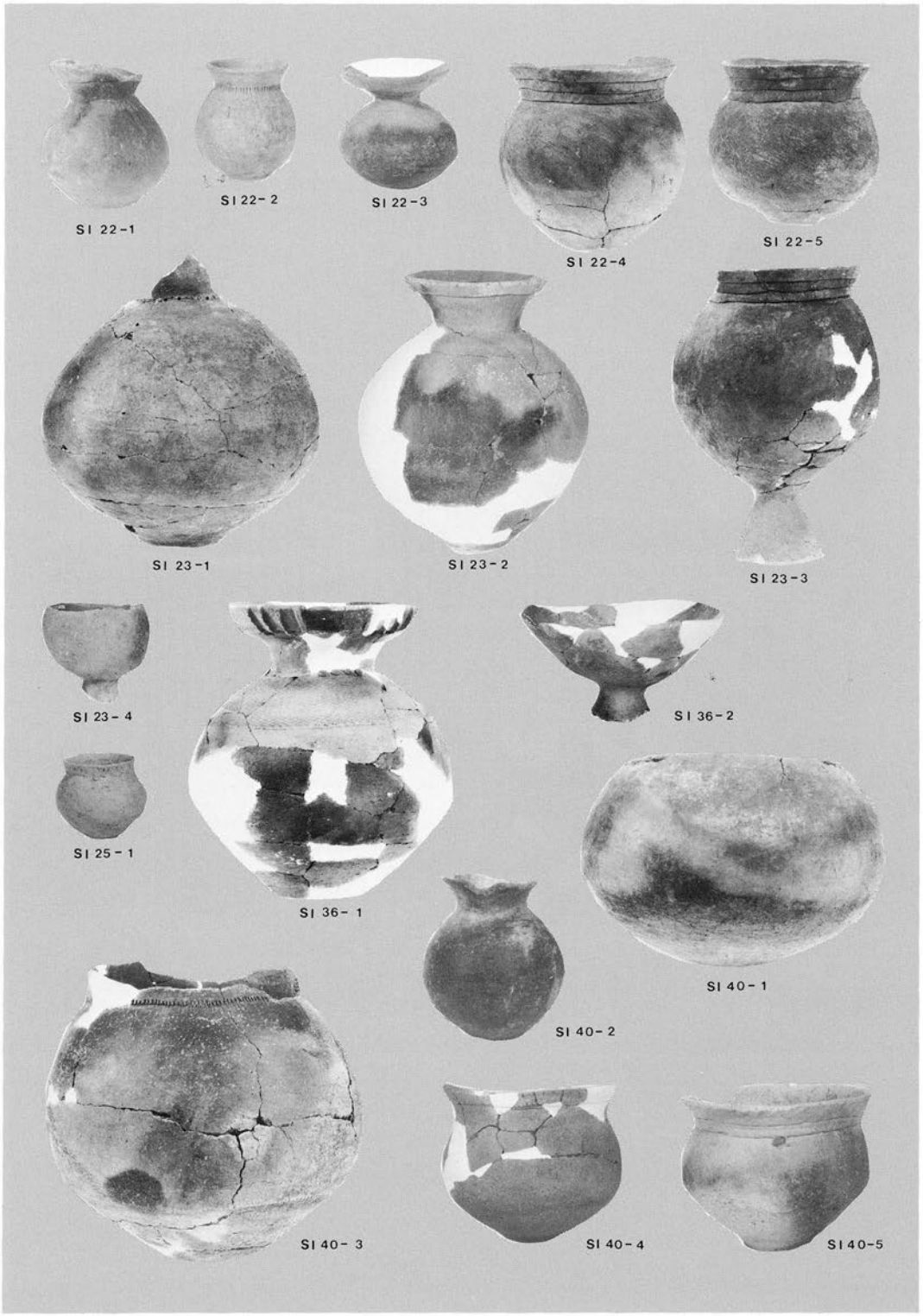


縄文時代中期(加曽利E)住居跡・土坑出土土器

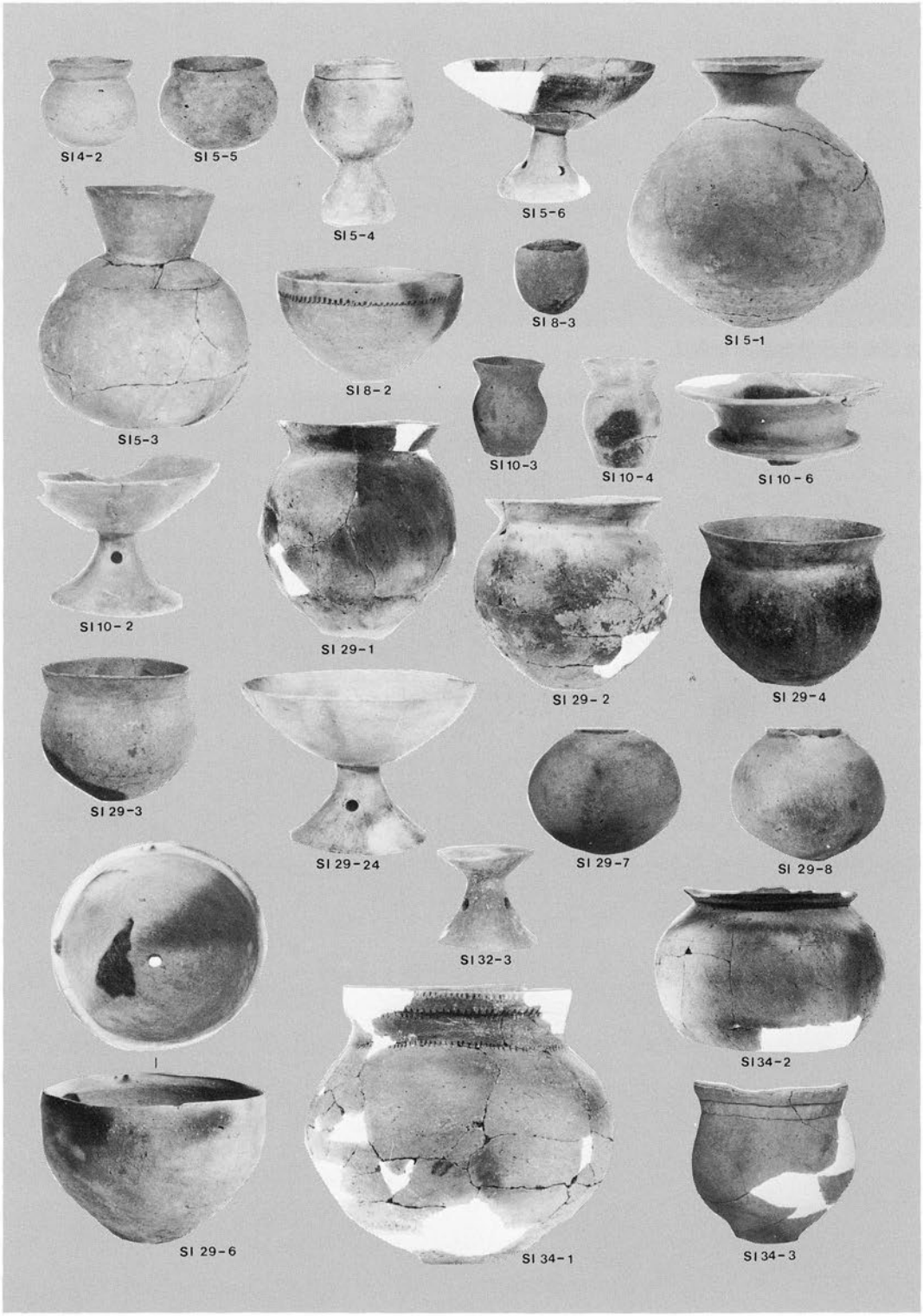


縄文時代土坑・炉穴・埋甕・グリッド出土土器

PL28

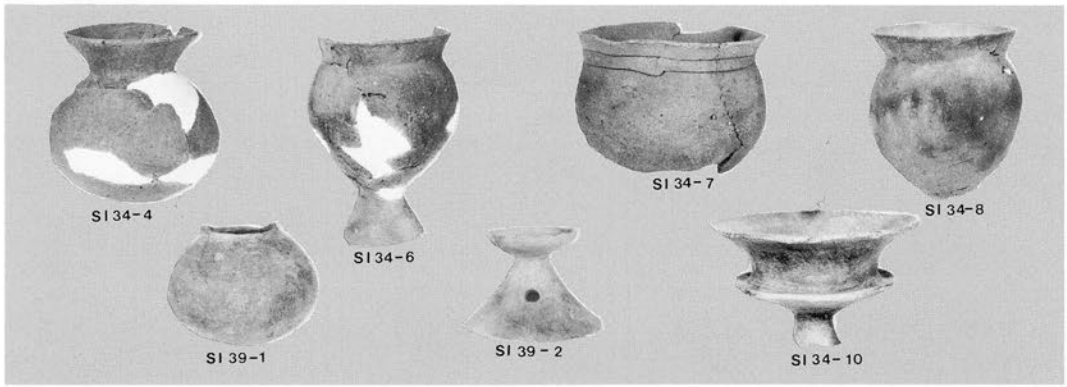


弥生時代住居跡出土土器

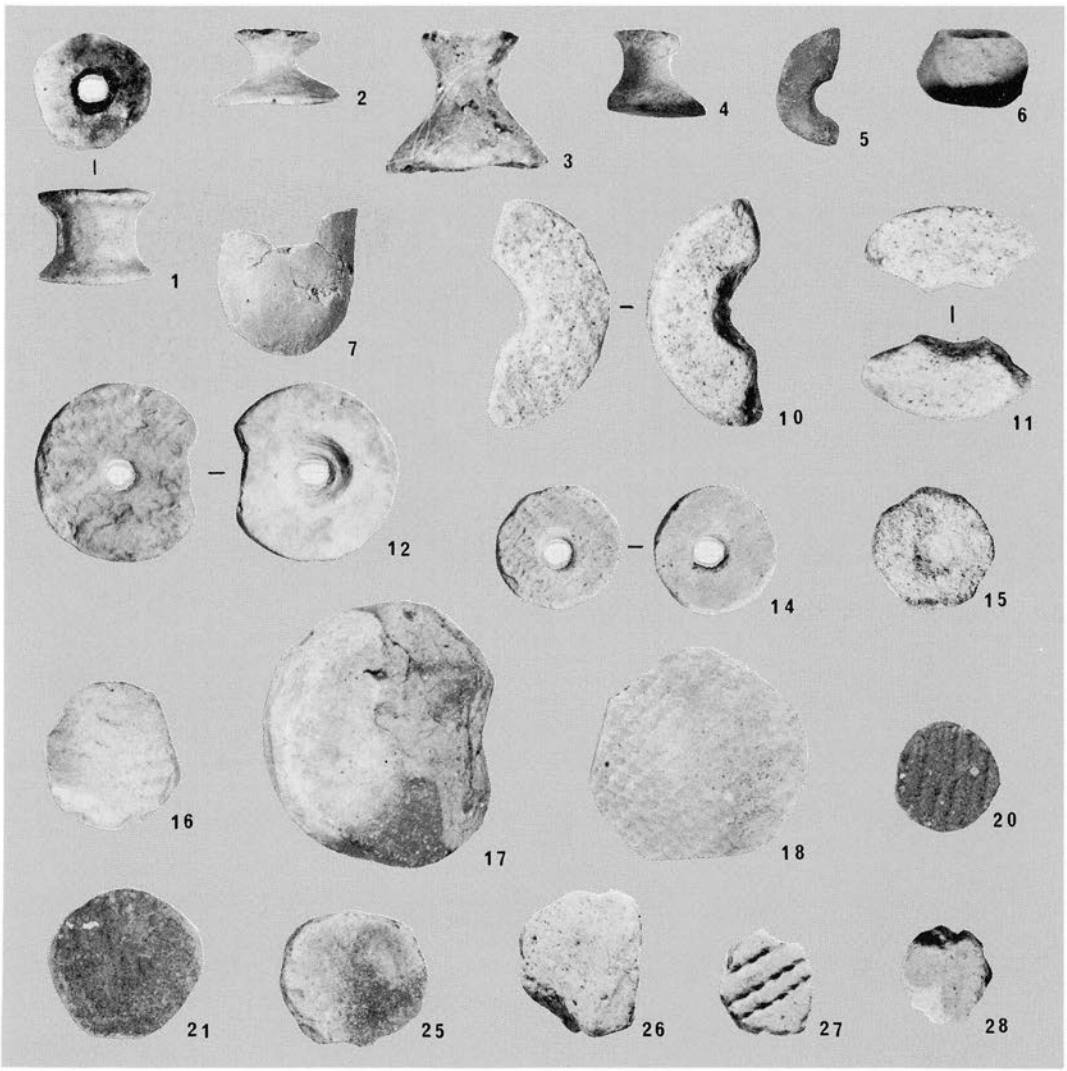


古墳時代住居跡出土土器(1)

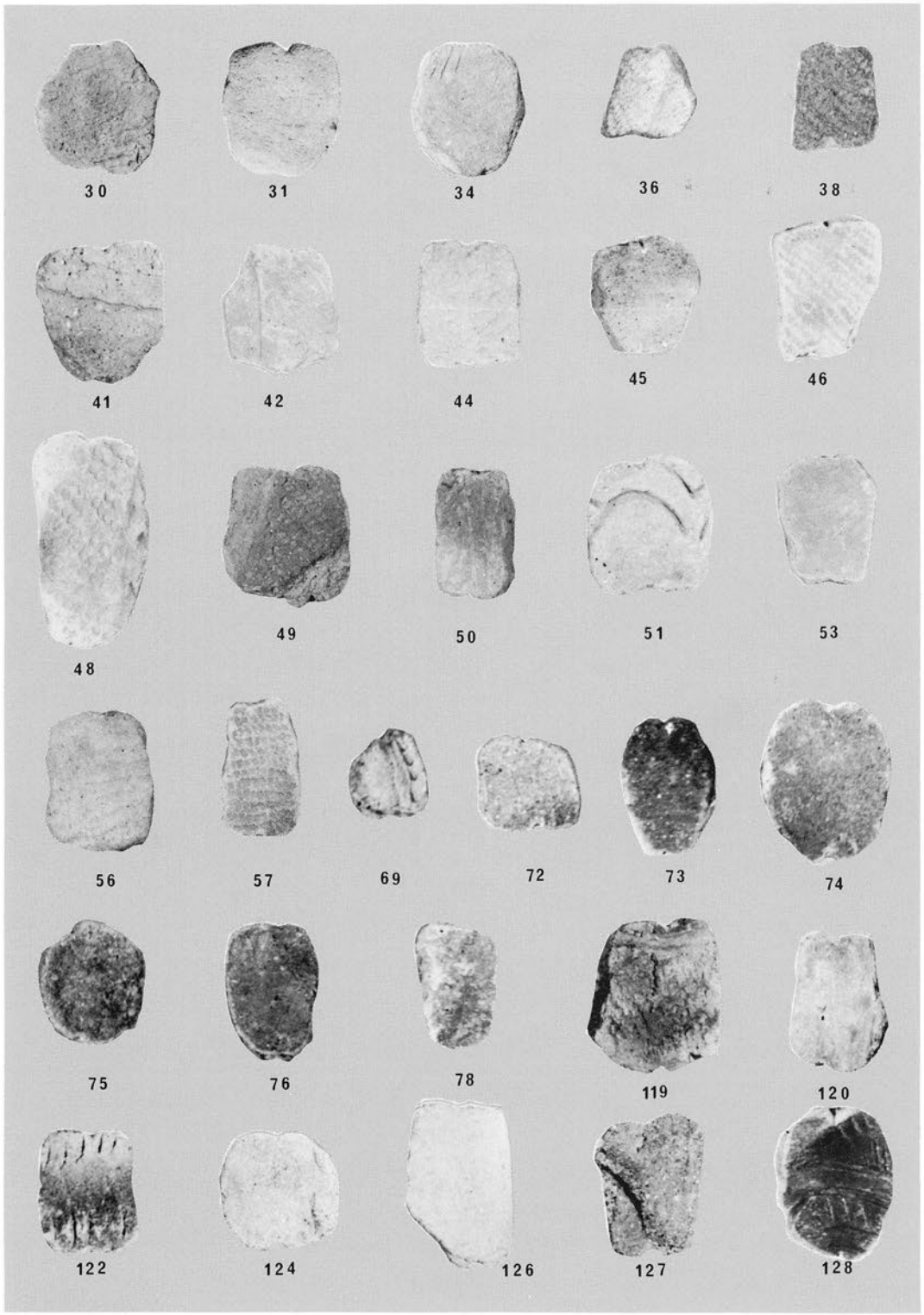
PL30



古墳時代住居跡出土土器(2)

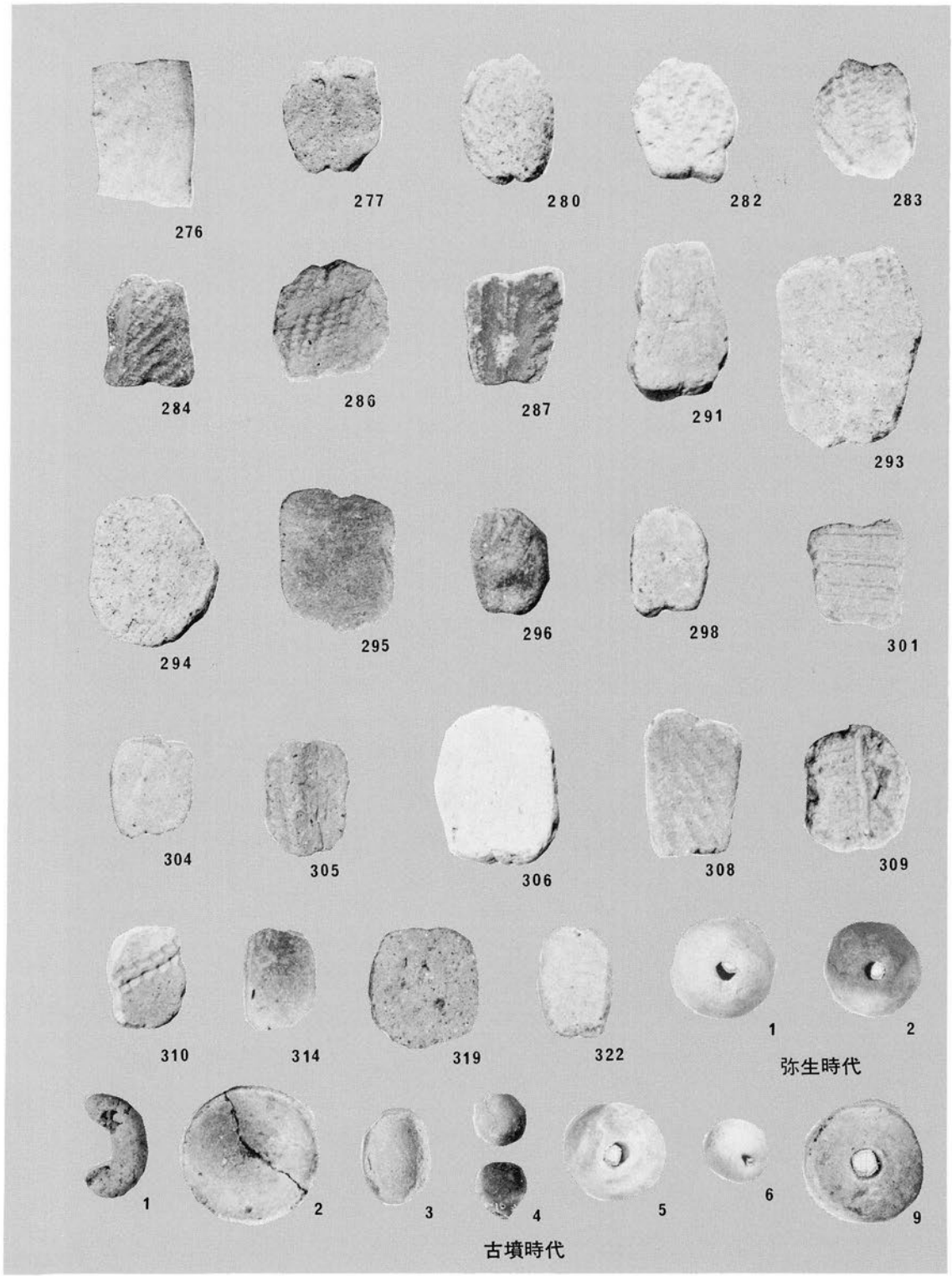


土製品(1)

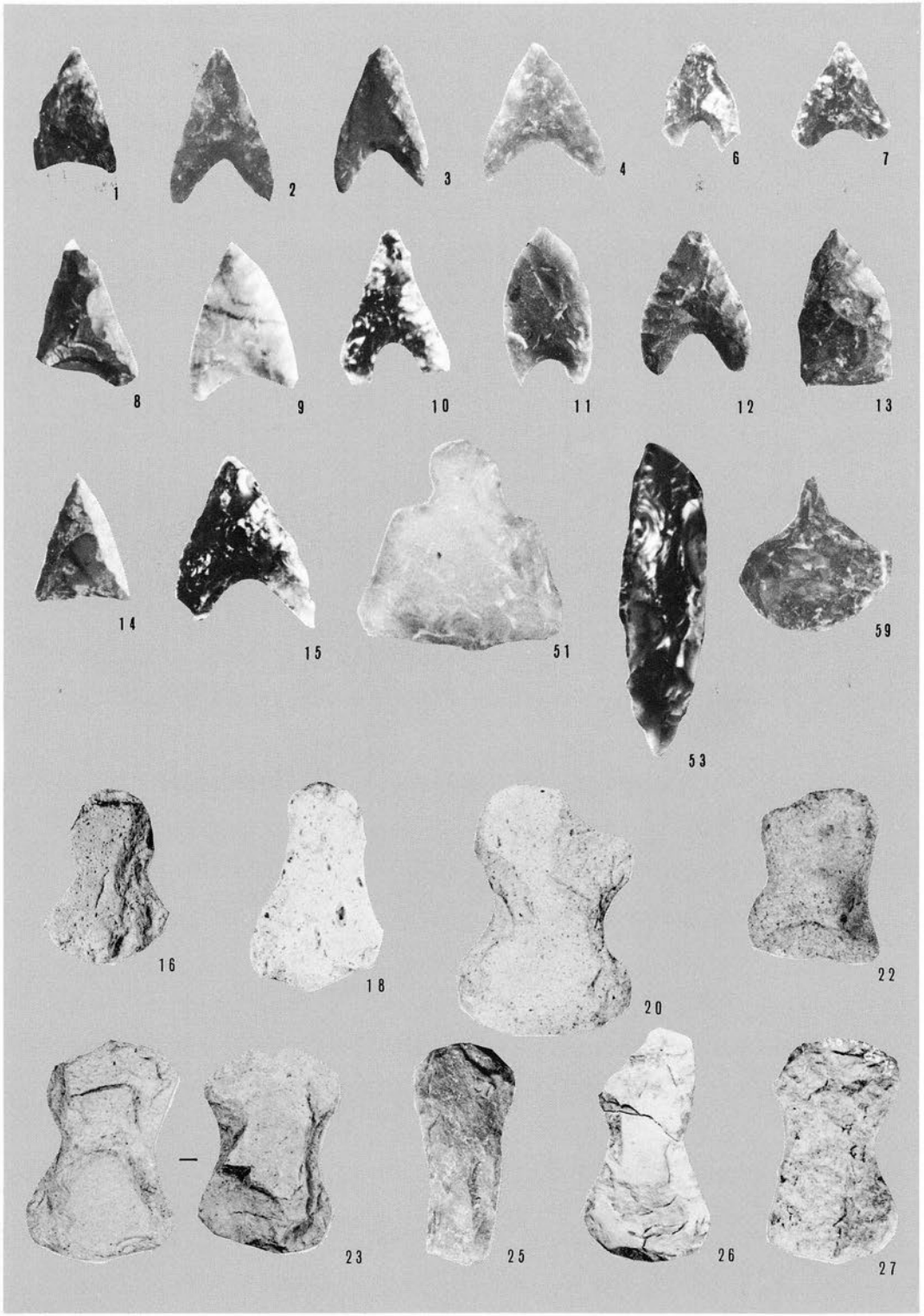

30
31
34
36
38
41
42
44
45
46
48
49
50
51
53
56
57
69
72
73
74
75
76
78
119
120
122
124
126
127
128

土製品(2)

PL32

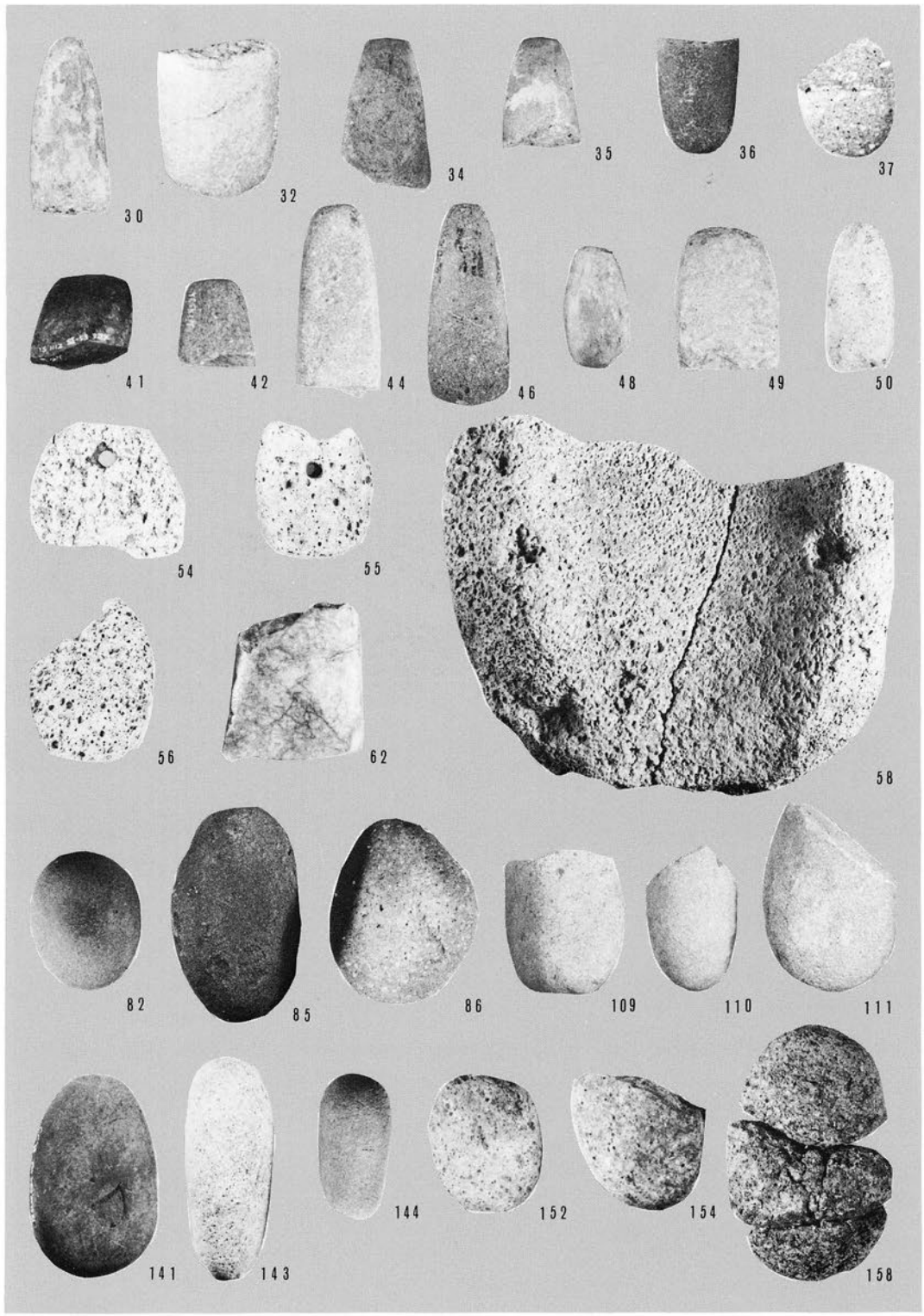

276
277
280
282
283
284
286
287
291
293
294
295
296
298
301
304
305
306
308
309
310
314
319
322
1
2
弥生時代
1
2
3
4
5
6
9
古墳時代

土製品(3)

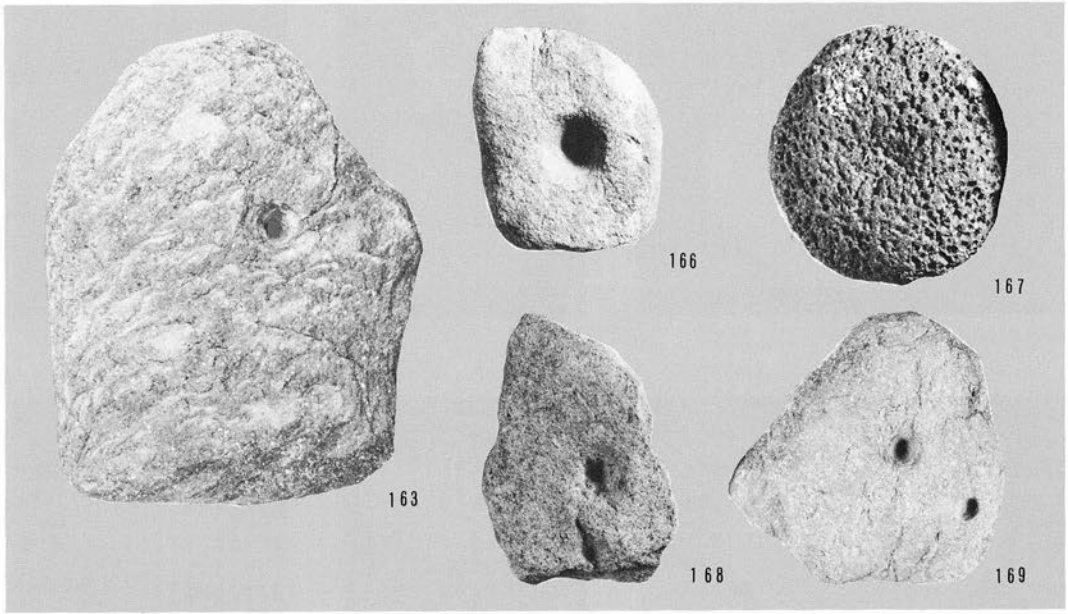


石器(1)

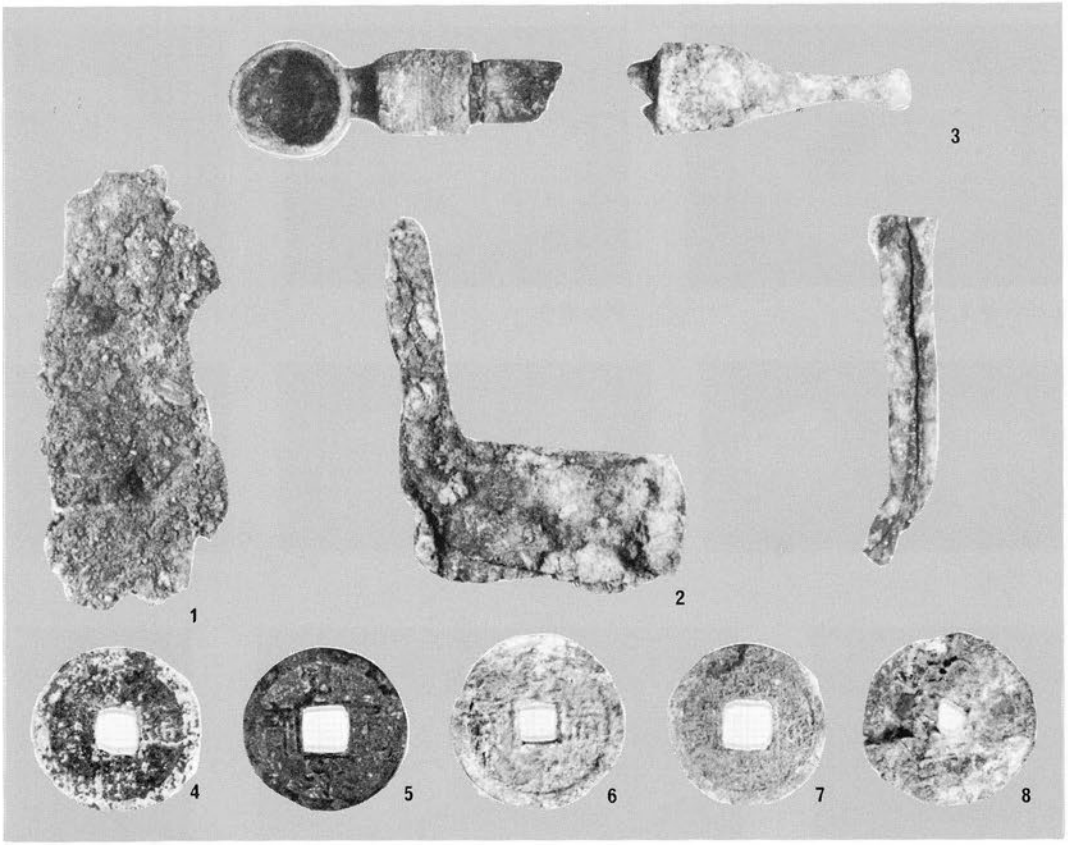
PL34


30
32
34
35
36
37
41
42
44
46
48
49
50
54
55
56
62
58
82
85
86
109
110
111
141
143
144
152
154
158

石器(2)

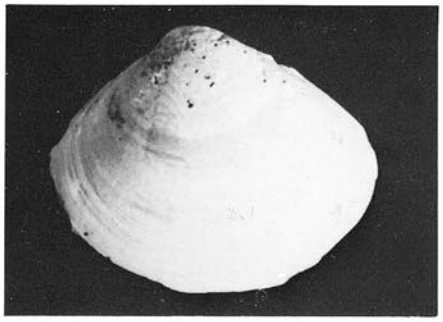


石器(3)



鉄製品・古銭

PL36



ハマグリ

貝刃

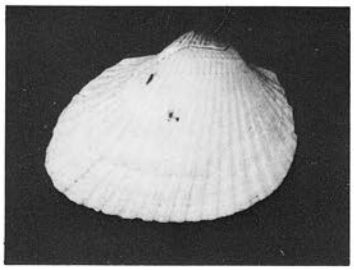
サルボウ

ハマグリ

ベンケイガイ

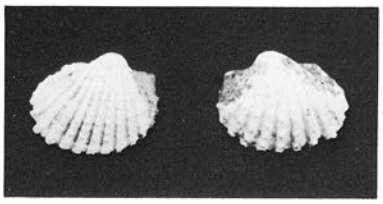
オキシジミ

サビシラトリ

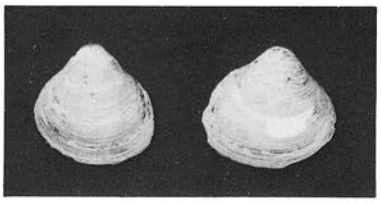


サルボウ

アサリ

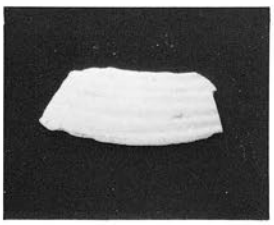


ハイガイ

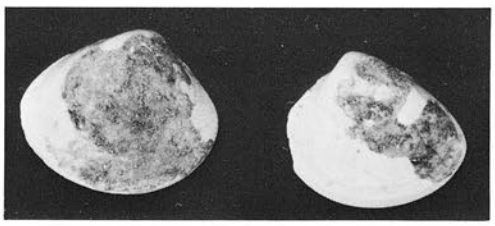


ヤマトシジミ

アサリ



バカガイ



ハマグリ

ベンケイガイ

貝(1)

マガキ

マガキ

マガキ

マガキ

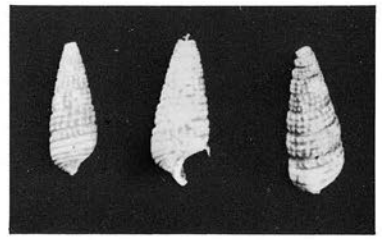
アカニシガイ

オオタニシ

チリメン
カワニナ

チリメン
カワニナ

ヒロクチ
カノコガイ

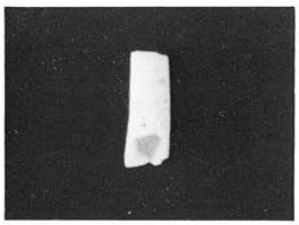

カワアイ

チリメンカワニナ

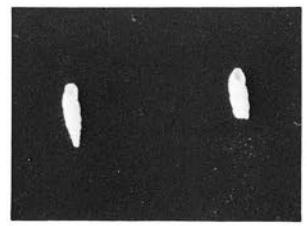
チリメンカワニナ

ヒロクチカノコガイ

ヒロクチカノコガイ

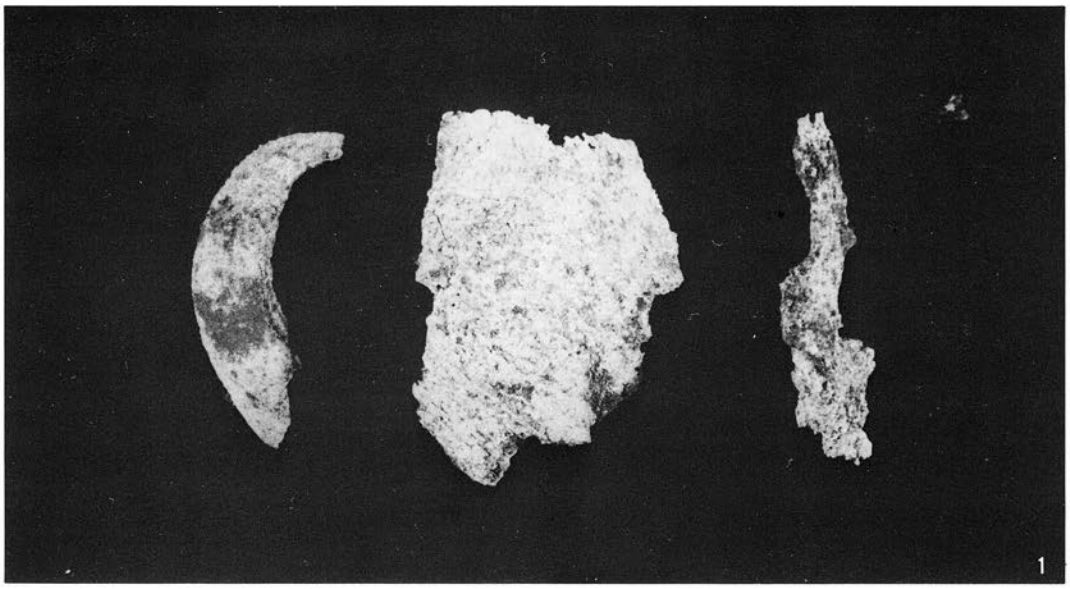

ツノガイ

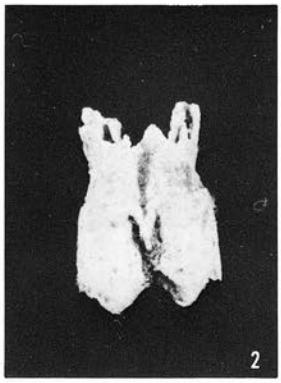
ナミコギセルガイ

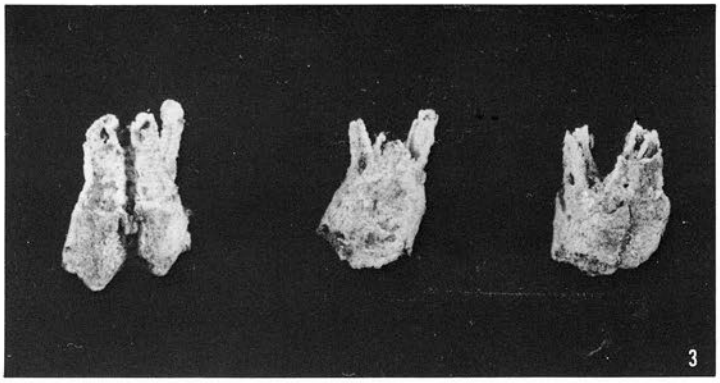

ナミコギセルガイ

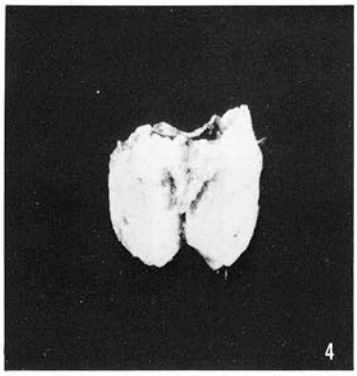
貝(2)

PL38

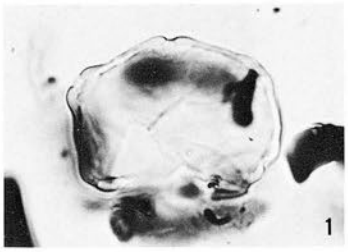


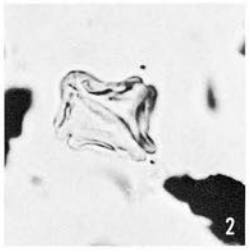


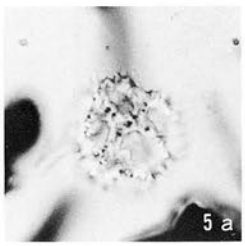


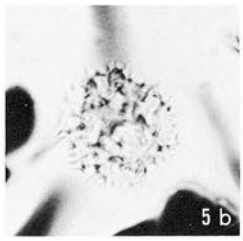


獣骨・歯牙









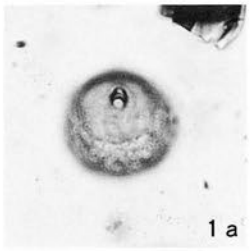
0 200μ (6)

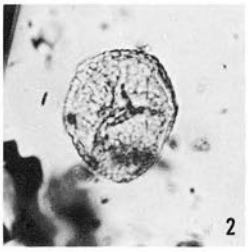
0 50μ (1−5)

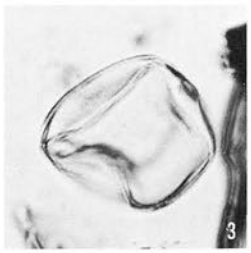
1．クルミ属　2．ハンノキ属　3．コナラ亜属　4．ヨモギ属
5．キク亜科　6．状況写真

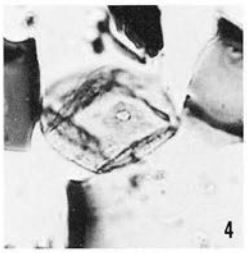
花粉分析(1)

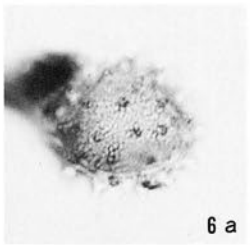
PL40

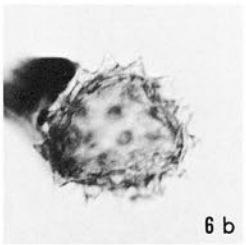












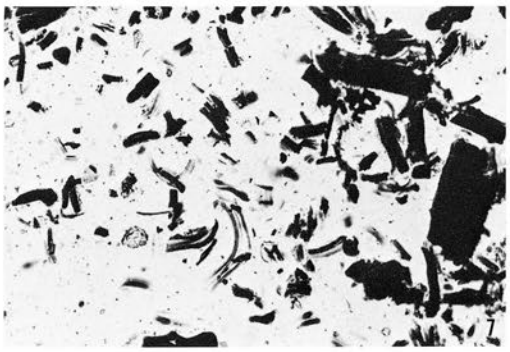


図 版 説 明

写真番号	花粉化石名
1 a	スギ属
1 b	スギ属
2	コナラ属 コナラ亜属
3	イネ科
4	イネ科
5	ヨモギ属
6 a	キク亜科
6 b	キク亜科炉
7	状況写真

50μ No.1a－6b
100μ No.7

花粉分析(2)

茨城県教育財団文化財調査報告第41集

主要地方道取手筑波線道路改良工
事地内埋蔵文化財発掘調査報告書

境　松　遺　跡

昭和62年３月25日印刷
昭和62年３月31日発行
発　行　財団法人　茨城県教育財団
水戸市南町３丁目４番57号
印　刷　有限会社　川田プリント
水戸市上水戸4丁目6番53号